

---

# ナルトの世界へ

うたわれな燕

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ナルトの世界へ

### 【Nコード】

N0370N

### 【作者名】

うたわれな燕

### 【あらすじ】

NARUTO転生モノです。これは自分の妄想をこれでもかといふくらい詰め込んだものにしていく予定のモノです。お時間が許すならどうぞ読んでみてください。

大学生活を満喫していた俺だが、気がつけば体は縮み、あろう事が赤ん坊の姿にっ！

更に更に、俺の姿は某少年漫画の主人公の赤ん坊の時の姿なのだからさあ大変。

サスケやらサクラやらカカシやら原作の登場人物まで出てきたから  
もう言い訳は出来ねえよっ！  
こうなったら原作崩壊をめざして爆走してやるってばよっ！！

ブローグだってばよっ！

え……

何なんだよ、これは……

俺の目に入ってきたのは、女の人が体を張って『俺』を守る姿だった。

何なんだよこの女の人はず！腹からは何か尖ったモノが突き出てるし……それに、この赤いのって……血じゃねえかつ！

「あ、あああつ。うあ。」

（大丈夫かあんなっ！！）

??何だ今の？何か俺の声が赤ん坊の声になってるような……

「だ、大丈夫よ、ナルト……あなたは私が守ってあげるってばね……」

女の人が咽ると血がそれに伴って出てくる。だが、その女の人は俺に安心させるような笑顔を向けてきた。って、絶対大丈夫な訳ねえだろうがっ！そんな顔すんじゃないやねえよ！見てることがちが辛いんだって！

「ああああ、あああうあ。」

(俺は大丈夫だから早く逃げろ！)

「クシナ、屍鬼封尽のせいで俺ももうヤバい……そろそろ八卦封印でナルトに九尾を封印するよ。」

「ええ……ナルト、お前と沢山遊びたかったし、いろいろ喋ったりしたかった。でも、母さんはあんたをこっやって生めただけで、幸せだっばね。……ねえナルト、お金はちゃんと考えて使いなさい。それから女には気を付けて。女は魔性なんだから。あとは、健康にも気を付けなさい。忍は体が基本なんだから……それから……それから……ごめんね。まだまだ、たくさん話したい事がある筈なのに、出てこないみたいだっばね……うう……」

女の人は涙を流しながら笑顔を浮かべている。その顔を見ているのは辛いけど、今はこの人の顔を、言葉を、忘れたくないから、俺は顔を反らさずに真っ直ぐその人の顔を見続けた。

「ナルト、俺からは母さんと同じだ。生まれて来てくれてありがとうな。そして、こんな選択しかできない父親を許してくれ……」

「

女の人の右肩から顔を覗かせる男の人の顔には血と汗、それから土が付いていた。ってか、この人の事俺っつては見た事あるような……いやいや、今はそんな事を考えている場合じゃねえだろう俺っ！

5

「あああつ。うああつあ！！」

（あんたっ！この人を抱えて早く逃げろよ！）

「それじゃ……クシナ。」

「ええ……それじゃあナルト、良い子に育ってね。母さん達はお前の事を空から見てるから……」

封印術・八卦封印！！

男の人がそう言ったと思ったら、俺の中に何かが入って来るのに気が付いた。

な、何かが体に入って・・・う・あああああああああああああああああああああ  
あああああああああっ！！！！

そこで俺は意識を飛ばした。

ナルトに転生だってばよっ！

「ああうあ・・・」

(知らない天井だ・・・)

なんて言ってみたり・・・って、ここは本当にどこなんだ？体は・・・認めたくはないが赤ん坊のままのようだし、首も座つてないせいか動かせない・・・目を最大限に動かして見える範囲には、ここを特定できるようなものは・・・ないか。

自分のいる場所が分からないってのも不安だが、一番わけが分かんねえのはこの体だっ！！

体が縮む？は？何だそれ？どこぞの少年探偵かっつての！俺は普通の



ふっ・っ・うの大学生だったんだぞ！まあ確かに、ちよつとリアジ・・・ゲフン、一般人とは毛色が違かったかもしれないが。

だが、それがどうした！漫画を読んで、ゲームをして、アニメを見て。すっつっつげえ充実した生活だったんだ！それなりに友達もいたし、家族ともよく話してたし、就職先だって決まってたんだ！

それなのに・・・それなのに・・・

「あうあうあうあああああああ！」

(何で赤ん坊にまで戻らねえとなんねえんだよっ！)

しかも、俺っていう自我まで持ったままとか・・・今流行りのssじゃねえんだから・・・俺これからどうなるんだ・・・

「おお、起きたみたいじゃな。」

何かじいさんの声が近くからしたな・・・って、あんたの事俺知ってるぞっ！！某少年漫画に出てくる忍者達の頭的な存在・・・

「お腹が空いたのか？それともオシメじゃろうか？」

火影の猿飛じいさんじゃねえかつ!!

「ん？なんじゃ、そんなに目を大きく開きおつてからに。」

そりゃ驚くに決まってるだろ！漫画の中の人物が目の前に出てきたんだから！普通は固まるつての！

「それにしても……やはりあの二人の子じゃな。父親の面影を色濃く受け継いでおるわい。母親の面影は……まあ、性格がそつなのもしれんし、お前が話せるようになるのが楽しみじゃわい。」

父親？母親？……そうだ思い出したっ!!俺を庇ってくれたあの女の人……俺が大学生ん時に読んでた雑誌でやっと出てきた主人公の母親に似てた。それに、男の人も……

ん？つてことは俺つて……

「わしがもう少し若く力があれば……いや、過ぎた事はもう何も言うまい。わしは、ミナトとクシナに頼まれたんじゃ。お前はわしが守つてやるぞい『ナルト』。」

やっぱり!!!!!!俺、ナルトに転生しちゃった!!!!!!

!!

月日は過ぎ……俺は7才になった。この7年間はというところ……修行やら何やらで暇じゃなかった。俺は火影のじいさんのところで世話になっていたが、今年から一人で暮らしている。まあ、大学生ん時も一人で暮らしてたんだから余裕だし、何よりじいさんが俺に気を使ってる感じが嫌だったからな。

そんでもって、今は忍者アカデミーに通ってんだな俺ってば。漫画ん中で見れなかった建物とか、原作人物の子供ん時や若い時とが見れたのはめっちゃ嬉しかった。だって、普通に生きてたらそんな経験出来ねえんだぞ？その点から考えると、俺ってラッキー！みたいにしてる。まあ、人が普通に死んでいく世界ってのはおっかねえけどな……

そうそう、九尾の狐に関してだけど。何だかなあ……話してみたんだよ、九尾と。原作のナルトは波の国で覚醒した事で九尾の力を引き出そうって考えたみたいだけど、俺は原作を知ってるから早速、深層心理の深いとこに潜ってみた。そん時の俺の年齢は何と3歳。原作を知ってるのと知ってないのじゃあ、これは出来ねえよな。

んで、話してみた。初めの内は原作通り『わしを解放しろ』だの、『こつちに来たら殺す』だの、もうホント物騒極まりないって感じだった。そりゃあ、自分を封印した奴の子どももってだけでも苛つくのに、子どもがぼか〜んって自分の事見てるんだもんな。

でも、一年くらい根気強く話しかけてたら、ちょっとは丸くなってくれたみたいだ。

『おいナルト、わしを馬鹿にするのもいい加減にしろ……』

わりいわりい、お前を馬鹿にしてるわけじゃねえよ。ただ、懐かしいなってな……

『ぶん……ならばいい。』

こんな感じで、九尾とは仲良く？やっっている。そのお陰が知らねえけど、原作でナルトの頬に付いてる髭みたいなもんは消えた。火影のじいさんが不思議がってたけど、『ミナトにそっくりになったの。フォッフォ。』って最後には笑ってた。そんなんでいいのかよ、じいさん……

んで、四代目火影（まあ俺の父さん）の小さい時に瓜二つって感じになったらしい。らしいってのは、母さんが『父さんの小さい時にそっくりだつてばね。うん。イケメンよナルト』と言っていたから。原作を読んでいる俺としては、消えてくれなくても良かったんだけど。父さんはその時に照れていたと、追記しておく。

性格については……中に入ってるのは俺なわけで、ナルトのあんなに良い意味でウザい？感じになるわけも無く、原作より落ち着いたものになってる。まあ、口調はナルトのものを真似て（実は結構はまっていたりする）、毎日を面白可笑しく過ごしている。そんなの気にしなきゃいいんだろつが、やっぱり母さんと父さんの死に際を見てる俺としちゃ、どちらも消したくなかったんだ。

修行に関しては、全部自分一人でやった。まあ一人って言おうか、口寄せ使って修行したけど……つか、原作崩壊してやりたいじやん。俺を育ててくれた火影のじいさんを死なせたくないし、曉にだつて負けたくないからな。

俺っていうか、九尾を狙ってるのは分かっている。強く、ただひたすら強くなるために鍛えた。そのために初めに覚えなきゃならない術・

・・・それは勿論、『影分身の術』。影分身とか、もはやあれチートだろ？数千、数万つて影分身出して修行したら、数千、数万倍の練習量とか・・・・・・・・・・原作のナルトが強くなるわけだよな。

んで、影分身のやり方を九尾に聞いてみたら・・・

『わしに聞くよりも適任の奴らがいる。』

それって誰だ？しかも『ら』って・・・

『こいつらだ。』

そうやって九尾が俺の後ろ（あ、これ深層心理の世界での話しな。）を見ていたから、後ろを振り向いた。そうしたら、母さんと父さんが二人並んで立っていたってわけ。

『ナルト、元気にやっていたか？』

『ミナト、そんなの見れば分かるじゃない。会いたかったわナルト、元気そうね。』

な、なんで父さんと母さんが・・・

『ふん、わしをお前に封印する時に自分らのチャクラも一緒に封印していたらしくてな。違和感があったから探してみたらこの通りだ・  
・  
・  
・  
』

九尾・・・ありがとな。

『フン・・・わしは何もしておらん。こいつらが隠れていただけだ。』

『九尾がこんなに丸くなるなんてねえ・・・流石は私の子どもだってばね。』

『クシナ言葉使いが素になってるよ。でも、本当にお前は凄い奴だな、ナルト。』

そ、そんなに褒められたら・・・照れるってばよっ！

『口癖があたしにそっくりだってばね 子どもって性格が母親に似るのかしら？』

『あはは。それは分からないけど、俺と君の結晶ってのは確かみた

いだね。』

それから今まで話せなかった色々な事を話した。生まれてきて4年間。親の愛情をやつと得る事が出来た瞬間だ。前世でも、親と仲が良かった俺だから、勿論こつちの世界でも親がいるのは嬉しい。それが例え深層心理の世界の中での出来事だとしても、俺の中で溜まっていたわだかまりは消えていった。ナルトに転生したと理解した時から覚悟していたが、大人や子供達からのいじめはめっちゃくちゃ苦しいものだったからな。

原作とは違い、俺は火影のじいさんに育てられていたが、里の大人達の俺に向ける憎悪や殺意は消える事はなかった。ナルトはこんな日常を過ごしていたのか・・・と、壊れそうになる心を何とか誤魔化していたがそれも今日で終わりだ。俺には、こんなに立派な父さんと母さんがいるんだから。



そんなこんなあって、父さんと母さんという優秀な先生のおかげもあり、俺は心も体も強くなる事が出来た。修行は森の中で行い、外からは中が認知されない半径500mの結界を張った。そのお陰で、木ノ葉の暗部や火影のじいさん達に気づかれる事はなかった。じいさんには、俺が一人で遊んでいるという姿を想像させてしまったが、それは仕方ない。これはじいさんを、里の皆を救う事に繋がるんだからな。

そして、あれよあれよという間に時は過ぎ、原作で大きな出来事とされている、うちは虐殺事件が起きてしまったのは、俺が父さんとの修行を終えて自分の家で熟睡していた時だった。この日、俺は父さんと実戦形式の組手をしていた。

\*九尾の性格が丸くなったため、父さんと母さんはチャクラを九尾から供給してもらえらるようになり、今現在も、俺の中で『生きている』。また、口寄せの術の応用で、俺の深層心理の世界にいる二人を呼び出すことが出来るのだが、それは結界の中でしか行っていない。なぜなら俺の実力を里の皆に教えたくはないし、何よりも里を守った英雄の二人を蔑ろにする里人には絶対に見せたくなかったからだ。

## 飛雷神の術

父さんがクナイを俺に投擲し、それと同時に父さん十八番の術を使ってくる。

おそらく、術が書いてある札をクナイに巻いている筈……

なら、ここは影分身で……

クナイを避け、術を行使しようとしたところへ、父さんの螺旋丸が俺の影分身を抉る。

『うん、この術より早く行使した影分身。強くなったねナルト。』

螺旋丸を突き出した姿勢の父さんに、九尾のチャクラでつくった火遁・螺旋丸を突き出す姿勢のまま動かない俺の影分身。その数は三体で、後ろと左右に配置した。その中には俺の本体は勿論、父さんの本体もない。

化かし合うような戦いが俺と父さんの組手。どちらもチャクラが多いから出来る戦術であり、他の忍びよりも早い印のせい、それは高速の組手となる。

そして、本体同士は体術で戦う戦闘へと変わっていき……  
いつもの組手が終わる。

「ありがとうございましたっ！」

『うん、ありがとうございました。』

俺と父さんはそう言うと、揃って笑顔を浮かべる。修行と言っても親子の時間。俺にとっても父さんにとっても楽しい時間なのだ。

『今日も頑張ったわね、ナルト。こっちに来なさい。マッサージしてあげるから。』

そして、母さんがこう言って半ば強制的に、マッサージという拷問

を掛けて来るのもいつものことだったりする。

「痛くないでってばよ母さん……」

『あら、私がいつ痛くしたの？いつも優しいじゃない』

あはは……あの顔は絶対分かって言ってる顔だな……満面の笑みだし……

『クシナ、程々にしてやって』なあにミナト、あなたもやって欲しいの？』ナルト、母さんに優しくしてもらいなさい。』

「ああ！父さんが逃げたってばよ！」

父さんはそう言って、ドロンという音を出して白煙とともに消えた。まあ、俺の中に戻っただけなんだけど。

んで、母さんの拷問という名のマッサージを受け終わった俺は結果を消して家に戻った。

そして次の日、何だか外が五月蠅いから起きて外に出てみると、里中が大騒ぎしていた。何だこれは？と、疑問に思っただけのじいさ

んがいるところに走って向かった。ん？瞬身の術とか、屋根を走って行かないのかって？俺はドジな奴ってことになってるから出来ねえんだわ。

んで、辿り着いた火影邸ではじいさんが俺を待っていた。

「じいさん、何があったんだってばよ？」

「ナルト、今は話す時ではない。木ノ葉丸と一緒にここで待っているんじゃ。」

じいさんは怖い顔を浮かべて、俺を子ども部屋に押し込んで出て行ってしまった。

「ナルト兄ちゃん……」

まだ、5歳の木ノ葉丸は何が起こった分らない、という顔を俺に向けて来る。

「大丈夫だ木ノ葉丸。俺が守ってやるってばよ！」

里に何か起きたのか？この時期に起こる事って言ったら……

原作知識も七年も過ぎると曖昧になってきてんだよな・・・

・・・!!!!

うちは虐殺事件！そうだ、間違いない。こんな大事なことを忘れてたなんて・・・原作崩壊？いきなり躓いちまったじゃねえか！原作通りなら、サスケが生き残ってる筈だが・・・自分の事だけで精一杯だったなんて言い訳にもならない。くそっ！

次回予告・・・

うちの生き残りうちはサスケ、彼は復讐という感情を持ってしまった。俺が忘れていたばかりにくそっ！忍者アカデミーで初めて

会うサスケと俺はどう接する？

ヒナタ、お前の苦しみ俺が取っ払ってやるってばよっ！！

の2本です。次回も是非見ていってくださいな。。。

ナルトに転生だつてばよっ！（後書き）

さあ、いきなりの妄想大爆発でしたが………やっってしまった………うちは一族助けたかった………でも………個人的にサスケにはあのニヒルな感じでいて欲しいので………

というか、ヒナタ出しちゃいますよ！私ヒナタ嬢大好きでして、なぜナルトがサクラを好きなのか意味が分かりません。ってことで、本作はヒナタがヒロイン1決定です。

ん？ヒロイン1ってことは………



忍者アカデミーだってばよっ！

うちは虐殺事件・・・

それを実行した者の名は、「うちはイタチ」。7歳という史上最年少でアカデミーを首席で卒業。8歳で写輪眼を開眼させ10歳で中忍となり、その後まもなく暗部入りを果たす。また、13歳の時には暗部の部隊長を務めるなど、伝説の三忍の再来か！！と言われていた天才忍者。

そんな人物の起こした事件は、木ノ葉の里に暗闇を落とした。

7年前に起こった九尾による襲撃事件もまだ里には消えない闇だったが、今回の事件もまた木ノ葉の里に深い爪痕を残したのだ。

「はぁ・・・・・・・・・・」

俺は今、忍者アカデミーの自分の机に額をつけて溜息を吐いている。  
・・・・・・・・授業中ではなく、休み時間だから出来る事。

俺はあの後もじいさんが帰って来るまで木ノ葉丸と一緒にいた。二人で部屋に有った玩具で遊びながら待つのは・・・・・・・・うん、大変だったただけ言っておく。

じいさんが帰って来たのは夜遅くだったために、その日は久しぶりに火影邸に泊まる事になった。木ノ葉丸と一緒に寝ようと五月蠅いので、仕方なく一緒に寝てやったが・・・・・・・・あいつ俺にヨダレ付けすぎだつて!!!!

そして、朝になったから一度家に帰って事件現場とサスケを見に行こうと考えていたら、じいさんに「ナルトよ、アカデミーは今日から3日間臨時休校じゃから、行かんでもいいぞ。」と言われ、その日は1日中森で修行をして過ごす事になった。

この修行に関しては、7才の子どもが事件現場に行くのは暗部に要らない警戒心を持たれてしまうと、父さんに言われたからだ。また、サスケの事を一目見るのも駄目と言われてしまった。

んで、そんなこんなで待ちに待った3日後の今日、つまり、うちは虐殺事件から4日経った登校日。

教室の中は、それはもう吃驚するほどの静けさが広がっている。その原因を作ったのは一人の生徒。その名は「うちはサスケ」。

うちは虐殺事件で唯一の生き残りにして、事件を起こしたうちはイタチの実の弟。

てか、サスケが生き残ってて良かったあ……………

原作を知ってるから生き残るだろうなっとは思ってても、実際にこの事件が起きてから心配だったからな。

本当に良かったって安心した。

でも、この空気はまじで勘弁して欲しい……………

サスケの空気に当てられて、いつも五月蠅いキバとか静かだし、「サスケくん、サスケくん」言っている女子も今日はやはり遠くから（教室の扉んところから）見てるだけだし……………

「はぁ……………」

どうするかな……………原作通り俺はドベで落ちこぼれっていう『役』を演じている。そのせいで同期生達には、馬鹿にされるし、里の大人達には侮蔑されているんだけどな……………

本当の実力を発揮してしまうと、里の上忍や暗部とかに危険だと判断されて消されてしまうかもしれないから仕方ないとはいえ……………  
……………流石にムカつく。

\*ちなみに、俺がアカデミーに行っている間、影分身達が森の中で忍術、幻術の修行をそれぞれしているから、今この時も俺は経験値を稼いでいるんだから、影分身は本当にチートだと思つ。

アカデミーで勉強する事なんて一日で終わったし、ここに来る意味  
何てないんだけど、ここに通わないと下忍になれないからなあ・・・  
・・・めんどくせえ・・・

んで、そんな俺がいきなりサスケに親しくしようとしたら周りの奴  
らに邪魔されるだろうし、サスケ本人にも、「近寄るな・・・」とか  
言われそう・・・

いや、間違いなく言われるな。

だって、ついさっきも同期生の一人がサスケに話しかけようとした  
ら・・・

「俺に話しかけるな・・・屑がつ。」

だもんなあ・・・

あんなの7歳の子どもが言われたら心に傷作ったとしても不思議じ  
やねえよ！精神年齢29のおっさんが言われても、おそらく立ち直  
るのに時間かかる。

「ホント・・・どうすっかな・・・」

「何をどうすんだ？」

「ん？それはまあ……いろいろだつて。」

俺の独り言に返してきたのは、IQ200のめんどくさがり忍者、奈良シカマル。

「そうか。お前が静かなのって珍しいからよ。まあ、めんどくせえからこれ以上は聞かねえよ。」

「そうしてくれると助かるつてばよ、シカマル。」

シカマルとは、アカデミーに入学してから直ぐに友達になった。こいつと一緒にいると、かなり楽だったりするんだわ。ほら、仲良い友達って一緒にいると楽じゃね。性格も原作から好きだったから余計良かったのかも。

というか、奈良家、山中家、秋道家の旧家の人達は皆俺に良くしてくれている。だから、チヨウジやいのとも仲が良かったりする。いのに関しては、原作みたいに「サスケ君、サスケ君」言わない。はて……何故だ？って思ったが、今となってはもう慣れたから、違和感は無くなっていたりする。

更に、油女家、犬塚家とも親しい関係だったりする。その理由は、四代目火影こと俺の父さん、それから母さんがこの人達と仲が良かった事、そして九尾の事件の時に最前線にいて俺の事情を知っている事の二点だったりする。俺が小さい時に大人達から匿ってくれたり、暴力を振るわれて怪我をした時に手当もしてくれた。俺は、里の人達全てを好きにはなれないけど、この人達や火影のじいさん。それから、俺に優しくしてくれる人達は皆大好きだ。だから、俺は皆を守れるように強くなる。……って話が逸れたな。

あ、ついでにこれも話しておくか。忍者アカデミーって何年制とか何歳から入学とか原作に無かったよな。んで、実際に入ってみたら5年制だったし、俺は今年入学したばかりだ。原作のナルトが3回程、下忍試験？だっけかに落ちて、サスケ達と同じ教室にいた時って確か12歳だったような気がする。ならナルトってサスケとかより年上なのか？そう疑問に思ったが、入学する年齢って正確には決まってるみたいなんだわ。だから、ナルトとサスケ達ってダメなんだって納得した。

原作のナルトって無謀にもすんげえガキん時に入学したってことだよな……馬鹿だあ……まあ実際馬鹿なんだけどな。

まあ俺もナルトだけど、3回落ちるとか嫌だからサスケ達と一緒に学年になり、そして落ちこぼれやってるってわけ。卒業試験では一発合格してやるし、そんな時までは我慢かかって思ってる。

「なあシカマル、この空気なんとかしてくれればよ。息が詰まる・・・」

「そりゃあ、俺だってこの空気はウゼえけどよ。こればかりは無理だろ。この空気の原因が『うちは』じゃあな。」

そうなんだよなあ・・・サスケはこの学年のNo1。No2のシノに至っては無視を決めこんでて、絶対に関わろうとしないみたいだし・・・

なあ父さん、母さん、九尾、俺はどうしたらいいと思う？

『友達になっちゃいなさい。』

『今は、そっとしておいた方がいいと父さんは思う。』

『わしには関係ない。それにうちには好かんっ！』

三者三様のご意見ありがとう・・・って違う違う！母さんも知ってると思うけど、俺は皆に嫌われてるの。そりゃあ、シカマルとかチヨウジ、シノ、それから・・・まあキバも入れていい、この4人は友達だけど、サスケは友達って言える程まだ仲良くねえし・・・



『そう？私にはサスケ君は寂しそうに見えるけどなあ。』

うん、俺もそう思う。でも、今は何を言ってもあいつには届かない気がするから……ごめん母さん……

『あなたがそこまで考えているなら、もう何も言わないわ。頑張るなさい、ナルト。』

ありがとう母さん。九尾の意見は仕方ないと思う。だって、操られていたんだし、自由を奪われたりしたんだからな。そう思うのは当たり前だ。ごめんな……辛い事思い出させて……

『フン、お前が気にする事ではない。わしは、お前が無事ならそれで良い。』

ありがとな、九尾。んと、なら父さんの意見でいくよ。俺もまだ話しかけるのは早い気がするし……

『ナルト、お前があの子の事をここまで考えているんだ。大丈夫、今は無理せずに少しずつでいいから仲良くなっていきなさい。』

分かったよ、父さん。

「よしっ！やってやるってばよっ！」

「な、何だよ、いきなり大声出しやがって……はぁ、やっぱりお前って変な奴だな。」

シカマルに苦笑され、教室の奴らに白い目で見られていると、やっと俺達の担任がやって来た。

「おーいお前ら、席に着けえ。授業はじめるぞっ！」

イルカ先生、ナイスタイミング！

授業が終わり、昼休みになった。俺は、母さんに作ってもらった弁当を片手にいつものメンバーの所に向かう。

「お昼にしようってばよ。」

「おう、なら行くか。」

「むふふふ、ナルト今日もお弁当のオカズ交換しようね。ナルトのお弁当って美味しいからさあ！」

「っし行くかつ！赤丸、競争だつ。」

ワンツ！！

「……賛成だ。腹が減っては戦は出来ないと、教科書に載っている昔の忍びが言っていた。」

シカマル、チョウジ、キバ、シノ、俺の5人はいつも一緒だ。家族ぐるみで仲が良いから勿論アカデミーでも一緒。

そして、俺達がいつも一緒に食べている場所がここだ。

「ひゃっほうー！俺の勝ちだぜ赤丸！」

ワンワンッ！

「お前らいつもつるせえなあ……っと今日も屋上は空いてるな。」

キバと赤丸に苦笑を洩らしつつ、シカマルはいつもの定位置へと座る。それに続いて、チョウジ、シノ、俺が座ると、キバも騒がしくしながら座る。そして、母さん特製の弁当を食べて、4人と他愛のない話を話しながら、午後の授業が始まるまで時間をここで潰す。

「ねえねえ、教室の空気悪くなかった？僕、あそこにいるだけでカロリー直ぐに消費しちゃって、お腹が減って仕方なかったよ。」

「ツケ！うちの野郎の機嫌が悪いつただけなのに、俺達にまでとばっちりかよっ！ああイライラするっ！」

「落ちつけキバ……だが、俺もその点に関しては同意見だ。個人的なイライラを周囲にまで向ける事は良くない事だ。」

「何だよ、無視してると思ってたシノが一番キレてんじゃないか。」

「みんな結構イライラしてたんだな。てか、俺もあそこにいるのは、きつかったってばよ。」

今日の話は、サスケの事で決定みたいだな。俺達じゃなくても、あの教室にいた奴らは大なり小なり、何か思ってたのは確かだし、こんな場所でもなけりゃ話せねえからな……。でも、サスケの気持ちも分かる。自分以外の一族が全員殺されて、それを殺ったのが兄のイタチだったんだからな。そんな事があつたんだ、サスケがああなるのも仕方ない。だから、これ以上サスケを悪く言う事はないよな。俺が考えている間、4人はサスケの悪口を言いまくっていた。

「ところで午後の授業は何だったか、覚えてるかチヨウジ？」

「ん？あゝまた授業中寝てたんでしょナルト。でも、僕もその時お菓子食べてたから覚えてないや。シカマルは？」

「悪い、俺もナルトと一緒に寝てたからわかんねえ。」

「俺は赤丸と一緒に廊下に立ってたから知らねえぞ。」

ワンッワンッ！

「…………お前らは、もう少しまじめに授業を受けるべきだ。」

いい感じに話が逸れたな。本当は内容知ってるけどな俺…………

「悪い悪い。次からはちゃんと受けるって。んで、シノ。午後は何やるんだ？」

「はあ…………午後は、くのーの女子達との合同のサバイバル演習だ。」

「げつ…………いのと一緒かよ。ついてねえ、めんどくせえ、帰らせてえ……………」

「シカマル…………頑張ろつよ。」

「チヨウジ？お前どうしたんだよ。食い物の事しか頭にねえお前がそんな事言つなんて…………何か悪いもんでも食ったか？」

「キバ、失礼だぞ。チヨウジにも何かあるんだろう。」

「……いいんだシノ。この前どら焼き食べながら家に帰っている時にいのにばったり会って……」お菓子ばかり食べてないで、ちゃんと勉強もしなさいよ。じゃないと秋道おじ様に言いつけるからね!』って言われて……お菓子が無くなったら僕は……僕は……」

「成る程……そりゃ頑張るわな。」

と、そんな話を話していると、昼休み終了の鐘が鳴った。はぁ……シカマルじゃねえけど女子と合同なのは確かにめんどくせえな。俺たちは渋々、若干一名ウキウキと中庭へと移動した。ウキウキしていたのが、キバだったのは言うまでもないよな。

中庭に着いたのは俺達が最後だったらしく、既にくのゝの女子達と教室の他の奴らが集まって雑談をしていた。

そんな中から俺達を見つけたのか、こっちに向かって走ってくる一人の女子がいた。

ダダダダダ・・・キキイイイ・・・

「フウ・・・あんた達遅いわよ。全く私がいないと直ぐにだらけるんだから。」

それは、俺の髪より薄い金髪をポニーテールにした山中さん家のいのさんでした。

いのは、俺達の傍に来るとガミガミと説教をはじめ。これはいつもの事なので、俺はそれを聞き流しながら、集まった奴らを見ていた。

すると、一人の女子と目が合った。綺麗な黒髪。恥ずかしそうにもじもじしている仕草。日向家の家紋を付けた服。日向ヒナタその人だった。

こっちを見ていたから、笑みを浮かべて小さく手を振ってみたら、



急にそわそわし出して体の向きを変えて同期の奴らの中へと入って  
いってしまった。

何だ？・・・俺が悪いのか？・・・もしかして、嫌われたの  
か？？・・・NARUTOの中で一番好きなキャラなのに・・・

「何だナルト。日向の姫さんに一目惚れでもしたか？」

俺と同じようにいのの説教を聞き流していたシカマルが、俺に意地  
の悪い笑みを向けながらそんな事をのたまいやがった。

「な、なななな、ナルトっ！ひゅ、日向は辞めときなさい。あそこ  
は、一族内でしか結婚は許されないうって聞くし。だ、だから、ち、  
近場で我慢しておきなさい！」

いのはいので、噛みながら一気にそう言い終わると真っ赤にさせた  
顔を、俺とあと数センチ近付けばキスが出来る位の位置まで近付け  
ると俺の肩に手を置いた。その肩に置いた指の爪が肩に食い込んで  
痛かったのはまた別の話だ。

「くっくっく。ナルト、良かったじゃねえか。近場にお前の事を好  
んがゴフッ！！」

「キ、キバっ!？」

「・・・・・・・・」

いの鉄拳と足刀が顔面と鳩尾に入り、苦しそうにのた打ち回るキバ。チョウジがそれを見て行ったり来たりと慌てるが、シカマルに「とりあえず保健室に連れてけ。」と言われ、キバを担ぎ保健室へと連れて行った。そして、そんな様子を冷めた目で見ているのは・  
・シノだ。

何てカオスなんだ・・・・・・・・

そして、復活したキバとキバを連れて行ったチョウジが帰ってきた

ところで、イルカ先生が瞬身の術で現れた。

「よし、皆集まってるな。これから男女合同でのサバイバル演習を行うに当たって、二人一組になってもらう。」

イルカ先生の言葉を聞いて、大半の奴らは好きな相手となりたいたいと思ったのだが、先生の次の一言でその感情はもっと強くなった。

「まあ、その二人組についてはこちらで予め（あらかじめ）決めておいたがな。今から順に呼んでいくから、呼ばれた者は前に出て、組となる相手を確認してから右の方でまとまって座っている。」

（（（サスケくんとなれますようにっ！）））  
くの一の女子の大半がそう願う、

（（（いのちゃんか、ヒナタちゃんとなれますようにっ！）））  
男子の大半がそう願う。

だが願われた、3人はそれらを意に介さず、

サスケは、

（俺の脚を引っ張らない奴なら誰でもいい・・・）

いのは、

(ナルトナルトナルトナルトナルト……)

ヒナタは、

(……ナルト君と……)

と考えていた。

俺は、隣から凄いチャクラのような負のオーラ？みたいなものを感じて、隣のいのから気付かれないように少し離れ、自分の名前が呼ばれるのを待つ。

いの怖えよ……誰になりたいか分かんねえけど思われてる奴、頑張れ。キバも誰かになりたいのか？何かぶつぶつ呟いてる。まあ、シカマルとチョウジに至っては、いのだけは勘弁って考えてるのは丸わかりだけど。シノは……分かんねえ。

そんな事を考えている間に、イルカ先生から呼ばれた奴らが組を作っていく。さあて、俺は誰となるかな……

「次、うずまきナルトっ。」

お、やっと俺か。相手は……

「日向ヒナタ。二人とも前に出る。」

ヒナタか……。まあさっきのもあるけど、どうにかなるだろ。

いのは、「なんでよ〜っ!!」とか言ってるし、キバも「ナルト死ねナルト死ねナルト死ね……」とか……。うん。こいつ、あとで絞める。

ヒナタは、「え、ええええっ!？」と一人顔をトマトのように真っ赤にして、悲鳴のような声を上げた。

そんなに俺と一緒に嫌なのか……。何か悲しい……

## 次回予告

サバイバル演習で組になったヒナタと俺。だが、ヒナタと話が続か

ない。どうしよう・・・そんな時、俺とヒナタにさらなる試練が・・・

次回も是非読んでいってください。。。。

忍者アカデミーだってばよっ！（後書き）

二話です。どうでしたでしょうか？

サスケと交流・・・難しい！！この時期にサスケに話しかけるとか、普通無理です。なので、サスケくんとはまだ交流はなしっことです・・・

ごめんなさいっ私に文章を考える力が足りないばかりに・・・サスケくんももう少しだけ待ってください・・・

というか、ヒナタでました！いやぁ可愛いですねヒナタ。これからも出番はたくさんだよ。・・・おそろくね・・・

いのをこういう立場にしましたが・・・皆さまどうでしたか？でも、いののは、サクラよりかわいいと個人的に思っているんでこうしていきます。

## サバイバルだってばよっ！前編

ナルト君と一緒に……

私達は今、里の中にある第23演習場っていう場所に来ているんだけど……私の前には……ずっと憧れだったナルト君がいる！

「ヒナタあ、この奥に巻物があるか調べて欲しいってばよ。」

「ふあっ、ふあい！！い、今見てみるねっ。」

ふあわわ……び、びつくりしたあ……ナルト君の事を考えてたら、その人に話しかけられるんだもん。

へ、変な子って思われてないかな……

何で私達が二人だけ（恥ずかしいっ）……でいるかって



いうと、この演習が午後の授業を全部使って、この森の中にある巻物を組になった二人で取って戻って来るっていうものだったからなんだ。でも、ただ巻物を取って来るだけじゃないみたいで、中庭で組を作った時にイルカ先生に渡された番号付きの札と同じ番号の巻物を取ってこないと駄目っていうもので、いつもの演習より難しいものだったんだ。

そして今私とナルト君は、自分達の6番って番号が書かれてある巻物を探している途中なんだ。

あ、あとは……今日は私にとって生まれてから一番吃驚して一番嬉しい日になっちゃったの。中庭で一人でいたら、ナルト君が私に手を振ってくれたんだ。それに……いつも見ていたようなやんちゃな笑顔じゃなくて、優しく、暖かい大人っぽい笑顔だったんだよ……って何考えてるんだろう私っ！

白眼！

日向一族。私の家に伝わる瞳術で、第二胸骨の真後ろ以外のほぼ全方向を見渡す視野、数百メートル先を見通す視力、物体の透視や幻術や瞳術による洗脳を見破る力があるんだって。この前お父様が言ってたから、本当の事だと思う……写輪眼っていう瞳術と同じようにチャクラの性質を色で見分けるだけじゃなくて個人レベルのチャクラの性質？さえも色の識別で見分ける事が可能なんだって。あと、体内でチャクラの流れる場所、経絡系？も見る事ができるみたい。

私には、遠くが良く見えて不思議な眠つてくらいしかまだ分からないけど、今はこの目があつて本当に良かったって思う。だって・・・ナルト君の役に立てるんだもんっ！

「えっと・・・うん、木の枝に吊るされてるみたい。でも私達の番号かは・・・」

「巻物が有るつてだけでも分かつたんだから凄いつて。だから、そんな落ち込むなよヒナタ。」

「う、うん。ありがとうナルト君。」

「感謝すんのは俺の方だ。ヒナタと組めたからこんな簡単に巻物を見つけれやし、俺だけだったら絶対時間内に見つけられなかったと思う。ほら、俺つて落ちこぼれだし。」

「え、い、いや、そんなこと・・・」

ナルト君が一緒だからなんて言えないよおっ！！・・・いつもの私は臆病で、実技の時も練習みたいに上手くいかないし、皆の脚を引っ張つてばかり・・・今日はナルト君が傍にいてくれて、私を頼りにしてくれたから・・・だから頑張れるんだ

よナルト君……だから、自分をそんな風に悪く言わないで。  
ナルト君が頑張ってるって事は私が知ってるよっ！

そんな事を考えてちらつと横にいるナルト君を見てみると、私が巻物があるって言った森の奥を厳しい目で見ていた。

ど、どうしたんだろ……こんなナルト君見たことない……

「ナ、ナルト君？」

「ん？どうしたんだヒナタ？」

「な、なな何でもない、よ。」

「アハハ。ヒナタ、お前つてば面白い奴だな。」

私の方に振り向いたナルト君は、さっき私が見たのが見間違いかと言っくらいまぶしい笑顔を浮かべていた。あうっ……ナルト君の顔がこんなに近いよお……

でも……お、面白いつて……私、絶対変な子って思われたああああ！！

俺が森の奥を見ていたらヒナタがオドオドした声で話しかけてきた。さっきまで普通に話してたと思ったのに、俺ってヒナタに怖がられてるのか？いや、そんな筈はないだろ……。俺はドジで落ちこぼれって設定をきちんと守っているし、現にここまで来る時に……

『落ちこぼれが日向のお姫様と一緒に？はっ、ふざけんなっての。』

『ヒナタさん可哀想。』

『俺がヒナタちゃんと一緒だったら守ってやんのによ。』

『でも、日向さんとナルトってある意味お似合いかもよ。』

『どっしってっ。』

『ほら、あの子っていつも演習とかになると……』

『ああ、確かにねえ。』

等々、陰口ではない悪口が聞こえてたからな。こいつら……俺が実力隠してるって事直ぐにでもバラしてやるうかつ!!……ってか俺の事だけじゃなく、ヒナタの事まで馬鹿にしゃがった。……後でヒナタの事言ってた奴は絞めよう。それに、あいつらの言葉じゃないけどヒナタと組めて嬉しかったし、お似合いってのは褒め言葉にしか聞こえねえ。まあ、負け犬の遠吠えって事で納得しとくかな。

って、今はそれどころじゃないかもな……

『ナルト、この気配は……』

ん？九尾も気付いたか。こりゃ、木ノ葉の里の忍じゃないな。数は……8人か。というか、木ノ葉の暗部は何やってんだよ！職務怠慢だつてのっ！

『ナルト気を付けるんだつてばね。』

『クシナ、言葉づかい。ナルト、お前は強いけど気を緩めちゃ駄目だ。今は実力を隠さなきゃならないんだろ。』

うん。父さん、母さん。俺、気を付けるよ。九尾も危なくなったら助けてくれな。

『フン、お前に死なれてはわしも死んでしまうから仕方なく、このわしの力で助けてやってもいいぞ……』

ハハハ、ほんと素直じゃないつてばよ。

「ヒナタ、それじゃ行ってみつか。」

「うん、分かった。」

もし、俺達に攻撃をしてきたらその時は……

ヒナタの事は絶対に守ってやるってばよっ……!

次回

お前達が目的だっばよっ……!

ヒナタっ……!お前らぁああああ……!九尾のチャクラを全身に纏う俺を化け物でも見るかのように見て来る忍。

絶対に許さないっばよっ……!

ではまた是非見てください。。。。



## サバイバルだってばよっ！前編（後書き）

三話でした。

いかがでしたでしょうか？ここ最近気温が高すぎて体調が……  
・ですが頑張つて更新はしていきますよww

早く波の国にいつて白とか桃地さんとかと絡ませたいっ

とか

サクラだしてないなあ

とか

いろいろ考えているんですがまだまだですね……

早く中忍試験まで書きたいです……

## サバイバルだってばよっ！中編

第23演習場、同時刻、ナルト達とは違う場所……………

「ねえ、ちゃんと聞いているのシカマル？何で私じゃなくて、ヒナタなのよっ！あの子、絶対にナルトの事狙ってるわっ！他の子達はうちを狙ってるみたいだけど、ヒナタだけは私みたいにナルトを好きみたい。くそぉ……ナルトがカッコいいって事に気付いているの私だけだと思ってたのになっ！」

「へえへえ、そうだな。」

めんどくせえ……………いのと一緒にになると、こづなるから嫌なんだよ……………

俺はなりたくないって念を送ってたつてのに、何だつていのと一緒にすんだよイルカ先生……。いのだつてナルトと一緒になりたいて思ってたみたいだし、はあ〜まじめんどくせえ……。・・・。チヨウジの野郎は、知らねえ女子と一緒にたし……。はあ……。だりい……。

「ああもつっ！こつなつたらナルトを探すわよシカマルっ！」

「あのよあ、いの。あいつを探して何になんだ？まあ、お前がナルトをヒナタに取られてしまつかハラハラしてんのは分かるけどよ。」

「そ、そんな事思っていないわよ！私はただあいつらが巻物を取れなかつたら可哀想だと思って、手伝ってやろうかなあって思っただけよ！……」

「ああ、はいはい。まあそれも良いと思うが、ちょっと考えてみ。ナルト達より早く巻物見付けて、演習場の前で待っていると……」

「待ってると？」

「そりやお前、ナルトには褒められるし、ヒナタより一歩リード出来る。それによ、お前。ナルトに頭撫でられるの小さい時から好き

「だつたる？」

「ななな……何であんたがその事知ってんのよっ！」

いの顔がトマトみてえに真っ赤になった。これは、もう少し踏み込んだ事言ったら殴られる合図だ。いのを無視して歩き出す。……てかよ、そんなの俺だけじゃなく皆知ってるっての。知らねえのなんてナルト本人くらいだ。

「はぁ……めんどくせえ。」

でも、あいつらより早く巻物取ってくんのも大変なんだよなあ……何たってあっちには日向のお姫様がいるんだからよ……ナルト、これ終わったらなんか奢れよ……勿論チヨウジにな。

「し、シカマル、あんた顔怖いわよ……」

「……」

シカマル達がそんな話をしているとは露も知らずに、俺とヒナタは巻物が吊るしてある木の前に来ていた。

「い、ここまで来るのに他の子達に会わなかったね。」

「そうだな。ラッキーだってばよっ。」

他の奴らと会わなかったのは、ここいらに人避けの幻術が掛けてあるからだ。それに、こいつら………

「な、ナルト君。私があれ取ってくるね。」

（ナルト君、何か考えてる………ここは私が取ってきて上げた

方がいいよね？)

「あ、待てヒナタ。まだっ」

「だ、大丈夫だよ。ナルト君はそこで待っていて。」

ヒナタが俺の制止を振り切り、巻物に手を伸ばした時だった。

『ククク……流石木ノ葉の里。平和ボケで暗部も使えなくなっ  
たか？』

「な、ナルト君っ!!」

ヒナタが一人の忍に捕まってしまった。っち、あいつらの言葉に頷きたくないけど本当のことだか頷くしかない……じいさんに忠告しとくか？

「ヒナタを離せつてばよっ。」

俺の言葉に笑いを洩らす忍。額当てから察するに霧隠れの里の忍だな、それもおそらく上忍。んで、他の隠れてる7人が中忍ってところか……

『日向の血継限界、白眼。ククク……これが6年前に失敗した小娘だとはな。』

俺達が子供だからっていくらなんでも油断しすぎじゃね？この人。ってか、こんな事件原作に合ったか？ヒナタが誘拐されかけたのって、こいつが言ったみたいにも6年前だし、その事件の時にヒザシとヒアシがどうのこうのあった様な気がするが、今は関係ない事だな。

「お前らヒナタを如何するつもりだっ！」

さっきの言葉からして、ヒナタを誘拐して白眼を自分達の里のモノにするってのは予想出来るけど、一応俺って落ちこぼれ設定なんだよなあ……って、そんな事言ってる場合じゃないな。

『我らの狙いは白眼のみ。お前には悪いがここで死んでもらうぞ……』

「に、逃げてナルト君っ。わ、私は大丈夫だからっ。」

ヒナタ……やっぱりお前って優しくて、心が強いよな。中忍試験の時もネジに最後まで挑んでいったし、二期になってからも自分が死ぬって時にナルトに告白するし。ホント、いい女だよお前は。

『少し静かにしててもらおうか。』

そう言ってヒナタの首に手刀を当て、気絶させた霧隠れの里の上忍。

『これで、静かになった。それじゃあ不運を呪って死ぬガキっ！』

あいつの言葉で1人の中忍が俺の後ろに立った。クナイで首と体を切り離そうって事だろうが、俺にそれは甘いつて……

中忍が俺の首にクナイを刺した瞬間、そいつの体は下半身だけを残して後ろに倒れた。それを見ていたヒナタを抱えている上忍と隠れている6人の中忍の纏う気配が変わった。俺はそれに気付いて笑みを浮かべる。ハハハ、こんなに上手くいくとは思わなかったなあ。

俺の笑いに気付いたのか、俺が隠れている所（まあ隠れていないけどな。木の枝に立ってただけだし）に、手裏剣とクナイを投げた。お、そんな数投げちゃっていいの？忍具って確か高い筈だし、回収すんのもめんどくさいぞ？と、そんな場違いな事を考えながら瞬身の術でそれを避けてさっきまで「俺」が立っていた場所に瞬身の術で移動した。

『……お前、一体何をした。』



「ん？何って影分身に起爆札持たせておいて、そこに倒れてる奴が影分身に何かした瞬間起爆させただけだ。てかさあ、こんな簡単な罠に引つ掛かるなんて、こいつ本当に中忍だったの？」

上半身が吹き飛んだ人だったモノに人差し指を向ける。ガキだと思つて油断したのが悪いんだよって意味を含ませてるぞ勿論。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

やっと、俺を只のガキって思わなくなつたみたいだな。 . . . . .  
だけだよ、

「それじゃあ、まだまだ駄目だぞ、おじさん達。」

俺を困うように出てきた中忍6人を日向の体術、「回天」を俺独自に改良した「斬転」によつて切り刻んだ。

#### \* 斬転

手のひらにチャクラを留め、体を回転し360度の防御を可能にした日向宗家秘伝の「回天」。その「回天」を俺の「斬転」は手のひらに留めるチャクラを針のように伸ばし、近くにある物体を回転する事で斬り刻むことを目的とした攻撃技だ。

「ふう……」

斬転を止めて周りを見ると切り刻まれた中忍6人の姿がある。この技思いつきで作ったけど、使えないな。これやってる間動けないし、近寄ってくるの待つか……でも、下忍の内は使えるか？うん。もう少し改良してから使うようにしよう。

『お前……いったい何者だ？こんなガキがいるとは、報告にはなかったぞっ！』

「俺？俺は忍者アカデミーの落ちこぼれ忍者だ。」

つくう~~~~~これ一度言ってみたかったんだよなあ。目の前にいる霧隠れの上忍ってば目大きくしてるし。

『お前が落ちこぼれなら、大抵の奴は忍者を止めなければならい  
な……』

ま、そうだろうね。父さんと母さん、九尾っていう優秀な先生に修行してもらったんだ。強くならなきゃ嘘でしょ。

「ヒナタを返してくれるなら、おじさんの事見逃してあげてもいいけど……どうする?」

『フンツ、敵を見逃すなどお前がする訳がない。俺がこのガキを離れた瞬間俺を殺しにくる、お前の眼がそう言っているからな。』

ありゃ、気付かれたか。はあ……めんどくさいな。殺気の込め方ちゃんと学んでおこ。

「じゃあ、どうすんの?俺ってはその子助けたいんだよね。」

『……お前、俺の里に来ないか?お前程の腕があればすぐに上忍になれる。それに、このガキの事も助けてやる。俺が言えば上の奴らも言っ事を聞くからな。』

取引?引き抜き?この世界にもあるんだなあ……でもさあ、俺この里出たくねえんだよ。いじめられても、殴られても、父さんと母さんがいるし、大事な友達もいるからな。

「俺は里抜けしないよ。それに、ヒナタは勝手に助けるからいいよ。」

『そうか……なら、このガキを殺して逃げるまでだっ!』

いや、そんな事俺がさせる訳ないじゃん。ヒナタの首にクナイを振り下ろそうとする上忍に手裏剣を三枚程投げつけそれを阻む。俺の投げた手裏剣を手に持つクナイで防いだ上忍は、ヒナタを投げ飛ばした。

「ヒナタっ！」

ヒナタを空中で捕まえ、地面に降りて体を確認してみるとヒナタの白い体に紫の斑点が浮かび上がっているのに気付いた。

「これは……………お前っ!!!」

『任務を達成出来ないならば、その体に用はない。そして、無事に帰してやるほど我々霧隠れの忍びは甘くないという事だ。』

奴の言葉を聞く傍ら、ヒナタの状態を見る。荒い息、斑点、滝のような汗……………こいつはシタムラサキかつ！

「お前えあの時につ！」

ヒナタを気絶させた時に針で刺していたんだ！

『ククク・・・シタムラサキの毒だ。こいつは遅行性だが、斑点が体中を覆ったら・・・分かるだろお前なら?』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

くそっ!!こいつらに気づいた時に殺していればこんな事には・・・  
・・・早く解毒しないとヒナタがヤバいっ!!

『俺は悪いが退かせてもらう。お前はそのガキが死に行く様を見ているんだな。ククク・・・ハハハハッ。』

瞬身の術で消える上忍。あいつは絶対許さねえ・・・・・・・・

影分身の術!

三体の影分身を瞬時に作り、あいつを殺してくるように言ってから俺はヒナタを見る。

「ヒナタ、絶対助けるからなっ!」

飛雷神の術！

俺とヒナタはその場から消えた。その時に、幻術と結界を消しておいたので、この事件が火影のじいさんのところに知らされるのも時間の問題だろう。てか、後片付けくらい暗部にやらせてやるっ！！

次回

「ナルト君？」

「ごめんなヒナタ。」

病室で二人でいる俺達。

ではまた是非見てください。。。。

## サバイバルだってばよっ！中編（後書き）

前回の続きです。

というか更新遅れてすみません。

現在実家に帰っているのですがパソコンを使うにも難しいもので・・・

はい、言い訳はいいません。これからも更新頑張っていきますので、  
応援よろしくお願いです。

九尾のチャクラでませんでしたね・・・・・・・・あれえ〜と首をか  
しげてしまいましたwww

ってこの話で終わるつもりが次で終わりですね。もう少しお付き合  
いください。。。。



## サバイバルだってばよっ！後編

うう・・・眩しい・・・

目蓋の上からの光が強くて私は目を覚ました。そして、最初に目に入ってきたのは白い天井。

「ここは・・・どこ？」

寝ぼけた目を擦りながら上半身を起こし、ここがどこかを確認していると、私の寝ていたベットに伏せる形で寝ている人が目に入った。白い部屋に目立つ金色の髪、山吹色の服・・・そこまで考えて私はやっと覚醒した。

「ナルト君!？」

そう。いつも見ていたから見間違える訳がない。何でナルト君が私の横に?でもナルト君寝てる?私もさつきまで寝てたよね?・・・・!?!?わ、わわわ、わわわわっ・・・

考えれば考えるだけ頭が、顔が、体が熱くなるけど考えるのをやめられない。だって、ナルト君がこんな近くで寝てるんだよっ!?!?夢だよっこれは夢だよっ!でも覚めて欲しくない・・・って何考えてるの私!?

私がそんな風に一人でパニックになっていると、金色の頭がゆっくりと動き、体を伸ばしはじめた。

「!?!?・・・」

それに、びっくりしてそれまで考えていた事が頭の中で爆発したよっで、真っ白になってしまう。

「ふあああ・・・お、ヒナタ目え覚めたみたいだな。」

コクコク!

とつさに頭を縦に振る。だって、寝起きの顔見られて恥ずかしいし、こんな近くにナルト君いるし、ナルト君も寝起きだし、それからそれからっ……………

「ヒナタ、顔真っ赤だけどまだ熱あるのか？ちよつとごめんな。」

「ひゃっ！？……………」

ナルト君の顔がこんなに近くにつ！？

「うん。来た時よりは下がってるけど、まだちよつと高いな。ちよつと待ってるってばよ。」

ナルト君の顔が…………ナルト君がナルト君が…………

「よし。これおでこに当てとけ。そしたら熱もきつと下がるってばよ。」

冷たくて気持ちいい…………私のおでこにナルト君が氷と水の入った袋を当ててくれた。パニックになっていた頭もおかげで治ったみたい。

「ありがとね。」

「いってばよ。それより、ごめんな。俺がいたのにヒナタをこんな事に……」

私を見て辛そうな顔をするナルト君。私はやっと自分が病院のベッドに寝ている事に気づいた。でも、どうして私は……

そうだった！ナルト君の言葉で思い出した。

昨日は午後の授業がサバイバル演習で、ナルト君と組になったんだ。そして目的の巻物がある所に行って、私が取ろうとしたら……  
・他里の忍びに私は捕まってしまって、気絶させられて……

「わ、私は大丈夫だよ。ナルト君は大丈夫だったの？怪我とかしてたら私……」

ナルト君が怪我したんじゃないかって思っただけで、胸が苦しくなつて、涙が出そうになった。

「だ、大丈夫だってばよっ。ほら、俺はどこも怪我してないぞ。だ

から、泣くなつてはよっ。」

慌てたようにいっぱい動いて、私に元気だつていう事を見せて安心させたいんだと思う。でも本当に良かったあ……ナルト君が何ともなくて。クスクス、でも、そんなに五月蠅くしたら他の人に迷惑が掛かつちゃうよ。

「ナルト君に怪我がなくて本当に良かった。でも、誰が助けてくれたの？やっぱり先生？それとも、違う人？」

私がそう言つと、ナルト君は困つたような顔になつて頬を掻いた。

「それが、俺にも分からないんだつてばよ。俺もあの忍者の仲間へ気絶させられて、目を覚ましたらここのベットの上だったから。」

え？

「それじゃあ……」

「そ。だから誰が俺達を助けたか俺も分からない。なんか、ここの先生に聞いたら覆面つけた人が連れてきたつて言つてたから、暗部じゃないかと思つんだけどな……」

暗部の人が助けてくれたんだ……でも、どうしてかな……  
……違う気がするのよ。

「そうなんだ。なら、誰か分かったらお礼を言いに行こうね。」

もしかしたら、ナルト君が助けてくれたのかな……

「おう！」

ううん。違うよね、だってナルト君は……

「ん？どうしたってばよヒナタ。」

「ううん。何でもないよ。」

「そうか。ならいいってばよ。」

元気いっぱいには笑うナルト君を見ると、私も元気になってくる。  
ナルト君は勉強が出来なくても、忍術が出来なくても、絶対にあきらめないでいつも最後は成功させる、カッコいい男の子。それで、  
それだけでいいんだ。

「あ、でも俺達って昨日の演習の成績どうなんだ？」

あ……………

「ど、どう、なるのかな……………」

こんな事になってしまったんだし、きっと大丈夫だよね……………  
……………でも、ナルト君と一緒になら私は何だって大丈夫な気がする。

「補習だったら俺やばいってばよお。イルカ先生許してくれっかなあ。」

うん。絶対に大丈夫。

あの後ちょっと、ヒナタと話していると日向家当主、日向ヒアシが病室に入ってきたところで俺はヒナタの病室を出た。んで、今はいつも修行してる森に向かっている。

だって、こんな子供にあの人、白眼で睨んでくるんだぜっ！それも早く出ていけと言わんばかりの表情付きでっ！ヒナタも怯えてたし、もう少しやりようがあんじゃねえのって俺は思うけどね。実の子供に怯えられる父親ってどうよ。

ヒナタが可哀想だ。つっても九尾が入ってる俺が、実の子の傍にいたら仕方ないか。日向家、うちは家の両家とも父さんは仲が良かったら仕方ないか。



たみたいだけど、他の奈良家、山中家、秋道家、犬塚家、油女家と違つて俺を毛嫌いするようにしていたからな。

まあ、うちには至つてはもうサスケ一人だけになつてしまつたけど。イタチがいるつて？イタチはもう木ノ葉にいないから数えない。

んで、日向は厳しい家だから、里の人達というか、九尾に殺された人の親類とか恋人たちの事を考えて、俺を避けるようになったんじゃないか、と俺は父さんと母さんから言われた。本当かなあ？

俺にはどつちでもいい事だけだな。てか、俺ヒアシの事嫌いだし。原作読んでる時こんなやつ人の親じゃない、とか思つてた。だつて、ヒナタの事ハナビと比べてるし、なにより才能がないつて決めつけてるし、ヒナタが弱気な性格になつたのつて絶対あの人のせいじゃん。

だから、どつち道あの人に嫌われてようが、俺には関係ない。ヒナタが無事ならそれでいいんだ俺は。

ん？あの霧隠れの上忍がどうなつたかつて？それは影分身達がすぐに追いついて、九尾のチャクラで出来た特性螺旋丸を喰らわせてそこらを巻き込んで逝きましたよ。だつて、いろいろムカついてたし仕方ねえじゃん。後で暗部とかが調べたりするんだろうけど、まあ俺がやったつていう証拠は出てこないし、いいんじゃない？

そんな事を考えながら病院を出て歩いていると、向こうからツンツンに立てた黒髪に、全身黒で統一している子供がこちらに向かって歩いてくるのに気づいた。

「サスケ？何でこんな所に……」

あいつの家はここらじゃない筈なんだけどな。

「……………」

「おい、無視すんなよ。一緒のクラスじゃねえかサスケ。」

俺は基本的に無視されるのが嫌いだ。里の大人とかに無視されたりすんのは、まあ、納得してねえけど納得するしかないから仕方ねえ。でも、同期生、同じクラスの奴に無視されるのだけは嫌だ。馬鹿にされるのや、悪口言われるのはムカつくけど俺をちゃんと認識しているからいいんだ。でも、無視って俺がいないように扱われるじゃん？だから嫌なんだ。

「……………邪魔だよ、ドブ。」

「へ！成績が良いと言う事や態度が違うってか？」

何でサスケと言い合いしようとしてんだよ俺はっ！

「黙れ、俺に構うな。」

「はい、そうですかって、言うわけねえだろうが！」

うわぁ………口が勝手に！ってそんな馬鹿な事はなく、子供相手に本気でキレてる俺って………

「ふん。忠告はしたぞ。」

サスケはそう言うと、道に落ちていた小石をリフティングすると、俺に向かって蹴ってきた。くそ、ドベとか落ちこぼれてっていう設定だから避けられねえっ。こんなに遅く感じんのにつ。

「ぐはっ………」

ぐはとか………顔面に当たった小石は跳ね返って、俺とサスケの中間の位置くらいに転がる。ってか、顔面狙うとかどんな鬼畜やるうだよっ！普通腹とかその他にもあんだろっ！おお怖っ………こいつ原作よりひでえんじゃないかねえか？

「……………これで分かったろ。俺に構うな。」

サスケはそう言うと、俺の横を通り過ぎどこかへ行ってしまった。  
ふう……………こんな奴と仲良くなるとか、難しいだろ。

『大丈夫よ。だって私の息子だもん。』

『そつだよ。ナルトは頑張れば出来る子だからね。』

あははは。サンキュー母さん父さん。

『傷はわしが癒しておく。』

九尾もありがとな。

ちとっ、

「修行に行くってびよっ」

反動を付けて飛び起きる。すでに、サスケにやられた傷は癒え、俺の顔はいつものもの。そして、向かうは森。もっと強くなって、油断なんてしないようにならないとっ！

## 次回

「あははは、そうだっ！お前は化け狐なんだよおナルトっ！」

「ミズキい！それ以上言うなっ！」

俺はイルカ先生のボロボロの姿を見て思った。

「やめだ。もうこれからは、ドベも落ちこぼれもねえ。俺はお前をぶち殺す。」

では次回も是非是非よろしく願いします。。。。。。

## サバイバルだってばよっ！後編（後書き）

三部続いたこれもこれでお終いです。というか三部にしないで全部一緒にすればよかったかな？とか思ってるしだいです。wwww

九尾のチャクラについてはあれでごまかすしかありませんでした・・・なんでこう書きたいものができないんでしょう？ほんと不思議です。

次回はついに下忍になるあのイベントです。一気に進めてしまいましたがこれは早く原作の流れに乗りたいたいというわたしのわがままです。皆様にご理解いただけることを願いましてあとがきとさしていただきます。

サスケなんであんなとこ出てきたんだろ？



眠気眼を擦りながら、洗面所へと行き歯磨きと洗顔をする。そうしてやっと目覚めた俺。うわ・・・髪爆発してるし・・・まあいっか、飯食べてから直せば。

「ッシ。さっぱりしたあ！」

『ナルトお〜、ご飯出来てるから早く来なさいってばね。』

「はあい。今行くってばよお。」

ん？今俺を呼んだ人が誰かって？それは直ぐに分かるってばよ。

返事をしてから居間に行くと、俺と同じ金髪に寝癖をつけた男の人がテーブルに着いて新聞を読んでいる姿が目に入ってきた。あはは・・・寝癖とか俺と同じだし・・・テーブルの向こうを見れば、台所で料理をしている腰まである長い赤毛の女の人鼻歌を歌っている姿が目に入ってくる。美味そうない・・・お、今日はパンだな。

「おはよう。父さん、母さん。」

『おはよう、ナルト。』



『おはよう。早く席に着きなさい。三ナトは新聞しまつて。』

女の人にそう言われて、いそいそと新聞を畳んで横に置く男の人。尻に敷かれているなあと思いながら、俺は男の人にどんまいという意味を含ませた笑みを向ける。

分かったと思うが、この二人は俺の『中』にいた父さんと母さんだつたりする。この光景は一年前から続いていて、何でこうなつたかつて言うと、母さんのお願いから始まつたんだ。

『ナルトに朝食を作つてあげたいし、行ってらっしゃいやお帰りなさいも言いたいってばね。』

普通の家庭ならこんなお願いなんてまずしないだろう。だが、俺の家庭は違う。それは説明するまでもないと思う。それまで俺は二人を里の皆に見せたくなくて、結界があるところでは二人を口寄せしていなかった。でも、それも俺が自分で結界を張れるようになってからで心配なくなつた。自分家に小さな結界を張れば二人を口寄せしても大丈夫じゃん。という事で、その日から俺は二人と仲良くこうして暮らしているってわけ。

『今日は確か、アカデミーの卒業試験があるんだよな?』

「おう、今日で俺も下忍だつてばよ、父さん。」

母さんが作る朝食を待ちながら、父さんと話す。そうそう、あのサバイバル演習から4年経っていたりするんだなこれが。いきなり進み過ぎだつて？それは、あまり深く考えないことをオススメするぞ。んでまあ、その4年間にあった事は……いろいろだつてばよ。それは後で話す事にして、いよいよ今日は待ちに待った卒業試験の日。

『ナルト、あんたの事だから心配はないけど、頑張つてきなさいよ。』

「へへっ。大丈夫だつてばよ母さん。俺つてば一発合格間違いなし！」

ドベ、バカ、落ちこぼれ、つて俺を今まで馬鹿にしていた奴ら全員をびっくりさせてやるつての！

と、内心そんな事を考えていたのが顔に出していたらしく、

『加減はするんだよ。』

と、父さんに釘をさされた。分かっているって。少しだけびっくりさ

せてやるだけだし。

『ほらほら、ご飯が出来たわよ。これ食べて元気に行ってください。』

『

「はい。いただきますっ。」

それから、母さんの作った朝食を父さんと母さん、俺の三人で食べる。母さんまた腕上げたみたいだな。母さんの料理は日々美味くなっっていくから凄い。父さんは、いい人奥さんもらったなあ……

さてと、飯も食ったし行くとするかな。

「行ってきますっ。」

『『行ってらっしゃい。』』

さあ今日は、忍者としてのうずまきナルトの本当の意味での誕生だっ！

アカデミーへと着いた俺は、早速自分の席に着きどんな試験問題がでるんだろうか、と考えていた。確か、原作では分身の術だった筈だけど。この世界では何の試験が出るんだ？

「よおナルト。今日は試験だけどよ、お前大丈夫なのか？」

「ん？シカマルにチヨウジか。何だよ、俺の心配か？」

シカマルとチヨウジが俺の席の前に来て話しかけてきた。チヨウジに至っては、ポテチの袋を持ってさっきからバリバリ食べている。おいおい……今から試験だつてのに……

「めんどくせえけど、お前はダチだからな。助言くれえはしてやる  
うと思つてよ。」

「それはサンキューな。でも、こいつはその辺どうなんだ？」

そう言つて横のチヨウジを指すと、シカマルは「はあ・・・。」と溜  
め息を吐いた。

「チヨウジも心配だつて言つてる。」

「ばくばく・・・。」

あははは・・・。チヨウジも変わんねえよなあ。まあ、心配し  
てくれるっただけでも嬉しいけどな。

「チヨウジもサンキュー。」

「ばく・・・。」

そんな事をしていると、黒板側のドアを開けてイルカ先生が入つて

きた。

「それではこれから卒業試験を行う。試験内容は分身の術だ。呼ばれた者は一人ずつ隣の教室に来るように。」

お、原作通りかあ。なら、影分身三体くらいでいいか。これくらいなら、下忍レベルって誤魔化せるだろ多分。

「ひやははは。ナルトおゝ分身の術だってよ、ついてねえなあお前。」

「五月蠅いぞキバ。だが、本当に大丈夫かナルト？」

キバとシノが近寄って来た。キバは、俺とヒナタが4年前のサバイバル演習の時に組になってから、生意気な態度を俺に取るようになった。これについては、ただの嫉妬って分かっているから特に何とも思っていない。まあ、シノが言うようにウザいんだけどな。

「ナルトは分身の術、苦手だったよな？」

「ばぐ……もぐ……僕の持つてる兵糧丸を食べて、チャクラを増やせばいけるんじゃない？」

イルカ先生が来た時に、自分達の席に戻っていたシカマルとチョウジの二人もなぜか、また俺のところに来た。はぁ……。俺ってこいつらにも信用されてねえんだな。

「大丈夫だ。俺ってば修行したし。」

「お前が修行？」

「ひやはははははっ。シノの言う通りだぜ。お前が修行したって言うても、大したことねえんだろ。」

「キバ、お前は言い過ぎなんだよ。ナルト、本当に大丈夫なんだな？」

「おう。心配し過ぎだったのシカマル。チョウジも兵糧丸出そうか出すまいか迷ってんなら、俺は大丈夫だから後で食べるって。」

チョウジのさつきからの行動、切なくて見てられねえ。だってよ、兵糧丸を俺に差し出しながら泣きそうになってんだぞ？そんな奴から貰っても後味悪いっての。

「ま、試験が終わる頃、ここにいる皆が受かるといいな。」

「勿論だ。」

「当たり前だぜ。」

「だな。」

「うん。」

「次い！うずまきナルトっ！」

5人で話していると、俺の名前が呼ばれた。

「じゃ、行ってくるってばよ。」

4人に後ろ手で手を振りながら、教室を出て隣の教室に入る。

目に入ってきたのは、黒板を背にしたイルカ先生とミズキが椅子に座っていて、二人の前にある長机の上に木ノ葉の額当てがズラツと並んでいる光景。なんか、大学受ける時にやった面接みたいだな。

「それではうずまきナルト、分身の術だ。」

「はいっ。」



へへ。びっくりさせてやるよイルカ先生。

### 影分身の術

バフンっ！

白い煙が晴れると、俺の周りに影分身が三体現れる。

「なっ!?!」

「!?!?!?!」

お、びっくりしてるびっくりしてる。っくうゝ痛快だ!!

「「「先生、これでどうだっばよ?」「」「」

4人の俺が笑みを浮かべながらそう言つと、

「あ、ああ……うずまきナルト合格っ!」

そう言つて、イルカ先生が額当てを俺に渡してくれた。影分身はすぐに消した。ってか、隣のミスキめっちゃ睨んできてる。ばあか、原作通りに行くかつての。

「ありがとうイルカ先生っ！俺つてば、これ大事にするつてばよ！」

「おう。その額当てに恥じない立派な忍者になるんだぞ。」

ああ・・・やっぱりこの人めっちゃいい人だあ。こんな人ばかりなら俺は・・・

教室を出てから隣の教室に戻る。お、皆俺が受かったの見てびっくりしてやがる。へへっざまあ〜。

「合格したのかナルト。」

「っけ。お前が合格したんなら俺は楽勝だな。」

「本当、お前つて土壇場につええよな。」

「ほっ・・・良かった。これで、僕がこれを食べてもいいよね。」

ははっ。こいつらが祝ってくれるだけで俺は救われる。

それから、午前をいっばいに使って、同期の奴ら全員が試験を終え俺達はいつもの屋上に来ていた。

「へへへっ。これでいっばしの忍者だな俺達。」

「キバ、まだ俺達は下忍になったばかりなんだ。そう浮かれているばかりでは足下を掬われるぞ。」

「シノ、お前はいつも冷静すぎんだよ。でもよ、俺達みんな受かって良かったな。」

「はっぐ、ゴク。そうだよ。僕、緊張して危なかったけど兵糧丸食べてやったら出来て、合格にもらったんだ。」

「何気にチヨウジが一番危なかったんだな。」

今日は試験だけなので、午後は休みだ。そして、俺達はいつもよりゆっくりと時間を過ごしていた。だが、そこに一人の台風娘が現れた。

「ああ〜！あんた達ここにいたのね。探したじゃない！！」

「あああう……い、いのちゃん皆びっくりしてるから。」

屋上のドアを蹴り破ったのか、凄い音を立てて背中まである金髪を揺らしながら、我らが誇る山中家の娘、いのがずかずかと近寄って来た。そして、それに引つ張られるように、綺麗な黒髪を肩の所で切りそろえた日向のお姫様も歩いてきた。

「げ……お前、親父がいるからって校庭に行っただんじゃねえのかよ。」

「げって何よ、シカマル。パパは奈良家のおじ様と秋道家のおじ様と飲みに行くって言って、もう帰ったわよ。それよ・りもナルト、私合格したわよ。ほら額当て。」

いのはシカマルにそう言っと、俺のところにはバツと近寄り、腰に巻いた額当てを見せてきた。額当てを腰につて………斬新だな、いの………

あとよ、そんな近づけなくても見えるから。って、あの三家のおっさん達も元気だなあ………

「ナルトも受かってるみたいだし、私達一緒の班になれば「ナルト君!」………」

いのを遮ってヒナタがズイッと近寄ってきた。

「わわわ、私も受かったんだよ。ナルト君も受かったみたいだね。おめでとう。」

「ありがとな。ヒナタもおめでとう。」

「う、うん。ありがとう」

真っ赤になつて俯いてしまうヒナタ。やっぱりヒナタって俺の事好きだよな。俺もヒナタの事好きだからいいんだけど、多分だけどのも俺の事好きみたいなんだよなあ。原作どこいった！！って正直思ったけど、今はこの生温いお湯に浸かって誤魔化しておくことにする。

「いのも、おめでとうな。」

「ふ、ふん。何よナルトのくせに。」

だから、ムクれていたいのになんて言つて、ご機嫌を取るのも忘れない。

ん？キバの奴、ヒナタに話しかけようとしてるけど、ヒナタがまだ恥ずかしがつてるからあれは聞こえてないな………どんまいキバつ。誰か違う人が見つかるさ、きつと。

それから、俺達はいのとヒナタが作って来ていた弁当（重箱って……）を食べてから遊びに出掛け、夕方に解散した。

皆と別れてから俺は里の外れにある森に来ていた。この森は、俺が修行の時に使ってる場所じゃないぞ。ここは、原作の最初に出て来るあの森。

結構奥まで来たし、ここらでいいか。さてと、

「どうしたんですか、ミズキ先生。俺に何か用ですか？」

屋上から今まで、あんたが俺を見ていた事は分かってんだよ。

「何時から分かってたんだいナルト君？僕は気配を消していた筈なんだけどね。」

俺の後ろ約5mくらいの所に現れるミズキ。ふうん、装備しっかりしてるじゃん。原作通りに俺が失敗しないから焦ってるってところかな。

「そんなの最初からだってばよ。あんたってば、俺の事試験の時に睨んでたし、何か仕掛けて来るなって思って注意してたけど、正直期待外れだよ。今まで見張ってるだけとか詰まんねえし。」

ホントに期待外れだわ。原作と違った事したんだから何してくるか結構期待してたんだぞ。

「へえ、気付いてたんだ。イルカ先生にも気付かれてなかったんだけどなあ……………」

「イルカ先生は俺の分身の術にびっくりしてたからなあ。仕方ねえつて。」

「君の分身の術には僕も驚いたよ。まさか、君が多重影分身を使うとはね。今まであんなに失敗して皆に馬鹿にされていた君が、とね。」



ふん。好きで失敗してたんじゃねえよ。こうでもしなきゃ、平和に暮らせねえから仕方なくだ。暗部とか上忍が殺しにやって来るより、一般の大人に殴られたり、同期のやつらに悪口言われてた方が断然安全だしな。

「でも、君自身の事はこの際どうでもいいんだ。僕が知りたいのは君が持っている筈の禁術の巻物の事なんだよね。教えてくれるかな？」

ああ、成る程。こいつ、俺が火影のじいさんのところから巻物盗んで勝手に使ってるって思ってたのか。まあ、確かに多重影分身って禁術みたいだし。でも、原作でほとんどの奴使ってるよな？あれは何も言われないんだろうか？

「無視か……………ハアっ！」

ミズキは背中にあっただでっかい手裏剣を俺に向かって投げてきやがった。

「あつぶね。」

ぴよんつとその場で飛び跳ね、手裏剣を避けた。だって、当たった

ら痛いじゃん。

ヒュルヒュル・・・・・・・・・・・・・・・・パシッ

でっかい手裏剣はブーメランみたいにミズキの手に戻っていった。  
ちよつとあれ欲しいって思った俺って、負けかな？

「っち。避けてんじゃねえよガキがっ！」

「いやいや、普通避けるだろ。んで何？もしかしてあんた、俺を殺す気？」

こいつの事だから俺を殺して巻物探す気なんだろうけど、まず俺を殺すのは無理だし、巻物に至ってはホントに知らない・・・・憐れだなこいつ。

「お前を殺しても里の者は誰も悲しまねえから安心しな。だから、気にせずあの世に行きなあっ！！」

うわ・・・・・・・・ミズキの顔やば。あれでアカデミーの女の先生達にモテてんだから不思議だ。絶対イルカ先生の方がカッコいいっての。

ミズキはさつきと違い、今度はクナイと普通の手裏剣を投げてきた。普通のアカデミー卒業したばかりの奴ならこれで殺られるんだろうけど、俺には効かないっての。

向かってくるクナイと手裏剣を弾くために、クナイを取りだそうとした時に俺の前に誰かが飛び出した。

誰かは分かっているんだけど・・・途中から俺達の後着けて来てくれたし。でも、飛び出さなくてもいいと思うんだよ俺は。

「ミズキ、生徒相手に何やってんだ？」

「イルカ！？」

イルカ先生、何も体で受け止めなくても。絶対痛いと思う。でも、やっぱりこの人は俺を助けてくれた。それだけで嬉しくなっちゃまうんだから、俺もこの世界に染まっちゃまったって事だな。

「イルカ先生！」

「もう大丈夫だぞナルト。俺が助けてやるから。」

「ふん。お前が来たところで何も変わんねえよ。．．！．．くくくく．．．．．」

突然笑い出したミスキ。こいつホントやばいな．．．．．

「ナルト、俺から離れるなよ。あいつに隙が出来たら逃げるんだ、いいな。」

「分かったってばよ、イルカ先生。」

「くははははは。待てよ、今余興を思いついたんだ。ナルトお、何でお前が里の皆に毛嫌いされていたか知りたくないか？」

「っ！よせミスキそれだけは言っただめだっ！」

なあんだ。余興っていうからどんなもんかと思えば、原作通りナルトが九尾の器って事をばらすだけかよ。俺ははじめっから知ってるから今さらだし、九尾とはもう仲良しだしな。正直拍子抜けだわ。

「．．．．．」

まあ聞くだけは聞いてやるかな。

「12年前の化け狐を封印した事件を知っているな？」

「ミズキお前え！」

イルカ先生はクナイと手裏剣で出来た傷が痛くて体が動かないみたい。

「あの事件以来、里では徹底したある掟が作られた。だが、ナルト。お前にだけは決して知らされることのない掟だ。」

まあ、俺に知られて九尾が暴走したら………とか考えたんだろっな。

「くくくくく………それはなあナルト、お前の正体が化け狐だと口にしない掟だ。」

「やめろおっ!!」

大丈夫だよイルカ先生。俺は知ってる事だからさ。

「つまりお前が、イルカの両親を殺し、里を壊滅させた九尾の妖狐なんだよお！」

「ミズキそれ以上言うなあ！！！」

ミズキは熱くなってきたんだろうな。酷い顔をもつと酷くして、唾を撒き散らしながら喋る。汚えから唾飛ばすな。唾って確か4mくらい飛ぶんじゃなかったっけ？

「お前は憧れの火影に封印された拳げ句、里の皆に騙されていたんだよおっ！」

「ぐふ！……」

イルカ先生が血を吐いた。早く病院に連れてってやらないと。

「イルカも本当はな、お前が憎いんだよ！」

ミズキがでっかい手裏剣を投げるモーションに入った。そんな大きなモーションじゃ簡単に避けれるって。

「お前なんか誰も認めやしないんだよお!!」

ギョーン!!

大きなモーションからの手裏剣は、威力はあるだろうけど……

そんな事を冷静に考えているとイルカ先生がまた飛び込んできた。  
つて!イルカ先生止めなつて!背中とか絶対痛いから!

ザク!!

と音がしたところには木の丸太があるだけ。

「!!」

「イルカ先生、危ない事しちゃ駄目だつてばよ。」

「な、ナルト……お前……」

吃驚しているイルカ先生に肩を貸して木の枝に乗っている俺。

「先生は簡単に死ねないでしょ？俺知ってるんだぜ。一楽のアヤメさんと良い感じなの。」

「な、ナルト！それをどこで!？」

「へへへ、やっぱり。だから、先生は無理しちゃ駄目なんだって。後は俺がやるから、ちょっと下に降りるからしっかり捕まってる。」

木の枝から飛び降り、木にもたれさせるようにして座らせる。

「ナルト、お前……」

「いいからいいから。」

「貴様あ！一体何をしやがったあ!!」

「何って、アカデミーで覚える忍術の基礎の基礎、変わり身の術に決まってるだろ。先生やってたのに分んねえのか。」

ミズキの顔を見るだけで、もうムカつきが止まらなくなった。九尾



の事を馬鹿にしたし半殺し決定だな。

「変わり身の術をお前が、落ちこぼれのお前が、あんなにタイミン  
グ良く出来る訳がねえ!!」

ミズキが吠えるがもう聞く耳持たん。

「イルカ先生をこんなにしたんだ。覚悟はいいよな？」

バキバキ……

手の指を鳴らしながら、ミズキに近づく。

「くそがあああああ!!」

苦し紛れにもう一つ背中にあつたでつかい手裏剣で俺をぶっ叩きに  
来たが、それを左手の人差し指と中指で受け止め、瞬時に作った螺  
旋丸でミズキの腹を殴った。

ギョルルルルルル……ドカッ!!

回転して後ろにあつた木にぶつかるとミズキ。物足りないけど、これ以上は無理だな。あいつが死んじまうし。

「ナルト……………」

「イルカ先生！」

「！な、なんだ？」

急に大きな声を上げた俺にびっくりしたイルカ先生。目をあんな大きくしちやつて、ぷぷ、おもしろ。

「下忍になって初めての討伐任務、達成だつてばよっ！」

ピースサインつきの笑顔でイルカ先生に言った。任務なんて受けてないけど、そこは気分だ気分。

「……………ああ、任務達成だ。よくやったなナルト。」

イルカ先生も笑顔。へへ。なんか照れくさいな。認めてる人に認めてもらうのって。

次回

「うん……お前達の第一印象は……嫌いだ。」

俺もあんた嫌いだ。時間くらい守れっ！

ではまた是非見て行ってください。。。。。

アカデミー卒業だってばよっ！（後書き）

はい四話でした。

今回もまたまたご都合主義全快でしたが、皆様どうでしたでしょうか？

イルカ先生カッコいいですよねww私あんな先生になりたいと思っ  
てましたが……

まあ就職内定とつたのでいいんですがねww

というかサクラさん一向に出てきませんねえ……サクラファン  
の人が読んでいましたらすみません。次でやっと出てきます。いや  
あ長かったです。

というか連続更新……思ったより大変ですね……

班決めだつてばよっ！

ミズキが、なあ………

水晶玉には、ナルトがイルカに肩を貸しながら歩いている姿が見える。ミズキが霧隠れと通じていた事は知っておったが………まあ、ミズキの奴は暗部の者に任せるとして、霧隠れの忍び達（遺体）をどうするかじゃが………

霧隠れの忍び数人が里に侵入する前に、暗部に始末された。

「まさかナルトがお………」

血は争えないという事かのお。あの動き、そして術を行使するスピード、一瞬四代目が生き返ったのかとも思ったが……

「ナルトお前は……」

再び水晶玉の中を覗いてみるとイルカがナルトを怒っているようじゃ。ふおっふおっふお……これを覚えておると、さっきまでの全部嘘のようじゃ。

「本当に不思議な奴じゃ。さて、後始末くらいはやらねばの。」

そして、わしは水晶玉から視線を外し暗部へと鷹を飛ばすべく、書き物し始める。その時水晶玉に見えるナルトがこちらにピースサインを送っている事には、ついで気付けなかった。

よ！うずまきナルトだ。俺は今、忍者アカデミーの俺の「元」教室にいて、自分の席だった場所に座っている。ちらっと、教室を見回してみると昨日もらったばかりの額当てを付けて、陽気になって騒いでる奴らが目につく。

んで、そんな奴らに負けなくらいに五月蠅いのが、

「なんで、落ちこぼれがここにいるんだ？」

「昨日の試験に合格した奴だけが来るって、知らねえんじゃねえの？」

「おいドブ、お前は今日ここに来なくていいんだぜ。」

「あははははっ！お前酷い奴だねえ。」

と、俺に暴言を吐いてる奴らだ。こいつらはずっと俺を馬鹿にしてきた奴らだから、絶対何か言ってくると思っただが・・・はあ・・・

.....

早くあいつら来ねえかなあ.....

あいつらつてのは、シカマル、チョウジ、キバ、シノの四人の事だ。何でか今日はあいつら来てねえんだよなあ.....全員で寝坊とか?.....んなのシノがする訳ねえしなあ.....

そんな事を考えていると、黒板側のドアの方が五月蠅くなってきた。五月蠅えなあと思い、そこに顔を向けると、

「っさいわねっ!あんたのせいでこんな遅くなったのよ!」

「はあ!?あんたのせいでしょうがっ。私が最初に見つけたのをあんたが横から来たんじゃないの!」

「お前らもう止めろっ。もう教室に着いたんだからよ.....」

「ヒヤハハハハッ。シカマル、こいつらお前の言う事聞いてねえぞ。」



「僕のお菓子僕のお菓子僕のお菓子……」

「あわわ……ふ、二人とも止めた方が……し、シノ君どうしよっ!?」

「……お前も落ち着けヒナタ。」

俺の待っていた奴らが揃って登校してくるとか……てか、何でお前ら一緒に来てんだよ!!皆で来るんなら俺も誘えよっ!それにいのと言い合っつてんのサクラだし……ホントにデコ広かったんだな、あいつ。

「この、いのブタぁ……あなたが横から出てきたんじゃないっ!せっかくのサスケ君にあげるプレゼントだったのにな。」

「っさいわねっ!あんたが出て来なかつたら壊れなかったのよっ!この馬鹿デコりん!」

そんな事を延々と続けている二人。てか、いのとサクラが教室に入る一歩手前で罵り合っつてるせいで、その後ろにいるシカマル達が入っつて来れないみたいで困っているのか?まあ、あいつらだけが入る訳じゃねえし、止めさせるか。

「お〜い、そんなとこで言い合ってないでこっちに来ていって。」

俺の声にいち早く反応したいのが、サクラとの罵り合いを一方的に終わらせて、俺のところへ歩いて来た。それに続くように五人も歩いて来る。サクラは一人カツカしていたみたいだが、そんな俺の知った事じゃないから放っておく。その時サクラと目があつたが汚物を見るような目で俺を見てきたので、こっちから視線を切つてや

これで気付いたと思うが俺はサクラと仲が良くない。てか、話した事もないし、話そうとも思わない。理由を挙げるとしたら、さっきのあの目だ。あいつは、親が一般の里人なので俺の事をどういう奴なのか、他の同期の奴らと同じように教えられて育つたんだと思う。だから、俺に向ける目はそこらにいる同期の奴らと同じで、俺を汚い物でも見るかのように見て来る。

原作でもそこまで好きじゃないキャラだったが、生で、そして実際にあの目で見られたら話す気も失せるってもんだ。原作のナルトが何でサクラを好きになつたのか不思議でならねえし、あんな女こっちから願ひ下げだつての。

俺が最後に読んだ雑誌は母さんが出てきたところだったが、単行本ではサスケにナルトが「サスケとは俺がやる」って言ったところだった。んで、サクラがナルトにいきなり告白する場面があつたんだが・・・俺は「はあ??」って思ったのを覚えている。いやよ、こいつつてばナルトの事馬鹿にすんのもいい加減にしるよつてガチ

で思った。サクラを本気で嫌いになったのって、あのせいだったな  
あとか前世の記憶を思い出していたら、いのが俺に話しかけている  
のに気付いた。やば・・・半分も聞いてなかった・・・

「もう！ちゃんと聞きなさいよナルト！」

「悪い悪い。考え事してた。」

「つつ~~~~~!!.....はぁ、もういいわよ。」

??変な奴だなあ。いのも言いたい事があんなら言えばいいのに。  
めちゃくちゃ怒った顔してたのに今は諦めた様な顔してるし。

「お前は人の話をちゃんと聞くようにするべきだ。苦勞するのはナルト、お前なのだから。」

「?分かんねえけど、分かったってばよ。」

シノに何か諭されたみたいだが、わけ分かんねえな。まあ、こいつ  
らが来たお陰で、周りのウザい奴らの事を気にしないでいられるか  
ら、小言くらい我慢してやるか。本当は聞こえてるが、こいつらの  
話に意識を向けとけば頭に入ってこねえし。

それから少しの間、7人で話をしていたらイルカ先生がやって来た。ああ？サスケとブチュってやるイベントしてねえって？そんなの見て誰が喜ぶんだよ。ついでに教えとくとサスケは今サクラの他、多くの女子に席を囲まれている。モテる奴は辛いつてか？いや、あそこに俺がいたら耐えられねえな。サスケ、それにだけはマジ尊敬するよ。

「昨日の卒業試験、お前達良く頑張ったなあ。今日は連絡していたように三人一組の班を作るわけだが・・・既にそれは決まっているんだなこれが。」

「はあ!？」

「聞いてたのと違うよ先生！」

「サスケ君となりたいのに!!」

「ああ、静かにしろ！ええ、これは三人一組の成績が均等になるようにこつちで調整したものだから文句は言わないように。」

「横暴だあ!!」

「何で俺らで決めちゃ駄目なんだよ!!」

等々口々に文句を言う周りの奴ら。こいつら忍者になる気ホントにあんのか？これがどんなに大切な事か理解してねえとか・・・もう一回アカデミーやり直した方がいいんじゃないかねえか？

「うるさあああいつ！文句は受け付けんっ！それじゃあ、今から班を言っていくからちゃんと聞くように。ああ、それから出来た班には上忍が一人担当として付くからそのつもりで。」

原作だと成績トップのサクラ、実技トップで成績優秀なサスケ、ん

でドベなナルト、この三人が班になった。しかし、俺はドベって言われているが、筆記試験とか実技試験では中間くらいの成績を出している。試験結果が張り出されない事から俺はそうしていた。通常の座学、実技ではヘマをしていたから皆には気付かれていないだけだ。

だから、この班決めをどうなるか気にはなっている。もし俺が知ってるのじゃなくなったら面白いしな。

「次、第七班っ」

おっと、次だな。原作じゃナルト、サクラ、サスケ、カカシの班の番号だ。さあ、どうなるか……

「春野サクラ、うちはサスケ、うずまきナルトだ。そしてこの班の担当上忍は、はたけカカシさんだ。」

ありや……成績だけで見たら俺ってキバとチョウジには勝ってる筈なんだが……まあいいか、サスケと話しをする機会を得たと思えば、この班決めには文句はない。サクラは……どうでもいいな。勝手にサスケ君好き好き言ってる。

「やったあっ!!!」

(ナルトがいるけど、サスケ君と一緒にになったから全然良いつ！寧

るOKよ！しゃくんなるお〜！）

「……………フンっ」

（ドベとこのウザい女か。俺の脚を引っ張るようなら……………）

横目で二人を見てみると、考えてる事が顔に出ているせいで分かってしまう。ちよっとは隠せよ忍者なら。特にサクラ、お前は酷過ぎる。

ちなみに、シカマル、チヨウジ、いのが第十班。キバ、シノ、ヒナタが第八班。つまり、結局班決めは原作通りになったって事だ。

班をイルカ先生が全て言い終わり、最後に「担当上忍が来るまでここで待っているように。」と言い残して教室を出て行ってしまった。イルカ先生は昨日の怪我があるからなあ。後で傷薬持って行ってあげるか。

俺がイルカ先生が出て行ったドアの方を見ていると、イルカ先生が居なくなったからか再び、あの喧騒に戻る。

決まった班で話す奴ら、一緒の班になれなくて悲しむ奴ら、一緒の班じゃなく違う班の奴と話す奴ら、等々思い思いに過ごしている。まじで五月蠅えなこいつら……………もうガキじゃねえんだぞ……………いや、12歳って正真正銘ガキだったな、そう言えば……………

「ナルト、お前・・・大丈夫か？」

「ん？シカマルか。多分・・・きっと・・・おそらく・・・大丈夫だ。」

「今回はっかりは、お前に同情するぜ・・・ナルト。って、事でヒナタの事は俺に任せとけっ。」

「キバ、あんたうっさい。ナルトお、イルカ先生に班を変えてくれるように言いに行こうよ！ね？」

「い、いのちゃん流石にそれは出来ないんじゃないかな・・・  
でも、ナルト君と一緒にたかったな・・・」

「バリボリ・・・むしゃこらむしゃこら・・・」

「・・・」

俺は、俺の席の近くに座っていたシカマル達と話している。こいつらと、こうやってアカデミーで駄弁るのもこれで終わりだと思えば、さっきまでの考えが飛んで行くんだから不思議だ。



ヒナタの言った後半のところは俺以外には気付かれてないみたいだ。ぼぼそぼそってなってたし、当然って言えばそうだが・・・ここに本人がいるんだから、幾ら小声でも言わない方がいいぞヒナタ。・・・でもま、嬉しいけどな。俺と一緒に班になりたいと思ってくれるんだから。

シカマル達と話しながら、後ろのサスケとサクラの話しを聞く。一緒の班になるんだから今から少しでも二人の情報は知っておきたいからな。まあ、話してという程のもんじゃないみたいだが・・・サクラがサスケに一方的に話してるだけだからな。会話が成立しないのって辛い筈だけど・・・恋する女は強いっていう事か？サクラ、可哀想な子だ・・・

「いの、ヒナタの言う通りそれは無理だ。それに、この班の組み合わせにはちゃんとした理由があるんだぞ。」

「何よ、その理由って？」

「ナルトの言っている事は正論だ。」

「シノ君？」

「ああ、めんどくせえが、こいつは俺達のバランスをちゃんと計算している班わりだって事だ。だから、お前がナルトと一緒に班になりたいて我儘言っても、無理って事だ。分かったか、いの？」

「ちよっ！シカマル！！何言ってるのよ！！！」

顔を真っ赤にするのと、それを見て肩を竦めるシカマル。ヒナタはいのと同じ事を思っていたからか、罰の悪そうな顔をして指と指を合わせている。

シノとシカマルが気付いてたのは当然だな。このクラスNo.2のシノと、普段は「めんどくせえ〜」が口癖のIQ200のシカマルだしな。他の奴らは気付いてなさそうだが・・・ま、友達には優しい俺はアカデミーに戻れとか酷い事は言わない。

「まあいいじゃねえか。これが今生の別れってわけじゃねえし、会おうと思えば会えるんだぜ？」

キバもたまには良い事を言う。原作でも中忍試験の時に再会していたし、任務がない日とかにも会えると考えるのが普通だしな。

「第十班、集まれ！」

俺らがそんな事を話していたら、渋くてちょっとカッコいいおっさんの声がした。んで、声のした方を見て見ると、髭を生やした中年くらいの人がタバコを啜えながら、ドアに腕を片寄せながら教室の中にいる俺達を見ている姿が目に入った。室内で、しかも学校の教室の前でタバコを啜えたままとか……流石だな、あの人は。

その声に、シカマルといのがめんどくさそうに、チヨウジが……ポテチ6袋目突入か……立ちあがり、中年くらいの人のところに渋々歩いて行った。

「俺がお前達の担当になった猿飛アスマだ。場所を移動するから、何か荷物あんなら持ってこい。」

アスマか……生で見ると渋くてカッコいいな……俺がそう思っている間に三人はアスマにそう言われ、荷物が無いにも関わらず俺達のところに来た。

「担当が来たつばいから先に行くわ。ナルト、お前はやればやる奴だ。ま、お互い頑張ろうぜ。んじゃ、お前らもまたな。」

「ナルト、後で良い物上げるから楽しみにしてなさい。あんた達もまたね。」

「行ってくるね。むしゃら……」

三人はそんな事を言って、教室から出て行きやがった。友達っていいよな。こいつらといると常にそう感じる。

しかし、いのが言ってた良い物って何だ？まあ、くれるってんなら楽しみにしとくか。

「い、行っちゃったね、いのちゃん達。」

「だな。ま、あいつらはマジでやったら強いし、大丈夫だろ。連携もおじさん達みたいに上手いな。てか、俺らの上忍はどんな奴なんだろうなあ。シノはどんな奴が良いと思っつてばよ？」

「強い者ならば誰でも構わない。何故ならば、俺達がより強くなるために必要だからだ。」

「俺もそうだぜ！やっぱり強くなりてえしよ！！よし、強い奴来い！！！！」

ワンワンッ

原作を知ってるから誰が担当とか分かってるし……何よりさっ

キイルカ先生が担当上忍の名前言ってたから絶対そうだ。

でもまあ、既に俺ってばカカシより強い筈だから、強い弱いはどうでもいいな。だが、そこに人格破綻つてのがあると変わってくる。大蛇丸とかが良い例だ。あいつが担当だったっていうアンコさんが凄く可哀想に思えたし、アンコさんの苦しみを取り除ける奴がいたら、早くアンコさんを嫁にもらえっ！と前世で思ったのが今では懐かしい。

それから数分後、ヒナタ達の担当上忍、紅さんがやって来て三人を連れて行った。んで、三人も、

「へへっ、行ってくるぜ。ナルトお、俺は絶対お前より強くなってくるぜ。だから、後で勝負だ！」

「ナルト、シカマルも言っていたがお前は出来る奴だ。それも、本来なら俺などが勝てない程に。だから、俺も強くなってくる。キバと同じ時でなくて構わない。俺もお前と勝負がしたい。……ではな。」

おいおい……シノって何か不思議能力でも使えたのか？何で俺の実力知ってたんだよ……まあ、こつからは俺も徐々に実力を出していくつもりだし、いいかな。んでヒナタはというと、最後までモジモジしていたが、意を決した？のか分かんねえけど、二人が行った後に小さい声でこう言った。それでも小さい声なんだなヒ

ナタ。

「ナルト君、私頑張るね。いのちゃんみたいに前に出れないけど、いのちゃんに負けなくらい強くなるね。そうしたら……私、私……」

最後の何かは、ヒナタにとっても大事で、恥ずかしくて、勇気が必要な事なんだと思う。目は潤み、顔が今まで見たことがないくらい真っ赤になっているからそれが分かる。だから俺は、その背を少しだけ押してやる事にした。

「頑張れヒナタ。最後まで俺は聞いてるから。」

「……うんっ。ナルト君に伝えたいことが……あるの。だから私が自分で強くなったって思ったら……その時は……その時は、二人だけで会って欲しい、です。」

ヒナタ、お前は自分じゃ気付いてないけど強くなってる。原作のヒナタがそこまで言ったのって、もっと先だったからな。お前は、原作の時より強くなる。それは俺が保障する。

「分かったってばよ。俺もヒナタに負けなくらい頑張るからな。」

「うんっ。」

最後にいっぱいの笑顔を見せてヒナタは、キバ達と出て行った。

はぁ………ヒナタの気持ち、すげえ嬉しい。こんな俺を好きになっってくれたんだ、大事にして上げたい。………でも、いの。あいつの事も考えると直ぐには答えは出せない。………  
・俺も強くなるう。そうだ、今はそれだけ考える事にしよう。答えはそれからだっ！

『ナルト、お前も色々大変なのだな。』

九尾い………俺もっと強くなるよ。

で、数時間待ちちっぱなしの俺含め同じ第七班の二人。サスケは貧乏揺すりをしまくってるし、正直止めて欲しい。それ、すんげえ気になる………

サクラはサスケが不機嫌なのを悟ったのか、不機嫌なオーラを出しつつ俺を睨んでくる。いや、俺何もしてねえし。こっち向くなお前。

俺は暇な時間を有効活用するために術の開発？みたいな事をさつきからやっている。いやな、ナルトが出来るだろう術は父さんと一緒に修行してる時に粗方出来るようになった。俺ってというかナルトの性質は風で九尾が火の性質ってことで火も使える。というか、全部使えるようには一応はなったんだが、やっぱり自分の性質は変えられない。てことで、その二つに至っては『最強』になった。

これは九尾と父さんのお墨付きだから間違いない。父さんと組手をする時には、風と火は使わずに水か土、雷、只の忍術、幻術、体術を使う。だから、徐々に水と土、雷も強くなってるんだよなあ……。それも影がつく奴ら並みに。だが、これでもまだ最強じゃないんだってよ。最強ってのは尾獣にダメージを与えて、倒せるレベルらしい。んで、風と火でやったら倒せるみたいだ尾獣を。だって、父さんと九尾が容赦ないんだもん。



んで、俺が今やってるのが水の性質変化に形態変化の螺旋丸を組み合わせたモノだ。それも手の平大ではなく、人差し指大。チャクラコントロールに至っては普通の螺旋丸より難しいのはもう分かりきっている事。まあ、俺にしたらめんどくさいなって思う程度だが。だってよ、火とか風なら五本の指全部にコレ作れるしな。イの大冒険って漫画に出てきた敵が使ってた技なんだけど、古いから分かんないか？あれってメラゾーマ五発分を一気に放てる技で、終盤でも何気に使える技。だからあれを真似て使ってみたんだが、父さんに禁術認定された。

四代目火影が言うんだから、あれってめっさ危ないんだなあって思う。まあ、修行には都合がいいから使ってるがな。もちろん父さんには内緒。九尾は俺の相棒であり一心同体の共犯なので、もちろん俺の見方。

てか、そろそろ来ないかな力カシ。気付いたら中指、薬指にも同じモノを作っていた。慣れてきたから体が勝手に作っただと思う。もうちょいしたら水もクリアだな。次は土でやってみるか……

「ああ〜！遅いつ、遅すぎるっ！何やってんのよ私達の担当上忍は！もう他の班の子達は帰ったってのに！」

うわぁ……サクラのヒステリーってウザ……サスケはサクラの事をウザいって目で見ているし間違いないくあいつも俺と同じ事思ってる。貧乏揺すりに合わせて指でコツコツ机を叩いてるから分かる。あれって、自分がやってる分には良いけど、他人がやってる

とウザいよな？まさにその気持ちを俺は味わってる最中。

「ナルト！あんたちよつと探してきなさいよ！暇でしょー！」

おいおい、俺が暇ならお前は何だっただ？はあ……まあいいか、この修行はいいが新技思いつかねえし。お？親指に出来たな。後は小指だけか……

俺は席を立ち、ドアの方に向かう。そういや原作でナルトが黒板消しのトラップ作ってたような……ま、あんな馬鹿な事を俺はしない。何より時間の無駄だ。

ドアを開き、教室を出て廊下を歩いていると、片手に本を持ち銀髪をツンツンに立たせ、顔の半分を布で隠した遅刻魔上忍、俺らの担当、はたけカカシが歩いて来るのが見えた。

「んん？お前は俺の担当する班の下忍じゃないか。どうしてここにいるんだ？教室にいろって言われなかったか？」

こいつは……いや、こいつの後悔も分からなくないから何も言つまい。

「あんたが遅いから探しに来たんだってばよ。」

四本までできた水遁・螺旋丸指バージョンを解除し、カカシの後ろに付き従い教室に向かう。あいつら怒ってんだろうなあ……………

そして、教室のドアの前に来た俺とカカシ。ん？ドアの上に黒板消し？

と、俺が疑問に思っている間にカカシが教室のドアを開けると黒板消しのトラップに引っ掛かってしまった。

ポフ……………

一瞬時間が止まったがカカシの一言で時間が動き出した。

「うーん……………お前たちの第一印象は……………嫌いだ。」

はあ……………サクラがやったんだと思うけど。カカシ、あんたも遅刻しないで来い。

次回

「この二つの鈴をとったやつが下忍として本当に認められ、鈴を取れないものがアカデミーに戻される。」

「やってやるわよっ!」

「ふんっ!」

「はぁ……………」

では次回も是非是非。。。。。。。。。。。

班決めだつてばよっ！（後書き）

第五話でした。

今回はちよつと時間が開いてしまいすみません。今日やつとアパートの方に帰つて来たところで、パソコンがやつと自由に使えるという事で急いで書き上げました。

もうちよつとイルカ先生だしたかった。。。。。

カカシやつとでた。。。。。

サクラ何でこんなに嫌な子に???????

等々自分自身びっくりな仕上がりになり、皆さまも戸惑つと思いません。

何か思つたり、感じたりしたら何でもいいんで感想やレビューで私に言つてくださいな。

それを糧にして頑張つていきたいと思ひますので。

最後に一言

ヒナタカワゆす  
W  
W  
W  
W  
W

初めての任務だつてばよっ！

ところ変わって今俺がいる所は、アカデミーのある一室のベランダ？みたいなどこ。簡単に言っちまうと原作で第七班が最初のミーティングをしたとこだ。

カカシがトラップに引っ掛かった後、衝撃的な一言を言った事で、まずい空気が流れている。今現在……

「あゝまずは自己紹介からしてもらおうかな。」

「あ……」

「はい、桃色髪の君。」

「どんな事を言えがいいんですか？」

「サクラは内なる自分を出さないように、必死に笑顔を作っているが引き攣ってればそれも意味はない。てか、自己紹介なんだから適当に言っとけばいいじゃねえか。」

「そりゃあ好きなモノ、嫌いなモノ。将来の夢とか趣味とか……ま、そんなのだ。」

「……まずは、あんたからするんだな。俺はあんなチャチな畏れに引掛かるような奴が、俺の上に立つ事を許したくないんでな。」

「そうよ、そうよ。私達すっすっすっすっごく待ったんだからっ！」

「こんなクダリあったなあ……懐かしい。本来なら俺が何か言うんだろうけど、サクラの言を手助けするようなことはしたくないから黙止する。」

「ああ、俺か？俺の名前は、はたけ力カシ。好き嫌いをお前らに教える気はない！将来は……って、俺が将来言ってもなあ。趣味は……」



・・・色々だ。んじゃ、次はお前らだ。右から順に・・・」

結局分かったのって名前だけじゃない？とかサクラがサスケに言うてるが、そんなのは無視。んで、カカシから見て右が俺・・・・・・。って俺からかよ！ついでに言うが、俺の隣がサクラでその横がサスケだ。

「俺はうずまきナルト。好きなモノは友達、イルカ先生、一楽のラーメン。嫌いなモノは見下される事。友達を傷つけるもの全て。趣味は修行。んで、将来はイルカ先生みたいな忍者になることだってばよ。」

「あれナルト、あんた火影になるって五月蠅かったじゃない。」

「火影なんかより大事なことなんだよ。」

はじめて会話しちまった。なんか変な感じだな。サクラが自己紹介を始めている時に、カカシの方を見てみたらなんか呆れてやんの。まあ、サスケ君好き好き言ってるだけなんだし、そりゃ、ああなるわな。

サクラの自己紹介を聞き流して、次はサスケの番。この時ばかりは俺もちゃんと聞く。だって、あれ言う時のサスケってカッコいいし。

「名はうちはサスケ。嫌いなモノならたくさんあるが、好きなモノは別にない。それから……夢なんて言葉で終わらす気はないが……野望はある！一族の復興と……」

瞳に宿るのは漆黒の焰。これこれっ！原作に忠実な言葉。その一つがサスケという復讐鬼を後に作り出すんだなあとか思ったり。でも、俺がそんな事させません。大蛇丸は中忍試験の時にフルぼっこにしてやります。

「ある男を必ず、殺すことだ。」

カッコいいっ！とか思ってたんだろサクラ、俺もそう思うけどその目をハートにすんのは止める。実際に見ると気持ち悪いから。

するとパンパンと音がした。

「よし、自己紹介はそこまでだ。明日から任務やるぞ。」

任務という言葉に、俺以外の二人が敏感に反応した。俺も怪しまれない程度に期待してるっていう顔すっかな。

俺は楽しみだっという笑顔で、サスケは歪んだ笑みを浮かべて、サ

クラは緊張した面持ちでそれぞれカカシを見る。

俺らを見下ろすカカシは、にやりと笑う。うわぁ……嫌な笑  
みい〜〜

「まずはこの四人だけである任務をやる。サバイバル演習だ」

本来のサバイバル演習は、森や山などで生き残るための練習だ。気配を消すことから始め、敵を見つけるための索敵、または敵から逃げ切る遁術の修練、果てには食べられる植物の学習などいろいろあるんだけど、全部アカデミーでやってきたし、今回のサバイバルはこれじゃないと俺は知っている。

「何で任務で演習やんのよ？演習ならアカデミーでさんざんやったわよー！」

さっそく文句がサクラから出た。アカデミーを卒業したから調子乗ってんだなサクラの奴。こりゃ、原作同様酷いもんになりそうだ・・・

俺が一人ため息を吐くが、カカシが淡々と俺達に言う。

「相手は俺だが、ただの演習じゃない。」

「どんな演習なのよ。」

サクラは手を上げて聞く。おお、優等生みたいなやり方。流石成績「だけ」は優秀な事はあるな。んで、カカシは答えなくてくつくと笑っただけ。楽しそうだなカカシ。

それに我慢できなくなったんだな。サクラが「ちよつと！ 何がおかしいのよ、先生」と言う。でも、カカシは笑うのを止めない。俺もカカシの立場なら笑うんだろうなあ……。でも、流石に俺もイライラしてきた。話が進まねえし。

「いや……。ただな、俺がこれ言ったらお前ら絶対引くから。」

やっとカカシが笑うのを止めて言った。そうそう、早く先に進みましょう。

「引かないわよっ！そこらの人と一緒にしないで！」  
(ぶざけんじゃないわよっ。私が引く訳ないじゃない！)

サクラ、お前の内なる自分の声が俺には聞こえるぞ。

「卒業生二十七名中、下忍と認められるのはわずか九名。残り十八名はアカデミーへ戻される。この演習は脱落率66%の超難関テストだ。」

「ははは、サスケとサクラびっくりしてる。そりゃあびっくりするよなあ。俺も原作知らずにいたら絶対びっくりしてたと思う。」

「卒業試験やったじゃないっ！あれはなんだったの！」

「そりゃ、下忍になる可能性のある奴を選抜するためだろ？」

何言ってるんだお前。っていう顔でサクラを見るカカシ。それに、ふざけんじやないわよ！と言ってるサクラ。だけどそれを無視するカカシ。サスケも無言でカカシの事を睨んでる。………なんてカオスな………

「とにかく、明日は演習場でお前らの合否を判断する。忍び道具一式持って来い。それと朝飯は抜いて来い……吐くぞ。」

二人の鋭い視線を受け流しながら、腰に吊るしたポーチの中からプリントを取り出すと、全員に配っていくカカシ。俺は皆を優しい目で見ています。だって皆子供みたいなんだもん。

(落ちてたまるかつ！)

おお、なんか二人の方から変なオーラが出てる気がする。俺は渡されたプリントを上から下まで見て行く。集合時間は8時か。弁当はちゃんと持って行って、朝飯はちゃんと食べよつと。

「詳しいことはプリントに書いておいたから。明日は遅れて来ないよーに。」

どの口が言うんだよ、とは俺のセリフ。だってカカシめっちゃ遅れてくるじゃん。

こうしてサバイバル演習という課題を与えられた俺たちは、解散した。

解散して直ぐに家へと帰って来た俺。今は、母さんが作ってくれたご飯を食べてる。今日はオムライスだった。なんで忍者の時代にこんな料理出てくんだろ?とか、色々変だなって思った事は数知れないけど、ナルトの世界だもんなって思うだけで解決した。だって漫画だし。

『担当の人、カカシ君になっただって本当ナルト?』

「本当だつてばよ母さん。銀髪ツンツンに立てて、覆面した変な人だっただつてばよ。あと、すんげえ遅刻魔。」

『ははは、カカシがナルトの担当かあ。あいつが担当上忍になるなんて、俺達親子はあいつと縁があるんだな。』

「父さんがあの人の担当だったってのが俺からしたらびっくりだつてばよ。」

『ミナトの部下だったんだよねえ。何か年取ったね私達つてば。』

『年取ったつて言うか、死んじゃったんだけどね。』

「二人は死んでなんかいないって。今俺とこうやっている事がその証拠だ。」

そうなんだ。二人が死んだなんて俺は思っていない。だってこうやって話して、一緒にご飯食べて、修行して、死んだらどれも出来ないからな。

『『ありがとう、ナルト。』』

笑顔な二人を見ると、原作のナルトに悪いけど俺は嬉しくて自然と笑顔で二人を見ていた。



それから、父さんと母さんといっぱい話して、明日の準備もそこそこベットのに入った。

さて明日はどうやって鈴を取るのか。鈴を取る事は決定事項だけど、それをやる過程を考える。下手に高度な術を使ったら怪しまれる事は必然。中忍の真ん中位の実力で、且つカカシの度肝を抜く術・・・  
．．．．．思い  
つかねえ。

確か原作じゃナルトは多重影分身使ってたし、サスケは火遁系の術使ってた筈。なら、多重影分身、風遁、火遁、体術、後は基本の忍術くらいかな使えるの。いや、性質変化の術は風遁か火遁のどっちかにしないと駄目だろうな、下忍だし。それから、体術もある程度加減しなきゃ駄目か。

うーん・・・。。。めんどくせえ。アカデミー時代はチャクラを小指の先くらいにして、コントロールを出鱈目にしてたから失敗出来てたけど、今回は成功させる事は当然として、体に流すチャクラをどの位にするかが問題だな。父さんの九尾の二人と組手をする時のチャクラでやつたらカカシ死んじやうかもしれないしな  
あ・・・。。。あ

まあ、いいや。寝て起きてあっちに行つてから考えよ。掛け布団を頭まで被る。そうして、俺は眠りについた。



サバイバル演習場、四年前にヒナタと組んでやった場所ではなく、三本の丸太が地面に刺さっている場所。そこに俺、サスケ、サクラの三人がいるが、カカシの姿はない。

現在時刻09:32・・・ポケットに入れていた、昨日カカシから配られたプリントを取り出してもう一度見てみると、集合時間は8:00。完全な遅刻である。

あのやろう・・・原作で遅刻してくるのは知ってたけど、実際に待ってみると半端ないくらいムカつく。慰霊碑を見て来るのはいいが、少しは待たせている人達の事を考えてもいいと思う。

「おつつつつそおおおおいっ！何が、明日は遅れて来ないよーに、よ。本人が遅れてりゃ世話ないわよっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

サクラ、五月蠅い。そんなのここにいる全員が思ってるっての。サスケはここに来た時から無言。お前は少しは話せ。

はあ………昼寝でもしてるか。良い感じに木陰になっている場所にゴロンっと横になった。

「ちょっとナルト、何寝ようとしてるのよっ。先生が来るかもしれないでしょっ。」

「先生が来たら起きるってばよぉ」

サクラにそう言って目を閉じる。サクラがまだなんか言ってたみたいだけど、それを完全に無視する。まじで五月蠅いんだよなあ……デコリんの奴。

それから約1時間後になって、カカシが来た。

「いやぁ〜諸君おはよう。」

おはようじゃねえよ。もう、こんにちはだ。

「やっぱり遅刻かよ………」

「早く来るんじゃないかったあ……………」

サスケとサクラは嫌みを含んだ疲れた声で言うが、カカシはどこ吹く風だ。今のうちに起きてようかな。

そして、丸太の傍にどこかから取り出した目覚まし時計を置き、「よし、12時セット完了」と言っただけで俺達に向き直った。

怪訝な顔をしているサスケとサクラ。その時俺は欠伸を一つ。すると、カカシがごそごととポーチから新たにリンリンと音が鳴るモノを取り出した。原作通り二つの鈴を。

「ここに鈴が二つある。これを俺から昼までに奪い取ることが課題だ。もし昼までに俺から鈴を奪えなかった奴は昼飯抜き！あの丸太に縛り付けた上で、目の前で俺が弁当食うから。」

沈黙。正しくは、俺だけ「成程」って答えてた。ゲームみたいな感覚だなんて思ってたさ。

(朝飯食うなってそういうことだったのね(か)……………)

二人の腹からぐうぐうううううと音がした。ぷぷぷ、サクラ顔真っ赤にしてやんの。サスケも恥ずかしそうだし。

育ち盛りの年齢であるサスケやサクラにとって空腹とは大敵、もちろん俺もだけど、俺はちゃんと朝ご飯食べてきたから大丈夫。でも、そんな過酷なことを要求するカカシが二人には鬼のように見えてるぞ絶対。

「鈴は一人一つでいい。二つしかないから、必然的に一人が丸太行きになる。」

カカシはサバイバル演習の説明を続ける。

「で！　鈴を取れない奴は任務失敗ってことで失格。つまり、この中で最低でも一人は学校へ戻ってもらうことになるわけだ。手裏剣を使ってもいいぞ。俺を殺すつもりで来ないと取れないからな。」

「でも、危ないわよ。先生！」

「仮にも上忍なんだから下忍の手裏剣なんか喰らわないって。喰らったらそいつはそこまでのことだったってことだ。そうだと、カカシ先生？」

「その通り！よくわかってるねえ。」

俺の言葉にカカシはにっこりと笑って返事する。その笑顔をびっくりしたもんにしてやるから、覚悟しろよカカシ。

てかさ、そもそも下忍に殺されるような上忍がいるわけねえじゃん。仮にいたとしても、そんな奴に上忍の任務がこなせる筈がねえし、死んだほうが里のためって奴だな。そんな事も分かんないのかよこのデコわ。

ま、んな事考えてても時間もったいねえし、先に手を出すかな。右手を手裏剣が入ったホルスターに持っていき、一枚投げる動作も小さく、だがカカシが反応出来る早さで投げる。

それを、しっかりとクナイで弾き、俺を敵しい目で見てくるカカシ。あらら、警戒されたかな？

「なかなか早い手裏剣投げるね。でも、まだ俺スタートって言うてないだろ。」

「あはは、悪いってばよ。でも、それを捌けるなんて流石上忍だつてばよ。」

悪びれもせず笑う俺に、もう一度敵しい目を向けるカカシ。だけど、俺以外の二人を見るとそれをおさめた。仕方ないよな、サクラは何

がどうしたのって顔してるし、サスケは悔しそうな顔してるんだから。

（あのドベが何かした？いや、俺の目には何も見えなかった。それをあの上忍はクナイで防いだのか？くそっ！）

（え？何何？ナルトが笑ってるし、先生が怒ってる？もっつ意味分かんないってばっ！）

「ふう……………まあ、いい。それじゃ、演習を始めるぞ。」

カカシのその言葉で、慌てていた心を引き締めるサクラ、悔しさをカカシにぶつける事を決めるサスケ、どう料理しようって考える俺。

「スタート!!」

第七班の初めての任務が始まった。



次回

「これでもまだ取れないか。」

「こりゃ本読んでる暇ないかな。」

「あれがナルトなの!？」

「うち、ドグの野郎……」



初めての任務だってばよっ！（後書き）

はい第六話でした。

この前開いてしまったのを考えて連続更新です。

いやあ、やっと鈴鳥合戦ですね。サクラとサスケどうしよう・・・  
・サクラはなんかここで空気扱いですよね原作で。だから、私も  
W W W W W W W

ヒナタがしばらく出てきません。はぁ・・・・・・ヒナタ書きた  
いよおとが思ってみたりW W W

まあ、その変わり白と桃地をいっぱい活躍させよっかなW W

誤字・脱字みつけたら感想でもレビューでもいいのでご連絡くださ  
いな。

ではまた。。。。。。

鈴取り合戦だつてばよっ！

サバイバル演習が始まって10分。俺は森の中に身を隠して、下に  
いる遅刻魔を分析していた。奴の戦闘能力は『ある意味』未知数。  
わかつていることは、少なくともガチで戦ったら『カカシ』が死ん  
じゃうということ。鈴がギリギリ取れる位の方で行こうと思つのは  
昨日の夜と一緒。

忍具を用いての戦術はどうだろう。下忍には目に写らない速度で動  
くことが出来るカカシに、当てることができる奴は後々警戒される  
か？いや、まぐれ当たりを狙っているように見せかけて……………  
・それも忍具の無駄使いだな。なら、どうするか……………

この試験の本当の意味に基づいた戦術は？あいつらが俺の言う通り

に動いてくれるわけがないからこれも駄目だな。・・・反則だがこの試験。下手に実力付けたらこうもメンドくさくなるとは。でも、鈴取りたいしなあ。・・・。

自分にはカカシを倒せる実力がある。もし忍術、体術、幻術を写輪眼でコピーされたとしても勝てる自信はある。だけど、そうなら暗部引き連れて俺を殺しに来るかもしれないからなあ。・・・。主「根」の奴らとか。ッ！違う違うっ！！思考が変になった。今考えなきゃいけないのは、カカシに如何にして警戒されないように鈴を取るかだ。

うーん。・・・。サスケは、まあ体術や忍術に秀でてるだろう、アカデミー生として見たらだが。サクラは座学などの知識はあるが、ここでは何の意味も持たない。この二人を合わせて俺を足した位で行こうかな。よし！決まった。後は自分の持ち駒を考えるか。

多重影分身はやるとして、忍具、サスケ並の体術、サクラの頭脳、後は風遁くらいかな。見てろよ。・・・カカシ！！

その視線の先にいるのは原作通り『イチヤイチャバラダイス』っていう十八禁指定されている本を読むカカシの姿。にやにや笑ってんじゃねえぞカカシ！マスクの下で変態の顔になってんのはわかってんだ！

絶対に鈴取って、それからちょっと本気の蹴りお見舞いしてやる！

「遅刻魔、勝負だ！」

俺は隠れていた木の上から飛び降りて、カカシの前に降り立った。

「お前、ホントに忍者になる気ある？」

そのカカシの言葉に俺は激しく同意した。少し離れた草むらに隠れながらカカシの動向を観察していたが、突然ドベがカカシに対して勝負を挑んだ。

手にはクナイを持っているがそれだけ。起爆札を巻きつけるとか、ワイヤーを付けているとかそんなくらいはしろっ！

ドベ、落ちこぼれと言われて馬鹿にされているあいつが何をしよう  
と俺には関係ないが、この演習が始まる前に見せたあれは何だった  
んだ？俺が（悔しいが・・・）見えない早さで何かをカカシに投げ  
た事はドベとカカシの言動で分かったが、ドベが出来る動作をあれ  
は超えていなかったか？また、卒業試験の時から時折見せるあの落  
ち着きは？つち、何で俺があいつの事を意識しなくちゃなんねえん  
だ！

と、俺が考えていると二人が動いた。

風がドベを中心に吹き荒れる。あれは忍術か？

「忍者になる気はあるけど、あんたも少しは真面目にやろうよ。その本、読んだままとかふざけ過ぎだろ？」

「ん？これは俺とお前たちとのハンデだ。こうでもしないと鈴取れないでしょお前達。」

ドベの言う通りだ。いくら上忍だからって嘗めるのもいい加減にしろ！

「ハンデ、か。なら、そのまま本読んでていいけど、怪我してもしらねえから。」

軽い調子で言うドベだが、目が笑っていない……あいつを中心に吹いていた風が強まった事から、ムカついている事が分かる。

ドベはクナイを逆手に構えたまま、大きく振りかぶりカカシの懐に潜り込んだ瞬間、薙いだ。あの早さは俺と同じか！？俺が知っているドベの動きじゃない！

だが、それもあっさりとカカシの左手で押さえられる。あれを抑えられるか。だが、ドベの動きは止まらない。クナイを持つカカシに掴まれた右手を基点に回転し、拘束を解くと左肘打ちを繰り出した。

悔しいがあれは良い動きだ。左脇腹に吸い込まれるようにドベの肘は当たり、カカシは苦い顔を浮かべる。カカシが左手で裏拳を放つ



がドベはとつくに離脱していた。

そして、離脱したドベはクナイをカカシに投擲した。今度は俺の目にも見えた。動きはコンパクトに、威力は十二分にある投擲動作。しかし、俺のそれより遥かに高いそれは、カカシに当たる事はなかった。

「風遁のチャクラを纏ったクナイとか、当たったら俺死んじゃうんだけど。」

「あんなら避けると思ったから。それに、その本はもういいの？」

ドベが指す所にあるのは、真ん中に鋭利なモノで斬り裂かれたような痕があるカカシが読んでいた本だった。あれを狙ったってのか？確かにあの本は俺も燃やしたかったが、ドベのクナイがないのは何故だ？

「性質変化を使えるとは、アカデミーからの資料にはなかったぞ。」

「資料？そんなもんあてになるかよ。俺はアカデミーん時より強いから。」

性質変化？何の事だ？それに資料ってのは・・・俺達のことだよ

な。つくそ、なら何を得意としているかなんてバレバレじゃねえか  
っ！だが、ドベはなんて言った？アカデミーの時より強いだと？昨  
日今日で実力が変わるわけないが、それを頷ける強さが今のあいつ  
にはある……………っち、認めない訳にはいかねえか。

何何なに？どういう事？『あの』ナルトが『あの』上忍と互角？？  
？それにと、私は後ろを振り返る。そこには岩の奥に刺さっている

筈のナルトが投げたクナイがある。

カカシ先生が避けたと思ったら、私が隠れていた場所を何かが通過していった。何だろう？って振りかえって見てみたら後ろにあった大きな岩の中心に亀裂が合って、亀裂の奥にクナイの柄が見えたから間違いないって思った。これは、ナルトが投げたクナイだって。でも、こんな威力………私は信じられなくてまた振り返った。

そしたら、ナルトとカカシ先生がいる所から、私がいるここまでの途中の数本の木に何かに貫かれた痕があった。これって………  
………考えたら分かる事、でもそれをしたのが万年ドベ、落ちこぼれのナルトっていうのが信じられない。

そうだ！サスケ君ならこれも分かるかも。よし、やっぱりサスケ君を探そう。そして、サスケ君と一緒に合格よ！しゃくんなるくっ！！

はたけカカシこと俺は驚きの連続だった。火影様にもらった資料の中に先生の息子がいた事、その子を俺が担当する事、アカデミー始まって以来の落ちこぼれである事、そして今俺を本気にさせた事だ。

資料をもらう時までには、担当なんてめんどくさい事しないで暗部に戻って任務したいなとか思っていたが、先生の息子の写真を見たらそれも吹き飛んだ。先生と瓜二つな顔、それにツンツンの金髪、こっちをみて笑みを浮かべる表情、ああ本当に先生の息子だと感じた。

しかも、その息子を俺が担当できる。これには火影様に感謝しても

しきれない。この子は、九尾の器として里の皆に嫌われている事を俺は知っている。それを助けようと思いつても行動したが、どれも上手くいかなかった。だが、これからは違う。俺はこの子の傍にいる事が出来る。嬉しくなり資料を読んでいくとそれも変わっていった。

資料にあるのは、実技・忍術が共に最低、体術・座学が共に普通というものだった。これには俺も落胆した。先生のような天才忍者なのだろうと思っていたからだ。だが、俺が思っていた天才忍者は次の資料にあつた。うちはサスケだった。この少年も一族皆殺しに合いナルト同様悲しい思いをして育った。写真を見ると目に闇がある事に気付く。

春野サクラという少女は、座学で成績トップだが、実技が普通より下という頭脳派忍者だ。この三人が俺の担当か。嬉しくも複雑な感情を持ちながら次の日、この三人と俺は出会った。

そして、今現在演習をしている訳だが、目の前にいる少年は先生と同じ金髪を風に揺らしながら俺を見て来る。

俺に投げた手裏剣の時から何かおかしいとは思っていたが、それもさっきので確信した。こいつは自分の実力を隠している。それも、アカデミーの時から。

これには、内心嬉しさが溢れた。先生の息子はやはり天才だったの

だと。そして、俺を見てくる目はどうやって鈴を取ろうか考えている目だ。なら、俺も本気で取られないようにするだけだ。試験の事を忘れた訳ではないが、今のこの状況を楽しんでいる俺がいるのも事実だ。だから……………

「ナルト、これからは俺も本気だ。だから、お前も『手加減』しないで本気でこい！」

手裏剣を投げながらそう言う。下忍には決して避けられない速度の手裏剣は果たして、ナルトには当たらなかった。

「あちゃあ……………ばれちゃったのかあ。これ内緒にしといてくれる、先生？」

「この鈴を取れたら考えてやるよ。」

自分が笑っているのが分かる。こんなに楽しい組手は久しぶりだ。

「なら、大丈夫。鈴は取るから。」

ナルトはそう言うと、影分身を三体出した。さあ、ここから本当の勝負だ！

バレちゃまったなあ。まあ、鈴を取ったら内緒にしてくれるみたいだしいいか。それより、本気出せるって良い事だな。

制限がなくなつた事から考えて、体術は本気で忍術に至つては、父さんから禁術指定されてないモノ使つて、後はまあ臨機応変にうてとこかな。

サスケが見ている事は分かつてる。サクラはサスケを探しに右左つてか？ホント馬鹿だなあいつ。けどサスケがなあ……。変にプライドが高いからめんどくさい。でも、まあそれも後回し。今は、

### 影分身の術

カカシとの戦闘に集中だな。一応今の木ノ葉で火影に次ぐ実力の持ち主つて事だつたから、負ける気はしないけど油断もしない。

影分身に腰につけたポーチから両手で手裏剣を取り出し、3体同時に投擲する事を指示。そして、それを避けたカカシに影分身2体を特攻させる。体術は2体とも俺と同じ強さだからカカシも手古摺つてるみたいだな。でも、笑つてるのが不気味だ。

んじゃ、こつちはこつちで、忍術で追い込むかな。

### 土遁・土流槍



てな事を考えていたら、影分身がカカシにやられたみたいだ。確か同じ術で、原作のナルトもやられてたような……。んで、ニコニコ笑ってこっちに手裏剣とクナイを投擲してくるカカシ。しかも、ワイヤー付きで×になるように投げてきた。避けないとスライスチーズってか。ホント、退屈しないねえ！！

ピヨンと跳んでそれを避けると、そこには既に跳んでいたカカシがいて、そのまま体重を乗つけた踵落としをしてきた。これ喰らったら痛いだろうなあ。『喰らったら』だけだな。

ドコつと地面に叩きつけられた俺は、バフンつと白煙を出して体を丸太に変えた。変わり身の術って使える技だと思わね？まあ、やられる前に身代わりとして入れ替わらなきゃ駄目だけだよ。

んで、宙にいたカカシに俺は風遁で作ったチャクラ刀を五本投擲。媒介にしたのは木の枝だったり。

カカシもそれに気付いて変わり身の術で回避。まあ、カカシが移動したところにはもう1体の影分身がスタンばってるから……。・。・。・。・。・。お、蹴り飛ばされてこっちに来たな。

カカシも影分身しようとするけど、俺がそれを許す訳もなく体術で邪魔をする。

「つく！」

あははは。カカシの笑顔も崩れてきたな。俺との勝負を楽しんでたみたいだけど、防ぐだけになってるもんな今。でも手加減なしって言ったの自分だし。

螺旋丸を作ってカカシの後ろでスタンばってる影分身。そろそろ、お腹も減って来たしこんくらいで良いかな。それっ！！

右膝でカカシの顎をかち上げ、直ぐに腰を落として左の嘗底をカカシの腹にぶち当てると面白いように、後ろに吹き飛んだ。

そのまま螺旋丸を喰らったらさらに、面白かったんだけど、カカシは吹き飛んでいる時に瞬身の術で回避し、俺の影分身をクナイで斬り裂いた。

「螺旋丸まで………ホントにお前は面白いよナルト、でもまだ勝負は終わってないぞ。」

「いや、先生もう終わりだって。」

「何を言って……!!」

「あははは、うん。これ取ったからもう終わりだってばよ。」

俺はそう言って鈴をチリンチリンと鳴らした。

と、それと同じくして目覚まし時計のアラームが鳴り響いた。

時計が12:10を指し、俺達三人は丸太が三本立っている場所でカカシの前に座っている。まあ、俺は一人弁当を食べてるけど。お、このエビフライうめえっ。

サスケとサクラが、弁当を食べている俺を怨むように見て来るが、そんなの無視。二人は朝食を抜いているせいで腹の虫がグググ鳴っている。サクラに至っては「ダイエット中だから」という理由で昨晚のご飯も抜いているらしいが、俺には関係ない。

「おーおー、腹の虫が鳴ってるな。ところで、この演習についてだが……」

考え込むようにカカシは空を見上げ、視線を俺達（俺以外の二人へだが）へと戻した。顔には思いつきりの笑顔を張り付けて。

「ま、お前らはアカデミーに戻る必要もないな。」

二人はそれを聞き、一瞬呆けたがそれも次第に喜びへと変わった。なんでこいつら喜んでんだ？忍者辞めろって言われてんのに。

そして、カカシは笑顔から冷めた目で二人を見下ろした。

「うん、二人とも……忍者をやめろ。」

そりゃ、そうだ。何もしてないお前らが合格なら他の奴らは全員合格だったの。

ずっと笑ったままのカカシ。戦闘の時だつてどこかふざけていた態度だったカカシが、初めて怒気を見せている。これはカカシが、俺達を思って怒ってくれてるんだからありがたく聞いとけ。

「た、確かに、私とサスケ君は鈴を取れなかったわ。けど、やめろつてのは言いすぎじゃないっ!？」

「……はあ……お前ら二人とも、忍者になる資格のないガキだつてことだよ。」

サクラの抗議を一蹴する言葉に反応したのは、やっぱりサスケ。自分が侮辱されたのがムカついたんだな。

立ち上がるとクナイを逆手に持ち、カカシを襲う。この間、サスケの動きはサクラには見えていない。だが、それもカカシには効かないわな。

「サスケ君！」

サクラはサスケがカカシに踏みつけられるという光景を見て悲鳴のような声を上げた。五月蠅えから近くで騒ぐな。

「だからガキだってんだ。俺とナルトの戦闘を見てなかったのか？」

ぐりぐりと靴底をサスケの頬に押しつける。うはっ、カカシ先生なんて悪役っぷり。

「サスケ君を踏むなんてダメー！！」とサクラは叫ぶ。だが、その叫びは何の意味もなさずに、サスケは恥辱を受け続ける。何これ、俺も何かした方がいいの？ねえ？

カカシは心底呆れ果てたような、何も期待していない目をサクラと下にいるサスケに向けた。

「お前ら忍者舐めてんのか？何のために班ごとのチームに分けて

演習やってると思ってる。」

「え？どーゆーこと……？」

サクラの問いに、カカシはやれやれと首を振る。俺には、だから不合格なんだよ、とカカシが暗に言っているように感じる。

「つまり、お前らはこの試験の答えをまるで理解していない。」

「答え、だと？」

サスケの言葉にも同様に鋭い視線を向けるだけ。サスケ可哀想……

「そつだ。この試験の合否を判断する答えだ。」

「だから、さつきからそれが聞きたいんです！」

カカシにサクラが猛抗議するが、それもカカシには効かない。というか、効く効かないに関わらず、もうちょっと考えてからモノ言った方がいいぞサクラ。ほら、カカシがまたやれやれって首振ってる。

「それはチームワークだ。」

不可解。二人の顔にそれが張り付いている。はぁ………  
シカマル、キバ、チョウジ、シノ、お前らはちゃんと理解してるか？  
してるよな。だって仲良しで組になったんだもん。俺もお前達と成りたかったよ。

「全員で来れば鈴を取れたかもな。まあ、そこで弁当食ってる奴は別だが。」

おいおい、そこで俺に振る？カカシは俺にっこりと笑顔を見せて来る。

「なんで鈴が二つしかないのにチームワークなわけえ！？三人で鈴取ったとして、一人我慢しなきゃならないなんて、チームワークどころか仲間割れよ！」

まあ、普通に考えればそうだな。でも、俺たちは忍者だ。任務遂行をするためには誰かが犠牲になるかもしれない。でも、それをさせないためにどうするか考え、実行するのが本物の忍者だ。俺は父さんと母さんにこれだけは耳にタコが出来るくらい言われている。

「当たり前だ！これはわざと仲間割れをするように仕組んだ試験だ。」



「  
サクラが何を言っただこの人？って顔をしているが、カカシは続ける。」

「この仕組みれた試験内容の状況下でも、なお自分の利害に関係なくチームワークを優先できる者を選抜するのがこの試験の目的だ。」

これこそが里の上の奴らが求める人材だ。でも、カカシはまだ隠されたもう一つの答えを言っていない。

「それなのにお前らと来たら……」

カカシはそう言うと、サクラに視線を投げる。

「サクラ！お前はナルトが戦っているにも関わらず、それを見過ごした。最後まで俺に挑むことなく、な。さらに、どこにいるかも知らないサスケを探すだけとか……ふざけてんのかと俺は思ったぞ。」

つぐ、つとサクラが言葉に詰まる。まあ、その通りだから何も言えんわな。正直、原作のサスケを探すサクラはこの時知らない子だと思いましたがよ俺は。

「サスケ！お前は二人を足手まといと決め付けて個人プレイに走る。それも、罠を仕掛けるのはいいが、途中から俺とナルトの戦いに目を奪われていた。手助けをする事なくな。」

サスケもカカシの足元で苦虫を噛んだような顔をする。いやカカシ、サクラもそうだが下手に手助けされるより邪魔されなかつたから俺としては良かったんだけど・・・というか、カカシもそれは分かっているか。この場合は、何か言わなきゃならないからな。

そして、サクラが「ならナルトはどうなのよ！」って言うてるが、そんなもの鈴を取ってしまったえば良い事だし、何よりお前らが俺の言う事を聞く訳ないじゃん。俺がお前らの言う事聞いても良いけど、この試験で手を取り合って仲良く〜なんてサスケがする訳ねえし、サクラも俺よりサスケと合格する方を選ぶ筈。なら、俺は一人で鈴を取りに行くしかない。

カカシも俺と同じ意見だったみたいで、俺が思った事をそのまま言った。そうしたら、二の句も告げなくなるサクラ。

「任務は班で行う！確かに忍者にとって卓越した個人技能は必要だ。しかし、それ以上に重要視されるのは『チームワーク』だ。これを乱す個人プレイは仲間を危機に落とし入れ、殺すことになる。例えばだ……」

カカシは、何か考えたのだろうか。足元のサスケにクナイを突き付けた。

「サクラ！ナルトを殺せ。さもないとサスケが死ぬぞ。」

いわゆる人質というものだ。こうなったら普通は混乱し、任務どころじゃなくなる。

「え！？」とサクラは動揺し、俺とサスケを交互に見る。こいつ、本気で俺の事殺そうとか考えてないだろうな……

「と、こうなる。人質をとられた拳句、無理な二択を迫られ殺される。任務は命がけの仕事ばかりだ。」

カカシはサスケを解放し、演習場入口の近くにある石碑に近づいていく。それに、俺達も続く。

「これを見る。この石に刻まれている無数の名前。これは全て里で英雄と呼ばれている忍者たちだ。」

これに俺の父さんと母さんの名前がある事に、俺は可笑しくなる。父さんと母さんが家で話しながら、ゆっくりしているだろう姿を想

像できるから。父さんは火影じゃなくなったので、生前よりゆつくり出来ているからいいって言った事からも可笑しさ倍増だ。

「だが、ただの英雄じゃない。任務中に殉職した英雄たちだ・・・  
・・・これは慰霊碑。この中には俺の親友の名も刻まれている。」

そして、と俺の顔を見て来るカカシ。そんな顔すんなって。そんな顔されたら申し訳なくなってくるっての。

「・・・・・・・・・・・・・・・・最後にもう一度だけチャンスをやる。ただし、昼からはもつと過酷な鈴取り合戦だ。挑戦したい奴だけ飯を食え。ただし、サスケには食わせるな。上官が話をしている最中に攻撃してきた罰だ。もしそいつに食わせたりしたら、そいつをその時点で不合格とする。」

「てめえっ!」

「ここでは俺がルールだ。分かったな。」

殺気混じりの視線が反論を許さないことを教えてくる。ま、俺には効かないけど。

昼食を取ってから開始と言われたが、カカシの持って来た弁当は二

つ。その弁当も俺が一つ食べたから残りは一つ。ならそれは、サクラが食うべきものである。だが、腹の虫が鳴いているにも関わらず、サクラは食べようとしなない。

んで、サスケは俺はいいから早く食べるっていう空気を出し、この場には嫌な空気が流れる。はぁ……でも、この二人も思っていたより悪い奴らじゃないみたいだし。なら、俺も一肌脱ぎますか。

「腹いっぱいだってばよ。サクラも早く食べるって。」

「あ、あんたが先に食べるから！」

「ん？俺は鈴を取ったから当然だろ？それをお前に文句言われる筋合いはないぞ？」

「そ、そうだけど………」

ま、こんくらいで許してやるか。

「サスケに食わせるなって言つあれ、無視しようぜ。」

「え？で、でも………」

「俺はいらねえ。余計なこと言っただけじゃねえぞドブ。」

「いいからいいから、先生はこの弁当をサスケには食わすなっ言っただけど……」

俺は自分のリュックから取り出した弁当をサスケに渡す。

「それ……」

「ああ、俺ってばプリント無視して弁当持って来てたんだってだよ。だから、サスケはそれを食べ。あ、毒とか入ってねえから安心しろ。」

「誰がお前の「それ以上言うな」……」

サスケの言葉を遮って、俺はクナイをポンポンと弾ませながら殺気を含んだ視線を投げる。

「お前が俺の施しを嫌うのはいいが、その弁当の悪口は言うな。それと、午後は俺も手伝ってやるからお前も、それとサクラもちゃんと飯食って力付ける。第七班は全員で合格するぞ。」

サクラは「うん」と笑顔で、サスケはフンッと鼻を鳴らし、弁当をそれぞれ食っていく。それを俺も笑って見て、そろそろかなと思考を変える。

「お前らあああああああああああああ！」

予想通りカカシが凄まじい勢いで此方に向かって走って来る。五月蠅いなあ……………

「くっ！」

「きゃあああああっ！」

その鬼気迫る形相にサクラは驚き叫び、サスケは身構える。お、弁当を放り投げずに横に置いてから構えたのか……サスケの評価は俺の中で、ちょっとだけ上がった。

「ごーかくく」

んで、先程と打って変わって、ニッコリした表情のカカシ。

「…………え？」

「……………」

サクラ、サスケの二人は拍子抜けしたのか、呆気にとられた顔を浮かべる。

「忍者は裏の裏を読むべし。忍者の世界でルールや掟を破る奴はクズ呼ばわりされる。」

そして、カカシが一気に捲し立てる。

「……………けどな！仲間を大切にしない奴は、それ以上のクズだ。」

やっと分かって来たのだろう。サスケとサクラは、喜びを顔に浮かべた。サスケが笑みを浮かべるのって初めて見た。

「これにて演習終わり、全員合格！第七班は明日より、任務開始だ！」



ビシッ！と指を立てるカカシ。ふう………これでやっと  
終わりか。長かったような、短かったような………

「よし、帰るぞ。」

「……フン。」

「しゃくんなろ〜ッ！〜！」

「分かったってばよ。」

こうして俺たちは、第七班としての一步を踏み出した。

次回

「もっと難しい任務ってないのじいさん。」

「こらっナルト何火影様に言ってんのよっ!」

(俺もドベに賛成だな……………)

では次回もお楽しみに……………

鈴取り合戦だってばよっ！（後書き）

第七話でした。

いやぁ・・・今回はいつもより多い・・・多かった・・・  
・どうにか一つにまとめたかったんですが、思っていたより長くな  
ってしまい、こんな更新遅くなるとは・・・

本当に申し訳ありませんでした。

次はやつと波の国編です。はぁ、やつとですよ。白と桃地さんだせ  
るやつほいっと思ってたけど、ヒナタ書きたい。

中忍試験まで我慢かなぁ・・・

波の国任務だっばよっ！！

下忍認定試験から2週間経ったある日、俺達第七班は火影のじいさんの部屋にいた。

「ああ！私の可愛いトラちゃんっ！死ぬ程心配したのよお〜」

この妙に甲高い声を出しているのは、つい今しがた終わった任務の依頼人で、火の国の大名の妻、マダム・しじみその人だったりする。

・ 迷子になったペットとの再会に、「熱い」抱擁を交わしているが・

ニヤアアアアアアアアッ!!!

右耳にピンクのリボンを着けた猫「トラ」は、御主人様の抱擁に涙を流し、悲鳴のような鳴き声を上げた。「ご愁傷様だ、トラ。」

「ねえ、ナルト。あれって……………」

「……………何も言っただけだ。」

サクラ。俺達はいいつの自由を、短い幸せを、奪っちゃったんだ。いくら任務で仕方ないとはいえ、な……………ふっ…目から汗が出て来くるぜ……………」

「……………ご苦労じゃったな。さて、第七班の次の任務は……………」

そんな時、ふと火影のじいさんと目が合った。じいさんは俺と目が合うと笑みを浮かべた。この人は、俺の事を孫の木ノ葉丸と同じ位に可愛がってくれる、とっても優しい人なんだが……………如何せん、それが行き過ぎるせいで、今のような場所でもお構い無しに接してくる。俺はその度に苦笑を浮かべてしまっただけだな。

「ん〜・・・老中様の子どものお守に、畑仕事の手伝い、忍具の手入れと、それから・・・・・・・・」

文句とか言っちゃ駄目なんだろうけど、正直もっとマシな任務を受けたい。・・・駄目元で聞いてみるか。

「・・・火影様、他の任務ってないですか？俺、CとかBランクの任務したいんですけど・・・駄目？」

自分の力を試すのって任務の時しかないから、もうちょっと歯応えがある任務がやりたい。頼むよ、じいさん。

\*公の場では火影のじいさんに敬語を使ってるけど、二人だけとか木ノ葉丸と三人でいる時にはくだけた口調で話してる。

じいさんは、俺のそれを聞いて困ったような顔になり、隣のイルカ先生に顔を向けた。イルカ先生ってばアカデミーの先生止めたのかな？

(・・・・・・・・一理あるな)

(ああ〜もうっ、本当にめんどい奴！)

(はぁ………そろそろ文句言い出す頃だと思った。)

上からサスケ、サクラ、カカシが思っている事だ。てか、俺がこいつらの顔から読みとったもんなんだけどな。けど、結構当たってると思うぞ。

俺がそんな事を考えていたら、イルカ先生が立ち上がった。

「ナルト、お前はまだ新米だ。ちゃんと下済みを積まないといけない。サクラ、サスケお前たちも聞いておけよ。そもそも………」

イルカ先生の言う事は尤もだと思う。でもさ、上忍の強さを超えちゃった俺が、そんな任務やっててもこれ以上強くなれるとは思えないんだ。だから……」

「イルカ先生、俺ってばもつと強くなりたいんだ。この気持ちに嘘はないし、半端な気持ちで言ってる訳じゃないってばよ。」

俺はイルカ先生の目を真っ直ぐ見る。数十秒見つめ合う俺とイルカ先生だったけど、イルカ先生が仕方ない奴だなって感じで苦笑を浮かべて、火影のじいさんに顔を向けた。ごめんイルカ先生、我儘言っただけ。それでも、俺さ、強くなりたいんだ。死なせたくない奴ら

が出来たから、そいつらを守るためにね。

「うむ………」

「……火影様。こいつの思いは真剣なモノです。生半可な気持ちで言ってる訳じゃないですよ。それに、そろそろこいつらにも上の任務を受けさせようと思ってましたしね。」

カカシ、あんた良い人だったんだな。これからは遅刻魔なんて言わないよ。

「……カカシがそう言うならば、考えてみようかの。」

「ありがとうだってばよ、じいさん。」

「こらっ火影様に失礼でしょっ!」と、言ってくるサクラ。俺はそれを無視して、ニシシツと笑ってじいさんを見る。じいさんは「困った奴じゃ。」と言って笑ってる。あはは、ごめんだってばよ、じいさん。

「おっほん。では、お前達にはCランク任務をやって貰う……あの人物の護衛だ。」



「ランク任務、そして内容が護衛………それって！」

「護衛？それって結構偉い人だったりするかも！」

「……………」

「サクラ、何でお前は護衛って聞いて偉い奴だと断定すんだよ。あとサスケ、お前は興味あるのに興味ないふりすんじゃない。目がキョどつてるぞ。」

「そう慌てるでない、今から紹介する。……入って来て貰えますかな？」

「んで、じいさんの言葉を聞いて部屋に入って来たのは、片手に酒瓶を持った老人。って、やっぱりっ！！」

「なんだあ？超ガキばっかじゃね〜かよ。特に、その一番ちっこい超アホ面。お前それ本当に忍者かあ！？」

「一番ちっこい超アホ面……」

「それって誰の……左右にいる二人を見ると、俺が一番小さい事が発覚。んで、あのおっさんが俺を見ている事から、「一番ちっこい」

超アホ面」つてもしかしなくても俺の事を言っていると思われる。

「はははは………おっさん、それって俺の事か？」

原作で知ってたけど、実際に言われるとムカつくな………

苦笑いしているとサクラが俺の耳に口を近づけてきた。おい、俺はお前とそんな関係になつた覚えはねえぞ。

「我慢なさいよ、ナルト。あんたの背も伸びるわよ。………多分ね。」

五月蠅えよっ！気にしてんだよこっちはっ！変な気遣いしてくれんな！！と、俺がサクラに一人キレているとおっさんが力カシと話しているのに気付いた。

「わしは橋作りの超名人、タズナというもんじゃ。わしが国に帰って橋を完成させるまでの間、命を賭けて超護衛してもらおう！」

はあ………思ってた以上に、このおっさんの護衛って大変そうだな。でもまあ、白と桃地を実際に見る事が出来んならいいかな。しかし、白ってホントに可愛いんだろっか………今から楽しみだな。

「直ぐに出発するそうだ。荷造りが終わり次第、任務開始だ。」

こうして、俺たちは波の国へと向かう事になった。新術開発やりながら行こうかな、途中暇だし。

集合時間に30分も遅れて来た力カシに愚痴を言うのも、今では見慣れた光景。そして、里と外を隔てる『あ』『ん』と書かれた門を開けて、俺は初めてとなる里外への一步を踏み出した。

「よし、行くか。」

「何で、あんたが仕切ってるのよ。サスケ君が言うなら分かるのに。ねえ、サスケ君。」

・・・悪かったな、デコ女。だがな、サスケ君サスケ君言ってるお前に言われたくはないぞ。

「・・・・・・・・・・フンッ」

サスケえ、照れてないで何か言えよっ！ああ、もう、この班疲れるわ・・・・・・・・・・

「おい！本当にこんなガキらで大丈夫なのかよお！」

おっさんが文句を言うのも仕方ねえな。殺伐とした雰囲気予想していたら、こんなダレた雰囲気だもんなあ。命を狙われる立場としては、もう少しシャキッとして欲しいって思うのは当然か。

「ハハ・・・上忍の私がついてます、そう心配は要りませんよ。」

カカシ、遅れてきたあんたがそれを言っても説得力ないぞ。ほら、タズナのおっさんってば胡散臭そうにしてるし。

そして、何を思ったのかサクラが読めない空気を無理に読もうとしておっさんに話しかけたやがった。

「ねえ、タズナさん……タズナさんの国って『波の国』でしょ？」

「……それがどうした。」

不機嫌な声を出すおっさん。サクラあゝと俺はデコ介をジト目で見るが、サクラは気付かずにタズナに向けていた顔をカカシに向ける。おっさんの機嫌を悪くしたのに気付いたんだらうな。サクラはカカシを話に巻き込んだ。

「ねえ、カカシ先生……その国にも忍者っているの？」

「いや、波の国に忍者はいないな。だけど、大抵の他の国には文化や風習こそ違うが、隠れ里が存在し、忍者がいる。その中でも『木の葉』、『霧』、『雲』、『砂』、『岩』は忍び大国とも呼ばれている。で、里の長が『影』の名を語れるのもその五カ国だけだね。その火影、水影、雷影、風影、土影のいわゆる五影は全世界各国何

万の忍者の頂点に君臨する忍者たちだ。」

へへっ。俺の父さんもその影の名を継いだ最高の忍者だったんだ。俺は満面の笑みを浮かべる。他二人を見てみるとサスケは鼻を鳴らし、サクラは失礼な事考えてますって顔をして、「へー、火影様ってスゴイんだあ！」と感嘆していた。顔と言葉が一致しないと怖いな。

「お前ら、火影様のこと疑ったろ？ナルトは嬉しそうだな。」

「当然っ！そんな凄い人が俺の事育ててくれたんだって思ったら、嬉しくなっただってだよ。」

本当の事は言えない。俺が四代目の息子だっていうのは、秘密らしいからな。んで、カカシにバレていたサクラはびくりと身体を震わせる。馬鹿だなこいつ。

そして、やっぱりねとカカシは嘆息した。カカシも普段こんなだけど、やる時はやる奴だからなあ。いつも戦闘モードならカッコいいって思うんだけど。

「ま、安心しろ！Cランクの任務で忍者対決なんてしやしないよ。」

「じゃあ外国の忍者と接触する危険はないんだ。はあ、良かったあ。」

「もちろんだよ、アハハハっ」

おっさんの表情がカカシとサクラの談笑を聞いて変わったのに気付く。俺はこれから起こる事を知ってるからだけど、サスケとカカシがおっさんの表情に気付いた。サスケはちよつと違和感を感じただけで終わり、カカシは目を細めた。ここが、下忍と上忍の違いかな。

つと、さつそく来やがったか。延々と続く整備された土の道に水溜まりがあること自体はなんら不思議じゃない。でもさ、ここ数日雨なんて降ってないのに水溜りって・・・無理あるぞ。

そして、水溜まりからちよつと行ったところで水溜まりから大きな鉤爪を付けた変な二人組が現れた。てか、お互いの鉤爪を鎖で繋ぐとか移動大変だろうに・・・そして、一番後ろにいたカカシがそいつらの最初の的になる。

「なにっ!?!?」

カカシが態とそんな醜態を見せたのは俺らの力を見るため。誰が標的なのか見定めるため。っていう二つの理由からなんだろうけど・・・

でもまあ、そんなもんはこいつら倒せばすぐ分かる事だし、新術の試し打ちさせてもらおっかな。カカシの後ろを取る前に片方の鉤爪の奴をドロップキックで後ろに吹き飛ばす。

「ツガハ……………」

「ツク！」

鎖で繋がってるからそうなるんだぞ。暗殺に来るならもう少し装備考えような。態勢を立て直される前にドロップキックを当てた奴の太ももに2本のクナイを投擲する。勿論、風遁のチャクラでコーティングされたヤツをな。

「グアッ!!」

はい、一人行動不能。で、もう一人はつと横を向くと鎖を外してカシ達のいる方に向かって疾駆していた。あゝ新術……ッ!

俺が嘆いていると、もう一人の敵はサスケによって地に付された。サスケは俺に顔を向けて来て、所謂どや顔をしてくる。はいはい、凄いい。パチパチ……………



「はぁ……予定とは違ったが……まあ、良しとするか。」

「サスケ君、素敵ッ！カッコいいっ!!！」

カカシは予定がちよいずれたのを溜息で誤魔化し、サクラはサスケにラブコールを送ってる。カカシは、サクラの事が一番不安そうだな。

それに呆れながらも、足元で太ももを押さえて呻いている敵を見て、引き摺って行くのめんどくせえと思う俺も大概だと思っがな……

「先生さっきと話が違っじゃないっ！忍者との接触はないって言うてたの私覚えてるんだからっ！」

サクラが隣にいるカカシに喚いているのを見ながら引き摺って行く。原作で知ってたけど、こいつら霧隠れの忍者だよな。．．．俺、霧隠れの忍者との遭遇率半端ない気がするなあ。．．．．．はあ、今日の空は青いなあ。．．．．．軽い現実逃避してみました。

「それは俺も聞きたくてね。タズナさん。」

「！何じゃっ。」

カカシはおっさんの目をまっすぐ見て、

「ちょっとお話があります。」

反論は許さない、って意味を込めて言った。

あれから数分後．．．．．道の両端で生い茂る木々の一本に、さっき俺達に襲いかかって来た敵を縛りつけて、カカシが尋問して

いる。

まだ終わんねえかなあ……水遁のチャクラをいじりながらカカシの方を見る。水遁・螺旋丸指バースジョンは全部の指に出来るようになり、チャクラコントロールはまず問題がなくなった。それに合わせて水遁系の技も威力が上がり、今はオリジナル技を考えている最中だったりする。

「こいつらは霧隠れの中忍ってところが、いかなる犠牲を払っても戦い続けることで知られる忍だ。」

サクラ、サスケはカカシの言葉に耳を傾けている。知らない事を知ろうとする事は良い事だぞ。うんうん。

「何故、我々の動きを見切れた？」

え……マジで言ってるの??それをマジで言っているとしたらこいつら、馬鹿だな。うん、それしか言えないわ。

「数日雨も降っていない今日みたいな晴れの日、水溜まりなんて無いでしょ、普通。」

サスケとサクラが、そう言えばって顔をした。おい、成績優秀者ど

も、今気付いた！みたいな顔すんの止める。馬鹿に見えるから。

「あんだ、それ知ってて何でガキにやらせた？」

おっさんが疑問に思うのも仕方ない。もし、俺達があっさりと敵に負けていたら、自分の命が危なかったんだから。守るべき対象のおっさんを放置して、自分の部下に任せた力カシ。依頼人のおっさんからしたら面白くないし、不安に思う。でもな、おっさん。

「私その気になればこいつくらい瞬殺できます。ですが、知る必要があったのですよ……この敵のターゲットが誰であるのかをね。」

「どづいつことだ？」

「狙われているのはあなたなのか。それとも、我々忍びの内の誰かなのか、ということですよ。」

そうなんだよ。あんたは只任務を依頼しただけかもしれないけど、こっちはきちんと依頼に沿ったランク付けを態々してるんだからさ。嘘はいけないってことだよ。

「我々はあなたが忍に狙われているなんて話は聞いていない。依頼

内容はギャングや盗賊など、ただの武装集団からの護衛だった筈・・・  
・・・忍者が襲ってくるとなると、Bランク以上の任務だ。依頼は橋を作るまでの支援・護衛という名目だった筈です。・・・敵が忍者であるならば、迷わず高額なBランク任務に設定された筈。何か訳ありみたいですが、依頼で嘘をつかれると困ります。これだと我々の任務外ってことになりますね。」

忍者にとって情報は命を左右する。それを意図的に隠すとか、これが里の奴ならフルぼっこは確実、悪けりや殺されるぞ。そのせいで命を落とすのが依頼人だけならいいよ、嘘ついてたんだから自業自得。でも、騙された揚句にこっちまで命を失くしたらたまったもんじゃない。それくらい、今回した事ってのは悪いって事なんだよ、おっさん。

「そうね。依頼人との信頼関係すらまともに構築できないような任務は危ないわ。サスケくんはどう思う？」

「・・・依頼内容に嘘をついた事については不愉快だ。だが・・・」

サスケは嫌な笑みを浮かべた。お前それ恐いって。

「他国の忍びとの戦闘には興味がある。」

ま、俺もその点については賛成だな。なんたって白に会えるし。

「ナルト、お前はどうか？」

「ん？俺もお前に賛成かな。強い奴と戦えると思ったらワクワクしてくるし。」

サスケと俺は笑みを浮かべる。こいつとは、なんだかんだいってそれなりに仲良くなってきた。2週間前の演習の時に実力を見せた事が原因かな？ま、仲良くなる事に関しては何も問題ないからな。

「な、何二人だけで笑ってるのよっ！」

サクラ、お前っっさい。

「……先生さんよ、話したいことがある。依頼の内容についてじゃ。」

俺達の会話を黙って聞いていたカカシは、おっさんに顔を向ける。

「あなたの言う通り、おそらくこの仕事はあんたらの任務外じゃろう。実はわしは超恐ろしい男に命を狙われている。」

「超恐ろしい男……誰です？」

それまで、ふてぶてしい態度でいたおっさんが、心底怯えた表情を見せた。確かに桃地に狙われてるんならそうなるわな。俺だって修行しないで原作通りのナルトでいたらおしっこちびったと思うし……

「あんたらも名前くらいは聞いたことがあるじゃろう……海運会社の大富豪、ガトーという男だ！」

あれ？桃地じゃないの？てかそんな奴いたっけか？

「あのガトーカンパニーの！？世界有数の大金持ちと言われる……」

カカシ、そんな吃驚するほどの大物なのそいつ？俺ってば覚えてねえんだけど……

「そう……表向きは海運会社として活動してるが、裏ではギャンブルや忍を使い、麻薬や禁制品の密売、果ては企業や国の乗っ取りといった悪どい商売を生業としている男じゃ。一年ほど前じゃ、そんな奴が波の国に目をつけたのは。財力と暴力をタテに入り込んで

きた奴はあつという間に島の全ての海上交通・運搬を牛耳ってしまったのじゃ！島国国家の要である交通を独占し、今や富の全てを独占するガトー……そんなガトーが唯一恐れているのがかねてから建設中のあの橋の完成なのじゃ！」

「……なるほど。で、橋を作ってるおじさんが邪魔になっただってわけね。っ！じゃあその忍者たちはガトーの手の者ってこと！？」

サクラ、吃驚するのはいいが、もう少し声のボリュームを下げてください。隣にいる俺とサスケの鼓膜はお前のせいでポロポロだ……

「……波の国は超貧しい国で……大名ですら金を持ってない。勿論わしらにもそんな金はない。高額なBランク以上の依頼をするような……な……」

それが、この依頼の嘘に繋がった、と。懐に金がないから依頼内容を少しでも下げて金を浮かす。ま、紐解けば簡単な事だな。

「まあ、お前らが任務をやめればわしは確実に殺されるじゃろう。だが、なあに、お前らが気にすることはない。わしが死んでも、10歳になる可愛い孫が一日中泣くだけじゃっ！」



おっさん、それ軽い脅しだよな。情に厚い忍びにしか効かない脅しだけど……あと、それを笑って言うとか、サクラが困ったような顔してるし、狙って言うてるんじゃないか言えねえな。

「あつ、それにわしの娘も木ノ葉の忍者を一生恨んで寂しく生きていくだけじゃ！いや、なにお前らのせいじゃない！」

カカシ、あんたまでそんな顔すんなつての。俺とサスケ位だぞ平然としてんの。……仕方ねえな一芝居打つか。

「そつだよな俺たちのせいじゃない。あんたとあんたの国に力がなくて、金が無いだけだ。それを何で俺達に押しつけるんだ？依頼内容にも嘘ついといて、よくそんな態度とれるな、おっさん。」

「……ナルト？」

サクラ、お前はちよつと黙ってる。

「俺はこんな任務で命を張る事はしたくねえ。何より……会った事も聞いた事もない娘や孫に恨まれるだとはッ、上等だ。恨まれてやるよ。けどな、それで俺の大切な奴らに手え出したら、容赦しねえ。」

芝居って言っても、本音が入ってるから効いたみたいだ。おっさんだけじゃなく、皆俺の空気に呑まれている。ま、ちよつと殺気も込めたからなあ。

「ナルト、少し言い過ぎだ。」

カカシい………あんたも少しは冷徹になれ。情に絆ほたされるばつかりが良い忍びつて訳じゃねえ筈だぞ。

「言い過ぎ、か。でもさカカシ先生、こんな依頼で死ぬ事になったら先生は納得すんの？しないよな、絶対。ま、先生の事だから割り切ってしまうんだろうけどさ。だけど、俺たちは絶対に納得何てしない。なあ、サスケ。お前もそうだろう？」

サスケに振つたのには訳がある。サスケが一番ここで死ぬなんて許す訳がない理由を持っているからだ。

「………そうだな。俺には絶対にやり遂げなくてはならないものがある。それが出来なくなるくらいなら、こんな依頼破棄して里に帰って修行していた方がいいに決まっている。」

「だよな。サクラだって死にたくねえだろ？こんな、ふざけた態度の奴の頼みで死ぬなんて、まっぴらごめんだつての。」

「わ、私だって死にたくないわ…………でも…………」

「ナルト、俺は自分の力を試したい。だが、それも自分の命があつてのものだ。…………俺はお前の意見に賛成する。」

「サクラ、お前は？」

「私は……………」

おいおいおいおい…………カカシは何も言つてこない事から俺の意図に気付いてる筈だ。んで、サスケは俺の意図に気付いてくれて芝居に乗ってくれたのによ…………お前は何で気付かないんだよ！デコ介！！本当にくのーで座学トップだったのかツ！？

俺が内心サクラにイライラしていると、それまで黙っていたおっさんが口を開いた。

「……………確かに、わしの態度が悪かった。すまん。訂正させてくれ、この通りだっ！」

膝を折り、地に額を擦りつける。所謂『orz 土下座』をしたおっさん。そうだよ、人にモノを頼む時にはそれ相応の態度つてモノ

があるからな。それも、一回俺達に嘘ついてるんだから、これ位普通だろ。

「わしを、わしの家族を、わしの国を、助けてはくれないだろうか。頼む……………」

「ナルト、それ位でいいだろ。タズナさんも頭を上げてください。」

お前がしめるのかよ、カカシ……………まあ、こんくらいが妥当だからいいけどよ……………」

「はあ……………わかつたつてばよ。おっさんも悪かったな。」

「何、わしが悪かったんじゃない。お前さんは一つも悪くはないわい。」

お、わかつてんじゃない。そうそう、これからは変にぶてぶてしい態度は取らない事だおっさん。

「では、私たちも乗りかかった船ですし、国に帰るまではお送りしますよ。護衛も兼ねてね。それから、念のために応援を呼んでおきますので、安心してください。」

サクラはやつと重苦しい空気から解放されて一息入れ、サスケと俺は苦笑を浮かべて肩をすくめた。

「ありがとう………恩にきるわい。」

よっし、次は桃地との戦闘だ！楽しみだなあ。でも、応援って誰呼ぶんだ？

次回

霧隠れの術

へえ、これが霧隠れの術かあ。ホント何も見えないんだな………

是非次も見て行ってくださいな。………

波の国任務だつてばよっ！1（後書き）

八話でした。

やっと波の国編に行けたのに出てきたのタズナと変な二人組とか・  
・・・書いてみて分かる長さだよorz

というか、私この小説読み直してみたんですが、主人公性格定まっ  
てない！

なんというフリーダム・・・ですが、こんな主人公もありなの  
では？と自分を許し、今後の話で調整していきたいなって思っ  
てます。

サクラも残念な子をもつアピールしてるし・・・この小説大  
丈夫ですかね・・・

波の国任務だつてばよっ！2

ヒツヒツフー、ヒツヒツフー………ん？あ、俺うずまきナルト。俺たちは今、視界を遮るくらいのすつげえ濃い霧が発生している大きな川を、小船に乗って渡っている最中だ。

んで、周りを見てみるけどホントに何にも見えない。分かりやすい例えでいくと、登山した時に発生する霧の2倍くらい。これで分からないなら、俺には説明のしようがない。そして最悪なのが、

「いら、ちゃんと漕げガキども！」

このおっさんに反省の色が全くない事だ。しかも、エンジン搭載の小船なのに俺とサスケが漕いでるとか………一回ボコルかな、かなり本気で。

しかも、気付いたか？こつちでは、ヒツヒツフーってのが舟漕ぐ時に発する言葉なんだってよ。これって、妊婦が赤ちゃん産む時に言う言葉じゃなかったか？「俺妊婦じゃねえし」とか、「何でそんな事言わなくちゃならねんだよ」とか、「1・2・3じゃ駄目なのかよ」とか言ったけど、皆こいつ何言ってた？っていう目で見ただけで、誰も助けしてくれなかった。そして、今俺はやケクソになって漕いでるって訳だ。

なんて最悪な任務なんだ………後で知った事だけど、こつちでは妊婦が赤ちゃんを産む時に言う言葉ってのは、フッフッハーって言うんだそうだ。何で笑い声っぽい声出なんだよおおおおおお！って俺が心から叫ぶ事になるのはもう少し先の話したりする。



何はともあれ、川を渡るのに結構な時間を掛けたけど、やっと陸地に着いた。はぁ……精神的に疲れたな。サスケを見てみると下を向いて歩いている。お互い頑張ったな、サスケ。俺のそれが届いたのか、サスケも苦笑を浮かべて俺を見てきた。俺、お前と友達になれっかもな……

と、俺がそんな事を考えていると、サスケの隣でサクラが話しかけているのに気付いた。サクラ、今はサスケをそっとしておいてやれっ……疲れてる時にそんなに五月蠅くしたら、絶対逆効果だぞ。それに気付かない内はサクラに春は来ないな。

「護衛頼むぞっ！ガハハハハっ」と、おっさんが騒いでるけど無視。カカシも無視してるみたいだし、いいよな。でも、芝居とかじゃなくて本当に止めてくなってきたこの任務。

そして、ちょっと歩いていると、やっと視界が晴れてきた。サスケも回復したらしく、周囲を警戒しながら歩いている。サクラはおっさんと何か話をしている。原作じゃ、ナルトと無駄話してたみたい

「ただ、俺がこんなだからな、ぶっちゃけサクラにどういつ対応取  
つていいか、わかんねえんだよな。まだ、俺の事をあの目で見て来  
る時あつからなあ。……」

「ああ……早く桃地出てこないかなあ……」

「歩く事数時間、今は木々が隣接している道を黙々と歩いている。お、  
やっと出てきたかな。知らないチャクラの波動が近づいてきたから、  
きつとこれが桃地だな。」

「カカシ先生……」

「ん？どうしたナルト、トイレならそこらでやって来ていいぞ。」

「ちょ、ナルトっ！ここには女の子もいるんだから、少しは考えな  
さいよねっ！」

「違うっつてのっ！暗部出てから平和ボケしたのか？カカシの奴気付い  
てないみたいだ……」

「それにしても遠いですね。まだ町は遠いんですかタズナさん？」

「もう少し行けば見えてくるじやろう。町に着いたらわしの家で休んでいけばいい！疲れが取れなかったら、一晩でも二晩でも休んで行っていいぞ！ガハハハハッ。」

それは、休ませてやるから護衛の任務をもう少し続けろって事か？ホント、このおっさん反省しないな。

そんな事より、

「カカシ先生、あそこに何か見えるってばよ。」

「ん？町が見えてきたの・・・！皆、伏せろつ！！！」

ビュンビュン・・・・・・・・・・

そんな音と一緒に鉄の塊が回転して飛んできた。これが、首斬り包丁かあとか俺が考えてると、カカシがおっさんを引っ張って倒し、サスケとサクラがその場に伏せているのが目に入り、急いで俺も伏せた。

俺が伏せた後に、ズザツという音がしたからきつと木に刺さったんだなって思っ頭を上げてみると、案の定、俺の後ろの木に首斬り包丁が突き刺さっているのが見えた。あれ欲しいなあ・・・・・・・・・・

そして、幅広の刃の上には瘦身だけど引き締まっっていて、上半身裸の怪しげな男、「桃地再不斬」がいた。

うわぁ・・・・・・・・・・生で見れたのはめっちゃ嬉しいんだけど、顔が恐すぎる・・・・・・・・・・でもま、友達にはなりたくないよな。

「へえ〜これはこれは、霧隠れの上忍、桃地再不斬君じゃないですか。」

カカシが立ち上がりながら軽口を叩くけど、顔と体の動きでマジさが伝わってくる。やっぱり桃地つて強いんだな。こんなガチに警戒するカカシはじめて見たもん。

サクラとサスケは桃地の殺気にあてられて、震えている。あ、おっさんに至っては腰抜かしてるぞ。wwザマあ〜。・・・おっさんは兎も角、2人は使えないな。となると、俺が出張る事になるか。ま、戦ってみたかったから万事OKなんだけど。

「下ってるよお前達、こいつはさっきの奴らとは桁が違う。こいつが相手だと、俺もこのままじゃちよつとキツいか・・・・・・・・・・」

おっ！ついにカカシの写輪眼お披露目じゃん！こん時のカカシつてはカツコ良すぎだったよな。単行本読んでた時、カカシの株が上がった事思い出すわぁ……………

「写輪眼のカカシか……………悪いがお前に用はない。そのじじいを渡してもらおうか。」

「お前達、卍の陣でタズナさんを守れ。それからナルト、お前がさつきからウズウズしているのは分かっているが、こればかりはお前にはまだ早い。ここは俺に任せておけ。」

ええ……………カカシいゝそれはないっしょ……………俺にこいつらのお守でもしてろってのかよ。2人も何か言いたい事があるみてえだけど、カカシの雰囲気がそれを許さなかった。

「再不斬、まずは俺と戦え。」

「……………渡す気はないようだな。だが、噂の写輪眼を見れるなら幸運だと思っておくか。」

桃地が恐い顔に笑みを浮かべるから、更におっかない顔になった。桃地、お願いだからこれ以上笑わないでくれ、サクラが失禁しそう……………

カカシが額当てで隠していた左目を開く。それが生の写輪眼……  
……カッコいい！！！！やばっ、鼻血でそうになった。  
ふきふき……

俺が鼻を拭いている間に、写輪眼の事が説明されていたみたい。ま、聞かなくても分かっている事だし、いいよな。

「お話はこれくらいでいいか。俺はさっさとそのじじいを殺らなくちゃなんねえからよ。」

そう言うと、桃地は首斬り包丁から飛び降りた。勿論、降りる時に得物は回収して。

川の上に飛び降りた桃地が使う術は霧隠れの術。また、視界がゼ口になっちまった。でも、桃地が水分身を作って奥の方に引っ込んだのは分かった。チャクラを感じる事が出来る俺にこんな術意味ないんだよな。

でもま、俺以外の奴には効果があるんならいいのかもな。サクラは必死に頭を左右に振ってるし、サスケは悔しそうに顔を顰めている。

「あいつがまず最初に狙うのは俺だろう。だが桃地再不斬、こいつは霧隠れの暗部で無音殺人術の達人として知られた男だ。気がつい

たらあの世だったなんてことになりかねない……俺も写輪眼を  
全て上手く使いこなせるわけじゃない。お前たちも気を抜くな！」

カカシは、俺達に振りかえることなくそう言った。そして、そのす  
ぐ後に桃地が口を開いた。

『八か所だ。』

無音殺人術ねえ………本当に無音で殺りたかったら  
声は出さない方がいいと思うんだけど。こいつ、カカシの他が下忍  
だからって嘗めてんじゃねえの？

『咽頭・脊柱・頸動脈に鎖骨下動脈・腎臓・心臓……さて、ど  
の急所がいい？くくくく………』

おうおう、笑ってんのも今だけだぞ桃地。カカシが捕まったら泣か  
しちゃうっ。

え？カカシが捕まる前に倒さないのかって？だってカカシの奴、俺  
にこいつらのお守やらせようとしてんだぞ？少しは桃地にやられる  
って思ってもいいと思う。

「サスケ、安心しろ。お前達は俺が死んでも守ってやる。」

その笑顔で安心出来るのは、この二人だけだぞカカシ。俺は水分身が言ってるって分かってるし、あっけなく捕まるのも分かっているからな。

「俺の仲間はずれに殺させやしない。」

イルカ先生、俺ってば今一番先生に会いたいよ。この任務が終わったら、一楽のラーメン一緒に食べに行こうね。木ノ葉の里の方に向けて願う。

『それは、どうかな……』

カカシが斜めに斬り裂かれる。

「終わりだ、カカシ………何!？」

斬られたカカシは、バシヤツという音を出して水になって辺りに飛び散る。それを見た桃地は、動きを止めて、自分の首に突き付けられたクナイを横目で見る。

「水分身の術だと………まさか霧隠れの術の時には既にコピ



「してたつてのか！」

カカシが直ぐに印を結んで水分身を出し、分身をその場に残してその藪の中に隠れるのを俺は見ていた。

「動くな……これで終わりだ。」

「さっすがカカシ先生っ！私、先生ならやってくれるって信じてたッ！」

そんなあからさまな賛辞を言っていないで、警戒を解くな馬鹿サクラ！それからカカシ、桃地がそんな簡単に殺られるような奴な訳ないだろうがっ！

「ククク……終わりだと？分かってねえなカカシ、猿真似如きじゃあこの俺様は倒せない……絶対になっ！しかし、やるじやねえか。分身の方に、いかにもらしい台詞を喋らせることで、俺の注意を完全にそっちに引きつけ、本体はその藪の中に隠れて、俺の動きを窺っていたって寸法か。」

桃地がカカシを称賛する。だがそれが、負けを認めた奴の態度じゃない事はサクラや、おっさんにだって分かったみたいで、緩めた警戒心を再度張る。はじめっからそうしておけよ、この馬鹿。

「けどな……俺もそう甘かねえんだよっ！」

水となって桃地も消える。そして、今度は桃地がカカシの後ろに回り込み、首斬り包丁を薙いだ。

「ツク……」

カカシはそれを自分が培ってきた戦場の勘だけで、しゃがんで避ける。だが、そこに桃地の蹴りが襲いかかり、体勢が崩れているカカシにそれを避ける事は出来る筈もなく、両手をクロスさせて防御した。だが、衝撃を殺すことは出来ずにそのまま水の中に吹き飛んでいった。

あ、カカシ捕まったな。俺がそう思った時には、カカシは既に桃地の水牢の術で捕らわれていた。全く、何が俺に任せとけ、だよ。やっぱり原作通り捕まるんじゃない。

「しまった!？」

「ハマったな。脱出不可能の特製牢獄だ……お前に動かれるとやりにくいんでな。」

## 水分身の術

「カカシ、お前との決着は後回しだ。まずはあいつらを片付けさせてもらっせ。」

やっと、俺の番が来たッ！

「額当てまでつけて忍者気取りか。だがな、本当の忍者ってのはいくつもの死線を乗り越えた奴の事を言うんだよ。つまり、俺様の手配書に載る程度になって初めて忍者と呼べる。お前らみたいのは忍者とは言わねえよ。」

桃地の水分身が走って来たところに、風遁を纏わせたクナイでそいつを斬り裂く。

「なら、あんたの手配書に載せといて。木ノ葉の下忍、うずまきナルトをね。」

私は自分の目がおかしくなったのかと思った。だって、カカシ先生でも勝てない相手をナルトが、あのドベで落ちこぼれのナルトが、例え水分身だとしてもそいつを一瞬で倒したんだもん……

「ほう………確かにお前は、その二人とは違ってみたいだ。」

再不斬って人がナルトだけを見ているのに気付く。何で？ナルトってこんなに強かったの？なら私達がこいつをバカにしたのって……

「ま、それはいいじゃん。それより勝負だつてばよ！」

ナルトは逆手にクナイを持って、再不斬つて人に向かって行く。でも、私にはナルトの動きが見えなかった。だって、気付いたら再不斬と戦つてたんだもん。

「ガキがッ!!」

カカシ先生を捕まえるために左手を使えない再不斬は、ナルトの攻撃でどんどん傷ついていく。ナルトはクナイだけで攻撃してるけど、あんな早くて鋭い攻撃、片手じゃ絶対に無理なのは私にだって分かる。再不斬もそう思ったんだと思う。だって、いつの間にか左手を使つてたんだもん。

「ナルト!もういいぞ!!」

「チイツ!!」

(水牢の術を解いちゃった!)

「そりゃないってカカシ先生。今は俺が勝負してるんだからさ。邪魔しないで欲しいってばよ。」

何言ってるのよナルト！カカシ先生が脱出したんだから後は任せればいいじゃないっ！

「ナルト……………」

「え？」

サスケ君がナルトの名前を悔しそうな顔を浮かべて口にした。何で？どうして？私の名前は一度も言った事がないのに…………何で、あいつの名前をそんな顔で言うの？ねえ…………どうして…………

2週間前の演習の時にドベ、いや『ナルト』が強さを隠していた事に気付いた。俺が手も足も出なかった力カシに勝てはしないまでも、互角の戦いをして鈴を取ったからだ。

俺はアカデミーで座学も、実技も他の奴らに負けた事はなかった。だから、俺は天狗になっていたんだと思う。それを力カシに、ナルトに折られた。はじめは悔しくて、憎くて仕方なかったが、あいつらは自分の強さを鼻にかける事はしなかった。

俺が今までやって来た事とは真逆の二人。そして、俺はいつの間にかナルトを見るようになっていた。なぜそんなにも強いのに落ちこぼれの振りをしていたのか、その強さはどうやって手に入れたのか、お前をバカにしていた俺を憎んではないのか、いろんな事を考えながら見ていた。

だが、それも2週間という時間が経っても分かる事はなかった。そして今、俺が見ているナルトは今までのどの「ナルト」でもなかった。

戦う事を求め、それを楽しんでいる姿。それは、子どもが遊びに夢中になっているようなモノ。俺は体が震えた。恐怖でも、寒さでもない。それは、武者震い。俺はこいつと戦ってみたい。きっと、勝てはしないだろうが、勝ち負けじゃない何か違うものを得る事が出来る、そんな気がした。

ナルトはカカシの言葉を無視して、敵を追い込んでいく。術を行使するために必要な印を結ぶ事が出来ない早さで、クナイを薙ぎ、突き、振りおろし、切り上げ、時には蹴りを放つ。

下忍のそれじゃない動き。カカシもそれ以上言うことはせず、ナルトと敵を見続ける。俺は、クソじじいを守るため前が出る。ウザい女は何か言っているがそんなもの聞いている暇はない。今はこの戦いを一秒でも長く見続け、警戒を解かない事。それが今、俺がすべき事だと断言出来る。

敵の殺気にやられた俺をナルトは馬鹿にも、心配もしなかった。あいつは、はじめからあの敵と戦うことしか考えていなかった。俺はビビってしまったってのに……。クソツ！ナルト、早くそんな奴倒して俺に『お前』を教えてください。俺はお前の忍術、体術、全部を教えてください！！



ブルツ……なんか後ろから変な悪寒が来たような気がする。  
こんな時に誰だよ。またサクラがあその目で見てるってのか？とと、

「フンツ！戦いの最中に考え事か？本当にお前は変な奴だ、よ！！！」

桃地の長い手がフックになって、頭を狙ってくるけどそんなん効いてやる訳ないっての！

「変な奴ってのは初めて言われたってばよ。」

フックを避けざまに蹴りを桃地の脇腹に喰らわせて、距離を開ける。

「ハア……ハア……ガキ相手に何てザマだ……次の一撃で  
終わらせてやる！！！」

「体術が飽きたから次は忍術って訳か？いいぞ、俺も新術試したい

しね。」

「くくくく……本当に変な奴だな。この俺相手に新術の試し打ちとは……カカシ、お前は邪魔するな、これは俺とこいつの戦いだ！」

桃地の言葉で気付いたけど、カカシが千鳥を発動していた。それってまだちよつと先の筈じゃなかったっけ！？

「先生、この人の言う通りだつてばよ。この人とは俺が決着をつける。」

カカシは俺と桃地を交互に見て、溜息を吐いてから千鳥を止めた。

「わかった……。だが、死ぬなよ、ナルト。絶対にだ。」

「わかってるつてばよ。」

桃地も待つてくれてるし、勝負つけるかな。それに、向こうに白もいるみたいだし、これが終わったら二人と仲良くなるつと。

俺とカカシの話が終わったのを見計らい、桃地と同時に印を結ん

でいく。桃地のスピードに合わせてやるのが、さっき待ってもらったお返しかな。

水遁・水龍弾

水遁・激流弾

桃地の水龍と俺の激流がぶつかり、そこら一帯を水浸しにする。術の強さは俺のが強いけど、どっちも水って事で相殺した。まあ、練習にはなつたかな。

「次いくぜ！」

風遁・カマイタチ改

桃地の術を待たずにやったけど、サービスはもう終わりだしいいよな。

「グア……………」

そこらにあつた水を巻き込んで、風の刃は水の刃に変わり、桃地を切り裂いていく。大丈夫だよな桃地……………」

カマイタチが消えたから、周りを見てみると俺と桃地が戦った場所は台風が通った後みたいになっていた。あははは……やり過ぎたか？……でも、そんな事よりまずは桃地だ。俺は桃地が倒れていると思われる場所に瞬身の術で移動した。

桃地は木に背を預けてぐったりしていた。でも、四肢は繋がったまままだし、傷も見た目と違って深いものないし、死にはしない。それを確認して、白がいる場所に桃地を連れてまた瞬身の術で移動。その前に、影分身を残していかないとな。

「お前はカカシ達が来たら桃地は逃げた。俺はそれを確認していたと伝えて、俺が戻るまでそのまま、あいつらと一緒に行動してる。」

「わかったつてばよ。」

影分身を残して、今度こそ瞬身の術で移動。カカシがサスケ達のところに向かったみたいだし、影分身と接触してもあいつらがそれに気付くことはないと思うし……うん、大丈夫だ。写輪眼で気付かれるって？いや、少しは言っても、カカシの奴は写輪眼を使ったんだ。疲れて写輪眼出せないって……多分な。

とと、んな事考えてたら、着いたな。

「よ、お前この人の仲間だろ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕は再不斬さんの戦いを離れた場所から見ていた。はじめは良かった。でも、カカシという木ノ葉の上忍を無力化し、いざ暗殺対象を殺るって時になって彼が動いた事で一気におかしくなった。

彼は僕と同じくらいの年なのに、再不斬さんを追い込み、倒した・  
・・・・・再不斬さん！僕が助けに向かおうとした時には、彼  
が再不斬さんを肩に背負って現れた。

「よ、この人ってお前の仲間だろ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

どうやってここまで移動したんだ！？あそこからここまで、走っ  
ても直ぐには来れない距離なのに！

僕が警戒していると分かったんだと思う。彼は再不斬さんをその場に  
置いて5mくらい離れた。戦う意思はない、そういう事かな？

「再不斬さん・・・・・・・・」

警戒をそのままに再不斬さんに急いで駆け寄り、怪我の程度を確認  
した。・・・・・・・・良かった。死ぬ程の深い傷は  
ない。でも、どうして彼は・・・・・・・・

「大丈夫だ。この人もお前も俺は殺そうとは思ってねえよ。それに、

あっちにいる俺の仲間には、このことは言っていない。」

「……………君は何者なの？」

普通の忍者なら僕達は殺されているだろうし、今話をするのもないと思う。なら、彼は何者なのだろうか。僕は純粹にそう思った。

「俺か？俺はうずまきナルト。将来はイルカ先生みたいな忍者になることが夢の木ノ葉の下忍だ。」

「フッフ……………君は面白いね。何だか警戒してる僕が馬鹿みたいじゃないですか。」

「アハハハ。なら今は警戒を解いたって事でいいのか？」

「はい。君は他の忍者とは違うみたいですし、何より再不斬さんを殺さずに連れて来てくれました。なら、僕はあなたを敵とは見ません。」

「ありがとな。ところでさ、お前の名前はなんて言っただ？いつまでもお前って言うのも悪いし。」

本当に彼は不思議な人だ。

「僕の名前は白といいます。よろしくお願いしますね。」

次回

「俺の友達になってくれればよ。」



「いいですよ。」

「俺は嫌「再不斬さん」……………」

それでは次回も読んでいってください。……………

## 波の国任務だってばよっ！2（後書き）

第九話でした。

今回は難産も難産何度も書き直してやっと書き終えたのがこれ・・・

誠に申し訳ありませんっ！こんな・・・こんな筈では・・・  
・楽しみに待っていて下さった皆様には頭を上げられなくなるほどに酷いものになってしまいました・・・

しかも、応援の人達出てこないとか・・・何やってんだよ俺！バカじゃないの！と、自分を罵倒し次回頑張ろうと思います。

次回は今回みたいに遅い更新ではなく、早い更新にしたいと思いません。

それでは、こんな駄文の小説を読んでくださっている皆様にお礼を言っておとがきとさせていただきます。

波の国任務だつてばよっ！3

これを煎じて、この葉に塗って……よし。これを傷口に張れば治りが早い。早く良くなってくださいね、再不斬さん。

……あ、どうもはじめまして。僕は白と申します、よろしく願いますね。

彼、いえもう彼なんて他人行儀はいけませんね。ナルト君が再不斬さんを連れて、僕のところに来た時から5時間経ちました。この間に何があつたかという……

「おーい、白う！」

「あ、ナルト君。僕もちよつと前に帰って来たところですよ。」

「おおー薬草こんなにあつたのか……うん、治療も良く出来る。この人も早く良くなるぞ。んで、俺はほれ。山菜と野ウサギ狩ってきた。今夜はこれらで飯にするってばよ。」

本当にナルト君は不思議な人です。今も、自分が倒した相手の心配をしているし、僕達と自分が食べる物を探して来てくれるんですから。こんな人に僕は出会ったことがなかったので、まだ戸惑っています。

あ、すみません。僕たちが何をしていたかでしたね。

僕たちはあれから動けない再不斬さんを背負い、直ぐにあの場所から瞬身の術を駆使して移動したんです。その際に、ガトーの用意した僕たちの隠れ家に行こうとしましたが、ナルト君の立場を考えて森の奥へと進み、運よく見つけたこの洞窟に飛び込み、再不斬さんを横に寝かせて僕たちはそれぞれ食料と、薬草を取って来る役に分かれて行動して今に至るといふ訳です。

「ありがとうございます、ナルト君。僕一人だったらこんな早く全部は出来ませんでした。何より再不斬さんの治療に専念できましたし。」

「そんな事はいいんだってばよ。俺が助けたかったってだけだし、それにこの怪我を負わせた事自体俺だしな。」

そう言つてナルト君は調理を始めました。この距離なら忍びであれば簡単に殺しが出来るのに、ナルト君は僕に背を向けて調理をしているんですよ？本当に不思議な人です。敵である僕に何の警戒もしていないし、何より自分の仲間を放っておいてここに居る事が考えられません。

「なあ白、お前ら味付けは醤油と味噌、どっちがいい？」

「再不斬さんが好きな醤油味で。」

「ハハハ。わかつたってばよ。」

彼は何がしたいのでしょうか。僕達からガトーの情報を聞き出すのが目的？それとも僕達を油断させておいてから殺すつもり？……も……いえ、彼がその気になったら僕も、再不斬さんも既に殺されていますね。僕の血継限界ならどうでしょう？いえ、きつと勝てないですね。僕と違ってナルト君は戦うことが好きみた

いですから。

彼は僕が血継限界と知ったらどういう反応をするのでしょうか……  
……再不斬さんは僕を、血継限界である僕を欲しいと言っ  
てくれた。ならナルト君は……

「ナルト君。」

「ん？なんだったよ白。」

「ナルト君は、血継限界の事を知っていますか？」

知らないならそれでいい。ナルト君とはこのままの関係を維持した  
い。それに忍びが自分の術の事を他人、それも敵に教えるなんてと  
ても愚かな事で、馬鹿な事だ。再不斬さんに聞かれたら僕は捨てら  
れてしまうかもしれない。それなのに、口が勝手に動いてしまう……

「知ってるぞ。カカシ先生が使ってた写輪眼がそうなんだろ？あれ  
カツコよかったなあ、って白は見てないか。」

写輪眼……それは僕の血継限界よりも優秀なモノ。再不斬  
さんから聞いたことがある。写輪眼を持つ忍びとは戦うな。もし、

戦う事になったとしたら、お前の血継限界のみで戦え、と。

「知っています。木ノ葉のうちは一族の血継限界で、血継限界を除く「体術・幻術・忍術」をすべて見抜くことができ、また視認することによりその技をコピーし、自分の技として使うことができる目の事ですよね。」

「それぞれ、何だ知ってんじゃない。あの眼って凄いやなあ。俺の班にうちの奴いるんだけど、きつとあいつも開眼すんだろうな。てか、なんてチートの目なんだ!」

ちーと？ナルト君が何を言っているか分かりませんが、血継限界のことを悪く思っている訳じゃないみたいです。

「ナルト君は、血継限界の人を恐れはしないんですね。」

「恐れ？ないない、そんな事。血継限界、つまりは自分だけしか使えない忍術なんだろ？それってカッコいいじゃん。」

カッコいい……………それだけで済ます事が出来る忍びがこの世界に何人いるのか。

「フフフ……………本当に君は面白い人です。普通の人はそのな

事思いませんよ。」

「そうか？でも、俺はそう思う。それに、俺も似たようなもんだしな。」

似たような、それはつまりナルト君も血継限界だという事でしょうか？いえ、違いますね。同じ血継限界ならカッコいいとは言いませんね。なら、どういう事なのでしょうか。」

そう思ったら勝手に口が開いてしまったんですから、ナルト君が幻術を掛けているんじゃないかと思ってしまふ僕は何なのでしょうね。

「その口ぶりからですと、ナルト君は血継限界ではないみたいです。が、それに似た何かであると言う事ですか？」

「ま、程度は俺の方が厄介かな。俺って人柱力なんだわ。」

人柱力、それは尾獣という膨大なチャクラを持つ化け物を己の中に飼う者の事。それを聞いた時、僕は知らず知らずの内にクナイを手にとっていました。さらには、僕がナルト君に向けていた顔が、それまで僕自身に向けられてきたモノになっていたことに気付いたのは、後になってからでした。



「ま、そうだよな。悪かったな白、恐がらせたみたいで。俺はここから去るから安心しろよ。」

そう言つてナルト君が調理していた手を止めて、僕に向けて痛々しい顔で笑つて来ました。駄目ですッ、こんなお別れの仕方は僕の望むものじゃない！

「待つてくださいッナルト君！僕は君に、失礼な態度を取りました。……助けてくれた君に、こんな態度を取るなんて……何度でも謝ります、だからここにいてくださいッお願いします……」

ナルト君の左手を取り、頭を下げ続けました。そして、数秒もしない内にナルト君は僕の肩を叩いて、すまなそうな顔で、

「そんなん言われたら、帰れないだろ？」

そう言つて笑つてくれました。ああ、この人は本当に強い人なんだな、とこの時思いました。そして、それから数十分はナルト君の調理が終わるのを黙って待っていました。そして、調理が終わったのを見計らい僕は口を開きました。

「ナルト君、君は君自身の事を教えてくれました。だから、今度は僕が教える番です。僕は血継限界、忌み嫌われる一族の生き残りで

す。」

これを知った人達は再不斬さん以外、僕の事を殴り、蹴り、無視した。でも、彼は、ナルト君は笑顔で、

「そっかあ。なら、今度見せてくれればよ。きっとカッコいいんだろ?」

と、言ってくれました。僕は知らず涙を流していたみたいです。それが分かったのはナルト君が慌てて自分のハンカチで僕の目元を拭いてくれたから。

「なんで泣くんだよ白、ほら、これで拭きな。」

「僕は・・・・・・・・僕は・・・・・・・・」

言葉になりませんでした。こんな風に言ってくれたのは、再不斬さんに言われてからは彼だけ。それも、年代であり、僕が彼を恐怖したのにも関わらずに・・・・・・・・

「ほら、泣くな。男が泣くのは駄目なんだぞ?」

「うう……」

それから、ナルト君が作ってくれた鍋が冷えるまで泣いてしまった僕を、ナルト君はずっと背中を撫でていてくれました。泣く事って恥ずかしいですね。それにしても……ナルト君は僕の事を男の子だと思っっているみたいです……。はあ……。胸がこれだから仕方ないですが、ちょっと悲しいです……

「……すみませんでした。もう、大丈夫です。」

「なら、良かったってばよ。ハンカチはあげるから、また泣きたくなったらそれ使えよ。」

もう、泣かないって決めたのに、そんな嬉しいこと言わないでください。また、泣いてしまうじゃないですか。

「ありがとうございます。これ、大事にしますね。」

「おう。それじゃ、この鍋も温め直すってばよ。」

「はい、それじゃ僕は再不斬さんを起こしますね。」

その前に、泣いて赤くなった目を小川で洗って来よう。そう思って、立ちあがり小川に向かおうとする僕の背に、ナルト君が声をかけました。

「白う！」

「何ですか？」

「俺達、もう『友達』だからな！」

「………はい！」

だから、そんなこと言わないでくださいよ、これ以上泣きたくないんですから。そう思いながらも、僕の胸は再不斬さんに出会って以来の温かい気持ちでいっぱいでした。

白が泣くとは思わなかった。原作同様、男なのに綺麗な顔立ちだから、俺も危うく女の子扱いするところだった……  
……恐るべし女顔……

でも、俺のことを話した時は残念って言うか、悲しいなって思った。白達なら大丈夫って思っていた俺も悪いけど、こつちの世界で人柱力って言ったら血継限界より恐い存在だもんな。それでも、最後に俺を受け入れてくれた白はやっぱり良い奴で、友達になりたいって思った。

泣いてしまった時は驚いたけど、でもこれで友達になれたんだから良ししよう。白のあんな笑顔も見れたしな。原作でいるんな笑顔を見せてくれた白だけど、最後の笑顔は男だって分かってる俺でもグラっときたからな。あれは軽い犯罪だろ？ま、あとは桃地と友達になるだけなんだが……それは飯を食ってからでいい

な。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・そういや、あれからサスケ達ど  
うしたかな。今頃おっさんの家に着いて飯をご馳走になってんのか  
もな。イナリの心を強くするなんていうイベントがあつたような気  
がするけど・・・・・・・・・・いいや。俺じゃなくても他  
の奴がフォローするだろうし、俺はこっちで二人と友達になってよ  
つと。

あとは、カカシが呼ぶって言ってた応援だけど誰が来るんだ？ま、  
1週間くらいしたら会えると思うし、その時でいいよな。ととつ、  
鍋が噴き出すとこだった。・・・・・・・・・・うん！美味しくできたつて  
ばよ。

ダンツ・・・ダダンツ・・・ダンツ!!

板張りの床を蹴る音が響く。そして、腕が空気突き出す音がそれに続く。

ふう・・・・・・突き出していた両手を自分の腰に引き、この場に漂っていた緊張を穏やかなモノへ変えていく。

ここは日向宗家の道場。そして、いつもは一族の人達が鍛錬していて五月蠅いこの場所に、一人鍛錬に打ち込む私がいる。そして、いつもより気合が入っているのが自分でも分かる。だって、ナルト君に会えるんだもんっ！

あれは今日の任務が終わって、第八班の皆で反省会をしていた時だったんだけど・・・

「ヒヤッホウ！今日も俺と赤丸は絶好調だったな！な、赤丸っ！」

ワンワンッ

キバ君は赤丸と任務が終わったばかりだったのに、走り回っている。私には、もうそんな体力も残っていないのに……. やっぱり男の子って凄いなあ。私ももっと頑張らないとっ。

「何を言っているんだキバ。俺とヒナタがせっかく追い詰めたブル君を、陣形を崩したお前が逃がしたんだ。それも三回もな。これに対する謝罪を俺とヒナタはもらっていない。そして、それに対する反省がないのはなぜだ？」



え、そそ、そんなのいいよ、シノ君。私は自分が皆の足を引つ張らないようにするので精一杯だし、何より私はキバ君の体力が羨ましいんだから。

「シ、シノ君、私は大丈夫だから。」

「キバ、シノの言う通りよ。あんたがもう少し上手く二人と連携を取っていたら、この任務ももつと早く終わって、次の任務も今日中に出来たかもしれないからね。下忍認定試験、あの時もそうだったでしょ？チームワークは忍者には必要なモノなの。」

「つぐ………はあ、分かったよ。次からは気を付ける。」

紅先生、カッコいいなあ………アカデミーの時は私達くの一のクラスの担任だったし、下忍になっても担当になってくれて……私は恵まれてるんだよね、他の娘に比べたら。先生のファンの娘っていっぱいいたし、私も憧れてたから担当が紅先生だって分かった時は、ホツとしたもん。ナルト君と一緒に班になれなかった事は残念だったけど………

でも、そうだよ。紅先生は女の人、それも上忍になれるくらい凄い人なんだ。私も頑張って修行すれば先生みたいに強くなれるかもしれない……ううん、絶対に強くなるんだ。ナルト君と約束したんだから、頑張れ、私っ！

「それから、シノ。今日はあなたの作戦と洞察力が任務達成に繋がったわ。そして、きちんとチームワークの大切さを分かっているみたいだし、うん。次からの任務も今日みたいな行動を試みるように。」

「・・・了解した。」

シノ君って褒められたのに、なんでそんな反応なんだろう？私だったら照れちゃって、絶対あわあわ言っちゃうんだけどなあ。

「そして、ヒナタ。あなたは、もう少し自信を持ちなさい。今日の任務は、あなたの力があるから早く見つけられたし、体術もアカデミーの頃と比べたら断然、良くなって来てる。だから、そんなにおどおどしないの。」

「は、はは、はいッ！あ、ありがとうございます・・・」

わ、私褒められた？褒められたよね？あうあう・・・  
・・・顔が真っ赤になってるのが分かる。誰かに褒められるのって嬉しいな、やっぱり。

「あらら・・・ま、今日の任務に対する私の意見はこんなモノよ。明日の任務は・・・皆ちよつと待ってて、火影様からの急用みたい。」

私が一人そんな事をやっていたら、一羽の鷹さんが紅先生の肩に止まった。鷹さんって偉いよねえ・・・紅先生は鷹さんの足に結んであったモノを読んでいる。何が書いてるんだろ・・・  
・先生の顔が引き締まっていくから、大事な事なのかな？

先生が読み終わった事を確認した鷹さんが、飛び立っていった。

「次の任務が変更になったわ。」

「お、何だ何だ？そんな事初めてのことじゃね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

任務が変更？？キバ君の言う通りだよな。そんな事今までなかったのに・・・・・・・・

「次の任務は、第七班の応援として波の国へと向かうモノ。でも、まだこれは決定した訳じゃない。私達の他にも同じ内容のモノが第十班にも行っているみたいだからね。」

え？第七班って・・・・・・・・

「ナルトがいる班だな。だが、あの班にはうちは、春野といったアカデミーの成績優秀者がいる筈だ。なぜ、俺達が行かなければならないのか教えてくれ。」

そっだよっ！ナルト君がいる班だよね！？どうしよう……私、まだナルト君に会えるくらい強くなつてないのに……でも、ナルト君に会える……

「それが、任務内容に嘘の情報があつて、本当はBランクの任務だったらしいの。それで、カカシ班だけじゃ危ないから私達が応援として向かう事になったのよ。でも、言つた通りまだ決定した訳じゃないわ。あなた達はまだ下忍、私はまだこの任務には早いと思つてる。だから、あなた達が決めなさい。行くか、行かないか。」  
（でも、カカシがいるのになぜ応援が必要なの？あいつは元暗部、その気になつたら下忍を下らせて、自分だけで解決できる筈よね。だとしたら、カカシの手に負えない忍者、もしくは同じ力量の忍者が向こうにいるからつて言うのが考えられるけど……）

行くか、行かないか……私はどうしたらいいのかな……

「へへ、シノそんなもん決まつてんじゃねえか。あいつらじゃ解決できない任務だつてことだろ？なら俺らが行つて簡単に解決したら

どうよ？あのうちは、そしてナルトに恩が売れて、俺達が強いって事が証明されて、くくく……こりややるっきやないだろ！」  
（ヒナタにカッコいいとこ見せれるチャンスだ！ナルトの事を助けた俺の事を見直して、俺に惚れるかも！くくく、やっと俺の時代じゃねえの！）

キバ君が言ってる事に共感はしないけど、……ナルト君が困っているなら、行って助けてあげたい……うん、そうだよ。約束はあるけど、私はナルト君に会いたいし、何より助けになりたい。約束は私が強くなったら二人つきりであって、思いを伝える事だもん。それまで、会えない、会っちゃだめとか考えてたけど、そんな事ない。だって、

「私も。私もその任務やりたいですツ！ううん、やります！」

私は、ナルト君が大好きなんだからツ！

「……あなた達がそう言うなら、この任務を受けるナルトに俺がこの2週間での位強くなったのか見せる事が出来るな。俺も行く事にする。」

「はあ……あなた達がそう言うなら、この任務を受ける事にするわ。ただし、油断はしない事。他の国の忍者との戦いは決して甘いものではないし、これまでやってきた任務とはレベルそのものが違う。何より最悪の場合、死ぬわ。」

死ぬ……その一言で私達は黙っちゃったけど、目だけは先生を逸らすことなく見続ける。死ぬのは嫌だけど、ナルト君もその状態なら私も頑張らないといけない。そうじゃなきゃ、ナルト君の横には立てないもん。

「……日の前8時、里門のところに集合。それじゃ、今日は解散！」

「おう！わかった。はい！」

私達はそのあとそれぞれ自分の家に帰ったんだ。私は家に帰ってお父さんに任務があることを伝えて、忍具の確認をした。

そのあと、いつものように柔拳の鍛練をしたんだ。今日、鍛練に気合が入っていたのにはそんな訳があつたんだよ。・・・クンクン・・・着ている道着から汗の匂いがする・・・お風呂に入っすっきりしたくなる。・・・時間を確認したらもう11時になってて、慌ててお風呂場に行った。夢中になってたから分からなかったよ・・・

お風呂場に向かう途中に、綺麗な月が出ているのに気付いて足を止めた。この月、ナルト君も見てるかな・・・と、いけないいけない。お風呂入らなくちゃ。

「つくしゅッ。」

「ナルト君、風邪ですか？」

「いや、誰か俺の事噂してんだきつと。」

「まったく誰だよ、俺の事噂してんのわ。またサクラが俺の悪口でも言  
ったか？まあ、いいか。」

「フンッ。お前が風邪を引こうが俺達の知った事じゃない。それに、  
俺達は敵同士だ。」



「まあまあ、俺はあんたらの事を敵だっと思ってないぞ。それに、白とはもう友達だしな。」

「フフフ、そうですね。ナルト君は大事なお友達です。」

白がいい笑顔で見て来る。あれはどうみても女の子だよな……  
……もういつそ男の娘って言ってもいいよな？

「……………白が認めたらならお前は敵じゃないんだろう。だが、俺達も仕事だな。あのじじいを殺らな  
いといけねえ。それで、お前達はおそらくあいつの護衛、なら俺達  
は戦わなくちゃならない訳だが……………」

「僕はナルト君とは戦いませんよ。再不斬さんの言う事でもこればかりは聞けません。」

「はぁ……………お前、ナルトとか言ったな？白が言う事を聞かねえなら、お前がこっちに付け。」

「うーん……………白とあんたに付くってのもいいけど、こんなのはどうだ？」

俺が考えていたものを言つていくと、桃地は呆れた顔で、白は満面の笑みで見してきた。白、その笑顔は他の人には見せちゃいかん。見せた瞬間、そいつら不抜ける。悪けりや気絶だ……………

「下忍のお前にそんな権限があるのか？」

「権限なんてはないよ。でも、火影のじいさんに言えば分かってくれる。大丈夫だつてばよ。」

「再不斬さん、これいいじゃないですか。僕はナルト君の案にのりたいです。」

ナイス白。桃地は何だかんだ言つてお前には逆らえないから。

「……………分かった。それ  
にのつてやろう。だが、裏切ったらただじゃおかねえぞ。」

「そんな事は絶対にしねえ。友達に嘘は絶対言わない、これが俺の忍道だつてばよ！」

「ナルト君……………」

白がぼわわあってなってるのを見なかった事にして、桃地に宣言する。これは、本心から言ってる事だから何も恥じる事はない。

「はぁ……霧隠れの鬼人と言われた俺がこんなガキの言う事を聞かなきゃならないとはな……」

「ま、いいじゃん。これが上手くいったら全部良い事尽くめだ。」

「そうですね。僕も上手くいくように頑張ります。」

「よし、なら桃地、俺と友達になってくれればよ！」

ここしかないというところで、友達宣言。桃地と友達になったら首斬り包丁貸してもらおうと。

「ふざけるな。俺は嫌「再不斬さん」……」

「よし！なら友達だな俺達。」

「はい！」

「……………はあ……」

友達GETだぜ!!

次回

なんでヒナタ達がいんの？

え？呼んでいた応援がヒナタ達だったって!？



波の国任務だつてばよっ！3（後書き）

はい、十話でした。

やっとここまでできたって感じですね。

文章って書くの難しい！！みなさん、書いてみようかなって簡単に  
思つて書きちゃ駄目ですよ！私みたいに苦労しますwww

ええと、白、あなたはなぜそうやって自分勝手に動くのでしょうか？

私の手からあなたは一番自由に動きますね？ああ……フラグ  
を立たせてしまったナルトはどうなるんだろう……

www

ヒナタ、カワゆす！！！！

それでは、この辺で。

いろいろな感想、レビュー待ってますね。こうならいいんじゃない  
か？これは良かったなど、作者は待っていますからwww

## 波の国任務だつてばよっ！4

貧しい国「波の国」。おっさんの話と、原作からの知識があつてもここまで廃れた町を俺は見たことがなかった。ペンキが剥がれ落ち、霧のせいで腐り掛けた木板が、風が吹くたびに耳障りな音を鳴らしている。

白と桃地を助けて、友達になつてから今日で五日。俺はサスケ達と合流するために、サスケ達の所にいた影分身を解いて、影分身が記

憶していたおっさんの家へと向かっている。

白と桃地とは一度解散する事にして、ガトーのところに戻ってもらった。それが今朝の事なんだけど……その時に、一騒動あったんだ……

作戦も練ったし、後二日は各自で行動しないかと、俺が言った時に白が「嫌です」の一点張りで桃地を困らせ、俺が二時間程説明してやっと聞いてくれた。あの時に見せた白の顔が、上目づかいに涙目という女の武器だった事をここに記しておきたい。……  
……俺、男には興味がない筈なのにイェ!!!!!!

俺が頭の中でそう叫んでいると桃地が俺の肩をポンポンと叩いて、あれには俺も敵わんという同種の悩みを持つ者同士の顔をしていたのも記しておく。なんか、桃地に対する印象がどんどん変わっていく俺がいる。えつと……本当にこの人あの桃地？と思った事はこの五日間の中で何回だろうか……数え切れないのだ。こと白の事に対してだけ……

と、まあそんな事が今朝あったんだわ。白って桃地が好きな筈なんだけどな……桃地も原作じゃ白の事、道具扱いしてた筈なのに（結局最後は、道具じゃないと分かり泣いていたけど）……はあ……溜息を吐きながら、もうお昼の時間帯の町を練り歩く俺。



お昼を回っているからきつとサスケが木登りの行をしている所なのだと思う。何でサスケが木登りの行をやっているか。それは、カカシが『再不斬はまだ生きている・・・タズナさんの護衛は続ける』と言ったからだ。そして、その護衛にはカカシとサクラが行っている。サクラは原作同様、簡単に木登りの行をクリアし、サスケが躓いた。俺はもちろん簡単にクリアしたみたい。影分身とは言っても俺だから、そこはきちんとオリジナルの考えを持っていたんだと思う。

その際に、俺もそれが出来るという事が分かると、影分身の俺にカカシがサスケの修行を頼むと言って丸投げして下さいました。そうして、影分身はここ数日サスケの修行を見学していた。だが、影分身の俺が急に姿を眩ませた事で、サスケがイライラしている姿が目に見えかぶ。だって影分身解かないとおっさんの家分かんなかったし、仕方なくね？

いや、まずはそれはいい事にしよう。今思う事は、あのプライドの塊であるサスケが、俺の言う事を素直に聞いていた事だ。影分身が俺の言う事をこいつが聞く訳ないじゃんって思ったみたいだけどサスケはそれを良い方向で裏切り、素直？に修行していたみたいなんだわ。あれ？こいつホントにあのサスケか？と、数分前の俺が思ったとしてもおかしくなくね？

だから、今からサスケに会うのが少しだけ怖かったり・・・  
・・・そんな事を思っても行かなくちゃ始まらないんだけどな。

歩くこと数分、着きましたよ、おっさんの家に。そして、俺の目に入ってくるのは家の前で仁王立ちしているサスケ君の姿。うわぁ・・・朝帰りしてきた夫を今か今かと待ち構えている妻っていうのが頭に浮かんできたけど、間違いなくあれは怒っているな。

「今まで、どこに行つてやがったんだ。」

「えっと、ちよつとそこまで?」

サスケの頬がピクピクしている。これは相当キレてるな・・・

「疑問形なのは何故だ?」

「それは・・・」

「お前はカカシに俺の修行を見ているように言われたな?」

「そう（みたい）ですね・・・」

「分かっているみたいだな。なら俺は、それを守らなかったお前に罰を与えてもいい訳だ。」

え、何だよその罰って。てか、ホントに恐いんですけど。この五日間、白の笑顔ばかりみてたから余計にそう思うわ………

「いやあ、罰ってのは言い過ぎじゃないか？」

「いいや駄目だ。俺はお前が消えてから家の周りを探した。そして、お前がここに来るまでの時間、俺は修行の時間を削られた。なら、それ相応の罰を与えなければ俺の気が済まん！」

サスケってこんなに喋るキャラだったか？この五日で変わったんだなお前。

「なら相応の罰ってなんだよ。」

「今日明日の飯抜き、あの女の言う事を一日中聞く事、里に帰るまでカカシの言う事を聞く事、さあどれがいい？」

「おい！そんなん選べねえよ！！」

冗談じゃないっての！高々、一時間弱サスケから離れたってだけで何でそんな理不尽な要求聞かなくちゃならねえんだ！やっぱこいつ

サスケだ。それも原作より一回りくらい性格が悪いサスケだ。

「ほう………選べないか。ならどうする？この状況も俺の修行の時間を削っている事に変わりはないんだぞ？」

な！？こ、こいつ………はあ仕方ない、サクラの言う事とか死んでも嫌だし、カカシの言う事もなあ、なら飯抜きかな。うん、飯抜きが一番程度が軽いな。

「悪かった。なら飯n「仕方ない、お前がそこまで嫌だと言うなら、これで勘弁してやる。」………」

「俺に術を教える。忍術でも幻術でも何でもいい、お前は俺より強い。それが五日前の戦いで本当に分かった。俺は、強くなりたい。だから、お前のその強さの源の術を俺に教える。それで、勘弁してやる。」

あのプライドの塊のサスケが俺に術を教わる？何だこの新手の冗談は。というか、前の三つってこれが言いたいがための布石だった？ホント、原作のサスケからどんどん遠ざかって行ってる気がする。まあ、強くなりたいってのは、本当の事だもんなサスケの場合。例えそれが人からの、それも大蛇丸の力であつても………。なら、俺が術を教えて強くしてやれば原作崩壊一気に速まるんじゃない？

大蛇丸をただフルぼっこにすればいいと思ってたけど、サスケ自身がレベル上げればいい訳だもんな。よし、

「分かった。教えてやる。」

「ふん。なら「ただし、術を教える前に基礎からみっちり教えて行くからそのつもりでいる。なあに、お前は天才、それもうちの血を引くな。そして、一度始めたらお前には拒否も、リタイアもない。それでもやるか?」・・・そんなもの願ったり叶ったりだ。俺は強くならなくちゃならない。それもあいつに勝てるくらいになッ!」

イタチへの復讐、か。ま、その考えもおいおい、直させて行こうか。

「OKだ。それじゃ、まずは今の木登りの行からかな。」

「おいそれじ」これは、術を教える前に必要な事なんだ。修行には段階がある。今のお前には術なんてとてもしゃないが教えられるもんじゃないっての。「っチィ・・・」

「分かったら着いて来い。なあに、俺の修行は優しいから安心しろ。」

くくく。サスケ、この修行に耐え抜いたらお前も俺みたいに強くなるぞ。九尾がいる時点で俺には勝てないけど、お前にはそのチートの目がある。だから、俺と一緒に大蛇丸をフルぼっこにしような！

そうして始まったサスケ改造計画だったが、木登りの行でチャクラコントロールが下手って言う事が分かり、それから夜まで無理やりやらせた。途中「何が優しい、だ」・・・とか聞こえたけど無視無視。さあ、これが終わったら水面歩行の行か。この修行をサスケより真面目に考えて、そして楽しんでる俺がそこにはいました。

「あなたは、ナルト君の何なんですか？」

「あ、あなたこそ、ナルト君の何なのかな？」

いつもは結っている黒髪を下ろし、どこぞのお姉さんという風貌をした白と、日向の紋がついた服を着て引き彎った笑みを浮かべるヒナタが俺の目の前にいる。

ここは、原作でナルトと白が薬草を一緒に取っていた場所。木々が周りを囲むようにして立ち、切り抜かれたここには、多くの薬草や野苺といった野生のモノがあり、隠された庭という表現が正しい場所だ。

そこに、俺達三人はいる訳なんだが………

「僕はナルト君の『大事な』お友達です。」

「わ、私だってナルト君の『大切な』お友達だよ。」

大事な、大切な、言葉は違うが同じ意味を持つ言葉。

「ナルト君、彼女は一体誰なんですか、なの？」

はあ………何だってこんな事に………  
………

白とヒナタが対峙する事になる数時間前………



サスケから術を教えてくださいと言われ、修行という拷問を掛けてから一日経った。俺は今、おっさんの家で朝飯を食べている途中。なぜ、途中になっっているかというと、

「合流場所に来ないで、呑気に朝食を食べているなんて……  
……いい御身分ね、カカシ？」

「よ、紅。お前が来たのか。ん？下忍も連れてきたのか？」

「私は連れて来る気は無かったけど、この子たちが自分の意思で行きたいと言ったのよ？なら、私に止める事はできないわ。」

「……ま、そうだな。タズナさん、悪いですがこいつらの分も「飯、用意出来ますか？お金はお支払いしますから。」

「おお、いいぞいいぞ。ツナミ、用意してやれ。」

「すみません。急にお邪魔してしまいました。私は夕日紅、この第八班を担当する上忍です。カカシからの応援要請により木の葉から来ました。」

紅さんカッコいい……アカデミーん時もそうだったけど、綺麗でカッコいいって事から生徒だけでなく大人の人達からも人気の人。そして、未来のアスマの妻。今はまだ付き合っていないみたいだけど、何時付き合う事になるかは分からない。

そして、紅さんの後ろにいるのは、

「よ！久しぶりだなナルトお！」

「……………」

「な、ナルト君、おはよう。」

キバ、シノ、ヒナタの三人だった。こいつらも、変わってないなあ……………

それから、軽く自己紹介をする俺以外の下忍。自己紹介とは名ばかりの力オスつぷりを発揮してくれたがな。キバがサクラにウザいつて言われてキレたり、サスケとシノが無言で威圧してたり、ヒナタが俺に何か話しかけようとモジモジしていたり……………

おい、その上忍二人。呆れてないでこの状況を止めてくれ。俺だけじゃ收拾がつかないって……………

朝食を食べる際に、人数が多いという事で俺が席を立ち、外で食べる来ると言つと、下忍全員が付いて来るという意味分からんこともあつたが、今はそれも多少落ちつき、庭でおっさんを含めた七班、八班の計九人が集まつている。

「今日もタズナさんの護衛に行く訳だが、紅達が応援に来てくれたから護衛に割く人数を増やす事にする。まずはサクラ、お前は昨日同様、タズナさんの護衛だ。」

「はあゝい。」

（五月蠅いキバとか、何も話さない無表情なシノと一緒に『絶対に嫌よ』カカシ先生。お願いだからサスケ君を！）

内なる声でそう言ってるんだろうなサクラの奴。昨日までもサスケと一緒に護衛出来ない事を愚痴ってたから、そんな事を考えてるだろう事は俺じゃなくても分かるぞ。

「そして、サスケ。お前も木登りの行を昨日終えたみたいだからな。今日からはお前も護衛に回れ。」

「ことw「サスケ、上官命令は絶対だ。拒否は受け付けない。」チツ……」

あはは……そんな目で見るなってサスケ。ちゃんと修行は付けてやるからよ。昨日ので懲りたかなって思ったけど、そんなことはないみたいだな。流石は「うちはサスケ」だな。

「次に、八班からキバ君かな。んで、上忍からは俺が護衛に回るから、その心算で。」

「わかったよ。サクラ手前え、俺の足引っ張ったらただじゃおかねえぞ！」

「はいはい、吠えてなさいよバカ犬。」

お前ら喧嘩すんな。なんか知らねえけど恥ずかしいぞ俺は。子どもが喧嘩してるのを見ている親の心境って言うのか？そんな気分を味わってんだよ俺は。

「紅、残りはお前とツナミさん達の護衛だ。こっちに敵が来るかも知れないからな。」

「わかったわ。それより、このメンバー編成でいいの？」

「はあ……俺も不安だ……」

でも、まあこの編成でいいんじゃないか？カカシと同じくらい（カカシが思っているには）の力量の俺をカカシと分けて、後は虫と白眼で警戒してればここは大丈夫。おっさんの方も、……………まあ何とかなるだろ。

それに、昨日サスケに付き合ってたせいで、寝不足気味だからもう少し寝たいしな。

「それじゃ、今日はこの編成で行くからな。タズナさんそれでは行きましよう。」

「超護衛してくれ。ガハハハハ！」

おっさんの笑いで、皆苦笑を浮かべる。喧嘩していたキバとサクラも止める位だから相当だな。

それからカカシ達はおっさんと橋に向かって行った。残った俺達はそれを見届けると、紅さんが指示を出した。

「私たちはここを守る事になったけど、ナルト君だったわよね？」

「はい。何ですか？」

「あら、礼儀正しい子ね。あなた達がここで昨日まで修行していた内容をカカシに教えてもらったわ。それで、この二人はまだ木登りの行をやっていないから、私が教えるけど、あなたはどうする？」

「そうですね。なら、俺もそこで見てますよ。アドバイスとか出来たら言いますし。」

ま、木陰でお昼寝と洒落込むだけだな。というか、気付いたか？俺は年上の女性には敬語で話すのだ。なぜかって？それは、可愛がってもらえる可能性が増えるから！だって、アスマに紅さん取られるのって、なんかしゃくじゃね？

「ナルト君・・・・・・・・・・」

「ナルトも男だったという事だな。」

シノ、お前だって紅さんの事綺麗だって思ってたんだろ？俺知ってるんだからな、お前が隠れて紅さんの写真持ってるの。それから、ヒナタそんな顔すんなよ。そんな顔で見られたら何も出来なくなっちゃうよ・・・・・・・・・・

「分かったわ。ならナルト君はそこで見ていて何か駄目なところがあったらアドバイスしてあげて。私も教える人が増えたら楽しだね。」

紅さんの言葉に笑顔で返し、木登りの行の修行に入った。流石はアカデミー時代サスケに次ぐ成績だったシノは初めてなのにも関わらず、半分まで登った。だが、半分まで行ったところでチャクラコントロールを崩し、弾かれてしまった。

ヒナタはゆっくりとだが、一步一步確実に登っていく。そして、シノの登ったところを超え、遂に木の天辺まで登り切った。へえ・・・・頑張ってんだなヒナタ。こりゃ約束もすぐに果たせそうだな。

「凄いいじゃねえかヒナタ。チャクラコントロールがアカデミーん時より断然上手くなってるし、ウチのサクラに勝てるんじゃないか？」

「え、い、いや、そ、そんな事ないよ・・・。」

天辺から飛び降りたヒナタに言葉を掛けると、顔を真っ赤にし、いき仕舞にはプシュっという音を頭から出していく。あはは・・・・変わってない事もあるな。

んで、向こうではシノが紅さんからアドバイスを貰ってるみたいだ。シノの事だ、直ぐにチャクラコントロールなんてマスターすんだろ

うな。実際、今はサスケとシノは同じくらいの実力なんだ。でも、それも一時的なもの。写輪眼を開眼したサスケがグンと突き放す事になるからだ。

「……………ヒナタは初っ端しよっぱなでクリアしたけど、これからどうする？俺は木陰で昼寝でもしようって考えてるけど。」

「あ、そ、それじゃあ、先生に出来ましたって言うてくるね。」

「わかった。それじゃ、俺そこらにいるから何かあったら言えよ。」

「うん。」

赤い顔で笑い、そのまま紅さんの所に走っていくヒナタ。あああ、あんなふらふら走ったら…………「あう！」ほら、言わんこつちやない。こけた事にも恥ずかしくなったのか更に真っ赤になったヒナタは、へへへという照れた笑みを向けてきて、それからまた走っていった。

ヤバいだろ、今の……………キバとか見てたら鼻血出して倒れるくらいの破壊力だったな。って言う俺も危なく出すとこだったんだけどな。



はあ……寝よ。ゴロンと横になり目を瞑る。  
朝の匂いを含む風が頬を撫でて行くのを感じながら、眠りについていく。

「……ト君……ナル……起き……ナルト君起きて。」

ん……ヒナタの音がする……起きるか……

「ふああ……おはよう、ヒナタ。」

「フッフ、おはようナルト君。気持ちよく寝てたみたいだけど、先生がお昼にしようって言うてるからあっち行こう。」

ヒナタがクスクス笑いながら、俺の頬についた葉っぱを取る。ヒナタって、少し天然入ってるよな。こんな事、普通の時にしたら顔を真っ赤にするだけじゃなく、悪けりゃ気絶するもんな。今は無意識にやってんだろうけど、気絶させたくないから俺は何も言わない。

「分かった。」

「うん。あ、あのね、お、お昼はサンドイッチだよ。私が作ったんだ。」

「お、そうなのかな？なら、早く行って食べよう。ヒナタの料理も久々だから楽しみだっばよ。」

そう言うと、ヒナタは照れたような顔で先に紅さんのところに走っていく。どうせ、行くなら一緒に行けばいいのに。ヒナタのあの恥ずかしがりようは何時治るんだろうな。

そして、ヒナタを追い俺も紅さんとシノがいる場所に向かう。着いてみたら、綺麗に並べられたサンドイッチがあり、シノと紅さんは先に何個か食べているみたいだ。

言葉もそこそこに、俺もヒナタの力作を食べる。久々だけどやっぱり美味しいなあ。手料理が上手い人ってそれだけで彼女にしたいかならない？俺はなる。そしてあつという間に完食し、午後の修行に移るといった時に、

「ねえナルト君、お願いがあるんだけどいいかしら？」

と紅さんからの言葉がそれを止めた。

「お願いですか？」

「そう。ここに来る前に買っておこうと思っていた医療キットが売り切れで、ここで売ってる物を買おうと思ってたんだけど、ここには売ってないみたいで。」

「医療キットの代わりになる薬草を取ってくればいいんですか？」

「話が早くて助かるわ。そう、野生の薬草を取って来て欲しいの。私は今シノの修行に付き合ってるから、お願いできるかしら？」

もちろん。綺麗な女性にお願いされて男なら嫌とは言えませんよ。

「良いですよ。それじゃ、行ってきますね。」

「あ、わ、私も行っていいですか先生！」

俺が立ち上がって行こうとしたら、ヒナタが紅さんに詰め寄っていた。紅さんはそんなヒナタに吃驚していたみただけど、シノは久しぶりにこのヒナタを見た。という顔をしていた。

そして、許可を得たヒナタは俺と並んで、薬草がある場所に向かった。まさか、そこであんな事になるうとは露ほども思わずに……

ちよつと歩いたところにそこがある事を、俺は知っていた。なぜなら、白と三日前くらいに来ていたからだ。だから、白がいる事に吃驚はしなかったし、ヒナタに白を見せたらどうなるかなんてのも考えなかった。

そうなのだ。俺とヒナタが向かったそこには、髪を下ろした白がいた。俺を見た白が笑顔で手を振って来たから俺も手を振り返して、白なら薬草に詳しいよなって考えて、白に近寄ったのがいけなかった。

白が俺の横のヒナタを見ると、それまで浮かべていた笑顔を引つ込め、無表情でヒナタを見ると、ヒナタもヒナタで白に引き攣った笑みを浮かべて見ている。

そして、話はこの話の中盤？くらいに戻る。

「ナルト君、彼女は一体誰なんですか、なの？」

「白、ヒナタ、まずは落ちつけ。それから、ヒナタ。白は『男』だぞ。」

「!?!」

俺の言葉にびっくりして白の顔を凝視するヒナタ。そろそつだわな、こんな顔をした男がいる方が不思議だよな……白は失礼なつて顔で……ておい、何でそんな顔してんだよ。いや、まさか、そんな……白、冗談はやめろつて。

「やっぱり……僕は『女』ですよ、ナルト君。はじめて会った時からですけど、ナルト君は僕の事男の子だと思ってたんですね。」

「!?!」

今度は俺が白を凝視する番になった。恐れていた事が……  
……一番起こつて欲しくない事が起こってしまった……  
……白が……

「女?」

俺が震える指で白を指さしそつと聞くと、

「はい。」

満面の、ヒナタに負けなくらいの可愛い笑顔をしてくる白。ああ  
神よ……………俺は白とは友達になりたかっただけな  
のに……………

「ナルト君、説明してくれるよね？」

そして、ヒナタさんそんな怖い笑顔で見ないでください。俺も混乱  
してるんだからっ!!!!





## 波の国任務だつてばよっ！4（後書き）

はい第十一話でした。

今回は更新頑張りましたよ〜〜〜！！

はあ・・・やってしまった白TS・・・TSものたくさんあつたので自分はそのままで！とか思っていた時期も私にもありました。

しかし！白は・・・白は勝つてに動きました。ええ、私の手を離れ勝手に・・・これをきつかけにして読者の皆様の一部が離れて行ってしまうかもしれないとは思いましたが、思いきってこれでいきます。

ヒナタと白のバトルを期待した人もいると思いますが、今回はこのくらいで・・・消化不良なのは分かっています。私もそうです。どろどろなくちゃぐちゃに描きたかったですよ。ですが、思った以上にサスケの部分が長くてwwww

ヒナタと白のバトルは次回に持ち越しということでご理解してくださいますようお願いします。

なんだか、サクラがどんどん空気になって行ってるような気が・・・

ま、いいですよ。サクラは残念な子っていうポジションがこの小

説では設立していますからWWW  
WWW  
WWW

それでは、今回はこの辺で。感想、レビュー待っています。

波の国任務だっばよっ！5

お昼も過ぎ、波の国独特の冷たい風が頬を撫でて行くのを感じながら、俺は今の状況を必死に考えていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「まさかと思いましたか、僕の事を男だと思っていたんですか？」

「・・・・・・・・・・」コクコク

「本当に知らなかったんだね、ナルト君。でも、女の子にそれはいくら何でも失礼だよ・・・・・・・・・・」

だって・・・・・・・・だって原作じゃ白って男だし、口調も僕だったし、なにより女だっていう証拠となる胸が平らだったんだぞ！俺が分からなくても仕方ないじゃないかっ！。

ヒナタもいつの間にか白の味方？みたいなポジションにいるし、さっきまでのはなんだったんだヒナタよ・・・・・・・・・・

「いえ、仕方ないです。僕の胸はこんなだし、口調も女っぽくないですしね。」

白はそう言いながら自分の胸を撫でるが、男のように平らな胸は何の抵抗も見せずに、撫でる白の手のそのままに下へと通す。白がその時に見せた表情は、寂しそうなもので俺に向ける顔も無理やり作った笑顔だった。

「そ、そんな事ないよ。白さんとっても綺麗で、お淑やかで・・・・・・・・だからそんな事言わないでください。」

ヒナタに至っては、自分の事じゃないのに眼に涙を溜めながら話している。いや、ちょっと待って下さい。なんか、いつの間にかシリアスになってるけど、意味わかんねえって！そりゃ俺が悪いつてのは雰囲気で分かるけどさ。・・・・・・

・ああ、もう分かった、分かりました。俺が謝ればいいんだろ？だから、二人ともそんな顔すんな。罪悪感でいっぱいになるから・・・・

「ああ・・・・なんだ、白。」

「なんでしよう、ナルト君。」

「お前が女だつてのに気付かずに、悪かったな。ホント、ヒナタの言う通りだよな。こんな綺麗な顔してんのに男な訳なかったよな。ごめんな、白。」

「い、いやですよ、ナルト君。僕が綺麗だなんて・・・・・・そんな訳・・・・・・」

誠心誠意、謝罪の気持ちで謝ったら白の頬が赤くなっていき、いつも冷静な白があたふたしだした。あれ？俺なんか変な事言ったか？

横を向いてみると、それまで涙を溜めていた眼や、悲しそうな表情

を引っ込めて、頬をプクつと膨らませて俺を睨んでいるヒナタと目が合った。ヒナタ、睨むんならもつとちゃんとした方がいいぞ。それじゃ、ただ可愛いだけだ。

「ナルト君の馬鹿・・・・・・・・」

普通の人に聞こえないくらいの小声で言っても、俺には聞こえてるぞ、ヒナタ。それに大丈夫だ。白は桃地が好きなんだから。俺の事は大事な友達って思ってるだけだから。というか、そうであってもらわないと俺が困る。まだ、いのとヒナタを選ぶ事も出来ない俺が、白までつてなったら・・・・・・・・考えただけでも嫌だぞ。。。

『しかし、お前のその願いも敵わないみたいじゃがな。』

久々に出て来て何言ってるんだよ九尾。白に限ってそんな事・・・・・・・・・・  
・・白を見てみると、それまであたふたしていたのが嘘のように、俺をちらちら見ていた。

『まあ、仕方ないじゃろう。お前は自分では気付かない内に女を落としているみたいじゃしな。ナルト、笑顔や優しい言葉はちっと控えるようにせんといかな。ククク・・・・』

そう言って笑う九尾に何も返せない俺は、はははと乾いた笑い声を

上げた。

と、そんな事もありながら、白とヒナタは俺が知らない間に仲良くなり一緒に薬草を取ったり、俺という共通の話題で盛り上がったもいた。そして、気付けば日は傾き、綺麗なオレンジ色になっていた空を照らしている。

「っん〜！それじゃあ、ヒナタ。俺達は帰るとするか。」

「あ、もうこんな時間なんだ。白ちゃん、またお話ししようね。」

「ええ、ヒナタさん。ナルト君も『また』。」

「おう。『また』な白。」

そう言っただけで俺とヒナタは白と別れ、おっさんの家に帰った。その際に、ヒナタに白の事は皆には内緒にしておくように話すと、首を傾げながら良いよと言ってくれた。まだ、他の皆には知られたくないし、作戦の事もある。そして、それはいよいよ明日。これから帰って、いろいろと準備しないと。

おっさんの家に帰ってみると、サスケがイナリと言ひ合いをしている現場に居合わせた。これが、イナリイベントか………と

いつか俺の代わりがサスケなんだな。この世界も良く出来てるじゃん。

ま、イベントについては割愛させてもらう。だって、あのイベントって今作ってる橋に自分の名前が付くっただけだしさあ……ま、サスケ大橋ってなるっただけ覚えておけばいいんじゃない？それに、俺は明日の準備しなきゃならないし。

そんなイベントが進行中だという事も関係なく、俺は忍具や着替えを準備し、明日の作戦をもう一度頭の中で展開させてから、眠りについた。英気を養うのって大事なんだぞ、それに寝坊なんてしたくないしな。



次の日は生憎の霧が多い日だった。霧が多い国、そしてこの町はそ  
の中でも霧の発生する時間帯が多いもので有名だった。でも、昨日  
までは晴れていたし、気持ちのいい朝だったはず……。それ  
なのに今日は……。空を見してみると雲が太陽を隠し、朝にも関  
わらず夜のように暗かった。

おっさんの家の外で、俺がそう感じながら空を見てみると七班、八  
班、そしておっさんが集まっていて、話をしていた。

「それじゃ、護衛に行く人を決めますか。シノ君は木登りの行、出  
来るようになったっけ？」

「まだね。あと少しで登り切ると思うけど、今日も修行かしらね。  
それから、キバ。あんたも今日はこっちよ。」

カカシと紅さんがメンバーを決めているみたいだな。ま、予想通り  
キバ、シノ、紅さんが居残りか。ヒナタは昨日一発で登り切ったか  
ら、護衛に回されるみたいだ。それから、今日は俺も護衛に付く。

作戦もあるから当然だが、嫌な予感がするからな。それも、ここ最近で一番最悪な……

うちは一族皆殺しの時にも感じた事のない、嫌な予感。こんなのはじめてだ……九尾、お前は何も感じないか？

『うつむ……我には感じぬが……それに強さで言ったらお前は、そんじょそこの奴には負けん。それでも不安なのか？』

いや……戦いとかじゃない。俺が大事にしているものが壊れるよ  
うな……そんな感じなんだ……

『大事なもの、か。ミナトやクシナ、お前の友もあやつら三人以外は里におる。それに、その三人にはお前がついている。何を不安がるのだ？』

そう……だな。何も心配することはないんだ。俺が守ればいいんだから。ここに影分身を二体残していこう。紅さんは上忍だけど……  
……やっぱり不安だからな。ごめんなさい紅さん、貴女を信じられなくて。でも俺、甘い考えだとは思うけど、一人も傷ついて欲しくないんです。

そして、キバ、シノ、紅さん、ツナミさんに手を振りながらおっさんの家を出発した。まだ嫌な予感はなくならない。頼むから何も起

こらないでくれッ！

道中そんな事を考えていたから、ヒナタが俺を心配そうに見ている事に気付けなかった。

そして、おっさんの仕事場である橋のところに着いた訳だが……

.....

「どうした！一体何があったんじゃ！？」

目に入る光景は、数人の男の人達が血塗れで倒れている姿。たぶんこの人達がおっさんの仕事仲間なんだろう。それにしても、誰がこんなことを？それにこの霧は.....

「ば.....化け物.....」

倒れている人達は全員、死ぬ程の傷は負っていない。だが、この傷じゃしばらくは動けないだろうな。桃地にはガトーの首を取りにガトーのアジトに向かってもらっている.....それに作戦通りならここにはガトーの手下がいる筈なんだが.....そいつらの姿が見えねえってのは、おかしい.....よな。

俺が一人思考に耽っている間に、カカシ達はその人達を治療するために動き出していた。それを見て俺も手伝おうとするが、もの凄い殺気を感じて橋の向こう側を見る。.....!?

「ねえカカシ先生、これってあいつの仕業よね？」

「確証は出来ないが、その可能性は高い。ヒナタ、白眼で辺りを探

れ。これをやった奴が近くに居る筈だ。」  
（ヒナタをこっちに付けたのは正解だったな。感知は俺の写輪眼じゃ出来ないからな。）

「はい！」

白眼

ヒナタは白眼で霧の中を探り、俺が見ている方向に眼を向けた時、これをやった奴と思われる人影を見つけたらしく、声を上げた。

「い、いました！橋の向こうです！」

その言葉で、おっさんを後ろに下らせてカカシは前に出る。俺とヒナタが見ている場所には、霧が一段濃くなっていて、それが邪魔をして肉眼でははっきりと見る事は出来ない。俺はチャクラの反応からそっちに人がいると分かったただけだ。

風遁・大突破！

一刻も早く肉眼で確認をしたかった俺は、カカシの指示を待たずに口から暴風を生み出して、視界を覆う霧にぶつけて吹き飛ばした。狙い通り霧は晴れ、そこに居る人物の姿を俺達に見せた。そして、

そこにいたのは顔を仮面で隠した痩せ身で大刀を担ぐ、二日前まで一緒にいて、友達になった……桃地再不斬だった。

「ナルト、ナイスだ。サクラとヒナタは怪我人の応急処置。サスケ、ナルトはタズナさんを守れ。俺はあいつを殺る。」

桃地ツ！お前は……お前は、ガトーの所に行ってる筈だろっ！何でここに……何でこんな事をしたんだ！

カカシは額当てをずらし、写輪眼を開く。そして、桃地に向かつて駆けていく。対する桃地は印を組んでいく。それは何度か見た覚えのある印。

### 水分身の術

十を超える桃地の分身が俺達の周囲を囲む。そして、本体は首斬り包丁を構えた。

俺にしたら水分身くらい相手にするのは、赤子の手を捻るより簡単な事。サスケにおっさんの護衛を任せ、俺は桃地の水分身をクナイで斬り裂いた。横目でカカシと桃地を見てみると既に戦闘をはじめていた。

桃地がここにいる事は分かった。だけど、それなら白はどこにいるんだ？作戦通りなら、白がここにガトーの手下を連れて来る筈だが、逆にここにいるのは桃地で………ああ、もう！訳分かんねえってツ！

水分身はあと五体、サスケもおっさんをヒナタ達に任せて戦っていたみたいで数は一気に半分に減った。原作同様に強くなっていたサスケは、桃地の殺気につぶれる事はなかった。

「サスケ、俺はカカシ先生の所に行く。お前は どうする？」

「決まっている。俺はあいつには借りがあからな。」

サスケはそう言って、嫌な笑みを浮かべる。そっぴやこいつ、桃地にはじめて会った時にぶるぶる震えてたんだっけ。話しながら、残り五体もサスケは火遁の術で、俺はクナイを用いて倒した。

「ヒナタ、サクラ、おっさんと怪我人を頼む。俺達はカカシ先生の所に行く。」

最後の一体を消した後、俺とサスケはカカシの後を追って走りだそうとしたその時、

タタタタタ……

千本が俺とサスケを襲った。だがそれは俺達には届かない。俺は持っているクナイで弾いて、サスケは避けたからだ。そして、千本という武器を使う奴は原作のここじゃ、一人しか俺は知らない。

「……………」

なんで、お前までそんな事してんだよ……………」

霧隠れの追い忍が付ける仮面を付けた、俺達と同じ年くらいの忍びが力カシ達と俺達のちょうど真ん中に現れた。

「うち、あいつの仲間ってところか。」

「あの子、私達と同年みたい……………」

「な、ナルト君……………」

三人が何か言っているが俺には聞こえていなかった。なんで白が……………それも原作みたいにそんな仮面付けて……………なあ、作戦は……………作戦はどうしたんだよ。なあ、白、桃地！



「ナルト、あいつとは俺がやる。お前は力カシの所に先に行け。」

サスケはそう言うと、白に向かって駆けて行く。俺は頭が混乱し過ぎて、それを見送ることしか出来なかった。

何でなんだよ……

何で……

次回

白と桃地が仮面をしていた……



波の国任務だつてばよっ！5（後書き）

十二話でした。

なんだか迷走し出した感じがしますが、そんなことはないですよ。

ええそんなことはありません。

というか、いまさらですが次回予告みたいなのいらないですか？

変わった事をやりたいなつて思つてやつてるんですけど、予告と違くなつたりして皆さまに悪いなと思ひまして……………

はあ……………文章つて難しい。

はあ……………物語つて難しい。

はあ……………人を動かすのつて難しい。

それではまた次回に……………

波の国任務だつてばよっ！6

予想以上に上手くいったな。最も苦勞すると思っていた九尾の人住力が、こんな手で心を惑わすとは・・・ククク・・・本来なら、血継限界のガキを使ってイタチの弟、日向の姫、もしくはあそこにいる小娘の誰かを殺し、人柱力を混乱させ、暴走させる手筈だったが・・・

まさか、あの血継限界のガキが人柱力の『友』だったとは……あそこまで動揺するとは思わなかったぞ。……本当に面白いガキに育ったものだ、なあ四代目。それに、鬼人を殺さずにこつちに付ける事が出来たのも大きいか。はじめは邪魔になると思い、血継限界のガキを差し向けたが……ククク……霧隠れの鬼人も所詮は人の子だったという事か。

戦況も悪くない。人住力は混乱し動けず、イタチの弟は血継限界のガキと戦っているが、写輪眼を開眼していない今ならば、勝負は目に見えている。そして、最も邪魔だったのはたけ力カシも鬼人との戦いで手が塞がっている。

ククク……これで九尾は俺のモノだ。十二年前の忘れモノをここで貰って行くぞ、四代目。

いつもより暗い森の奥で、仮面を付けた男が嗤う。だが、それに気付く者はいない。

キイン……ギン……

首斬り包丁をここまで駆使しても倒せないとはな……流石はコ  
ピー忍者のはたけカカシ、というところか。それならば！

カカシの銅を両断しようと思っただけで首斬り包丁を横に薙ぐが、それを後ろに  
跳んで回避するカカシ。だが、本当の狙いは距離を開け、術を行使  
する時間を稼ぐ事だ。

複雑だが、もう何万回と組んだ印を組んでいく。

## 霧隠れの術

今度の術は、風遁でも吹き飛ばせないぞ、カカシ。それくらいチャクラを練り込んだからな。

（また、霧隠れの術か。俺に同じ技は効かないぞ、再不斬。影分身の術）

カカシが数人に分かれたか・・・おそらくは影分身か水分身。そして、風遁ではこの霧を吹き飛ばせない事を理解した、か・・・だが、それだけじゃ俺を殺す事は出来ないぞ、カカシい！！

この霧の中を音を立てないで移動するお前は優秀な忍びだろつが、俺様も霧隠れの鬼人、サイレントキリング無音殺人術の達人と言われた忍びだつ！

## 水遁・千針の術

霧に含まれる水分を針にして霧の中をそれで張り巡らす。それも、俺の場所以外に。術発動から三秒もしない内に分身は針に削られて消え、カカシ本体にもダメージを与えた事が分かる。血が地面に落ちる音がするからだ。

さて、それじゃトドメと行こうか、カカシ。首斬り包丁を下段に構え、血の音がする場所に瞬身の術で移動する。そして、それと同時に首斬り包丁を振りおろす。

「くっ！」

カカシの背を切り裂いたが、手応えは浅かった。咄嗟に前に一步踏み出してダメージを軽減したか……

カカシが振り向きざまに、俺の頭を狙ってクナイを投擲してくるが、右に首を傾げる事でそれを避け、瞬身の術で距離を取る。油断や慢心はしないぞカカシ、お前の目はまだ死んでいない。なら、最後まで俺も俺の戦闘スタイルを貫くまでだ。



カカシ先生と再不斬って奴の戦いはこの霧で見えないし、サスケ君とあの仮面を被った変態との戦いは意味分かんないし、もうどうすればいいのよ！！

サスケ君があの変態に向かって行ったら、急にそいつの周りに鏡みたいなモノが現われて、二人を囲んでしまった。かろうじて、鏡と鏡の隙間から二人の状況は分かるけど、サスケ君が押されていることしか分からない。だって、鏡が出てきたと思ったたらあの変態ってばいなくなってたし、それに合わせてサスケ君が千本で攻撃されているのが見えただもん。

それに・・・ヒナタはさっきからナルトの傍でおろおろしてるし、ナルトに至ってはそこで呆けてるだけ。

「何やってんのよ、あんたたち！サスケ君がピンチなのよっ、ナルトあんた強いんでしょ！？なら助けに行っただけよ！ねえ聞いて

んの!!」

私が声を張り上げても、いつもなら冷やかな目で見て来るナルトが何の反応も返さない。

「何で? どうして助けしてくれないの? あんたが私の事を嫌ってるのは分かっているわよ! その理由が私が悪いってことも! でも……でも、サスケ君とあんたは仲が良かったじゃない! はじめはそうじゃなかったみたいだけど、それでも最近は私が嫉妬する位、仲が良かったじゃない!! なのに、なんでなのよっ!!!」

私がそう言っている間にも、サスケ君の体がボロボロになっていくのが見える。どんな攻撃を受けているのか分からないけど、クナイや手裏剣のように鋭利な忍具じゃないことが分かるから、あれも千本でやられている可能性が高い。

でも、そんな事がわかって私にはどうする事もできない。サスケ君にも、ましてやナルトにも勝てない私があそこに行つて何が出来るの? サスケ君の足を引つ張つて、何も出来ないで終わるに決まっている。それに、タズナさんを、この人達を守らなくちゃいけない。でも……それでいい!

「……分かったわよ。ナルト、あんたには失望したわ。私はね、最近あんたの事認めなくちゃいけないって思ってた。でも、変なプライドと親の言っていた事が頭から離れなかったから、あん

たにあんな態度を取ってたの。私に失望されたから何だって、あんたは思つかも知れないけど……でもね、仲間のピンチを救おうとしない奴は、本当に最低な奴だと思っわ。私はそうはなりたくない。」

お洒落のために髪の上にかけていた額当てを、その名の通り額に付け直す。そして、深呼吸を一つしてヒナタに顔を向ける。

「ヒナタ、ここはあんに任せるわ。私はサスケ君を助けに行く。」

「は、春野さん……。」

「それから、その馬鹿に言っておいて。最低な奴になりたくなくなったら、その不抜けた顔じゃなくて、いつもの憎たらしいくらい元気な顔で来なさいって。」

はぁ……何言ってるんだろ私。こんなに言っても反応しないこいつに、まだ助けに来てほしいとか考えてるって事？……ま、期待しないで待ってるかな、一応同じ班の仲間だしね。

「タズナさん、ごめんなさい。ホントはここを動いちゃいけないんだけど、私行かなくちゃ。」

それまで黙って見ていてくれた、護衛対象のタズナさんは「いいから行って来い。わしゃあ大丈夫じゃ。」と言ってくれた。ホント、この人には振り回されてばかりだけど、最後はいい人って思えたかな。

タズナさんに頷き、ヒナタの返事を待たずにサスケ君と変態のいる場所に向かって走る。それまで、見えなかった変態が姿を現した。私は走りながら、ホルスターから手裏剣を四枚取りだし、両手で投げる。鏡と鏡の隙間から見える変態の仮面目掛けて。

でもそれは、千本を投げられて相殺される。私は鏡から2mくらい離れた場所で足を止めて、その術の全体を見てから考える。これは、内と外同時に攻撃したら解ける結界忍術かもしれない。なら、

「サスケ君！私を外から攻撃するから、サスケ君は内から攻撃して！そうすればこの術が解ける筈よっ！」

「!?!?..分かった。タイミングは俺に合わせる。...行くぞ！」

サスケ君はクナイを逆手に持って、変態から距離を取る。その際にポーチから取り出したクナイを二本変態に向かって投げた。それを変態が千本を投げて相殺しようとしたけど、サスケ君の投げたクナイは威力を弱めることなく、千本を弾き変態に向かって行く。

生半可な攻撃はこの鏡には効かない筈……それなら、これどうよ！変態がそれを避けるため、逆方向に跳んだ。今がチャンス！

サスケ君が投げて来た手裏剣に合わせて、私もクナイを投げる。起爆札付きのね。サスケ君も私と同じ考えだったみたいで、手裏剣に起爆札が巻かれていた。そして、手裏剣とクナイが同時に鏡の一枚に突き立った瞬間、爆発を起こした。鏡はその爆発に耐えられなかったみたいで、バラバラになり、サスケ君もそこから飛び出してくる。

「ナイスだ、『春野』。」

「サスケ君私の……」

飛び出て来たサスケ君は、傷だらけの体を苦も無く起こし、私の方を向かずにそう言ってくれた。私の名前を言ってくれた……名字だけ……

「呆けている場合じゃないぞ。あいつも出て来るみたいだ。」

「そ、そうね。」

そうだ。今はそんな事で舞い上がっている場合じゃないんだ。しっ

かりしる私！

バラバラになったその鏡以外の鏡が溶けるように、その姿を消すと変態がその向こうから歩いてくる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

何か言いなさいよ！そんな変な仮面付けて、無言とか恐いんだってば！！

「春野、こいつは血継限界だ。さっきの術でそれが分かったが、スピードはカカシ並だ。」

（氷忍術なんて聞いた事ないからな。それに、あいつの印は俺が知るものじゃなかった。ツチ、厄介な。だが・・・）

血継限界？それってカカシ先生のあの目みたいなものってこと！？それにカカシ先生と同じくらいのスピードって・・・・・・・・・・私ここで死ぬのかな・・・

「だが、そのスピードにもやっと慣れて来た。だから、俺があいつの動きを一瞬だけが封じる。その隙に・・・分かったな。」

「慣れてきたって・・・・・・・・サスケ君、その目！？」

私はサスケ君に視線を移すと、サスケ君の目が赤く、そして何かの模様が あった。それって、カカシ先生と同じ……

「ああ、俺もやっと開眼したみたいだ。うちの血継限界、写輪眼が。」

不敵に笑うサスケ君……すごくカッコいい。やっぱりあんな不抜けより、サスケ君の方がカッコいいよ！

「行くぞ。あの仮面野郎の仮面を剥いで、素顔晒してやる！」

「うん！」

ナルト、あんたが来ても、来なくてもやっぱりサスケ君には勝てないわあんたは。だって、こんな頼れる男の子他にいないもの。

俺が思っていた以上に使えるようになっていた春野を、名前で呼ぶ事にした。ま、名字だがな。

そして、このよく見える眼。こいつがあれば俺はどんな奴にも負ける気がしねえ。この仮面野郎の動きは、鏡に入っていない時はそこまで早くない。なら、鏡を出される前に叩くだけだ！

俺が駆け出すのと、仮面野郎が駆け出したのは同時。交差する瞬間、俺は見切った。それまで見えなかった仮面野郎の俺の頭を狙う千本の突きを、首を捻るだけで回避して体勢を低くして踏み込む。

懐に入ったところで仮面野郎の膝が襲いかかってくる。お互い速度が乗っているため回避するのは難しい。だが、甘い。ニヤリと笑みを浮かべ、打ち上げられる膝の横に掌底を当て、軌道を逸らす。



仮面野郎は千本で突いたせいで上体は流れ、膝を上げたせいで片足立ち。いわゆる、死に体だ。そして、俺はその掌底を当てた運動を利用して攻撃を可能にする。これでも、喰らいやがれ！

一回転して来てからの肘打ち。回転の速度と肘打ちの速度を足したそれは、仮面野郎の体をくの字に曲げる。

これだけで終わらせねえぞ。くの字に曲がった仮面野郎が後ろに吹き飛ぶ前に、地面を強く蹴り、下から突き上げるアッパーを顎にぶち当てるが、仮面野郎はそれを両手の掌で威力を殺し、後ろに跳んだ。

チツ、まあ肋骨は何本かいったる。これで、あいつのスピードはまた遅くなる筈だが……右肩を見てみると千本が突き刺さっていた。変な所に刺さったか、右手がさつきから動かねえ。

あいつも只じゃ喰らわれないってことか。春野に少しの時間あいつを止めるって言っちまったからには、止めるがな。

右手を無理くり正面に持って来て、左手と合わせて印を組む。

寅の印から始まるそれは、うちには続く忍術。

火遁・豪火球の術

口から出るは、炎の塊。それも視界がそれでいっぱいになる程大きいモノ。これを喰らう、喰らわないに関わらず、あいつは何かしらの対応を取る筈。そこに、もう一度火遁をお見舞いしてやる！

印を組みながら、仮面野郎を見ると案の上氷忍術で相殺し、俺に向かって千本を投げる動作に入っていやがる。

もう一発だ仮面野郎！！

火遁・鳳仙火の術

豪火球の術とは違い、何発もの炎が仮面野郎に殺到する。これを相殺するのは面倒だぞ仮面野郎。これは俺の意思で動くからな。周囲を取り囲んだ火の玉に仮面野郎が一瞬動きを止めた。

「今だ、春野！」

「おりゃあああああ！」

女とは思えない掛け声とともに、三本束にしたクナイが仮面野郎に向かつて行き、俺の鳳仙火にそれが当たると爆発を起こした。

ほう、起爆札を巻いたクナイ三本を束にして投げたか。伊達に、くの一で成績トップを取ってないという事か。

これは、いくらあの仮面野郎でも喰らった筈。爆発が起こった場所を見ていると春野が俺に駆け寄って来た。

「サスケく「避けるサスケえ!!」」

ナルト?何をい・・グアッ

「サスケ君!？」

春野の言葉を最後に俺は意識を手放した・・・



## 波の国任務だつてばよっ！6（後書き）

十三話でしたア。

感想にもありましたが、いきなりな展開でわからないかとも思います。しかし、私の文章力ではあれが精一杯で・・・文章が書けるようになったってきたと思つた時に、手直したいと思つたので、その時までどうぞご容赦を。

いつの間にか、総合評価が2000を超えていました！感動です！（TOT）／

ユニークも50000人越えてましたし、PVもそろそろ50万超えるみたいです！（^o^）

読んでくれてありがとうございます皆さまには感謝の念を禁じえません！

本当にありがとうございます。

感想にあったのですが、番外編でミナトとクシナの話が知りたいという方がいます。その方以外にも様々な事を考えている方々もいると思いますので、ここでPVが50万を超えたら、何か記念に番外編を載せてみたいと思います。

しかし、何も案が浮かびません。そこで、この小説を読んでくださっている皆様がたに、聞きたいと思います。

番外編を書くとして、どんな話がいいでしょう？

こんなのがいいな、こんなのはどうでしょう？

そんな感想をお待ちしています。活動報告というものにも載せますので、そこに書かれても大丈夫です。

どしどし、ご応募お待ちしておりますね。

それでは、この辺で。

波の国任務だっばよっ！7

それは俺の目の前で起こった。サスケが鳳仙火の術で白の動きを止め、サクラが起爆札付きのクナイを投げての決め技？は嵌まったと思う。ただの中忍位ならあれで無力化出来る筈、でも白には効かなかった。

白の血継限界の術、魔境氷晶。あれで爆発を回避した白は、氷の刃でサスケを切り刻み、千本を体の至る所に突き刺した。血を流して倒れるサスケ。サクラはそれを見て悲鳴を上げた。

サスケの生命力が、チャクラが消えていく。頭の中が一気に熱くなり、瞬身の術でサスケの所に一瞬で移動した。そして、体の傷を確かめる。傷を確かめている内に頭の中を駆け巡っていた黒い感情は徐々にその姿を消していった。白、お前………

白を見ると、何の感情も映していない仮面が割れていて、右目だけが見えるようになっていた。その目を見てみると意識がなく、幻術に掛かっている目をしているのに気付いた。そうか………そうだったのか。はあああ………良かったあ………  
……お前操られてただけだったんだなあ………

何もかも解せなかった。桃地がここにいておっさんの仲間を傷つけた事、白が仮面を着けてここに現れた事、そして俺に気付いていない事。はじめて友達になった奴に裏切られた俺の心は思っていた以上にダメージを負っていたみたいだ。だって、サクラに何を言われても体も、口も動かなかったもんなあ。

サクラ本人は………泣いちゃってるよ、おいッ！いや、サスケのこの姿を見たらサスケにホの字のサクラなら、そうなって当たり前か。俺も泣きはしなかったけど、こいつみたいに放心してたかなあ………まだまだ未熟って事だな俺も。帰ったらもう一度修行し直そう、絶対ッ！

ん？サクラが「何であんたはそんな顔してんのよ！」とか「サスケ君が………何でもっと早く来なかったのよ！」とか言ってる。だって、サスケ死んでないもん。俺も最初吃驚して思わず瞬身の術



で、それも本気の早さで、来ちまったけど、傷が派手に見えるだけでサスケは生きている。白の奴、無意識のうちに殺さないようにしていたんだな。

操られていても白は、俺の知っている通りの優しい奴だったってことだ。そんな白を操っている奴がいる。冷静になった俺の頭はどんどん早く、回転していく。サクラの罵詈雑言はこの際無視。そんなもってサスケの事も放置。今は、白をこんな風にしたクソ野郎をどうやってブツ飛ばすか、それだけを考える。

『やっと、いつも通りになりおったか。』

九尾いゝお前、もしかして話しかけてた？

『ミナトとクシナがない今、我しかお前を守れるものはいないからな。』

ありがとな。でも、もう大丈夫だ。

『そうみたいだな。なら、早くそ奴を助けてやればよい。お前の友なのだろう？』

ああ、大事な友達だ。

瞬身の術で白のすぐ前に移動する。まずは、白を森の方に飛ばしてから幻術を解くか。ここで解いたら後々大変だからな。

白と対峙する。こいつとこんな形で向かい合う事になるとは思わなかったなあ。螺旋丸の劣化したものを瞬時に作り、千本で斬りかかって来た白の腕を捌いて、劣化させた螺旋丸を腹部に当てて森の方に吹き飛ばした。それを追って俺も森の方へと向かう。桃地の方は、カカシがいるから大丈夫な筈、あいつらの実力って同じ位だし。

後ろの方でサクラがサスケに駆け寄っている姿が見えた。サスケの事、頼むなあサクラ。

つと、そんな事考えてたら、氷の刃が目の前に展開していた。白の千殺水翔か、なら俺はこの術で対抗するかな。

### 火遁・火狐

狐の形の炎が氷の刃を溶かし、森の一部を燃やす尽くす。火が消えた所に着地し、白の気配を探る。と、千本を構えた白が叢から飛び出して来た。それにカウンターで合わせるように、幻術返しを額に当てた。

俺の幻術返しは、ある程度のモノは返してやる事が出来るから、白に掛ってるこの幻術も解ける筈。っと、白の目に意識が戻って来たな。

白の顔を隠していた仮面が落ちる。そして、地面に触れた瞬間その仮面はバラバラに割れた。

「大丈夫か、白？」

「ナ、ナルト君……僕は……」

操られていた間の記憶はあるか……なら辛い筈だな。お前は本当に優しい奴だから、自分がやった事が許せないよな。でも、お前は操られながらもサスケを殺す事をしなかった。それだけで、こいつが幻術に対抗していたって証拠だ。

「そんな顔すんじゃないよ、白。お前は最後まで抵抗したんだから。だから、あんまり気に病むな。」

白の手から千本が落ちる。そして、膝を折り顔を両手で覆い、声を殺して泣いた。よしよし、泣け泣け。ポンポンと背中を叩いてやって、泣かせる。そんな暇ないのは分かってるけど、女の子が泣いてんだぜ？それ見ないふりなんて出来る訳ねえだろ。あ、サクラは別な。

「白、今まだ桃地がカカシと戦ってる。あいつは幻術に掛かっているのか？」

「……再斬さんは……僕が、あいつに捕まらなかったらこんな事には……」

桃地は操られてない。それなら白が正気に戻った事を教えれば、もう戦う必要はないよな。

「あいつってのはお前に幻術を掛けた奴だよな？」

コクつと頷いて返事をする白。幻術を掛けっ放しってのはありえないから、この戦いを見物している筈だ。俺はそいつをぶっ飛ばしに行きたい。

「……幻術を掛けた奴は近くにいると思う。だから俺は今からそいつを探してブツ飛ばしてくる。白は俺の影分身を一体付けるから、一緒に桃地を助けて来い。」

「はい！」

よし、白も泣きやんだし、そろそろ行くか。白を立たせて、頭をぐしゃぐしゃと撫でてやる。

「なら、行くか。白、お前は変化の術をしる。さっきのがお前だとバレないようにしたい。それに、チャクラの反応からガトーの奴らがここに近づいて来てるみたいだ。お前と桃地にはこいつらを殺してもらうけど、大丈夫か？」

「任せて下さい。ナルト君こそ気を付けて下さい、あいつは「大丈夫だ。俺は強いから。」はい！」

最後にポンポンと白の頭を叩き、影分身を作りだす。原作みたいにやられてなきやいいけど……桃地……

再不斬の気配を探るが分からない。この霧じゃ俺の写輪眼も意味がないからな。だがな再不斬、俺が写輪眼だけで生きてきたと思っ  
ているなら間違いだ。

腰に着けていたポーチから巻物を取りだし、親指を背中に当てて血を付ける。そして、取り出した巻物を開いて、その書かれている場所に血を付けた親指で擦り付ける。

## 口寄せの術

ボンツと煙とともに現れるのは俺が契約している忍犬達。あとは、

いつものように敵の武器についた俺の血の匂いを辿り、喰らいついてもらっただけだが……

血を流しすぎたな。意識が朦朧としてきやがった……ナルト達は大丈夫だろうか、聞こえた限りだとサスケがヤバいらしい。ナルトは何をしているんだ？あいつがサスケがやられるのをただ黙っている筈がないが……

兵糧丸と増血丸を口の中に放り込む。これで血もチャクラも少し回復した。再不斬、そろそろこの戦いも決着だ。

チャクラを雷遁に変え、手の平に集める。チ、チ、チ、チ、チ、チ……千の鳥が鳴く音に聞こえる事から千鳥と名付けたこの術。これで決めてやるッ。

霧の中から、変な音がする……………何をするつもりだカカシ？

そして、この橋の中からする音も……………耳に伝わる二つの音、橋の中の音の方が俺に近づいてくるか……………なら！

首斬り包丁を橋に叩きつけ、自分は宙に跳ぶ。すると、忍犬が九体飛び出してきた。ふん、口寄せか。

「そんなんじゃ俺を倒すつもりかあ！カカシ！」

首斬り包丁でそいつらを斬り払う。だが、四体が首斬り包丁を避け俺の四肢に喰らいつく。ツチ、面倒な！

印を組んでいた手が咬みつかれ、印が崩れ霧が晴れる。



「再不斬、終わりだ。」

10m程離れた場所にカカシは立っていた。

「何だそのチャクラは……」

カカシの左手に集まるチャクラ。目に見える程の密度、あれを喰らえばただじゃすまないか……

「千鳥……まあ俺は雷切りって言ってるけどな。無駄話もここまでにしよう、再不斬。これで終わりだ。」

カカシが左手を突き出し向かってくる。ここで終わるか……  
白、お前を救ってやれなかった、すまん……

「はいはい、そこまでだよ、カカシ先生。」

と、覚悟を決め目を閉じていたところにそいつの声が間近で聞こえ目を開ける。

「……ナルト。お前は何をやっているかわかっているのか？」

目に入って来たのは、鮮やかな金色。それに、変化してるが俺には分かる。白……そうか……そいつに助けてもらったか。

「カカシ先生、俺達嵌められたみたいだつてばよ。」

「……詳しく話せ。」

カカシは術を解き、九尾のガキと話をしている。その時に、ガキが目で行けと言っているのに気付く。ガキに助けられたのは癪だが………仕方ない。

白と思われる青年に目で合図をして、俺達は瞬身の術でここから移動した。

ふう・・・ギリギリセーフだな。カカシにガトー達が近づいている事、再不斬達が裏切られたのではないかという事、俺が倒した奴が誰かに操られていた事等を話す。

続けて、怪我人を連れてここを離れた方がいい事、カカシとサスケもその怪我人に含まれる事を言葉の中に含んで話した。その時のカカシの顔、一応俺は上忍で、お前達の上官なんだけどって言うてるように感じた。

怪我人に上官も部下もなくなえ？って言うのが俺の意見。昔見てたアニメとか漫画にもあったけど、上官が残って部下を逃がすみたいなのあったんだけど、あれって常々疑問に思ってたんだよな。なんで一緒に逃げないのか。

プライド？責任？階級？それって命より大切なのかなって思ってしまっただよなあ俺って。だから、カカシにあんたは今、俺より弱く

て、足手まといって言ってやる。あ、もちろんオブラートに包んでね。

白と桃地には、ガトーとその手下どもを殺ってもらったつもりだからいいとして、俺はカカシ達に付いて行って本体が来るのを待つかな。

はあ……影分身も大変だよなあ……

おうおう、こんなところにいやがったかクソ野郎。

あ、ども本体のナルトです。俺は今、白に幻術を掛けた奴の目の前にいます。九尾に変なチャクラを感じたら教えろって言うてたら、なんと一発でビンゴ。

てか、これも偶然じゃないんだろうな。だってこいつ、見た事あるもん俺。見た事あるって言うても、雑誌の中でだけどな。奇妙な面を着けて、赤い雲の模様の外套を羽織った変態野郎。

「九尾の人住力、お前の方からやって来てくれるとはな。ククク・・・」

暁の構成員トビ改め、うちはマダラさんじゃないですか。というか、あんた今出て来ていいの？出番まだ先だと思ってたよ、俺。

てか、そろそろ笑うの止めてもらえないか。マジでムカつくから。

「おい仮面野郎、雰囲氣的に言ってお前が白に幻術掛けたクソ野郎でいいんだよな？」

「ククク・・・ああ、そうだ。あの血継限界のガキに幻術を掛けたのは俺だ。」

マダラの野郎・・・こんなムカつくキャラだったとは、流石敵キャラってことか。つうか、俺こいつに勝てんのか？原作じゃ誰もこいつに勝てなかったと思うんだけど・・・いや、そんなの今は関係ねえ。久々に頭に来てんだよ俺は。

### 風遁・真空波

口からカマイタチを出す。これはダンゾウの使っていた技。ダンゾウは嫌いだけど、まあ使えると思った術だ。

それを、お得意のすり抜け？ま、透明化みたいなもので喰らわないマダラ。こんな奴どうやって倒せばいいんだ？

「いきなりか、ならこちらからも行くぞ。」

マダラって、なんか術使ってたっけか？とか一瞬思ったけどこいつ、俺をクナイで斬りつけてきやがった。ま、父さんの速さみたいな凶

悪さじゃないから捌けるけど、こいつ攻撃の瞬間だけ実体化すんのか。

なら、この時に攻撃を当てればいいんだけど……

「驚いたぞ、あの生まれたばかりで何も出来なかったガキが、俺の攻撃を防ぐとはな。」

マダラがなんか言ってるけど、無視。こいつ倒すのめんどくさいな……一撃入れて逃げようかな。

「あんたを倒すの、骨が折れそうだから、俺、逃げる事に、するよ！」

「逃がすと思うのか？」

マダラとクナイで鏢迫り合い（鏢ないけど）をしてるのを、力で振り切って距離を開ける。

「いや、俺は逃げるって言ったんだぞ。」

九尾、チャクラを貰うぞ。

『奴を喰い殺してやりたいが、お前が今退くというなら我はそれに従おう。それに只逃げるだけではないようだからな。』

は、当たり前だろ。あいつは白を、あんなに優しい白を操ったんだぞ？それを笑って許せるほど俺は人間出来てねえよ。

『ならば、好きなだけ使うが良い。奴に深い傷をつけてやれ！』

「おつよ！」

マダラに気付かれないように、風遁、火遁それぞれの螺旋丸を両手の指に発動させる。無印の術でこんなに強い術を俺は知らない。

「お前の中の尾獣、貰って行くぞ。」

マダラが手裏剣を四枚投擲し、さらにクナイで斬りかかって来た。なんで瞳術を使わねえんだ？とか思うけど、使ってこないならそれはそれでラッキーって事で。

手裏剣を足刀で弾き、斬りかかって来たマダラのクナイが俺の体を斬り裂く。痛みを我慢し、俺の痛みのその何十倍にもなる螺旋丸十



発をマダラの実体化になった体にぶち当てる。

痛え……畜生、こんな深く切り裂いていきやがって！

胸から右わき腹にかけて斬り裂かれた傷跡。それを、直ぐに九尾のチャクラを流して治癒していく。さつき九尾のチャクラ結構使っちゃったからなあ……治りが遅え。

「グ……俺をここまで追い込むとはな……」

マダラがそんな事言ってるけど、それを無視。俺は残ったチャクラで父さん十八番の術、飛雷神の術を発動させ、ここを離れる。

じゃあなクソ野郎。俺はマダラから離れる瞬間そう小さく呟き、影分身が持っている術式が書かれたクナイの所に跳び、俺は意識を手放した。

## 次回

これで波の国とさよならかあ……………

原作より濃いもんになってたのって俺だけかな思ったの。

はあ……………早く木の葉に帰って母さんのご飯食べたいなあ……………

。。。それで次回……………

## 波の国任務だつてばよっ！7（後書き）

いやぁ今回は難産も難産。こんなに長い時間開けてしまつとは・・・

本当にすみません。ええ、今回のようなことがないように頑張るつもりです。

・・・というか、こんなぐちゃぐちゃになってしまいましたません。

私が書きたいものって何なんだろう？とか、思っちゃってます。空気を变えて、番外編も書き途中です。

コメントがなくてあわあわしながら自分で考えて書いてます。

というか、けいおん！！終わっちゃいましたね・・・私最終回ちらつと泣いてしまいましたよww

このアニメの終わり目って嫌です個人的に。新しいアニメが始まるのはとても嬉しいです。ですけど、終わっちゃうってなると・・・

まぁ、いろいろコメントもあつてアンチコメもありました。

私はこう思います、アンチするなら見るなああああああ！！！！そして、りっちゃん大好きだあああああああああ！！！！

!!

失礼しました。

P V 50万 ユニーク 5万 達成記念 番外編

『平和ねえ……………』

『そうだね。本当に平和だ……………』

リビングにあるテーブルに肘をついて、膝裏まで届く赤い髪を指で弄りながら女性がそう呟くと、その向かいに座って女性の事を見て微笑んでいる金色の髪の男性が頷きながらも同意を示す。

ここは木ノ葉の里。そして、その中にある一つの家。本作の主人公、

うずまきナルトの住む家である。

女性の名前は波風クシナ、旧姓うずまきクシナである。小さい頃はハバネロの赤い悪魔として同期生、また大人達に知られていた。波風ミナトの妻にして、うずまきナルトの母親である。

男性の名前は波風ミナト、木ノ葉の里の四代目火影にして歴代火影の中で最強と呼び声高い存在である。今は、三代目火影に席を預けてしまったが、本来なら今も現役として働いているのだが・・・それは今更述べなくても良いことだろう。今の彼は誰にも知られることなく、この家で隠居しているただの十代の子を持つ父親である。

ナルトの姓が波風じゃないのは、二人が本来ならいない存在であり、三代目にうずまきと姓をつけられた為である。本作のナルトは波風と名乗りたいが、世間体のため名乗れないでいる。

と、そんな二人であるが、今も現在進行形でナルトが波の国へと任務で出ているので暇な時間を過ごしていたりする。いつもなら、夕方、もしくは夜に帰って来ていた自分の息子の話を聞いたり、息子に修行をつけてあげたり、料理を作っであげたり出来るのだが、ここ五日・・・それが出来ないでいる。

『ねえ、ミナト。』

『何だい、クシナ。』

『・・・外に出てみない？』

クシナのその言葉に吃驚して、それまで頬笑みを浮かべていたミナトの顔が崩れ、目を見開かれんばかりに開いた。

『・・・クシナ、それがどういう事か、分かって言っているの？』

『ええ、もちろん。ナルトが私達を里の皆に見せたくないって思ってるのは知ってる。それを分かった上で言ってるの。』

ミナトは少し考える振りをして、薄眼でクシナを見てみる。

(・・・クシナの言う事を聞かないと間接を外されたり、口を聞いて貰えなくなるし、それ以上に、その日一日動けなくなるんだよなあ・・・ま、それも懐かしいけど。)

ミナトに見えたのは、クシナが期待の籠った目を自分に向けている姿。それに、小さく笑みを浮かべて仕方ないと自分が折れる事にする。

『……分かったよ。なら、出してみようか。』

『本当に！？やったってばね！ナルトはいないし、家に引き籠ってばかりなのって私の性に合わなかったんだよねえ。』

『……出るのはいいけど、もちろん僕も付いて行くよ？それと変化の術はして行こうね。』

そんなの分かっていると云わんばかりの笑みで以って、ミナトに答えるクシナ。それを見て、本当に敵わないとこちらも笑みを浮かべるミナト。

それにと、クシナは頬を若干赤らめさせ、

『ミナトと久しぶりにデートしたかったから……』

そんな事を言われたらミナトも、照れてしまい頬を赤らめさせる。両親のこんな姿をナルトが見たらどのような反応を見せるのだろうか。いい年してデートなんて、と恥ずかしがるだろうか？それとも行って来いってばよ、と笑って送り出すだろうか？それはきつと、後者なのだろう。なぜなら、ナルトはこの両親の事を心から愛し、信じ、尊敬しているから。



準備もそこそこに、家を出るためにお互い変化の術をする。クシナは自分の特徴ともいえる赤い髪を黒に変えて別人となると、ミナトもその自分の特徴ともいえる金色の髪を茶色に変え別人となる。

二人はもともとイケメン、綺麗といった部類なので変化してもそれだけは変わらない。二人はお互いの変化した姿にまた頬を赤らめさせるのは、仕方のない事だった。

久々に歩いてみる里の中は、十二年前と変わらずに二人を迎えた。ここが懐かしい、ここでクシナと喧嘩したね、と思い出話も尽きることなく、里の中を練り歩く。

その時に、男性女性関係なく二人の事を振り返る。あんな、カッコいい人、綺麗な人、この里にいたかなあと。二人はその事に気付きながら、笑みを浮かべる。クシナはミナトの腕に自分の腕を絡ませ、頭を肩に預ける。ミナトは、転ばないように必死になっているが、それも楽しい事と思い笑みは崩さない。

二人のその姿に、里の者たちは恥ずかしがったり、羨ましがったり、お似合いだと思ったりと様々だった。その際に、ガイやアスマ、アソコといった未婚、恋愛してない忍びの姿もあったとかなかったとか………

そして、二人は忍者アカデミーの前に来ると、受付で中を見学させてもらう事を頼み、今は校舎の中を歩いている。

『懐かしいわね。あ、ここ私達の教室よ。』

『そうだったね。君が編入してきた時の事は、今でも覚えているよ。』

『え？そ、そう？』

『うん。だって、自己紹介でいきなり火影になるんだあって、僕達に啖呵を切ったんだよ？それに、反応した男子たちが君に悪口言ったら、そいつら次の時間にボロボロであらわれたじゃない。あれは、吃驚したよ。』

ミナトは当時の事を思い出して、授業中なのをお構いなしにクククと笑い声を上げる。それを見たクシナはフンッと頬を赤く染め、そっぽを向く。『あれは、私が悪いんじゃないってばね。』と小さく呟くクシナを見て、ミナトはごめんごめんとクシナの頭を撫でながら、止まっていた足を動かす。

クシナも頭を撫でられ機嫌を良くして、ミナトの隣を歩く。二人のその姿は案内をしている中忍で先生になったばかりの新米には、恥ずかしくも自分の理想の姿に見えた。ちなみに、この先生は女性であり、案内をしている最中にミナトに見惚れクシナに睨まれたのはまた、別のお話。

見学もそこそこにアカデミーを出て、公園へと歩を進める。ちょうど時間も一時過ぎ、二人は一つのベンチに座る。クシナは持っていたバスケットをベンチの上に置き、ミナトにサンドイッチを渡し、自分も一つ手に取るとそれを頬張る。

ミナトが美味しいよと言えば、クシナがありがとうと返す。二人の顔には溢れんばかりの笑みがある。昼食も食べ終わり、二人は木陰を見つけてそこで横になる。

クシナが膝枕しようかとミナトに聞くと、二人で横になろうとミナトが言う。それから二人は手をつないで横になり、蒼い空を見上げながら、目を閉じる。

『・・・今度はナルトも連れて、一緒に来ましようね。』

『そうだね。でも、その時はナルトを説得しないといけないけど。』

『大丈夫。私がいえば、あの子ってば最後には何でも聞いてくれるもの。』

『あはは・・・なら大丈夫かな。』

(ナルトも俺と一緒に、クシナには勝てないからなあ・・・)

二人がのんびりとそんなことを考えていると、ガラの悪い三人組が公園の中に入って来るのが見えた。

二人はそれを無視して、話をしていたが三人組はこちらに向かってくるのが分かり、上半身を起こして身構えた。

「おお、噂通りのベッピンじゃねえかよ。」

「里の中にこんなベッピンいるなんてな。」

「隣の男邪魔じゃね？殺しとくか？キャハハハ！」

三人組の男たちが、二人の目の前に来て汚い言葉を発する。それを、冷やかな目で見るのはクシナ。そして、三人組にご愁傷様と生温かい目で見るのはミナト。

クシナは、ミナトとの久しぶりのデートの時間を潰しているこの男達を血祭りに上げるために立ち上がる。それを見た三人組は、「お、なんだ俺達と遊んでくれんのか？」「そうそう、そんな男よか俺達の方がいいぜ。」「こっちの遊びでもしよっぜキャハハハ！」

一人の男が自分の股間を叩いて見せる姿に、クシナはとうとうキレた。股間を叩いている男の股間を、これでもかという威力で蹴り上げ、浮いたところを前蹴りでぶっ飛ばし、左右で笑っていた男達の胸倉をつかむと、前蹴りでブツ飛ばした男の所に投げ飛ばす。

そこに、『程々にして上げてね。』と、ミナトから声が掛かるが、それに『無理』という輝かんばかりの笑みで返すクシナ。それから、地獄絵図が展開されるため音声のみでお楽しみください。

「グギヤああああ！そこh『黙れ腐れガキがッ！！』ブギヤあああ  
！！！」

「ゆるs『許すわけねえだろうが！！！』おおおお！！」

「あkfdlljnhkhjkknjば・kjggb。あjnng!！！！！」

『はぁ………久々にハバネ口の赤い悪魔を見たなあ……  
………というかまだ現役じゃん………』

ミナトの言葉にあるように、クシナの髪は変化して黒くなってはいたが、ブワッとチャクラによって舞い上がり、赤い悪魔改め黒い悪魔としてそこに現れていた。

三人組を叩き潰したクシナの顔は、スツキリ爽やかという位にツルツルピカピカになっていた。ストレス発散？が出来て、体の調子が良くなったのか、クシナはミナトの腕に抱きつく強さを更に上げて、くっついて歩いている。

そんなクシナに苦笑をしながらも、拒むことなくミナトはクシナと里の中を練り歩く。自分達の家へと向かって。

余談だが、後に綺麗な女性に絡もうとすると黒い悪魔が現れ、肅清

されるといった噂が里の中を駆け巡る事になった。

『私のせい？』

『いや、クシナのせいじゃないよ。』

『ありがとう、ミナト。』

『どういたしまして。』

次回

番外編はノリと勢いで書きますので、皆さまの読んでみたいという案もまだまだ募集していますので。

PV 50万 ユニーク 5万 達成記念 番外編（後書き）

さて、番外編でしたがどうでしたでしょうか？

私としてはもっとラブラブさせたかったなあっていうのが本音です。

でも、番外編書いていて思ったのは、何でこんなに書きやすいんだ！ということ。

気分転換には最適のものだなあって思いました。WWW

というか、神は私達を見捨てませんでした！

けいおん映画化決定！！！！！！！！

うおおおおおおお！！！！

りっちゃんにまた会えるうううううう！！！！

と、深夜にも関わらず一人騒いでしまいましたWWW

感想、レビュー、活動報告へのコメ、どしどし待っています。その



一つ一つが私の執筆の助けにもなります。

それではこの辺で。

今回は波の国を出て、いよいよ中忍試験編です。

どんな感じにするかは………まあ秘密という事で

wwww

波の国から木の葉の里へだってばよっ！

朝独特の匂いが鼻を撫で、暖かい陽光が体を包み込む感覚を覚える。  
ああ、もう朝なのか。まだ閉じていたいと主張する目に力を入れて  
開く。そして、目に飛び込んでくる物はいつも見慣れた天井……  
……ではなく、

「おっはようナルト！」

「お、おはようナルト君／＼」  
「おはようございますナルト君」

「……………?????」

上半身も起こさずに、目の前の光景が間違いだと思いたくて目をゴシゴシと擦る。でも、俺の目からは三人は消えてくれなくて……………

一人は元気いっぱいの笑顔で俺より薄い金髪を持つ少女。

一人は照れているのか、頬を朱で染めモジモジしながら俺の事をチラチラと見ている短めの黒髪を持つ少女。

一人は頬を朱で染めながらも、付きの笑顔で以って、いつもはお団子にしている黒い髪を流している少女。

「……………おはよう、いの、ヒナタ、白……………  
で、お前達何してんだ？」

はい、意味が分かりませんが、いの、ヒナタ、白の三人が目の前にいます。何で?どうして?というか母さんと父さんどうした?等々表には出してないが、俺は内心で焦りまくっている。

「……………それはあ……………」

「……それは？」

もったいぶらずに早く言えよ！てか、ヒナタもノリ良くなったなあ  
くく

「私と結婚したからよ！」

「わ、私とナルト君がけ、けけけ結婚したから／＼／」

「僕達が夫婦になったからですよ」

………な、

「なんじゃそりゃあああああああああああああああ！！！！」

「！」

「なんじゃそりゃあああああああああああああ！！！！！」

「ッ！？」

「な、ナルト！あんた、起きるなりそんな大声出さないでよっ。吃驚するじゃない！」

は？これが大声出さず・・・に・・・

声のする方に顔を向けてみると、直ぐ傍に目を見開いて吃驚しているヒナタと、ドアのところの俺に咬みつかんばかりの勢いで言うてくるサクラがいた。

ヒナタはいるけどいのも白もない・・・もしかしてさっきまでの夢？・・・はああああ・・・助かったあ・・・

「な、ナルト君っ！」

俺が一人その事に安堵して、溜息を出していたらヒナタがポロポロと涙を流して俺に抱きついてきた。おいおい、何で泣いてんだよヒナタ。

「・・・はあ、ヒナタに感謝しなさいよ。あんたの事を心配して、ずうつと見ていたんだからね。だから、安心させてあげなさい。私はあんたが起きたって先生に言ってくるから。」

「な！？おい、サクラ！」

「・・・あのデコりん、泣いてるヒナタとかどうすりゃいいんだよ。カカシとか来るまでずっとこのままなのか？」

ヒナタの背中をポンポンと優しく叩きながら、カカシ達が来るのを待っていたらカカシと紅さんがドアを開けて部屋に入ってきた。

「おゝ起きたみたいだなナルト。なんだあ？起きてから最初にする事が女の子を泣かせる事とか、お前も罪な男だねえ〜」

五月蠅えよカカシ。好きで泣かす訳ねえだろうがっ！それから紅さん、あんたもクスクス笑ってないで助けて下さい。

「ま、それはいいとして。」

よくねえよ！！頼むから、話し始める前にヒナタをどうにかしてくれえええええ〜！！

それから数分・・・・・・ヒナタを紅さんに任せ、部屋には俺とカカシだけが残り、俺が何でこんな所で寝ているかっていう理由を教えてもらった。

カカシ曰く、俺はカカシのところに行った影分身のところは無事に辿りついたらしい。サクラ辺りがどこから現れたのよこいつ！？しかも、ボロボロだし！とか馬鹿な事言ってたらしいけど、そこは重要じゃないので省略する。

んで、俺はマダラにやられた深い切り傷のせいでボロボロ。それもクナイに毒が塗られてあつたらしく変な呼吸をしていたんだそう。九尾のチャクラを結構使ったから抵抗力とかが弱まったんだなあ・・・と、まあそれで橋のところに行ったのが影分身だとカカシが瞬

時に理解し、本体の俺を背負い直ぐにおっさんの家に向かわせたらしい。

カカシとサスケの二人も傷ついていたらしいけど、俺の方が重傷らしかつたから一刻も早くって思ったんだってよ。それで、おっさんの家についた影分身は直ぐに紅さんのところに向かい、解毒と治療を頼んだらしい。それと、同時に影分身は術を解いたみたいだ。

それからここに残しておいた影分身二体も本体が帰って来たことで術を解いたみたい。術を解いた時に、本体の俺が意識を保っていなかったから、今そんな時の状況が頭の中にフィードバック？して来ている。

「ま、お前がここで寝てるのはそういう事だ。俺達がお前の影分身に向かわせた後のことは……ま、今はいいだろ。後ろのあいつらもお前と話したいみたいだからな。」

と、カカシが後ろに指をさしたから、ドアの方を見てみるとキバにシノ、ヒナタが覗いているのに気付いた。ヒナタ……泣きやんだみたいだな、良かったあ。それに、何だかんだ言っただキバの野郎も俺の事心配だったみたいだし。やっぱり友達っていいよな。

俺が寝ている間に合った事をもう少し聞きたい気もするけど、今はカカシの言う通りこいつらの相手をしよう。心配掛けたみたいだしな。



翌日には九尾のチャクラと俺のチャクラは回復し、体も元通りになった。あ、俺は五日も目を覚まさなかつたらしい。マダラの野郎が人住力にも効果を發揮する毒をクナイに塗っていたからだと思う。あいつとは、またどっかで遣り合う事になると思うけど、出来るならもう戦いたくねえ。だって、攻撃を擦り抜けるとかあり得ないだろ……

つてことで、あの戦いから一週間経ってる事になるんだな。白と桃地があれからどうなったのか知りたいから、さっき影分身を一体向かわせた。どこにいても俺の影分身なら見つけてくれる筈！と、一人意気込んでいたら、後ろから声がして振り返ると、サスケが包帯を巻いた痛々しい姿で立っていた。

何してんだこいつ？と思っていたら、「目が覚めたんならいい。勘違いするなよ、俺はお前の事を心配していたんじゃないからね。」と、誰得よというツンデレっぷりを披露して下さいました。男のツンデレとか……ないわ。

俺がサスケのその行動にうんざりしていると、サクラとカカシが部屋に入って来た。その時に、俺とサスケのそんな現場を見たサクラが何かぶつぶつと言っていたが、まああいつの事だからサスケがらみのことだと思っし、無視した。

「ナルトも動けるようになったし、そろそろ里に帰るぞ。」

お、やっと帰れんのかあ。白と桃地に合うためだけに来たようなもんだからな、波の国。それに、俺も母さんのご飯を食べたいから帰れるなら早く帰りたい。サクラとサスケも特に問題はないみたいで、頷いた。

白と桃地には、里に帰る事を伝えなくちゃならないから影分身が術

を解いたら、即効また影分身を向かわせようつと。どこにいるかかってからの方が効率いいしな。出来れば二人には木ノ葉の里に来て欲しいけど、桃地がなあ……ま、火影のじいさんに言えばなんとかしてくれるだろ。

あ！言い忘れてたけど、ガトーとその他はちゃんと二人が処理してくれたみたいだ。俺が寝ている間に、ガトー達が森の中で死んでいるのを紅さん、キバ、シノが見つけて、それを町に知らせたことで、この町を支配していた恐怖がなくなっただ。

依頼もおっさんの護衛ってことだったし、この橋の完成を邪魔して来るような奴らはもういない。なら、俺達の任務はおしまいつて訳だ。それから、俺が何でこんな大けがを負ったのか、それを説明するのはガトー一味を使わせてもらった。実力的に、ガトーの奴らに俺がやられる訳がないとカカシに言われたが、それはドジをして奴らの罠に嵌ったからと説明した。胡散臭そうにしていたが、最後には納得してくれた。まあ、こればかりは、正直に話すのは難しいからな……

あ、それから紅さん達八班も俺達が帰ると合わせて帰る事になった。まだ怪我が治っていないカカシとサスケをフォローするためだ。ちなみに、俺も怪我は完治してるがそれを悟らせないために、包帯&湿布も体に張っている。

そして、朝ご飯だけを御馳走になって俺達は波の国を後にした。別れる際に、イナリがサスケに泣きついていたけど、サスケは恥ずか

しそうに「これから頑張れよ」って言っただけ。それを見たキバがクククと笑いを我慢してたけど、俺も内だけで笑っていた。

だって、あのクールキャラのサスケが頬を掻きながら、恥ずかしそうにしてたぞ。こいつの事を知っている俺達からすれば、こんなサスケはレアだからな。大いにこれからこのネタでカラかってやろうと心に決めた。

それから、原作でナルト大橋って名前になった橋だが、この世界ではサスケ大橋って名前になっていた。まあ予想通りだけど、これを知ったサスケがまた照れるんだろうなって含み笑いをしながら、足を動かす。

道中はそんな事を考えながら、八班の奴らとワイワイガヤガヤ五月蠅く帰った。

さらさらキラキラ流れる川。それに掛かる橋の上で欄干に寄り掛かり、空を流れる雲を見ながら俺は一人の大人を待っている。

その隣には黒色、桃色の髪の少年少女が腕を組み目を閉じて、あるいはだらあ〜と体を前かがみに倒して俺と同じく一人の大人を待つ。腕を組んでいる少年がうちはサスケ、だらあ〜として馬

鹿女が春野サクラ。

波の国に行ったのが、だいたい春あたり。そして、今は夏に入ったのが最近になって蒸し暑くなり、ミンミンと五月蠅い蝉の鳴き声を右から左へと聞き流し、俺達は人を待ち続ける。

三人とも服装は夏に入ったからそれなりに涼しいものになっていて、俺は青い柄物のＴシャツにハーフパンツ。サスケは、熱くないのか黒いタートルネックのシャツにこれまた黒いハーフパンツという装い。サクラは・・・女の服装なんて知らねえから何とも言えない・・・ま、スカートが短くなっているとだけ言っておく。

「・・・来ないわね。」

「また、寝坊としたかってふざけた理由だろ。」

「あいつが何時にここ集合って言ったか覚えてるか？」

「「１１時よ・だ。」」

「だよなあ・・・」

腕時計を確認してみれば、時刻は既に12時を大きく過ぎ、もう少しで1時になるうところ。こんなクソ熱い日に遅刻とか・・・  
・ふざけんなよ力カシい・・・

そう。俺達の待ち人とははたけ力カシ、俺達第七班の担当上忍であり、四代目火影の俺の父さんの教え子であり、イチヤイチャパラダイスなんていうエロ本を何時も手放さない変態忍者だ。

波の国から帰って来て1カ月。サスケに修行というイジメをして、ヒナタやいの、キバ、シノ、シカマル、チョウジと遊んだり、任務したり、白と桃地がいる屋台に行ったり・・・なんていう一か月を過ごし、俺達は今力カシを待っている。白と桃地についてはあとで説明する。

今日の任務はなんだろうな・・・そろそろ簡単な任務は勘弁して欲しいんだけどなあ・・・白の作るアイス食べたいなあ・・・

夏の昼間、それも太陽が最も高く位置し俺達にこれでもかと紫外線を浴びせる時間帯。そんな事を考えながら、俺達三人は橋を横断していく人達を流し見て駄目な大人を待つ。そして、それから待つ事さらに三十分。

「よぉ〜悪い悪い。今日は道に迷ってた。」

「『嘘つくな!!』」

綺麗に合わさった三人の抗議の声に、カカシはどこ吹く風で片手をズボンのポケットに入れて、さわやかな笑みを浮かべながらこつちに歩いて来る。

こんなに人を待たせておいて、その顔は何だよ。ああ〜イライラする……

「今日ここに集まってもらったのは任務の事もそうだが、お前たちを中忍選抜試験に推薦したってことを言いたくてな。」

「『……』」

カカシいきなり何言っただ？てか、もうそんな時期かよ！何も情報ないし、原作知識も曖昧になって来て、何時中忍試験あるか分らなかったから、この知らせには俺も吃驚。

サスケとサクラも、そんな大事なことを簡単に、それも遅れて来たところに言われたので、頭の中が混乱していると思う。

それにしても、中忍試験か……大蛇丸にカブト、我愛羅が出て



くるんだよな。前二人は問題なくブツ飛ばすけど、我愛羅はなあ・  
・あいつも俺と同じように里の奴らに迫害受けてるんだよなあ。  
よし！あいつとも友達になろっ。ついでにテマリと人形使い？とも  
仲良くなればいいなあ。

「よし、それじゃ今日の任務に行くぞ。依頼内容は犬の散歩だ。」

カカシはそう言うと、来た道を引き返すように歩き出す。俺達もそれ  
れに続く。三人の思いはもう今からのふざけた任務じゃなく、中忍  
試験に向いていた。

やっと中忍試験！右見て左見て、いるいる下忍がたくさん！

音忍とかこつち睨んでるけど、そんなの恐くもなんともないぞ。

それからカブト、隠れてるようだけどその裏の顔がにやにやしてんのなんて俺にはお見通しだ！！

ぞれでは次回をお楽しみに。。。。。。

波の国から木の葉の里へだってばよっ！（後書き）

第十五話でした。

更新遅くなってしまい申し訳ありません。

卒論を前半だけでも書いておかなくてはいけず、そちらの方に時間を割いていました。

やっと波の国から出る事ができましたww

長かったと個人的には思うのですが皆さんどうでしたでしょうか？

ナルトのssを色々見てみると、200分もかけて波の国までしか書いてないのって私だけのようで……すみません。もう少しサクサク進みたいんですが、書いているとどうも文章が無駄に多くなってしまう……

まあ、中忍試験に入ることが出来ますからいいんですけどねww  
ww

この自己満で出来たssを読んでくださいます皆さま、感想をくれる皆さま、そして、りっちゃんが好きなのこのあなたww

全てに感謝を。

中忍試験だつてばよっ！

中忍。それは下忍とは違い、自らが部隊のリーダーとなつて部下達をフォロー、または指示を出し任務を遂行する者の事。

その中忍になるための試験が行われるのはここ『忍者アカデミー』。そこには、いつもなら下忍になるために通う子どもたちの姿があるのだが、今日この日のアカデミーには、中忍になるべくこの時のために腕を磨いたと思われる下忍達の姿があつた。

その下忍達の中には、受付を済ませた俺達第七班の姿も勿論ある。アカデミーの中に入って集合場所の所に向かつている訳なんだが、ここに来るまでシカマル達に出会わない事から、きつとあいつらは既に集合場所の『301』の教室にいるんだと思う。

と、考え事をしながら歩いていると、『301』と書かれたプレートのある教室の前で喧嘩・・・じゃないないけど騒がしくしている奴らを見つけた。てか、ここ2階なんだけど・・・お前から中忍にな

るために集まっ て来たんじやねえの？

「サクラが、「ちよつと、止めた方がいいんじゃない？」とか俺に言  
つてくる。はあ？何で俺がそんな事しなきゃならねんだよ、めん  
どくせえ。3階に上がるためには、向こうに行かなくちゃならない  
んだぞ？」

「めんどくさいから俺はパス。サスケは？」

「フンツ、あんな茶番に付き合つてやる程、俺は暇じゃない。」

「……だつとよ。俺ら二人は無視して先に進むけど、サクラ・  
お前が止めて来るか？」

「うう……はいはい、分かりました。あれを放置して、先に  
行けばいいんですよ！」

「サクラを誘導するのにサスケは使えるからなあ。あ、この1ヶ月で  
俺とサクラはちろつとだけ仲良く？なつたぞ。名前を呼ぶくらいに  
は。知り合い以上、友達未満つて奴？かな。」

「サスケに修行をつけていると、なぜかサクラも付いて来るようにな  
つた。んで、たまあに『遊んで』やっていたら、俺に向けて来る目

がやっと普通になったんだ。ま、友達にはなれるかは、わからねえけど。サスケともまだ友達じゃないかな。でも、限りなく友達に近い存在にはなってる。

「ふうん、そんなんで中忍試験を受けようっての？止めた方が良くんじゃない、ボク達？」

と、そんな声が聞こえるが無視無視。いの達が待つてるだろうから早く行こ〜。だが、そんな俺の思いとは裏腹に面倒事があっちの方から絡んできやがった。

ドカツ！！

そんな音が目の前で鳴り視線を少し下げてみると、原作でおなじみのオカツパ、ゲジマユ、全身緑色のタイツ・・・ロツク・リーその人が口角に血を付けて苦しそうにしている姿があった。

そこに、「リーー！！」と悲鳴に近い声を上げて、駆け寄って来るのは髪を左右でお団子にし、簡単な中華風の服を着たテンテンだ。あ、ちなみにテンテンの声はちゃんと田村ゆかりボイスだったぞ。言っ  
てなかったけど、ヒナタの声も水樹奈々ボイスだし、いのの声も柚  
木涼香さんボイスなのだ！はあ、リアルのゆず姉さん可愛かったな  
あ・・・・・・

「おいおい、中忍って言ったら部隊の隊長レベルだぜ？任務の失敗、部下の死亡・・・それは全て隊長の責任になるんだ。それが・・・」

さつき無視していた声の奴がこっちに歩いて来ながら話す内容はどれも正しい、が、こんな奴が中忍だと思つと呆れてしまう。下忍をいじめて悦に入ろうなんて・・・だから上忍になれないって事に気付かないんだろうな。

「お前みたいな弱い奴に務まる訳ねえだろうが!!」

パシッ

歩いて来るなり腕を振り上げ、リーを殴ろうとするそいつの腕を止める。いや、面倒事は勘弁だけど、目の前でやられるのをただ見ているだけってのは、いただけないっしょ流石に。まあ、リーのこれも演技なのも分かってるけどさ・・・

「はい、ストップ。そこまでにしてくれないですか、お兄さん。喧嘩がしたいなら、ここじゃないとこでやってください。・・・正直邪魔なんですよね。」

「・・・放置するんじゃないのか？」



「いや、向こうから近付いてきたんだから、これは不可抗力だろ？」

「私が言った時には、無視しようとか言ってたくせに……」

「ああ〜？サクラ、聞こえねえけど何か言ってたかあ？」

「べつつにい〜〜べえ！」

このクソ女、お前が舌を出しても可愛くねえんだよ！サスケも呆れた顔すんじゃないねえ！全く……これは俺のせいじゃないだろ。ん？何か、腕押さえてる奴が五月蠅えな。……離してやるか。

「っく、ふざけやがって！」

クナイを取り出そうとしたそいつを、今まで静かにしていたリーが止める。つたく、お前がはじめっからそうしておけば、こんなめんどくさい事にならなかつたんだ。

リーがそいつの腕を掴んでいると、遠巻きに見ている下忍の中からそいつの仲間らしい奴が出てくる。遠巻きに見てるとか……こいつの独断先行ってやつ？いや、それはねえか。現にそいつを連れてここを離れて行きやがったし。

てか何だよ・・・茶番を勝手にしてたくせに、收拾は俺達に丸投げだよ。まじで、めんどくせえ・・・それに、遠巻きに見ていた他の下忍の奴らに、「あいつ九尾の・・・」「ああ・・・それに後ろにいるのは、うちはだぜ。」とか、俺達が話の話題にされるし・・・。今度見つけたらあいつらボコる。絶対ボコる。

「ふう・・・」と、リーが息を吐き出した。いや、お前なんかより俺の方が溜め息出してえっての。

「おい、約束が違うぞリー。下手に注目されて警戒されたくないと言ったのは、お前だぞ?」

ん?リーにそう言って、周りの下忍の中から現れたのは・・・ヒナタの従兄のネジじゃねえの。確かこの時はまだ、ヒナタの事恨んでるんだっけか?

「それは・・・」リーは言葉を続けずにネジから視線を切り、熱のこもった視線をサクラに向ける。おお!やっぱりサクラの事は好きになるんだな、こいつ。リーは頬に朱を散らして一歩前に足を踏み出した。

「はぁ・・・これだからうちの男どもは・・・」と、テンテンが天を仰ぐように顔に手を当てながら溜息を吐く。どんまい、テンテン。これは避けられぬ運命だったんだよ、きつと。

俺がテンテンに同情していると、サクラの方にリーが更に歩み寄り、目の前で止まる。来たあ！！サクラへの愛の告白う〜

「僕の名前はロック・リー。貴女の名前を教えてください。」

どごその紳士がやるみたいに腰を折り、挨拶をするリー。これが、サスケとかだったらサクラもトキメいたんだろうが、如何せんそれをやったのはロック・リー。

キューティクルのように照っている黒髪オカッパ。ゲジゲジのような太く濃ゆい眉毛。まつ毛が目立つクリクリっとしている丸い目。更には服装が緑色の全身タイツ。漫画の世界ならば違和感なく見れていた俺でも、実際に見たこいつの全貌は………只の変態だった。

そんな変態の恰好をした少年に、いきなり名を問われたサクラは堪ったもんじゃなかったみたいだ。一応は木ノ葉の額当てを付けている。サクラは頭ではそう理解していても、心までは理解出来なかったんだろう。

初対面の人にいきなり嫌悪感を出したくないという気持ちと、一刻も早くここから逃げ出して、警察にリーを突き出したい気持ちの2つで板挟みになったみたいで、ひくひくと頬をひきつらせながらも

自分の名前を言うつサクラ。俺もこの時ばかりは、はじめてサクラに同情した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・春野サクラです・・・・・・・・」

「春の野原に咲くはサクラの花、その姿は儂く、されど綺麗なモノ・・・・・・・・美しい貴女にふさわしい名前です。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・ww・・・・・・悪いサクラ、俺・・・・我慢の限界だわ。何だよ、こいつバツカじゃねえのww

何が「春の野原に咲くはサクラの花、その姿は儂く、されど綺麗な花」だよwwwwああ腹痛え！！サスケも笑ってるし、相当だよこれwwwwww

サクラは真正面からそれを見て聞いていたが、俺達みたいに笑えないみたいで、ひくひくと更に頬を痙攣させている。そりゃあ、自分の事を言われてるんだ、笑えねえよな。サクラが無言でいるのをどう解釈したのか、リーは歯をキラッと輝かせながら笑みを作り、再度紳士のように腰を折って、片手をサクラに向けて伸ばす。

「僕とお付き合いしましょう！死ぬまで貴女を守りますから！！」

「ごめんなさい。」

まさに即答。考える時間などこれっぽちもなく、リーが告った瞬間にはサクラはもう頭を下げていた。告白され慣れているサクラだが、ここまでの即答は過去になかったと思う。たまに、そんな現場に出くわしたから分かる。あれは、拒否反応だったんだな。

ピシッという音がリーからしたと思う。リーを見てみると真っ白に燃え尽きている姿が俺の目に飛び込んできた。それを見てまた腹が痛くなるくらい俺は笑い、サスケも我慢せずに笑う。

「あちゃあ……ドンマイ、リー。次、頑張ろう。」と、テンテンが苦笑を浮かべてポンポンとリーの肩を叩く。テンテン、今のリーには何を言っても、馬の耳に念仏だと思っぞ。俺がそんな事を思っている、ネジがサスケに声を掛けた。

「馬鹿が……おい、そこのお前……名乗れ。」

ネジはサスケを睨みながら、そう言う。

「……人に名を聞くときは、自分から名乗るもんだぜ？」

「お前ルーキーだな。歳はいくつだ？」

「答える義務はないな。」

おお？何だよ、今度はこつちが面白そうじゃん。おかげで、周りのウザい連中の声は聞こえなくなったから、俺ももうちょっとだけ付き合ってもいいぞ？

「はぁ……サスケ君、行きましようよ。ナルトも何時まで笑ってんのよ！一次試験の開始時間までそんなに余裕ないんだから！」

何だよ、ノリ悪いなデコりん。まあ、確かにサクラの言う通りかもな。こんな所で油を売ってる暇なんてねえし、そろそろ3階に行くか。

「……目つきの悪い君、ちょっと待ってくれ。」

はい、邪魔入ったあゝゝ何だよー、お前達も時間ないって分か  
ってる筈だろ？

「今、ここで僕と勝負しませんか？」

「……………」

喧嘩を売られてるのはサスケだけだよな？なら、俺は先に行つてよ  
うかな。どうせ、サスケの事だから戦う事になるんだろっし。

「僕の名はロツク・リー。人に名を尋ねるときは、自分から名乗る  
ものでしたよね？うちはサスケ君。」

「…知つてて声を掛けてきたのか。フン、俺も舐められたもんだ。」

「君と戦いたいですから。」

リーとサスケの空気が変わっていくのに気付くサクラだが、おろお  
ろするだけで使えない。ま、サスケのお守はこいつに任せて俺は先  
に行く事にします。頑張つてなあ〜

「サクラ、後は頼んだ。俺は先に301の教室に行つてるからよ。」

「ちよ、私に押し付ける気!？」と、サクラが言ってくるが、俺は  
無視して歩を進める。序でにリーとネジ、テンテンの脇を通る際に、

ちろつと殺気を叩きつけてやる。そうしたら、面白いように三人は固まった。これ位の殺気にやられてるんじゃない、今のサスケには勝てないぞ〜りー。それから、ネジもテンテンも少しは殺気なれしといの方が良いぞ〜

「ナルト！！遅かったじゃない！今まで何やってたのよ！」

「うわつと……いの、まずは離れてくれると助かるっばよ……」

301と書かれたプレートのある教室のドアを開き、教室の中へと足を踏み入れた瞬間、いのに抱きつかれた。



「ええ〜！久しぶりに会った幼馴染に対してそれはないんじゃない？それに私、すぐく待つてたんだからね！」

「はいはい、それはありがとな。でも、年頃の女の子が男にこうも簡単に抱きついてちゃ駄目だと俺は思うぞ。」

俺に抱きつきながらぶくつと頬を膨らませて抗議し、金髪のポニーテールを揺らすいの。いのの奴、香水つけて、化粧も少ししてる・・・はあ・・・忍者には必要ないもんだけど、こいつの場合俺のためにやってくれてんだろっから、強く言えねえ・・・

「ナルト、いのの好きにしてやれ。そいつ、本当にお前の事を待ってたからよ。」

「シカマル・・・そうだな、分かったってばよ。いの、ありがとな。」

「し、シカマル余計な事・・・ふ、フンっ！分かればいいのよ！」

こっちに歩いてきたシカマルに苦笑で返し、いのの頭を撫でてやると嬉しそうに笑みを浮かべる。こいつは俺に頭を撫でてもらうのが好きらしい。この前シカマルにそれを聞いて、いのの頭を撫でてやったら、今みたいに、頬に朱を散らせて嬉しそうな顔をした。ホン

ト、これの何がそんなに嬉しいのやら・・・ブルツ・・・その時一緒にいたヒナタと白が、すつごく恐い笑みを浮かべていたのも同時に思い出した。あれは恐かったなあ・・・と、そんな事を俺が考えていると向こうからチヨウジ、キバ、シノ、ヒナタが歩いて来るのに気付いた。

キバから、「この試験、お前には絶対負けねえ！」とか宣言されたま、それについては予想していたから別にいいんだが、シノにも「キバではないが、俺も今日の試験ではお前に勝つ。なぜなら、この日のために俺は厳しい修行をしてきたからだ。」って言われたんだよ。

これにびっくりしたのは俺だけじゃなく、シノ以外の全員だった。こいつが、こんなに感情を出すなんて・・・よっぽど俺に勝ちたいらしいな、シノの奴。だけど、俺もそう簡単に負けてやれねえんだよな。だから・・・

「なら、勝負だつてばよシノ。」

「ああ、勝負だナルト。」

拳と拳を合わせる俺とシノ。これは、原作を読んでいた時にキラールビーっていう八尾の人住力が使ってた合図を、俺が真似して使ってる合図。だってかっこいいじゃん。

「あわわわ……」

（ナルト君とシノ君が……シノ君は同じ班の人だから応援しなきゃならないけど、ナルト君は大好きな人だし……うう……困るよぉ……）

はぁ……ヒナタも相変わらずだな。でも、そのおかげでさっき俺がいのの頭を撫でてやっていたのを忘れたみたいだし、結果オーライってことで。

それからしばらくして、サスケとサクラが教室に入ってきた。サスケの体を目立った傷がないことから、リーとの勝負には勝った事がわかる。ま、リーも重りを外してなかったと思うから、完全な勝利じゃないけど、原作の時よりは確実に強いんじゃないか。あれだけイジメたら強くなるのは当然だよな。

そして、サクラといのの口喧嘩がいつの間にか始まっていて、それを止めようとするシカマルとチョウジ、それにヒナタ。キバとシノはサスケを睨んでるから、そっちには不参加。はぁ……こいつらの会ったらこうなる感じ、そろそろ止めて欲しいわ……

「おい、君たち！少し静かにしたほうがいいな。」

ん？あぁ、カブトがここで出て来んのか。ククク、いい事思いついた。

「あ、すみません。ほら、お前ら注意されたぞ。てか、そろそろ席に座らないか？こうしてるのも、いい加減目立って嫌だし。」

「めんどくせえな、ホント。」

「シカマル、まだお菓子食べてていいよね？」

「ナルト、隣に座りましょ。」

「わ、私もナルト君の隣……」

「シノ、ナルトと最初にやるのは俺だからな！」

「それは、早い者勝ちだ。」

「サスケ君、さっきは御苦労さま。」

「あいつは、まだ本気を出していなかった……ツチ。」

「え、ああ……ねえ、君たち……」

カブトを無視して、席につく俺達。プププ……ザマあゝ！！お前とはまた後で遊んでやるからよ。

## 次回

・ ・ ・ ・ ・ 痛そうだなあの傷 ・ ・ ・

イビキの頭を見てそう感じる下忍が多い事に気付いた。

それではまた次回。 ・ ・ ・ ・ ・

中忍試験だつてばよっ！（後書き）

第十六話でした。

更新がこんなに早いのは久々ですね。卒論の方を放置してこつち書くとか……私は何をやっているんでしょう……いや、この小説を待っていてくれる人がいるからいいのかな？

はあ……卒論めんどいなあ……

こんな私ですが、ssはちゃんと書いていきますので、これからもよろしく願いますね。

一次試験だつてばよっ！1

騒がしい教室。カブトは、話しかけるチャンスを潰されたから、二人のお仲間のところに行つて怪しい空気を醸し出している。

それを気付かれないように、横に座っているのとヒナタの話に頷きながら横目で見る。ま、今から動く程馬鹿じゃないだろうし、ほつとくか。視線を動かせば、砂の姉弟が我愛羅を刺激しないように、壁を背にして二人で話している。

我愛羅可哀想だな・・・よし、ちょっと話しかけに行つて来るかな。まだ、試験までちょっと時間あるみたいだし。

「俺ちょっと行つて来るつてばよ。」

「どこ行くのよナルト。」

「ナルト君？」

「いいから、ちょっとだからよ。」

それから席を立ち、我愛羅達がいる方に歩いていく。途中、いろんな里の下忍達に睨まれたけどそれを無視して、我愛羅のところに向かう。我愛羅の席の周りだけ二席分ほど空いていて、それが我愛羅の人を近くに寄せ付けない、他人を信じないといった感情のようなものを感じて、俺は悲しくなった。

そして、俺がその空いている二席を過ぎた瞬間、我愛羅の砂が俺の目の前に展開した。うはっ、徹底してるなあ……

「……………何の用だ……………」

砂の隙間から我愛羅が俺を見ていて、いつでも俺を殺せるように砂を俺の背後にも設置していく。ま、瞬身の術で回避すれば問題ないからこのままでいいや。



「いや、お前の席の周り空いてるからさ、ちょっと気になっただけ。俺うずまきナルト、お前は？」

「……………木の葉の忍か。行け、それ以上近づけば……………殺す……………」

「殺すつてのは穏やかじゃないな……………それに、俺だけ名前言うつてのもなあ……………」

我愛羅の殺気が増したけど、こんくらい屁でもないから気にしない。後ろで、殺気に当てられた下忍達が一斉に身構えたみたいだけど、それも俺にとつたら興味ないことだから放置。

「……………我愛羅、砂の我愛羅だ。お前とは楽しい殺し合いが出来そうだ……………」

「おいおい、殺し合うのかよ。ま、それは置いといて、その殺気しまえつて。後ろの奴ら気が気じゃないみたいだからよ。それから、そこの二人。」

我愛羅から視線をきり、俺にクナイと手裏剣を投げようとしていたテマリとカンクロウに右人差し指を向ける。

「俺は我愛羅に何もする気はない。ただ、挨拶にきただけだ。だから、そのクナイと手裏剣は仕舞えて。じゃないと……」

さっきの我愛羅より重い殺気を二人に叩きつける。

「わ、わかった、(じゃん)……」

ん。まあこんなもんでいいか。っと、我愛羅の奴が俺の殺気に当てられて、おかしくなりそうだから今はこれ位にしとくかな。

「じゃ、我愛羅またな。お前とは殺し合いじゃなくて、ただの勝負がしたいってばよ。」

最後に、テマリとカンクロウにも「じゃあな」と言ってから、その場を離れる。他の下忍が俺の事をさっきとは違う意味で睨んでたみたいだけど、俺は今から始まる第一試験に向けて思考を切り替えていたので、全部無視しました。

席に戻り、いのやヒナタ、他の奴らに何しに行ったのか質問されたが、それをなんとか誤魔化していたら、黒板のところに大きなチャクラが集まっていくのに気付いた。

「静かにしやがれ！クソ野郎ども！！」

予想した黒板の前に白煙が巻き起こり、複数の人影が現れる。その複数の人影は、中忍の服で統一され、額には木ノ葉の印が刻まれた額当てをつけていた。

また全員が同じ服装をしている中で、1人だけ黒いコートを羽織り、木の葉の額当てで頭全体を覆い隠し、顔には無数の切り傷をつけた男がいる。拷問のイビキ………すげえ雰囲気であるじゃん！

「待たせたな、『中忍選抜第一の試験』試験官の森乃イビキだ。」

厳しい眼光を受けた下忍が震えてるし、いのとヒナタに至っては俺の腕をそれぞれ抱き込むようにしてる。何これ、役得ですか？

「……………では、これから中忍選抜第一の試験を始める。志願書を順に提出し、変わりに……………」

席替えて使うような箱を指さすイビキ。

「この箱の中に座席番号の書かれた紙があるから、それを一枚引きその番号の席に着け。番号はお前達が座っている机の右上にあるのがそれだ。その後、筆記試験の用紙を配る。」

席替えかあ……………ま、なんとかなるだろ。いざとなったらサクラの答案見ればいいんだし。

「テスト……………席替え……………シカマルうゝ僕ヤバイよゝゝゝ！  
！」

「チョウジ、いざとなったら……………カンニングしろ。俺が許す。」

おいそこ、何小さい声でそんな事言ってんだよ。てか、シカマルは

影真似の術あんだから、チヨウジ操って答え書けばいいだろ？

「は……はは、俺はテストなんて余裕だぜ！な、赤丸。」

「……キバが馬鹿な事はもう俺もヒナタも分かっている。そんな見栄を張るな。」

「うわぁ……シノ何気酷いな。キバもそんなこと言われたくなかったら、勉強すればいいのに。」

「ナルト……席離れちゃうかもね……」

「ま、それは仕方ないんじゃない？いのは頭いいからきつと大丈夫だ。もちろんヒナタもな。」

「あ、ありがとうねナルト君。」

「あ、ありがとう……」

いのとヒナタの頭を撫でてやりながらそう言ってやると、頬を赤くする二人。シカマルはそんなのを見て、仕方ない奴だなみたいなきみを浮かべ、キバに至ってはヒナタの様子を見て歯ぎしりを

していた。

「筆記試験なんて私には余裕ね。サスケ君も出来ると思う。けど・・・」

「何だよサクラ。」

「ナルト、あんたはヤバくなったらカンニングでも何でもして切り抜けなさい。私達は三人で中忍になるんだからね!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・フンッ」

はいはい、分かってるよデコりん。それとサスケ、お前は自分の頭のデキを指摘されなくて良かったな。実は馬鹿でした〜じゃ、格好つかないよな。ま、黙っていてやるからカンニングはちゃんとやれよ。

「ま、何はともあれ、一緒に中忍になるうぜ。もちろん全員で!」

おうつと力強く、声を出す木の葉のルーキー9人。

と、そんな事を言っていたら俺らの番が来て一人ずつ箱から紙を引

いっていき、バラバラに座って行く。

俺も、ガサゴソ箱を掻きまわして一枚引きぬく。そして、番号は15・・・席の番号と照らし合わせながら歩いていると、その番号と同じ席を見つけ席に座っていると、隣にテマリが座った。

「っよ。また会ったな。お隣同士、頑張ろうぜ。」

「フン、話しかけてくんじゃないよ。木の葉の「うずまきナルトだ。木の葉の下忍なんて他人行儀な感じ、止めねえか?」・・・・・・・・・・変な奴だなお前。」

「良く言われるってば。」と、言って笑うとテマリは、はあっと溜息を一つだして「テマリだ・・・名前は教えたけど、慣れ合いはしないよ。」と、右手の甲に顎を乗せて、睨みながら口を開いた。

そして、テマリが右隣なら左は・・・・・・・・「やつほ」  
手を小さく振って、ニコツていふ感じの笑みを浮かべたテンテンがいた。

「さつきはごめんねえ。ウチの男ども血気盛んだからさあ〜。でも、こっちが負けたみたいだし、これでおあいこってことで。」

「いいよいいよ。こっちもリーさんだっけ？あの人の事怪我させてないか心配だったし、先輩の感じから言うと大したことないみたいで良かったです。」

「先輩……君いい子だね。私テンテン、よろしくね。そっちの砂の女むすめもよろしく〜」

「フンツ……」

テンテンってこんなキャラだったか？それに、こんな序盤からテマリとも話すなんて……。ま、いいか。一次試験を切り抜けないきゃ何も始まらないしな。

それを見ていたのと、ヒナタがゴゴゴつと変なオーラを体から出していたのに俺はこの時気付いていなかった。



中忍の試験官から問題と答えが一緒になっている答案用紙が配られた。前世の癖で答案用紙を裏のまま放置していると、

「答案用紙はまだ裏のままだ。そして、オレの言う事を良く聞け。」

少し短めのチョークを手に持ち、黒板を突くイビキ。

「この第一の試験には、大切なルールつてもんがいくつかある。」

『いくつか……それは数個あるってことか……』

「黒板に書いて説明してやるが、質問は一切受け付けんからそのつもりでよく聞いておけ。」

ルール？何だそれ？とかいろいろ小さな声で、そこかしこから声がある。いいから黙って聞いてろよ。今からそれ説明されるんだからよ。

「第一のルールだ！まず、お前らには最初から各自10点ずつ持ち点が与えられている。」

黒板に向かって書きながら、話すイビキ。その一声で小さな声は止み、皆黒板を、イビキの言葉の一つ一つを聞き逃さないように、構える。

「筆記試験は全部で10問、配点は問題格1点ずつ。そして、この試験は減点式となっている。」

つまり、その10点をそのまま維持するためには、問題を全問正解させなきゃ駄目ってことか……

「つまり問題を10問正解すれば、持ち点は10点そのままだ。しかし、問題で3問間違えれば持ち点の10点から3点が引かれ、7点と言う持ち点になる訳だ。……これが第1のルールだ。」

んで、0点になったら即退場、さようならってことか。

「第2のルールだが……この筆記試験はチーム戦、受験申し込みを受け付けた3人1組の合計点数で合否を判断する。つまり、合計持ち点30点をどれだけ減らさずに試験を終われるか、チーム単位で競って貰うってことだ。」

ドカツ！（チーム戦？チーム単位？それって！？）サクラはそれを

聞くなり、机に強く頭を打ち付ける。

「ちよ、ちよつと待って！持ち点減点方式の意味ってのも分かんないけど、チームの合計点ってどーいう事よ！！」

後ろからサクラの声が聞こえる。きつと手を上げながら質問してんだろうなあ・・・なんちゃって優等生が。俺がサクラのデコに赤い痕がある事に気付くのは一次試験が終わってからだった。閑話休題・

「うるせえ！お前らに質問する権利はないんだよ！これにはちゃんと理由がある、黙って聞いてる！」

「う・・・・・・・・・・」

「分かったら『肝心の』第3のルールだ。試験途中で妙な行為・・・つまり『カンニング及び、それに順ずる行為を行った』と此処にいる監視員たちに見なされた者は、その行為『1回につき、持ち点から2点ずつ減点させて貰う』・・・」

ふん・・・てか思い出して来たぞ。原作でもこんなくだりあったような気がしてきた。結局のところ『無様なカンニング』じゃなければいいんだろうが。

「そつだ！つまり、この試験中に持ち点をすっかり無くして退場する奴も出るってことだ。」

イビキがルールを説明している間に、監視員って事になつてる中忍達が俺達を取り囲むようにしてイスに座る。

「いつでもチエックしてやるぜ。」

そう言う奴は、ここに来る前にリーを殴っていた奴で、指でトントんとメモ帳を叩いている。あいつムカつくな……。何より俺達より上の立場つてのに胡坐かいてる感じが気に入らねえ。

「無様にカンニングなど行った者は自滅して行くものと心得て貰おうか。仮にも中忍を目指す者、忍びなら忍らしく……。だ。」

口元を意味ありげに歪ませ、笑みを浮かべるイビキ。ムカつく言葉の節々に、俺らを試してるのが分かる。でも、俺力カシよりイビキの方が性格的には好きだな。いい酒呑み友達になれそうじゃん。

「そして最後のルールだ。この試験終了時までには持ち点を全て失った者、及び、正解数0だった者の所属する班は……。」

笑みを浮かべていたイビキが笑みを仕舞い、真剣な視線が全員に向けられる。それに、唾を飲み込む奴、睨み返す奴と様々だが俺は、試すなら試してみるっていう小馬鹿にした笑みをイビキに向ける。

「3名全て道連れ不合格とする!!」

(なっっっ!!)(何ですってえええ!!)

サスケとサクラが驚愕を浮かべ、一斉に俺に顔を向けて来る。いやいや、お前ら俺を馬鹿にし過ぎだ。それに、ここ3カ月でお前らは俺に勝てないって事まだ分かってないのかよ。はあ……こいつら次の試験でお仕置きだな。

「試験時間は1時間だ……よし……始める!」

開始の合図と同時に鉛筆を走らせる下忍達。さてと1問目は……  
・暗号文か? 摩訶不思議な記号の羅列がそこにはあり、それが意味するもには……ごめん無理。全っ然分かりません。てことで、テンテンが天井にある鏡を使って(鏡なんてあったか?)  
カンニングし出し、俺もそれに便乗する事にした。

おお、余裕余裕。てか、テンテンが横にいてラッキー。俺影分身と変化の術を応用してカンニングしようとしてたけど、無駄なチャクラ使わなくていいなら、それに越したことはないからな。ああ〜こ

うなつてたのか。こんなの、アカデミー卒業したばっかの俺らに分かる訳なくね？

そして、俺が余裕でカンニングしている時のサスケ……………

(フン…………成る程な…………)

余裕の笑みを浮かべる今年下忍NO・1ルーキーのうちはサスケ。だが、その笑みの裏では…………

(こんなの…………1問たりともわかんねえ…………)

そうなのだ。アカデミー時代ではそこそこ出来ていたサスケだが、下忍になってからは忍術、体術、幻術と戦闘技術を磨くのみで、座学には一回も手をつけていなかった。これは、サスケの復讐のため

に一秒でも強く！という気持ちから来ているが、今はそんなこと微塵も関係ない。

（それに1問目から9問目がちゃんとした問題で、尚且つ俺に理解不能な難問であるのは理解した。だが・・・」

## 第10問

この問題に限っては、試験開始後45分経過してから、出題されません。

担当の質問を良く理解した上で、回答して下さい。

（この10問目は何なんだ！！）

手に持つ鉛筆を握り潰す気なのか、サスケの鉛筆はピシピシと嫌な音を発し続ける。

一方、余裕宣言をしていたサクラだが、問題自体はスラスラとはいかないが、全て解いていき、今は3問目に取りかかるうとしていた。

（問題は難しいけど解けない程じゃない。でも、私だけが解けても意味がないのよ！ナルト！お願いだから一問くらいは解いてよお！）

サクラのこの願いは苦も無く、ナルトがテンテンのカニンングを盗み見しながら解くという物で解決していた。

（それに一体何チームが合格できるようになってんのかしら？知ってどうなるモノでもないけど……）

「あの〜これだけは教えて欲しいのですが……」

と、サクラが考えていると直ぐ近くの下忍が手を上げ、イビキに質問をした。



「一体何チームが合格なんですか？」

そして、その質問は正に、サクラが一番気になっていた事であり、その間サクラは問題からこの質問に対するイビキの返答に意識を集中した。

「ククク……」だが、返つて来たのは嘲笑を含んだ笑み。サクラの他にもこの質問には聞き耳を立てていたから、この返答には疑問を持つと同時に、怒りも持った。

「知つてどうなる訳でもないだろう。それともお前、失格にされて  
えのか？」

「す、すいません……」

イビキのその言葉で質問していた下忍は、渋々問題を解く作業に戻った。

（全51チーム中、もし合格が10チーム程度だとしたら……  
・無理してでもかなりの点を保持しなきゃならない。なら、私は1  
問もミスは出来ない！）

桃色の髪をかき上げ、気合を入れ直すサクラ。

（サスケ君……いや、サスケ君は大丈夫。だって、サスケ君だもん！問題はナルトよ！お願いだから、0点は勘弁してよ！ナルト！）

サクラの視線がナルトに向けられ、ナルトは一瞬ビクッと体を震わせた。

その頃、シカマルは監視をしている中忍を横目に見ながら、問題を解いていた。

（めんどくせえ試験だな。それに、この人数で見張られてちゃカン

ニングは出来ない。あのノートでチェックするんだろーが……  
チヨウジの野郎に早く影真似で答え書いてやらないとな……いの  
は……あいつの術はこういう時に役立つから大丈夫だな。」

不意に中忍の1人の鉛筆が動く。それを横目で捉えたシカマル。

（……誰かやられたな……チヨウジ、頼むからまだカンニン  
グはしないでくれよ。）

その頃のチヨウジは、（し、シカマルう……と、心の中で泣いて  
いた。）

『無様にカンニングなど行った者は自滅して行くものと心得て貰お  
うか。仮にも中忍を目指す者、忍びなら忍らしく……だ。』

シノはイビキの言葉を頭の中で復唱する。

（フン、カンニング容認のテストか……なら、俺の蟲を使って答えを探るだけだ。）

蟲を体中に飼っている油女一族は、種類の蟲だけが自在に操る事が出来る。それは、問題の答えも探るのも、任務の時に暗号の解を探るのも同じ事。

シノが放った蟲が、淀みなく鉛筆を動かす下忍の机に止まり、答えを見て行く。1問見たら、帰って来るように伝えた事で、直ぐにシノの所まで戻り、答えを知ったシノは答案に鉛筆を走らせる。

（赤丸、次の問題だ！）

ワンワンッ

（よしよし、いい子だ赤丸。）

キバは何も考えることなく、カンニングを執行していた。アカデミー時代から赤丸を使ってカンニングをしていたキバだからこそ、直ぐに至った答えだった。

（絶対にナルトに勝ってやる！そしてヒナタに俺の事を！！！！）

キバは、そんな事を考えながら赤丸と協力しながら問題を解いていくのだった。

（ちょっとヒナタ、どうする？この問題難しいんだけど。）

（い、いのちゃんも？私もちょっと難しいかも・・・でもでも、ちょっとは分かるんだよ。）

こちらは、隣同士になつたのとヒナタ。ナルトがテマリとテンテ  
ンと仲良さそうに話す様子にムカムカとしていた二人だったが、試  
験が始まるとシユンと静かになり、問題に向かっていた。

だが、それも問題のレベルが自分たちでは到底理解できないものだ  
と分かると、ヒナタの出したチャクラ糸を通して、作戦会議のよう  
なものをしていた。

（わ、私だってちょっとは分かるわよ！それより、私思っただけど、  
なんかこれカンニングしなさいって言ってるような感じしない？）

（ええ！？だ、駄目だよ！あ、あの怖い人がカンニングしたら2点  
減点して行行って言ってたし、私恐くて出来ないよう・・・）

泣きそうな顔と声でいのにそう伝えるヒナタだが、伝える相手を問

違った。相手が男だったら、ヒナタのこの姿に負けて考え直しもしただろうが、相手は山中いの。アカデミー時代も男子をやっつけていた強い女の子だ。

（あんだ、その顔でナルトに迫ったりしてないでしょうね……）

（そ、そそそそ、そんな事してないよー！）

（まあいいわ、それは後で言うとして、さっきも言ったけど、無様なカンニングをしちゃ駄目、忍者は忍者らしく……これって術を応用して、答えを知っている相手から答えを盗むことを前提としてるんじゃない？）

（い、言われてみれば……でも……）

煮え切らないヒナタに、いのが発破をかける。

（そんな事言っつて、もしナルトと一緒に二次試験に進めなかったら……嫌でしょ？）

（それは嫌だよー！）

ニヤリ・・・そんな言葉似合う笑みを浮かべるいの。

（なら、やるしかないでしょ。あなたには白眼が、私にはこの『心転身の術』がある。ナルトと一緒に二次試験よ！！）

（う、うんっ！！）

白眼！　心転身の術！

二人は、こうして答案に答えを書いて行くのであった。

そして、視点はサスケに戻り、こちらも何かに気付いたようだ。



(！？そうか……そういう事か！チィ、何てこった……これはただの知力を見る筆記試験じゃない！)

やっと理解した顔になるサスケ。サクラと自分以外のルーキー達がカンニングを既に始めているのにも気付いていなかった奴とは思えないほど素早く写輪眼を発動させる。

(早く気付けナルト！このテストは……カンニング『公認』の偽装・隠蔽術を駆使した、『情報収集戦』を見る試験だ！)

サスケの鉛筆を握っている手に力が込められる。既にピシピシ言っていた鉛筆が、それに耐えられる筈もなく呆気なく折れる。それを無視して、予備の鉛筆を手に持つサスケ。何気カツコ悪い奴である。

(『忍は裏の裏を読め』か……カカシ、あんたの言ってた意味がここで生きて来たぜ！つまり試験官の本意は、カンニングをするなら……『無様なカンニング』ではなく、『立派な忍らしく』バレないようにすべしって事だ。そう考えれば『減点方式』と言うこの試験の異例さ。そして、『カンニング発覚1回につき、2点の減点で済む』と言う甘さ……言わば、0点まで4回の猶予がある事にも納得が行く。)

それに気付いたのはおそらく、下から数えた方が早いサスケなので

あつた。

（要するに此処で試されるのは、如何に審査官とカンニングをされる者に気取られず、正確な答えを集める事が出来るか。気付けナルト！勘の良い奴はそろそろ動き始めるぞ！）

サスケは、やっと写輪眼で鉛筆を動かし続けている下忍の動きをコピーし、答えを答案に書いていくのであつた。

と、もう7問目か。テンテンが見つけた奴がどんぴしゃで当たりだつたみたいでラッキーだったなホント。

それに、他の奴らも動き出してるし、テマリは………ああ  
くさつき出て行ったカンクロウが戻って来る時に答えを渡す手筈に

なってるのか。おっと、そんな事考えてたらクナイが頭の上を通過していきやがった。

「うわあ！」とそんな声が後ろでしたから、後ろの奴は下手なカンニングでもして、持ち点を無くしたんだな。まあ、次の中忍試験頑張れえ〜。

テストが始まって30分経過した。問題も最後の10問目を残すだけとなり、俺は肘について鼻と口の間に鉛筆を持っていき、ゆらゆらと揺らし始める。

45分まで待つのかぁ……………ちよつと観察してみっかな。

サスケは……………写輪眼を使って答えを書いてるみたいだな。サクラは言わずもがな、自力で解いてるみたいだ。こいつにカンニ

ングなんて出来る術ないし、ちょうどいいな。頭も悪かったらこいついるだけ邪魔だしな。

それからシカマルとチヨウジはっと………うん。こっちも、シカマルが自力で解いて、チヨウジがシカマルの影真似の術で操られてって感じか。ま、俺が最初予想してた事だし、当たり前か。

シノとキバもそれぞれ蟲と赤丸使ってるみたいだし、いのとヒナタは心転身と白眼かぁ………まあ、余裕そうだな。それに、我愛羅も第三の目開眼させたみたいだし、うん。皆二次に行けるな。

それから、何人が持ち点を0にされて退場して行った。そろそろ45分経つな………

「よし、45分経つたな。それでは、これから第10問目の問題を伝える！」

次回



一次試験だつてばよっ！1（後書き）

第17話でした。

卒論のせいでss書いてる時間が………

でも、こんな感じに書いてくつもりなので、どうぞ見捨てることなく、読んでくださいますようお願いします。

さて、新しいアニメ始まりましたね。私がオスのは……スタ  
ードライバーですかねwwww

あの厨二な感じが溜まりませんwwww  
しかもボンズですしねww

あ、あとジャンプもワンピースが再会して久しいですね。ナミが綺麗に  
なつてて個人的にはGOODですwwww

あと、伝えたい事は……あ、総合評価が3000行つてまし  
た（^o^）

やったああああ！！と一人喜びました。それにあとちょっとで1  
00万PVですし、10万ユニーク行きそうです。このssを書き

始めて二カ月・・・これも読んでくださいます皆さまのおかげです。

本当に、本当にありがとうございます。

これからも更新頑張りますねえ！！

あとあと、感想、レビュー、もお待ちしてますので。それが、私の執筆意欲に繋がるにでwww

一次試験だつてばよっ！2

「よし！これから10問目を出題する！」

やっと45分過ぎたのか……。ふあああ……。横を見ると  
テンテンは俺同様書き終わって暇だったみたいで、鉛筆の尖った方  
を指に乗せて、遊んでいる。んで、テマリはついさっき出て行った  
カンクロウが帰って来るのを待ってるみたい。

てか、今さら思い出したんだけど、この試験って最後の10問目だ  
け答えりゃ良かったんじゃない？俺、もしかしなくてもめんどい事し  
ていたんだな……。ま……。まあ、過ぎた事はいいとしよう。

(やっとか……。フンツ待ちくたびれたぜ！)



(いよいよ最後の問題……ナルトは大丈夫かしら……)

なんか、サクラの奴が失礼なことを考えてるような気がする……  
……よし、やっぱりあいつ次の試験で、いじめよ。

と、なんだか、横のテマリさんの顔が焦ったもんに変わってる。心境としては、「早く帰って来いカンクロウ！10問目が始まる前に答えを渡す手はずだろうが!!」って感じか……

大丈夫だってテマリ。この試験、10問目解ければ一次は通るから。

「……と、その前に一つ、最終問題に付いてのちょっとしたルールの追加をさせて貰う。」

『『!!!?』』

今イビキが言った言葉に、下忍全員が眼を見開いた気配がした。ていうか、サクラが纏う空気がまた変わった。あいつ、イライラし出したぞ絶対。内なるサクラの気配がする……

ガラッ……イビキのせいで変な空気が漂っている時にそんな音

がしたから、皆一斉に音のした方を見た。教室の扉を開き、カンク  
ロウが中忍に扮した人形を引き連れて戻って来たところだった。

「フ……強運だな……」

「!?!」

「『お人形遊び』が無駄にならずに済んだみたいだな? ……ま  
あいい、座れ……」

カンクロウの顔が一瞬だけ苦いものになり、席に戻って行く途中  
にテマリの手に答えが書かれている、まあ所謂カンペを手渡した。  
それを受け取ったテマリは、急いで問題を解こうとしているのが分  
かる。でも、イビキの言葉を聞き逃してはいけないと、視線はイビ  
キに固定したままだ。

「では、説明しよう……これは絶望的なルールだ。」

イビキの視線が鋭いモノに変わった。

ナルト達が中忍試験を行っている頃の里にある空き地……

「お姉ちゃん、アイスちょうだい!」

「何味がいいですか?」

「うーんと……うーんと……イチゴ!」

「イチゴですね。はい、どうぞ。溶けない内に食べてくださいね。」

「はあ〜い!」

手を振りながら走る女の子に、僕も手を振る。転ばないか心配ですが、きつと大丈夫でしょう。あの子の友達が、助けてくれる筈です。僕の目に映るのは、あの子の向かう先にいる二人の男の子が、早く来いと言っている姿。

そんな二人の男の子達も僕の作ったアイスを手にかけています。女の子が男の子達の所に着くと、三人で「お姉ちゃん、ありがとう！」と言つて走つて行きました。ふふふ、ありがとうございますか。こんな僕が、ここに来て何度この言葉を聞いた事でしょう。ここに、来て3日くらいは数えていましたが、もう数えるのは止めました。

一か月前、ナルト君からの紹介でここ木の葉の里に来た、僕と再不斬さん。ナルト君のおじいさんのような火影様と話している時は、恥ずかしいですが、ビクビクしていました。だって、僕が今まで対峙した忍と比べられないくらいのオーラがありましたから。でも、ナルト君が隣に来て手を握ってくれましたので、安心しながらお話を聞く事が出来ました。

火影様ははじめ渋つておられたようですが、ナルト君の「こいつらはもう、悪い事はしないつてばよ！俺が保障する！」という言葉に、笑みをこぼして僕たちは、晴れて木の葉の雇う忍者となりました。火影様の言葉は絶対のようで、僕達を警戒していた上忍や暗部の人達は渋々納得したみたいでしたけど。

そして、臨時となるからには、僕たちは何かしらの仕事をしなければならなくて、僕は自分の血継限界を利用したアイス屋を開く事にしました。再不斬さんは、最後まで忍者以外の仕事は嫌だと言つて、ナルト君と火影様を困らせましたが、ナルト君に僕からもお願いすると、どうにか再不斬さんは暗部の方たちの仕事を手伝うというものになりました。ナルト君はやっぱり優しいです。

あ、再不斬さんには僕が後から、ちゃんと罰をあげました。再不斬さんが忍以外の仕事をするなんて僕も嫌ですけど、あそこでナルト君を困らせたんです。罰は当たり前ですよ。

そして、僕は小さな屋台みたいなものを火影様から頂いて、アイス屋のお姉さんとして木の葉の里で生活しています。ナルト君のお友達も何回か来てくれました。ヒナタさんといのさんは、任務が終わると必ず来てくれて、三人で一緒にアイスを食べながら、任務の話やお化粧の話、それから僕達に共通するナルト君の話をしました。

いのさんとは、ナルト君が紹介してくれた時に知り合いました、他にもシカマル君、チョウジ君、シノ君にキバ君と仲良くなりました。サクラさんとサスケ君ともお友達になりたかったです、サスケ君に至っては、終始顔を俯かせていましたし、サクラさんは僕を睨んでいたようなので、こちらからお話できませんでした。少し悲しかったです。

ナルト君に聞いたら、サスケ君は照れていて、サクラさんは嫉妬しているという事でしたが・・・他にも、ナルト君が尊敬しているというイルカ先生にも会いました。ナルト君の言うとおり素晴らしい方で、ナルト君が尊敬する理由も分かりました。

それからは、いのさんに僕もナルト君が好きだという事を告げて、三人でライバルですねと笑ったり、ナルト君にいのさんがプレゼン

トするといつので、僕とヒナタさんもプレゼントを買いに行ったりと、ここに来て過ごした一か月は、僕が今まで過ごした年月より短いのに、とても暖かくて、幸せな時間で……僕の大切な宝物になりました。

そして、今日からナルト君達は中忍試験。昨日、ナルト君が皆を連れてきて、「次に会う時は俺達全員中忍になってるからな！」と笑って言いました。ホント、ナルト君がそう言ったらそれが本当になるようで、僕も「なら、その時はアイスを御馳走しますね」と言っていました。

本当に、こんな楽しい時間がずっと続いてくれたらいいのに。そんな事を言ったらナルト君に怒られてしまうと思いますが、僕は願います。

「この幸せな時間が続きますように……」

空を見ると、綺麗に晴れた青空が見えました。

絶望的なルールか………頼杖をつきながらイビキの言葉に耳を傾ける。

「まずお前らには、この第10問目の試験を……『受ける』『受けないか』のどちらかを選んで貰う!」

「え……選ぶって……もし10問目の問題を受けなかったらどうなるんだ!」

テマリが声を張り上げる。いや、なんとなく予想つくだるテマリ。これは中忍試験なんだ。受けないみたいな否定的な事を言ったら……

「『受けない』を選べば、その時点でその者の持ち点は0となる……つまり失格だ! 勿論、同班の2名も道連れ失格だ!」

やっぱりか。まあ、受ける以外ここでの選択はない。だが、そこは拷問大好きなイビキの事だから……

「ど……どういう事だよ!?!」

「そんなの『受ける』を選ぶに決まってるじゃない!?!」

下忍達が一斉に騒ぎ始めるか……騒いでる奴は自分で考える事を放棄している奴だ。そんな奴が中忍になるうなんてのが間違いつて事なんだろうな。

「そして!もう一つのルール……」

イビキがその騒ぎを無視して、話し出す。騒いでいる下忍を黙らせる事もなければ、注意する事もない。この試験は、そういうのも見てる事に気付かない奴は……この試験落ちたな。

「『受ける』を選び、正解できなかった場合……その者については今後、永久に中忍試験の受験資格を剥奪する!」

『……!』

それまで、騒いでいなかった奴もこのルールには啞然として、イビキを睨みつけたり、初めに騒いでいた奴らと同じように、騒ぎだし



た。これが、拷問大好きなイビキの意地悪な問題だ。人間の心を揺さぶる問題、こんな問題を提示されたら普通の下忍なら、『受けない』を選ぶのは自明の理。

だが、ここで『受ける』を選び正解する事が出来る者だけが中忍という小隊のリーダーになれる。それが、上が求める忍者だ。これに気付けなければ一次試験突破は無理だぞ皆。

「そ、そんな馬鹿なルールがあるか！！ふざけんじゃねえ、お袋に聞いたぞ！中忍試験は年に二回。一回落ちてても、次受けて合格すれば中忍になれるってな！」

頭に乗せている赤丸と一緒にキバが抗議の声を上げる。はぁ・・・やっぱりお前はそっち側かキバ。もう少し考える事が出来たらお前もいい忍者になれると思うんだけどなぁ・・・

「ククク・・・運が悪いんだよ、お前らは。今年はこの俺がルールだ。その代わりに、引き返す道も与えてるじゃねえか・・・」

「え？」キバが、間抜けな顔と声を出す。

「自信のない奴は大人しく『受けない』を選んで、来年も再来年も受験したら良い。」

甘い毒。その名が相応しいように、徐々にイビキのその言葉が下忍達に浸透していく。というか、こんな茶番早く終わんねえかな。こちとら、次に出て来る変態野郎をどうやって料理するか楽しみで仕方ないんだっての。

「では、始めようか。この第100問目、『受けない』者は手を挙げる！番号確認後、此処から出て貰う。」

すぐに手を挙げる者は居ない。自分のせいで他の二人を失格にしてしまう。もう一生下忍のまま。この二つの思考が下忍達の頭の中をループする。

数分が経過した……と、1人の受験生が手を挙げた。

「オ、オレはつ……やめる！『受けない』ッ！！す、すまない……岩！ナル！！」

悩んで悩んで、悩みぬいて出した選択だ。それなら仕方ないだろう。だけど、そんな甘い考えならもう一生中忍になるなんて考えない方がいいぞ。少なくとも俺はそう思う。

「50番、失格。130番！111番！道連れ失格。」

試験官の言葉に、50番というそいつの仲間が表情を曇らせながら起立する。そいつらも、半ば仕方ないと諦めている。

「お、俺もだツー！」そして、また1人。

「わ、私も……………」

「す、すまない。みんな！」

「俺もやめる！」

「わたしも、止めます……………」

最初の奴を発端に、次々と『受けない』を選び退出していく下忍達。ま、引きとめる理由がない限り俺は何もしない。キバあたりが止めるとか言いだしたときに、俺が何か言えばいいだろ。

（ナルト……………何で手を挙げないのよ！）

サクラがそんな思いを乗せた視線を向けて来ているみたいだけど、そんなもん俺に向けるなデコりん。それに、お前はこの一次試験が

終わったら・・・楽しみにしてろよ！

（あんたが、強いのは・・・悔しいけど認めて上げるわ。でも、あんた勉強は駄目じゃない！それに、あんたイルカ先生みたいな忍者になりたんでしょ？・・・はあ・・・何で私あんたの事なのにこんなに考えなくちゃいけないのよ。・・・でも、私そんなあんたの夢、無くさせたくないみたい。だから・・・）

ん？つてあの馬鹿サクラ！何手上げようとしてやがる！！ふざけんな馬鹿！ああもう、仕方ねえ、ここしかねえか。

「え？」消えそうな、サクラの声といのとヒナタの「ナルト！ナルト君！」という大きな声でしたがそれを無視して、サクラの手が上がる前に俺は手を上げる。

「！！！」

他にも何人かが俺のこの行動に、びっくりしているみたいだけど、俺は『受けない』を選ぶ訳じゃなねえからよ！

「15番か・・・では、54b」なめんじゃねえ！受けてやるよ！一生下忍のまま？はっ、いいぜ。もしその問題を解けなかったら下忍のまま強くなってやる。そして、その下忍がお前や他の中忍、上忍なんかより強いって事を、証明してやるってばよ！！！」

振り上げた右腕を叫びと同時に机に叩き付けた。破裂音のような音が響き、叩きつけられた机は、隣のテンテンとテマリの所まで罅が入った。

（ナルトの奴、俺達の事なんか全く考えてなかったみたいだな。それに、あいつは既にここにいる奴らより強い。クク・・・本当にお前と会ってから退屈しないな。）

（そうよね・・・アンタ、そういう奴だったわよね。ていうか、もしかしてあいつ、ここにいる全員に喧嘩売った？）

「もう一度訊く・・・人生を賭けた選択だ、やめるなら今だぞ？」

「真っ直ぐ自分の言葉は曲げねえ。それが俺の忍道だ!!」

俺はこんな所で、止まっただけじゃねえんだ。次の試験でサクラを、そして、変態野郎をフルぼっこにしないといけねえんだよ!!

俺が叫んだ事によって、他の下忍達にも変化が起きた。さっきまで不安や焦りの表情でいたが、今となっては笑みを浮かべている者もいる。隣のテンテンとテマリに至っては・・・

（この子やつぱり面白いかも）（うるさいガキだが、その言葉には賛成だな。）と、俺を見て来ていた。

（15番の言葉で、コイツらの不安が消えやがった……78名か、予想以上に残ったが……）

審査員である中忍達に、イビキが目配せをして、それに対して中忍達は笑みを浮かべ、一斉に頷く。これは、決まったか？

「良い決意だ、では……此処に残った全員に……」

下忍全員が、イビキの出題するであろう問題の一字一句を聞き逃さないと言った風に身構える。俺は、もう仕事したから踏ん返り返ってるけど。

「……………」『第一の試験』の合格を申し渡す！！」

はいはい、合格合格っと。その言葉に、俺以外の下忍達（この時ばかりはカブト達、我愛羅も）は息を合わせるように、あっ気に取りられたようにポカンとしていた。

「ちょ、ちょっと、どういう事ですか！？いきなり合格なんて……」

・・・10問目の問題はとうしたんですか!？」

お？サクラがはじめに反応したか。というか、あいつの場合二つの精神があるからってのが理由としては適切だな。

「そんなものは初めからない。言ってみれば『さっきの2択』が10問目だな・・・」

「え？いや、ちょっと!!じゃあ、今までの1〜9問は何だったんだ!？まるで無駄じゃないか!」

カンクロウにカンペを貰ってまで問題を解こうとしていたんだ。テマリが、そう思っても仕方ないな。

「無駄じゃないぞ。9問目までの問題はもう既に、その目的を遂げていたんだからな。」

「は?」いやいや、テマリさんあんたもう少し頭いいと俺思ってたけど、なんちゃっての人だったのか?

「お前達個人々々の情報収集能力を試すと言う目的をな!」

イビキの奴いきなりキャラ変えとか……止めて欲しいわ。これ、著者と同じ思いな。

はい、そんなメタ発言はスルーという事で……

さっきまでの雰囲気とか……本当に拷問が始まるかもとか思った奴いたかもしれないなあ……

「まず、このテストのポイントだが……最初のルールで提示した『常に3人1組で合否を判定する』と言うシステムにある。」

イビキがこの試験について説明していく中、俺は隣のテンテンと話し中。勿論小声でな……

「ねえねえ。」

「ん？何かようですか先輩。」

テンテンは人懐っこそうな笑みを浮かべながら、俺を見ていた。

「君私の使ってた鏡見てたよね？」



「ありや、ばれてました？すみません。自分の力こんな所で出すのって、なんか損した気分になっちゃうじゃないですか。先輩には悪いと思いましたが、便乗させていただきました。」

ばれてたか。ま、ばれないようにとか気をつけてなかったからなあ。兎に角無様じゃなけりやいって思ってたし。

「ふふふ。なら、貸し一個ってことでいいよ。後で返してね、金髪君。」

「はいはい、分かりましたよ。」

と、そんな会話をしていると、イビキが頭に巻いていた額当てを取って、俺達に見せてきた。うわぁ……痛そ。

「何故なら情報とは、その時々において命よりも重い価値を発し、任務や戦場では常に命懸けで奪い合われるモノだからだ。」

途中からだけど、おそらく自分の経験と合わせて説明してんだろ。テンテンも、今はイビキの方を向いて話聞いているし。

ヒナタといのが、びくっと体を震わせてたから、びっくりしたんだ

な。

「敵や第三者に気付かれてしまつて得た情報は『既に正しい情報とは限らない』のだ。……これだけは覚えておいて欲しい！誤つた情報を握らされる事は仲間や里に、壊滅的打撃を与える！！」

そう言つてイビキは額当てを元に戻す。

「その意味で我々は、お前らにカンニングと言つ情報収集を余儀なくさせ、それが明らかに劣つていた者を選別した……と言つ理由だ。」

「でも……何か最後の問題だけは納得行かないんだけど……」

隣のテマリが少しだけ唇の先を尖らせ、不満の声を上げた。え、何この可愛いテマリ。漫画にも、雑誌にも載つてないぞ！！……ここに転生して良かった！

「しかし、この10問目こそが、この第一の試験の本題だ。」

「……………」

下忍達はイビキの言葉に耳を傾けている。

「説明しよう。10問目は、『受けるか』、『受けないか』の選択・  
．．．言うまでもなく、苦痛を強いられる2択だ。『受ける』を  
選び、問題を答えられなかった者は『永遠に受験資格を奪われる』  
．．．実に不誠実極まりない問題だ。」

その言葉を聞いても、キバとか馬鹿な奴らは首を傾げている。テーマはここで分かったらしく、フンッと鼻を鳴らして頬杖をついた。

「では．．．こんな2択はどうだ？お前達が仮に中忍になったとしよう、．．．任務内容は秘密文書の奪取、敵方の忍者の人数・能力・その他、軍備の有無が一切不明。更には敵の張り巡らした罠と言つ名の落とし穴が有るかもしれない．．．さあ、『受ける』か？『受けない』か？」

イビキは再び、俺達に問う。決まっている。答えは．．．

「そう！答えは『受ける』だ！いや、『受けない』という選択肢などどこでは出てこない。どんな危険な賭けであっても、降りる事のできない任務もある。ここ一番で仲間にも勇気を示し、突破していく能力。これが中忍と言つ部隊長に求められる資質だ！」

『受けない』を選びここから出て行った下忍達は、それが理解できていなかった。いや、ここにいる何人かも理解していなかったろうな。俺が止めたから。

「いざと言う時に自らの運命を賭せない者、『来年があるさ』と不確定な未来と引き換えに心を揺るがせる・・・そんな密度の薄い決意しか持たない愚図に！中忍になる資格などないと俺は考える！」

力強い言葉がイビキから発せられる。というか、俺もこの言葉には賛成だ。そんなふざけた気持ちで中忍になろうとしている奴は・・・忍者を止めるべきだ。そんな奴がいて、俺達に利益なんてある訳がないからな。

「『受ける』を選んだお前達は、難解な10問の正解者だと言っている！これから出会うであろう困難にも立ち向かって行ける筈だ。入口は突破した、『中忍選抜第一の試験』は終了だ・・・お前達の健闘を祈る！」

第一の試験を合格した俺達にそう笑みを浮かべて言うイビキ。それに、よっしゃあー！と叫ぶ奴、フンッと照れ隠しに鼻を鳴らす奴と様々だったが、俺は窓の外から『あの人』が飛び込んでくるのが分かっているから、そっちに気を張る。

そう思ったと同時に窓ガラスをブチ破り、黒い布で包まれた『あ

人』が飛び込んで来た。

「！！敵かつ！？」

突然の出来事に、誰かがそう言う中忍とイビキ以外の奴らのほとんどが、忍具を構えた。

真っ黒い大きな布から2本のクナイが飛び出し、黒板に刺さる。黒板に布がクナイによって張り付けられ、布が広がり長方形になった。そして、中に包まれていたと思われる人物が姿を現した。そう、『あの人』が。

「アンタ達、喜んでる場合じゃないわよ！！私は第2試験官！みたらしアンコ！次行くわよ、次い！！」

「「「.....」」」

出てきたのは皆さんご存知、特別上忍みたらしアンコさん。変態野郎に捨てられて、健気にも生きてきた、元気いっぱいのお姉さんのような人。

でも、そんなアンコさんの自己紹介は、教室内にいた忍全員を黙らせて、全員の視線を一人占めました。

「空気を読め……アンコ。」

『第2試験官 見たらしアンコ見参!』と大きく描かれた真つ黒な布の近くにいた、イビキがはあく溜息を出した。

その言葉に頬を赤らめるアンコさん。うわ……。可愛い……。  
・と、俺が考えていると話が進んでるみたいで、

「まあ、それは良いとして……。ひい、ふう、みい……。78人!? イビキ、あんた! 26チームも残したの!？」

アンコさんはそう言って、イビキに詰め寄った。でも、イビキもアンコさんの言葉に首を振って答える。「今回の第1の試験、甘かったみたいね。」「今回は、優秀そうなのが多くてな。」

優秀か……。ま、それはそうだろうな。カブトいるし、我愛羅いるし、俺いるし……。ま、他の奴らも下忍にしておくにはもったいないくらいの実力者たちだからな。

「フン! まあ、いいわ……。次の『第2の試験』で半分以下にしてやるから……。ああ、ゾクゾクするわ! 詳しい説明は場所を移してやるからついてらっしゃい!」

アッコさんはそう言うと、窓から飛び出そうとして、イビキに止められて、渋々ドアから出て行った。ホント、この人いろんな意味で可愛いな。

こうして、第1の試験は幕を降ろした。次はいよいよ、2次試験。変態野郎との初対決だっばよ!!!

次回

「フッフ、サスケ君は私のものよ。」

「うわ気持ち悪……サスケ、お前あんな奴のものになりたいか？」

「ぶざけんなナルト！いくら俺が強くなるために見境ないと言った

って、あれはないだろう!!!!」

「サスケ君、見境ないのね……」

次回もお楽しみに。……



## 一次試験だつてばよっ！2（後書き）

十八話でした。

ギリギリ一週間以内で更新出来ました。

読者の皆さんの中には、更新がなかなかされないの見切りをつけ  
た方、また、早く更新しないかなあと思う方、様々だと思います。

私も、最近読んでいるs sがなかなか更新されないのので、皆さまの  
気持ちはよくわかります。しかし・・・しかし！

何卒分かって欲しいのです。卒論を書き終わらないと、大学を卒業  
出来ないのです。

せっかくこんなご時世で私のような者を、採用して下さいました企業の  
方に申し訳ないので・・・

と、そんなかたい事は置いておいて、本日アクセスを覗いてみまし  
たら、なんとユニークがいつの間にか10万人突破しているではな  
いのですか！！

それに、PVも100万行きそうですし・・・これは番外編を書  
かなくてはいけないのか！？と、喜びよりそちらが先に出てしまっ  
たうたわれな燕ですが、

嬉しいですよ。大変感動しています。こんな駄文で、自分の妄想だらけのssをこんなに多くの方々に読まれているとは・・・¥(T  
OT)ノ嬉しさ爆発ですww

そこで、皆さまにまたまた聞きます。今度の番外編はどういったものがいいでしょう？一応私が考えているのは、いの、ヒナタ、白三人の、『ナルトにプレゼントして誰が一番喜んでもらえるか選手権』なるものを考えています。

これ以外にも、こんなのがいいなあ〜とか、これなんてどうですか？といった、ものがございましたら、感想やレビュー、なんでもいいので、書いて下さるとうれしいです。

長くなりましたが、今日はこの辺で終わりです。それでは、皆さままたの機会に。。。。。

二次試験だつてばよっ！1

アッコさんに連れられて、俺を含む下忍達は不気味な場所へと辿り着いた。目の前には巨木が立ち並び、森の奥が真つ暗闇に包まれているため何も見えない。更にその森を囲むように、高く頑丈そうなフェンスが張り巡られている。また、『立ち入り禁止区域』と書かれた注意書きがフェンスに掛けられている。

ここが二次試験の会場か……漫画で読んだ時は良かったけど、実際に目の当たりにすると入りたくねえな……

「此処が『第2の試験』会場、第44演習場……別名『死の森』よ！！」

俺のその思いなどブチ壊すように、楽しくてたまらないといった笑

みを浮かべるアンコさん。俺以外の下忍達もこの森に嫌悪感を出しながら、アンコさんの説明を聞いている。

「……何か・薄気味悪い森ね……」サクラの呟きが漏れるが、これには同意見だ。試験じゃなかったら絶対に俺は入りたくない。強くなるのにこんなところで修行する必要性は全く感じないからな。

「フフ……此処が『死の森』と呼ばれる所以、すぐに実感する事になるわ。」アンコさんが、サクラの呟きを耳聡く拾い、それに応えるように笑みを浮かべながらサクラを見る。

はぁ……この人大蛇丸の元部下だけあって、思考がなんか変態に近いんだよね……でも、綺麗だからそれが妖艶に見えちゃうつてのが、この人のずるいところ。

それにしても、さっきから粘っこい視線が俺と、隣にいるサスケに向けられてるんだけど、これってどう考えてもあの変態野郎に間違いない気がする。俺がそれを感じるのには隣にサスケが居るからだと思う。いや、そう思いたい。原作でも俺ことナルトは、あんまり欲しそうにしてなかったし！

そして、アンコさん。あんたさっきから、俺のことジロジロ見てるけど何か用ですか？お願いですから舌なめずりしながら、そんな楽しそうな顔を向けないでください。

「フフ 君は何だか他の子達とは違うみたいね。私の話を聞いても恐そうにしてないし。」

いや、アンコさん。俺は今そんなものより、貞操の心配をしてるんです自分の。何だか、お尻の穴がさっきからむずむずして……

と、おしりに片手をやって苦笑を浮かべてアンコさんを流そうと思っていたら、この人俺にクナイ投げてきやがった！アンコも変態野郎の元部下、そして特別上忍でもあるからクナイの向かってくるスピードは相当のモノ。俺は咄嗟にお尻にやっていなかった片手でそのクナイをパシッと掴んでしまった。

それにびっくりしたのはアンコさんだけでなく、他の下忍達も同様だったみたいで、一気に警戒心を持たれてしまった。その中で「ナルト！？ナルト君！？」と、いのとヒナタが俺の名を叫んだ。こんなところで、目を付けられなくなかったのに……八八八と頬を引き攣らせながら笑い、俺は手にあるクナイをアンコさんに返した。

「ありがと。へえ……イビキの言うとおり今回は活きが良いのがあるみたいじゃない。フフフ」

俺がクナイを手渡す時に、さっきよりも面白いモノを見つけたような顔で、そんな事を言われた。いや、ホントもう勘弁して下さい。なんか、俺この人苦手かも……………

後ろにいると思う、変態野郎も俺に対して粘っこい視線だったものが、今はドロドロのネチャネチャなものに変わった。うええ……………  
……………気持ち悪……………

「それじゃ、第2の試験を始める前に……………アンタらにコレを配っておくわね！」と、話を戻すべくアンコさんが下忍達全員に聞こえるように大きな声でそう言う。

アンコさんから渡されたプリントを見てみると『同意書』と書かれていた。ああ、死んじゃってもこっちは責任ないよ……………っていう奴だな。それにしても、ここで何人死んじゃうのかなあ……………ま、俺は俺の友達だけ守ればそれでいいから、そっちはそっちで頑張……………って感じて。

「これは、同意書。こっから先は『死人』も出るから、それに付いて同意を取つとかないとね！そうしないと、後で私の責任になつちやうからさ……………」

楽しそうに話すアンコさんを下忍達は、睨むようにして見ているが、アンコさんはそれを気にするでもなく、俺にウィンクしてくる。本当に止めてください。何かいのとヒナタがさっきから、恐いチャク

ラを俺にだけ向けて放って来てるので。

「まず、第2の試験の説明をするから……その説明後にこれにサインして、班毎に後ろの小屋に行って提出してね。」

後ろにある小屋を親指で指しながら笑うアンコさん。はぁ……さっさとこの説明終わらねえかなあ……

「じゃ！第2の試験の説明を始めるわ。早い話、此处では極限のサバイバルに挑んで貰うわ。」

サバイバルと聞いて、嫌な顔を浮かべるシカマルとチョウジ。シカマルはただ単にめんどくさいからで、チョウジに至ってはお菓子がそれまで食べれない事が分かったからだ。

「それじゃまず、この演習場の地形から順に追って説明するわね。この第44演習場はカギの掛かった44個のゲート入口に円状に囲まれていて、川と森、中央には塔がある。その塔からゲートまでは約10キロメートル。この限られた地域内で『ある』サバイバルプログラムをこなしてもらう。その内容は……各々の武器や忍術を駆使した、何でもアリアリの『巻物争奪戦』よ！！」

何でもアリアリ。それは例え殺してでも巻物を奪ってもいいという事。それは、ここにいる木の葉の下忍以外の他里の下忍たちにとっ

ては、願ってもない事。しかし、そんな事この俺が許す訳もないし。

「『天の書』と『地の書』、この2つの巻物を巡って闘う。此処には78人、つまり26チームが存在する。その半分13チームには『天の書』、もう半分の13チームには『地の書』を、それぞれ1チーム一つずつ渡す。そして、この試験の合格条件は……」

アッコさんは右手に『天の書』、左手に『地の書』を持ち俺達に見えるように前に突き出している。

「天地両方の書を持って、中央の塔まで3人で来る事。ただし、時間内にね。この第2試験、期限は120時間……ちょうど5日間でやるわ!」

「5日間もサバイバル……という事はナルトと寝る時も一緒!」

「わわわわ……凄いです……」

「お菓子があ!!ご飯があ!!お肉があ!!!!」

「めんどくせえなあ、おい。」

「ハハハハ。いいぜいいぜやってやるっての!!!!」

「……問題ない。」



「サスケ君と一緒に……（やったぜ！しゃくんなるく！！）」

「フンッ、一番に辿りついてやるさ。」

木の葉の俺を除くルーキー達が、それぞれ勝手になんか言ってるがその中でも、女3人は……駄目だな。頭がおかしくなってるやがる。

「食事は自給自足！仮にも忍なのよあんたらは。あ、でも……人喰い猛獣や毒虫・毒草には気を付けてねえ。」

………なんか、サバイバル入る前から俺疲れてんだけど………  
ねえ、帰って寝て来てもいいですか？え？駄目ですか。そうですか。分かってましたよ。………はあ………

「それに13チーム39人が合格なんて、まず有り得ない。何せ行動距離は日を追うごとに長くなり……回復に充てる時間は逆に短くなってる。オマケに辺りは敵だらけ、迂闊に寝る事もままならない………つまり、巻物争奪で負傷する者だけじゃなく、サバイバルプログラムの厳しさに耐え切れず死ぬ者も必ず出る、という事。」

まあ、そりゃ1チームで天地それぞれ一つずつなんて言っていないから、それ以上奪ってもいい訳だ。俺以外にもそれに気付いた奴らは、当然1個でも多く奪う事で、脱落者を増やそうと考えるはずだ。

「続いて失格条件について話すわよ！まずは一つ目、時間内に天地の巻物を塔まで持ってこれなかったチーム。二つ目、班員を失ったチーム又は、再起不能者を出したチーム。ルールとして、途中のギブアップは一切無し、5日間は森の中！そしてもう一つ、巻物の中身は塔の中に辿り着くまで決して見ぬ事！」

「途中で見たらどうなるんだ？」サスケの問いに、アンコさんは極上の笑みで「それは見た奴のお楽しみ」と言う。

「中忍ともなれば、超極秘文書を扱う事も出てくるわ。これは、その信頼性を見る為よ。説明は以上、同意書3枚と巻物を交換するから……その後はゲート入口を決めて、一斉にスタートよ！最後にアドバイスを一言……死ぬな！」

俺はそのアンコさんの激励に、「分かってるっばよ！」と挑発するような笑みを浮かべて言う。これは、さっきまでの鬱憤を晴らすためであったし、アンコさんにこれを言わないといけない気がしたからだ。案の定、アンコさんは「そう、なら頑張りなさい」と、純粋な笑みで以って返してくれた。

そろそろ、巻物と交換しに行く時間だな。アニコさんからの説明を受けてから約10分。木の葉のルーキー達は一塊になっている。その理由として、3チームで合同に進んだ方がいいか。それとも、それぞれで向かうかということだった。

俺としては全員で行きたいところだが、そうすると変態野郎との戦いで怪我を負わせてしまうかもしれない。そんな事は絶対にさせないが万が一ってこともあるから。俺は一人悩んでいたが、

「ねえナルト、一緒に行きましょうよ。その方が絶対にいいって。」

「い、いのちゃんの言うとおりだよナルト君！わ、私がいればすぐに相手チームの事見つけられるし！」

「俺は別にどっちでも構わねえけど、楽な方にやらせてもらおうわ。」

「楽な方って・・・シカマルあんたいつも、めんどくさそうにしてるけど、もうちょっとやる気出しなさいよ。私は反対。確かに大

人数で行けば戦闘は楽かもしれない。でも、それが本当にメリットだけとは限らないわ。」

「春野の言うとおりだ。それに、俺は自分の力を試したいからな。」

「シノとサクラに賛成ってんじゃないが、俺も自分がどんくらい強くなってるか知りたいと思ってたところだし、何よりこれはチーム戦。本戦に行けば俺達同士で戦うことになるかもしれないんだ。それなのに、自分の手の内をさらすなんて俺はしたくねえ。なあ赤丸！」  
「ワンワンッ!!」

「僕はどっちでもいいや。どうせ、お菓子はこの一袋だけなんだし……」

「俺もこいつらに賛成だ。仲良しこよしもいいと思うが、俺達は忍者だ。自分達の危機は自分達で乗り切る。どうなんだナルト？」

俺は一通り聞いてから言うつもりだったが、サスケの言うとおりかもしれない。俺達は忍者で、俺が守ってやらないとって思うのはこいつらにとっては、すごく失礼な事なんだ。それに、シノとキバからは後で戦うと約束もしている。なら、ここはいいのとヒナタには悪いが別行動を取るか。

「そうだな。俺も別行動にした方が良く気がする。この五日間を生



『俺、サスケ、サクラ』がいるゲート。

「誰が巻物を持つ？」

「サスケでいいんじゃない？」

「私もサスケ君でいいと思う！」

「分かった。なら、俺が持つ。」

サスケはポーチの中に、巻物を入れる。さて、大蛇丸の野郎がサスケを狙ってくるだろうから、俺はこいつの後ろにいればいいよな。

『キバ、シノ、ヒナタ』がいるゲート。

「やってやる、やってやるぜ。ナルトより、早く中央の塔に行つてやる！」

「.....」

「ナルト君……ううん。私は強くなるって決めたんだ。頑張れ私！」

キバはナルトに対抗心を燃やし、シノは自分の実力を試すべく、ヒナタは思いを寄せる少年を思い、スタートの合図を待つ。

『シカマル、チョウジ、いの』がいるゲート。

「めんどくせえけど、俺だってやる時はやるってところをみせてやらねえとな。」

「ご飯が……お菓子が……お肉が……」

「ナルトはああ言ってたけど、やっぱり一緒に行きたいし……そうだ。偶然ばったり会っちゃったら仕方ないわよね。フッフ、待ってなさいよナルトお〜!!」

シカマルは、ついさっきサクラに言われた事が何気に傷ついたのか、いつもとは違う真面目な表情をし、チョウジに至ってはまだ未練がましくそう呟き、恋する乙女と化しているのは、違う意味で燃えていた。

原作では一次試験で出て来ていた音忍3人組がいるゲート。

（フフ・・・やっと、この機会が来た。公然と我々の使命が果たせるチャンスが・・・待っていてくださいねうちはサスケ君。）

全身を包帯で巻いている無口な男、ツンツンに立てた黒髪と不機嫌そうな顔の男、特に目立った外見をもたない女。この3人が狙うのは原作どおりうちはサスケ。

そのことを俺ことナルトは、覚えていなかった。

『カブトチーム』がいるゲート。

（サスケ君、君の実力試させて貰うよ。それに、うずまきナルト・・・フフフ、本当にこの里は実験材料に事欠かない。）

カブトは、嫌な笑みを浮かべる。その時に 眼鏡がキラッと光ったのは当然である。

『我愛羅、カンクロウ、テマリ』がいるゲート。

（敵チームもそうだが、我愛羅と5日間もいるのとか・・・不



幸じゃん・・・)

不安が全開のカンクローは肩を下げて顔も俯いている。

(うずまきナルト・・・！！何を考えているんだ私は！)

一次試験の時に隣だった木の葉の下忍の顔がテマリに浮かぶ。  
金色の髪に、整った顔立ち・・・。テマリは頬を赤くしながらス  
タートの合図を待つ。

(うずまきナルト、俺はお前と戦いたい！)

自分の殺気を当てられてもどこ吹く風といった感じであり、自分よ  
り濃密な殺気を放てるナルトをテマリとは違う感情ながらも思い我  
愛羅も待つ。

『変態野郎率いるチーム』がいるゲート。

「フッフ、サスケ君が欲しいけど、うずまきナルト・・・貴方も  
欲しくなっただじゃない」

変態のその言葉を聞き、同じチームの二人がお尻を押さえる。この

チーム、ナルトにとって一番厄介な存在になる事必至である。

『ネジ、リー、テンテン』がいるゲート。

「ガイ先生……僕は頑張ります！そしてサクラさん、あなたの元に今馳せ参じます！」

自分を鍛えてくれた尊敬する先生と、一目惚れしたサクラの事を思いながら、ゲジまゆことロック・リーは吠える。

「うちはサスケ、それにうずまきナルト……」

眉間に皺を寄せて森を睨むネジ。

「ナルト君……なんか会える気がするんだよねえ……何で貸しを返してもらおっかなあ」

女の勘に寄ってナルトと会えると確信するテンテンは面白そうに笑みを浮かべる。

そして、全てのチームの準備が終わった。みたらしアンコが腰に手を当て森を見る。

「全員、担当のチームについてそれぞれのゲートに移動して！これより30分後に一斉にスタートする！」

その言葉と同時にゲートのカギがそれぞれ開けられて行く。

「これより、中忍選抜第2の試験！開始！！」

そして、アノコの号令と共に第2の試験が始まった。

「あの3人ですね？」

「ガキどもを探せ！！」

変態野郎率いる3人組が凄まじい速度で、駆け出して行く。狙うは、第7班。ナルトがいるチームだ。

「それじゃあ、行っちゃよー！！」

「ちょっとナルト、サスケ君より前に出ないでよー！！」

「フンッ・・・」

俺達第7班もスタートする。目指すは中央の塔。だが、先に変態野郎をフルぼっこにしてやるってばよ!!!

次回

俺の目の前には、舌を気持ち悪いくらい伸ばした変態が一人。そいつの口から出て来るのは草薙の剣。

ならこっちは・・・口寄せ・チャクラ刀『妖刀村正・天狼』。こいつとその草薙の剣どっちがいい刀か試してやるよ!!!!

二次試験だつてばよっ！1（後書き）

第十九話でした。

今回はちょっと短いですが更新が早く出来たのでそれでゆるしてください。

というか、変態ちょっとしか出せませんでした。悔しい！！しかし、今回は必ずやフルぼっこにしてやりますww

あ、勿論サクラにも罰は与えますよwwww

昨日卒論を担当してくれている教授に添削をしてもらったところ、ちよつとの手直しだけですむというなんというラッキーな事がありました、それならss書いちゃおっと言う事で更新した次第です。

そして、嬉しいことにPVの方が100万突破しました！わあ〜パフパフ！ドンドン！という事で、番外編を今ちよろつと書いている最中なのです。これを載せるのは、近日中にする予定ですが、リアルの方で何かあったら出来ないかもしれないので、ご容赦くださいね。

感想、レビュー、それが私の元気の源であり、書き続けられる原動力ですので、どうぞ一言だけでもいいので、よろしくお願いします。

それでは、また次回。。。。。

二次試験だつてばよっ！2

「な……何か緊張して来た……わね……」

森の中を枝をつたって走り抜けていると、サクラがそう呟いた。この試験が始まって少ししか経ってないにも関わらず、右の方から悲鳴のような声が届きそれを聞いたサクラはそわそわと周りを見ながら、俺とサスケに付いて来る。

「ね……ねえ、二人とも、さっきの何だっと思った？」

「おそらく、もう戦闘が始まっているんだ。あんな無様な悲鳴を出

すんだ。やられた奴らはクソ弱かったって事だな。」

「サスケの言うとおりだろうな。つかサクラ、お前周りを気にし過ぎだつての。この近くにはまだ誰も居ないようだし、安心しろ。それと、俺達がお前に合わせて走ってるの分かってるか？・・・口より足を動かせよ。」

「う・・・わ、分かってるわよ！・・・ナルトの癖に・・・」

おい、聞こえてるぞデコ。後ろをチラツと覗いてみたら、デコに貼った湿布を撫でながら、付いて来るサクラの姿が見えた。プププ・・・あれ見るとさっきの思いだしてくるな。

それは俺達が出発する少し前、俺の事を一次試験の時に馬鹿にしたと思われるこいつの額に、デコピンを喰らわせたんだ。それも、ただのデコピンじゃなくてサクラのデコに傷がつくか、つかないかのギリギリの強さで。サクラの奴それを喰らったもんだから後ろに、それも地面に後頭部をぶつけて、すげえ痛がってた。

俺とサスケはそれを見て一通り笑ってから、サクラの痛みが治まるまで待つことなく出発した。サクラは泣きながら付いて来て、後ろから鼻を齧る音を出した。そんな俺はざまあって思ってたやっただぞ勿論。サスケの奴は何だかんだ言って、好意を寄せてもらってる相手だからか、サクラをチラチラと気にしながら走っていた。



そして、今に至るってわけ。サクラの事を意識から飛ばしてチャクラの気配を探ってみると俺達の方にクソ弱いチャクラが近寄って来るのが分かった。こいつは変態野郎じゃないし、ほっとくか?・・・いや、これは使えるかもしれないな。

「なあ、もう少し行って今日の拠点にするところを見つけたら、一旦別れて食料探しに行かねえか?」

「そうだな。拠点があるとないとじゃ違ってくるだろうからな。サクラもそれでいいか?」

「うんうん。私もそれに賛成!」

最初にサスケに振ってからサクラを同意させる。これが、第七班での俺の意見を通す時の暗黙のルールとなっている。っと、そんな事は置いといて、こいつらって波の国でしか他里の忍者と戦ってないし、ここでサスケとサクラには他里の忍者と戦闘してもらって、経験値を稼いで貰いたい訳なんだな俺としては。

それに、俺は変態野郎からの襲撃に備えないといけないし。

「なら、少しスピード上げるぞ。サクラ、ちゃんと付いて来ないと・

「……またコレ、だからな。」

中指を弾く動作をすると、サクラが慌てて「わ、分かったから。ちやんと付いて行くからそれはもう勘弁して！」と言って、それに俺とサスケは笑みを溢して、枝から枝へとつたって走っていく。

そして、一時間後。ちょうど開けた場所に出たから今日はここを拠点にする事を決めて、俺達はそれぞれ担当するものを決めて探しに出かけた。俺の担当は、主食となる肉か魚。予め、ここに来るまでに目星を着けていた場所に行ってみると、案の定でつかい熊が、爪で木を傷つけているところを見つけた。縄張りだと主張してんのか？とか思ってみたりして。

熊の後ろに跳び下りて、そのでっかい背中に拳を叩きつける。傷つ

けることを前提にした拳打は、背骨を折りそのまま熊を前に倒した。これで、俺のノルマは達成だな。さて、それじゃあ戻ってみますか。熊を倒すのは一瞬で終わったが、ここから拠点まで行って帰って来ると時間はちょうど一時間かかる。ま、本気で走れば半分の三十分で着くと思うし、飛雷神の術使えば一瞬だけど、それじゃあいつらの為にならないし、俺はゆっくり行きますかな。

どっこらしょっと、熊を背負うようにしてから俺は、歩き出す。森のくまさんを口ずさみながら………

ナルトが森　熊さんを歌っているその頃のサスケとサクラ………

「ナルトの奴遅いな……」

「ホント……あいつどこまで行ったのかしら……」

二人はそんな会話を既に何回と繰り返していた。なぜそうになっているのか、答えは至極簡単。サスケがサクラの事を意識し出しているからだ。アカデミー時代、それから波の国の任務に行くまで、サスケはサクラの事を他の鬱陶しい奴らと同じと思っていたが、今日まで同じ班で一緒に活動していると、サクラがそいつらと違うように見えて来て、それからはナルトが間にいなければ、いつもこの気まぐずい時間を過ごすようになっていた。

サクラも気まずい空気が流れている事を感じていたが、それはサスケが自分のことを嫌っているからだと思っていたし、何より自分は二人の足を引っ張るお荷物なのではないかとも、ここ最近の任務から感じはじめてもいた。だから、この空気を何とかしようにも、ナルトという仲介がないと何もできないサクラなのであった。サクラがこの時サスケの思いに気が付いていたら、この時間はとても甘い時間になっていたかも知れない事に、サクラはこの時気付きもしない。

そして、更に待つ事数分二人の目に鮮やかな、金色の髪とオレンジ色の服を着た少年が飛び込んできた。

「いやあ、遅れて悪い悪い。これ狩るのに時間掛かったってばよ。」

そう言つてナルトが手に持つ野ウサギを二人に示しながら、近づいて来る。

「あんなそんな小さいの狩るのにこんな時間掛けたの！？掛かり過ぎよ絶対！どうせ、どこかで寄り道でもしてたんでしょ。」

「あ、ばれた？実は来る途中トイレしたくなって、そこらでしてたんだつてばよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

サスケはナルトにいつもは見せない目を向けて、サクラが「あんなは・・・・・・・・レディの前でそんなこと言つな！！」と、近づく前に、ナルトの顔に拳を叩きこんだ。

上体を仰け反らせ、そのまま木に叩き付けられるナルト。

(え？・・・・・・・・)

その余りの出来事に、一瞬言葉を失うサクラだが、「サ、サスケ君・・・・・・・・幾ら何でもそこまでしなくて・・・・・・・・」と、殴られて

顔を押しさえているナルトを見ながら言う。

「な・・・何すんだってばよ!！」

木に叩き付けられたナルトは、手で顔を押しさえながらゆっくりと起き上がった。

しかし、サスケは敵に対峙した時のように眼を細め、「本物のナルトは何処だ!」と、切り返す。

「え?」

「きゅ・・・急に何わけわかんねえ事・・・」

どう見ても眼の前にいるのはナルトだと思うサクラは、サスケとナルト?を交互に見る。サスケが、それに溜息を一つ出すと、人差し指でナルト?の足を指さしてサクラに教える。

「手裏剣のホルスターが左脚に付いている・・・ナルトは右利きだ。それに決定的な違いは、あいつは俺の攻撃なんて喰らうような奴じゃない。お前は、三流の忍者だなニセ者ヤロー!」

「！！」サクラは言われて見て、初めて違いに気が付いた。「直ぐに気付け馬鹿」、とサスケに言われても仕方ない。

「ククク・・・アンラッキー！バレちゃあ仕方ねえ！！巻物持ってたのはどっちだ？」

くぐもった笑いを浮かべ、ナルト？の身体が白煙に包まれる。そして、その白煙から現れたのは口に変な器具を取り付け、目元を布で隠した下忍。そして、よく見れば全身タイトのような服・・・所謂『変態』がそこにいた。

額当てには『雨隠れの里』を象徴する4本の縦線が入っていて、サスケとサクラは反射的に戦闘態勢を取る。

「こっとなったら実力行使だ！」

雨隠れの変態が狙いを定めたのは、サクラだった。サスケと違い戦闘能力が低いと判断したのだろう。雨隠れの変態はサクラに跳びかかったが、そこにサスケが術を行使してサクラを守る。

### 火遁・鳳仙火の術

口元に手を添え、体内で練られたチャクラを炎に変換させ無数の火

球を繰り出す。だが、それは雨隠れの変態の素早さが高いせいか、次々と回避されてしまう。

それを見たサスケは、雨隠れの変態に徒手空拳を繰り出す。サスケの拳が、掌底が、肘が、膝が、足が次々と雨隠れの変態を襲う。何発も当たるが急所を守りながら雨隠れの変態は後方に跳び、距離を開こうとするが、それを許すサスケじゃない。

「逃がすかよ！」

そう言うと、サスケは雷遁のチャクラを流したクナイ4本を左右の腕を交差して、雨隠れの変態に投げつける。雷遁のチャクラを纏ったクナイを三本避ける事に成功した『変態』(長いので変態とここからはさせてもらう)『だが、最後の一本を避け切れずに利き腕の左肩に喰らってしまふ。』

「ッグ……」

(……利き腕を……こいつはアンラッキー！気配を消す為、単独で来たのが仇となったか……。だが、只で終わる訳にはいかねえ！)

怪我をした左肩などお構いなしに、『変態』が振り返りサスケにクナイを投げ付ける。



「フンツそんなもの喰らうかよ!!」

サスケは口元を釣り上げ笑みを溢し、クナイを逆手に持って向かってくる6本のクナイを弾いていく。だが、それも弾いたクナイが爆発した事で焦ったものに変わる。

(起爆札かつ!)

近くに弾いたクナイが突き刺さったので、爆風がサスケを襲う。腕を交差して何とかダメージを最小限に抑え、サスケは地面に降り立つ。そして、サスケが『変態』がいると思われるところを見ているがその姿はなく、後ろからサクラの悲鳴と、『変態』の声があったので、振り返ってみると・・・

「これぞラッキー!動くところを殺す!!巻物を大人しく渡せ!」

「サスケ君!!」

サクラがサスケの名を叫んだ。敵を弱いと決めつけ油断していた自分に怒りを覚えるサスケだが、状況は変わらない。サクラの首にクナイを突き付ける『変態』は、ニヤツと笑みを浮かべる。

「さあ早く巻物を渡せ!でないと、ククク・・・」

「さ……サスケ君……」

「……分かった巻物は渡す……だからサクラを「おいおい、そこで諦めちゃ駄目だろサスケ」ナルト!？」

サスケは自分の言葉を遮って、サクラ達の後ろに現れたナルトを見る。そこには、でっかい熊のような動物を背負いながら、歩いて来るナルトの姿があった。

ああ……来てみたら何だよ、負けてんじゃんサスケの奴。いや、敵の肩に挟れた痕があるからサスケは勝ってたのか。それを、あのデコりんが捕まってオジャンにしたと……はあ……

こいつはまたお仕置きが必要か？

「ナルト、遅いぞー！」

「いやいや、これ担いでこんくらいの時間で来たんだから大したもんだろ。それに、どう見ても俺にはサクラが足を引っ張ったようにしか見えないんだが？」

「それは……いや、今はそんな事よりサクラを助けるために巻物を渡すぞ。それで「ばあか。だから止めるっての。仕方ねえなあ」……」

俺は熊を下ろすと、瞬身の術で『変態』の後ろに移動し、そいつの首を掴み上げサクラを解放してやった。サクラの奴は泣きながらサスケのところへ駆け寄っていきやがった。助けた俺に礼の一つもせず……あのデコ……ボコる。絶対ボコる。

「さて、お前は巻物持ってるか？」

「お、お前どうやって……」

「そんな事聞いてねえだろ？巻物持ってんのか持ってねえのか、どっちだ？」

「ふ．．．そんな事言うと」だよな。なら、お前倒して探す事にするってばよ。」グア．．．」

首を掴む手にギョツと力を入れると、『変態』は人間が本来出さないような声を上げて気絶した。まあこんな奴ここで殺しても仕方ないしな。さて、それじゃ．．．．．なあんだやっぱりこいつ巻物持ってねえし。なら、いらないつと。

ポイツと『変態』投げ捨てて、サスケとサクラの所に向かう。こうして、俺が二人に経験値を稼がせようとした戦闘は終了した。

俺達は今さっきまで戦闘していた場所から2キロ程離れた場所で休憩．．．．．地面に座り込んで作戦会議のようなものをしていた。

「さて、お前ら何か弁解の余地はあるか？」

「「ないです……。ないな……。」」

サクラは泣いて赤くなった目を隠そうともせず、俯いて返事をし、サスケは悔しそうにしながらも、俺と目を合わせることなく返事をした。

「だろうな。俺があのだいニングで現れなかったら、サスケは巻物を渡してたろうし、サクラは悪ければ死んでたかもな。」

サクラを見ると、また泣きそうになってやがった。こいつ泣けば許してもらえるところか思ってたんじゃないかねえのか？んで、サスケ。お前はもう少し反省しろ。何腕組んで不貞腐れた顔してやがんだよ。

「はぁ……。お前達は油断し過ぎだ。これは中忍試験なんだぞ？死ぬかもしれないじゃねえんだよ！一歩間違ったら確実に死ぬんだぞ？波の国の時みたいにカカシ先生がいる訳でもないんだ。分かっただな。」

「うん……ごめんナルト……」「フンッ……悪かった……」

まあ、こんくらいで許してやるか。今は変態野郎が来るかもしれないから少しでも時間は必要だしな。

「よし、なら今からは今後こういった事がないように、作戦を考えるぞ。」

それから、原作通りか分からねえけど、三人が一旦バラバラになった時に暗号で受け答えする事、片時も油断しないで常に緊張感を保っている事、等を話し合った。

その時に、地中に潜んでいる変態野郎がいる事に気付いたが、離れていったのでまだ襲ってはこないと判断して、その時が来るのを待った。

そして、その時が来た。それは、サスケが再び「今度は巻物は死んでも渡さない。だから、今度も俺が持つがいいか？」と聞いてきた時だった。

風が吹いた……………

「痛つ……………なんでいきなり石が……………」

サクラがむき出しにしていた、自分の足を押さえながら飛んできた

小石を拾い上げる。

その風は、益々威力を増して俺達を襲う。来やがった！

「新手か！！」

これが異常な風だと理解したサスケが叫ぶ。

風遁・大突破

これが変態野郎の術で尚且つ俺を狙って来てるのが分かるから、それを同じ術で相殺する。

「おい、そこにいるんだろ？出て来いよ変態野郎。」

「あらあら、フッフ・・・ナルト君、あなた面白いわね・・・」

森の奥の方に指を指すと、オカマ口調と共に三人の姿が見えてきた。編み笠を被り、額当てには『草隠れの里』の印が刻まれている。大蛇丸以外の二人邪魔だな・・・サスケに任せるか。

「サスケ、お前は横にいる二人と戦え。サクラ、お前はサスケの援護だ。いいか。こいつらは波の国で戦った再不斬より強いぞ多分。」

「なら、俺があの時よりどの位強くなったか試すチャンスって事か。サクラ、さっきの失敗をこいつら倒してチャラにするぞ！」

「うん！」

( やってやるわよ！怖いけど………気合だあ！！しゃくんなる〜！！！！ )

「作戦会議は終わったかしら？フフフ……それじゃあんだ達は、金髪の子と桃色の子を相手にしな」それは悪いな。あんたの相手は俺だつてばよ！！」へえ面白いじゃない！」

大蛇丸の言葉を遮るように、瞬身の術で背後を取り、回し蹴りを繰り出す。それを難なく回避される。大蛇丸の横にいた二人が俺に攻撃をそれぞれ繰り出してきたが、そいつらの腕を取りサスケとサクラのいる方に投げる。

「そいつらは任せたぞサスケ！！」

そして、俺は意識を完全に大蛇丸一人にだけ向ける。大蛇丸は、俺の攻撃を回避してからは俺の行動を観察していたようだった。



「フフフ……本当に面白い子。あなた、九尾の子よね？あの子がこんなになるなんてねえ……。サスケ君が欲しいけど、あなたも欲しくなったわね。」

「ハハハハ……。それはありがたい……。って言うか！！気持ち悪いんだよお前！」

大蛇丸と対峙する。こいつは、基本蛇の名前が付く技しかしてこなかった筈……。ならここはあいつがまだ俺の事を舐めている今が、絶好のチャンス！

「……私に勝てるかしらボウヤ？」

殺気を叩きつけられるが、そんなチャチな殺気じゃ俺には効かないぞ変態！

風遁、雷遁を右足、左足にそれぞれ纏わせ、一気に大蛇丸と距離を縮めて、繰り出すのは『風雷連脚』。脚に風と雷の性質変化を加えて相手を連続で蹴る俺がさつき即効で考えた技。

それは、自分の殺気をものともせずに攻撃してきた俺に驚いている大蛇丸には、回避する事ができずに風遁を纏った右足は左腕を、雷

遁を纏った左足は右腕を、それぞれ急襲した。

ポキッと音がした事から、骨を完璧に折った事が分かる。だけど、こいつは脱皮なんていうふざけた、『術』があるから期待はしない。俺は、立て続けに蹴りを繰り返すが、大蛇丸も伝説の三忍と呼ばれた忍者、俺が只の下忍じゃないとこの時になって理解し、攻撃を回避して後方に跳んだ。

「……………あなたの事甘くみてたようね……………今度はこちらから行くわよ！」

### 潜影蛇手

大蛇丸の折れた腕から、蛇が何匹も出て来て俺に向かってくる。それをクナイで斬り裂き、今度は風遁を纏わせたクナイで斬りつけようとするが、大蛇丸はそれを口からビュッと刀を出して防いだ。これは、草薙の剣……………風遁を纏わせたクナイが切り裂く事が出来ない程の業物。

更に大蛇丸は口からニユルルッと脱皮して、折れた腕も俺の予想通り治った状態になっていた。しかもその腕に、口から出していた草薙の剣を持つてだ。

「これは、そんじょそこの剣じゃないの。あなたのクナイじゃ傷

もつけられないわよ。」

そう言つて、草薙の剣を振るう大蛇丸。はッ！俺がこの時のために  
なんの準備もしてない訳ねえだろうが！

右の親指を噛み千切り、左の甲に書いてあつた文様に、親指を走ら  
せる。

口寄せ・チャクラ刀『妖刀村正・天狼』

ボン……と白い煙と共に俺の右手に握られるのは、五尺にもな  
る大太刀。これは、父さんと九尾、それから俺の三人で修行中に造  
つた物。九尾のチャクラと俺のチャクラを流しながら、父さんが持  
つていた玉鋼を使って、父さんが打つてくれた俺のためだけの刀。  
九尾のチャクラが流し込まれたせいか、妖刀となつてしまつたが、  
切れ味は草薙の剣と同等か、それ以上。

「俺のコイツもそんじよそこの刀じゃないぞ。さあ、俺のコイツ  
とあんたのそれ、どっちが上かな？」

俺のその言葉に大蛇丸が、それまで浮かべていた笑みを引つ込めて、  
草薙の剣を片手に持つて俺に向かって、振りおろして来た。それを、  
天狼で受けて俺の馬鹿力で押し返した。

「グ……………」

うりゃああああ！！！！

押し返して、振り抜いた。それを、大蛇丸が剣を引いて横に避ける。天狼が地面に叩きつけられ軽いクレーターを作るがそれを無視し、俺は大蛇丸に今度は切り上げをくわす。

天狼が大蛇丸の体を切りつけたが、ボンッと音がして丸太に変わる。変わり身の術か！本体は……………そこか！！

手裏剣を三枚取り出し、モーションを小さく大蛇丸がいるであろうところに投げる。

草薙の剣で弾かれるが、俺はそこに天狼を振りおろした。タイミン格的には、回避は不可能で、草薙の剣は横に泳いでいる今防ぐ事も出来ない。天狼は、俺が思った通りの軌跡で大蛇丸の胸から腹にかけてを切り裂いた。

大蛇丸は剣を持たない手を胸に当て、後方に跳ぶ。俺は、天狼を地面に突き刺して、印を組む。

## 影分身の術

三体の影分身を出し、それぞれ性質変化を着けた螺旋丸を作る。俺は火遁。三体がそれぞれ、風遁、土遁、水遁。それぞれもちろん5本の指バージョンだ。

「それは危険ね……流石の私でも死んじゃうかもね。」

「当たり前だ。俺ははじめから『大蛇丸』、あんたを殺す心算で戦ってたんだ。」

「!?!?私をどこで知ったのか分からないけど……今日はこの辺で、退いた方がいいみたいね。」

口寄せの術!

大蛇丸が自分の血で、口寄せしたのはでっかい蛇。

「逃がす訳ないだろうが!!」

蛇の鼻の中にニユルつと入りこんだ大蛇丸。俺は影分身達と同時に跳び、蛇の顔面を俺が、そして三体がそれぞれ違う場所で螺旋丸を

叩きこんだ。

蛇の体が吹き飛び、血肉が俺達の体に振りかかるがそれを構うことなく、大蛇丸を探す。目をそこかしこに走らせるが、姿はない。目を閉じて大蛇丸のチャクラを探ってみると、俺が探れる限界ギリギリのところにいる大蛇丸を見つけたが、逃げ脚だけは早いらしく、直ぐに分からなくなってしまった。

「クソツ……まあいいか。天狼でつけた傷は、そう簡単に治癒しないし、いくら大蛇丸にカブトがいるって言っても大丈夫だろう。中忍試験中にあいつが木の葉を潰す計画は、阻止できた筈だからよしとするか。」

影分身を消して、地面に突き刺していた天狼を口寄せの応用で、俺の家の自分の部屋に戻して、俺はサスケとサクラの二人がいると思われる場所に、向かった。

サスケとサクラがいる場所に着いてみると、二人が背中合わせで地面に座り込んでいるのを見つけた。何やってんだこいつら??

「おいサスケ、サクラ。」

「!?!?」

俺の声にビクツと体を震わせて、俺の方に顔を向けて来る二人。体には切り傷やら土汚れやら、血やらが付いているが、どちらも健康そのものって感じだし大丈夫だろ。

「な、ナルト、あんた大丈夫だったの?」

「ああ、この通り少し汚れてるが俺は平気だ。お前達も頑張ったみたいじゃないか。」

そう言つて、二人の座るところから少し離れたところに大蛇丸の部下だと思われる二人が倒れていた。サスケを強くしといて正解だったな。てか、サクラがちゃんとしてるかしてないかで、こんなに違うのかよ。でもまあ、今回はサクラも頑張ったみたいだし、結果才

ーライってことじゃっつ。

「フンツ……さっきの失敗はこれでチャラだろ。」

「そうだな、これでチャラだ。それじゃ、食料を放置してきた場所に行こうぜ。他の奴らに奪われるのとか、勘弁して欲しいからな。」

俺は、二人に背を向けて腕を後頭部で組んで歩きだす。後ろの方で、サスケとサクラが立ちあがる気配がした。ふう……変態野郎をもう少しぶっ飛ばしたかったけど、何はともあれサスケの呪印イベントを回避できたから、こっからは中忍試験だけに集中できるな。

「待ちなさいよナルト！私たち疲れてるんだから……」

「サクラ、俺が肩を貸してやるっか？」

「え／＼／＼……いいの？」

「いって言うてるんだろ！……早くしろ／＼／」

後ろでこんな会話がされてるが、俺は空気を読んで何も言いません。吊り橋効果っていうのかこういうのって？



中忍試験第二次試験、一日目。何とも濃い一日はこうして終わった。

あ、やっぱりウザかったから二人を冷やかして甘い空気を出すのを止めさせた。そんな時に、サクラが文句を言ってきたから、デコピンを喰らわせたのは言うまでもないよな。

## 次回

音忍が俺達を襲ってきたが、返り討ちにしてやった。

そしたら、そこにいの達とテンテン達がやって来た。

「ナルト、こんなところで会えるなんて……これってやっぱり運命……」

「あ、やっぱり会えた。私の勘って当たるんだよねえ」

それではまた次回をお楽しみに。。。。。。

## 二次試験だつてばよっ！2（後書き）

はい、二十話でした。皆さまお楽しみ頂けたでしょうか？

五日もかけて書き上げたにしては、陳腐な感じが否めませんが、これが私の限界でした。

思ったより、大蛇丸をボコボコに出来なかったなあっと思いつつ、サスケとサクラがいつの間にか、ラブな感じに?????

wwww

書いていて面白かったので、そのまま載せました。賛否両論あると思いますが、ナルトのハーレムにサクラは入れるつもりがないので、代わりにサスケとくっついて貰おうと思います。

ここで、作中に出てきたオリ技とオリ武器に関して説明します。

まずは、妖刀村正 天狼・・・これは読者様の虚空さんからの頂きものです。虚空さんどうでしたでしょうか？

次に、風雷連脚・・・これは読者様の俊さんから提供された技です。俊さんどうでしたでしょうか？

と、そんな感じのものです。作中で説明をしたので、ここでは誰誰

からの提供の元で、というものを紹介しました。

他にもこういう技はどうでしょう?とか、これを使って下さい。などといった感想がありましたら、感想でもレビューでもいいので、言ってみてください。出来るだけ、要望にはお答えできるようにはするつもりですので。

番外編の方は、もうしばらくお待ちください。

二次試験だつてばよっ！3

ナルト達が変態野郎と戦闘を開始している頃、中忍選抜二次試験の補佐官を務めている中忍三人が、壁に地蔵が複数掘られているところに集まっていた。

「1・・・2・・・3・・・仏が3つか・・・」

「・・・これって何かの忍術だよな・・・」

「こりゃあ・・・酷いな・・・」

ゴクツ・・・中忍の一人が唾を飲み込む。

軽口を叩く中忍達だが、その表情は口調とは裏腹に厳しいものを浮かべていた。

「いきなり問題発生かよ・・・ったく・・・」

後頭部を掻きながら面倒くさそうに言う一人の中忍。中忍達が見ている先にあるのは3つの惨殺死体。何れものっぺらぼうのように顔の皮が剥がされていた。

「第2試験官アンコさんに知らせる！」

「ハイ！」

一人の中忍が同僚の言葉に返事を返すと瞬身の術で姿を消した。後に残ったのは二人の中忍と赤黒い液体を付けられた壁に掘られた地蔵、そして仏となった三体の死体だけ。

「うむ！団子にはやっぱ……お汁粉ね……さあて……これ食ったら、私も突破者を塔で待つとするか……」

ズズ……と缶のお汁粉で口の中にある団子を流し込む。本当この団子は美味しいわね お汁粉が缶になったのはいただけないけど……

ピュッと食べ終わった団子の串を近くにある木に投げる。

「早い奴等は24時間もあれば、クリアするプログラムだからね・・・  
・・・木ノ葉マーク完成!!」

木の枝には私が食べた約50本の団子の串が突き刺さっていて、最後の一本で木ノ葉マークが完成した。

ここの団子って美味しいからつい食べ過ぎちゃうのよねえ・・・  
・ま、いつか。私ってはまだ24だし　そんな事を考えていたら、  
白煙と一緒に・・・名前を忘れた中忍が現れた。

「大変です、アンコ様!!」

「!・・・何よ、急に・・・」



こいつ……喉に団子を詰まらせたらどつどつしてくれようか……

「死体です！3体の……」

「死体……！！？」

まだ口の中に残った団子をモグモグしながら、そいつに聞き返す。  
死体って……私死ぬってアドバイスした筈よね？それなのに  
こんなに早く死人が出るなんて……

「しかも妙なんです。兎に角来てください！！」

妙？……私は団子を飲み込んで眼を鋭く細めた。死体  
が出ただけじゃこんなに騒ぐ訳ないし……行ってから考える  
か。

「持ち物や身分証からして……中忍選抜試験に登録されていた草隠れの忍なんですが……」

中忍に案内されて来てみると、確かに妙な死体が三体あった。そして、私はその死体を見て気分が悪くなるのと同時に怒りが溢れてきた。

「見ての通り……顔がないんです……まるで……溶かされたようにのっぺらぼつで……」

間違いない……この術はアイツの……アイツが……何でこの試験に……思い出したくないが頭の中にアイツの顔が浮かび上がって来る。私を捨ててこの里を去った『アイツ』が。

「この草3人の証明写真を見せて!!」

「あ！ハイ！」

私を案内してきた中忍から写真を受け取る。そこには、髪の毛の長い男の姿があった。

こいつの顔を奪ったのか……！！？今は下忍達が森の中にいる。それは犠牲者がまだ出る事を指す。私は瞬時に何をすべきか判断し、中忍達に顔を向ける。

「えらい事になったわ！あなた達はこの事をすぐ火影様に連絡！」

「え！？」

ああもう！！説明している暇はないっての！

「死の森へ暗部の出勤要請を2部隊以上取り付けて！私はたった今

からこいつらを追い掛けるわ!!」

そう言ってから私は死の森へとフェンスを乗り越えて入っていく。  
あいつから下忍達を守らないと!!

でも、その私の願いは試験開始前からかい、思いの外気にいった  
一人の下忍によって守られたのを私はこの時まだ知らない。

時間は過ぎて日が暮れた頃・・・・・・・・

「もう小一時間で空が白むだろう・・・一日使って食料と水は確保できたし・・・」

巨木の根に腰を掛け、今後の計画を相談しているのは日向ネジ。近くには携帯食料を食べてそれを聞いているロック・リー。

「活動を休止しているチームが殆どだ・・・予定通り、この時を狙う。」

この班唯一のくノ一テンテンはと言つと・・・・・・・・

クナイの柄、詰まりは穴が空いている所を指に引つ掛けクルクルとそれを回している。

「いったん3人で分かれて……各自3時間偵察に行く。ただし、他のチームを見つけても見つけなくても……」

ネジは言葉を続けながら、ショルダーから取り出したクナイを自分の座っている場所へ突き刺す。

「この場所へ戻ってくる。良いな！」

「ラジャー!!」

「OK!!」

リーは軍人がするような敬礼で以って元気良く返事をし、テンテンは笑顔で返事をする。

(サクラさんの様子を見てきます!!)

(フフ 何か面白い事がありそうな気がするな)

ネジは二人の言葉に口角を上げて不敵な笑みを浮かべる。

「よし………！散！！！」

そして、次の言葉で三人はそれぞれ散った。

場所は変わり、一際巨大な木の根が盛り上がっているところにナルト達はいた。

変態野郎（大蛇丸）を追い払った俺達は、自分達の担当した食料を持ってからここに移動してきた。そういえば、ここって原作でサクラが俺とサスケを看病してたところじゃなかったか？

後ろを向けばサクラが今晚のご飯を作っていた。作ってるって言っても熊を捌いたのは俺で、捌いたそれを今日を入れた五日分に分けて、今日の分を使ってサクラが飯を作っている。残りは……………まあ食べてから考えよ。

サスケはというと、俺の課した修行をしている。チャクラを雷に形質変化させ、利き腕にそれを集めさせる。何をさせているかというとかカシオリジナルの技『千鳥』だ。一か月サスケの体をイジメ抜き、やっと今日『術』に移行したんだ。俺がなぜ最初にこの術を教えているか、それはめんどいし原作通りでいいやと思ったから。

だってこいつ写輪眼なんていうチートの目持ってるし、一回でも見せたら直ぐにコピーするんだぜ！？俺が影分身と一緒に修行したのを一回でだぞ！！俺はそんなの認めない！……………という事で、まずは原作通り千鳥から教えてる。



サスケも、「!?これはカカシの・・・」とか言つて、いつものし  
かめっ面をびっくりさせられてたし、俺が教えてやると言つと、嬉  
しそうにしていた。まああいつの場合それが、不敵な笑みだったけ  
どな・・・・・・・・・・

そんで、俺はそれを胡坐で座つて見ているって訳。つと・・・・近  
くに誰か来やがったな。これは・・・・・・・・音か？一次試  
験の時に覚えていたチャクラの気配が音のものだったから、そうだ  
と思う。

はあ・・・・・・・・今日は雨隠れと大蛇丸と戦つたんだ、俺はとも  
かく二人は無理だろうな。サスケはそれを否定するだろうけど、今  
も修行しているのが辛そうだからな・・・・・・・・二人の経験値  
を稼ぐのにちょうどいいんだけどなあ・・・・・・・・

「サスケくうくん！ナルトおー！ご飯出来たからこっち来てよ。」

ま、音の奴らが襲ってくるようならそんな時ブツ飛ばせばいいよな。

「デコ姫様がお呼びだ。飯行くぞサスケ。」

「ふう……分かった。」

サスケが千鳥を霧散させて、俺の方に歩いて来る。それを見て俺も立ちあがり、サクラの方にサスケと並んで向かう。さて、美味しい飯であることを祈ろうかな。

サクラの美味くもなく、不味くもない飯を食べ終わっても音の奴らが襲ってくる気配がない。成る程、あいつら俺達が寝るのを待てるのか。

「昼間襲ってきた人達が持っていた巻物は私達と同じ『天の書』だったわね……はあ……」

「俺達が欲しいのは『地の書』だ。だが、これも使い道がない訳じゃない。そうだろナルト。」

サスケが天の書を人差し指に乗せながら話す。

「ああ。サスケの言うとおりだ。サクラ、お前は頭『だけ』はいいんだからもう少し考えろってばよ。よし、明日も早いしもう寝ようぜ。俺が今日見張りしてやつから、明日はサスケな。交代制にするからそのつもりでいろよ。ああサクラ、勿論お前もやるんだぞ。」

「ええ！？私おん「ほう？女だからやらなくてもいいと？」「そうよ！」「お前は忍者だよな？それに今俺達は中忍になるための試験をしてるんだよな？」・・・」「そんな奴が女だからって見張りしなくていい訳ねえだろうが！！」「あう・・・」

サクラの頭をコンコン手の甲で叩きながら言い聞かせる。するとさつきまで反論していたサクラは何も言えなくなっていく。最後にそれまで軽く叩いていた手の甲を拳に変えて、拳骨をサクラの頭に落とす。

頭を押さえて涙を溜めた目で睨んでくるが、それを軽く流してシッシと手で早く寝ると合図を送ってやる。

サスケは疲れを取るためにさっさと横になり、サクラも渋々言いつつ  
おりに横になった。

・・・さて、音の奴らは襲って来るかな？それとも・・・

ガサツ・・・・・・・・

ん？おおくやつと出てきたか。見張りをしてから5時間、背後の茂みから物音が聞こえた。だが、そこから出てきたのは・・・・・・・・

リス？・・・・・・・・てか背中に起爆札が貼つてあるし酷い事するなあ。可哀想になあ、よしよし今取つてやるからな。リスの背中から起爆札を取つてやり、剥がしたそれを握り潰す。リスは不思議そうに首を傾げていたが、木の実をあげるとハムハムと食べ出した・・・・・・・・癒されるなリス・・・・・・・・と、こんな事した馬鹿な奴らをお仕置きしないとな。

540

「そろそろ出て来いよ。いるんだろ？」

リスが出てきた逆の方、つまりは俺の後ろにそいつらは現れた。

「気付かれてましたか・・・・・・・・」

「いいじゃねえかドス！俺ははじめっからこんなちやちな仕掛けは好かなかったんだ！」

「油断すんじゃないよザク。あくまでも狙いはうちだからね。」

さて、そんじゃまあ、いっちょやりますか。

場所は変わりナルトが音の奴らと対峙している頃・・・・・・・・口  
ツク・リーの場合。

リーはネジの言う通りに『死の森』を駆け巡っていた。太い木の枝  
を次から次へと飛び移り、その中の1つに手を付けると遠心力を利  
用してクルンツと回転し、足でその枝に着地した。

すると、その衝撃で落ちたのか、巨木から木の葉がヒラヒラと舞い  
落ちる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

リーは無言でその落ちる木の葉を見ていた。だが、次の瞬間何を思  
ったのか、まつ毛が三本だけ生えている丸い目を細めてガツツポー  
ズをする。

(この葉っぱ20枚・・・・・・・・地面に落ちるまでに全て取れたら・・・  
・サクラさんがボクの事を好きになる!!もし・・・もし一枚で  
も取れなかったら・・・・・・・・!!一生、片思いで終わる・・・つい  
か「アンタ、ゲジゲジじゃん」とか言われる・・・・・・・・)

頬を染めながらそんなことを考えていたかと思うと、目に炎を灯して再びガッツポーズを決める。

バシユツ！！ 「とお！！」

徹夜にも関わらず無駄に元気な掛け声出し、それと同時に木の枝を蹴って木の葉に向かって一直線に跳んだ。

リーは何時でも何処でも自分ルールで修行する癖が付いていた。それは、こんなところでも発揮されてしまう。サクラがリーの事をこんな事で好きになる根拠がどこにあるのだろうか。サクラはこれを見ていないし、何よりサスケ一筋だ。リーには勝ち目なんてはじめからないのだが……

パシパシパシパシパシ……次々と空中にある木の葉を両手だけで掴んでいくリーの顔は真剣そのもの。19枚目を掴んだ所で、「グオ！！」と体を木の枝にぶつけて、変な声を出してしまう。これを、ナルトやキバ、いのが見ていたら馬鹿笑いでいたことだろう。何とも惜しい……





リーはその雄叫びは、死の森中に響いたとか響かなかったとか……

またまた、場面は変わり日向ネジの場合……………

「ごっそ隠れずに出て来い……………」

左の茂みの方に向かって言葉を掛けるネジ。ネジはリーと違って地面を歩いて偵察をしていた。そして、ネジに見つけられた憐れな下忍とは誰か……………

（おい、どうするよ。めんどくせえのに見つかっちゃったぞ。）

(ああ、もう！ナルトに何時になったら会えるのよぉ〜!!)

(僕……お腹減っちゃった……)

いの、シカマル、チョウジの3人だった。三人はヒソヒソと話していたが、再度「出てこなければ、こっちから行くぞ。」とネジに脅され、シュパツと隠れていた茂みを跳び出した。

「何だ……お前達か……」

ネジが興味無さそうに呟く。それに対して三人は、アイコンタクトを取ってここを脱すべく、苦肉の策を取る。

「な、なああんた。去年のノールキーなんだろう？そんな奴が俺達ルーキーから巻物取るのって体裁悪くなったりしんじゃないの？」

「そ、そうよ！だから、私達を見逃しなさい！！」

「いのゝこつちが上から目線じゃ駄目だよ。」

「去れ。」

一言だけそう言い残すと、三人の言葉など知った事ではないと言うようにネジは背を向けて三人から離れて行く。それを見たいのが中指だけを立たせた手をネジに向ける。

「おい……今俺に向けているソレは、俺とやり合つて事か？」

「ばッ馬鹿いの！いいや！これはそんな心算じゃなくて……そ、そうこいつ指が攀つたらしくて……」

「シカマルあゝ」「いいから！」「それじゃ俺達はこの辺で……！」

シカマルに口を押さえられたのは最後までフガフガ何か言っていたが、チヨウジとシカマルはそんないのを連れて、茂みの中へと飛び込んだ。

(フンツ…………まるでゴキブリのようだな…………)

ネジは三人が飛び込んだ茂みを一度だけ見てから、再び偵察に戻った。そして、ネジに見逃してもらった三人はというと……………

「何であんな奴に尻尾振らないと行けないのよ!！」

「だあかあらあゝ俺らは弱いの!だから、弱いなりに生きてかないといけねえんだよ!全く……………」

「そんな事より早く朝ご飯にしようよゝさっきから僕お腹減って死にそう……………」

（はぁ・・・ナルト俺も今お前に無性に会いたくなつた。俺にはこいつら二人のお守はハッキリ言って・・・キツイ。）

シカマルの苦悩の事など関係ないように、いのは近くの巨木に拳を叩きつけ、チヨウジはグウ〜と鳴るお腹を押さえながら地面に座り込む。この班、二次試験合格出来るのか?????

さらにさらに場所は変わる。テンテンの場合・・・・・・・・

テンテンは自分の勘を頼りに、木から木へと飛び移ったり、地面を歩きながら偵察をしていた。鼻歌を歌いながらではあるが。

「　　今度はこっち行ってみよっと。」

女の勘は当たる確率が高い。それは科学的には証明出来ないが、なぜか男の勘よりも当たる。これは、どこの世界でも共通のようだった。そして、その女の中でもこのテンテンは、それがずば抜けて高かった。いのが見つけれなかったナルトを、勘によって走り回っていたテンテンが見つけた事からそう言えるだろう。

「ビンゴお　　おやおや？ナルト君はいたけど、なんかどっかの下忍達と戦ってるみたいね。それに、うちの男の子とピンクの女の子はまだ寝てるみたい。」

テンテンの目に飛び込んできたのは、ナルトが音忍と戦っている場面。そして、それが戦いというものではなく、ナルトの無双シーンだった事に気付くのは遅くはなかった。

「へえ……………ナルト君ってあんなに強かったんだ。」

ツンツンに立たせた黒髪の少年をナルトが蹴り飛ばし、次にクナイを振りおろしてきた別の少年の頭を掴んで地面に叩きつけ、最後に女の子のお腹に拳を叩きこんで終わらせた。

女の子の方に移動したのは見えなかったけど、一瞬の内に下忍三人を倒した戦闘技術は、テンテン自身、そしてテンテンのチームメイトのネジとリーでも勝てないのではないか。そう思わせるのには十分だった。

「ありゃ、先輩じゃないですか。どうしたんですこんなところで？」

！？

自分がナルトの事を改めて凄い忍者だと分析し直している時に、その分析をしていた本人が急に目の前に現れたら、びっくりするのは仕方ないだろう。それに、テンテンがいるのはナルトがいたところから300mは離れた場所だ。それを一瞬のうちにここに移動して来て、テンテンがいる木の枝の上にある枝に足を掛けて逆さまになっているのだ。



咄嗟に声が出なかったテンテンに、首を傾げて話しかけて来るナルト。

「先輩ご飯食べました？」

「え？……ま、まだだけど……」

「なら、一緒にしませんか俺達と。ちょうどあいつらの事起こそうと思っただけだし、昨日狩って来た熊なんですけど、俺達だけじゃ食べきれなかったんですよ。いやあ、先輩が来てくれて助かりました。」

テンテンは、目の前の少年がさっきまで戦っていた同じ少年だとは思えなかった。それに、何の警戒もなく同じ里だが今は敵同士の自分を、食事に誘ったことも解せなかった。だが、この笑顔を見ているとそれもなくなくなった。

「はあ……仕方ないな。可愛い後輩のお誘いだしね。あ、ウチの男どもも連れて来ていいかな。私達も一応食料は調達したんだけど、君達のとこにあるお肉食べたいしね。あ、でもこれである時

の貸しがなくなるとは思わない事だよ、金髪君」

「ありゃ、ばれてましたか？まあいいです。それじゃ、ご飯作りながら待ってます。」

そう言ってナルトはクルツと回転して、木から跳び降りて行った。ホント、不思議な後輩だなあっと思いつつながら、クスッと笑みを溢しテンテンは集合地点へと引き返した。そういえば、ネジが3時間で戻って来いとか言ってたなあ……。まあいいか。何時ものことだしね。

この世界のテンテンは、原作のテンテンよりも自由気ままな性格のようだ。

リーよりも先にテンテンが俺達を見つけたかぁ……まあ、原作の事も忘れてきてんだけどな。確か原作じゃリーがサクラを助けに来てたような気が……

「おい起きろおゝ朝だぞサスケ、サクラ。」

頭の中では違うことを考えながら、二人を起こす。ってか、こいつら音の奴ら来ても寝てるのか……俺いなかったらこいつら死んでたな、うん。

「いい加減に起きろつての!!」

中々起きようとしない二人の頭に拳骨を落とす。「!!」「いたっ!……」と、それぞれ反応して上半身を起こす二人。サスケは恨めしそうに睨んで来て、サクラは「また叩かれたぁ……」とか言つて、泣きそうになつてる。

「痛いもくそもねえよ。もう朝だ。それから、いくら疲れていると言っても敵は容赦なく襲ってくるんだぞ？それをお前らと来たら・・・」

と、二人に説教をする。まあ、一瞬で片をつけた俺も俺だが。サスケとサクラには昨日の戦闘が相当堪えてるみたいだな。

説教を数分で終わらせ、調理をしようとしたところでテンテン達がやって来た。それに、サスケがいち早く警戒して身構えたが、俺が「客だ。」と言うと構えを解きながらも、警戒は解かずにサクラと一緒に薪を集めに行った。

そして、熊の焼き肉という朝からヘビーな朝食を食べようとしたところに、

「あああああああ！！！！やっと見つけたあああ！！！！会いたかったよおナルト~~~~！！！！」

と、俺より薄い金髪を揺らしながらのが俺に向かって走って来た。

俺に向かって跳び込んで来たいのを受け止めて、いのを見てみると・  
・  
・

「おつと・・・・どうしたんだ、いの。こんな汚れて・・・・それにシカマルとチョウジはどうした？」

そう俺の目の前にはいの一人だけ。こいつと同じ班の俺の友達二人がいない。俺の言葉にいのが自分がやって来た方に指を向けると、ヘトヘトボロボロユラユラという表現がふさわしい二人がこっちに歩いて？来た。

歩くスピードも驚くほど遅い。俺はいのをその場に座らせると、二人を迎えに行った。二人は俺の顔を見ると安堵の表情を浮かべると、電池が切れた人形のようにその場に崩れ落ちた。

「あ、おい！しっかりしろ二人とも！！」

「ナルト・・・・」

「どうしたんだってばよシカマル！」

シカマルが俺の名を呼んだので、一先ずチヨウジは放置してシカマルに顔を向ける。すると、ブツブツと呟いていたので耳を寄せる。

「いのお守は任せた。」

は???何言ってるんだこいつ?お守?いなの?てか、何俺はやり切ったぜみたいな顔してたよ。はぁ………まあまずはこいつらを連れて行くか。

俺はシカマルとチヨウジの片足をそれぞれ持って引き摺りながら、朝食を囲んでいる奴らのところへと向かう。

シカマルじゃないけど、何かめんどくせえな………

## 次回

砂の下忍の実力を間近で見る事になったヒナタ、キバ、シノの三人。

俺は三人がそんな目にあっている間……

「ちょっとテンテン先輩だっけ？ナルトに近寄らないでよ！」

「ええ、何で君にそんな事言われなといけないのかな？あ、もしかして君金髪君の……コレ？」

「……………そ、そそそそそっじゃないけど……………」

はぁ・・・頼むから静かにしてくれ。

それではまた次回。。。。。。。



二次試験だつてばよっ！3（後書き）

二十一話でした。

というか、番外編書かないのかと思われていると思いますが、書いてるんですよと！

しかし、思いのほか捗りません。そのため、本編の方が先に書き終わったのでこちらをあげた次第です。

番外編はもうしばらくお待ちください。

それではまた次回。。。。。。。。。。

二次試験だつてばよっ！4

ナルト達が朝食を食べているその頃の第八班は、既に中央の塔に来ていた。勿論天地両方の巻物を持って………

くうん………

「大丈夫か赤丸……」

怯えて震えている赤丸の背を安心させるように撫でるが、その震えは治まらない。

「まだ震えているのか・・・もう半日も経つんだぞ。」

「赤丸・・・」

シノとヒナタも赤丸の傍に寄る。

「無理もねえ・・・なんせあんなモン見ちまったんだからな・・・」

1日目 第2の試験開始約50分後……………

「ひゃっほおう!! サバイバルはやっぱりココだぜ!! なあ、赤丸!  
」

ワッッ!!

自分の頭を親指でコンコンと叩き森の中を駆け抜けて行くキバとそれに元氣一杯に答える赤丸。

「畏に掛かった奴等が運良く『地の書』を持つてるたあーな! この分じゃ、俺達塔に一番乗りだぜ!!」

「調子に乗りすぎる…………それは危険だ。どんな小さな虫でも、いつも外敵から身を守る為…………敵に遭遇しないよう注意を払う…………これが安全だ。」

シノが浮かれて声が大きくなってきているキバに注意をするが、キバはどこ吹く風と言ったところ・・・さらには、シノに対する日頃からの不満を言うほどだった。

「んなの分かってるよ！相変わらず分かりにくい喋り方じゃがって、この虫オタク！」

「あ・・・で、でも・・・シノ君の言う事も一理あると思う・・・」

シノの方がここでは正しい。それが分かっているからこそヒナタはビクビクしながら、シノを弁護する。

「分かったよ！ったく！！」

好意を寄せているヒナタにも言われたら、納得するしかないキバは面白くなさそうに渋々納得した。

(・・・ナルト君はもう巻物揃ったのかな・・・ううん、私達がもう揃ってるんだもん。ナルト君はもう塔に着いてるのかも・・・)

ヒナタの中でナルトは、木の葉の里の忍者で一番尊敬する忍であり、思いを寄せる人である。だからこそ、何時いかなる時でもナルトの事を考えない時などないのである。

3人がかなりの速さで木の枝を飛び移っていると、赤丸が何かに気付きクンクンと鼻を鳴らした。また、それと同時にキバも赤丸と同じように鼻をクンクンさせて、何かの気配を感じた。

「オイ！2人とも止まれ！」

両手を左右に広げ、2人の歩みを遮るキバ。

いきなりのその行動にシノとヒナタの2人は木の枝の上で停止する事になるが、任務でこのような事など日常茶飯事な二人は直ぐに辺

りを警戒し出した。

「敵に遭遇しないよう注意すんだろ……だったらヒナタ！あっちの方角！キ口先見えるか？」

森の向こうを指さすキバ。ヒナタはそれに頷き、キバが指したキ口先を見るために印を組む。

「うん……見てみる」

白眼！！

ヒナタはキバに言われた通り『白眼』で見ると、そこには大きい瓢箪ひょうたんを背負った少年の姿があった。

「あ……あっちに誰かがいる……」

「……どうやらこれは……6人か。」

シノはヒナタのそれを聞くと木の枝に耳を当て呟いた。これはアカデミーで習う初歩中の初歩だが、シノは1キロ先の音を聞き取ったのだ。それも、地面ではなく木の枝から……この事からシノがアカデミーを卒業しても修行を疎かにしていなかった証明になるだろう。

「よっしやあ……見に行くぜ……！」

「え？」

「キバ……何を言ってる、それはダメだ。」

キバのその発言にヒナタは困惑の表情を浮かべ、シノは珍しく声を少しだけ大きくして異議を唱える。



「試験官は『天・地』1組の巻物を持って来いって言ったただけだ。それ以上奪うなどは言っていないぜ。ここで俺達が余分に頂けば、その分他のチームが脱落する訳だろ？」

「で、でも……」

身振り手振りを付けながら話すキバ。ヒナタはそんな時間を無駄にする事などしないで直ぐにでもナルトに会いたい、そう思っているからこそその困惑である。原作ではひ弱なキャラであったヒナタがここではナルトの事を思い、キバのその発言に否を唱えたいのだが……

「まずは様子を見るだけだ……ヤバけりゃ無理に戦いはしない……じゃ行くぜ……」

それだけ言ってから、キバは一足先に森の中を駆けて行く。ヒナタはどんどん小さくなっていくキバの背を親の敵でも見るかのような目で睨み、シノは口元が隠れて見えないが小さく溜息を吐いた。

(全く、虫の好かない奴だ！)

シノはやれやれと肩を竦めながらキバの後を追ひ、ヒナタは二人が行くなら・・・と、渋々であったが二人の後を追った。ヒナタの性格が壊れて来たような気もするが・・・それは仕方ないのかもしれない。原作とは違って、ヒナタはナルトやいの、シカマル、チヨウジ、キバ、シノとアカデミーの時から一緒に過ごしているのだから。

ヒナタとシノが先に進んでいたキバを見つけ、その茂みに身を隠した時だった。

くうん・・・

赤丸が前足で顔を隠して元から小さかった体を丸めて震え始めた。

「どつしたよお赤丸？」

「ど、どつしたの？・・・急に止まって・・・」

「赤丸が急に怯え出した・・・」

くうんくうんと鳴いて赤丸はキバの服の中に潜り込む。何をそんなに怯えているのか、赤丸はキバの服の中に潜り込んでも小さな鳴き声と震えを止めなかった。

「ど、どつして・・・」

「こいつは敵のチャクラを嗅ぎ分けて、力の度合いが分かっちゃまう・・・けどここまで怯えるのは始めてみる・・・この先でやり合ってる奴ら只者じゃねえぜ・・・」

ヒナタ達が隠れている場所から少し離れた場所に2組のチームが対峙していた。片方はナルトが一次試験の時にちよっかいを掛けた砂の下忍達、もう片方は背に傘を何本も背負った男がいる雨隠れの下忍達だ。

571

「砂の餓鬼が・・・俺達に真っ向から挑んで来るなんてのはあ……………」

「愚かだねえ……………」

「……………」

中心には傘を何本も背負った男、左右には編み笠のような物を被っている2人の男。

我愛羅は腕を組み、雨隠れの下忍達を睨む。テマリとカンクロウは我愛羅の邪魔にならないように少し後ろに下っている。

そんな2チームをヒナタ達三人は茂みから顔だけ出して見ている。

「あのチビ、あんな奴らに絡むなんて・・・何考えてやがんだ・・・」

572

くうん・・・

「・・・!？」

「な、何だつて赤丸？」

犬塚家であるキバが忍犬である赤丸の言葉を理解するのは不思議ではない。だからこそ、キバは赤丸が何に怯えているのか分かった。

「あのデカイ奴・・・ヤバいって言うてる・・・」

(た、確かにヤバそうな人達・・・とても強そう・・・)

ヒナタは背に何本もの傘を背負った男を見てそう思う。だが、ナルトなら勝てるのでは・・・と心のどこかでそう思うヒナタがいるのも確かである。

573

雨隠れのリーダーと思われる中心の男が口を開いた。

「おい小僧・・・相手は選んだ方がいいぜえ〜。死ぬぜえ〜お前ら。」

どこか嘲笑うような口調。明らかに我愛羅達を格下と見ている。だ

が、それも我愛羅には効かない。いや、我愛羅にはそんなものどうでも良いのだ、ただ殺し合う・・・それだけが出来れば。

「御託はもういい・・・早く殺ろう。雨隠れの『おじさん』」

『おじさん』。そう呼ばれた片目を糸か何かで閉じている雨隠れのリーダーは顔を引き攣らせた。

(一体、どいつがどっちの巻物を持ってやがるか・・・)

カンクロウが我愛羅の後ろから雨隠れの下忍達をそれぞれ見て行く。

「おい、我愛羅！後を尾けて情報を集めてから狩るってのが筋じゃない。巻物の種類が同じなら争う必要はないし・・・余計な戦いは関係ないだろ。」・・・

カンクロウのその助言を我愛羅は一言で切り捨てる。これがこの兄弟のデフォなのだが、雨隠れの下忍達は全員怪訝な表情を浮かべる。

「眼が合った奴は……皆殺しだ。」

「……!?」

我愛羅のその言葉を聞いたカンクロウとテマリ、そして雨隠れのリーダーはそれぞれ違った反応を見せる。

カンクロウは自分の言葉を遮り、尚且つそう言う我愛羅に苦い表情を浮かべ、テマリはまたかと言うように目を伏せる。雨隠れのリーダーは自分達が舐められていると悟り、怒りで顔を染めた。

また、茂みに隠れているキバ、ヒナタ、シノもそれぞれ、我愛羅のその言葉に驚いていた。

(だから嫌なんだよ……コイツと一緒にいるのはッ！)



カンクロウが内心で我愛羅に不満をぶつけると同時に雨隠れの下忍たちは動いた。

「フンツ・・・じゃあ、早く・・・やってやるよ!」

雨隠れのリーダーは背中に両手を交差させるように伸ばし、背にあった傘の柄を掴んだ。片方に3本、計6本の傘を前に振り下ろし同時に開かせる。更に真上に放り投げると、6本の傘は宙にそのまま浮かんだ。おそらく、この雨隠れのリーダーの術であり、チャクラでコントロールしているからであろう。

「死ねッ!ガキ!」

雨隠れのリーダーはそう言うと、両手で印を組んだ。

忍法 如雨露千本!!

術の発動により傘が高速で回り始め、そして傘の骨から無数の何か

が発射された。それは、細長く先が尖っていた。

（仕込み千本！？）

ヒナタがそれを見て内心でそう叫ぶ。

「はあああああああッ！！」

雨隠れのリーダーが声を上げながら無数の千本を操る。我愛羅はそれを退屈そうに見ながら組んだ腕を解かない。

「フツ・・・上下左右、この術に死角は無い！しかも千本は全てチヤクラで統制され、狙った獲物に襲いかかる！！」

雨隠れのリーダーが腕を我愛羅に向けて振りおろすと千本の雨が我愛羅に降り注いだ。だが、我愛羅は腕を組んだまま迎撃しようとも、避けようともしなかった。そして、無数の千本が我愛羅のいる所に降り注ぎ、辺りに土煙りが舞った。

(フンツ他愛のない……)

雨隠れのリーダーはニヤリと笑みを浮かべる。当然だろう、誰が見てもあれは我愛羅がやられたと思う。だが、しかし土煙りが晴れると……何かの塊のようなモノに覆われた我愛羅が現れた。

「……それだけか……」

我愛羅は腕を組んだまま口を開いた。千本は確かに我愛羅の周りに降り注いだ。だが、それも砂の護りを持つ我愛羅には効かない。砂が自動的に我愛羅を攻撃しようとするありとあらゆるものからガードするからだ。

よって、我愛羅の身体は全くの無傷。

「そ……そんな1本も……無傷だと、馬鹿な……」

雨隠れのリーダーは驚きの余り、一步後退してしまった。自分が一番自身のある術で攻撃したにも関わらず、相手が無傷ならそれも仕方ない事だ。

「くっ!!」

再び印を組み、数十本の千本を我愛羅に向かわせるが、その攻撃はまたしても砂によって防がれた。

「ツチイ!!」

「千本の雨か・・・じゃあ、俺は・・・血の雨を降らせてやる。」

我愛羅は酷い隈によって回りが黒い眼を鋭くさせ、自身のチャクラを解放する。そのチャクラは膨大だった。雨隠れの下忍達を怯ませるには十分な程に・・・

「何て、でけえチャクラだ……それに、あの砂……  
・凄く臭いがしやがる……」

キバは自分の犬並の嗅覚をこの時程恨んだ事はなかった。顔をこれでもかと顰めながら我愛羅から目を離さない。

「臭い？」

シノがそう聞いてしまうのも仕方なかった。膨大なチャクラを感じる事は出来るが嗅覚は普通の人のそれなのだから、キバのようにはいかない。そして、この膨大なチャクラに耐えられなくなったこともシノの口から言葉を発する事になったのかもしれない。

「ああ……強い……血の臭いだ……」

我愛羅の周りを囲っていた砂の壁が突き刺さった千本と共に崩れて行く。

「クッ……砂の壁だと!？」

「そうだ、砂による絶対防御。瓢箪の中の砂を操り膨大なチャクラで固め、己の身体の周囲を防御する我愛羅だけに許された術。しかもそれは、我愛羅の意思とは関わり無く……何故か自動でオート行われる……つまり我愛羅の前では全ての攻撃が無に帰す……」

カンクロウが我愛羅のその砂の事をベラベラと話す。一応これは砂隠れの里の機密に入るのだが……この後テマリに罰としてウサギ跳びで塔に行くように言われるとはこの時カンクロウは知りも

しない。

「そ、そんな馬鹿な・・・あの千本は厚さ5ミリの鉄板でさえ貫く力があるつてのに!!」

「お前らじゃ、ウチの我愛羅は殺れないよ・・・」

「舐めんじゃねエ!!」

カンクロウのその言葉にキレたのか、はたまた追い詰められたからか雨隠れのリーダーは我愛羅に向かって一直線。背にある残った傘に手を掛けて駆ける。

我愛羅はそれを両手を合わせて三角形に模した印を組んで構える。

(死んだな…コイツ)

(我愛羅に逆らうからよ)

カンクロウとテマリが雨隠れのリーダーに嘲笑を浮かべる。結末が分かっているとでも言うかのように……

砂縛枢

左手で印を組んだまま、我愛羅は右手を軽く指を曲げた状態で前に突き出す。

雨隠れのリーダーが駆けていたその足を手の形となった砂が絡み付き、足だけでなく体にも絡み付いていく。そして、雨隠れのリーダーは砂に包まれ顔だけ出ている状態になった。

「クツ……動けねえ……」

身動きを取ろうとするが体に纏わりついた砂によって少しも動けな



い。

「「「!?」「」」

ヒナタ達三人もそれを見て息を飲んだ。

ザク……ザクザク……

「こ……こんなも……ん……グッ!」

体だけでなくチャクラまで封じられたのか、宙を舞っていた6本の傘が地面に突き刺さる。

雨隠れのリーダーは体に力を込めて抜け出そうとするが、強固な砂の枢はビクともしない。

「うるさい口まで覆っても殺せるが……」

我愛羅は地面に突き刺さった傘を一本引き抜き、前に振り下ろして勢いよく開いて差した。また、前に突き出した右手をゆっくりと上げて行く。

「……ちょっと惨め過ぎるからな……」

それに合わせて砂の柩に入った雨隠れのリーダーも宙に浮かんでいく。そして、ある程度の高さで止まると砂が身体をきつく締め上げたのか、苦悶の表情を浮かべる雨隠れのリーダー。

砂瀑送葬!!

我愛羅は一度だけ雨隠れのリーダーを見てから右手を握り締める。おそらくそれが術発動のキーだったのだろう。砂の柩に入っていた雨隠れのリーダーの体が、弾け飛んだのだ。

血と肉が辺りに降り注ぐ。カンクロウとテマリも傘を差してそれを防ぐが、雨隠れの二人はモロに自分達のリーダーの血肉を浴びている。顔に血やどこかの臓器が張り付いてもそれを茫然と見ることに出来ない二人。

「苦しみはない。与える必要もない程、圧倒したからな……  
・死者の血涙は瀑瀑たる流砂に混じり、更なる力を修羅に与ふ……」

血の雨を降らせる……我愛羅は先ほどの言葉を実行しただけに過ぎないが、残った雨隠れの二人は我愛羅のそのあまりの淡々とした言葉に恐怖の余り震え出してしまふ。

586

「ま、巻物は……お前にやる……」

「お願いだ！見逃して！」

『天の書』を投げるようにしてから置くと後ろに下って行く二。命乞いをする二人に我愛羅は無言で返し、傘を放り投げてから両の手を先程と同じ様に指を軽く曲げた状態で突き出す。

「ヒイ!!」

「イヤダアアア!!」

砂の手が足元から這って行き二人の身体を絡み取る。リーダーの時とは違い今度は顔も砂の柩に閉じ込められた。

突き出した両手を握りしめると、グシャッ!っという生々しい音を出して二人はリーダーと同じように血肉を弾け飛ばして息を引き取った。

それを茂みから見ていたヒナタ達は、顔を青くして後ろに下った。ヒナタに至っては頭を抱えるようにして、恐いモノが過ぎ去るのを待つ子どもようになってしまった。

「ヤ、ヤバい……早く逃げるぞ!見つかったら殺される!!」

キバがそんな状態のヒナタの腕を引いて、隠れながらここから離れようとする。シノもそれに続いて行く。だが、気付かない内に三人の体は上手く動けなくなっており、徐々にしか離れられなかった。

「都合良く『天の書』じゃん。」

雨隠れの下忍が地面に放った巻物を手に取るカンクロウ。これで、天地両方揃ったからか笑みを浮かべている。

「よし、このまま塔へ行くぞ。」

「………黙れ」

「!?!?」

「まだ…物足りないんだよ…」

カンクロウのその提案をまた一言でバツサリと切り裂くと、ヒナタ達の隠れている方に狂気に染まった目を向ける我愛羅。

(ヤ・・・ヤバい！！気付かれたか！？)

茂みに身を潜ながら離れようとしていた三人は、我愛羅のその言葉を耳にした途端、身体が動かなくなってしまった。

「もう止めよう・・・我愛羅・・・」

「怖いのか・・・腰抜け・・・」

ヒナタ達に向けていた目をカンクロウに戻し、我愛羅はカンクロウを挑発する。カンクロウはいつもの事だと思いつつも、目をピクツと動かして『天の書』を持って我愛羅に近寄って行った。

「我愛羅！お前は確かに大丈夫かも知れねえが・・・俺達にとっては危険過ぎる！巻物なんて1組あればいいじゃん！これ以上はさ・・・」

「愚図が・・・俺に指図するな。」

右手をヒナタ達の方に突き出す我愛羅。カンクロウはその言葉を聞いて今度こそ堪忍袋の緒が切れてしまった。

「いい加減にしろ！たまには、兄貴の言う事も聞いたらどうなんだ  
！！」

我愛羅の胸倉を掴み、力任せに引き寄せるカンクロウ。

「お前らを姉弟と思った事はない・・・邪魔をすれば殺すぞ。」

二人は互いを睨みつけていたが、我愛羅がカンクロウの手を振り払い、再びヒナタ達に右手を突き出した。

「が、我愛羅……止めなよ……ね？そんな冷たい事言わないでさ……姉さんからもお願いするから……ね。」

見かねたテマリが我愛羅に向かって笑顔を見せて、両手を前に持ってきて合わせる。普通の姉弟のようでないそれは、見る者に疑問を抱かせるのだが、ここには砂の姉弟三人と茂みに隠れたヒナタ達しかいないため、それを抱く者はいない。ヒナタ達に至っては背を向けている状態であるし、何より恐怖によってそんな事を考えている暇ではない。

我愛羅はテマリの言葉に何も反応するでもなく、ヒナタ達に向けていた右手を一度カンクロウに向けるが、再びヒナタ達に向ける。これは、邪魔をすればお前を殺すというのを暗に示したのかもしれない。我愛羅の突き出した右手に砂が集まっていく。

（ナルト君助けて！！）



(ふざけんな！こんなところで終われるかよ！！)

(・・・・・・・・二人だけでも！！)

三人の思いも我愛羅は意に反さずに砂を集めていく。

「我愛羅！！」

テマリが叫び、我愛羅の手が握られた。だが、技は発動しない。握られた手には瓢箪の蓋が有るのみ。ヒナタ達は助かったのだ。

「分かったよ・・・・・・・・・・」

表情を変えずに瓢箪に蓋をして歩き出す我愛羅。それにテマリとカ  
ンクロウは安堵の溜息を吐く。

(チィ・・・だからガキは嫌いなんだよ・・・)

カンクロウは内心で舌打ちをすると、テマリと二人我愛羅の後を追って行った。

「「「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」」」

くうくうくうん・・・

危機を脱したヒナタ達は息を整えようとしていたが、今まで経験したことのない緊張でまだ息を整えることが出来ないうでいた。そんな時、キバの服の中に隠れていた赤丸が弱々しい鳴き声を上げた。

「何だよ・・・そういう事かよ、赤丸・・・まったくもつと早く言えつて・・・」

「何て言ってるんだ赤丸は・・・」

「赤丸は砂のチビに、あのデカイ奴が『殺される』からヤバいつて言っただんだ……」

今更だが自分の軽率な行動を後悔するキバ。今回は運が良かった。本来なら軽率な行動を取った自分だけでなく、自分に付いて来た二人までも殺されてしまふところだったのだから。

「兎に角、砂隠れのチビ……何者かは分からねえが、アイツはヤバすぎる……」

三人は『はあく』と大きく溜め息を吐いて地面に体を投げ出した。三人はあと1時間程このまま動けないだろう。

また、三人が中央の塔に着いてからも、砂の姉弟に会う事をこの時知らない……

時間をナルト達が朝食を食べている頃に戻す……………

「ちょっと……………テンテン先輩だっけ？さっきから気になってるんだけど……………何でナルトにそんなに近いの？」

「ん？近いかなあ？…どう思う金髪君。」

「……………はあ……………」

俺の対面に座っているのが、俺の右に座っているテンテンに指を指す。いのの言ってる事は正しい。さつきからこの人俺にドンドン近づいて来てるんだよな・・・今じゃもう腕がくっつく位だしな。

(なあ何である人もここにいんだよ。)

(あん？ああネジの事か。何でつてそりゃあ先輩と同じ班だしよ。てか、お前そいつどうにかしろよ。)

俺の左にはシカマルが座っている。んで、そのシカマルの隣にはチヨウジがいて、さつきから熊肉を焼いては食う焼いては食うを繰り返している。それを注意させようとするが、シカマルは

「ありや駄目だ。ああなつたチヨウジは食い終わるまで止まんねえよ。」と言って、自分の分の熊肉を食べる。はあ・・・他の奴らはどうと食べ終わったのかサクラとサスケ、それからリーが三人で話している。ネジは一人で黙々と熊肉を食べ続けている。

シカマル曰く、こいつらはここに来る前にネジと会ってたらしい。しかも、ネジから逃がしてもらったとか……お前ら三人がその気になったらネジなんて倒せるだろうに……まためんどくさいとか思っただけで逃げたんだなシカマルの野郎。

「ねえ聞いてるのナルト！」

「ん？わりい。聞いてなかったわ。何だ？」

「金髪君それはないと思うよ。そんな事言っちゃあの子可哀想じゃないか。」

「あ、ああああなたに言われる筋合いなんてないわよっ……！」

ああもういのとテンテンは混ぜるなキケンって奴だな。

「ああはいはい、いのごめんな。先輩も煽らないでくださいよ。んで、どうしたんだ？」

「えつとね。ナルト達はもう天地両方揃ったのかなって聞いたの。」

あ、そついや揃ったな音の奴らから奪ったの地だったし。サスケとサクラには塔に行くまでに食糧調達を俺の分までやらせるか・・・・うんそれがいいな。俺だけで奪ったんだし、それ位させても罰は当たらないよな。

「揃ったぞ。ほれ、天と地。これ持ってけばいいんだろ？」

懐から天の書と地の書を出す。もう一つの天の書はサスケが持っているからここでは出さない。いのは「やつぱりかあ・・・。」と溜息を出した。いやいや、お前らも頑張れよ。お前らなら余裕だる影真似と心転身使って奪えるし、何よりいのの体術でそんじょそこの奴らなんて蹴散らせるしな。

「ねえねえ金髪君。」

「何ですか先輩。」

「私に天の書くれない？」

はい????何言つてんだこの人。幾らなんでもそんな簡単にあげたりなんて出来ねえだろ。

「何言つてんのよ団子頭!って、ナルトにそれ以上近寄るなああああ!!!!」

いのこの言葉の通り、テンテンは俺の右腕を掴んで胸に当てて来ている。テンテンってこんな性格だっけ????てか、案外胸あんのな.....

「ええ?何で君にそんな事言われなといけないのかな?あ、もしかして君、金髪君の.....コレ??」





## 次回

「アンコさんどうしたんですか？」

「!？あんたか……。私にあんたに構ってる暇はないのよ。」

そう言うとアンコさんは森の中へと足を向けた。だが、そこで何か思ったのが振り向いて、「この森に変態出たら逃げなさいよ。」と言いつつ、今度こそ森の中へと駆けて行った。

大蛇丸探してんのか……。悪い事したなあ。ぶちのめしたなんて言えないし……。ま、なるようになるだろ。

頑張ってくださいねアンコさん。

それでは、また次回。。。。。。。

二次試験だつてばよっ！4（後書き）

二十二話でした。

一週間以内の更新が………できませんでした（+ | +）

誠に申し訳ありませんでした。パソコンにあつた書きあがつた物が消えてしまったものですから。それから番外編も………

そんな感じで、何と言つたらいいんでしょう。そうですね。一気にやる気が失せたんです。

番外編は再び書くのが嫌なので、もう少し置いてから書くことと思います。それまで待つてくれるか分かりませんが………

それでは、また次回の更新で………

二次試験だつてばよっ！5

(もう夕暮れなの！？)

その言葉通り、陽が沈んでいく姿がアノコの目に入って来ている。

(早く見つけないと！！あの死体を見つけてもう三日……どろにいろのよ……大蛇丸！！)

アンコの顔には疲労した者特有の表情がある。目の下には薄っすらと隈が出来、口は開きっぱなしとなっていた。最低限の食料しか口にしておらず、休憩も碌に取っていない体は既に限界を超えていた。

（あれは『消写顔の術』で間違いないのよ！あいつの術を私が見間違う筈がないわ！しかし……一体今頃何故あいつが……目的は何なの！？）

だが、アンコは体を酷使し続ける。特別上忍となったアンコでも三日間フルに動けば体が限界を迎えるのも仕方のない事だった。大胆な言動や行動をする場の空気が読めない性格のアンコがここまで必死になる理由。それはこの事件の犯人、大蛇丸が過去アンコの担当上忍だったからに他ならない。いや、それだけでここまで必死になるのか。アンコは大蛇丸に心の底から心酔していたのだ。それが術になのか人柄になのかは分からないが……

そんなアンコを担当上忍である大蛇丸は、木の葉の里を抜ける際に『捨てたのだ』。そう、まるで飽きたおもちゃを捨てるように……  
……アンコはそのせいでしばらく誰も信じる事が出来なくなり、三年程暗部で一人任務をこなしていた。だがそんなアンコもある人によって助けられ、今は暗部を辞め特別上忍として里のために日々任務に勤しんでいる。そんな日々を送っていたアンコの前に、二日前自分を捨てた大蛇丸が現れたであろう証拠が出てきた。これを黙

って暗部に任す事などアニコには出来なかった。

そのため、必死になって大蛇丸を探しているのだが未だ遭遇できていない。アニコははじめ大蛇丸は絶対に自分の前に現れると思っていた。だが、その思いは勘違いだったとでもいうように、二日経った今も出会えていなかった。

(まあいいわ。この里に何しに来たのか分からないけど……此処で私がケジメをつけてやるっ!!)

口からはその強い思いとは裏腹に、限界を向かえている体が悲鳴を上げているのか荒い息が出ている。アニコはそんな自分の体を無視して死の森を駆け抜けて行く。と、そんな時アニコの目の端にキラリと陽が沈もうとしているにも関わらずまだ残り少ない光で輝きを放つ金色の髪が入って来た。

(あれは三日前の……ッシ!)

アニコはその金色が目に入った瞬間足を止め、一瞬考えたと思ったその時には既にその金色の光に向かって駆けて行ったのだった。

その時のナルト・・・・・・・・

グルル・・・・・・・・グルルル・・・・・・・・

へえ・・・・・・・・こんな大きい虎まで居んのかこの森って。俺は今5  
mはあるかっていう大きな虎と対峙している最中だ。何でこんな事  
になっているかというと、話は二時間前に遡る事になる。

『二時間前……』

俺とサスケ、ついでにサクラの三人はいの達、テンテン達と別れ行動を開始していた。目指すゴールは死の森の中央にある塔だ。事は分かってるから、今日一日を移動に費やしたおかげで明日には塔に着くというところまで来る事が出来た。まあ、俺とサスケの二人だけだったら今日の内に着く事が出来たらうけどな。サクラがトロイからこんな時間掛かってるって訳。ホントこいつ知らない子だわあ……

ああそうそう。俺達が余分に持っていた天の書はいの達にあげた。何でいの達にあげたのかと言うと、ネジが「テンテン、そいつらにくれてやれ。俺達は俺達自身の手で奪う。」と言ったからだ。その時にちよつとだけ揉めたのは……まあこいつらだしなっていう事で納得した。ついでに言うておくと、テンテンの奴は俺の事を金髪君と呼び続けるみたいだった。自己紹介なんて一次試験ん時にやっつてたし、何で何時まで金髪君何だっと思って、本人に聞いてみたんだわ。

そしたら……『金髪君は金髪君だよ。こんなに綺麗な金色私見た事ないし……それに私に名前でもらいたかったら……』



「・・・私をその気にさせてみる事だね」 とクスクス笑いながら言  
つてくれやがった。これを聞いたのがもう五月蠅いのなんのつて  
「・・・はあ・・・今思いたしても震えが止まんねえよ。いの  
が『ヒナタと白に報告する事が増えたわ・・・』とか黒いオーラ  
出して呟いてたのが一番怖かったなあ・・・」

と、そんなこんなで今日はここで休む事にして、食料を二人に取っ  
て来るように言ってお前はここで待ってたつて訳。んで、待ってるの  
暇だから其々の性質変化の螺旋丸を指に作ってたら・・・冒  
頭??の今に至るといふ訳だ。

「なあ・・・お前ってここいらのボスか？」

グルルルル・・・

「ま、人の言葉理解できる訳ないよな。こいつ倒すのなんて簡単だけ  
ど・・・ここらの食物連鎖だっけかを狂わせるのとか俺嫌なん  
だよなあ・・・」

「痛い嫌だろ？あっち行けつて。」

そう言つて左の方を指すが、虎は牙をむき出しにして唸り続けるだけ。もうめんどくせえな……

腰を掛けていた巨木の根を蹴つて虎の鼻頭を蹴り飛ばした。ギャン！と叫んで左に自分と同じくらいの距離を飛んでいく虎。

「ったく……これで分かつたら？お前じゃ俺に勝てねえし、飯にすんにも俺じゃ小さすぎるだろうが。」

グルルル……

一層牙を剥き出しにして唸つてる虎に溜息を一つ吐き、殺気を叩きつける。すると、やっと俺が自分よりも強く危険な存在だと理解した虎は尻尾を振って逃げ出した。ふう……やっと行きやがったか。てか、はじめっからこうしてれば良かったんじゃない……いや、そんな事は決してない！

「驚いたわ……あなた本当に強かったのね……」

「これはこれは試験官さん。どうしたんですかこんなところまで？それにもう夜ですし……何かありました？」

予想外だった。アンコさんが近くにいるのは分かってたけどまさかこっちに来るとは……はあまためんどくさい事になりそうな予感が……

「……あなたには関係ないわ。それより、ここにいるってことはもう巻物は両方揃ったみたいね。」

「あははは……はい、巻物は揃いました。だからこうして塔を目指してるんですよ。今は他の二人を食料調達に向かわせているところです。」

やっぱり答える訳ないか。てか十中八九大蛇丸のことだろうなあ……俺があいつの事ブツ飛ばしたから会わなかったって事だな。

「へえ……結構早いじゃないあんた達。頑張んなさいな。それじゃあ私は行くわね。」

「あ、はい。それじゃまたです。」

そう言つてアンコさんが背を向けた。大蛇丸は俺がブツ飛ばしまし たつて言つて上げた方がいいのかなあ……いやそんな事 言つても信じてもらえないつて。

「ああそうそう。もし変態に会つたら……何でもいいから 私に知らせなさい。それじゃあね。」

最後にそう言つてニッコリ笑いアンコさんは枝に飛び乗つて森の中 を駆けて行つた。本当の事を言えない俺を許して下さい。ごめんな さい、そして頑張ってくださいアンコさん。

俺は駆けて行くアンコさんに向かって敬礼して見送つた。そして、 アンコさんを入れ替わるようにしてサスケとサクラが帰つて来た。 サスケは魚を何匹も吊るしてある長い草のようなものを持っていて、

サクラは茸やら山菜？みたいなものを持っていた。

「ナルトおゝあんたが言ってたところ探したらこんなにいっぱい取れたわ！」

そう言つてニコニコしているサクラは……まあ面は可愛いからな……！？サスケいやそんな睨まんでも取らねえよ！サスケの野郎、俺がサクラの笑顔見てたら人殺しの面で見えてくんだもんなあ……何時好きになつたんだよサスケの奴……

ナルトがサスケ達と戯れている一方でアンコの方はと言つと……

（こんなにも探して見つからないって事は……既に狙いのものが手に入ったか、それとも何か問題が起きたかのどちらか……！?）

木の枝を飛び移っていたアンコの足が止まり、手術に使うようなメスを袖から四本滑り出してそれを指に挟んで持った。

（あなたはもう手配書レベルSの超危険人物……だから、私がここであなたを命に代えても死止めて見せる。それがあなたから全てを教わった……あなたの部下だった……）

後ろを振り向き、手に持ったメスを構えるアンコ。

「私の役目よね……大ち……ま……る!？」

だが、そんなアンコの決意も目の前にいる大蛇丸を見れば揺らいでしまうのだった。

「フフフ……そうね。今の私相手ならあんたでも出来るかもしれないわね……」

(こいつ……ボロボロじゃない……)

アンコの大蛇丸を見た感想は決して間違いではない。包帯を体中に巻いているのか、顔も片目と口以外は包帯で覆われ、手は指も包帯でぐるぐる巻きになっている。また、服には血が滲んでいたし所々破れてもいた。

伝説の三忍と言われていた嘗ての自分の担当上忍がボロボロの姿で自分の前に現れたらアンコのようになってしまうのも仕方ない。だが、大蛇丸の鋭い殺気は少しも失われていない事に気付いたアンコは気持ちを切り替えた。

「……あんたが何でそこまでボロボロなのか知らな

いけど、私は油断も慢心もしないわ。確実にあんたを殺す!!」

手に持ったメスを大蛇丸に向かって投げようと投擲動作に入ったア  
ンコ。だが、それは大蛇丸の口から飛び出た長い舌によって阻まれ  
る。10mは離れていたその距離を大蛇丸の舌が詰めた。

一度は真上に逃げたアンコだが、大蛇丸の舌は触手のようにアンコ  
を追い、仕舞にはメスを持つ手をその舌によって絡め取られてしま  
った。

メスはその衝撃で落としてしまったが、アンコはこれがチャンスだ  
と思い、手に巻きついている舌を掴んで自由な方の片手で印を結び  
チャクラを練る。

潜影蛇手!!

「あら。私が教えた術まだ使ってくれてたの……でもあんた  
は木の葉の特別上忍なんだから私の術使ったら駄目じゃないの……  
……それに私に私の術が効く訳ないじゃない。」





「ええ、ホントそうよねアンコ。」

アンコが瞬身の術で移動した枝の上には、今の爆発をくらっていないと分かる大蛇丸が巨木を背にして腕を組んで笑っていた。

大蛇丸が居たであろう爆発の中心は太い巨木が中ほどから折れている様子があるだけ。大蛇丸がどうやってあの状態からアンコのいるこの木の枝に移動したのかは分からないが、現に大蛇丸はあの爆発を回避しアンコを嘲笑うかのように笑い続けている。

アンコはそれを見て唇を噛んで、再度突撃を仕掛けようとしたその時、

「だから無駄だって言ってるでしょ。はっ！」

「あ……ぐ……」

大蛇丸が印を組んだ状態の片手にチャクラを練り込むと、アンコは苦しげな声を出して首を手で押さえて片膝をついた。

「ぐっ……い、今更……何しに来た!!」

「久しぶりの再会だと言うのに……えらく冷たいのねえアンコ。」

包帯で覆われていない片目は眼光鋭くアンコを見る。その眼にやどる光がどす黒く濁っているとアンコには感じた。

「フンツま、まさか、火影様を暗殺でもしに来たっての?」

首筋を押さえて苦しそうな声を出すアンコに大蛇丸は肩を竦めて否定する。

「いいえ。その為にはまだ部下が足りなくて、ね。……里の

優秀そうなのにツバ付けとこうと思って来たんだけど……この通りよ。」

「ぐっ……うっ……!」

大蛇丸が一步近づぐことに苦しげな声を上げるアノコ。また、それに合わせて体が前のめりに倒れて行く。

「一昨日なんだけど、あんたにやったそれと同じ呪印をプレゼントしてこようとしたら……フッフ、私とした事が油断してこよう。全くあんな優秀に育つてるとは思いもしなかったわ。」

アノコの首筋にそれまでなかった呪印が浮かび上がって来る。

「へえ……ぐっ……あ、あんたをそんなにしちゃう奴が下忍の中にいるなんて、ね……」

「そうなのよ。その子のせいで昨日一日回復に使っちゃったし……」

「・・・でも、おかげであの子を欲しくなっちゃったのよねえ。どんな手を使っても・・・ね。」

そう言つて大蛇丸はアンコの視線に合わせようとしゃがみ、アンコの顎を掴み自分と目を合わせるためアンコの顔を上げた。

「そんな事・・・私がさせないわ・・・絶対に！ぐっ・・・」

「もしかして嫉妬しちゃった？あんたの事は捨てちゃったしねえ・・・私が欲しいのは『うちはサスケ君』。それから『うずまきナルト君』よ。」

（うちは・・・写輪眼か！！でも、うずまきナルト・・・  
まさか！？）

「そうよ。あの九尾の坊や強くなつたつてもんじゃないわよ。実力で言えば既にこの里で一番じゃないかしら？私をこんなにしたのもナルト君だしね。」

アッコの顔に驚愕の表情が浮かぶ。九尾を封印された子どもがいる事は知っていた。だが、その子どもがこの試験を受けている事も、大蛇丸をこんなにした事もアッコには信じられなかった。大蛇丸の話が本当だとすると、九尾の子どもは自分よりも強いって事になる。そして、そんな子が大蛇丸の手に渡ったら……

「そんな事絶対に私がさせない！！ぐっ……」

「フッフ……本当に何時までも変わらないわねあんたは。でもね、あんたも分かってるでしょ？」

大蛇丸はアッコの頬をその長い舌で舐め上げる。アッコは平気そうな顔をしているが内心舐められた部分を直ぐにでも拭いたくて仕方なかった。

「私が本当に欲しいモノを手に入れない事なんてなかった事を……ね。」

そう言ってアッコの顎を掴んでいた手を離し、膝をついたアッコに

背を向ける大蛇丸。

「ああ、そうそう……一つ言い忘れてたわ。くれぐれも、この試験……中断させないでね……」

アンコに背を向けたまま言葉を続ける大蛇丸。アンコはそれを睨みつけることしか出来なかった。

「ウチの里からも3人程お世話になってるの……楽しませて貰うわ。もし、私の楽しみを奪うような事があれば……木の葉の里は終わりだと思いなさい……」

最後にアンコに振り返った大蛇丸の眼には本気が見える。アンコはそれを理解したが、今はもう首筋にある呪印のせいで意識が朦朧として来ていた。大蛇丸はアンコのその様子を見て一度クスッと笑った後、白煙と共に姿を消してしまった。

(ほ……火影様に……つ……たえ……)

アンコの意識はそこで途切れた。

一方その頃のナルト達……………

アンコさん大丈夫かなあ……………大蛇丸に会うのはないと思うけど、  
今無駄な努力してるんだよなああの人……………

まあ明日には塔だし大丈夫だろう。アンコさんに会ったらそれとなく  
伝えようっと。あの変態はどっか行きましたって……………  
はあ……………んな事言っても信じて貰えないよなあ……………



「サスケ君、ナルトの奴何かポーっとしてない？」

「あいつの事は放っておいて、お前はもう寝ろ。」

「え？でも、今日は確か私が見張りの番の筈……」

「いい。俺がやってやる。だから、お前は寝ろ。」

「でも……」「いいから、寝ろ。」「……………うん。ありがとうサスケ君」

「フンッ／＼／＼」

おお〜い何ラブコメってんだよお前ら。アノコさんが頑張ってるってのに!!!はぁ……………アノコさんこいつらは俺がシバイておき

ますので心配しないでくださいね!!!

『ナルト、お前も大変のようだな……』

九尾、お前最近出て来てなかったけど何してたんだ？

『………大人の事情だ。』

大人のお???変な奴だなあ。まあいいや。それより今度の試験じやお前の力ちよい出すつもりだから楽しみにしとけな!

『久々に力が使えるのか!!』

九尾の奴元気になったみたいで良かったわ。それに、あの二人に話しかけるより九尾と話してる方が楽しいし、今日は九尾と久々に話そうかな。

俺はそれから横になりながら九尾と話して夜を過ごした。サスケは二日続けての徹夜だからフラフラしながら見張りしていた。ククク、馬鹿な奴だなサスケ。それからサクラ、お前は気持ちよさそうに寝ているが明日起きたら……覚悟しておけよ。

## 次回

やっと塔に着いた。

ヒナタ達は二日前にもう着いてただって!?

おいおい音の奴らもいるし……大蛇丸っぽい奴もなんかいるよ  
うな……まだボコリ足らなかつたのか?



二次試験だつてばよっ！5（後書き）

二十三話でしたあ。

いやあ今回はちゃんと一週間以内で更新出来ましたよ！！フッフ、  
変態が出て来てしまいました。これは仕方なかったかなあと思っ  
てたりします。どうやっても大蛇丸がいないとアッコさんが中忍試  
験止めさせると思いましたので。

というか、今回アッコさん出まくりでしたねwwアッコさん回と言  
つても過言じゃない！！ww

次回は三次試験予選の一回戦位は出来るかなあとか思っていたりし  
ますが、どうなるか分かりません。

それでも楽しみにしてくださいと嬉しいです。それではまた次回会  
いましょう！！

二次試験だつてばよっ！6

塔を目指して枝や巨木を蹴って進んでいる俺達だが……何  
だこの険悪な空気は……

「さ、サスケ君。その抱えている女誰？」

「ん？あんだこそ誰？サスケの何？」

赤毛赤目の眼鏡を掛けた俺達とタメだと思っ女が、サスケの腕の中にいながら口を開く。よく見れば顔は整っている。まあ今は眉間に縦皺を三本立てているからおっかねえけど……んで、額当ては大蛇丸が付けていた草隠れのモノとか……サスケえ、俺はめんどい事起きてもノータッチだからな。

「わ、私はサスケ君と一緒にの班で、仲間の春野サクラよっ！そ、そんな事よりあんだこそ誰よ！サスケ君にお姫様抱っこなんてされるし……」

（私なんてまだ手すら握った事ないのに！！）

サクラはその女がサスケと現れてから顔をヒクつかせていたが、眼鏡女の言葉を聞き、更にその間もサスケの首に手を絡みつかせる眼鏡女にキレ始めているらしく口調が……いのと喧嘩する時のものになっている。また、内なるサクラが中指だけを立てた拳を眼鏡女に向けているのが俺には見える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・」

いやいやサスケ、お前の事で争ってんだから溜息なんて吐いてないで何とかしろよ。てか、いきなりの展開に皆がついてこれないと思うから回想をしようと思う。

2時間前・・・・・・・・それは俺達が塔を目指して枝をつたい、或いは巨木を蹴って駆けていた時だった。

キャアアアアアア！！っという絹を裂くような？？悲鳴が森の中、それも俺達が駆けて来た方から聞こえた。



それを聞いて最初にサクラが足を止め、次いでサスケが足を止めた。俺はそんな二人を無視して塔に向かっても良かったが、三人で行かなきゃ意味がないんだっけか？と思いつ立ち、仕方なく足を止めた。

「今のは悲鳴よね？」

「そうだな。」

「何だよサクラ、もしかして助けに行きたいとか思ってたのか？」

「だって今の……女の子の声だったわ。もしかしたら危ない目にあってるのかも……助けに行きましょうよ！」

はあ？何言つてんだこいつ。男とか女とか忍者に性別なんて関係ねえだろ。それに、今は巻物を他のチームから奪うっていう試験内容なんだから戦闘は当たり前だろうが。悲鳴を上げる奴なんて高が知れてるっつての。まあお前も危なくなったら悲鳴上げるんだろっけだよ……

「サクラ、今俺達は試験中だ。それに、巻物も揃っている今塔を目指すのが俺達の優先する事なのはお前も分かっているな？」

「で、でもサスケ君！」

「サスケの言う通りだったのこのデコ。」「で、デコってな」お前が助けに行きたいって思うのは自由だがな、そのせいで俺達の予選突破が出来なくなったらどうすんだ？」

サクラがフルフル体を震わせながら睨んでくる。そんな目したって駄目だったの。俺が腕を組んで巨木に背を預けている（奇しくも大蛇丸と同じ姿勢を取ってしまった俺がそれに気付くことは一生ない・

・・・と、サスケが天の書を俺に投げて来た。

「俺が行って見てくれば、こいつが行って戻って来るよりも早いだろう。天の書もお前に預けていくし、いいだろう?」

「サスケ君!!」

サスケ、お前そこまで・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・しようがないな。

「分ったってばよ。なら、1時間で戻ってこい。それ以上は待たねえからな。」

「ナルト・・・・・・・・・・ありがとう。」

「フンッ………行ってくる。」

サクラの礼を手を振ることで答えて、サスケが瞬身の術で移動するのを横目で確かめる。大蛇丸は俺がブツ飛ばしたし、音の奴らに至っては埋めてきた。カブトの奴が接触してこないのは大蛇丸の治療にあたっているからだと思う。もうこの試験中にサスケを狙っては来ないと思うし、あいつを一人で行かせても大丈夫だな。

てか、サスケ早く帰ってこいよ。

「ナルト、あんたっていつそんなに強くなったのよ。いい機会だから教えなさい。」

こいつと二人だけか……俺耐えらんねえからよ。

そして待つこと45分。そろそろサスケが戻ってくるだろうと思っ  
ていると、俺のチャクラを感じれる範囲にサスケと思われるチャク  
ラと知らないチャクラが一緒に入ったのに気付いた。

誰だこいつ？サスケと一緒にいるって事は、こいつが悲鳴を上げた  
奴なのか？・・・・・・・・まあ、いいか。あいつらが来たら分かる  
事だしな。

その10分後サスケが眼鏡を掛けた女と一緒に現れた。ただ二人の  
現れた時の姿が問題だった。二人を見てサクラからピキツという音  
が鳴ったからだ。これは所謂、嫉妬の炎を燃やす直前やその人の地  
雷を踏まれた時に発するあれの音だったりする。

どんな姿で現れたかというのと、サスケが眼鏡女をお姫様抱っこした姿でサクラの隣に降りて来たのだ。……俺知らねえからなサスケ。自分で播いた種は自分で……だぞ！！

と、いうことで冒頭に戻るわけだ。眼鏡女は足に怪我をしているらしく、サスケが仕方なく？お姫様抱っこを続けている。ああ、そういやこの女の名前は香燐って言うらしい。………香燐ってあの香燐か！！と一瞬吃驚したが、確かに原作でこの試験中にサスケに助けられたって言ってたなあと納得してしまった。序でに言うておくと、今の香燐の髪の毛の長さは肩辺りで切り揃えている。

てか、本当にいたんだな香燐……俺が現世で雑誌を読んだ時思ったんだよ、これって後付け設定だなってさ。だから本当にお前がいるとは思わなかったし、サスケが何時助けるのか気になっていたのも確かだ。それがあんな悲鳴をあげていたのが、まさかお前だったとは………

まあ、原作通りサスケの事を好きになったみたいだ。その証拠にサクラと今も言い争ってるし、何よりサスケに見せる笑顔は本物だからな。ヒナタといの、白が俺に向ける笑顔もあいつと同じように本

物だから俺には分かる。

てか、香燐が何に襲われていたのかっていうと、俺が昨日追い払ったあの虎だったみたいだ。香燐は逃げようとしたみたいだが、その際に足を挫いてしまったらしい。また、香燐の仲間は香燐を見捨てて逃げたらしく、サスケが1秒でも遅れていたらパクツと食べられていたらしい。

まあ、そんな訳で俺達が塔を目指している事を話すと、『なら、私も連れて行ってほしい。巻物も揃ってるし、この怪我もそこに行けば治療してくれると思うから。』と、言った。話した俺じゃなく、抱きかかえているサスケに………

サクラじゃないが少し、すこしだけムカついたが俺は大人だからそんな小さい事は忘れる事にした。俺の後ろでは今なおサクラと香燐が言い争っている声が聞こえる。サスケの堪忍袋の緒が切れる前に塔に着けばいいなあと思いつながら俺達は森を駆けて行く。

その途中、短気なサスケが我慢できる筈もなくやっぱりキレたのは  
言うまでもない。

「誰もいないってばよ………」

塔の入口付近を見る振りをして近場のチャクラを探してみる。塔の中には既に我愛羅達にヒナタ達、それからテンテン達、カブト達がいるようだ。ってことは俺達が5番目ってことか。うーん………後1日あるからどうなるか分らないが、それでもいの達が来るはずだし、まだ他の奴らも来るかもしれない。



香燐の仲間が来るかは分らないが、来たらこいつは絶対に予選に参加するだろう。サクラと試合になったら面白そうだし、影分身に行つてこさせるか。

サクラと香燐が入口の前でまだ言い争っているし、サスケがそれをウンザリしながら見ているのを確認してから影分身を二体作る。一体は香燐の仲間を隠れて連れて来させるため、一体はいの達がどこまで来ているか確認してこさせるためだ。

二体は俺に頷いて瞬身の術で移動した。それを見送ってから三人の所に向かう。

「サスケはね、あんたみたいなデコピンク、これっぽっちも何とも思っていないわ！」

「違うわよ！サスケ君は私の事大事な仲間だつて言ってくれたわ！眼鏡で赤毛なあんだこそ、サスケ君は何とも思っていないわ！」

こいつら良く飽きねえな。サスケ何てもう諦めて傍観に徹してるし。しょうがねえなあ。……これっきりだぞサスケ。

「はいはい、お前らもうやめろ〜。香燐だっけか？塔に着いたんだからお前は医務室行ってこい。てか、サスケお前が連れてけ。これ以上五月蠅くされたらブチキレそうだ。」

サスケは「！？」と俺を睨もつとしたが、それより早く俺が睨んだからかフンツと鼻を鳴らして香燐をお姫様抱っこしたまま医務室に連れて行った。サクラも何か言いたそうにしたが、それも俺が睨んでやめさせた。ああ、めんど。……

サスケが戻ってくるのを塔の入口付近で待ち、少ししてからポケットに手を突っ込んだサスケが戻ってきた。これで、やっとイルカ先生呼び出せるな。

塔の中を進んでいくと開けた場所に出た。そして、右側の壁に描かれているモノを見つけたサクラが声を上げる。

「ねえ、アレ見て！」

壁に向かって指を指すサクラ。サスケはサクラの指が示す壁をポケットに手を突っ込んだまま見上げる。こいつ、香燐をずっとお姫様抱っこしてたから腕が疲れてんだ。絶対そうだ。その証拠にさつきから手ポケットから出さねえし。

『天』無くば 智を識り機に備え  
『地』無くば 野を駆け  
利を求めん

天地双書を開かば危道は正道に帰す これ即ち『』の極意……  
導く者なり 三代目火影

「たぶん、これは巻物の事を言ってるんだと思う。ここで『天地』の巻物を開けて事なのかも……」

それに俺とサスケは頷く。俺はポーチから天地両方の巻物を取り出し、天の書をサスケに放り、俺は地の書を手に持つ。そして、二人同時に糊付けされた部分に指を入れ、一気に広げた。

二つの巻物の真ん中には同じ、『人』という漢字一文字が書かれていた。さあ早く出てきてよイルカ先生。

「……これは……」

「ひと……?じん……かしら?」

『人』という漢字が書かれている周りには口寄せの術式が書かれている。これは、巻物が開かれると発動する術式だ。俺は前に地の書を放り投げる。

「サスケ、それを俺が投げたところに放れ。」

サスケが天の書を放り投げた瞬間、天地両方の『人』と書かれた部分から白煙が立ち昇り始める。そして、その中から人物の影が浮かび上がり、次いで俺の尊敬する人の声が聞こえた。

「よっ！久しぶりだな・・・お前達。」

白煙が晴れていくと腕を組み、笑みを浮かべたイルカ先生の姿が見えた。

「久しぶりだってばよっ！イルカ先生！」

「どうしてイルカ先生が……」

「……………」

サクラは吃驚しているし、サスケはイルカ先生を睨んでいる。まあいきなり口寄せで人が出て来たし、それが中忍で自分たちの元担任なら警戒するのも分かる。

「この『第2の試験』の最後は、俺達中忍が受験生を迎える事になっていてな。偶々、俺がお前達の伝令約を仰せつかったって理由だ。」

「伝令役だと？」

イルカ先生はサスケの眩きには反応せず、懐から懐中時計を取り出して開いた。そんなの見なくても余裕だってばイルカ先生。

「ほう……一日残したのか。お前達強くなったなあ……」  
『第2の試験』合格だ!!」

「……やったあ……やったよ二人とも!!」

「フンッ……当然だ。」

「ありがとだってばよ。イルカ先生!!」

サクラが俺とサスケの首に抱きついてくる。これを避けるのなんて簡単だが、今のこいつの顔を見たらそんなのが野暮だって事くらい俺にも分かる。

だってサクラの奴、泣きながら笑ってんだもんよ。はぁ………  
まぁ偶にはいいかな、こづいづいのも。

2分後、サクラは俺達に抱きついてるのに気づき、顔を真っ赤にして隅っこの方で体を縮ませて顔を両手で押さえている。そんなに恥ずかしいならやるなっつての。



「イルカ先生……一つ聞きたいんだが、良いか？」

「何だ、サスケ？」

「もし、俺達が試験の途中で巻物を開いたら……イルカ先生、あんたはどうするつもりだったんだ？」

「サスケ、お前も相変わらず鋭い奴だな。」

イルカ先生はサスケの質問に苦笑して、自分が出てきた巻物をしゃがんで手に持った。

「お前の察しの通り、この試験の規則はお前達の確実な任務遂行能力を試す為のモノだ。つまり……もし、試験中に規則に反する条件で巻物が開かれた場合……」

「……開かれた場合？」

隅っこで縮まっているサクラが相の手？を入れる。お前はそこで小さくなってればいいんだよ。イルカ先生に横やりいれんな。

「その眼の前の受験者には……『第2の試験』終了時刻まで、気絶していて貰うよう命じられていた。」

「やはりか……口寄せで合格を発表するのはそのついでだろ？」

「まあ、その通りだな。お前達が巻物を開かなくて俺は嬉しいぞ。」

へへ。イルカ先生に褒められるのって嬉しいんだよな。勿論父さんと母さんが一番だけどな。九尾は基本褒めてくれないし・・・

『褒めてほしいのか?』

いや、お前は俺の相棒なんだ。褒める褒められるなんて関係、糞く  
らえだ。

『ククク・・・そうだな。わしはお前と対等の存在、それで良い。』

だな。俺が九尾と話していると、さっきまで隅っこにいたサクラが  
こっちに戻ってきた。まだ顔が真っ赤なんだから来なくてもいいの  
にな。

「ねえ、先生。」

「ん？どうした…サクラ」

「あの壁に書かれているのは何なの？何か虫食い文字になってるし・  
・私達じゃ、全然意味分かんないんだけど・・・」

サクラお前よくやった！これを言う時のイルカ先生カッコいいから  
なあ・・・・・

「忘れていたよ。俺達はそれについても伝えるのが任務でな、これは火影様が記した『中忍』の心得なんだぞ。」

「心得？」

「そう。この文章の『天』とは即ち人間の頭を指し、『地』は人間の身体を指してるんだ。」

イルカ先生は壁の方を向き腕を組んで言葉を続ける。有難い言葉を聞くために俺は姿勢を正す。サスケ！お前もポケットに手を突っ込んでないでちゃんと聞け！！！！

「『天無くば智を識り機に備え』あれはな、簡単に言えば自分の弱点が頭脳にあるなら・・・『様々な理を学び、任務に備えなさい』って事を言ってるんだ。そして、『地無くば野を駆け利を求めん』サクラ、お前の弱点が体力にあるなら・・・『日々鍛錬を怠らないようにしなければなりませんよ』と言う意味だ。」

「へっ……」

サクラが関心したように壁に書かれた文字を見る。

「そして、天地両方を兼ね備えれば、どんな危険に満ちた任務も正道、つまり霸道とも言える安全な任務に成る……ってことだよなイルカ先生！」

俺はイルカ先生の言葉を引き継ぐように続ける。そして、それを言い終わると同時にイルカ先生に顔を向ける。

「あ、ああ、その通りだナルト。それにしても、お前勉強できるようになったんだな……」

(……本当にお前は俺の手から離れたんだな……寂しいような、嬉しいような複雑な気持ちだな……)

イルカ先生が寂しそうな顔で笑っているのに気付いた。先生、俺っ  
てば先生みたいな忍者になるのが夢なんだぞ？だから、そんな顔す  
んなって。

「じゃあ、あの虫食いの所に入る文字って……」

「……ゴホンツ……そうだ。中忍を意味する文字、さつき  
の巻物にあった『人』と言う一字が入る。この5日間のサバイバル  
は受験生の中忍としての基本能力を試す為のモノ……そして、  
お前達はそれを見事クリアした。中忍とは部長クラス、チームを  
導く義務がある。任務における知識の重要性、体力の必要性を更に  
心底心得よ。この『中忍心得』を決して忘れず、次のステップに挑  
んで欲しい……」

ヤバい……カッコいいよイルカ先生!!!俺は先生みたいな先  
生になる!絶対になっでやる!!!

イルカ先生の元担任としてではなく、忍者の先輩としての激励は、俺だけじゃなくサクラ、サスケの二人にも伝わったと思う。

「イルカ先生、試験に合格したら一楽のラーメン奢ってくれっつてばよ！」

「ん？アハハハ、良いぞ。試験に合格したら奢ってやるよ！サクラ、サスケお前らにも奢ってやるから頑張れよ！」

「え？いいの！頑張ります！」

（やってやるわよ！！しゃくんなろ！！！！）

「……そのために頑張るわけじゃないが……やってやるよ。」

イルカ先生は俺達のその反応を見て笑顔を浮かべた後、瞬身の術で



この場から消えた。イルカ先生にも応援してもらったんだ。絶対な  
ってやるよ中忍に！！

「どっじゃ？……呪印はまだ痛むか？」

「いえ……お陰で大分良くなりました。」

ナルト達が塔に辿り着くのと時を同じくして、塔の最上階の一つの部屋に三代目火影がいた。アッコの首筋に刻まれた呪印を封ずる術を三代目火影が行使していたのだ。

アッコは大蛇丸との戦闘によってボロボロのところを暗部によって助けられ、今朝早くにこの塔に連れて来られていた。

「それにしても……大蛇丸って木ノ葉伝説の、あの『三忍』の中の1人ですよね？」

「暗部すら手が出せなかった手配書レベルS級の抜け忍だろ？既に死んだって聞いてたんだがな……」

中忍選抜試験を補佐する役目を担った二人の中忍が口を開く。

『でも、おかげであの子を欲しくなっちゃったのよねえ。どんな手を使っても……ねえ。』

『私が欲しいのは「うちはサスケ君」。それから「うずまきナルト君」よ。』

『私が本当に欲しいモノを手に入れない事なんてなかった事を……ね。』

658

アンの脳裏に、大蛇丸の言葉が次々と浮かんでくる。

「おそろく……サスケじゃろう。」

「!？」

「大蛇丸・・・奴の生き甲斐は術の開発・・・その為に『うちは』が必要なんじゃろつて。」

三代目火影はアンの首筋から手を放し、窓から森を見て小さく咳く。

「火影様！大蛇丸・・・あいつは『うちは』だけでなく、『うずまきナルト』もと・・・」

「!？・・・ナルトまでもか!!大蛇丸・・・」  
(狙いは九尾かつ！ナルトを守らなくては!!！)

中忍二人はアンの話に付いていくことが出来ない。

「・・・取り敢えず、試験はこのまま続行する事とする・・・  
大蛇丸は必ず試験中に何か動きを見せる筈、警備している者はど  
なに小さい事でも疑問に思ったらわしか、暗部、上忍の誰かに知ら  
せるんじゃない！」

「「「はっ!!」「「「

アソコと中忍の三人は片膝を付いて部屋を飛び出していく。火影の  
言葉をここにいる全ての木ノ葉の忍に伝えるために。

そして、次の日………

「まずは『第2の試験』通過おめでとう!」  
(フフ……第2試験受験受験者数78名……ここまで24名も残る  
なんてね。本当は1桁を考えてたのに……)

俺達が塔に着いて1日経った今日、俺の目の前にはアンコさんが立っている。1日経ち三組が新たに塔に辿り着いた。一組目はいの達

だ。予想通り、チョウジが原因で遅くなったようで、出迎えた瞬間の抱きついて来た。まあこれは、何時もの事だから詳しく話すこともないな。

香燐の仲間も俺の影分身のおかげ？でボロボロになりながらも辿り着いた。香燐の怪我もここにいる医療忍者のおかげですっかり良くなり、さつきからサスケに熱い視線を向けている。そしてもう一組目は……俺がブツ飛ばして埋めて来た筈の音忍達。こいつらは俺に憎悪の視線を浴びせてきてるが、俺が殺気を込めた目を向けるとサツと視線を外しやがった。

全く……雑魚のくせに粹がるんじゃないやねえよ。と、そんなわけで二次予選を突破した24人が班ごとに並んでいる。つまり、8列だな。んで、横には8組の担当の先生達が並んでいる。そこに大蛇丸が居る事に俺は気付いた。

何であの野郎がここに！？ボコボコにしたの甘かったか？なら、今度はちゃんとぶち殺さないとな。

いの、シカマル、チョウジの三人・・・

(お腹減ったよぉ〜!!)

(まだこんなに残ってるのかよ・・・めんどくせえ・・・帰りてえ・・・)

お腹からぐうぐうと音を出してお腹を抑えるチョウジ。肩を下げてダ  
ルイと分かるオーラを発しているシカマル。二人は内心で愚痴を言  
いまくっている。



（良かったあゝナルトに天の書貰ったんだもん。それを遅刻でもして不合格になったらナルトに合わせる顔がなかったもんね。でも・・・）

いのはそれまでナルトに向けていた笑みではなく、怒りの顔を二つのお団子ヘアの少女、テンテンに向けた。

（あいつに負けたのは悔しい・・・今度は絶対に負けないんだから！！）

ネジ、リー、テンテンの三人・・・

（金髪君とお話したかったのに、昨日はガイ先生の暑苦しい話のせいで出来なかったしこの式？が終わったらお話しよっと）

テンテンは人差し指を顎に当ててうんうん考えているらしく、考えがまとまったのか次の瞬間ニコツと笑みを浮かべた。

(ガイ先生が一番輝いてます!!流石です!素敵です!カッコいいです!)

全身緑タイツのリーの父親のような恰好のガイに熱い視線を送る弟子のリー。この中の忍者の中ではこの二人が既に親子として認知されている。

(うちはサスケ、いや、うずまきナルト、それからあそこにいる砂の奴……こいつらと俺、誰が一番強いか……)

戦闘狂の節があるのかネジの顔にはニヤリという嫌な笑みが浮かんでいた。

我愛羅、カンクロウ、テマリの三人……

キヨロキヨロ……

(ほっ……金髪も受かったか……!? って何を考えているんだ私は!!!)

テマリは自分が今何をしていたか気付き、頬と耳を赤くして手を頬に当てている。

(ツチ……まだこんなにいんのかよ……面倒じゃん……)

腕を組んで周りを見たカンクロウは、溜息を吐く。

（うずまき・・・ナルト・・・俺は早くお前と戦いたいぞ・・・）

我愛羅はアンコの話を見聞かずに、ナルトを見続けている。

キバ、シノ、ヒナタの三人・・・

（砂の奴ら・・・）

キバは我愛羅を横目で見ている。その胸中はいつとは、こいつらとだけは当たりたくない、そんな思いがあった。また、キバの服の

胸元では赤丸がフルフルと震えていた。

(・・・・・・・・)

シノは無表情を貫いているが、拳を作る両手には凄い汗が出ている。

(ナルト君・・・・・・・・どうして昨日着いてたのに会いに来てくれなかったのかな？それとも私が行けば良かったのかな？あわわわわわわ！そ、そそそそんな事絶対出来ないよお・・・・・・・・この式終わったらいのちゃんと一緒に行こうかな・・・・・・・・)

ヒナタは一人あわあわ言っているが、それは何時ものことなのでキバとシノはそれを見て見ぬふりをした。

アッコさん大蛇丸と会ったのかなあ……多分そうだな。じやないと、火影のじいさんがあんな厳しい顔するわけねえしな。火影のじいさんは俺や優れた上忍に分かる程度に顔を厳しくしている。

(これほど残るとはお……しかも残った者の殆どが新人とは……)  
「あやつらが競って推薦する理由じゃな。」

ん？じいさんがカカシと紅さん、アスマの方を見てるみたいだ……  
……ああ、新人がこんなに残ったからか。

「それでは、これから火影様より『第3の試験』の説明がある。各自、心して聞くように！！では、火影様お願いします。」

「うむ・・・これより始める『第3の試験』・・・その説明の前にまず一つだけ、はっきりと告げておきたい事があるのじゃ・・・」

そして、じいさんの口から語られるのはこの中忍試験がなぜ他里の者まで一緒にやるのか、その本当の理由、等々長く語られた。説明の最中に何度か邪魔が入ったが、じいさんは説明を何とか終わらせた。

てか、邪魔なんてしないでちゃんと聞いとけよ。んで、今は月光八ヤテって言うゴホゴホ五月蠅いあの病弱忍者が二次試験予選について説明中だったりする。

「ええ、今回は第1・第2の試験が甘かったせいかな、少々残り過ぎてしまいましたね。中忍試験規定に乗っ取り予選を行い、『第3の試験』進出者を減らす必要があるのです。」

「そ……そんな……」

「先程の火影様のお話にもあったように『第3の試験』には沢山のゲストがいらっしやるんです。ダラダラとした試合はできず、時間も限られて来るんですね。ええ……そういう理由で、体調の優れない方、これまでの説明で辞めたくなった方、今すぐ申し出て下さい。これから』直ぐに『予選が始まりますので……』」

「……!!これからすぐだと!?!」

キバがハヤテに向かって吼える。キバだけじゃなく殆どの奴らがそれに近い事を思ったみたいで、顔にはそついうものが張り付いている。

カブトが辞めるんだろうなあとか思ってたが、何時までたっても手を上げない。……ってまさか……



「誰もいないようですね。それでは、10分後に直ぐに始めます。  
最初の試合は……」

ハヤテが電光掲示板の方を向くのに合わせて、皆がその方向に顔を  
向ける。

そして、電光掲示板に大きくバンッと二人の人物の名前が出た。そ  
れは……

## 次回

「ねえ、ナルト君。この人誰なのかな？」

「ヒナタ！そいつ一個上の先輩よ！！」

「あれ？金髪君ってばいのちゃんだけじゃなくて、こゝんな可愛い子まで手出しちゃってたのかあ〜いけないなあ〜」

頼むから試合を見せてくれ……………

それでは次回をお楽しみに……………

二次試験だつてばよっ！6（後書き）

さてさて二十四話でした。

ヒナタのターンだとか、一試合目やるかもとか色々言ってたのにも関わらず、今回はここまでとなってしまいました。

やっぱり香燐のせいですね。あいつが出て来なかったら一試合絶対書けてた筈ですからね。

まあ後悔はしてないんですけどwwww

あ、あと私事なんですけど、パソコン新しく買った！  
4万3千円しましたよ・・・お金がないのにそんなの買ってた  
いいのか、卒論終わってないぞ！就職先から提出する課題あるだろ、  
とか本当にいろいろありまして、爆発しそうです正直爆発しそうです  
wwwwww

感想でこのssを生み出してくれてありがとうとございますというコメントがあつたんですが、本当にそんな事を思ってくれているなら嬉しいですね。このssは誤字脱字が多数あり、文章も酷いものです。私自身が一番分かってるんです。これは私の妄想を書いているモノなんですからね。

しかし、一人でもこのSSを楽しんでくれたらそれだけで嬉しいです。これからも頑張っていく心算ですので。よろしく願います。

あ、これは希望者だけでいいんですが、バトンをもらいまして、それをやりたい方もしいらっしゃったら言ってください。私の活動報告にありますので。それでは、次回の更新にまた会いましょう。

第1試合　サスケVSヨロイだってばよっ！

「ゴホゴホ・・・ええ・・・それでは、これより予選を始めます。  
これからの予選は1対1の個人戦。つまり、実戦形式の対戦とさせて頂きます。ちょうど24名ですし、合計12回戦行います。ええ・・・ゴホゴホ・・・すみません。その勝者が『第3の試験』に進出できるという事ですね・・・」

病弱忍者のハヤテさんが、手に持つルールブックに目を通しながら説明していく。俺や数人の奴らはそんなハヤテさんを見ている中、

他の奴らは電光掲示板に出た二人の名前を見ている。まあいきなり、あいつが戦うんだもんなあ・・・仕方ないか。

「ルールは一切なしです。どちらかが死ぬか倒れるか・・・或いは負けを認めるまで戦って貰います。ええ・・・死にたくなければすぐに負けを認めて下さいね。ただし、勝敗がハッキリしたと私が判断した場合、無闇に死体を増やしたくないので止めに入ったりなんかします・・・」

ルールがないって言う割に、ハヤテさんが見ているのはルールブックなんですよね？何ていう矛盾・・・

「そしてこれから、君達の命運を握るのは・・・」

ハヤテさんが電光掲示板に顔を向ける。

「皆さんも見ているこの電光掲示板です。これに1回戦ごとに対戦者の名前を2名ずつ表示していくわけですね。では、早速ですが第1回戦の試合を始めたいと思いますので、表示されているお二人だけここに残って、あとの皆さんは上の方へ移動してください。」

電光掲示板に表示されている二人の名前は『ウチ八・サスケ』VS『アカドウ・ヨロイ』……ヨロイとかどんなキャラだったわけ？カブトの班の奴だったってことしか覚えてねえ……まあ、試合中にちよつとでもおかしな事をしようとしたら、試合とか関係なく奴を潰せばいいし、大丈夫かな。……やっぱ保険として大蛇丸に忠告してこよ。ゆっくり観戦したいし。

「サスケ君、頑張ってね！私たくさん応援するから！！」

「サスケあんたが負けるわけないと思うけど、頑張って！」

サスケに激励を送っているサクラと香燐。サスケがウザがってるの

を尻目に他の下忍と上忍達は階段に足を運んでいく。俺もそんな下忍達と同じようにサスケに声を掛ける事無く大蛇丸がいる方に向かう。その際に、ヒナタといのが何か言ってたがそれを無視して進む。大蛇丸のところに行くんだから仕方ない。でも、後が怖いなあ。戻ったらいのの機嫌取りしないと。

んで、大蛇丸のところに着いたわけだが……。何でお前もいるんだよ、カブト。けど、ちょうどいいか。こいつに話しかける振りして大蛇丸に接触すればいいんだし。

「同じ木ノ葉の里同士だけど、悪いがサスケには勝てないってばよ。」

（大蛇丸、この試合でサスケに何かしようとしたら……。分かるよな？俺は試合とか関係なくお前とそのカブト、それから音の奴らを殺すぞ。）

「ヨロイだつて強いよ。先輩として、そう簡単に勝たせてはあげられないからね。」

（へえ……。君がうずまきナルト君か。僕が大蛇丸様と繋がってるっていう情報は誰も知らない筈なんだけど……。まあいいよ。君を怒らせると本当に厄介そうだからね。大蛇丸様もそれでい



いですよね？)

(フフフ・・・分かったわ。『ここで』は何もしないと約束してあげる。でも、よく私だって気付いたわね。結構変化の術には自信があるのよ私。)

「先輩ってば『うちは』の強さ知らないでしょ？試合でそれが嫌でも分かるから、楽しみにしてるんだってばよ！」

(ばあか。お前ってばさっきの式の最中、俺のこと見てたろ。お前の視線ってば気持ち悪いからすぐ分かるんだよ。)

(あら、気付いてたの。それなら少しはその素振りを見せて欲しかったわ。)

「アハハハ。OK！分かったよ、楽しみにしてる。」

(大蛇丸様にそんな口が利ける人なんて・・・君か三代目火影くらいだよナルト君。)

「それじゃ俺ってば戻るから。」

（まあそいつをブツ飛ばせるのなんて、俺を除いたら火影のじいさんか残りの三忍の二人くらいだろうしな。ま、そんな訳でくれぐれもさっきの約束は守れよ。）

（フッフ。ええ、それじゃあね。）

俺は大蛇丸とカブトに背を向けて皆がいる所に向かうべく階段に足を運ぶ。やっぱ大蛇丸って気持ち悪……サスケに何か言っただから行くか？……いや、止めよう。めんどくせえし……

サスケの横を通る時に何か期待する眼を向けられたが、それに気付かない振りをして階段を上がっていく。その途中、階段から下にいるサスケを見てみると、俺に激励をもらえと思った自分を恥じているのか分からないが、耳を赤くしているのが分かった。恥ずかしがつてるサスケって……カワイいわ

つとと、サスケの事は置いて、皆はどこにいったのかなあ……ん？カカシとサクラが何か話してるみたいだな。邪魔すんのもあれだし、シカマル達を探すか。

んで、いざシカマル達を探そうとしたら、今一番会いたくない奴に見つかるんだから、よく出来てるよな世界って……

「ナルトお！！あんた私たちの事無視してどこ行ってんのよ！！サスケ君の戦う相手の方に行くとか何考えてんの！！」

「い、いのちゃん。そ、そんな大きな声出したら皆に注目されちゃうよぉ……」

いのが腰に手を当てて体を前のめりに倒して俺に突っかかって来る。やっぱりいのを怒らせると怖えな……。ヒナタはそんないのの後ろで、手を胸の前で組みながら周囲をしきりに気にしている。ヒナタ、それ止めた方がいいぞ。あそこにいる犬野郎がハアハアってヤバい事になってるからよ……てかキバ自重しろって。

「ヒナタ！あんたもそんな恥ずかしくてないでナルトに何か言っ  
てやりなさいよ！！こいつは「はいはい、そこまでしておこうぜ、  
いの。」シカマル……」

いのの肩に手を置いてシカマルが顔を出した。ナイスタイミングだぞ、シカマル！後で絶対何か奢る！！勿論チヨウジに！！

「いの、こいつが何も考えずにそんな事するわけねえだろ？」

「分かってるわよ、そんな事。私は無視された事を怒ってんの！！」

癩癩起こしたいのって時にウザいんだよな……まあ、それでもこいつはちゃんと俺の事考えてくれるし、これも我慢かな。

「……私、恥ずかしいよ……」

そして、ヒナタ。お前はやる仕事やる仕事全部が可愛いんだから、少しは自分の可愛さに自覚を持ってくれ。じゃないと……

「ハア……ハア……ハア……」

あの犬みたいになる奴が絶対これから年々増える事になるからよ・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

中央で向い合うサスケとヨロイとかいうモブキャラ。ハヤテはその  
間に立って審判役を務めるみたいだ。てか、やっと試合始まる。助  
かったあ・  
・  
・  
・  
・  
・

「それでは……始めて下さい！」

そして、ハヤテの合図で第3の試験予選、第1試合が始まった。この、試合が始まるまでの10分間、俺が何をしていたか。それは勿論……いのから説教を受けていた。試合が始まってまじで、助かった……シカマルじゃ一時凌ぎにしかならなかったからな。

「サスケえく負けたら承知しねえからなあ」と、手すりに腕を乗せ、更にその腕の上に顎を乗せてやる気のない声を掛ける俺。

「ナルト君。ちゃんと応援してあげた方がいいんじゃない……」

「そうか？なら……サスケえ！！負けたら分かってるな！！」

横にいるヒナタが困った顔でそんな事を言うから、仕方ねえから大声で応援という名の脅しを掛けてやった。

ビクッ・・・

（ナルトの野郎お・・・始まる前に声を掛けて行かなかっただけじゃなく、試験中に何て応援？しやがる！！）



サスケは一瞬だけ体を震わせて、目の前の対戦相手を見る。鼻から下を黒い布で隠し、眼は切り抜かれたように真っ黒。そんな奴が自分の前で不敵に笑っているのを見て、更に気分を害していくサスケ。

(・・・だが、ナルトの言う事も尤もだ。こいつ程度に手古摺る様じゃ、ナルトに追いつく事なんて何時まで経っても無理って事だ。・・・なら、圧倒的に勝つまでだ!!!)

サスケは瞬時にホルスターから数枚の手裏剣を取り出し、それをヨロイに向かって投擲。更に今度は右に移動しながら印を組む。

ヨロイは自分に向かってくるその手裏剣を弾く事無く、体を横にするだけでそれを回避する。そして、ヨロイの両手には視認できるほどの禍々しい色をしたチャクラが宿っている。

サスケの印もその時には組み終わり、口を大きく膨らませて両手を口元に持っていく。

（喰らいやがれ！！！！）

火遁・豪火球の術！

「あれって確か波の国で・・・」

「その通り。よく覚えてたなヒナタ偉いぞ。あれは、うちはが得意

とする術で『火遁・豪火球』って技だな。まあ、あんぐらいまで大きなモノを出せるようになったんだからサスケも強くなったってことだ。」

横にいるヒナタを見れば、顔を赤くしてモジモジしている。褒められた事がそんなに嬉しいなんて……紅さん、ヒナタの事もっと褒めてあげてくれ。

まあ、あの技はあいつが得意な火遁系の忍術で、その中でも威力が高い術なのは確かだ。俺は火遁系の術を教えてねえからそりゃ、当然だわな。てか、千鳥しか教えてねえし俺。

「サスケ君ってやっぱり凄いのねえ……………」

「だな。あいつはアカデミーでもずば抜けてたから、納得って言えば納得だ。」

いのとシカマルはサスケの火の球を見て、目ん玉大きくしてる。いや、そんなんで驚いてたらこの先の予選でお前から口開いたまんまになんじゃねえか？

そんな事を考えながらも、下の戦いは続いている。

「フンッ!!」

そんな掛け声と共に、ヨロイは自分よりも二回り大きい火の球に右手を構えた。そして、火の玉がそのヨロイの構えた右手に当たった

かと思つた瞬間、その火の球はみるみる内にヨロイのその右手に喰われていった。

「何!？」

「ほお・・・結構なチャクラだな。」

口は布で隠れて見えないが、笑っていると分かる口調で、感想を漏らす。

「ツチ!!!」

サスケはそれに舌を打ち、クナイを取り出しヨロイに向かって駆け出した。

(あの馬鹿っ!!！)

ナルトがそう思うも遅く、クナイをヨロイに振り下ろすサスケ。そのサスケの振り下ろしはヨロイの左手によって阻まれる。サスケのクナイがヨロイの手を突き刺して、ダメージを与えたように見えるそれは、実際には動き回るサスケをヨロイが捕まえたのだった。

「捕まえたぞ。」

ヨロイは残していた右手でサスケがクナイを持つ手首を掴む。すると、サスケの手首からヨロイに向かって何かが流れていく。

「何?・・・!?!ち、力が・・・お前何をつ・・・」

「あああ……サスケの奴こりや負けかな。」

「え？ど、どうしてそう思うの？」

「ヒナタの言う通りよ。今だってサスケ君があいつを追い込んでるじゃない。」

ヒナタといるのが、俺の漏らした呟きに反応する。俺もさっきの豪火球を吸い込んだ？あれを見てなかったら、ヒナタ達のようにには思わないにしても、まだ大丈夫って見てられたが、思い出したからなあ……ヨロイの能力。

ヨロイの能力とはチャクラ吸引術。掌を相手の身体に触れるだけで精神と身体のエネルギーを吸い出すチート級の術。てか、原作で術そのものも吸引出来たっけか？いや、原作とか関係ねえな。現にさつきこの目で見たからな。

サスケ、この試合俺達が思ってるより面倒みたいだぞ。

サスケの全身から力が、チャクラが失われていく。掴まれている手にはクナイを握っているサスケだが、その手は既にクナイを握る力



も入っていないかった。それを証明するように、クナイがサスケの手から離れ、下に落ちる。ヨロイは血が流れるその左手でサスケの顔を殴り、後ろに倒した。

(グア……糞つたれ……幻術でも、毒でもない……一体何なんだこれは!?)

肘で体を起こしヨロイを睨むサスケ。そこに、ヨロイが力任せに右手を拳に変え、サスケの腹部辺りを突き込んだ。

「グお……」

一瞬呼吸が出来なくなり、腹部を抑えてのた打ち回るサスケ。それをヨロイは、ククツと笑いながら見下ろしている。

「無様だな。さっきまでの意気はどうした？」

「ふ、ふざけやがって……」

腹部を抑えながら、立ち上がるうとするサスケ。だが、それを許す程ヨロイも馬鹿ではない。再び右手を構え、サスケに向かって突き出した。

「糞がつ!!!」

サスケはそれに対して、右手で腹部を抑えながら左手でヨロイの手を上にかち上げ、更に渾身の力を込めた蹴りを放ち、ヨロイを後方に下からせた。

「グッ……ククク……モルモット風情が……まだ、こんな力

が残っているとはな……」

ヨロイは不敵な笑みを浮かべて、サスケを見る。それに比べてサスケは満身創痍の体をフラフラになりながら睨むだけ。だが、その眼はうちだけが開眼出来る『写輪眼』となつてヨロイを映していた。

やつとかよ……写輪眼の制御方法なんて俺が知るわけねえから教えられなかったけどよ、幾らなんでもここまで追い詰められないと発動しないとか……サスケ、この予選終わったら力カシ先生に教えて貰うんだぞ。じゃないとお前、雑魚過ぎるからさ。

「ナルト、サスケのあの眼……」

「ああ、あれは「写輪眼だよ。」カカシ先生……」

何でこんな時だけこつちに来るかなこの人は……俺の言葉を遮って「よっ！」と声を掛けてくるカカシ。それに付き従うようにサクラまでこつちに来るもんだから、ここの集まりがこの建物にいらるどの集団よりも大きくなった。

ここにいる奴らを教えておくと、俺にシカマル、ヒナタといの。それから、あぐらで座りながらポテチを食べているチヨウジに、さっき来たカカシとサクラだ。チヨウジが今まで何も話さなかったのは、5日も食べられなかったポテチを食べるのに集中していたからだ。こいつの食べ物に対する執念を改めて凄いつて思っているとこなんだよ実は。

アスマがどこにいるかと言うと、紅さんのとこだったりすんだよね。キバとシノも俺らの近くに居るから、まあ二人だけって事。何かこうして見ると紅さんとアスマってお似合いかもって思う。波

の国ん時にアスマにはもつたいたいとか思っただけど、実際お似合い何だから仕方ないよな。幸せにしてやるんだぞ絶対！！

とと、話が変わってるな。今はカカシが写輪眼を知らないシカマルいの、ヒナタ、序でにチヨウジにも説明しているところ。俺はその間もサスケの試合を見ているが、あれからなあんも発展なし。写輪眼を発動したサスケが手裏剣やらクナイをヨロイに向かって投擲して、ヨロイがそれを時には回避して、時には弾いている。

「じゃあその写輪眼を発動したサスケ君は無敵って事じゃない！！いけるわこの試合！！！」

「いの！あんたがサスケ君の何を分かってるって言うのよ！！でも、ああなつたサスケ君は本当に強いんだから！！！」

「だが……」

カカシの言う通りだ。写輪眼を発動したのが遅すぎた。チャクラが  
少ない今、一撃で終わらせる技を出さないと……。サスケは勝  
てない。だが、あいつにはその一撃で決められる技がある。そう、  
ここに来るまでも修行していたあの技が……

「ナルト、お前はどっ思うよ?」

「正直、サスケの勝つ確率は限りなく少ない。」

俺のその言葉を聞いてサクラが「何言ってるのよ!!」って顔を向  
けてくる。いいから、お前はサスケを見てろって。ヒナタもそんな  
不安そうな顔すんなって。

「でも、あいつは『うちはサスケ』だ。あいつは勝つ。じゃないと  
俺があいつに修行付けた意味がねえからな。」

「『修行？』」って言う顔を向けてくるシカマル、いの、ヒ  
ナタの三人。サクラは気付いたのか「確かにあんな修行したんだも  
んね・・・」とか呟いている。カカシは、後で詳しく教えろって  
顔を向けて来た。ハハハ・・・考えておくよカカシ先生。

「だから、信じて見てろって。」

サスケは機会を窺っていた。自分のチャクラ残量が残り少ない事は  
分っている。だから、次の技で決めなければならぬという事も。  
そして、その技はナルトから教えてもらったモノ。

(「こんだけ無様な試合をしちまったんだ。ナルトに許してもらうにはこれを決めるしかねえ!!」)

そして、拾っては投げ拾っては投げをしていたクナイと手裏剣をヨロイに向かって全て投擲する。だが、それもヨロイには喰らわない。弾いて、避ける。

「フ……やっと諦めたか……」

「それは……どうかな!!」

「何?……!!?これは!」

ヨロイはサスケに向かうべく体を動かそうとするが、避けた姿勢の



まま動く事が出来ない。ヨロイの体をよく見れば、キラツと光る線が見えてくる。

「ワイヤーか……」

「何時の間にそんなもん仕掛けたんだ？」

「先程からクナイと手裏剣を投げたんだろう？その時に、ワイヤーを付けたものと一緒に投げていたんだ。」

「成る程……ッケ！俺だったら牙通牙で一発だぜ！！」

キバとシノが言っているようにサスケはワイヤー付きのクナイを他のモノと一緒に投げていたのだ。それが、やっとヨロイの動きを奪う事に繋がった。

(これを待ってたぜ!!)

左手を下に構え、残り少なくなったチャクラをそこに集めていく。すると、この建物全体にチツチツチツチツチ……という音が響いていく。

目に見えるほどに蒼く輝くチャクラ。それがサスケの左手を光り輝かせる。

『あれは！？』そう思ったのは木ノ葉の上忍、暗部、火影、数人いる中忍達だ。あの術を知る者達は、一斉にその術を開発した者に顔を向ける。だが、その向けられた者は前にいる金色の少年を見続けている。

そんな事など知る由もないサスケは、ナルトに一度だけ目を向ける。

「やっちまえ！！サスケえ！！」

そんな大きな声がサスケの耳に届く。自分の発動している術に負けないくらい大きな声。それを聞くと口角を上げて笑みを浮かべる。

「はっ……分かってるっての！」

千鳥！……！！

コンクリートを削りながら、一直線にヨロイに向かって進んでいくサスケ。そして、その突きは吸い込まれるようにヨロイの胸を突き破った。

「ガハ！？……グフ……」

チチチチ……と鳴っていた千羽の鳥のような鳴き声が止む。サスケは腕を抜き取りヨロイに背を向けて歩きだす。そして、ナルトがいる所の真下ら辺に着くと、血が付いた手を拳に変え天高く突き上げた。

「っへ。負けそうだった奴が偉そうに……まあ、勝ったから何も言わねえよ。上がってこい。」

「フンッ……」

(間違いなく…即死ですね…)

「第1回戦、勝者うちはサスケ……予選通過です！」

ハヤテの判定を告げる言葉を聞いて、やっとこの場にいる者たちから歓声と、拍手がサスケに送られる。本来なら予選にそんな事をしていないのだが、この時ばかりは皆そうしなければならぬと感じたのだ。

こうして、予選第1試合は終わった。続く第2試合はどうなるのか、この後に試合をするのか、そんな思いを下忍達は抱いたとか……  
……若干名を除いて……

「雷切りとはな……さあて、ナルト。お前がサスケに教えたのか？」

「え！？あの凄い術ってナルトが教えたの！？」

ああ五月蠅いなあ……気になるのは分かるけど、そんな詰め寄

つてくんなつていの。それから、カカシ先生。こんなところで、そんな事言つの駄目だつて。俺が目立つのは本戦でつて考えてんだからさあ……………

「雷切りつていうんだあの術。」

「チヨウジ!? お前見てたのか?」

「シカマル、僕だつてポテチを食べてるだけじゃないよ。」

いや、俺も思ったわ。チヨウジちゃんと見えてたんだな。てか、何袋食つたんだ? チヨウジの周りには数えきれないくらいのポテチの袋が散乱している。

「雷切り……………凄い術、そうなのだ! あれはここにいるコピー忍者

カカシの唯一のオリジナル技であり、その技で雷を切った事がある  
ことから、雷切りという名前なのだ!!」……う、う、う、怖い・  
」

ヒナタの呟きに反応したのは、全身緑タイツの敵ついおっさん。ぱ  
つと見はリー親父かと錯覚するほどよく似ている。そんなおっさ  
んの名前は、マイト・ガイ。

てか五月蠅え……めんどくさい人来たから、離れようかなって  
思っていたら……

711

「やっほ 金髪君どこ行くの?」

「……先輩こそ、何時ここに来たんですか?」



「ん？ガイ先生が『カカシに話を聞きに行かねば！』って言うってここに向かって行って、どうせなら金髪君もいるし私も行くって思ってる」

「はあ……そうですか……」

そう。お団子を二つ頭に乗せたテンテンが俺の背中に負ぶさってきたのだ。背中に胸が当たってるんですけど……え？当ててる？ああ、業と难道ですか。そうですか。

「……ナルト君、この人誰なのかな？」

「ああ！！この女またナルトにくっついて！！ヒナタ、この女一個上の先輩で森の中でもナルトにくっついてたのよ！！」

「あれ？金髪君ってば、いのちゃんだけじゃなくて、こゝんな可愛い子にまで手え出しちゃってたのかあゝいけないなあゝゝ」

「……………何だこのカオスな状況……………ヒナタがいつもは浮かべない笑顔で俺を見ていて、いのはさっきよりもきいー！ってなってるし、テンテンは腕を俺の首に巻きつけて、頬と頬を合わせて来た。そして、その他の奴らは徐々に俺達から離れていく。」

いや、お前ら離れるなって。シカマル、お前は俺の親友だろ？チョコウジ、食い物好きなだけ奢ってやるから。カカシ先生、いきなりイチヤイチャパラダイス読みださないで。サクラにサスケ、何二人でいい雰囲気になってやがるんだ？

「そこの若人よ！！」

あ……………あんたは残ってくれたんだな……………ガイ先生。

「ハーレムとはやるじゃないか!!青春してるなあ!!!!でも、大人になつたら一人に絞りなさい。」

.....この人に期待した俺がバカだったよ.....

「ナルト君.....」「ナルト.....」「金髪君.....」

頼むから俺にゆっくり試合を見せてくれ~~~~~

次回

次の試合は……こいつらか。俺の試合って何試合目なんだろうな……

てか、よく考えたらあいつ写輪眼使えるんだよね？……この予選の間、サスケってばここに居る下忍の術を盗み放題じゃねえかつ！！

原作みたいに呪印ないんだから医務室行かなくていいんだもんなあ  
・  
・  
・  
・

それでは、また次回。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。

## 第1試合 サスケVSヨロイだつてばよっ！（後書き）

第25話でした。

まずは、更新が遅れたことをお詫び申し上げます。卒論が追い込み段階でしてssを書いている暇がなかったもので……

この何日か本当に地獄でした。何文字書いても埋まらない卒論、更新できていないss、そして就職先の課題、さらに積みゲーとなっているゲームの消化。

ん？最後のがおかしい気がします……見なかったことにしてくださいww

ええ、25話でしたが、どうでしたか？ヒナタ回と言っておきながら、ほとんど戦闘でしたね。戦闘の時にヒナタと絡ませようと頑張ったのですが……難しいですね、文章って。

次の試合内容は原作とは違いますよ。それだけは約束します。というか、それだけしか約束できないのですが……ww

感想をくれた方達には申し訳なかつたです。延ばしに延ばした結果、原作通りの試合とか……はあ……サスケの悩んだんですよ。誰と戦わせようかなあって。12試合とか原作より試合数多いじゃないですか？だから、いろいろ組み合わせたんですが、如何せん本

戦に残したい奴らとは戦わせなくなかったんですよ。ということ、深くお詫び申し上げます。

話は変わりますが、読者様の中で何かお勧めのssってないですか？私、ついにssとオリジナル小説読み漁りすぎて、なくなってしまうて……です、読者様からのお勧めを読んでみたいなあって思うようになります。

良ければ、感想にこのssの感想+おすすめのss、小説を書いてくれないでしょうか？よろしく願います。

次回の更新も遅くなるかもしれませんが、このss、また私自身を見捨てる事無くこれから付き合ってくださいる事をお願いして、あとがきとさせていただきます。

それでは、また次の更新で。。。。。。。。

## 第2試合

シノVSキンだつてはよっ！

変化の術で別人となっている大蛇丸は音の下忍達の担当上忍として、先のサスケの試合を見ていた。

（フッフフ・・・流石サスケ君ね。それにしても・・・あの術はカカシの術だった筈、木ノ葉の奴らの様子から見るとあれを教えたのは一見カカシのようだけど・・・）



カカシを見てみると、前の下忍に厳しい目を向けているのに気付く。あれは、自分が今最も欲しいと感じている子。そして、この建物の中で唯一サスケのあの術を見ても驚いていない反応を見せる子。

（君が教えたのでしよう、ナルト君。本当、凄い子ね。写輪眼もないのにあの術を教えることが出来るなんてね。……やっぱり私は君が欲しいわ）

フッフ……と腕を組みながら笑う大蛇丸を傍にいる音の三人は変な人でも見る目を向ける。

（大蛇丸様は何を笑っているんだ？）

（サスケ君を殺せと試してみたり、その殺しの対象が自分の部下を

殺すのを見て笑ってみたいり……分りませんね……

(う……何かこわっ……)

上からザク、ドス、キンの感じたモノだったりする。ナルトは心からこの音三人に同情の念を送っていたりする。なぜなら、こんな変態が自分の担当上忍だったらと思うと……絶望してしまっからだ。

(ナルト君。君の試合が楽しみね　フッフ……)

大蛇丸がそんな事を考えているとは思えないナルトはというと  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ヒナタ、いの、テンテンの三人に詰め寄られながら、俺は次の試合の組み合わせが発表されるのを待っているわけだが……

「バラバラに行こうってナルト君が言ったから、キバ君とシノ君と一緒に頑張ってきたのに……何でいのちゃんと会ってるの？それに何時の間にか先輩とも仲良くなってるし……ズルいよお……グス……」

「ごめんヒナタ！それについては本当謝るからっ！だから泣きやんでよお。」

「ヒナタちゃんだけ？何だか分ないけど、私も謝るから。ね？  
それに金髪君て何かほっとけなくて……………」

前世の諺に「女三人寄れば姦しい」ってのがあったけど、これもそんな感じなのか？…………姦しいっていうか、一人泣いちゃってるしな…………はあ……仕方ねえな。確かにヒナタとはここに来てあんまり話せなかったし…………

いつの間にか俺に詰め寄っていた陣形は崩れ、今はヒナタを泣き止ませる陣形へと変わっているそこに、いのとテンテンの肩を掴んでヒナタの前に行く。

「全く、お前つてはまだ泣き虫治ってないのかよ。そんなに泣いて  
ちや駄目だろ？」

「…………でも……………」

「いのと先輩に会ったのは偶然だ。それにお前は俺の言った通り、自分たちでここまで来れたんだろ？なら、それは誇っていい事だ。いの達なんて俺から巻物貰ったんだからな。」

「ちょっとナルトそれは！」とか言ってるいのを無視してメソメソしているヒナタの頭を多少乱暴に撫でてやる。何でか知らねえけど、いのもヒナタも俺が撫でてやると機嫌悪いのだって直るし、偶に・・・じゃないな。ヒナタの場合はいよいよちゅう泣いてたから、俺がこうして泣き止ませていた。これは手のかかる妹を持つ心境に近いと思う。

いのはプクツと頬を膨らませて腕を組んでそっぽを向き、テンテンはニヤニヤと笑みを浮かべて俺とヒナタを見ている。全く・・・さつきからキバのこっちを見る目が尋常じゃないくらい、怖いんだが・・・・・ヒナタ、頼むから早く泣きやんでくれ！！

そうやって暫くヒナタの頭を撫でていると、やっと顔を上げて俺を見てくる。目を真っ赤にして俺の顔を窺ってくる小動物みたいなヒ

ナタ。……お持ち帰りしたい……。という邪まな感情が出てくるが、それを理性という足蹴りで、蹴り飛ばす。……はぁ……。全く。こいつってばこれを狙ってやってないってんだから、凄いと思う。一つだけ溜息を出してから、俺はヒナタが満足するまで頭を撫でてやることにした。

てか、今気付いたんだけど……。よく考えたらサスケって写輪眼使えるんだよね……。って事は、この予選の間サスケってばここにいる下忍の術を盗み放題じゃねえかっ!!!!……。ズルいぞ写輪眼……。

と、そんな事をしている間に次の組み合わせが決まったらしい。電光掲示板に目を向けると『アブラメ・シノ』VS『キン・ツチ』二人の名前が見えた。次の試合は……こいつらか。どうでもいいけど、俺の試合って何試合目なんだろうな……

それに原作と違う組み合わせとか……まあ、この試合はシノの勝ちだな。あんな雑魚に負ける程シノは弱くねえし。

「ええ……ではこれから、第2回戦を始めます。」

中央に試験官であるハヤテがいて、シノとキンっていう音のくのが対峙している。シノはいつものように口元を襟で隠して、ポケットに両手をつっ込んで立っていた。あいつ、ここでも自分のペース崩してねえし……流石シノ、俺もお前の事はよく分かん。

キンって奴がシノの後ろの方にいる俺の事を睨んで来たから、中指だけ立てたFUCKって意味のポーズをしてみせると、面白いよう

に怒り出した。ホント、こんな奴をこの試験に出してくるなんて何考えてんだか大蛇丸の奴。シノくさっさと倒してこい。

「ナルト・・・君？」

いのが俺の左隣りでヒナタが俺の右隣りといった感じで並んで下に目を向けていると、俺のそんな態度に気付いたのかヒナタがコテンと首を傾げて俺を見てきた。ヒナタって自分の可愛さ自覚するべきだと思う。これにやられない奴とかいないだろ・・・ああ、序でに言っておくと、テンテンはいの隣の隣でこの試合を見ている。まあ、背中に乗られるのは勘弁してもらった結果だな。んで、俺達から少しだけ離れた場所でシカマル、チョウジ、キバの三人がシノを応援していて、カカシ、サクラ、サスケ、ガイが後ろの方で見ているといった具合だ。

「いや何、あのくのーって俺が森で一撃で倒した奴だからよ。ま、だから睨んできてんだよあいつは。」



「ああ、確かにあの子ってば金髪君にやられた子だね。でも、あれは金髪君だったから出来た事だと思っけどなあ〜」

テンテンのその邪気のない笑みに、「ハハハ……」としか返せない俺。だってよ、テンテンが見てると思っけなかつたし……ま、過ぎた事だな。それに、この試合であの女は俺にやられた時より酷い目に遭うと自信を持って言える。なぜなら……

「あの子可哀想に……」

「いのちゃんの言うとおりかも……シノ君相手が女の子だからって手加減しないから……」

「?????」

いとヒナタのその言葉にテンテンが首を傾げて、試合を見る。すると、二人の言った言葉の意味が分かったのか顔を引き曇らせて俺に顔を戻した。

「二人の言った意味が分かったわ。あれは確かに嫌だね……」

試合が始まって直ぐにキンは、シノに向かって鈴付き千本を投げた。チリン……鳴りながら、シノに向かっていた二本の千本を避けたシノは、ポケットから手を出してキンに向かって駆け、下から掬い上げるように掌底をキンの顎に叩き付けた。

キンはそれを受けて宙に舞ってしまいが、体勢を整え次に来る攻撃に備えようと構えるが、来ると思った追撃はなかった。そればかりか、シノは出していた手を再びポケットに突っ込んでキンを見下ろしていた。

「は！余裕の心算か知らないけど、来ないならこっちから行くよ！」

そう言って今度は千本を逆手に持ってシノに向かおうとしたその時、ゾワツ・・・と嫌なモノがキンの体を走った。

（何だこれは？あいつの攻撃？いや、あいつから受けた掌底は一撃だけ。ダメージは残ってるけど動けない程じゃない。なら・・・）

「ギブアップしろ。」

「!?!?・・・何を馬鹿な事を!!今からお前をハリネズミにしてやるのに、何であたしが降参しないとならない!?!?」

ゾワツ・・・それはキンの体、それも服の中の肌にまで感じる程嫌な感触をキンに伝えた。

「な、何だこれは!?!服の中にまで・・・!?!?」

上着の下を捲ってみるとそこには、黒光りゴがつく害虫よりも小さいいがゴのつく害虫と同じような形のそれがキンの服の内側をカサカサと動いていた。

「あ・・・ああ・・・ヤダ・・・取って!取ってよ!!!」

「そいつらは『寄壊蟲』と言って、集団で獲物を襲い……チャクラを喰らう。」

シノは暴れるキンを見下ろし、体からカサカサと数えられない程の蟲が出しながら、シノは説明を続ける。

「嫌だ……止めるッ！どこから湧いて来るんだこいつら！！！！」

パニックになっているキンにはシノの説明は届かない。衆人の目を気にしてもいられなくなったのか、服を脱いでいくキン。着やせするタイプなのか、胸は同年代の子らより膨らんでいるのが分かる。

だが、それを見ても気にしないのがシノという男だ。構わず寄壊蟲の説明を続け、寄壊蟲に至ってはキンの体をカサカサと動き回って

いる。ちなみに言っておくと、テンテンが顔を引き攣らせたのはこの辺りだったりする。

「ぎ、ギブアップだ！！だから早くこいつらを・・・ひい！！！」

そして、ブラヤショーツの中にまで入ろうとした蟲に気付いたキンは、パニックになっていたこともあり目をグルグル回して気絶してしまった。

「・・・・・・・・第2回戦、勝者『油女シノ』」

シノはハヤテのその言葉を聞いてやっとキンの体から奇壊蟲を自分に戻し、階段の方に足を向ける。キンは医療チームが駆け付く程の怪我ではないが、下着姿で気絶しているということもあり、担架に服と一緒に乗せられて会場を出て行った。

「なあ、コレもついいだろ？」

俺はキンが服を脱ぎ始めた辺りで左右から目隠しをされていた。まあ分からなくはないが……ってかいのさん、ヒナタさん、めちゃくちゃ痛いんですけど……結構力入れてますよね？

「……………もついいわよ。」

「うん。もういいよ、ナルト君。」

二人のその何時もより低い声を聞いて、一瞬ビクツと体が震えたが数分ぶりに目を開くとぼやけて見えた。よく見てみると、サスケもサクラによって目隠しされていた。カカシとガイはさっきまで後ろにいたのに今は手すりから体乗り出すように見ているのを見つけた。いい大人がガキの下着姿見て興奮してんじゃねえよ……・ロリコンですか、そうですか。紅さんとアソコさんこの二人連行してつてくれないかな……

んで、いのさんにヒナタさん、何で不機嫌なのか教えてくださると嬉しいんだが……え？胸の大きさ？……成る程ね。まあ、まだ俺らって13だし将来性はあると思うけど……ん？誰に教えてもらったのかだって？それは……

「ねえねえ、金髪君。私もちよつとは自信、あるんだよ。」



そう、このお団子頭のゆるゆる先輩だったりする。しかも、さつきからまた俺に負ぶさってくるし……。頼むから止めてくれ。ヒナタがまた泣いたら今度はあんたが泣き止ませるよ。

「ナルトちよつといいか？」

そして、そんな事を考えているとさつきまでの態度が嘘のように真剣な顔をしたカカシが俺に声を掛けてきた。

「何か用ですかカカシ先生？」

「ま、そう言うな。ちよつと聞きたい事があったな。今時間いいだろ？」

「……………いいですよ。という事なので先輩、降りてください。」

「ええ〜……仕方ないなあ。可愛い後輩の頼みだし聞いて上げるよ。」

いや、頼みも何もあんたが勝手に負ぶさつてきてんだろっが。……  
……はあ……疲れる。っで、何であんたまで当たり前のよう  
に聞く体制に入ってるんのガイ先生。それからサクラ、サスケがそろ  
そろイライラしてきてるから、手を離れた方がいいぞ。

737

「で、何が聞きたいのカカシ先生？まあ、十中八九さつきサスケが  
出した術についてだと思っただけさ。」

「まあ、そういう事だ。単刀直入に聞く、あれはお前が教えたのか  
？」

カカシは目を鋭くさせて、ガイ先生は俺を値踏みするように見ている。サスケは腕を組んで知らぬ振りをしているが、内心ビクビクしているのなんて丸分かり。そんなビクビクしなくても大丈夫だってサスケ。

「当たり。ま、あれはサスケにぴったりの術だと思ったから、もしかして駄目だった？」

「……お前はあの術を二回しか見ていない筈だ。そして、その二回とも俺はお前によって邪魔された。……なのに、お前はあれをサスケに教える事が出来るくらいにあの術を理解していた。それもたった二回見ただけで、な。」

「!……それは本当なのかカカシ!？」

!?……五月蠅いなあもう……この人って何でこんな

に無駄に熱いんだろ……………まあ嫌いじゃないけどさ……………

「本当だ。俺は術を発動したただけで、それを相手に『使って』はいない。そんな術を二回だけ、たった二回だけ見ただけで他人に教える事が出来る奴など……………俺は見たことも聞いたこともない。写輪眼を持つ俺でも、術の発動だけを見ただけではそれがどんな術であつてもコピーは出来ない……………それをこいつはしたんだ。」

あれ？もしかしてこれって……………結構ヤバい事だったりしたんだ。

『やっと気付いたのか馬鹿者。』

……………九尾、気付いてたんなら何で教えてくれなかったんだよ。今俺ってば魔女裁判受けてる気分なんだからよ！！

『いや何、困っているお前を見たくてな。』

ふざけるお!!!!!!!!

「それって……」

「考えても無理だな。さつきカカシ先生に教えてもらったが写輪眼を超えるような眼があるとも思えない。ナルト、お前はどつやってそれを可能にしたんだ？」

シカマルにもそんな事言われちまうし……全く。めっちゃくちゃめんどくさい事になったなあ……

「うずまき・・・ナルト君だったね？失礼だとは思いますが、君は確かアカデミー始まって以来の落ちこぼれではなかったかね？それが、なぜこんな事が出来るのか、カカシでなくても気になる。いや、警戒すらも抱かすにはいられない。」

警戒、か・・・・・・・・そんなモノこいつらに抱いて欲しくないんだけどなあ・・・・・・・・そんな事思っても無理か。こんな状況じゃな。

「ナルト君・・・・・・・・」

「うーん、それについて簡単に説明がつく言葉ってあれしかないんだけど・・・・・・・・」

俺のその言葉にその場にいる奴ら全員が耳を傾ける。

「俺つてば四代目火影の『波風ミナト』の息子だったりするんだつてばよ。」

.....

「『四代目火影の息子!?』」

カカシとガイ先生以外の下忍達全員が大声を上げる。はあ.....  
本当は本戦で優勝してから言う心算だったんだけど.....まあ、  
疑いを持たれたら嫌だし、正直に言っちゃった方がいいよな。特に  
シカマル達にあんな目をこれ以上向けられたくはなかったし。

「それについては俺やガイ、ここにいる上忍は知っている。だが、  
それでもまだお前の強さの証明にはならない。」

まあ確かに、それだけじゃ弱いのは分かるけど……

「それについては、もう少しだけ待ってくれないかなカカシ先生。これは俺だけの問題じゃないから、さ。」

俺は真つすぐカカシの目を見る。嘘がない事を伝えるために。

「……………大丈夫だよ。私はナルト君を信じる。」

「……………そうね。ヒナタの言う通り、ナルトは私達の大事な友達で、大切な人だものね。」

「そうだな。親友を信じないでどうすんだって話だな。」



「ナルトは嘘ついた事ないし、うん。僕も信じる。」

「金髪君と知り合ってから少ししか経ってないけど、私は勿論金髪君の味方だよ。」

「ナルトに修行を付けてもらわなかったら俺は先の試合に勝てなかったかもしれない。フンツ……」

「……サスケ君が言うなら……それに、私だってナルトを信じているわよ。」

お前ら……涙出てくるからそんな事言つなよ……  
・ヒナタといのに至っては俺の手を取って両手で包んでくれるし、  
テンテンはギュッと背中を抱きついてきた。シカマルは肩を竦めて、  
チョウジはポテチを食べながら、サスケはそっぽを向きながら、サ

クラは怒ったようにそれぞれ言ってくれた。

「……………こいつらが信じてやっ  
て俺がお前を信じてやらなかったら、先生に怒られるな……………  
よし。俺も信じるぞナルト。」

「……………ライバルが信じると言うならば俺も信じなければな  
らないな。だが、これは火影様に報せておく。良いね?」

「分かったつてばよ。俺もその信頼に応えるよ。」

俺はそう言ってから、ヒナタといのの手からゆっくり抜け出し、声  
を出さずに口だけを動かす。「大蛇丸がここにいる」と。

カカシとガイはそれを見て、警戒レベルを上げた。それを見てゆっ

くりと首を振り、もう一度口だけを動かす。『露骨な反応は見せないで下さい』と。

そして、少しだけ警戒レベルを下げてくれる二人。大蛇丸もここでは何もしないって約束してくれたし、俺達だけが何かしようとするのは駄目だと思っしな。

「カカシ、俺はこの事を火影様に伝えてくる。」そう言って瞬身の術で移動したガイ先生。カカシは俺に優しい笑顔を向けてくる。

「ナルト、お前は本当に先生と似ているな。」

へへ・・・そんな事言われたの初めてだから、無性に照れくさい。

「でも、ナルトが四代目の息子だったなんて・・・」

「これでやっとアカデミー時代にお前に感じていた違和感が分かった。教科書に載ってる四代目とお前ってそっくりだったんだよ。」

「うん。そう思う。カッコいいもんナルト君。／／／」

「ありがとなヒナタ。」

そんな事があつたが試合は続いていたらしく、第3試合は終わっていた。内容はカンクロウVS香燐と同じ班の奴の試合で、烏を使って危なげなくカンクロウが勝ち抜いていた、らしい。

らしいというのは、シノとキバにも伝えに行った時に知ったからだ。まあ、見なくてもいい試合だったし、別にいいか。さあて、次は誰の試合なのか……そろそろ俺も戦いたいなあ……

・  
・

次回

こゝこれは……何て空気を読む掲示板なんだ……

俺の目の前には と の姿が。

まるで、はじめからこうなる運命だったように対峙する二人。

俺はどっちを応援したらいいんだろつか・・・

それではまた次回。。。。。

## 第2試合 シノVSキンだつてはよっ！（後書き）

第26話でしたあゝ。。。。

ということ、二回戦と三回戦？でしたwww

誰も予想してなかったんじゃないかと思えます。まさか、シノが女の子に服を脱がせるようにするとは！まさか、カンクローの試合が二行で終わってしますとは！

……まあ、今回の話はナルトの秘密を一つだけ教えるというものになりました。これで、皆ともさらに仲良く？なることが出来たのかなあと思っただけです。

今回は、あの二人を戦わせませぬ。まあ、どの二人かはまだ秘密です。予想してみてくださいね。ww

また、今回はアンケートを取りたいと思います。『ナルトのハーレムについて誰が必要か！』というものです。しぼりはありません。あの子とあの子、それからあの子も！など熱いご意見お待ちしております。あ、私の妄想で出来ているssなので勿論私の好きなキャラが中心となりますがwww

また、前回のおすすめのss、小説を紹介してくださった皆様あり

がとうございました。中には私が読んだのもありましたが、それはそれで私と趣味が合うのかな？と思いつながら見ていました。それに知らなかったssや小説を知れた事に嬉しさを感じています。本当にありがとうございます。漫画やアニメと違って自分の頭の中で空想出来る小説が私は大好きです。これからも、いろいろなssや小説を読んでいこうと思います！！

最後に、このssを読んでくださっている全ての読者の皆様に心よりの感謝を。

それではまた次回お会いしましょう。。。。



第4試合

いのVSテンテン

第5試合

チヨウジVSドスだっばよ

『俺っば四代目火影の『波風ミナト』の息子だったりするんだっばよ。』

そんな吃驚する事をつい数分前に言ったとは思えない程、リラック  
スした顔で電光掲示板を見ているナルト君。そんなナルト君の顔を  
横からチラッと見ていると、私の逆の方にいるいのちゃんと目が合  
った。

ナルト君は平気そうにしているけど、さっき一瞬見せた顔はとても寂しいモノだった。私はそれが気になってナルト君を見ていたんだけど、いのちゃんも同じだったみたい。目だけでお話するなんて本当には出来ないけど、この時ばかりは出来た気がした。

【私達はナルトから離れないようにしよう。】

いのちゃんの目がそんな事を言っている気がする。私もいのちゃんに伝える事を願って自分の目に思いの力を込めた。【うん。私達がナルト君の傍にしようね。】そんな思いを……

「……まじか……」

「え？」

私といのちゃんが目でお話をしていたら、ナルト君が小さく呟いたのでそれに反応してしまう私といのちゃん。ナルト君の顔に目を戻して、そのナルト君が見ている先を見ると、そこには……『ヤマナカ・イノ』VS『テンテン』を記した電光掲示板があった。

「いのちゃんと……」お？私だね 「テンテンさん……」

ナルト君の後ろで寄りかかっていたテンテンさんがナルト君から離れて、いのちゃんに近づいて行く。電光掲示板にもう一度目をやっ  
て確認するけど、その二人の名前は変わってくれない。ちなみに私  
がこの人をテンテンさんって言っているのには、ナルト君のためだ  
ったりする。

ナルト君に『いのとヒナタがこの人の事を良く思わないのって俺の  
せいだろ？まあ、この人も悪い人じゃないし、これから仲良くして  
くれると俺は嬉しいかな。』って言われたからなんだ。……  
ナルト君は自分の事をもっとよく知るべきだよ。アカデミーの時は

実力を隠してた『お陰で』私といのちゃん以外の子は春野さんみたいにうちは君を好きになっただけど……今はそんな訳にもいかなくなっただから。

ライバルが多くなったら……いのちゃんはきつと大丈夫、可愛いしお洒落だし、何よりナルト君の幼馴染だもん。でも私は……私みたいな地味は子はナルト君の傍に居られなくなる……だから、ナルト君にはもう少し自分の事を自覚して貰いたいんだけど……ナルト君はきつと容姿の事なんて気にしない。それがナルト君の良いところで、わ……私の好きなどころでもあるんだけどノノ……はあ……どうしたらいいんだろう……

「あんととやれるなんて、あの掲示板に感謝しないとね。」

「そう？でも、私も君と戦いたかったし。」

私が一人思考の海に旅立っている間に、二人がそんな事を言い合っていたらしいのを後になって私はナルト君から教えられた……

・・・ちゃんとしなさい私！

はあ・・・全く。何で二人とも早く行かねえんだよ。ハヤテ待ってんだぞ。てかヒナタ、お前は何時そんなスキルを会得しやがったんだ？・・・ヒナタは置いといて、この二人だな。

いの見れば、いつもサクラと喧嘩している時に見せる顔でテンテンを睨んでいる。いの中でテンテンがサクラの次に相容れない存在と化したのか、はたまた同類を発見したからこそ同族嫌悪か。



「分かったから早く行けつて。．．．てか、先輩も早く行つてく  
ださいよ。」

「だって、金髪君があの子だけ応援するつて言っただもん。私それ  
つて不公平だと思うんだよ。」

テンテンがくるつと回り俺の横に来てから、そのまま俺の頬にツン  
ツンと指で突いて来る。それを見たいのが「あんたはまたそうやっ  
て!!」と五月蠅くなる。これを計算してやってるんだから、テン  
テンにも困ったもんだ。

「ああ、はいはい。分かりました。先輩の事も応援しますよ。だか  
ら早く行つてください。そろそろ、あの審判の人が失格とか言い出  
しかねませんか?」

「それは嫌だから行つてくるねえ」

いのの抗議の声を無視して、まずはテンテンを下に向かわせた。語尾に音符を付けて手すりからそのまま降りたテンテンを睨みつけるいの。うわぁ……いののここまで怒った顔初めて見るかも……

「あの女ぁ……」

ギンツッ！！そんな音がしたと思う程俺に向けた目は怖かった。

「ナルト……」

「な、何だ？いの……」



大蛇丸の殺気を受けても平気だった俺がいのの殺気に震えるだど!?

「帰ってきたら・・・分かってるわね？」

「・・・・・・・・・・」コク

俺は無言で一回顔を縦に動かす。いのは俺が頷いたのを確認してから階段に体を向けて、下で待つテンテンとハヤテの所に向かった。

いのってこんな怖かったんだな・・・・・・・・・・これから、いのを怒らせないようによつしよう・・・・・・・・・・

「ええ・・・それではこれより第4回戦を始めます。」

ハヤテの言葉で更に緊張感が増していくような気がする。・・・  
・てかよ。空気読みすぎだろ、あの掲示板！二人って森で会った時  
からいがみ合ってたし、今のいのってサクラとの喧嘩の時の比じゃ  
ないくらい怒ってるしな・・・まあそれでもテンテンの方  
がまだ強いと俺は思う。冷静に分析してみれば、実力は天と地・・・  
って程じゃないにしろ離れてる。

手すりに腕を置いて下の様子を見る。俺から向かって手前がいたので、

向こう側がテンテンだ。まあ、そんな訳でテンテンがこっちに手を振っているんだなこれが。

「金髪くうくん！いのちゃんだけじゃなくて私も応援してねえ〜！」

「あ、あははは………」

空笑いが口から洩れたような気もしないでもないがテンテンに手を振り返した。すると、いのにもものすごい睨まれているのに気付いた。いや、手を振られたら振り返したただけで他意は………

横を向いたら横を向いたで、ぶうつと頬を膨らませたヒナタが俺に非難の目を向けているのにも気付いた。さっきまで、あわあわ言っていたのに………近くにいたカシとガイ先生に顔を向けてみると、カシには無視されガイ先生には歯をキラツと光らせて親指を立てられた。所謂、「青春だな、若者よ!!!」って事らしい。

んで、シカマルとチヨウジに至っては「骨は拾ってやるから……」  
「と肩を叩かれ、」……死ぬ前にコレ食べる??」とポテチを  
一枚手渡された。

俺には味方はいないのか……俺が頂垂れている間に試合は  
始まったようだ。

「テンテンン!!ファイトでえす!!」

「行ってこおい!!テンテン!!!!」

お馴染みの親子のような師弟が声を張り上げて、自分達の班員である  
テンテンを応援している。そんなガイとリーには応えずテンテン  
は構えている。俺こいつらの事どちらかって言うと好きなんだけど、  
実際に近くでこうも五月蠅くされたら……イライラもして

くる。しかも、リーに至っては反対にいるにも関わらず五月蠅いから、困ったものだ。

そんな、上の事はお構いなしにハヤテの試合開始の合図でいのは後方に跳んで下がり、テンテンは腰のポーチからクナイを取り出して逆手に構えた。

原作通りの相手じゃなくなったが、いのは心転身の術をテンテンに掛けるまで体術と忍具を使って攻めるだろうし、テンテンは得意の忍具でいのを攻撃すると思う。

「二人とも頑張ればよ！」

考えながらも、応援はする。いのが不機嫌になってると思うけど、テンテンにも頼まれたし、何だかんだ言っただけで憎めないからなあ・・・あ、あのテンテン。

いのは腰にしていた額当てを外して、本来あるべき額に付ける。・  
・一言だけ言わせてもらおうとだな、いの。そういうのは、試合が  
始まる前にするもんだと思うぞ。テンテンには感謝だな。攻撃しな  
いで律儀に待ってくれてるんだから。

「いのちゃん……………」

隣でハラハラしながら見ていると分かるヒナタを、横目で確認して  
から二人に視線を戻す。いのがテンテンに勝つ条件は、心転身の術  
を必ず決める事だ。だが、心転身の術は本来ならシカマルの影真似  
の術と併用して使う術。それを影真似無しでやるとしたら……………  
・  
・

いのが額当てをするのを見届けたテンテンが行動を起こす。逆手に  
持ったクナイをいのに投擲すると同時に今度は足のホルスターから  
手裏剣を取り出して、それも投擲する。へえ……時間差による忍  
具の攻撃か。いのは、自分に向かってくるクナイを横に跳んで回避  
するが、時間差で向かってきた手裏剣を喰らってしまう。

「くッ!」

咄嗟に腕を交差してそれを受けるが、いのの細い腕に手裏剣は刺さってしまふ。忍者になるのに男も女もない。それはいのだって分かっている筈だ。痛いって思う事より……

「こんなもの!」

腕に刺さった手裏剣を引き抜き、血が流れるのも構わずにテンテンに向かつて駆けるいの。そうだ、いの。俺達は普通の子供じゃない、忍者なんだ。なら、痛さに涙する前に自分の敵を倒す事だけを考えるんだ。

テンテンは向かってくるいのに対して構えを取って受け止めた。テンテンが態々自分の得意の距離ではなく、いのに合わせて試合をし

ているという事はここに居る殆どどの奴らが分かった。「茶番だ。」  
と言って切り捨てる奴も居れば、「いのちゃん！」と祈るようして  
見守る奴もいる。

「せええええい!!!!」

声と同時に拳を突き出すのだが、テンテンはそれを軽くいなして  
みせる。そして、ガラ空きとなった顔に今度はテンテンがいのに向  
かって拳を突き出した。

767

「う・・・ああ・・・」

テンテンの拳がいのの頬に吸い込まれるように決まると、いのは横  
にザザアと吹き飛んでしまう。それを見て隣のヒナタが「!!」と  
声にならない悲鳴漏らす、俺はそれを無視する。いの、お前はそ  
れで終わるのか？



「ねえ、いのちゃん。それで終わりなのかな？」

テンテンが突き出したままだった拳を戻して、いのに話しかける。

「ま・・・まだよ。」

それに応えるようにして立ち上がるつもりなのだが、さっきの突  
きが脳を揺らしたようで足がふらふらして立ち上がる事が出来な  
いでいる。

「無理しなくてもいいんだよ？もう立ち上がれそうにないし。」

いののその様子を腰に手を当てて見ているテンテン。その態度は人

を馬鹿にしているようで、その実いの回復を待っているそれだと俺には分かる。テンテンはこの試合で口だけじゃない強さを手に入れると教えているんだと思う。

ここまでいのは、シカマルの頭脳とチヨウジの食い物に対する不思議な力によって助けられて来たが、中忍になるためにはそのままでは無理だ。いの自身の強さも必要になってくる。

それは、俺の隣で震えているお姫様も同じ事だけど……まあこいつは、俺との約束で強くなるために努力をしてきたからな。現に波の国の任務の時には木登りの行は完璧に出来ていたし、ここに来るのにも俺の助け何て借りずに来れたしな。

「う……るさいわね。今お……きるわよ。」

そう言ってフラフラながらも立ち上がったのは、印を組み始める。それは心転身の術のモノだという事は、近くにいるシカマルの顔を見れば分かる。

「はぁ……仕方ない。なら、次で終わらせるからね。」

心転身の術は相手が動いていると命中力が下がってしまう。自分の精神を相手に飛ばして攻撃し、そのまま相手の体に乗っ取ってしまう恐ろしい術だが、如何せん命中力が低すぎるのがこの術の欠点である。まあ、山中のおじさんなら百発百中だろうけど……

テンテンは腰のポーチから普通より短い巻物を1つ取り出し、後ろに向かって駆けて行くと壁を蹴って上に跳んだ。跳んでいる途中で体を捻り、巻物を開いて頭上に持って行くと体と一緒に回転させ始めた。あれはアニメで見た……

いのはそれに構わず印を組んでいく。俺とか他の上忍ならばパパッと組める印を下忍相当の早さで組んでいくいの。あれも、今後の課題だな。

テンテンの回転するスピードが速くなっていき、巻物に書かれている文字の所に手を翳すと忍具が出てきて、それを掴んでいのに向かって次々と投擲していく。

テンテンのその数多ある忍具が自分に向かってくるのを確認したいのは、舌を打って回避するため体を動かそうとするが、ぐらっと体が傾いてしまう。

体勢が崩れたいのにそれらを防ぐ手立ては……ない。それをいち早く確信した俺は瞬身の術並みの早さでいのの所に移動して、いのを抱えてそこから脱出した。

いのを抱えた俺がハヤテの横に降り立つのと、忍具がいのがいたところに突き刺さるのは同時だった。

「ふう……先輩、やりすぎですよ。」

「金髪君なら助けに行くって思ってたからね」

悪びれもしないで、舌を出すテンテン。はぁ……この後大変だなぁ……

「外部からの手助けによりこの第4回戦、勝者はテンテンとします。」

「……うっ……」  
「ハヤテさんの言葉はいのの耳にも届いたらしく、」  
と泣き声が聞こえた。全く……

「……泣くなっ、いの。それに泣く暇あるくらいなら強くなつた方がいいんじゃないか？」

そう言うてから、いのを抱えたままヒナタのいるところに跳び上がる。ヒナタが跳びあがって来た俺達に一瞬吃驚したが、泣いているいのに気付いて俺の手からいのを奪って行った。

「もう大丈夫だよ、いのちゃん。」「悔しいよ・・・ヒナタあ・・・」  
「といった会話がされているのを確認して、近づいてくるテンテンに向き直った。

「全く、意地が悪いんですね先輩って。」

「?そんな事ないよぉ〜」

そんな事あるっての。まあ、俺が跳び出さなくても、他の上忍アスマとがが助けに行っただと思うけど・・・

そんなこんなで、後ろの方でヒナタというのが抱き合っていたり、テンがガイ先生に絡まれたり、サスケがカカシと写輪眼について話していたり、サクラがそんなサスケを隣で見っていたり、としている間に次の試合の組み合わせが電光掲示板に出た。

『ドス・キヌタ』VS『アキミチ・チヨウジ』

ん？これって確か原作通りの……

「チヨウジお前の番みたいだな……」

「うん、そうみたいだね。シカマルこれ持ってて。くれぐれも食べたりは……」

「分かってるっての。いいから早く行けよ。」



そんな会話が近くでされてたのでそつちに顔を向けると、チヨウジが階段を降りて行くのが見えた。

「それ何個目だ？」

「……知らね。12袋目くらいから数えるの止めたからな。めんどくせえし……」

シカマルに声を掛けると、そんな返事が返ってきた。確かにあの袋の山を見ればそう思うだろうな……。チヨウジがいたであろうそこはポテチの袋の山が出来ていた。どこからこんなに持って来たんだ？

「……ナルト、お前ってやっぱり強さ隠してたんだな。」

頬杖で下にいるチヨウジを見ながらシカマルは言う。

「まあなあ……軽蔑したか？」

俺もシカマルと同じように、腕を手すりに乗せチヨウジを見ながら答える。

「うんや。俺も似たようなもんだしな……お、始まった。」

シカマルの言いたい事はおそらく自分がIQ200以上だということを黙っている事だ。まあそれは単にこいつがめんどくさがりっただけだと思っけど……

「チヨウジってば、まだ倍化の術あれしか出来ないのか？」

俺の目にはチヨウジが肉弾戦車！！と言ってドスって奴に突っ込んで行く姿が入ってくる。

「ああ、あいつは修行よりも食べる方が好きだからな。任務が終わったら飯食ったり、菓子食ったり・・・まあ俺も似たようなもんだ。めんどくせえから空見てたり、あいつに付き合っただけで飯食ったり・・・いのも何だかんだ言っただけで俺らに付き合っただけだよ。」

突っ込んで行ったチヨウジをドスって奴は跳んでかわした。それだけじゃなく、右腕をチヨウジの体に突き出した。だが、それはチヨウジの回転している体に弾かれてしまう。あれをやっている時のチヨウジに触れるのは難しいからなあ。

「だと思った。俺はサスケに修行つけてやったり、サクライじめてやったり忙しかったけど、お前達修行するってがらじゃねえもんな。」

ギョルルルル……と肉球となったチヨウジが何度もドスって奴に向かつて転がって行くが、それを奴は軽々とかわしていく。てか、この試合延々これ続くのか？

「まあ、な。だけどな……」

延々続くかと思われたそれは、ドスって奴が壁ギリギリに立ち、それ目掛けて転がって行ったチヨウジが壁にぶつかった事で終わりを告げた。上に跳んで回避したドスって奴が壁に若干埋まったチヨウジの腹に右腕を突き出して、超音波を放った事で終わりを迎えた。

「チヨウジ、大丈夫か？」

「大丈夫だろ。あいつもここまで残ったんだ。それに、さっきのいの試合見て俺達も思ったんだよ。強くなんなきゃってな。」

シカマルのその言葉を聞いて、顔をシカマルの方に向けてみる。だが、シカマルはいつもと同じめんどくさいような、呆れたような顔でチヨウジを見ているだけ。

「まったく、あいつは少しダイエットしないと駄目だな。ナルトもそう思うだろ。」

「……そうだな。あれは少しぼっちゃりし過ぎだ。」

シカマルは俺のその言葉に「だよな。」って笑って返してくる。シカマルが原作で一人だけ中忍になったのが少しだけ分かった気がする。……ま、原作と違ってこの試験じゃ俺も為る心算だけだな。

試合が終わったチヨウジはそれから何事もなかったように、再びポテチを食べ始めた。こいつってホントある意味凄いと思う。

781

シカマルと一緒にそれを呆れながら見ていると、次に電光掲示板に書かれた二人は……

「……糞がッ」

『ヒュウガ・ヒナタ』VS『ヤクシ・カブト』

## 次回

何でよりによってヒナタとカブトなんだよ！

大蛇丸との約束があるって言っても、相手は変態だ。それにカブトもあいつに負けず劣らない変態……

ヒナタ・・・ヤバくなったら絶対助けてやるからな!!!

それでは次回もお楽しみに。。。。。



第4試合

いのVSテンテン

第5試合

チヨウジVSドスだっばよっ

はい27話でした。

というか、試合数多い！！何で香燐出したんだろ・・・とか後  
悔しっちゃったりしなかったりしていますwww

さてさて、1週間のアンケートの結果なのですが・・・

アッコ	10
ハナビ	3
多由也	8
紅	4
水影	1
テマリ	2
綱手	1
シズネ	2
大蛇丸	1
ユギト	2
キン・ツチ	3
紫苑	1
アマル	1
小雪	1
アヤメ	1
小南	4

という結果になりました！！いやあくアンケートのご協力してく  
れる方がこんなに多いとは思っていなかったので、私吃驚していま

す。

ということ、多由也が何と一番人気でした。確かに可愛い？と思いますからねえww

そんな訳で、10票以上のキャラをハーレムに入れようと思います。しかあし！綱手姫に関して何ですが、作者としての私の独断と偏見により、ナルトのハーレムには入れません！！

この理由は、感想ページの私のコメにもありますが、自来也先生とのカップリングを考えているからであります。賛否両論あるかと思いますが、これで行くつもりです。そして、紅さんをどうするか迷っています。読者様達の意見によりナルトのハーレムに何とか入れようと思います。

後はまあ……クリスマスが近いという事でイベント的なモノが出来たらいいなと思ってたりします。まだ400分というこの作品がイベントしていいのかと疑問に思いつつ、考え中であります

ww

やるとしたら、クリスマスの24か25に更新すると思いますのでよろしく願います。

それでは、また次回の更新で。。。。

Xmas前日 テンテン&白編

【クリスマス前日 テンテン編】

今年もいっぱい降ったなあ・・・雪・・・

左右の建物には真っ白くてフワフワの雪が乗っていて、それが最っ高に可愛く見えてしまう。後で金髪君を連れてこようっ

そして、私が今いる所は里の中でも一番賑わっている商店街。そこで何をしているかというと、一人でウィンドウショッピングをしていたりするんだなあこれが。でもさあ……………

「ねえねえ、次あっち行こうよ。」

「ああ？仕方ねえなあ……………」

「明日は私の家で……………ね？」

「わ、分かっているっの!」

さつきから聞こえてくるこの会話。分かるかな？分かるよね。・・・  
・・・ここにいる人達って私以外カップルばかりなんだよッ！！

幾ら明日がクリスマスだからってこれはないんじゃないかな・・・  
って思ったりするけど、私も金髪君と一緒にここにいたらそんな事  
思ったりしないんだろっとな、って事も同時に思ったりしちゃうから  
困ったものだよね。

「はあ・・・こんな事ならネジ達と一緒に任務に行けば良かったかなあ・・・」

そんな独り言が口から洩れてしまう。というか、独り言も出ちゃう  
よこれじゃあ。でも、本当に金髪君と一緒にここを歩いたら・・・  
・・・えへへ 考えただけで楽しくなっちゃう。

私の顔には自然と笑みが浮かぶ。さつきまで楽しくなかった気分も、  
金髪君のお陰？で幾分か良くなった。そうだ！クリスマスなんだし、  
金髪君にプレゼント買って上げようっ。いのちゃんとかヒナタチ

ちゃん、白ちゃんも金髪君にプレゼントするのかな？……きつ  
とするよね。だって皆、金髪君の事好きだもんね。まあ、私も何だ  
けど

今日する事が見つかった私は早速、金髪君のプレゼント探しに向か  
う事にした。何を貰ったら嬉しいんだろうなあ

金髪君が私からのプレゼントを貰った時に浮かべる笑顔を想像した  
だけで、楽しみになってくる。ああ、早く明日にならないかな  
あ……

.....

【クリスマス前日 白編】

「行ってきます再不斬さん。」

「……………おう。」

再不斬さんが新聞を読みながら応えてくれる。そんな再不斬さんを見ると僕の顔には自然と笑みが浮かんでしまいます。少し前までの事を考えると、僕達がこんな生活を送る事が出来るようになるとは思いませんでしたから……………

里の中心から離れた小さな、でも僕と再不斬さんだけが暮らす分には余裕な家のドアを開けて外に出ます。一瞬光が僕の目に飛び込んで、目を細めてしまいました。しかし、僕はこの光景を過去何度となく見ていたので直ぐに目も慣れて、ちゃんと開きました。

僕の目に飛び込んできた光景は、『白い世界』でした。

水の国にいた時にはいつも見ていたモノ。

この火の国では今の季節にならなければ見れないモノ。

「・・・雪・・・」

僕の口は自然とそのモノの名前を口に出しました。その事に吃驚して口に手を持ってきてしまいました。・・・この里で暮らすようになって僕も変わったという事ですか・・・

口に出すのも嫌になるモノだったそれを口に出来るくらいに僕が変



わったという事ですね。というか、この里にも降るんですね・・・  
・どこに目を向けても見えてしまうそれに苦笑を浮かべてしまう僕  
がいます。・・・切り替えましょう。そうしないと、シフトの  
時間に間に合わないかもしれませんし・・・

最近寒くなって来たのです。ようになったマフラーに顔を沈めて、  
まだ誰の足跡もついていない道をブーツを履いた僕の足が足跡を作  
っていくのを感じながら歩を進める。

ポフ・・・ポフ・・・と歩く度に鳴る音。それをBGMに僕が向か  
っているお店で働くきっかけとなった出来事を思い出すことにしま  
した。あれは、そう。一ヶ月くらい前の事ですか・・・

一ヶ月前・・・・・・・・

この里でアイス屋をやりだして、もう半年ですか。考えてみればあつという間の事だったと思います。ナルト君が波の国に来て、友達になって、大切な人になって、好きになって・・・・・・・・当時の事を思い出すと今でも頬が緩んでしまいます。本当にナルト君が好きなんだと自覚してしまう。僕はそんな今の自分が好きだったりします。

それに、ナルト君と知り合ってから僕が良く笑うようになったと再不斬さんに言われましたし・・・・・・・・フッフ、それを言った時の再不斬さんの顔は一生忘れる事はないと思います。再不斬さんと長く付き合っている僕にしか分かりませんが、再不斬さんが笑ったんです。あの鬼人と言われていた人が、いつも眉間に皺を寄せているあの人が、僕に笑いかけてくれたんです。

ああ、この人も笑うのだとはじめて知る事が出来ました。これも全てナルト君のお陰なんですね。・・・・・・・・ナルト君は凄い人です。この人を笑わせる事が出来るんですから。

そんな事を思い出していると、僕に近づいてくる人に気付きました。その人は、僕と同じ人が好きで、その人と一番長く付き合ってきた人。

「やつほ。遊びに来たよ白ちゃん。ていうか、こんな寒い日にアイヌ売れるの？」

「こんにちは、いのさん。ええと、夏が過ぎた辺りから売れませんか。」

「やっぱり……白ちゃんも大変よね。生活は大丈夫なの？」

「ええ、生活する事に関しては再不斬さんが暗部のお手伝いをしてくれているお陰で困っていません。ですが……」

いのさんの言う通り、ここ最近小さな子達もアイスではなく、肉まんや焼き芋といった温かいものを買っているようです。季節がら仕方ないのですが、再不斬さんにだけ稼いで貰うのは僕としては嫌ですし、何とかしたいと思っっているんですが如何せん何も思い浮かびません。

「うーん………そうだ！私が火影様に言っ来て上げる。

そして、白ちゃんが新しく働けるところも一緒に探して上げる！うん、そうしましょう！！そうと決まったら早速火影様の所に向かうわよっ！」

そう言って、いのさんは僕の左手を掴んでいきなり走り出してしまいました。えっと、いのさん。僕まだ何も言ってないんですけど……

そうこうしていると火影邸が見えてきて、そこに着くなりいのさんは受付を素通りせずかかと進んでいきます。あの後ろの方で受付の人が「お名前を記して行きなさい！！」と怖い顔で追いか

けて来ているんですが……大丈夫でしょうか……

と、色々なことがありながらも、何とか火影様がいる部屋に着いた  
いのさんと僕。今は火影様に僕の今の現状を説明しているところで  
す。

796

「……と、言う事なんですけど、火影様何か白ちゃんに仕事あ  
りませんか？」

「そ、そ、そ、そ、その……なら、これ何てぶつかの？」

いのさんが火影様に詰め寄っているのを何ともいえない感じで見てみると、火影様は机の上にあった書類の中からビラのようなものを一枚取り出して、僕に見せてくれました。

「『従業員募集！！特にホールに出てくれる可愛い子を募集してます。ファミリールレストラン【NOEL】』・・・これは？」

「ああ！それって最近出来たお店じゃない！！ホールに出ている女の子の服が可愛いって私達の間でも話題に上がってるのよねえ。」

いのさんが僕の見ているそれを、横から覗いて説明？してくれる。可愛い服ですか・・・僕に似合うでしょうか・・・いえ、そんな事今は関係ありません。僕は再不斬さんだけに働かせたくありませんし！

「その店長がわしの知り合いでな。丁度従業員を募集していたの

を思い出したので、見せてやったが……どづじゅっ。」

「……働かせてくれるなら、どんなところでもいいです。お願いします……！」

そう言っつて、僕は火影様に頭を下げます。すると、横のいのさんも頭を下げているのに気付きました。

「私からもお願いします！」

ありがとうございます、いのさん。ナルト君があなたやヒナタさんを大事にしているのも分かります。だってあなたは、こんなにも優しいんですから。

「分かった分かった。顔を上げなさい。その店長にはわしから言

っておくから、明日からそこに行って働くといい。それから、お主にやった屋台じゃがあれはまた夏になったらやって貰いたいから、お主が持っていていなさい。」

「ありがとうございます！」

「良かったわね白ちゃん！」

火影様といのさんに、お礼と一緒に僕が今出来る精一杯の笑顔が浮かべる。すると、二人が頬を赤く染めてしまいます。どうしたのでしょうか？

「全く……白ちゃんの笑顔って反則よね。ナルトも絶対これにやられたんだわ。」



「この年になって、何とも恥ずかしい事じゃ……………」

二人がおかしいですが、そんな事より新しい仕事です。ナルト君にも言わないといけませんね……………その可愛い服というのも興味がありますし、ナルト君に似合っていると言われたら／＼／＼／

そんな事がありました。『NOEL』というレストランでウェイトレスとして働き出して一ヶ月経ちました。今ではこのヒラヒラの服も慣れたもので、はじめは緊張していましたが今では自然と笑顔で接客することが出来ています。

ホールに出ると、お昼時のせいかお客様の数が多いようで、他の従業員が慌ただしく動いています。

「白ちゃん、おはよう！早速で悪いんだけど、これを7番テーブルのお客様に出してちょうだい。」

「おはようございます、トキネさん。分かりました、7番テーブルですね。」

トキネさんは、僕より3つ年上の綺麗な女性で、髪はショートで目と同じ黒色。体もスレンダーで僕みたいに胸がないという事もなく、はつきりと主張している二つのモノがそこにはあります。……別に何も思いませんが何か？

キッチンにいるトキネさんに挨拶をして、料理の乗ったお皿を4皿持っていきます。忍者として生活していた僕にとって腕にも皿を乗せる事は簡単なのですが、ここには忍者の従業員が僕しかいないため、この技？というか運び方をするのは僕しかいません。

そして、コレはこのお店の名物となり、お客様が僕のコレ見たさに来るようになったようで、売り上げが増えたと店長が喜んでいました。僕にとってもそれは嬉しい事で、そのお陰でお給金も多く貰えるようになりました。

再不斬さんには、「無理するな。」と言われましたが、無理ではありませんし、何より楽しいですから大丈夫です。それに、少し前にナルト君がここにやって来て、

「似合ってるぞ、白。．．．．．というか、似合いですぎ。お前この店の看板になってんじゃないかね？」

と言われてしまいました。今までも、お客様や同じ従業員に言われて来た言葉でも、ナルト君の口から出るそれは僕の中で一番嬉しいものでした。また、それに照れてしまって頬が赤く、顔が熱くなったのが分かりましたが精一杯の笑顔で、

「ありがとうございます、ナルト君。ナルト君にそう言って貰えるのが一番嬉しいです／＼／」

と、言う事が出来ました。ナルト君も頬を赤く染めてくれたので、ナルト君に僕の気持が伝わったと思います。そして、ナルト君と一緒に来ていたキバ？という方が「俺にはヒナタがいる俺にはヒナタがいる俺には・・・」と呪詛のように呟いているのが見えました。・・・あれは何なんでしょう？

その方の他にもシカマルさん、チョウジさん、シノさんという方達もいましたが、全員ナルト君のように顔を赤くしていました。はて？僕はナルト君にお礼を言ったのですが、なぜこの方達が照れるのでしょうか？・・・でも、そんな事はいいです。ナルト君に似合っていると言われたんですから。

と、そんな事があつたなあ・・・と思い出しながら、7番テーブルに料理を運び終わります。そして、いつものように僕が入ったせいかは分かりませんが、次から次へと注文が入るようになりました。

よし、今日も頑張りましょー!!

外が暗くなり、やっとお客様の姿がなくなってきた、今日の仕事も終わりとなりました。今日は何だかいつもよりお客様の数が多かった気がしましたけど・・・まあ、検討はしていますが。

ヒラヒラの服からここに来る時に着ていた私服に着替えながらそんな事を考えていると、横で着替えていたトキネさんに声を掛けられました。

「ねえねえ、白ちゃん。今日お客様から何回誘われたの？」

「……43回です。というより、何でそれをトキネさんが知っているんですか？」

「それは、白ちゃんと同じホールの子に聞いたからに決まってるでしょ？というか、43回とは……他の子でさえ5回とか7回なのに、飛びぬけてるわね。」

トキネさんのその言葉を無視してマフラーを首に巻いていく。ナルト君に誘われるならいざ知らず、見ず知らずの男ひとに誘われて行くほど僕は尻軽ではありません。それに、クリスマスには嫌な記憶しかありませんし……

「ごめんごめん。白ちゃんにはちゃくんと王子様がいるもんね。あの、金髪の・・・何て言ったかしら？」

「・・・・・・・・」

無視を決め込む事にします。トキネさんの事は良い人だと思っ  
ますが、こういう話をする時は嫌いです。直ぐに、からかって来る  
んですこの人。

「ああ、そうそう。確かうずまきナルト君・・・だったわよね。  
確かに顔はカッコいいというか、私からしたら可愛いというか・・・  
・まあ、あの子って他にもいるんな子に好かれているみたいだし、  
白ちゃんも明日は大変ね。」

「……………別にそんなんじゃないありません。」

「そう？でも、明日は『クリスマス・イブ』恋人達が色めき立つ日なのよ？白ちゃんもナルト君と一緒に過ごしたいんじゃないの？」

僕だって、ナルト君と一緒に過ごしたいです。でも、明日は僕にとつて思い出したくもない日で、そんな日にナルト君と一緒に楽しく過ごす事なんて……………おそらく出来ません。というより、出来る気がしない、と言った方がいいのかもしれない。それくらい、明日という日は僕にとって嫌な日なんですから……………



トキネさんと一緒に裏口からお店を出る。明日はなぜか、一日休みの日なんだそうです。普通のお店なら稼ぎ時！といって、絶対に休みにならないのですが、ここ『NOEL』は従業員の事を考えて休みにする、と店長からの提案により休みとなりました。

明日が休みというのは、僕にしてみれば迷惑で仕方ないのですが、他の方達にはそうでもないのでしょうか。現に隣にいるトキネさんは嬉しそうにしていますから。

「それじゃあね、私はこっちだから。」

左右に別れた道に差し掛かった時に、トキネさんがそう言うのはいつもと同じ。ただ今日に限っては「また、明日。」と続きませんでしたか……

トキネさんと別れて歩いていくと、不意に後ろから大きな声がしました。

「白ちゃ〜ん！何を考えているのか分からないけど、何時までも考えているだけじゃ駄目！絶対後になって後悔することになるから！！これ、私の経験談ね！！！」

トキネさんが口に両手を添えているのが分かります。そして、その言っている内容が僕にとって難しいという事も。そして、スッキリした顔で手を振ってくるトキネさんに僕も手を振って、今度こそ背を向けて歩き出します。

明日は……クリスマス……ですか……

上を見上げてみると、空には雲一つなく綺麗に輝く星が見えました。



Xmas前日 ヒナタ&いの編

【クリスマス前日 ヒナタ編】

えっと、えっと・・・こうして・・・こうして・・・あれどっちだっ  
け???.?もうちよっとで出来るのになあ・・・

うう~~~~・・・初めてだから難しいよあ・・・でもでも、これを  
ナルト君にプレゼントするって決めたんだもん！頑張れヒナタ！！

「お姉様、またやっているんですか？」

「ふえ！？は、はははは、ハナビどうして……お父様と稽古してたんじゃ……」

急に話しかけられたから吃驚して手の中にあるそれを落としてしま  
う。あう……落としてしまったそれを直ぐに拾って胸に持って行  
く。そうやってから、声がした後ろを振り向いてみるとハナビがい  
て、また吃驚。道着を着てるって事は稽古はまだ終わってない筈・  
・だよな？

「それは先ほど終わりました。というか、お父様が『ヒナタは今日  
も稽古に来ないのか……』って悲しんでましたよ。」

「それは……」

私は自分の手にある物に目を向ける。これが完成するまでは稽古は出来ないよ。それに、期限は明日までなんだから！！

「はぁ・・・お姉様があの人のためにそれを作ってる事は知っています。ですが、自分の修行もきちんとやらないとあの人に笑われてしまいますよ?」

（というか、私だってプレゼント作りなのに、お姉様ばかりズルい！！少しでも少しだけ意地悪しても許されますよね・・・）

あう・・・それを言われると・・・私はハナビの目から逃げるように体を小さく丸めて行く。それはしちやいけない事だって分かってるけど、私はハナビにこういう風に言われると、いつもこうなってしまう。

「また、そうやって逃げるのですか？お姉様はあの人に・・・ナルトさんに認めて貰うのではないのですか？それをそんなウジウジウジウジ・・・ナルトさんもそんな人からプレゼントを貰っても嬉しくありませんよ。」

「！！私は……私は……」

「……言いたい事はそれだけです。それじゃあ……」

（ちょっと言い過ぎたような気もしないではないですが……  
いいえ、そんな事ないです。お姉様ばかりナルトさんに会うなん  
でズルいですからね。）

ハナビは本当に言いたい事を全部言ったらしく、私の部屋から出て  
行った。出て行く時に私の方を向いてきた気がするけど、今はハナ  
ビともう話したくはなかった。

ナルト君……私間違ってるのかな？……修行も大事なのは  
分かってる！でも……それでも私はナルト君にこれをプレゼ  
ントしたい。したいの……

私は目から出てくる涙をそのままに、編みかけのそれをキツく抱きしめるようにして体を更に小さく丸める。

「明日までにはちゃんと完成させるから。だから、今だけは許してね……」

私の部屋に私の泣く声だけが響いて行く……

.....

【クリスマス前日 いの編】



はあ・・・とうとう言えずに今日まで来ちゃったなあ・・・  
ホント、自分が嫌になるわ・・・

ベッドに仰向けに倒れたまま、壁にあるカレンダーに顔を向ける。  
赤ペンで書かれた花マルの日は・・・明日。そして、今日を含  
めそれまでの前二週間には×が書かれている。

「今年もダメだったかあ・・・」

カレンダーから外が見える窓の方に顔を向けてみると、綺麗な夕陽  
が見えた。季節が冬になったせいなのか、最近は特に日が暮れるの  
が早くなったと思う。って、そんな事はどうでもいいのよ！

「何で私って、こういつ時に限って駄目駄目なのよ・・・も  
うッッ！ー！」

バタンツ！

自分一人だけしかいない部屋に自分の声が、ベッドに叩き付けた音が、反響して、消えていく。昨日も一昨日も、3日前も言うつチャンスなんてたくさんあったのに……今日だって……

顔を隠すように枕を抱きしめる。……そんな事をやっているとき、頭の中にあいつの笑っている顔が浮かび上がってくる。私より綺麗で鮮やかな金髪のあいつの笑顔が……

肩を竦めながら『分かってるってばよ。』って言うっても本当は分かってないあいつ。

後頭部を掻きながら全く悪びれもしないで『わりい、聞いてなかった。』って言うっても本当は悪いって思ってくれているあいつ。

溜息を吐きながらも私の言う事を『全く、仕方ねえなあ……。』  
って言って聞いてくれるあいつ。

シカマル達と先に行っても『いのお〜早く来いよ!』って言って  
私の事を待ってくれるあいつ。

爽やかに笑って『いの。』って私の名前を呼んでくれるあいつ。

頭の中に出てくるあいつが私の名前を言うだけで、それまで嫌な気  
持ちでいた顔に自然と笑みが浮かび上がって来てしまうから困る。

でも、私って何でこんなにあいつの事が好きになっただんだけ……  
……

初めてあいつと会ったのは、私が6歳であいつが5歳の時……

その日私はパパと一緒に火影様の所に行く事になったの。当時はパパの後を付いて回る子だったってママに聞いたけど、今じゃ考えられない事よね。

そして、着いた火影様の所には私以外にも子どもが居た。それはシカマルとチョウジだったんだけどね。二人は私と同じようにおじ様達と一緒に来たって言った。というか、この二人は今も当時も変わってない気がする。

だって、シカマルはシカクおじ様の後ろでポケットに手を入れて『めんどくせえ〜』って言うてたし、チヨウジはチヨウジおじ様のズボンの裾を引つ張つて『父ちゃん、僕お腹空いたよ〜』って泣いてたんだもん。本当、二人って成長しないわよね。

でも、私はこの二人とは物心付く前から一緒に遊んでいたと思う。それは、パパがシカクおじ様とチヨウジおじ様の二人と友達で親友だったからだと思う。そのせい？ってのも可笑いけど私達はいつも三人で遊んでいたんだっけ。あ、でも私にも普通に女の子の友達もいたわよ。本当だからねっ！・・・話がずれたから戻すわ・・・

だからこの日も、パパ達で話があるからその間三人で遊んできなさいって事だと思ったのは仕方なかったと思う。私はパパに『遊んで来ていい？』って聞かないで、シカマルとチヨウジの二人を引つ張って部屋から出ようとしたの。

そしたら、『これこれ、ちょっと待ってくれんか、いのちゃん。』

って火影様に声を掛けられたから吃驚。何か悪い事でもしたのかな？挨拶はしたわよね？なら、何だろう？

いろいろ考えながら、恐る恐る火影様の方を振り返ったの。そして、火影様が『今日はこいつも遊びに入れてやってくれんか？』って言うって、窓の方に向かって行ったの。こいつって誰の事なのかな？そう思っていたら、火影様が窓を開けて『ナルト、ちよつとこつち来い。』って言ったんだけど……

なると？なるとってラーメンに入ってるあの、なると？チヨウジも私と同じ事を考えたんだと思う。

『火影様！なるとがあるの？僕食べたいッ！！』

って言うって涎をダラダラ出してた。正直、汚いから早く拭いて欲しいって思ったわ。シカマルはシカマルで、『親父いゝ俺帰っていいかあゝ？』何て言いだすから、私の怒りのゲージも溜まっていったのを覚えている。

そんな時だった。あいつが窓から飛び込んできたのは。私とお父さん、お母さん以外で見たことがない金色の髪で、私達よりも濃いそれ。それがお日様の光を浴びてキラキラしていたんだっけ。私は時間が止まったようにそれを見ていたのよね。……今思いだすと恥ずかしいわね。……／＼／

『何か用かじいさん？俺つてば今、昼寝してたんだけど……』

『また昼寝か。お前もこの子達と同じ年なのじゃから、年相応に外で元気いっぱい遊んでこんか！』

『ええ〜……ま、たまにはそれもいいかな。んで、この子達と一緒に遊べばいいのか？』

『全く、お前は……まあいはい。そうじゃ、この子達と一緒に遊んで来なさい。この子達の名前は……』

そうやって私の前で自己紹介していく、シカマルとチヨウジと金髪の子。私はその間金髪の子をじっと見ていた。いつもの私なら率先して自己紹介して、一番に友達になってたのにその時はただ黙って、三人のそれを見ているだけだった。

『えっと……いの？』

『お前の番だったの。』

『え？……!?!』

そして、チヨウジとシカマルの声でハツとなった私は顔を真っ赤に



しながら（たぶん、いや、絶対にそうなっていたわね・・・）金髪の子の前に立った。

『わ、私、山中いの。そ、その・・・よろしくね。』

『おう、いのちゃんだな。俺の名前はうずまきナルト。さっきチョウジにも説明したんだけど、俺はあのラーメンの上に乗ってる奴とは違うからな。ま、よろしくだつてばよっ！』

両手を後ろに隠して、目を合わせないようにしつつの自己紹介。そんなのは生まれて初めてだったし、何で自分がこんなに恥ずかしくなっているのか分からなかった。でも、その金髪の子は私のその自己紹介を気にした風もなく、自然に自己紹介してくれた。

パパとシカクおじ様、チョウザおじ様、火影様の4人はそんな私達を笑っていたし、シカマルとチョウジは私のそんな姿を初めて見たからか分からないけど、口をあんぐり開けていたわ。

それが、私とナルトの初めての出会いだった。

それから、毎日のように4人で遊ぶようになった。今までやってきたオママゴトは全部私とナルトが夫婦役になったし、お菓子を食べる時とか歩く時は絶対にナルトの隣にいるようになった。途中からキバとシノとも遊ぶようになったけど、ナルトの隣は私だけの場所。絶対に他の4人と変わったりしなかった。多分この時から、うん。初めて会った時から私はナルトの事が好きになってた。でも、それを自覚するようになったのはあの日からだった気がする。

825

それは、私達がいつものように空き地で遊んでいた時だった。

『次は何して遊ぶんだってばよ？』

『僕はそろそろお菓子を食べたいな。』

『お菓子はさっき食ったじゃねえかっ！お前ってホント食べるの好きだよなあ……将来デブに『デブって言ったね？』へ？』

『ああ〜チヨウジにそれは言っちゃいけないワードだぞって、遅かったな。』

『そうみたいね。私とシカマルは知ってたからだけど、キバ知らなかったみたい……』

『………他にそういったモノがあっても困る。今教えておいてくれ。』

シノってばいつも変なしゃべり方してるけど、これが地なのかしら？キバがチヨウジにボコられている間に私とシカマルはナルトとシ

ノにチヨウジに言っちゃいけない言葉を教えていった。

『分かったってばよ。それらを言わなければいいんだな。』

『ああ。』

『了解した。』

『それじゃ、何して遊ぶ？』

その後、スッキリしたチヨウジとポロポロになったキバを入れた6人でかくれんぼをする事になった。鬼ごっこじゃ、チヨウジが何時までも鬼になっちゃうから、これは私達のいつもの遊び。



だから、キバが『シカマル見つけ！』とか、『チヨウジも見つけたぜ！』って言うてるのをクスクス笑いながら聞いていた。あと、見つかってないのって私とナルトとシノじゃん。シノはかくれんぼ上手だから難しいだろうけど、ナルトはどうかな？

『へへへ、見つけたぞナルト！』

『ハハハ・・・見つかってばよ。』

あ、見つかつたんだ。ナルトっていつも簡単に見つかる所に隠れるんだよね。ナルトならもっと見つきりづらいところに隠れられると思うんだけどなあ・・・

私は隠れながらそんな事を考えていると、『やっと見つけたぜえ』

シノ。てかお前、気配消すとかズルいぞ！！』キバのそんな声が聞こえた。シノも見つかつたんだ。でも、キバの言う事も最もだと思ふ。シノって全然気配ないからかくれんぼする時いつも最後なんだもん。でも、今日は私がチャンピオンね。フッフ、早く見つけてみなさい、キバ！！

『いの〜どこだあ〜』

『あいつ、どこ隠れたんだ？』

『う〜ん、いつもならずつと前に見つかつてるのにね。』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『シノ、お前も声出せって。』

フフフ、探してる探してる。面白いから、見つかるまで隠れててやるうっど。

そうやってる内に、時間が過ぎて行った。もう帰らなきゃいけない時間になったんだけど、まだ皆は私を見つけられないでいた。もう、早く見つけてよね。私、見たいテレビあるんだから。

『なあ、もういのの奴帰ったんじゃないか？』

はあ！？帰る訳ないじゃない。まだ、いるわよ！キバ、あんたの探し方が悪いのよー！

『それはないんじゃない？だって、これまで勝手にいのが帰った事なんてないよ？』



その通りよ、チヨウジ。私はナルトと一緒に帰りたんだからそんな事するわけないじゃない。

『そうだな。だが、あいつの事だ。俺達に散々探させておいて一人で先に帰ってしまうってのもなくはないぞ。あいつって、自己中だし。』

シカマルくあんた、言っていていい事と悪い事ってあるのよ！！てか、後で覚えてなさいよ~~~~~！！

『……………ならば、俺は帰らせてもらっつ。門限は守らなければならぬからな。』

私にだって門限あるわよっ！というか、女の子の門限はあんた達よ

り早いのよ!!その門限だってもう30分も過ぎてるんだから、早く見つけてよ!!

『うん、もうちょっと探さないか?いのも出るに知られなくなってると思うし。』

ナルト「あんただけよ。私の事を分かってる!私も出て行くことしたんだけど、どうせなら最後まで隠れてよっつてなっちゃったから」

そんなこんなで、ナルトがシノ達を説得してまた私を探す事になったみたいけど、時間が悪戯に過ぎるだけで皆私を見つけてくれない。そろそろ、本当にママに怒られるから出て行く。それで、キバに「何で見つけられないのよっ!」って怒鳴ってやるんだから!

そう思って、隠れていた所から抜け出そうと体を動かそうとしたら

・・・

『え？うん！・・・うん！！・・・動けない・・・！！』

え、嘘？何で？入る時は簡単に入ったのに、何で抜けないのよ！ちよっと洒落になってない！！

それから、私は体にいっぱい力を込めたけど、私の体はビクとも動かなかった。それに焦ってナルト達に助けを呼ぼうとして、声を上げたんだけど・・・

声がコンクリートの筒の中で反響するだけで、外の方には全然声が届いていないようだった。それにまた焦って、出来るだけ大きな声を出しても、空洞の中に響くだけで外には私の声は届かなかった。

そうやっていたら、ナルト達の会話が聞こえてきたから、チャンスだと思ってまた声を張り上げた。

『ナルトお!!皆あ!!何か体が抜けなくなったみたいで動けないの!外から引つ張つて!お願い!!』

『ん?今さっきいのの聲がしたような・・・』

『本当かナルト?俺の耳には聞こえなかったぞ?』

『キバの言う通り、俺も聞こえてねえな。チヨウジは?』

『僕も・・・お腹減つたなあ・・・』

『俺も聞いてないな。ナルト、お前の空耳だったのではないのか？』

いや、ナルトの言うとおり私ここにいるわよ！だから、早く見つけて引つ張ってよ！そんな私の願いも虚しく、ナルトのその言葉を信じないで、私が先に帰ったという事になり、皆は帰っちゃったみたい。

『私、ここにいるから！ねえ、ナルト！シカマル！チョウジ！キバ！シノ！………お願いだから助けてよお………』

そして、夜になっても誰も私の事を見つけてくれなかった。悲しくなってきた涙も出て来た。それでも、誰も私を見つけてくれない。……それから、更に2時間くらい経って、いい加減お腹も減ってきたらしく、さっきからお腹が鳴ってきた。皆がいる前で鳴ったら恥ずかしいそれも、今の状況では悲しくなるだけだった。それに体も冷えて来た。このまま、誰にも見つからないで死ぬのかな……  
・そんな事を考えていたら、

『やっと、見つけた。こんなところに隠れてたのかぁ……。探したんだぞ?』

『え……。』

そんな声の上から降ってきた。それは、私が気になる人で、いつも隣にいたって思う人の声。それに、夜になっても分かるくらい綺麗な金髪。

『ナルト?』

『おう。キバと鬼チエンジして探してたんだけどよ、お前ここはズルいってばよ。俺達全く逆の方ばかり探してたから』ナルトお・  
・ええ〜ん!〜!』おいおい、泣くなよ。てか、もしかして抜けなくなっただのか?』

ナルトの顔を見て安心したのか、さっきまでグスグスだったのが一  
気に涙が出ちゃった。

コクコク・ナルトの声に泣きながら頷くと、『しょうがねえなあ  
ゝいの姫様は。ほら、俺の手掴めって。』上から伸びてきたナルト  
の手を一回見てそれから思いっきり握った。

そうしたら、今まで自分じゃ身動き出来なかったのにスルって簡単  
に外に出ることが出来た。それにまた涙が出て来て、気持ちが変に  
なっていた事もあってナルトに抱きついたんだ。

そうしていると、遅くなっても帰ってこない私を心配したパパがや  
って来て、ナルトと私を見つけると走って来た。

『いの……!』

『ババあ・・・』

パパの声を聞いた瞬間、私はナルトから離れてパパの所に向かって飛び付いた。その時は、パパの方がナルトより安心したんだと思う。今じゃ絶対違うけど。

まあその後は、私もナルトもパパに怒られて、一緒にタンコブ作って笑ったんだっけ・・・あ、勿論あの4人も怒られたわよ。何でも、『女の子一人置いたまま帰って来たのか!』って事らしい。本当にそうよ。ナルトだけは、最後まで私の事を探してくれてたんだから、あんたたちも怒られて当然よ!

そして、その日家に帰ってからお風呂に入っている時・・・

『はあ・・・帰って来られた・・・お風呂、気持ちいいなあ・・・』



湯船に浸かって泣き顔を洗う。そうして綺麗になった頬をパチパチ手で叩いてからお風呂の縁に手を乗せて更にその上に顎を乗せる。

『ナルトがいて良かったあ。ナルトが探してくれてなかったら、まだあの筒の中にいたかもしれないし……でも、あの時のナルト……』

カツコよかったなあ……そう思って、初めて私はナルトの事が好きだって気付いた。

『そっか……私ナルトの事が好きなんだ……そっか……そっか』

何だか幸せな気分でその日のお風呂は終わった。

「そうだったわね。あの時に好きだっと思ったんだ。まあ、目惚れって奴だったのかもしれないけど。」

抱いていた枕をベッドに置いて、窓の方に体を向ける。

明日はクリスマス。恋人達が過ごす幸せな日。夜空は雲一つない満天の星空だった。



Xmas前日 ヒナタ&いの編(後書き)

という事で、前日編でした。明日か明後日にXmas当日編を更新  
しますので、よろしくお願いします。

Xmas  
当日

木ノ葉の里は空から舞い落ちる雪で薄く化粧をし、店先の光り輝くネオンが里を美しく照らす。道々には人が溢れ、カップルや家族が幸せそうに行き交っている。

また、その中には赤い服を着た人もいて、必死に客寄せをしている姿も目に付く。

今日この日は聖なる夜、12月24日、クリスマス・イヴ。

そして、俺達がいるここ奈良家も例外ではなく、この後直ぐに行われるクリスマスパーティーを待ちきれない様子で、各々近くににいる者と話している。そんな中、一人の人物が声を上げた。

「うう……もう我慢できないっ！この七面鳥は僕のd「駄目だつて言ってるだろが、この馬鹿。」シカマル！！この影を取って！七面鳥が……七面鳥が僕を待ってるんだあああ！！！」

秋道チヨウジ。「食」に対する面ではここに居る奴らの中で一番五月蠅い奴。そいつの心からの懇願が奈良家に響き渡る。それも仕方ない事ではあるんだけどな。チヨウジはこの日、昼食を抜いている。それだけじゃ理由にならないと思ってるそこのお前、チヨウジが「一食」抜くというのは、あり得ない事なんだぞ。一日に五食は食べるチヨウジが一食を抜く……その場にいた俺、シカマル、キバは勿論の事、あの表情を変えないシノでさえ吃驚して時間を止めたんだからな。ちなみに、俺達はお昼頃から準備をしている。

チヨウジ曰く、『この一食を我慢すれば豪華な夕飯がもつと美味しくなる!』らしい。こいつの『食』に対する気持ちというか、熱意というか、そんな諸々に脱帽したのは俺だけじゃなかったはず・・・

「ま、待ちなさいよ!もうちよつとでヒナタと白ちゃんが来るんだから!!!ていうか、あんた達も手伝いなさいよつ!!!!てか、あんたは五月蠅いのよつ!!!!」

「分かったつてばよ」 「めんどくせえ・・・」 「だりい」 「・・・」 「七面ゴフツ・・・」

目の前の御馳走のせいか野獣と化したチヨウジをシカマルが影縛りの術で止めていたが、騒いでいるチヨウジにキレたいのによって沈黙させられた。んで、いのに怒鳴られた俺、シカマル、キバ、シノは手伝いに向かう。まあ、ご飯物は出来たから後は飾り付けだけなんだろうけど・・・俺は御馳走から目を離して、まだ飾り付けが終わっていない壁に顔を向ける。俺思っただけどよ、シカマルの家って純和風の家だから、洋風の飾り付けが似合わねえんじゃねえか?

「なあ、これはこっちでいいのか？」

「ああ？知らねえよ。てか、これ持ってきた本人に聞けつての。つか、何で俺の家なんだよ……あゝめんどくせえ……」

「……いの、シカマルがそう言っているが、キバの持つそれはどこにやればいい？」

「えっと……それはこっちね。あ、ナルト、それを付ける時は緩く垂らすようにしてね。」

「了解。」



てかき、何でこの世界にこんな飾りがあるんだ？それに、この世界にクリスマスなんてあっていいのか？・・・毎年思ってる事だけど、このNARUTOの世界も大概ご都合主義だよな・・・

と、内心で文句を言いながらのに言われた通り、俺はキラキラ光るピンク色のそれを木造の壁に掛けていく。キバとシノは靴下やら雪の結晶の形をしたモノやらを張り付けているし、シカマルは気絶したチョウジを邪魔にならない所に運んでいたりする。

はぁ・・・俺ってば毎年恒例の父さんと母さん、九尾の三人と一匹でするパーティをやる予定だったんだけどなぁ・・・まぁ、こいつらとパーティ何てやった事なかったし今年くらい、いいかって感じのノリで参加してる訳だが・・・ヒナタと白は本当に来るのか？

ヒナタは日向関係で来れないだろうし、白は白で桃地がいるから来ないと思っただけどなぁ・・・まぁ、いのが来るって言っんなら待ってみるか。

ん？ああ、いきなり始まつてるから分からねえよな。俺がというか、俺達は何でシカマルの家でこんな事をしているかって言うと、それは数時間前に遡る……

数時間前……

クリスマスだからなのか分からないが、俺というか俺が所属する第七班は1週間前から休みを貰っている。火影のじいさん曰く、『クリスマスの時くらい任務は休みにするかのう。』らしい。

いやいや、忍者にそんなもん必要ねえだろ。アカデミーの時とは違うんだぞ？まあ、毎年恒例の家族でするクリスマスパーティーをする事が出来るから文句はないけど……と、いう事で俺はそのパーティーのための買い物をご商店街でしていたりする。

んで、買い物の中にシカマルとチヨウジの二人とばったり会った。  
この時の時間は確か10時だった筈・・・

「ん？ナルトじゃねえか。いのと一緒じゃねえのか？」

「？？何で俺がいのと一緒にいないといけないんだ？そりゃあ、いの  
に好意を寄せられてるのは分かってるけど、付き合ってる訳じゃね  
えんだし、普通はそんな考えないだろ。てか、俺らってまだ13  
だぞ〜」

「いや、俺はこの通り一人だ。それよかお前らは二人揃って何して  
んだよ。」

「僕達はケーキを買いに来たんだよ。今日はシカマルの家と僕の家  
でクリスマスパーティーをする事になったんだ。」

「めんどくせえが、チヨウジの言う通りだ。クリスマスなんて何が楽しいんだか・・・それに俺の家でする意味が分からねえ・・・」

シカマルが心底めんどいって感じで溜息を出す、チヨウジはムフフって笑って手に持つおそらくはケーキだろうそれに顔を近づけて匂いを嗅いでいる。

「まあ、そう言うなってシカマル。一年に一回の事なんだし、楽しんでらいいじゃねえか。」

「お前なあ・・・はあ・・・なら、お前も来いよ。どうせ、一人なんだろう？それなら、俺ん家来て一緒に騒いだらいい。」

お、初のクリスマスのお誘いがまさかの男、それもシカマルからだっただか。何となくいいのが誘って来んのかなあって思ってたんだが、ま、いのはいので女の子同士でパーティするのかもしれないな。

「それが良いよ。ナルト一人増えるくらいじゃ全然問題ないだろうし。」

チヨウジもそれに便乗して俺を誘って来る。ありがたいんだが、それにOKすると父さん、母さんとのパーティが出来なくなるからなあ……

「二人ともサンキューな。でも、悪い。俺ってばこの後用があつから、参加出来そうにねえわ。」

「そうか？まあ、参加出来そうなら俺ん家に来ればいい。チヨウジの親父さんが作った飯、美味えからよ。」

「うんうん、待ってるよ。」

こいつらの友情に改めて感動しそうになったが、それを表情に出す事はなく、「おう！そんな時は遠慮なく行かせて貰うってばよ。」そう言っつて、二人と別れた。

んで、その後家に帰ってみたら、父さんと母さんがさっきの会話の事をなぜか知っていて、

『行って来なさいってばね。』

『母さんの言う通りだ。行って来いナルト。お前は俺たちに遠慮してるんだろつが、友達とするパーティってのも良いものだぞ。』

「何で知ってるのか分かんねえけど、遠慮してる訳じゃねえよ。・・・でも、二人がそう言うなら行って来るってばよ。それに、家族でのパーティは明日やればいいしな。」

きつと、九尾が報せたんだろう。まあ、九尾も俺の事思っただけでくれたんだと思っし、父さん、母さんの厚意も無駄にしないためにも、シカマルの家に行こうかな。

と、いう事でシカマルの家に行ってみたら、そこにはいのもいた。「な、なななナルト！？どうしてここに・・・」と何時もは見せない狼狽ぶりを披露してくれた。まあ、それには用が済んだからこっちに来たとしか言えなくて、直ぐにシカマルの親父、シカクさんに挨拶に行った。

「おおよく来たな、ナルト。今日はチョウウザの野郎が腕によりを掛けて美味しいもん作るらしいから期待してろ。」

「はい、今日はお邪魔します。」

と、シカクさんに挨拶をし終わり、シカマルがいるところに向かったら、そこにはキバとシノの二人がいた。そんな二人も、チョウジに誘われてとか言ってた。何だかんだ言って、何時ものメンバーが揃いつつあるってのが面白くはあるな。序でに言つと、キバの家族、シノの家族もいたりする。勿論いのの家族も。

そんな事を考えていると、「シカマル、私ヒナタと白ちゃん、それから癩だけどあの人も呼んでくるけど、いい?」「あ?白は兎も角ヒナタは来ないんじゃないか?一応あいつ宗家だろ。それに、あの人が誰だよ。」そんな会話が聞こえてきた。

いのとシカマル、だよな。話的内容的に、いのがあの人を呼ぶって考えるのも当然っちゃ当然か。でも、ヒナタはシカマルが言うように難しいだろうし、白だって桃地がいるからなあ……来ないと思うぞ。それに、あの人ってのも気になる。

「それはそうだけど、でも、誘いもしないで勝手に決め付けるのって駄目だと思う。だから、行って来る。」そう言つて、いのがシカマルの家を飛び出して行ったのをチャクラの反応で分かった。てか、あの人については言つてかなかつたな……



そんな感じで、冒頭に戻る訳なんだが……いのが帰ってきたのはほんの30分前くらいで、俺達は準備をしながらいのが呼びに行つたヒナタ、白、そして『あの人』なる人物を待っている。

ピンポン……と、そんな事を考えていたら来たみたいだな。準備も丁度終わったし、何てタイミングが良いんだ……

「お、おおお邪魔します……」

「いんばんわ。今日はよろしくお願いしますね。」

「やつほあ〜お呼ばれたから来たよあ〜」

ヒナタ、白、そして、あの人〓テンテンの三人が揃って居間に入ってきた。あの人ってテンテンの事かよ……いのも素直に名前言ったらいいのに……

「よぉし、綺麗どころも来たようだし、そろそろ始めるとするかあ」

既に始めていた（酒を飲んでいる）シカクさんがそう言うやいなや、ヒナタは「あうあう／＼」と顔を真っ赤にしてしまっし、白は「ありがとうございます。」と最近覚えたらしい社交辞令の笑顔を浮かべ、テンテンは「アハハハ 私、綺麗って言われちゃったよ金髪君。」と俺にしな垂れ掛ってくる。

テンテンのそれに、はぁ……と溜息を出してから、それぞれコップを持っているのに気付いて、俺もジュースの入ったコップを持ち上げ、いのいちゃんの「家の娘には敵わないがな！乾杯！」という音頭で乾杯をしてパーティは始まった。

ああ、シカマルというのが「親父……」「パパの馬鹿!!」とそれぞれ言っていたのも追加しておく。

まあ、そんなこんなで始まったパーティは、開始早々シカクさんとのいちさんはそれぞれの奥さんに拉致されてどこかに行ってしまうし、解き放たれたチヨウジという名の豚が御馳走を掃除機の如く

吸い込んでいるし、キバはヒナタと話すきつかけを作るために酒を飲んだのか可笑しくなってるし、他にも e t c e t c e t c . . .

俺はシカマルとシノの三人で話しながら食べていたが、途中からテントンが俺の背中に負ぶさってくるわ、いのがそれに癩癩起こすわヒナタはあうあうしてるわで、何ともカオスな感じになっていたりした。

そんな中、白が一人で食べているのを見つけた俺は、シカマルとシノにこの場を任せて白のところに向かう事にした。

「どうした？一人で食べたりしてよ。もしかして、楽しんでなかったりするか？」

「ナルト君……いえ、ご飯は美味しいですし、皆さんも楽しい方達なので楽しんでますよ。」

笑顔でそう答えてくる白だが、俺にはこの笑みが嘘のように見えた。そんな白を見過ごせなくて、俺は強引に切り出す事にした。あ、俺と白は周りに聞こえないように、テーブルから少しだけ離れた所で二人で座っている。

「俺にはそうは見えないけどな。話してみるよ。俺ってばお前の大  
事な友達だろ？」

「……………ふう……………本当にナルト君には敵いません。  
僕のこの顔に騙されないのは再不斬さんとナルト君だけです。」

そりゃ、同じ釜の飯食った仲だしな。他の奴らより、お前の事を理解してやってる自信はあるぞ。そして、白の口から洩れるのは、クリスマスを楽しめない理由だった……

「僕はこのクリスマスという日が嫌いなんです。」そう言う白の顔は悲しいモノになっている。俺は、黙ってその話の続きを促した。

「……僕が水の国の生まれだと言うのは以前話しましたね。水の国の中でも特に寒いところが僕の生まれた所です。そこで僕は父と母と一緒に暮らしていたんです。貧しい生活をしていましたが、幸せでした。父と母と三人でいれるだけで……」

それは知っている。確か原作でそんな設定だったはずで、その話もどこかであったと思う。そして、語られるのは俺が知っている内容で、血継限界だという事を隠していた母親だが、白の作った氷の結晶のせいで父親にそれがばれてしまい、母親は父親に隠していた事を追及され、最後には殺されてしまう。白もその時に殺されそうになるが、血継限界の術のお陰で九死に一生を得る。そして、そんな時に桃地に拾われて、原作では桃地の道具として生活していく事になった。

ま、この世界の桃地は白の事を道具だとは思っていないから、怒りも湧かないんだけどな。

「長々と話しましたが、何が言いたいのかというと、父が僕と母を殺そうとしたのが、今日のクリスマスなんです。」

話を聞いている段階で、予想は出来ていたことだが……  
実際に白の口から聞くと重さも全然違う。

「だから、僕はこの日は好きになれませんし、楽しめないんです。  
……ナルト君？」

俺はそんな白の頭に手を乗せて、俺の方に引っ張って、白の頭が俺の肩に乗るようにした。

「俺にはお前の苦しみを本当の意味じゃ理解出来ないのかもしれないねえけどよ、一緒に悲しんでやる事は出来る。だから、無理に笑わなくていい……」

俺のその言葉で白は一度俺の顔を見てから、肩に顔を伏せて小さく、小さく泣きだした。俺は黙って、その小さい頭をポンポンと優しく撫で続けた。

十分くらいしてから白が泣き止むと、それを待っていたようにいの



とヒナタが白を連れてどこかに行った。俺はそれに苦笑を浮かべて、シカマルとシノが居る所に戻った。

「よ、白は大丈夫なのか？」

「うん・・・最初の頃よりは大丈夫だとは思う。まあ、この話はあとはなして事で・・・な。」

「了解した。」「分かったよ。」

「サンキューな二人とも。・・・というか、チヨウジは兎も角、キバの奴はどうしたんだ？」

キバの姿が見えないから聞いてみると、「そこにいるぞ。」とシカマルに指をさされた所に目を向けると、目をグルグルと回して倒れ

ているキバを発見した。というか、何であいつはパンツ一枚だけなんだ？俺が白の話を聞いている間に何があったんだ？？

「未成年の癖に酒を飲んだあいつは、テンテンをヒナタだと勘違いし、あるうことが襲うおうとした。だが、逆に返り討ちにあい、あなっただという事だ。」

ハハハ……キバ乙。んで、そのキバを返り討ちにしたテンテンは……どこいった？俺がテンテンの姿を探していると、いきなり部屋の電気が消えた。俺以下、シカマル、シノがそれに伴い警戒態勢を取ったが、他の奴らは我関せずで飲み食い続けているのに気付いた。

「おい、親父！」「父さん……」「あんたら……」

上から、シカマル、シノ、俺だったりする。俺達が呆れていると、襖を開いて4人くらいの人物が部屋に入ってきたのに気付いた。それに、「誰だ！」と言おうとしたシカマルと俺が振り向いた瞬間、

消えていた電気が付き、目に飛び込んできたモノは……

「メリークリスマスあゝス」「メリークリスマス!」「メリい……  
クリスマスノノ」「メリークリスマスです。」

サンタガールの格好をした、テンテン、いの、ヒナタ、白達4人の  
姿だった。

「どうかなどうかな、金髪君!似合ってるかな?」

そう言ってくるテンテンの着ているそれは、半袖、ミニスカのサン  
タ衣装で、手首には白いフワフワのモノを付け、お団子頭だった髪  
は降りし赤いリボンを付けている。

「な、なななナルト、どうかな?」

いのはいつもの勝気な感じではなく、ヒナタを彷彿させるくらいモジモジしている。服装とえば、テンテンのと同じみたく、髪もテンテン同様降ろしている。

「恥ずかしいよお／＼／＼」

ヒナタは目をきつく閉じたまま、両手を胸の所に持ってきていて、自分の姿を隠そうとしている。だが、その努力虚しく着ているそれは俺たちに丸見えであったりする。こちらは、上の二人とは違い長袖、少し長めのスカート、更にサンタ帽子を付けている。

「どうでしょうか、ナルト君。」

白はさっきまで泣いていたとは思えない笑みで、ヒナタと同じサン

夕衣装を着て俺の前でクルっと一回転した。

というか、何でこいつら俺にだけ意見を求めてくんだよ。・・・  
・隣のシカマルとシノが何とも言えない顔でこっち見てくるんだが  
・  
・

俺のそんな思いも虚しく、4人は更に俺に詰め寄って来る。

「金髪君？」 「ナルト？」 「な・・・ナルト君？」 「どうでしょうか  
ナルト君？」

はぁ・・・俺って、この先誰かに刺されたりするんじゃないかな  
ろくなぁ・・・そんな事を考えながら、シカマルの家  
でのクリスマスパーティーは過ぎて行った。





## Xmas 当日(後書き)

Xmasイベントでした。さて、どうでしたでしょうか？楽しんで頂けたでしょうか？

微妙な出来だと自分では思っていたりしますが、精一杯頑張りました。という事で、今年最後の更新にするつもりでいたりします。

来週と再来週は休んで、3週間目くらいからまた更新しようと考えていたりします。まあ、新年のあいさつだったり、気が向いたら更新するかもしれませんが、今は休むことを前提として考えています。

あ！忘れていましたが、このssのユニークとPVですが・・・

ユニークは『30万』を越え、PVは280万を越えました!!!

え？これって本当??とか、吃驚していますww

それもこれも、このssを読んでくださっている皆様のおかげです。ありがとうございました。

来年も頑張っていこうと思いますので、変わらぬご支援よろしくお



願います。

それでは、また来年お会いしましょう!!!

第6試合 ヒナタVSカブトだってばよっ！

『ヒユウガ・ヒナタ』VS『ヤクシ・カブト』

電光掲示板に表示された二人が塔の中心で対峙している。片方は余裕そうな表情で、片方は緊張で固まった表情で、今から戦う相手を見ていた。

「まさか、貴方がここまで残るとは思いませんでしたよ・・・ヒナ

夕様。」

「あ！そう言えば、あの人は日向宗家の……相手は木ノ葉の方だそうですが……この試合どうなると思います、ネジ？」

「ふん……精々日向の名に傷がつかないようにしてくれればそれでいい……」

「ネジ……まだ君は……」

ヒナタとカブトのその様子を上の階から見て話すのは、日向ネジとロック・リーの二人。リーは手摺から身を乗り出すようにして観戦しているが、ネジは腕を組んで見たくもないモノでも見るかのような顔をしている。

(出来そこないのお姫様がっ！)

ネジは胸中にてヒナタを見ながら、そう吐き捨てた。

「では、試合を始めて下さい!!」

審判の人からそう言われて、私は直ぐに後ろに下がって白眼を発動させた。白眼から見える相手のカブトさんは、ナルト君が言うほど

怖い人じゃないと思うんだけど……

「あはは……そんなに警戒しなくても大丈夫だよ。日向のお姫様に怪我でもさせたら、僕が日向の当主さんに殺されちゃうからね。」

「……お父様は関係ないです……」

「……またお父様が私の前に現れるんだ……」

「うん……関係ないって言われても、僕が困っちゃうからね。だから、この試合棄権してくれませんか？手加減して戦うのって、僕出来ないんですよね。」

「え……」

棄・・権・・？何で？どうして？カプトさんのその言葉に頭の中が混乱してしまう。

「ですから、棄権してくださいと言ってるんですよ。僕が棄権してもいいんですけど、そろそろ中忍になれって担当の人が五月蠅いので。」

カプトさんの口から出てくる言葉に、私はどうしたらいいかわからなくなってしまう。

「それから・・・失礼ですけど、僕があなたに負ける要素が何一つないんですよ。この塔にいる下忍24名中、確実にあなたが一番弱い。僕は親切心で言っているんですよ？今なら怪我もせず、綺麗な顔のまま帰れるんですから。」

「わ・・・たしは・・・」

(ヒナタ・・・)

紅は心の中で自分の教え子の名前を呟いた。カブトの言葉に怯んでいるのがここからでも分かるほど、ヒナタの体は震えている。

「ありゃ、駄目だな。すっかり相手の空気に吞まれてやがる。」

「・・・・・・・・」

隣にいるアスマの言葉に答えることなく、ただ黙って自分の教え子を見続ける紅。そして、紅はヒナタが自分の担当になることになったことを言い、日向宗家に行った時の事を思い出す。

『ハナビ・・・今日の修行はこれで終わりだ・・・』

『ハアハア・・・はい・・・父上・・・』

私の目に映っているモノは、木刀を手に持ったヒアシ様が、ヒナタの妹であるハナビに修行をつけている光景。ハナビは荒い呼吸を繰り返し、道場の床に座り込んでいる。



『ヒナタはこれから私の下につきます……ですが、本当によろしいのですか？ヒナタは日向宗家の跡目の筈……下忍としての仕事は常に死がついて回ります。』

『好きにせい……アレが自分から言った事だ……』

木ノ葉で最も優秀な名門『日向一族』。その長女として生まれたヒナタは大事な後継者であり、可愛い自分の子どもである。下忍の任務で万が一、死ぬ事になったら大変な事になる。だから、代々一族の跡目には現当主が自ら修行を課すのだが……

『「忍者アカデミーに入学したい」……最初で最後のワガママだそうだ。』

話す内容は酷いモノ。しかし、ヒアシ様の顔には笑みが浮かんでい

『あの従順で気の弱いヒナタが、この私の眼を真正面から見据えて言ったのだ。・・・無下に断るわけには行くまい。』

『しかし・・・』

それでも、ヒナタが宗家の姫であることは疑いようもない事実。本当にそれでいいのか？私は再度ヒアシ様に問いかけようとするが・・・

『ヒナタは変わろうとしておる・・・親として静かに見守ってやりたい・・・』

ヒアシ様は持っていた木刀を壁に掛けて、ここに来てはじめて私を真正面から見てきた。

『紅よ……娘を頼む……』

『……はい。』

ヒアシ様の真剣な眼差しに、私はただ頷くしかなかった。そして、ヒアシ様に一礼して道場を出たところで私は足を止めた。

882

『……』

道場の戸から二歩いくか、いかないかの所に一人の少女が立っていたからだ。

『……………ヒナタ……………』

妹のハナビと同じ修行着を身に纏ったヒナタがそこにいた。先のヒアシ様と私の話を全て聞いていたようで、ヒナタの双眸には今までにない強い意志が宿っているように感じた。

「あなたがどうしても戦うと言っのなら、僕は構わないですけど……その時は怪我をしても知りませんよ。」

「お父様とか怪我とか・・・そんなの関係ない！私は、自分の意思でここにいるんです！！」

か細い声を張り上げてヒナタは自分の意思をカプトに伝える。戦える。自分は戦えると己を鼓舞しているのかもしれない。

「ああ〜ムカつくッ！！ヒナタ！そんな奴ブツ飛ばしちゃいなさいッ！！！！」

「確かに、あの何もかも全部決め付けてる感じ、気にいらないかも。」

カプトの言い分に、俺の隣で観戦しているのは声を荒げ、テンテンはいつも笑みを浮かべている顔に嫌悪を浮かべている。

ムカつくはムカつくが、俺はヒナタに棄権してもらいたかった。カブトの奴がただ試合をするとは思えないし、何よりヒナタの事が心配だからだ。原作でもネジとの試合で、一歩間違えれば死んでしまうような怪我を負ったんだ。ヒナタの気持ちを考えれば応援してやりたい。だが、相手はあのカブトだ。

「はぁ……強情なお姫様ですね。」

メガネの位置を直してやれやれと肩を落とすカブト。手を腰のポーチに突っ込み、メスを取り出してそれを弄びはじめる。

「僕は棄権するように勧めましたからね？ 審判さんも、皆さんも聞きましたよね？」

カブトはメスを左手でペン回しの要領で弄りながら、ハヤテとそれ

から『俺』を見て笑みを浮かべてきやがった。

ビシッ……

手摺に置いていた手が知らず知らず、コンクリのそれを掴んでいた  
ように、軋みを上げた。

ヒナタはカブトのその様子に少しでも身体を震わせるが、左手をや  
や前方、右手を少し下に引いて構えた。

「やはり同じ『日向流』……ネジとそっくりだな……」

「『日向流』？」





ナルト君!!

私が今一番聞きかかった声が、上から聞こえた。

大丈夫・・・ナルト君はちゃんと『私を』見てくれる。だから・・・  
・・大丈夫!

「はぁぁぁぁぁ!!!!」

純白の双眸に強き意志を携えて、一気に前に跳び出して、私はカブトさんに向けて掌底を突き出した。

「おっと・・・」

そんな声を出して、軽々私の掌底を回避するカブトさん。顔には変わらずに笑みを浮かべて・・・

私はそれが悔しくて、歯を食い縛って連続して掌底を突き出す。一つ一つに力を、チャクラを込めて、急所を的確に・・・でも、その全てを体をずらすことで回避していくカブトさん。

受け止めることもなく、ただただ体を右に左にずらすだけで・・・



(へえ〜前情報よりやるようだね・・・)

カプトさんの顔に今までのような笑みじゃないものが浮かんだのに  
気付いた私はここで勝負に出た。メスを持っていた右手が上に弾か  
れたせいでガラ空きとなった、水月。そこに、溜めた右手の掌打を  
打ち込む！！

私の放ったその一撃は、狙い通りカプトさんの水月に当たった。カ  
プトさんの口元からは一筋の鮮血が流れ落ちる。腹部を押さえなが  
らカプトさんは後方に跳んで、私と距離を取った。少し前までの私  
には絶対に相手に打てなかった一撃。

「入ったな・・・」

「・・・確かにスピードは速かったけど、威力があるように見えなかったわ。」

カカシの呟きにサクラが反応した。デコ介の言う通り、威力があるとは思えない程、当たりが弱い一撃に観戦している奴らには見えたとと思う。だが、あの一撃はただの一撃じゃない・・・

「いや、威力はある。それも、ただの掌底のそれより。それが日向一族が木ノ葉名門と呼ばれる所以だ。」

「えー！？どづいづこと？」

「日向には代々伝わる特異体術がある。」

今度のサクラの疑問に答えたのはガイ先生。ガイ先生は腕を組んだ状態で、下で戦っている二人を見たまま言葉を続ける。

「私やリーが得意とする体術・・・敵に骨折や外傷と言った、つまり外面的損傷を与える攻撃主体の戦い方を『剛拳』と呼ぶのに対し、日向は敵の体内のチャクラが流れる『経絡系』にダメージを与え、内蔵・・・つまり内面を壊す『柔拳』を用いる一族だ。」

「見た目の派手さはないけど・・・後でジワジワ効いて来るってわけね・・・」

「ま、内臓だけは鍛えようがないからな。どんな頑丈な奴でも喰らったら致命傷って事だ。」

「でも、『経絡系』を攻撃だなんて……何者なの日向一族って……」

カカシにガイ先生、デコ介にんな事教えてないで、黙って観戦してるって。だけど、今の一撃は絶対に効いた筈だ。この場で手札を見せたくないカブトがヒナタを甘く見ていたお陰だが……

「でも、何でそんな事ができるの？だって『経絡系』って身体の中にあるんですよ。どうやって攻撃すんのよ？」

「いや、ヒナタのあの目……『白眼』にはそれが見えてる。そして柔拳の攻撃は普通の攻撃と少し違う。自分のチャクラを放出して相手の体内にねじ込み、敵の『経絡系』に直接ダメージを与える。」

下ではカブトが口から出た血を拭っている。

そのまま、カブトが負けてくれたらいいんだが……あの様  
子からその可能性はない、だろうな……

「正直言って少々驚きましたよ。まさか、お姫様がここまでやると  
はね。」

「……………」

私のあの一撃を喰らったのにカブトさんは笑みを崩していない。そ  
れが不気味で、嫌な汗が私の背中を流れるのに気付く。



「どうやって勝とうか考えてたんですけど、お姫様がここまでやるんですから、僕も少しだけ遊んでもいいですよね？」

そう言って笑うカブトさんは、手を前で交差して構えるとそこからメスが8本飛び出してくる。

「!?!」

その芸当にビクッと固まってしまった私に、カブトさんは8本全て投擲してきた。『白眼』を発動しているお陰で6本は避ける事が出来たが、2本を左腕と右腿に喰らってしまう。

「う……」

それに怯んでしまい、動きが止まってしまふ。そして、その時の目を閉じた一瞬の間に、カブトさんの姿を見失ってしまった。

どこに?・・・キョロキョロと周りを見渡してしまふ。そして、私の白眼はまだ後ろまで見ることが出来ないため、カブトさんのその一撃を防ぐことは出来なかった。

「後ろだぁヒナタ!!」

ナルト君のその声で、後ろを振り向く。

「残念。ちよつと遅かったですね。」

「え……」

カブトさんのその言葉を聞いたのと、キラッとライトに反射したメ  
スが私の体を斜めに切り裂いたのに気付いたのは、同時だった……

「ヒナタあああああああ!!」

「う……あ……ああ……」

「これは失敗してしまいましたね。一撃で倒すつもりが、あそこの  
彼のせいで、浅く入ってしまいました。」

膝を折って体に走った切り傷に手を添えるけど、血が止まってくれない。痛い・・・痛いよ・・・

「まあ、僕がさっき受けた一撃のお返し、とってくれれば幸いです。」

「おいおい、ありゃヤバいぞ。」

「ナルトっ！！ヒナタが・・・ヒナタが死んじゃうっ！」

シカマルが焦ったような声で、いのが俺の肩を掴んでくる。反対側のテンテンは目を伏せてしまっている。

「……何だよカカシ先生……」

俺が飛び出そうとしたのが分かったのか、カカシの野郎がいのが掴んでいない方の俺の肩を掴んできた。

「まあ、待て。殺すような事は相手もしないだろう。それに、危なくなったら俺たち上忍が助ける。だから、お前は動くな。さっき勝手に動いたのも、本来なら許されないんだからな。」

「そんな事知ったこっちゃねえんだよ先生。邪魔するな……」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ナルト、担当上忍に向かつてその言葉遣いはないんじゃないか？それから・・・・・・・・俺を怒らすな。」

俺は力カシと睨み合う。

「・・・・・・・・だが、カブトとか言う奴なぜ動けるんだ？日向流体術の一撃を受けた筈だが・・・・・・・・」

「上の方たちが何やら五月蠅いようだね。おそろく僕がなぜ動けて

いるか、という事ですか。」

「あう……うう……」

余りの痛みで身体が動かない。カプトさんが何か言ってるみたいだけど、それを聞く余裕は今の私にはない。

「簡単な事です。お姫様が攻撃の瞬間に手を抜いたんですよ。争いが嫌いなのか、変な優しさなのか分かりませんが、そんな態度で臨んでいる時点で僕に勝つ事は出来ませんね。というか、イライラしますよ。」

「ぐっ……」

カプトさんが何か言ったか分からないでいると、急に身体を衝撃が襲った。

「全く・・・試合中ですよ？痛がってばかりじゃ駄目じゃないですか。だから、言ったんです。棄権して下さいと。」

身体を襲った衝撃で倒れてしまった私は、顔をカブトさんがいる方向に向ける。既に私の目は霞んでしか見ることが出来ない。

「はぁ・・・本当にイライラしますね。・・・いつその」と殺しましょうか？」

「!?!」

カブトさんのその言葉でビクッと身体を震わせてしまう。殺されるの？まだ、何も・・・何も出来てないのに・・・



「……カカシ、その手を離せ……じゃなかったら、俺はあんたをブツ飛ばしてでも行くからな。」

「だから、待てと……ぐっ！」

カカシのその言葉を待つことなく、俺は左足を後ろに振り抜きカカシの手を肩から外して、階下のヒナタとカブトの所に瞬身の術で移動した。

「・・・・・・・・ナルト君？」

「よっ！悪かったなヒナタ。中々カカシ先生が行かせてくれなくてよ。でも、もう大丈夫だ。お前は頑張ったよ。」

ふわっと私の身体を包んだ優しい温もりは、やっぱりナルト君だった。

「そんな怖い目で睨まないで下さいよ。本気で殺すつもりなわけないじゃないですか。」

「・・・・・・・・・・・・・糞野郎が・・・・・・・・」

ヒナタを庇ってカブトの振りおろされたメスを左手で掴んで止めた俺は、ヒナタに笑ってやってから目の前の糞野郎に殺気を込めた目で睨んだ。

「それに、そのお姫様が棄権しなかったのですから、こうなっても文句は言えない筈ですよ？」

「抜け抜けと……今度は俺が相手になるぜ？四肢？いだから森の中に放置してやる……」

メスを握る手に更に力を込めて、刃のところを砕いてやる。

「おっと……穏やかじゃないですねえ。」

メガネの奥の目は獲物を取られた者の目をしていた。だが、こっちはもっとキレてんだ。覚悟しやがれよ！！

「……試合はヒナタの負けでいい。ただ、お前はここで俺が潰す。」

「そこまでにして下さい。これ以上やれば、お二人を失格にします。」

ハヤテが俺とカブトの前に出張ってくるが、既に俺と奴は戦闘態勢に入っている。

「ハヤテの言う通りだ、ナルト。これ以上は駄目だ。」

「そつだぞ。今はヒナタを医療班に見せる方が先決だ。」

そこに、ガイ先生とアスマの二人もやって来て俺とカブトを止める。

俺が3人を無視してカブトを睨んでいたその時……

「ガハツ……カハツ……」

俺の腕の中にいるヒナタが急に激しく血を吐き出し始めた。

胸から腰まで続く切り傷と相まって、血が流れ過ぎているのに今更ながら気付いた。

「ヒナタッ!!」

ヒナタの担当上忍の紅先生が駆け寄って来て俺からヒナタを奪うと、ヒナタの上着を破り、傷の具合を確かめた。次の瞬間、紅先生の顔色が険しくなったのに気付く。

(血が止まらない・・・これは・・・毒!?)

紅先生はキツとカブトを睨み付ける。

「どうかしましたか？あ、そうそう。僕のメスにはある毒が塗ってありまして、その毒は血の流れを早くするモノなんですが……早くしないと本当に死んじゃいますよ？お姫様が」

人を馬鹿にしたような笑みを浮かべるカブトに、俺は瞬身の術で移動すると同時にカブトの頭に蹴りを叩きこんだ。

あんなもんじゃ怒りは収まらないが、今はあの一撃で勘弁してやる。次はねえぞ糞メガネ！！！！

「医療班、何してる！早くしろッ！！」

紅さんの言葉から、医療班が来ない事に気付いた俺は上着を脱いでヒナタに被せる。

「絶対に助けてやる。だから、死ぬんじゃないぞ、ヒナタ。」

そして、ヒナタを抱き抱えて医務室に向かって駆けだした。

ナルトがヒナタを抱いて走り去った試合場では、ガイ、アスマ、紅



の3人の上忍と特別上忍のハヤテは神妙な顔で、ナルトが走り去った方向に顔を向けていた。

「ああ・・・痛い痛い。あ、審判さん。試合は僕の勝ちですよね？」

そこに罅割れたメガネを掛けたカブトが、頭に手をやりながら歩いてきた。

「・・・・・・・・・・ゴホゴホ・・・・・・・・勝者、薬師カブト。」

「ありがとうございます。いやあ、楽な相手で良かった良かった。」

そう言って、笑みを浮かべるカブトは紅に頭を少しだけ下げて、階段を上がって行った。

「……」

「抑えろ、紅。今は試験中だ。」

「……分かってるわよ。」

アスマの言葉がなかったら、紅はカブトに幻術を掛けていた。それくらい、紅もまたキレていた。

階段を上がって、大蛇丸のところに来たカブトは、

（すみません、少し遊んじゃいました。）

（フフフ……いいわ。私も少しだけスツとしたからね。）

（それは、良かったです。）

そんな会話をしてから、カブトは大蛇丸の所から移動した。表上、今のカブトは木ノ葉の忍びで、大蛇丸は音の里の担当上忍として潜り込んでいるからである。

「ヒナタ・・・ナルト・・・」

「大丈夫だったの。ナルトが付いてんだ、ヒナタは絶対助かる。」

シカマルがいのの肩に手を置いて慰めるが、シカマルもさっきの試合内容に驚きを隠せていなかった。

そして、ナルトがこの場にはいない中で、次の予選の組み合わせが発表される。

その組み合わせとは……

## 次回

「ナルト君……大丈夫。私は大丈夫だから……」

「ヒナタ……」

医務室の前で、ヒナタにそう言われた事を思い出す。

何で、もう少し早く助けに入ってやらなかったのか、自分を攻めまくる。

そんな時、廊下で『アイツ』とばったり遭遇した。

「こんなところで、何してんだよ……」

「・・・・・・・・」

それでは、また次回。。。。

第6試合 ヒナタVSカフトだってばよっ！（後書き）

28話でした。

お久しぶりです。うたわれな燕です。皆さん元気してましたでしょうか？私は、卒論で毎日が地獄でしたが……

と、言いますか、昨年の12月24日から約1ヶ月の休みとは……  
・・自分が不甲斐ないです。待ちくたびれて、お気に入り消してしまった方もいるのかもしれませんが、これからは出来るだけ頑張っ  
て更新していこうと思っています。

てか、1ヶ月も書いてないと、書けなくなるもんですね。書いては消して、書いては消しての繰り返しで、大変な話になってしまいました。1ヶ月も休んでおいてこの出来に納得してくれるかはわかりませんが、一応上げておきます。

それでは、皆さん。今度は次回お会いしましょう！！！！

## 第7試合

我愛羅VSザクだつてばよっ！

うずまきナルト……あいつが、いきなり現れて仲間を助けるのはさっきので2回目だ。

私の目には、あいつが何時助けに入ったのか見えなかったし、私達の先生のバキも「あいつは本当に下忍なのか？」と呟いていた。バキがそう言うのだから、私の目がおかしくなつたわけじゃないのは  
確実だ。



そんな時、我愛羅が邪悪な笑みを浮かべて、何やら呟いているのに  
気付いた。

「もう・・・良い・・・」

「我愛羅？」

私のその言葉を無視して、うずまきナルトが走って行った方を凝視  
している。

「『うちは』なんて・・・もうどうでも良い。『計画』なんて知っ  
た事か・・・」

我愛羅の短めの茶髪が、風もないのに揺れている。そして、我愛羅  
が背負っている瓢箪からも『あの』音が鳴りだしているのにも気付  
く。

「ッ！！待てッ我愛羅！まだ・・・」

我愛羅のその様子に気付いた私は、我愛羅の肩を掴んで止めようとするが・・・

「邪魔をするな、テマリ・・・殺すぞ・・・」

ッ！！・・・肩を掴もうとした私の手は、我愛羅の肩に触れるその直前にピタッとその動きを止めた。久々に感じる我愛羅の本気の殺気。近くにいるバキとカンクロウも私同様に、動きを止めている。

「血が・・・血が・・・欲しい・・・」

我愛羅の奴、まさかここで『あいつ』を出すつもりじゃ・・・そんな考えが私の脳裏に過ぎる。

「ま、待てよ。テマリの言う通り、お前の出番はまだ・・・ッ！！」

「・・・邪魔をするのか？」

私の代わりに我愛羅を止めようとするカンクロウだが、我愛羅は私に向けていた殺気をカンクロウに向ける事で、それ以上を言わせない。

カンクロウは、その殺気を受けて首が千切れんばかりに横に振っている。

「・・・それで良い。殺されたくなければジツとしてる・・・屑共が・・・」

くっ・・・我愛羅のその言葉に私達姉弟は顔を顰めてしまう。我愛羅にそう思われてしまうのは、仕方ない事だと分かっている・・・だが、直にそう言われると胸が締め付けられるような気になってしまう。私がそう思っていると、印を組んだ我愛羅は砂をその身体に纏ってその場から姿を消し、階下のさつきまでうずまきナルトが立っていた場所に移動した。

「我愛羅君……まだ次の組み合わせは決まっていますよ？」

電光掲示板にはまだ次の試合の組み合わせは表示されていない。それにも関わらず、腕を組んで司会兼審判の木ノ葉の忍びに殺気を込めた視線を向ける我愛羅。

「そんなもの俺には関係ない……俺以外の名前を出したら、お前を殺すぞ……」

「………仕方ありませんね……ゴホゴホ……」

咳をしながらそいつは火影の方を見て確認を取ったらしく、再び我愛羅を見てから電光掲示板に目を向けた。

「あいつ………『計画』潰したらどうする心算なんだよ。」

横にいるカンクロウの言葉を聞きながら、私は階下にいる我愛羅を

見る。

「…………我愛羅…………」

そして、我愛羅の名だけが表示されていた電光掲示板に、表示されては消えていた11人の下忍の名前が漸く止まり、一人の名が表示された。

『ガアラ』VS『ザク・アブミ』

12 試合あった三次試験予選も漸く半分を消化し、残った下忍は1  
2人。その中には、尾獣をその身に宿した人柱力の『ナルト』と『  
我愛羅』の二人が含まれている。

そして、人柱力の一方の『我愛羅』が、今戦おうとしている。対峙  
するのは音の最後の下忍、ザク・アブミ。

原作では、呪印のせいで暴走したサスケによって両腕を折られたザ  
クだが、今のザクはそんな事はなく五体満足で試合に臨んでいる。

「砂の野郎と戦うのは音の最後の一人か……シノと戦った女の方は鈴を付けた千本を使い、そしてチヨウジと戦った包帯野郎は音波使い？かは分からんが……さて、あいつはどんな攻撃をするのかね……」

いのちゃんの隣で、金髪君とヒナタちゃんが出ていった方に顔を向けていた私の耳に、視線を階下の二人に向けながら呟くシカマル君の声が聞こえた。

「どんな奴が相手でも、あの砂の野郎には絶対勝てねえと思うぜ。」

シカマル君の呟きに反応したのは、その近くにいたキバ君という男の子。この子は、ヒナタちゃんの事が好きだと思う。ううん、絶対そうだね。あの子のヒナタちゃんに向けていた顔ってデレってしてたし……

「……キバの言う通りだ。俺もあいつにだけは勝てる気がしない……」

シノ君って子がキバ君の言葉を補うように、言葉が続ける。この子も、変な子だと思う。だって、無口だと思ったら饒舌に話すし、口元隠してるし、サングラスしてるし……。でも、まあウチのリーよりは、ましなんだろうね。はあ……。もう一年遅く生まれていたら金髪君達と同じ学年だったのに……

「……キバだけじゃなくシノまで言うなら、あの瓢箪はとんでもねえ野郎なのかもな……」

「……嫌な匂いがするよ……あの瓢箪……」

シカマル君は、二人の話を聞いて砂の男の子に注意を向けたみたいだ。ポテチを食べ続けていたデブ……。チヨウジ君もそう呟いたというか、さつきデ……。って頭の中で思っただけで、チヨウジ君に睨まれたんだけど……

「そんな事より、今はヒナタの事よ！あんだ達、ヒナタの事心配じゃないわけ！？」



男の子4人が砂の男の子と音の下忍の試合について話をしていると、隣のいのちゃんも4人に怒鳴り声を上げた。ていうか、いのちゃん私も吃驚したんだけど……

「そりゃ心配は心配だけどよ……」

「だったら!!」

シカマル君のその言葉に益々怒っていくいのちゃん。でも、いのちゃん。ヒナタちゃんには金髪君が付いてるんだよ？

「いの、お前がヒナタの事を心配なように俺達も同じ位心配をしている。だが……」

「ああ……ヒナタにはナルトが付いてるからな。悔しいが、あいつが付いてるんならヒナタは大丈夫だ。」

「キバ……」

いのちゃんは（ヒナタちゃん以外の全員が）キバ君がヒナタちゃんを好きだと知っている。そのキバ君が、恋敵の金髪君がいるから大丈夫と言う。いのちゃんが、声を小さくしてしまうのも仕方のない事だよな。

「バリバリ……始まるみたいだよ……」

そして、チヨウジ君が言うように予選第7試合が始まった。金髪君が戻ってきた時のために、この試合の内容でもちゃんと見てよつと。

「それでは、予選第7試合・・・始めて下さい。」

試合開始の合図と共に、音の下忍ザクが左手を我愛羅に向ける。対して我愛羅は両腕を胸の前で組んだまま。

「俺は木ノ葉の金髪に用があるんでな。さっさと勝たせて貰うぜ！」

！」

斬空波！！

ザクの左手からは全てを吹き飛ばさんとする衝撃波が放たれた。

しかし、放たれた衝撃波が直撃すると思った瞬間、我愛羅の背負っている瓢箪から砂が飛び出し、それを防いだ。

砂煙舞う試合場。ザクは自分の攻撃で我愛羅が吹き飛ばされたと確信し、笑みを顔に浮かべるが……砂煙が晴れるとそこには砂を前面に展開して防いだと思われる我愛羅が対峙していた時同様の姿勢で、立っているのがザクには見えた。

（なっ！？）

衝撃波の痕を残す砂の壁。それが、我愛羅の前に展開されている。自分の攻撃が防がれた。その事に、信じられない気持ちでいっぱい

のザクに我愛羅の声が掛かる。

「……………それだけか？」

我愛羅は腕を組んだまま、つまらないとでも言っような目をザクに向ける。

「ッ！！今のは挨拶代りだ！」

呆けていたザクは、その我愛羅の態度に怒りをあらわにし、右手も我愛羅に向ける。

斬空波！！！！

性懲りもなく斬空波を我愛羅に放つが、それは砂の壁を吹き飛ばす事はなかった。

「ば、馬鹿な……俺の攻撃が……」

「くだらん……お前はもう死ね。」

自分の攻撃が効かなかった事に信じられないでいるザクに、我愛羅は砂を向かわせる。

「ねえ、カカシ先生。あの砂……」

サクラは驚きの余り、眼を見開いて展開されている砂の壁を見ていた。

「……俺も長いこと忍をやってるが、あんな術は見た事ない。土遁だと言う事が辛うじて分かる程度だ。」

「木ノ葉一の業師と称されるお前でも知らないとなると……あの子、血継限界か？」

本来『土遁』とは土や岩を利用した、術の殆んどが大規模な範囲にダメージを与えるモノ。決して、今我愛羅が使っているような自分自身を守ると言った小回りが効く代物ではない。

「砂の我愛羅……」

サスケは写輪眼を発動させて、階下の戦いを凝視している。自分よりも強い者、その存在がまだいる事に対する喜びを感じながら……

その頃のナルト……

手術中と書かれた赤いランプ。それが点灯したドアの前に俺はいた。

『ナルト君……大丈夫。私は大丈夫だから……』



数分前、このドアの向こうに連れていかれたヒナタが俺に言った言葉。その言葉を言った時のヒナタの顔は、いつも白いヒナタの顔よりも青白く、とても大丈夫そうには見えなかった。

「もっと・・・もっと早く俺が助けに入っていれば、こんな事には・・・糞つたれ！！！」

ドカツ！！！！

右の壁に拳を叩き込む。遣る瀬無い感情を乗せた拳は容易く壁を凹ませる。こんな事をしてヒナタの怪我が治るわけではない。それは分かっているが、やらないではいられなかった。

そんな状況の俺の耳に、廊下を歩いて来る者の足音が聞こえてきた。

「何の用だよ・・・」

チャクラの感じから、俺は近づいてくるそいつが誰なのか分かっている。

「フフフ・・・そう嫌な顔をしないで欲しいわ。私はただ、さっきの試合のお詫びを入れに来ただけなのだから。」

嫌な笑い、そして気持ちの悪い声。糞ム力つく変態野郎が暗がりから姿を見せた。

「お詫びだと？その顔は詫びを入れに来た顔じゃねえぞ、変態。」

「あら？それはごめんなさいねえ・・・これでも、本当に悪いと思っっているのだから。フフフ・・・」

糞ったれ！何が悪いと思っっている、だ。そんな事これっぽっちも感じてないだろうによ！！

「……俺は今イライラしてんだ。それ以上俺の堪に触るような事言ったら……その口利けないようにしてやる。」

俺のその言葉にまた、あの糞ムカつく笑いで応える大蛇丸。瞬時に螺旋丸を作り出し、直ぐにでも奴の顔面に叩き込めるように構えた。

「フフフ……本当にいいわね、君。その人を殺すのに何の躊躇いを見せない目……食べちゃいたいわねえ」

原作のナルトが仙人モードになり、尚且つ風遁・螺旋丸でないと投擲出来なかったそれを、只の螺旋丸のまま俺は大蛇丸の顔面に狙いを付けて放り投げた。

ガガガガガッツ！！と、俺が投げた螺旋丸は大蛇丸が寄り掛かっていた壁を音を立てて抉っていく。大蛇丸は反対側の壁に背を預けて、俺に笑みを向けてくる。本当にムカつく糞野郎だな、あいつ！！

「螺旋丸を投げるなんて、四代目や自来也でも出来ないわよ？……これ、以上は駄目ね。本当に殺されちゃいそうだし」

そう言つて、浴衣のような和服の袖から小瓶を取り出して、俺に放り投げてきた。それを俺は、パシッと掴む。

「それは、カブトの毒を解毒する薬。．．．あの子の毒を解毒出来るとしたら、綱手くらの医療忍者がいなきゃ無理だからね。」

「．．．．．何の心算だ．．．」

「言つたでしょ？私はお詫びを言いに来たつて。．．．．．それじゃあね。ナルト君」

大蛇丸はそう言つて、背を俺に向けて廊下の奥に消えていく。このまま、ぶっ殺してやるか？そう思うが、今はこの薬をこのドアの向こうにいる医療班に渡す事が先決か．．．大蛇丸のくれるモノが本当に薬なのか心配になるが、あいつがそんなセコイ真似するとは思えない。

「……今は有りがたく貰ってやる。だが、……次は  
お前とカブトを必ず殺してやる。」

廊下に消えた大蛇丸に聞こえるように、声を上げてからドアに手を  
掛けた。

試合場に視点を戻し……

砂に身体を包まれたザクが、宙に浮いている。

(クツ・・・この俺がこんな奴に・・・)

ザクは眼下にいる我愛羅に目を向ける。

数年前、ザクがまだ幼い頃の事。ザクは、友人はおろか、親もいない貧しい生活を送り、コソコソと盗みを働く事でしか生きる術がなかった。

そして、そんなある日・・・一つのパンを盗んだザクは大人二人にリンチに合い、身体をボロボロにして歩いている所に一人の男に声を掛けられた。

『見込みあるわね・・・君。その目がいいわ・・・』

『私の所に来れば、もっと強くなれるわよ。』

『私の為に闘いなさい・・・』

『さあ、期待に応えて頂戴・・・』

その得体の知れない男が、伝説の三忍の大蛇丸だという事を知ったのはそれからしばらくしての事だったが、ザクにはそんな事関係なかった。

力を貰い、それを大蛇丸の為に役立てるだけで、今までの生活が嘘のような生活を送ることが出来た。それだけが、ザクの全てだった。そんなザクが、森の中ではナルトに何も出来ずにやられ、今もこうして我愛羅に何も出来ずに負ける。それがザクには許せなかった

(これ以上・・・この俺様が失態を晒せるか!!!)

「俺を舐めるなよ!!!」

そう言つて、ザクは両手にチャクラを集中させる。今までよりも多くのチャクラをそこに集めるザク。今は、この砂から脱出することが先決であり、この砂は前の2回の攻撃から生半可な威力では弾けない事は実証済み。だからこそ、ザクが出せる全力でもつてこの砂を吹き飛ばそうとする。

掌の中心にある穴を外側に向けて、斬空波を放とうとしたその時・  
・  
・

「死ね……雑魚が……」

組んでいた腕を解き、片手をザクに向けていた我愛羅のその手が握られる。

砂瀑送葬！

我愛羅がそう言った瞬間、ザクの身体が爆発した。森の中で行った



その時を思い起こさせるようなその光景。

血の雨が建物中に降り注いだ・・・

次回



第7試合 我愛羅VSザクだつてばよっ！（後書き）

第29話でした。

更新がまたまた1週間ぶりという、何だか申し訳ないと感じている、うたわれな燕です。

最近、卒論が終わった事で浮かれ過ぎたようで、お金遣いが荒い荒い……吃驚しています。

と、そんな事は置いておいて……今回はどうでしたでしょうか？私的には、前回よりもちゃんと書けたような気がしましたが……

まあ、ザクはいらない子つて事で、始末しちゃいました

WWW

というか、480分も書いているのに、なぜまだ中忍試験？？と思わなくもないですよ？もう少しパツと書ければと考えているのですが、そうわ上手くいかないのが現状でして……すみませんmm

ま、それでは次回の更新でまたお会いしましょうね。

## 第8試合

キバVSネジだつてばよっ！

まじかよ……目の前で起こつた『惨劇』は、俺達がここに来る前に見たモノと何一つ変わらずに俺の目に飛び込んできた。しかも、今回は森の中ではないから、血が、臓物が、壁に張り付き、ここを『惨劇場』に変えやがった……

ふざけんな……何で、砂の上忍は止めねえんだよ！いや、砂の

奴だけじゃねえ。音の上忍も助けに入らなかった・・・何でだよ・・・  
・何で、自分の担当の奴助けねえんだよ・・・

くうくん・・・

赤丸もすっかり怯えちまってるし、次が俺の試合だったら・・・

「ゴホゴホ・・・ええ、試合場がこんなになってしまったので、  
30分の清掃時間を取ろうと思います。その間に、トイレ休憩や心を  
静めておきたい人はしっかりと休んでください・・・」

下にいたハヤテっていう試験官が、体中に血を付けたまま俺達にそ  
う言っと、ナルトが出ていったドアから木ノ葉の中忍が数人出て来  
る。手には、ブラシを持っている事から、あれで綺麗にするんだろ  
う・・・

「キバ。」

「あ、ああ・・・何だよシノ？」

中忍の奴らが掃除しているのを黙って見ていると、シノが俺に声を掛けてきた。

「・・・お前が考えている事は想像がつく。次の試合が自分かもしれないと考えているんだろう。残ってる下忍はお前とナルト、シカマルに春野、ネジにリーという一年上の奴ら・・・それから砂のくの一に草隠れの奴が2人・・・」

シノが言うそいつらが、残りの予選を戦う。それは分かっている。ナルトや砂のくの一以外と当たれば、俺は予選を勝ち残れると思うが、・・・俺は、ナルトと戦いてえ。あいつに勝たなきゃ、俺はヒナタに一生告げねえんだから・・・だけどよ、だけど！！

「・・・キバ。お前がさっきの試合を見て震えているように、あの試合を見た全ての下忍が震えていると俺は考えている。現に、この俺も震えているからだ。キバ、あの試合を見て何も思わない下忍がいる筈がない。だから、皆スタートラインは一緒な筈。」

「…………シノ……」

「大丈夫だ。お前はアカデミーの時よりも強い。それは俺やヒナタが知っている。……勝て。俺はお前とも戦いたいからな。」

シノは言いたい事だけ言うと、後ろの壁に背を預けて口を閉ざした。  
……はぁ……ホント、あいつは喋る時はすげえ喋るくせに、1  
回口を閉じたらいつまでも閉じてっからな……

「…………お前にそう言われちゃ、俺も勝たないといけねえじゃねえ  
かよ。なァ、赤丸!!」

ワンッ!!

赤丸もシノの話しを聞いて、燃えてきたっぽい。ツしゃ!! やって  
やるよ糞野郎が!!!

あの砂の・・・ここにいる下忍の中では一番だろうな。流石に俺でも、あの砂を回避して柔拳を打ち込むのは・・・無理だ。あんな奴が、いるとはな・・・

砂の奴から視線を切り、残った下忍の奴らに目を向ける。砂のくの一がどのくらいの實力を持っているか分からないが、あの瓢箪の奴より強い筈はないだろう。そして、残った他の奴らの中では、リーを除けばあの『うずまきナルト』くらいか。

さっきの試合前。ヒナタ様の試合中に飛び込んだ『うずまきナルト』



は、まだ戻って来てはいない。あいつと戦う事になったら、なぜ他人の試合に乱入するのかを聞いてみたいものだ。

俺とリーの真向かい、向こうの方にガイとテンテンが見える。ガイは力カシという上忍に用があるらしかったし、テンテンはあの『うずまきナルト』に用があると云っていた。フンツ……『うずまきナルト』か……本当に、戦ってみたいものだ。

「ゴホンツ……ええ、お待たせしました。清掃が終わったので次の試合に移りたいと思います。」

そして、気付けば掃除をしていた中忍は消えて、試験官が試合場の中央に立っているのに気付く。

電光掲示板が残った10人の下忍の名前をシャッフルし、次の試合の組み合わせを表示した。

『ヒュウガ・ネジ』 VS 『イヌヅカ・キバ』

フンッ……『つぎまきナルト』ではなかったか……

試合場の中央にはキバとネジの姿がある。

「ねえ……あの日向ネジってヒナタとどっいう関係なの？」

「あいつらは木ノ葉で最も古く優秀な血の流れをくむ名門……日向一族の家系だ。」

サクラの問いにカカシは答える。

「日向家の『宗家』と『分家』の関係って言えば良いのかなあ。」

「『宗家』と『分家』？」

カカシが続けて言ったそれに、サクラはポカンとしたアホ面を浮かべて聞き返す。それを見て、カカシは苦笑を、サスケは残念な子を見るような目を向ける。そして、そんな3人の間に入ってくる人物が……

「はい！ヒナタさんは日向流の宗家にあたる人で、ネジはその流れをくむ分家の人間という事です。」

「り、リーさん……」

そう、ネジが階下の試合場に行つてしまい、1人寂しかったロック・リーは、自分が心の底から尊敬し、心酔している担当上忍のガイがいる場所、つまりはここ、サクラ達がいる場所に来ていた。

「どうしましたか、サクラさん？」

「い、いえ、何でもありません……つまり、2人は親戚同士って事なのね。」

近くで見る濃ゆい顔に、引き攣つた笑みでもって我慢したサクラは、視線を階下に戻す。サスケも、既に写輪眼を発動させて観察している。カカシとガイは、そんな自分達の教え子の様子を笑って見ている。

「はい。ただ……『宗家』と『分家』の間には昔から色々ある

らしく・・・今はあまり仲の良い間柄では有りません。」

「どうして?」

「・・・僕も詳しくは知りませんが、ただ・・・」

リーはそれまで、サクラさんと一緒にいるって幸せですう〜みたいな顔をしていたが、階下に視線をやると真面目な顔になる。それでも、濃ゆい顔である事には違いはないのだが・・・

「昔ながらの古い家にはよくある話らしいんですが、日向家の初代が家と血を守って行く為に色々と宗家が有利になる条件を掟で決めていて、分家の人間は肩身の狭い思いをしてきたらしいんです。」

「ふ〜ん・・・大変なのねえ・・・」

そんな感想しか持たないサクラに、サスケとカカシ、ガイの3人は心の中で【おいおい・・・】と突っ込んでいた。

試合場の中央へと降り立つネジとキバの2人。そして、対峙した2人の様子を見て大丈夫と判断したハヤテが試合開始を宣言する。

「それでは第8試合、はじめてください。」

対峙していた2人。まずは、キバが動いた。

「先手必勝だ!!!」

体勢を低く構え、キバは印を結ぶ。

疑獣忍法 四脚の術!!!

「行くぜ……」

野生の獣の如く、両の手を地面に着けた。キバは四肢に力を込めて、ネジに向かって突っ込む。その際に、体を高速回転させて……

通牙!!!!

高速回転したキバの身体は果たして、ネジの柔拳によって弾かれた。

「フンツ・・・体術で俺に勝負を挑むとは・・・馬鹿な奴だ・・・

」

ネジは、チャクラを纏った両手を構えて弾かれたキバの方に身体を向ける。

「はッ！流石にヒナタと同じ流派だな。これで白眼があるとか・・・ホント卑怯くせえけど、俺だって負けるわけにやいかねえんだ！！赤丸ッ！」

ワンワンッッ！！！！

キバから離れていた赤丸は、主人のその言葉を待ち侘びていたかのようにキバのところに駆けていく。



「・・・あの、落ちこぼれと俺を一緒にするな・・・」

ネジは、余裕そうにしていた顔に、憎悪のそれにして白眼を発動させる。

キバは腰に付けているポーチに手を入れて、煙玉より小さな丸薬を2つ取り出して、その1つを赤丸の口の中に放り投げた。

「落ちこぼれってのはヒナタの事か・・・」

キバは残ったもう1つを自分の口に入れて、鋭い歯で噛み砕く。すると、キバの眼はさっきよりも鋭くなり、髪の毛が逆立っていく。赤丸に至っては全身の毛を真っ赤に染めていく。

「他に誰がいると言っただ。あのお姫様は、忍者になる資格はない。」

「同じ流派なのか分かんねえけどよ、ヒナタの事を分かったような口で話すんじゃねえよ!!」

キバは『四脚の術』発動時の低い体勢を取り、赤丸はそのキバの背中に乗る。

ワンワンッ！疑人忍法！

「疑獣忍法！」

低い姿勢のままチャクラを練り込み、キバが印を結ぶ。

獣人分身ッ!!

白煙に包まれ、姿を現すは2人のキバ。忍犬である赤丸がキバの姿に化けたのだ。

「チヨウウジ！キバってば、赤丸に何を食べさせたの！？」

幼馴染のキバが何時も連れてくる子犬の赤丸を、何気に可愛がっていたいの。そんなのが聞くのは、この中であの丸薬の事を知って  
いそうな幼馴染だった。

「むしゃこら……兵糧丸だよ。」

案の定食通の幼馴染、チヨウジから答えが返って来る。

「むしゃ……服用した兵が3日3晩休まず戦えるっていう秘薬。高タンパクで吸収も良く、ある種の興奮作用・沈静作用の成分が練り込まれているモノだよ……むしゃこら……」

「それに……今のキバと赤丸のチャクラは倍増してる。チャクラを身体中に張り巡らせ、獣そつくり活動するバリバリの戦闘タイプな奴らだから……あれはあいつらに持って来いの丸薬って事だ。」

チヨウジの言葉にシカマルも続けて言う事で、いにはあれが何なのか分かったが……

「あの赤丸……嫌いかも……」

ちなみに、いのやテンテン、サクラといったくの一は、それぞれカシ、ガイ、シカマルによって我愛羅が行った惨劇を見ないで済んでいたの、こつもあつさりとしていたりする。

「ほう・・・その子犬も戦うみたいだが、俺は加減などしない・・・それから、ヒナタ様の事だが、お前よりも俺の方があの方の事を『よく』知っている・・・ヒナタ様は他人に優しく調和を望んだ考えを持っているが、それは同時に、葛藤を避け、他人の考えに合わせる事に抵抗がない事の裏返し・・・」

野生の獣のように、2人のキバがそれぞれ付かず離れずの距離でネジの周りを回っている。

「そして、自分に自信がないため、いつも劣等感を感じている。下忍のままでも良いと考えているが、中忍試験が3人でなければ登録できないモノである事を知り、同チームのお前達の誘いを断れず、この試験に嫌々受験しているのが事実。そんな奴なんだよあのお姫様は……」

ネジのその口振りは全てを見抜いていると言うようなモノ。そんなネジの言葉にキレないキバではない。だからか、キバは赤丸と同時にネジに向かって、高速回転の体当たり、**牙通牙**を繰り出す。

「人は、決して変わる事など出来はしない。『落ちこぼれ』は『落ちこぼれ』、その性格も力も変わりはしない。人は変わりようがないからこそ差が生まれ、エリートや落ちこぼれなどと言った表現が生まれる。誰でも顔や頭、能力や体型・・・性格の良し悪しで判断される。変えようのない要素によって人は差別し、差別され、分相応にその中で苦しみ生きる。俺が『分家』であの方が『宗家』であるように……」

キバのその攻撃を回避し、弾き、防ぎながらネジは言葉を続ける。

「今までこの『白眼』であらゆる物を見通してきた。だから、分かる。ヒナタ様はあの試合中に本当は逃げ出したいと思っていたと！」

「そんな事は絶対にねえッッ！！！！！」

ネジを睨みながら、その獣のような機動力で一瞬の間に間合いを詰めて、鋭い刃と化した爪でネジを切り裂こうとするキバ。

獣人体術奥義 牙通牙ッ！！

身体全身を高速回転させて、2人のキバがネジ目掛けて突っ込む。

対するネジは、白眼でキバの動きを察知することが出来るので、キバの攻撃はネジの身体に当たらない。

そして、キバがネジの側を通り過ぎる一瞬の間に、ネジはチャクラを纏った指でキバの身体に触れていく。

（はッ！俺の身体は回転してんだぞ？何をするつもりか知らねえが、そんなもん俺には効かねえ！！！）

「連続で行くぞ！赤丸ッ！！！」

ワンッ！！

キバと赤丸は、関係なくネジに向かって 牙通牙 を連続で繰り出していく。



そして、キバの攻撃が続く事十数分……

(……何て奴だ……)

(まさか、ここまでとはな……)

(日向家始まって以来の天才……その名は伊達ではないようじゃが……)

カカシ・アスマ・三代目火影はそれぞれ驚きを隠せなかった。

(な、何回攻撃したか、もう分からねえな・・・それに、さっきからチャクラが練れなくなってるような・・・)

キバと赤丸はネジを挟んで相對するようにしていたが、攻撃し続けた疲れからか、その動きを止めてネジの様子を離れて觀察していた。

「やっと、止まったか・・・」

構えを取っていたネジは、そう呟くと構えを解いた。

「！……どうして構えを解くんだよ……」

「フンツ……それはお前が一番分かっている筈だ。服を捲って見る……」

キバは何を言われたのか、一瞬分からなかったが、何を言われたか理解すると早かった。キバは自分の服の袖を少しずつ捲っていく。

そして、自分の腕に赤い斑点があることに気付く。

「何だよ……コレは……！」

「……俺の白眼はもはや『点穴』をも見切るといふ事だ。」

「カカシ先生、『点穴』って何なの？」

「ちょっと前に白眼と写輪眼について教えたが、経絡系上には・・・チャクラ穴と言われる361個のツボがある。針の穴程の小ささだけどな・・・それを『点穴』って言ってな、理論上・・・そのツボを正確に突くと相手のチャクラの流れを止めたり自由に操れる。」

「それって……」

「説明ついでに教えといてやるが、『点穴』はな……はつきり言  
つて俺やサスケの『写輪眼』でも見切れない。幾ら洞察眼が使える  
と言つても戦闘中にあそこまでの確に……」

サクラだけでなく、サスケもカカシのその言葉は信じられないモノ  
だった。サクラは（あんなに凄い忍者のカカシ先生でも見れないな  
んで……）と、サスケは（写輪眼でも見切れないだど！！ちツ・  
・・本当に自分が井の中の蛙だったとはな……）と感じていた・  
・・

972

「ネジの『点穴』を突く攻撃は、キバのチャクラの流れを完全に止  
めてしまったようだ。つまり、これ以上の牙通牙は威力がなくなっ  
ていくという事だ……この勝負、見えたな。」

（しかし、まあ……これ程の奴がいたとはね……はつきり言っ  
てウチのサスケじゃまるつきり相手にならないな。ナルトは別だが・  
……）

冷静に分析していたカカシだが、内心ではネジの実力に驚嘆していた。

「点穴だか何だか知らねえが、俺には関係ねえ！！喰らいやがれッ  
！！」

牙通牙！！！！

「キバと言ったな・・・お前はよく戦った。だから、これで終わりにしてやる・・・」

性懲りもなく、同じ技を続けて繰り出すキバと赤丸。ネジはそんな1人と1匹に向かって、柔拳の中でも自分が得意とする掌打を繰り出した。

「ハア!!!!」

2人の気合いの入った叫び。まずは、キバの攻撃を回避して、後ろから向かってくる赤丸をカウンターの掌打で以って吹き飛ばすネジ。

そして、折り返してキバが繰り出してくる 牙通牙 を何度も見た事によって動きを看破したネジは、キバの顎が上がった瞬間掌打をそこに打ち込んだ。

「がは・・・」

ネジのその掌打を受けたキバの身体が、回転しながら宙を舞い、そして落ちる。

「日向は木ノ葉最強だ・・・」

掌打を放った状態のまま、ネジがそう呟く。

「第8試合、勝者は日向ネジ！」

ハヤテのその言葉で、予選第8試合は終わった。



## 次回

俺がいない間に、キバとネジの試合が終わったただって???

んで、俺の試合はまだなのか？

そろそろ、俺も戦いたいんだが……は？何？

次はシカマルと香燐だと!？

「女が相手かよ……めんどくせえ」

あははは……シカマル、頑張ってこいってばよ……

それではまた次回。  
。  
。  
。  
。  
。  
。

第8試合 キバVSネジだってばよっ！（後書き）

ええ〜30話でしたあ。

何とか、この更新は少しだけですがはやく出来たと思います。

まあ〜殆んど、原作の互いの勝負の合わさった感じですがね……

気のせいってことでーっ、お願いしますwww

それでは、また次回の更新で。。。。

何だっつてんだよ、あの日向ネジとか言う奴……森ん中であいつに睨まれた時に嫌な予感はしていたが、あんなにヤバい奴だったとは……全く、伊達に昨年の木ノ葉No.1ルーキーじゃねえって事か？キバは結果的に負けちまったが、相手がアイツじゃなかったら勝っていたと思うのは、俺だけじゃねえ筈だ。

というか、あと残ってるのは俺、ナルト、サクラ、全身タイツつう変な格好したリーっていうネジと同じ班の馬鹿。それから、砂のくの一にカブトって奴の班員。それから、草隠れの奴らが2人……  
・正直、ナルトとリーって奴とはやりたくねえ。絶対に実力が違うからな。それから、女ともめんどくせえから当たりたくねえ……

はぁ・・・何だってこんな後の方にやらねえとなんねえんだよ。めんどくせえ・・・

そんな風に俺が考えていると、ボンツ・・・って音が近くでした。つたく・・・

「おせえ〜よ、馬鹿。んで、ヒナタは大丈夫なのか？」

「馬鹿はひでえってのシカマル。ヒナタは大丈夫だ。だから、いの。そんな顔すんなって。」

「う・・・うう・・・良かった・・・本当に良かった・・・」

ナルトが俺の軽口に乗って返し、直ぐにいのの頭に手を乗せる。こんなやり取りを、俺達はずっとガキの頃から続けて来ている。

「ナルト、さっきキバの試合が終わったんだけど、キバは負けちゃったよ。ムシャムシャ・・・」

チヨウジが、もう何袋目か分からないポテチを食べながらナルトに言う。チヨウジの奴、どんだけ食べるんだよ・・・

「へえ……相手は誰だった？」

「相手はウチのネジだよん」

いのの頭に手を置いているナルトの背中に負ぶさるテンテン。ナルトも大変だよな、いつの間にかこの人にも好かれてんだからよ……ま、こいつの場合顔がいいから仕方ねえか。実力もアカデミーん時と比べられねえくらい強いしな。

「ネジ先輩が相手かよ……けど、善戦したんじゃねえのキバの奴。」

「ああ、あいつは普通に強かったぞ。アカデミー卒業してから、めちゃくちゃ修行したんだろうな。」

「……そうか。あいつも強くなってたんだな……ッし！シカマルッ俺達も頑張ろうな！！てか、俺と当たってめんどくせえつつって棄権すんの無しだから。」

ナルトの質問に返した俺に、めんどくせえ事を言ってくる。

「まあ……善処する……」

「グス・・・何言ってるのよ、シカマル！あんたも男なら、当たって砕けなさいよー!」

いや、いの。お前は黙って泣いてる。お前が喋り出すとめんどくせえ事が絶対に起きるんだから・・・

「シカマル君、頑張って。」

「頑張るも何も、まだ俺とナルトが当たると決まったわけじゃねえんすけど・・・」

このテンテンって先輩、何でも面白ければいって感じなんだよな・・・ああ〜めんどくせえ・・・

「お、次の組み合わせが表示されるみたいだぞ。」

ナルトのその言葉に皆が顔を電光掲示板に向ける。それは、俺も例外じゃねえ。ナルトと当たるとしても、当たらないとしても、表示されるまで分からねえからな。

残り8人の名前がランダムに表示されていき、2人の名前が表示さ

れた。やっと俺みたいだが、相手は……女かよ……

「ゴホゴホ……では、表示された2人は下に降りて来て下さい。」

『ナラ・シカマル』VS『カリン』

糞変態野郎から貰った薬を医療班に渡して、皆がいるここに戻ってきた俺の前で、親友のシカマルがめんどくさそうに溜め息を出して



いるのが目に入ってくる。

「俺とじゃねえみたいだな、残念。」

「馬〱〱鹿、言ってる。」

シカマルに軽口を言って、慰めるじゃねえけど、気を紛らわせてやる。ま、頑張つてこいシカマル。おそらく、簡単に勝てるぞ。シカマルは、俺達に背を向けて階段の方に歩いて行く。

「シカマルう〱私とチヨウジの分も頑張つて来なさいよ!!」

「へえ〱〱い・・・」

いののそれに、後ろ手で以って応えるシカマルの声は、本当にめんどくさそうなモノだ。

しかし、シカマルの相手が香燐とはな・・・原作と違ってキンツで音の奴とはシノが戦ったし、殆んど原作と違うからなあ・・・俺、サクラと試合してえな。そしたら、このストレスって言うかムカつくモノをアイツを使って発散できるんだだけなあ。まあ、班員同士戦わないようになってると思うし、それは無理な相談か・・・

近くで、カカシ、サスケ、ガイ先生、リーの4人に囲まれているデコ野郎に目をやると、カカシとガイ先生と目があった。2人と目が合うつて変な表現だと思うが、本当にそうなんだから仕方ねえ。

んで、カカシとガイ先生がサスケ達に何か言つて俺の方に歩いてきた。何かめんどくさそう……シカマルの気持ち少し分かるかも。

「両手に花の状態だな、ナルト。」

「華だなんて……もう、カカシ先生つたら」

「金髪君、私も華だつて。エヘヘ」

おおい、カカシ。なあに調子付かせる事言つてんだよ、この野郎。こちとら、シカマルの試合観てえつてのに……

「勘弁してくれつてばよ、カカシ先生。てか、何の用？」

ヒナタを助けに行くときに、蹴つた事を怒つてるわけじゃねえのは分かる。じゃなけりゃ、ガイ先生も一緒に来るわけねえしな。

「お前の事については、後で聞くと約束した。だから、ここでは聞かない。ただ、ヒナタを運んでからここに帰ってくるまで、少しだけ遅かった。・・・何があった？」

やっぱり、そこか・・・いの達にはヒナタが心配だから、離れられなかったって言えば納得してくれると思うんだけど・・・

『大蛇丸か？』

そう、口だけで聞いて来るカカシ。ガイ先生も、同じ質問だったらしい。ま、大蛇丸がここにいるって教えちまつてたし、警戒しても仕方ないよな。現に、変態と会って来たんだし。

『そうです。』と口だけを動かして、カカシとガイs・・・もう、呼び捨てでいいな。めんどいし・・・カカシとガイに応える。続けて、『だけど、あいつは何もしてきていません。ただ、話をしてきただけです。』とも。

「そうか・・・ナルト、お前は一人じゃない。俺や、こいつらがいるんだ。少しは頼れ、いいな。」

「分かってるってばよ、カカシ先生。あ、それから、さっきは蹴ってごめんだってばよ。」

カカシのそれに笑顔を作り、さつき蹴った事を謝る。それを聞いて、カカシにも笑みが浮かんだ。ガイに至っては「青春だ、これは青春だあ！ー！ー、我々も青春だあああ！ー！」とか言っつて、リーと一緒に腕立てを始めた。

それを見たいのとテンテン、サクラのくの一達だけでなく、サスケとカカシも嫌なものでも見るかのような視線を向ける。俺は苦笑を、チヨウジとシノは無関心・・・シカマルがここにいたら、めんどくせえとか言いそうだな。とか思ったりした。

そんなこんなしている間に、シカマルの試合は終わってしまったみたいで、ハヤテに「勝者、奈良シカマル！」って言われていた。

てか、原作での試合よりも簡単に勝ったみたいだな、シカマルの奴。

そして、ポケットに手を突っこんだまま階段を上がってくるシカマルに、いのとチヨウジが歩み寄って行く。そこには、おじさん達みたいなおじさんの「いの・しか・ちよう」の姿がある。

シノが俺の隣にやって来て、テンテンを負った状態で俺はシカマルが歩いて来るのを待つ。そして、いのに「よくやったわよ！」とか言われてめんどくさそうにしているシカマルがやっと俺の目の前に来て、ポケットに突っ込んでいた右手だけを出して俺の前に突き

出してくる。

「めんどくせえ〜って言うてたわりに、ちゃんと勝ってきやがったな、こいつ!」

「ツけ。めんどくせえけど、女に負けるのだけは嫌なんでな。」

そう言っつて、俺はシカマルのその右手にパシンツと自分の右手を合わせた。ま、これもガキン時からつづく俺達なりの良くやったなっつて事を表わすモノだったりする。

そうして、シカマル達と談笑していると、次の試合の組み合わせを表示するために電光掲示板が動き出した。

「あと、残ってるのはあんただけね、ナルト。」

「お前なら余裕だろうけど。ま、頑張つてこい。」

「……応援してるよ〜ムシャ……」

「ナルト、俺はお前と戦いたい。だから、お前はここで負ける事は許されない。」

「ウチのリーも残ってるんだよね。でも、もしリーと金髪君が戦うことになっても私は金髪君を応援するよ。」

そんな事を言ってくる5人。ここにヒナタやキバも居たら、絶対にこいつらと同じことを言ってくれると思う。あ、今更だけどキバの奴はネジにやられた傷のせいで医療班に運ばれていったらしい。

ま、次の試合が俺の試合だったら勿論勝ってくるけどな。

そして、電光掲示板が動きを止めて、表示された2人は……………

『テマリ』 VS 『ウズマキ・ナルト』

本当に俺になったし……………てか、テマリと試合かよ。

「テマリって……………あの砂の人？」

「みたいだな。あの瓢箪の傍にいやがるし……………」

いのとシカマルの言葉通り、テマリは我愛羅の隣で腕を組んでいた

が、俺を見ると手摺に足を掛けて一気に下に降りていった。

「やる気満々みたいだね、あの砂の女<sup>ひと</sup>ってば。」

「……………気を付けて行け、ナルト。」

テンテンが言うように、テマリってば階下で腕を組んで俺を睨み上げてきた。何かテマリにしたっけか俺……………それからシノ、もうちよいテンション上げようぜ……!

「分かってるってばよ、シノ。んじゃ、お呼びのようだし行って来るわ……!」

テマリと同じように手摺に足を掛けて一気に下に降りる。そして、試合場の中心、テマリのいるところから2〜3mくらい離れた所で足を止めた。

「一次試験の時に会ってからだから……………5日ぶりか?」

「フンツ……………慣れ合いはしないと書いた筈だ。」

おうおう、つれないねえ〜テマリってば。そんじゃまあ、まずはお

手並み拝見って事で……

「それでは、予選第10試合、はじめてください。」

ハヤテのその言葉で、俺達は二人とも後ろに跳んで距離を取った。

テマリって自分から攻撃してくるような奴だっけ?? まあ、俺から攻撃してみますか! ホルスターから手裏剣を3枚取り出し、2枚を先に投擲して1枚をその後投擲。

「はッそんなもん効かないよ!」

身の丈ある扇で身体を隠して、手裏剣を防ぐテマリ。そういや、あの扇って堅いんだっけか。

「今度はこっちから行くよ!」

扇を振りかぶって繰り出すのは……やっぱりあれだよな。

カマイタチの術!!



風が見えない刃となって襲って来るってか？ホント、良い術だ。でも……

印を結んで、テマリの風遁と同程度のチャクラを練りこんだモノで相殺する。

風遁・大突破！！

風の刃と突風が塔の内部に吹き荒れる。テマリを見ると、自分の風が相殺された事に驚いているみたいで、何も行動を起こしていない。おいおい、それじゃ駄目だってテマリ。忍びたるものいつ何時も、緊張を解くべからず……ってね！

俺は一気にテマリに向かって駆けて行き、そのままの勢いで体術勝負に持つて行く。

回し蹴り……扇で防がれる。

突き……回避される。

肘鉄……扇の堅いところで防がれるが、罅ひびを入れる事に成功。

膝蹴り・・・扇が上に浮いた所に放ったから、テマリの水月に入る。

そして、ラストに掌底で後方に吹き飛ばす。

あ、一応これらの体術はテマリに反応出来るように力を抑えたものだ。勝負に手加減するとか、忍者として駄目だって言う奴、それは違うぞ。俺は原作キャラで気に入ってる奴にはとことん甘いだけなんだ。・・・ま、俺の好き嫌いの問題だけど。

「く・・・」

吹き飛んだテマリが、腹を押さえて俺を睨んでくる。そうそう、それでいいんだ。さあ、こっからは試合に集中するんだぞ。

『ナルト・・・遊ぶのはいいが、火影やその他の奴らに見られているのを忘れるな。』

分かってるって。てか、これくらいの体術ならリーとかネジより技術的には低いし、何よりさっきの大突破の術は中忍なら使える術って教わったぞ父さんに。

『・・・お前がいいなら、我はもう何も言うまい。ただ、遊びすぎるのも程々にな。』

はいはい、九尾は偶に口が五月蠅くなるから、困ったもんだ。

お、ある程度は回復したみたいだな。テマリは扇を支えにして立ち上がり、口からペツと血を吐き出した。……女が口から血を吐き出すとか……カッコいいんですけど!!

「なぜ、攻撃してこない？あのまま、追撃していたらお前の勝ちだった筈だ。」

「いやさ、さっき術を相殺した時テマリさんってば一瞬、緊張を解いたでしょ？だから、さっきの攻撃はそのお仕置き。で、追撃しなかった理由としては、もっかい試合に集中したテマリさんと戦いたかったから。」

「……可笑しな奴だな、お前は。」

「可笑しな奴は余計だつてばよ。」

テマリの顔が、引き締まったモノに変わった。そして、支えにしていた扇を持ち直して開き、術の名を呟く。

風砂塵！！

扇を振って風を巻き起こすのはさつきと一緒だが、これはただ砂塵を起こし、俺の目を封じるだけの補助的術。腕を顔の前でクロスさせて目を閉じ、その風が収まるのを待つ。これくらい、待ってやつても罰は当たらない。

「あたしは・・・砂隠れの風使い。」

チャクラの気配から、テマリは俺の後ろの方にいる。ポーチから、クナイを取り出して逆手に構える。風はまだ止んでいない。

「風勝負なら・・・あたしは誰にも負けない！！」

言うねえくテマリってば。これは上には上がいるって事を教えてやらないといけないな。・・・そんなじゃまあ、この邪魔くさい風を取っ払いますか。

風遁のチャクラを纏わせたクナイで、周りの風を文字通り切り裂いた。そして、そこにテマリのカマイタチの術が来るのは分かっているから・・・

風遁・真空波

口から一筋のカマイタチを出して、テマリの術の中心を切り裂いて進ませる。術の威力はチャクラの量で変わるんだぞ、テマリ。

「くうッ！……」

大カマイタチの術！！

は??テマリって、この試験中に大カマイタチの術って使えたっけか?……んな事を考えている間に、カマイタチの術に覆い被さるように大カマイタチの術は、俺の真空波を飲み込んで俺に向かって来る。

「はぁあああああ！！！」

テマリの吠えるような声を聞きながら、俺はニヤッと顔に笑みを浮かべる。テマリの持ち札を全部見た訳じゃねえけど、テマリが原作よりも強いってのは分かる。それは同時にカンクロウや我愛羅の強さも跳ね上がったって意味だ。我愛羅と戦いたい俺としては嬉しい事に違いはない。

瞬身の術でその風の暴力から逃げて、天井に足を付けて下にいるテマリを見る。俺が元いた場所はテマリと俺の術でボロボロに崩れて

いる。テマリはそれを見て、自分が勝ったと思っってしまったのか、緊張をまたもや解いてしまった。だから、緊張を解くのはまだ早いっつての。

天井から下に向かって頭から落ちて行き、テマリの背後に着地する。

「また、緊張解いたでしょ、テマリさん。俺は2回も同じ過ちを犯す人は許しませんので、これで終わりです。」

「おま・・・がッ・・・」

驚いて後ろを振り返ろうとしたテマリの首に手刀を落として、意識を刈り取る。倒れそうになったテマリを抱えて、ハヤテの方に顔を向けると咳をしながら俺の名前を宣言してくれた。

「ゴホ・・・予選第10試合、勝者つずまきナルト。」

我愛羅達のところにてマリ運んでやるっつと。

## 次回

残る試合もあと2試合、そのどちらもが微妙な試合っぽいから、俺  
はいの達と雑談しているわけなんだが……

「サスケ、お前ってばこの試験中に何個くらい術を盗みやがったん  
だ？」

「ひ、人聞きの悪い事を言うな！これは、写輪眼の特性のお陰で……  
……8個くらいだ……」

ふぎけんなよ！！何が8個くらいだよ。まったく、写輪眼なんてい  
うチートの目は封印するべきだな、うん。修行の邪魔だ。





## 第9試合

シカマルVSカリン

第10試合ナルトVSテマリだっばよっ

第31話でした。

皆様からの感想でナルトの試合が待ち遠しいという意見がたくさん出たので、この度、こういう形にさせていただきました。

若干、ナルトが一人遊んでしまいましたが、まこれはこれでよしとして……次の2試合どうしようか……

シカマル戦とかカンクロウ戦みたいに、ちよろつと終わる感じにしようかな……早く1ヶ月の修行期間に入りたいし……

てか、そろそろ日常パートが書きたい!!ヒナタやテンテン、いのや白とイチヤイチャさせたい!!

はぁ……禁断症状が出てきます……

予選終了、修行編入だってばよっ！

テマリの膝裏と肩に手をやり持ち上げ、所謂お姫様抱っこをして我愛羅達がいる上の階へと跳ぶ。その際に、向こうの方から「こらあ！何やってんのよ、ナルト！！」とか、「金髪君てば、やるう」などの声が聞こえたが、聞かなかつた事にした。

「よっど……お届けに来ましたよっど。」

「……こいつらの担当の者だ。テマリは私が預かるう……」

確かこの人……バキって名前だったっけ？原作でも影薄いから、名前つる覚えなんだよなあ……って、そんな事考える前に、テマリをこいつに預けて、俺はいの達の所に移動した方がいいみたいだな。

「うずまき……ナルト……」

「おう。何だってばよ、我愛羅。」

「なっ！？お前、我愛羅の名前を気安く「黙れカンクロウ……殺されたいのか……」……分かったじゃん……」

おっかねえ……テマリをバキだと思っ奴に渡したら、我愛羅が話しかけてくんだもんなあ……てか、カンクロウどんまい。

「まあまあ、そんな殺気立つなよ我愛羅。んで、俺に何か用か？」

「……今すぐ、俺と戦え。これ以上、こんなくだらない遊びに付き合ってられるか……俺はお前と殺し合いたいんだよ。」

うわぁ・・・俺ってば、我愛羅に何か恨まれるような事したっけ？  
まじで、嫌なんですけど・・・

「えっと・・・我愛羅、殺し合うのは嫌だなぁ、俺は。それに、今すぐってのはちょっと無理だ。」

「・・・・・・・・」

いや、無言で殺気とチャクラを出すなよ・・・それも、さっきよりも割増しとか・・・俺は平気だけど、近くにいるカンクローなんて腰がぬけちゃってるぞ？

「ああ・・・絶対に今度戦ってやるから、今は我慢してく」「俺は今すぐ、殺し合いがしたいんだ。」・・・全く、お前は我儘な子どもかっての・・・それに『コレ』引っ込めねえと、そろそろ俺も本気で怒るぞっ..」

『コレ』ってのは、俺の周りを漂っている砂の事だ。さっきの戦いで血を吸ったからか、相当にキツイ臭いが俺の鼻を刺激してくる。

「そっだ、それでいい。殺してやる・・・お前を・・・うずま」馬あ鹿。「・・・」

めんどくせえ・・・こいつ原作よりタチ悪くね？・・・俺は我愛羅の砂のガードを素通り（自動防御する前に動いた）して、我愛羅の頭をコツンと叩く。

「だから、駄目だつて言つてんだろ？俺は、こんな狭いところで戦つても面白くねえつて言つてんの。何で、お前はそれが分かんねえんだよ。俺はもつと広い所で『全力』で戦いたいの、お前と。お前もやるからには『全力』で戦いたいだろ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」コク

「なら、もう少しだけ我慢しろ。今すぐ戦いたいつてのは俺も同じだ。でも、より楽しくなるんなら、そっちの方がいいと俺は思う。だから、な？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・分かった・・・今すぐ殺るのは我慢しよう・・・だが、その時は全力で・・・だぞ。」

「はいはい、分かつてゐるつての。それから、あんまり無闇矢鱈むやみやたらに殺気を撒き散らすなよ？そんな事してたら俺と戦えなくなつても知らねえからな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」コク

「なら、よし。それじゃ、俺は行「ここで見ていけ。」・・・はあ・・・分かったよ。お前だけ俺の言う事を聞いて、俺がお前の言う事聞かないのもおかしいしな。」

我愛羅の頭をコツンと叩いた拳を開き、我愛羅の頭をポムポムと叩く？。我愛羅も今は我慢してくれるみたいだし、あと2試合見たらこの予選も終わるし、それまでならこっちにいてもいいよな。てか、勢いで我愛羅の頭叩いちまったけど・・・俺の隣で腕を組んで階下に視線をやっている我愛羅に顔を向けてみると、

「・・・何だ？」

「いや、何でもねえ。」

「そうか・・・」

何で、こいつ怒らねえんだ??カンクロウとバキに顔を向けてみると、奇怪なモノでも見るような目で俺を見ていた。どっちの顔にも「我愛羅がキレない??」って書いてあったし、2人はテマリと一緒に俺と我愛羅から少しだけ距離を取った。・・・そんなんすから、我愛羅がこうなったんだって気付けたの。

まあ、我愛羅がキレないってのは俺も不思議に感じるがな。勢いつて時折大事なんだなあってこの時程思った事はない。

ん？いのとシカマルが何か含んだ目を向けているのに気付いた。悪い、そっち行けそうにないわ。そんなジェスチャーを2人に送る。

と、俺らがそんな事をやっている間に、次の試合に出る2人が試合場で対峙していた。

方や、全身緑タイツに身を包んだ、ゲジ眉事『ロック・リー』

方や、香燐の班員だと思われる、モブキャラ。名前は電光掲示板にちゃんと出てるぞ。俺がただ単純に、こいつには名前はいらないと思ったので言わないだけ。てか、モブでいいっしょ。

そして、始まった試合だったが、リーの体術の前に何も出来ずにモブは負けた。

「やりましたよお！ガイ先生！！予選突破しましたあ！！！！！！」

「おおうつ！流石は我が愛弟子！良くやったああああ！！！！これで、私の班は全員が予選突破だ、八八八八八！！！！」

五月蠅え……あいつらって、何でこう意味もなく『熱い』んだよ……

隣を見てみると、我愛羅は何を考えているのか分からない、あの無表情で以ってガイとリーの2人を見ている。我愛羅にもあんな人がいたら、こんな風にならなかつたんだよな……

そして、直ぐに予選最後の試合に出る2人の名前が電光掲示板に表示される。

『ハルノ・サクラ』VS『ツルギ・ミスミ』

サクラの試合なら見なくてもいいな。どうせ、あいつだから負けるし。それよりも、テマリが起きたみたいだし、ちよつと挨拶?に行こうかな。

「我愛羅、テマリさんが起きたみたいだから、ちよつと挨拶してくるけど、お前どうする?」

「……俺は行かない。」

「そっか。ならちよつと行って来るわ。」



我愛羅は相変わらず、腕を組んだまま階下の試合を見ている。あれ、ホントに試合見てるのか??ま、今はテマリが先かな。

「起きたみたいですね。どうですか、身体どこか痛んだりしますか？」

「……………何でお前がここにいるのか、私はそっちの方が気になるんだが……………」

バキがあの後直ぐに、後ろの壁にテマリを寄り掛からせるように座らせたから、今は俺がテマリを見下ろしている形だ。いや、俺は中腰になってテマリの視線に合わせているから、見下ろしてはいないな。

「それはそこにいる、テマリさんのとこの担当上忍か、カンクロウさんに聞いてください。と、それでどこか痛いところないですか?まあ、俺が負わせた怪我なんですけど。」

「……………はあ……………ホント、可笑しな奴だよ、お前は……………怪我は大した事はない。だから、そんなに顔を近づけるな……………じゃないと……………困る……………」ブツブツ

あれ？テマリっては何で顔赤くするんだ？やっぱり、どこか痛めてたりすんのか？一応手加減した心算なんだけどなあ。

「・・・いいから、お前は早く自分の仲間の所に帰れじゃん。」

「カンクロウの言う通りだ。君は木ノ葉の人間、私達がいくら同盟を結んでいるからと言って、いつまでもこちら側にいられると困ってしまふものでな・・・」

カンクロウとバキは、一刻も早く俺にここから離れて貰いたいらしいな。多分、音の奴ら・・・大蛇丸に変に勘ぐられたくないって事だろうけど・・・

「・・・分かりました。なら、これだけでも受け取ってください。木ノ葉で作られている万能薬です。これを傷に塗っておけば直ぐに治りますから。」

テマリに母さん特製の万能薬を渡してから、3人に背を向けて我愛羅のいるところに向かう。我愛羅に、あっちに行くって言うてからじゃないと、行けないし。

目を開けて見ると、そこは試合場ではなく上の階の自分が元いた場所だった。自分がこうして座っていることから、私はうずまきナルトに負けて、気絶させられたという事だ。ホントに出鱈目な強さだった。

風を使わせれば、あたしの右に出る者はいないと思っていたが・・・  
あいつの風・・・嫌な気がしなかったな・・・そう言えば、誰が

あたしをここに運んだんだ？バキがカンクロウだろうか・・・

そんな風に考えた時だった。私の上に影が出来たのは。誰だ？そう思つて顔を上げて見ると、そこにはあたしが今も考えていたそいつの顔があつた。

そいつは、本来ならここにいる筈がなくて、私を倒した本人の癖に私の身体を心配していて・・・本当に可笑しな奴だ。

うずまきナルト・・・そいつは、私に薬を渡すと我愛羅の所に行つて、二言三言話して、あろうことか我愛羅の肩を3回叩いてから、歩いて行つた。咄嗟に「我愛羅！」と叫びそうになつてしまった私は仕方ないと思う。

私の知っている我愛羅ならば、あんな事をしようものなら直ぐにキルして、あんな事をした奴を殺す筈。そう『筈』だった。うずまきナルトは、殺されていてもおかしくなかつた。だが、私のその心配もどこ吹く風と言うように、うずまきナルトは自分の仲間の所に向かつて歩いて行く。

「本当に、あいつ何者じゃん？」

「我愛羅に触れて生きている唯一の人間か・・・」

カンクロウとバキのその言葉に私は反応出来なかった。

「うずまきナルト……」

私の口は自然とそいつの名前を出した。そいつに渡された薬を手でギョツと握りしめながら……

その時階下から、「勝者、剣ミスミ」という声が上がったらしいが、あたしには聞こえていなかった。

「中忍試験『第3の試験』進出を決めた皆さん・・・ゴホゴホツ・・・  
おめでとございます。」

いつもの年よりも多く残ったが、やっと12試合全ての予選が終わったか・・・審判を頼んだハヤテが、相変わらずの顔色が悪い顔で祝辞を言うもんじゃから、皆呆れているようじゃな。それにしても・・・

木ノ葉から9名、砂から2名、音から1名か・・・目下にいる下忍の多くは木ノ葉からの忍び。開催国なのじゃから当たり前と言われずしまえばそれまでじゃが・・・嬉しいもんじゃわい。特に、ナルト。お前がここにいることがな。

わしは下忍達を値踏みするような視線を滑らして行き、列の真ん中  
にいるナルトに目を向けてから、小さく笑みを溢す。ナルトが、わ  
しのそれに気づいたようで、苦笑を浮かべながら『ありがとう』と  
口だけ動かしておった。それに、小さく頷いてから再び下忍達に視線  
を滑らせて行く。

この試験に大蛇丸が絡んでいると聞かされた時は、正直どうしたもの  
かと思つたが・・・蓋を開けてみれば、大蛇丸はこの試験中に  
何も仕掛けて来なかつた。これからも、そうだとは限らんが・・・  
今は、この子達の頑張りを祝福しようかの。

それに、大蛇丸はわしの元教え子で伝説の三忍の1人。自分の手で  
ケリを着けるのが道理と言うモノじゃからな・・・「それでは、  
これから火影様より『第3の試験』の説明がある！心して聞くよう  
に！」と、考え事は本当に後にするとしよう。ハヤテの言葉を聞き  
逃す所じゃつた・・・

「ええ・・・では、火影様・・・お願いします。」

「うむ・・・では、これから『本選』の説明を始める。以前も話し  
たように、本選は諸君の戦いを皆の前で晒す事になる。各々は各国  
の代表戦力として、それぞれの力を遺憾なく発揮し、見せ付けて欲  
しい。よって『本選』は1ヶ月後に開始される。」

第3の試験の予選は直ぐに開始したと言うのに、『本選』まではかなりの時間がある事に疑問を持った何人かの下忍達が騒ぎ出す。これも、毎年の事とは言え、少し五月蠅すぎるのう……

「これは相応の準備期間と言うモノじゃ。」

「どついつ事？」

ただ1人くの一で予選を突破したテンテンと言ったであろう少女が、指を顎に当てて首を傾げ負った。

「つまりじゃ、各国の大名や忍頭に『予選』の終了を告げると共に、『本選』への召集を掛ける為の準備期間……そして、これはお前達、受験生の為の準備期間でもある。」

「意味分かんねえじゃんよお！」

「つまり、敵を知り己を知る為の準備。予選で知り得た敵の情報を分析し、勝算を導く為の期間。これまでの戦いは実戦さながら……言うなれば、『見えない敵』と戦う事を想定して行われて来た。」

。わしの言葉を聞いて、この段階で理解した者は何人おるかのお……



「しかし『本選』はそうではない。宿敵達ライバルたちの眼の前で全てを明かしてしまった者もおるじやろう。相対的な強者と当たり、傷付き過ぎた者もおるじやろう。公正公平を期す為に1ヶ月間は各々更に精進し励むが良い。勿論、身体を休めるも良しじや。」

ガイの所の下忍だと分かる少年が、「やります。僕はやります。修行修行修行です！」と呟いておるのに気付く。フォッフォ・・・本当に面白い子じや。

「と、言う理由でじや。そろそろ解散させてやりたい所なんじやが、その前に一つ、『本選』の為に言う大切な事がある。」

「はあ・・・まだ何かあんのかよ・・・だるいじやん。」

「まあ、そう焦るでない。アンコの持つとる箱の中に紙が入ったから、それを1人1枚ずつ取るのじや。」

「私が回るから順番にね。それじやあ・・・あんたから引きなさい。」

わしの隣から下忍達の前へと歩いて行くアンコ。手には黄色い小さな箱を持っておる。そして、極上の笑顔を浮かべているのだらうの。

アッコはナルトの眼前に立った。

「1枚、だけよ」

「ハハハ・・・分かってるってばよ。」

渴いた笑いを浮かべるナルト。2人は知り合いじゃったのかの？全員が引き終わったのを見計らったようにイビキが声を上げる。

「よし、全員取り終わったな。では、その紙の数字を左から順に教えてくれ。」

イビキは名簿とペンを持ち、メモの準備万端じゃった。

「12」

噛ませ犬、ドス・キヌタ。

「3じゃん。」

砂の傀儡使い、カンクロウ。

「5だ。」

砂の人柱力、我愛羅。

「6だつてばよ。」

木ノ葉の人柱力、うずまきナルト。

「11でえす。」

この試験唯一の紅一点で忍具使い、テンテン。

「9」

めんどくせえが口癖の天才児、奈良シカマル。

「2だ」

うちは一族の生き残り、うちはサスケ。

「・・・10」

口数少なく無表情、油女シノ。

「7」

日向一族分家だがエリート、日向ネジ。

「1ですッ!!」

青春好きで体術馬鹿、ロック・リー。

「8ですね。」

音のスパイで大蛇丸の右腕、薬師カブト。

「4だ。」

モブに近いタコ人間、剣ミスミ。

「うむ。では、お前達に本選のトーナメントを覚えておく!！」

わしの言葉に驚く下忍達。そんな驚かんでも、数字の書かれておる紙を引いて行く時点でトーナメントだと分かりそうなものじゃがな。

「イビキ、組み合わせを前へ。」

「はい。」

イビキはその名簿を下忍達に突き出す。

? ロック・リー VS ? うちはサスケ

? カンクロウ VS ? 剣ミスミ

? 我愛羅 VS ? つずまきナルト

? 日向ネジ VS ? 薬師カブト

? 奈良シカマル VS ? 油女シノ

? テンテン VS ? ドス・キヌタ

下忍の各々が組み合わせを見ている中、ナルトだけはわしに笑みを浮かべてきおった。それに、小さく笑みを返して口を開く。

「では、それぞれ対策を練るなり、休むなり、自由にするのが良い。これで解散にするが最後に質問はあるか？」

「はい、ちよつと良いスか？」

確か彼は奈良家の・・・

「トーナメントって事は、優勝者は1人だけって事でしょう？つゝ事は、中忍になれるのは1人だけって事っスか？」

「いや、そうではない。この本選には審査員として『風影』殿や任務を依頼する諸国の大名や忍頭が見る事になっておる。その審査員達がトーナメントを通して、お前達に絶対評価を付け、中忍の資質があるか判断された者は、例え1回戦で負けていようとも、中忍になる事が出来る可能性もある。」

「・・・と言う事は、ここにいる全員が中忍になれる場合もあるって事か・・・何か簡単そうじゃん。」

砂の彼は、少し自分の力に自惚れておるようじゃな。まあ、これは自分自身で気付かんとならんモノじゃしな。

「つむ、じゃが逆に1人も中忍になれん場合もある。トーナメント

で勝ち上がるという事は、自分をアピールする回数が増えるという事じゃ。」

「・・・成る程な。」

「分かったかのぉ、シカマル君？」

「ええ・・・十分です。」

そう言いながら、シカマル君は父親と同じように頭を掻くのじゃった。

「では、御苦労じゃった！一月後まで解散じゃ！！」

わしの言葉を最後に、下忍達は各々の期間を有効に使う為に散って行った。さて、ナルトから何か話があるようじゃし、わしも出ようかの。



さて、じいさんも俺の事待ってるみたいだし、そろそろ行くのかな。多分そこに殆んどの上忍が来るんだろうけどね。

数分後、いの達には白がいる空き地の所に後で合流する事を伝えて、俺はこの塔の一番上の階に来ていた。

「さて、ナルト。後で教えてくれる約束だったな。お前がなぜそんなに強くなったのか、教えてくれ。」

カカシのその言葉で始まった、俺に対する質問コーナー。周りには、

カカシを始め、火影のじいさん、アニコさん、イビキ、ハヤテ、ガイ、アスマ、紅さんの8人がいる。まあ、あの場にいた特別上忍から上の人達だな。

「うーん、何でそんなに強くなったのか。それを俺に聞く事自体変な事だつて、カカシ先生もじいさんも分かってるでしょ?」

「ナルト、四代目の息子だからという理由は既に「そうじゃなくてさ、俺の中に『何が』いるんだっけ?」まさか!?」

俺のその言葉に、質問をしていたカカシだけじゃなくて、他の7人全員が警戒するように身構えた。じいさんも例外なく……はあ……やっぱり、こうなるんだよなあ……

『……ナルト……すまん、我がいるせいで……』

九尾のせいじゃない。それから、勿論父さん、母さんのせいでもない。俺は九尾が俺の中に入れてくれて、とても嬉しいんだから。

「ま、そういう事だよ。『九尾』とは和解して、チャクラを貰ったり、術を教えて貰っていたよ。」

「九尾と和解じゃと……?」

「そんな事が・・・」

「いえ、まさか・・・」

「でも、それだといいつの強さの理由にはなるわね。」

「確かにそうですね・・・ゴホッ」

「チャクラだけじゃなく、術までか・・・」

「だが、それが知られば里の者たちが何と言っか・・・」

「下手をすれば、暗部が動くぞ。」

上から、じいさん、カカシ、紅さん、アンコさん、ハヤテ、アスマ、イビキ、ガイだ。

そんな事、皆に言われなくても分かってる。だから、俺は九尾の事も、父さん、母さんの事も言いたくなかったんだ。でも、そろそろ九尾は救われてもいいと俺は思った。だから、この機会に言ったん

だ。これから、何が起ころうとも俺は九尾を守る。絶対に！！そのためなら、原作知識をここで暴露するのも躊躇わない！

「・・・じいさん達が何を言いたいかは、分かってる。でも、九尾は悪くない。悪いのは・・・うちはマダラだ。」

それから、なぜ九尾が里で暴れるようになったのか、父さんと母さんはなぜ死ななければならなかったのか、そして、うちはマダラはまた俺を狙って来る事を皆に教えて行く。

「そんな事があつたとは・・・だが、ナルト。なぜ、お前はこれらの事を知っている？九尾に教えられたにしても、うちはマダラの事に詳しくすぎる・・・」

「カカシ先生。波の国で桃地再不斬と戦ったよね？」

「ああ、確かに奴とは戦ったな。だが、それがどうした？今ではこの里の為に、働いてもらっているが・・・」

まあ、あの時の事を知ってるのは俺と白、桃地しかいないからね。俺はその時の事を詳細に皆に伝えて行く。そして、マダラが俺に接触してきた時の話を終えると、部屋に重い沈黙が降りた。

「ナルト・・・お前は俺達が知らない間に、そんな戦いまでしていたのか・・・」

「・・・うん。」

「なぜ、俺に教えなかった！！俺はお前の担当なんだぞ！？それなのに・・・」

カカシがここまで感情的になるとは思わなかった・・・でも、なんとなく嬉しい気持ちになるのは何でだろうな・・・

「・・・カカシよ、お前の気持ちも分かるがここは落ち着け。それから、ナルト・・・今までよく、頑張ったな。」

今度はじいさんが優しい笑みを向けてくる。そんな顔向けんかったのじいさん。俺は俺がしたいようにしてきただけなんだしさ。

それから、じいさんから九尾と和解した事はここにいる8人だけの秘とする事、四代目の息子だという事は、俺が宣言したかったらしるとの事、マダラの事は里の重鎮、上忍、中忍には伝える事などを話して、ここでの話は終わった。

最後に、紅さんから抱きしめられ、アンコさんには頭をガシガシと

撫でられた。……………何て役得!!!

## 次回

「あいやしばらく!よく聞いた!妙木山蝦蟇の精霊仙素道人、通称・  
ガマ仙人と見知りおけ!」

何かすつげえ、ウザい人来たあ……………

それではまた次回……………

予選終了！修行編へだつてはよっ！（後書き）

32話でした。

試合はかるう〜く流し、ようやく予選が終わりました。はあ、長かった。

書いていてホント思いましたよ、なぜこんなにも長く書いてしまったのかと。

予定では、300分くらいで中忍試験終わってたんですが・・・アホですよね私・・・500分も書いていて、まだ中忍試験終わってないとか・・・

あ、ちなみに原作崩壊って流れそのものを変えないと駄目なんですかね？私の解釈としては、流れがそのままでも中身が違っていれば原作崩壊してると思ってるんですが・・・どうですかね？

まあ、解釈の違いなので仕方ないですけど・・・

あ、何だか最近古参の方々のssが更新されなみたいで、私的には悲しいです。ssを書いている私には分かりますけど、文章って書くの難しいんですよえ・・・でも、頑張って書いて欲しいです。

新しく書いている方々のssも、ちらつと見ているので、皆さんも

書いてみてくださいいな。

作者どうしの愚痴とか言い合いたいですからね  
WWW  
WWW  
WWW  
WWW



エロ仙人、はじめましてだってばよっ！

カラン・・・コロン・・・

下駄が地を踏む度に、そのような音が鳴る。

・・・下駄を履くようになって、もう何年になるのか・・・少なくとも、ここを出る時には履いてなかったのは覚えているが・・・と、そんなどうでもいい事を考えている間に着いたらしいな。

森を行くわしの目に入ってくるのは、里を外敵から守るためにある堀と、「あ」「ん」と大きく書かれている門が外側、つまりはわしに見えるように開いている光景だ。五大国の内の一つ火の国、そし

てその中にある忍びの里で、わしの生まれ育った地……木ノ葉の里。数年前に帰って来た時も思ったが……

「ちつとも、変わってないのう。」

それにしても、ここに戻ってくるのも随分と久しぶりになるか……猿飛先生は元気にしてるかのう……クク、元気に決まっている。あの人は里の者が皆、元気で居ればいいと言う人だからのう……

森を進んで行くうちに、門も塀もその大きさを変え、大きくなっていく。そして、門を通り里の中へと入ると、直ぐに里のものと思われるガヤガヤとした喧騒がわしの耳に届いて来る。

「やはり、活気があるようだのう……ここは。」

急ぎの用があるならば、門の側にある通行人を検査している所へ向かうのだろうが、わしは今小説の取材で来とるから、無視して先を急ぐとしようかの。

里の上忍や暗部の者らがわしに気付いておるようだか……まあ、この里は良くも悪くも、『平和な里』だからのう……

そんな自分の生まれ育った里を皮肉ってから、わしは小説の取材を

『アソコ』にいつも決めておる。なぜなら・・・若い女がいるからだあああ！！むふふー、どんな女子おんながいるか、今から楽しみだわ  
い

「はあ・・・ナルト兄ちゃん最近会ってくれないんだなあコレえ・・・」

「まあまあ、木ノ葉丸ちゃん。リーダーは今、中忍になるために頑張ってるんだし、こればかりは仕方ないよ。」

「でもなあ・・・」

「でもおリーダーは・・・中忍になれるのかなあ・・・」

「ッ！！ウドン！何言ってるんだコレえ！！ナルト兄ちゃんは絶対に、中忍になるんだ！ナルト兄ちゃんはアカデミーの先生達が言うような、落ちこぼれじゃないんだぞコレ！！！」

「ご、ごめん、木ノ葉丸君。確かに、そうだよな。リーダーは強いもんね。」

ん？何やらガキどもが喚いているようだが、わたしには関係ないな。わしは早く『アソコ』に行つて、ピチピチでムチムチの女子おんなに会い

に行くんじゃないあああ！！

と、その前に・・・

「「うちの嬢さんともお近づきになるつかのう。グフフフ」

「分かればいいんだなコレ。」

そうだ。ナルト兄ちゃんは強いんだ。俺はナルト兄ちゃんと一度だけ一緒に修行したから分かる。俺は、あの時思ったんだ。じじいの

次の火影は、ナルト兄ちゃんしかいないって。でも、そう思ってるのは俺だけ。ナルト兄ちゃん本人もそんな事思っていないと思う。でも、俺はそう信じてる。火影になるのはナルト兄ちゃんだって。

さっき、ウドンにも言ったけど、アカデミーの先生達はナルト兄ちゃんの事を落ちこぼれだって言う。ナルト兄ちゃんが下忍になれたのも、一緒の班になった『うちはサスケ』って人と『春野サクラ』って人のお陰だって。でも、それは絶対ないと俺は思う。というか、俺は信じない。だって、ナルト兄ちゃんは俺のヒーローなんだから！

(ウドン！！何であんな事言うのよ！木ノ葉丸ちゃんの機嫌が悪いの、あんたも分かかってるでしょ？それから、木ノ葉丸ちゃんの前でリーダーの悪口言うなんて、何考えてんのよ！)

(うう・・・ごめんよ・・・)

俺がナルト兄ちゃんの事を考えていると、後ろの方でモエギがウドンと小声で話しているのに気付いた。この2人と今みたいに行動するようになれたのも、全部ナルト兄ちゃんのお陰だったなあ・・・でも、この2人はそれを知らないし、ナルト兄ちゃんの本当の実力も知らない。

2人がナルト兄ちゃんの事を知った時、なんて思うのか、なんて言うのか、それが楽しみな時もあった。でも、今は早く知ってもらって、俺と同じように思ってもらいたい。

ナルト兄ちゃんが落ちこぼれと言われる事が、俺は悔しい。俺は一度ナルト兄ちゃんに、言った事がある。「ナルト兄ちゃん、何で本当の力を隠すんだよ！皆本当の事知ったら、ナルト兄ちゃんの事をあんな風に言わないぞコレえ！」って。

でも、ナルト兄ちゃんは、「ん」・・・今はその時じゃねえんだ、木ノ葉丸。それにな、木ノ葉丸。お前1人だけでも俺の事を知ってくれてる。俺はそれだけで、いいんだってばよ。「そう言っつて、俺の頭をグシャグシャと撫でながらカツコいい笑顔で俺を見てきたんだ。

あんなカツコいい人を、俺は他に知らない。じじいの事を悪く言った時にも、ナルト兄ちゃんは俺を叱って、じじいがどんなに偉大な人かを教えてくれたし、俺を『火影様の孫』としてじゃなく、1人の『木ノ葉丸』として見てくれる。それが、どんなに嬉しい事が皆知らないんだ。

それに、ナルト兄ちゃんがそんな風に言われるのも、今だけだ。中忍試験本戦でナルト兄ちゃんは本当の実力を出すってこの前会った時に言っつた。だから、俺も今だけ我慢するんだ。それが、ナルト兄ちゃんの子分の俺の役目なんだなこれ！

「キヤツ！どこ触ってんのよ、この親父イー！！」バチン！！

「いやいやいや、すまんかったのうお嬢さん。それにしても、何と  
言うバインバイン。グフフフフ」

「ッツツツ！！エツチイイ！！」バチン！！

なんだ？近くの茶屋からお姉さんとおっさんが出てきたと思ったら、  
おっさんがお姉さんにビンタされた。・・・絶対原因はあのおっさ  
んにあるんだなコレ・・・よし！里の平和はじじいとナルト兄ちゃ  
んの代わりに俺が守るんだなコレ！！

「ッツツ・・・やれやれ、相変わらずこの里の女は気が強いのを。  
だが、そこがまたよし」

「おい！そのエロ親父！！この里で悪い事をするならこの『木ノ  
葉丸』が黙ってないんだぞコレえ！」

手に残る柔らかい尻の感触・・・ムチムチじゃったのう

「おい！そこのエロ親父！！この里で悪い事をするならこの『木ノ葉丸』が黙ってないんだぞコレえ！」

と、わしがその余韻に浸っておったと言つのに、誰だ？

「ん？誰かと思つたらガキだったか。はあ・・・わしはガキに用はないわい。わしに構つてないでどこか行け、シッシ！」

手の甲をガキのいる方に向けて振る。ガキに構っておつたら、取材に行く時間が減ってしまうからのう・・・

「な！？お、俺はガキじゃない！俺に「やや！そこのお嬢さん、



わしと一緒に茶でも飲まんか?」……このエロ親父がツ!!!」

ガキが何か言っておったが、それを無視して横を通り過ぎた女子にわしが声を掛けようとしたその時、喚いていたガキがわしに向かつて拳を突き付けてきた。それを片手で軽く止めて、ガキに向きなおる。はあ……面倒くさいが、このガキに少しだけ構ってやった方が、何かと早いかもしれんのう……

「のうお前、名前は何と言つ?」

「????木ノ葉丸だけど……つて、話変えるな、このエロ親父!」

木ノ葉丸……確か、猿飛先生の孫の名がそうだったような……暗部や上忍の数がさつきよりも増えてる事から、本当に孫のようだろう。このわしでも、この子に何かしたら……といったところか。はあ……本当に厄介な奴に絡まれたもんだのう。

「ああ……木ノ葉丸と言ったな?お前とその後ろのお前らにラーメンでも奢ってやる。だから、それを食べたら家に帰れ。」

「え!奢ってくれるの?なら私、一楽のラーメンが良い!!」

「僕も。」

「モエギ！ウドン！」

ガキが後ろにいるガキ2人（雰囲氣的にこのガキの連れだろう）の反応に驚いているが、わしにしてみればその反応は、願ったり叶ったりのモノだ。ここは畳み掛けるが吉だな。

「おうおう、一楽だろうが二楽だろうが、どこでも良いぞ。ほれ、早速行こうか。」

そう言つて、2人のガキを連れてラーメン屋に向かう。ちらつと後ろを窺つてみると、はじめのうちガキが喚いていたがそれもわしらが10mくらい離れたところで、「……俺も行くぞコレえ！！！」と言つて走つて来る。

クク……やはりガキはガキだのう。さて、銭は惜しいがそれよりも取材が出来なくなる事の方が痛い。早く、こいつらにラーメンを奢つてやって、わしは『アソコ』に向かう事にしよう。待っておれよ！ピチピチムチムチの女子達イ！！！！

雲一つない気持ちの良い青空。里はいつも通りの賑わいを見せて、活気に溢れている。そんな中を私は『ある人』を探して、屋根から屋根へ跳び移っていく。

視線というか、白眼を併用して様々な所を見渡して、道を歩いていく一人一人の顔を確認していく。こっちじゃなかったのかなあ……

……父上が中忍試験の予選が終わったと言ったから、こっやって探しているのに……どこにいるんですか……

あの人がいる所……向かう所……その中で最も確率の高い所は……あの人の特徴や好みなんかをもう一度自分の中で整理して、あの人に向かいそうな所を思考していく。あの人を考えるだけで胸がポカポカしてくる……って違う違う！今はその人を探すのが目的でしょ『ハナビ』！

私の名前は日向ハナビ。日向家当主、日向ヒアシの娘で日向ヒナタを姉に持つ。本当なら今の時間、父上と鍛錬してる筈なんだけど・・・あの様子じゃ無理だもんね。というか、私も早くお見舞いに行きたいのに、どうして面会謝絶なのか、それを聞くためにも私は『あの人』を探す。

どこにいるんですか・・・！見つけた！！

探していた人物を私の白眼が捉えた。全く・・・こうやって私があなたを探している間、あなたはラーメンを食べているなんて・・・でも、見つけましたよ。私は建物の屋根の上から飛び降りて、あの人がいるラーメン屋に飛び込む勢いで走って行く。

「見つけましたよ！『ナルトさん』！！」

私はそう言いながら、ラーメンを食べているナルトさんの背中に抱き付いた。そのせいで、ナルトさんが咽てしまう。ふふ それで許してあげます。

第3の試験の予選が終わった後、俺は直ぐに火影のじいさんとあの場にいた上忍、特別上忍に俺の秘密を話した。まあ、その後色々あったけど、今はこうして一楽のラーメンをゆっくり食べているんだから不思議だ。いくらじいさんやカカシが俺の事を庇ってくれたとしても、周りの人たちが俺の事を怖がらないと思わなかった訳じゃない。

いや、正直に話すと、じいさんやカカシにも、不安を抱いてはいた。火影の名を持つじいさんと俺の父さんの教え子のカカシ、この2人だとしても俺は不安だった。もしかしたら、受け入れてくれないかもしれない。そんな事を一瞬でも考えていたけど、実際には温かい手で撫でて貰ったし、怒ってくれたし、笑顔で接して来てくれた。それが、どんなに嬉しかったか知れない。

『・・・あの火影がお前を大事にしている節は何度も見ていたが・・・まさか、本当にお前を受け入れるとはな・・・我がお前の中にあるというだけで嫌悪している他の者達と違って、あの場にいた者達は全員がお前を受け入れていた。ナルト、良かったな・・・』

ああ・・・九尾。お前にも今まで心配かけたけど、俺はもう大丈夫だ。火影のじいさんが、カカシが、ガイが、アスマが、イビキが、ハヤテが、そして・・・あの姉さん達もいるからな。

「紅という女の事は良い。問題は、あのアンコとかいう女だ。あ奴は、大蛇丸の元部下だと言う話だったが・・・大丈夫なのか？」

大丈夫。あの人は大蛇丸とは関係ない。それに、最後の俺を撫でてくれたあの人の顔、お前も見たる？

「・・・・・・・・・・・・・・・・まあ、な。」

目に光るモノを溜めながら、カツコいい笑顔で撫でてくるんだもんなあ・・・・・・・・あの笑顔は卑怯だって。大蛇丸の元部下とか、あの人の性格とか、そんな理由で恋人が出来ないみたいだけど、実際あの人って美人だから人気はあると思うんだ。

「なんだ、ナルト。お前、あの娘達がいながらあの女の事を好きになつたのか？」

ち、違えよ！俺にとってアンコさんは、カツコよくて頼りになる姉さんみたいな感じの人なの！それに、娘達って何だよ、娘達って。

「はあ・・・分かってない筈がないだろうに。山中いの、日向ヒナタ、波の国で出会った白、それからテンテンとか言うお前にちよっかいを掛けてくる者、まあ後は砂のあ奴くらいか。」

いやいやいや！百歩、いや千歩譲って、いのやヒナタ、白とテンテンは・・・その、俺の事を好きなのは分かるが、テマリはないだろう！あいつにフラグを建てた覚えはない！！

『・・・ふらぐ？と言うのはよく分からんが・・・よもや、本当にそんな事を抜かしている訳ではないだろうな？』

ぐ・・・あ、ああ。俺は好きになってもらった覚えは、全くないぞ。

『・・・ならば、わしからは何も言うまいよ。お前が勝手に撒いた種だからな。』

おい、そんな意味深な事言うなよ、九尾。俺はまだ・・・

と、俺が一楽でラーメンを啜りながら、九尾と話をしていたら、小さな女の子っぽい声が残るから聞こえた。てか、このチャクラの反応から予想はついていたが、目的は俺だったか・・・

「見つけましたよ！『ナルトさん』！！」

ムグツッ！あ、あぶねえ・・・ラーメン噴き出すところだった・・・  
テウチのおっちゃんラーメンを噴き出したり、残したりすると怒  
るから俺は頑張ってる口の中にあるラーメンを飲み込んでから、背中  
にタックルしてきたちびっ子に顔を向ける。

「ング・・・ハナビ、人が物を食べている時にそういう事しちゃ駄  
目だろ？んで、俺を探してみたんだけど、何の用だってばよ。」

振り向いた先にいるのは、ヒナタと同じような艶やかな漆黒の髪を  
肩まで伸ばし、ヒナタと同じような純白の瞳と透けるような肌をし  
たちびっ子。

「はあい、ごめんなさい。」

そうやって俺の背中から離れるちびっ子。こいつの名前は『日向ハ  
ナビ』。俺がヒナタを家まで送ってやった時に出会った女の子。は  
じめて会った時は、俺の腹の下までしかなかったっけなあ・・・

「えっと、中忍試験の予選、どうでした？」

「ん？何だ、それが知りたかったのか。お前んとこの親父さんに聞  
いてないのか？」



「はい ナルトさんに直接聞きたいと思って、こつやっ探してたんです。」

「ふくん・・・ま、良いけど。俺は予選通過したぞ。お前が知ってる奴で言つと、シカマルにシノ、それからネジ先輩も予選通過だ。」

「ネジ・・・兄さんですか・・・でも、あの人なら納得です。というか、シノさんは兎も角、シカマルさんも予選通過したんですか？」

ネジの事を話すハナビの顔は、分家の者に対するモノじゃない。あれは自分よりも柔拳を使いこなす事に対する尊敬やそういうモノだ。ヒナタじゃこういう反応は返ってこないと思うから、本当に性格が全く似てない姉妹だ。というか、シカマルに失礼な事言ってるって自覚ないんだろうか、こいつ。

「シカマルは強いぞ。あいつの頭の中に何通りの戦術があるか俺は知らない。てか、ヒナタのお見舞いに行かないのか？俺はこの後、いの達と皆で行く予定だ。」

「へえ・・・ナルトさんがそう言うなら強いんですね。今度からそういう風に見る事にします！お見舞いにはさつき行ってきたんですけど、面会謝絶ってドアにあって、それで・・・これもナルトさんに聞きたい事なんです。」

面会謝絶??何でだ?まあ、何はともあれ病院に行ってみてからだな。

「悪い。俺もそれは初めて知った。検査してたからとか考えられるけど……ま。病院に行つてからだな。てか、ハナビ。お前飯は食つたのか?」

「そうなんですか……なら、私も一緒に行きます。お見舞いには行きたいですから。昼食は……恥ずかしいですけど、まだなんです。」テヘノノノ

舌を可愛く出して、お腹をさするハナビ。仕方ねえ、奢つてやるか。

「分かったよ、どうせ俺にたかる気だつたんだろ?おっちゃん、こいつにもラーメン1つ作つてやつて。」

「あ、チャーシューラーメンでよろしくお願いします。」

こ、こいつ……俺でも、月に一回食べるかどうかというチャーシューラーメンを……はあ……奢つてやるなんて言わなきゃ良かった。

「ハハハ！ナルトもこのちっこいには弱いみたいだな。チャーシューおまけしてやるから、元気出せよ。」

「ありがとう、おっちゃん。」

テウチのおっちゃんがチャーシューを一枚、俺のラーメンの上に置いてくれる。本当にこの人は気前がいいと思う。人間的にも、イルカ先生とタメを張るくらい良いからな。

そして、数分待つとハナビの前に湯気の立った美味しそうなチャーシューラーメンが運ばれてくる。

「へい、お待ち！」

「ありがとうございます。それじゃナルトさん、いただきます。」

ハナビは備え付けられている割り箸を手に取り、小気味の良い音を立てて割る。ああ・・・俺もまだ今月一回も食べてねえんだけどなあ・・・

俺は隣のハナビを横目で見つつ、自分のラーメンを食べていく。すると、今度はハナビが来た逆の方から俺が良く知るチャクラの反応が3つと、他の奴らと違うでかいチャクラがこっちに近づいて来る

のに気付いた。

3つのチャクラは木ノ葉丸達だけど、このでかい奴・・・誰だ？俺はこんなチャクラを持つてる奴、知らないぞ？ラーメンを食べながら、隣にいるハナビを守る事を頭に置いて、今も近づいてくるでかいチャクラの奴を警戒する。

そして、一楽のラーメンの暖簾を潜って来たのは木ノ葉丸達と・・・何であんたがこんな所に木ノ葉丸達と一緒に来んだよ・・・

「ああ！！！！ナルト兄ちゃん！！」

「ホントだ。リーダーがいる。」

「横にいる子って・・・誰だろう？」

「ん？何じゃ、お前たちの知り合いか？なら、ラーメン代はやるからこいつと一緒におれおう。」

そう言って、暖簾をまた潜って出て行く歌舞伎役者みたいな格好をしたオヤジ。俺はカウンターから席を立ち、そのオヤジのように暖簾を潜ってこの目で、本人かどうか確かめる。

「なあ……待ってくれればよ。おっちゃんの名前、教えてくれ。」

「ん？わしの名が知りたいか？そうかそうか。ならば、教えてやる。」

後ろから、ハナビヤ木ノ葉丸、テウチのおっちゃんの声がするけど、俺の耳はもうこの目の前の歌舞伎者の言葉しか聞いていない。

「あいやしばらく！よく聞いた！妙木山蝦蟇の精霊仙素道人、通称・Gamma仙人とはこのわしの事だあああ！！」

やっぱり……このウザい名乗りと歌舞伎者の格好……

「……伝説の三忍の1人、自来也さん……俺は『波風ナルト』、はじめましてだつてばよ。」

次回

「『波風』と言ったのう・・・お前は・・・」

「四代目火影にして、木ノ葉の黄色い閃光の息子だつてばよ。」

次回もお楽しみに。。。。。

エロ仙人、はじめましてだっばよっ！（後書き）

33話でしたあ。

いやあ、いちご100%のssを書いていたら、こっちが書けないのなんのって大変でした。

いつもより少ないかと思いますが、楽しんでくれたら幸いです。

口寄せだってばよっ！

ナルトが自来也と会う数時間前……里の外れにある屋敷の一つで、陰謀を企てている者達がいた。

「予選は無事終わり、本戦に入る訳ですが……僕はどう動きましようか？」

人影は2つ。柱に背を預けて腕を組んで外を見ている男とその男の前で膝を着き頭を下げている男の2人。

前者は背中まである黒髪を無造作に流し、人とは思えない邪悪な目を外に向けている。後者は肩には届かない白髪を後ろで一つに括り、眼鏡を掛けている。



「・・・そうね。最初の目的通り、サスケ君を狙う事にするわ。お前が本戦で戦う日向の子の白眼は欲しいけど、それはこの作戦の目的ではないから、それはお前の好きにきなさい。・・・それにしても穏やか・・・いや、本当に平和ボケした国になったわ・・・」

嫌な笑みを浮かべて話す男の言葉に「そうですね。」と笑みながら返すのは、膝を着いている男。

「どの国も軍拡競争で忙しいって言うのにねえ・・・カブト。」

「そうですね。・・・今なら取れますか?・・・大蛇丸様。」

ここで、この2人の名が分かった。片や三代目火影の教え子にして、自来也と同じく伝説の三忍と謳われた『大蛇丸』。片や木ノ葉の医療班の上忍に引き取られ、その上忍の養子として育てられた『薬師カブト』。

「まあね・・・今更、あんなじじいの首を取って楽しいかは分からないけど・・・」

「・・・そうですね?」

カブトの言葉に大蛇丸の邪悪な目は鋭さを増す。そして、大蛇丸はその目をカブトに向ける。

「僕にはまだ、あなたが躊躇しているように思われます……これから各隠れ里の力は長く、激しくぶつかり合う事でしょう……音隠れもその1つです。あなたはその引き金になるお心算だ。」

下げていた頭を上げて、下がって来た眼鏡を中指を使って押し上げるカブトは更に続ける。

「そして、彼はその為の『弾丸』であり、あなたの新たな『器』なんでしょう？……『サスケ君』。彼……というか、写輪眼はどの里も喉から手が出る程欲しいですからね。しかし、それも『ナルト君』という掘り出しモノが出てくる前までの事。あの子は、私もいろいろ弄ってみたいですよ。どうやってあそこまで『九尾の力』を自由に操れるようになったのか……クスクス、本当に興味深い。」

「フフフ……お前は察しが良過ぎて気味が悪いわ。」

「そうでもありませんよ。ドス、ザク、キン……彼らの事は知りませんでしたし、ナルト君の攻撃は正直、見えませんでした……」

2人は互いの顔を見て笑みを浮かべるが、その笑みは人を温かくするモノでは決してない。

「あの時に蹴られた所は直ぐに医療忍術で治したんですけど、驚きましたよ。下忍の・・・それも落ちこぼれと言われている下忍の攻撃が見えなかつたんですから。まあ、大蛇丸様のその怪我を負わせたのが彼だと事前に聞いていたお陰で、あの程度で済んだんですけどね。」

自嘲気味に笑みを浮かべるカブト。そのカブトに合わせるように、大蛇丸も邪悪な笑みを浮かべる。

「フッフ・・・あの子の動きを見る事の出来た者はあそこに何人いたのかしらね？まあ、だからこそ・・・お前にはサスケ君をお願いしたいのよ。」

大蛇丸の口元がっつり上がり、更に凶悪な笑みに変わる。

「彼に与える筈だった呪印は、ナルト君に邪魔されたからねえ。・・・だから今すぐ、私の所に連れて来てくれないかしら？」

「柄にもなく、焦ってらっしゃいますね。・・・そこまでという事ですか、ナルト君は。」

カブトの眼鏡は陽光を受けると反射して不気味に光る。カブトに対

抗するという事ではないが、大蛇丸も不気味な笑みを浮かべながら返す。

「そうよ。ナルト君を手に入れるのは骨が折れそうだし・・・私も本気で行かないとならない・・・なんとって、この私にこんな怪我を負わせたんだから・・・こんな所に・・・木ノ葉の里に、あの子はもつたい無い。私の手元に置いて、ゆっくり・・・ゆっくり・・・少しずつ、私色に染めて上げたいわねえ・・・フフ・・・フフ・・・」

恍惚とした表情でカブトから視線を切り、外に顔を向ける大蛇丸。おそらくだが、ナルトに今の自分の『想い』を伝えようとしているのかもしれない。だが、その大蛇丸の様子を間近で見ているカブトには堪ったものではない。背筋に冷たいモノが走るわ、本能的な恐怖を感じるわ、お尻がキュツとなるわ・・・カブトは知らず知らず、自分の尻に力を入れていた。

「・・・分かりました。では、私はサスケ君の所に向かう事にします。」

そして、直ぐにカブトは踵を返して、この場から去ろうとする。背中を大蛇丸に向ける際には勿論、お尻には注意をして・・・

「フフフ・・・待っていてね、ナルト君。あなたを直ぐに私のモノにしてあげるから・・・フフフフ・・・」

うっ……な、何だ？今寒気が走ったような……あの  
変態がまた何か企んでるんじゃないだろうか？……尻穴がキユ  
ってなったぞ……

「どうした？顔色が悪くなっとるが？」

「だ、大丈夫です。」

自来也が心配そうな表情で俺を見てくる。身体を摩って寒気を飛ば  
してから、カラ笑いで応える。大蛇丸に噂されてるかも……なん  
て言えるわけねえよ……

俺達は今、下方に滝が見える崖の上、それもその場所の部分だけが切り取られたように少し広くなっている場所に来ている。ハナビと木ノ葉丸達には「用事が出来た」と言ってから来たわけなんだが・・・ハナビはちゃんと聞きわけてくれた。でも、木ノ葉丸だけは納得していない顔をして俺を見てきたんだ。こいつは・・・と、溜め息を一つ出してから「はぁ・・・今度修行を見てやるから、頼むってばよ」と言ってみると、ケロツと態度を変えて「わかったぞこれ！」とサムズアップしてきた。・・・誰に似たんだろううな、あれは。

「そうか？ならば良いが・・・と、話を戻すが、お前・・・『波風』と名乗ったが、本当に四代目の子かろう？」

「そうです。俺は四代目火影『波風ミナト』の息子です。まあ、今は『うずまきナルト』と名乗ってるんですけどね。理由としては、三代目のじいさんが俺の母さんの姓を付けたからなんですけど・・・でも、それは別にいいんです。俺は母さんの事も大事ですから。父さんと母さんは俺の大切な人達なんです。」

俺のその言葉に呆気にとられた顔をする自来也だが、それもすぐに大笑いに変わる。ガハハハと笑う自来也の顔はとても嬉しそうな『それ』。それに俺もニカツと顔に笑みを浮かべてしまう。恥ずかしい事を言っているのかもしれない・・・だけど、この時ばかりは、そんな感情は湧いてこなかった。

そうして、一頻り笑ったあと、俺はあなたに会いたかった事、修行を付けてもらいたい事、大蛇丸が木ノ葉崩しを企てている事、などを話した。

「そうか、大蛇丸がのう……」

自来也が大蛇丸の名を出すと同時に悲しい表情を一瞬だけ浮かべる。原作でも大蛇丸を止められなかった事に凄い罪悪感を持っていたんだ。これは仕方ねえんだろうな……でも、あいつを殺さずにいるなら、多くの人達が悲しい想いをする事になる。それが分かっているからこそその苦悩なんだと思う。

「……分かった。大蛇丸の事はわしに任せろ。猿飛先生が出張らなくても、わしがあいつに引導を渡してやる……」

そう言う自来也の顔は、苦しそうなそれに俺には見えた。

それから、空気が重くなった事に気付いた自来也は頭を掻きながら、誤魔化し笑いをしたあと俺に話をふって来た。誤魔化さなくてもいいのに……あんたのその気持ちは原作を読んでいた時以上に、今の俺に伝わっているんだから。

「ゴホンッ……時にお前、わしに修行を付けて欲しいと言っていたが、どうしてわしなんだ？自分で言うのもなんだが、わしは伝

説の三忍と呼ばれてはいるが、いつもこの里にいるわけではない。  
まあ、大蛇丸の事があるから1、2ヶ月はいると思うが……」

「俺はあなたに師事したいんです！父さんの先生だったあなたに！  
」

蝦蟇の口寄せの巻物を持つてるのがあんたしかいないんだから当たり前。でも、それ以上にこの人からいろいろ教わりたいと思ってる俺がいるんだ。てか、自分で言うのもくって伝説の三忍と蝦蟇仙人とどう違うんだ？俺が名乗るとしたら、絶対に伝説の三忍の方が良いと思うんだけど……

「……はあ……まさか四代目と似たような顔で、似たような事を言ってくるのは……」

え？父さんと似たような？……父さんと似たような事言ったんだ俺……へへ

「あい分かった！お前の修行、この自来也が付けてやる！中忍試験の本戦が行われるのが1ヶ月後……ふむ、十分に間に合うな。時にお前、普段とは違うチャクラを感じた事はないか？」

自来也の言っている普段と違うチャクラってのは九尾のチャクラの事でいいんだよな？里の奴らから殺意を抱かれる要因で、桁外れの



戦闘力を生み出す一端で、何より俺の最高の相棒。

『こんな変な奴から教わる事などあるのか？口寄せなど我を呼び出せばそれでいいではないか。我でなくともミナトやクシナもお前は呼び出す事が出来るのだぞ？』

うーん・・・お前を口寄せしたらそれで十分ってのは分かってんだけど、お前を口寄せしたらこの里の奴らってば五月蠅いからよ。それは父さんと母さんでも同じ事だし。

『・・・お前がそう言うなら、我はもう何も言わん。だが・・・』

分かってるって。俺が危なくなったら出てくるってんだろ？それについてはお前と父さん達に任せてるからさ。

『・・・そうか。』

おう。お前は俺の相棒なんだから頼りにしてる。

『フンッ・・・』

「どっした？急に黙りおって。」

あ、そういや自来也がいたんだった。悪い九尾。また後でな。

俺は九尾との話を切ってから、自来也に顔を向ける。

「ごめんだってばよ。ちょっと考え事してて……でも、感じた事がありますよ。九尾のチャクラの事ですよね？」

「……そうか、知っていたのか……」

「当たり前ですよ。里の皆の反応を見ていれば……火影のじいさんには助けってもらってもいましたしね。」

俺は腹に手をやってから、優しく撫でてから口を開く。自来也に誤解してもらいたくはないから。こいつは、俺のはじめての友達なんだから！

「でも、俺は九尾を恨んでいません。こいつのお陰で俺は強くなる事が出来ましたから。九尾は俺の相棒なんです！」

自来也は笑顔で話す俺を見て、可笑しな奴だ、と口には出さずに動かすと俺の頭に手を乗せて乱暴に撫でてきた。大きな手の向こうに

見える顔には、優しい笑みがあつた。

「全く……お前は変な奴だのう！……今から教える術は大量のチャクラを必要とする！自分の意思で九尾のチャクラを引き出せるか？」

「出来ます！言った筈ですよ。こいつは『俺の相棒』だって。」

ガハハハ、そうかそうか。と大笑いする自来也。一頻り笑った後、俺の頭から手を離してその優しげな笑みを消さずに俺を見てくる。

(四代目の息子だという話から大蛇丸の話、そして、九尾の力を引き出せるか……大蛇丸と会ったと聞いた時はよく生き抜いたモノだと思つたが、成る程、九尾の力を引き出せるならそれにも納得がいく。ほんに、面白い奴だのう。)

「九尾の力が使えると言うなら、話は早い。今からお前に教える術は……『口寄せの術』だ！」

「口寄せの術……」

「そつだ。あらゆる生き物と契約を交わし、好きな時に忍術で呼び出す！『時空間忍術』の一種だ。」

時空間忍術・・・父さんの飛雷神の術もこれに通じる忍術なのかもな。あれって、ワープみたいなもんだし。

「百聞は一見に如かず・・・まずはわしが手本を見せるからう。」

右親指の腹を噛み切って、滲み出た血を左の掌に付着させる。そして、慣れた手付きで印を組んでいく自来也。

「良く見ておけのう!!」

忍法・口寄せの術ツ!!

最後に力強く左手を地面に押し当てた。その瞬間、その自来也が手を押し当てた場所から白煙が立ち込め始める。その白煙の中で巨大な陰が膨れ上がり、姿を現すのは尋常ではない体躯の蝦蟇。その蝦蟇の上で歌舞伎役者のような構えを取るのは自来也で、下の蝦蟇も同じ構えを取っている。その2人?の似合ってる事と言ったら・・・

「これが『口寄せの術』だ。名立たる忍は皆、専属と言つべき口寄せ動物達と契約しとるからう。」

蝦蟇の上から自来也が言ってくる。カカシは忍犬、火影のじいさんは猿魔、そして父さんと自来也は蝦蟇、綱手は蛞蝓だし、大蛇丸は蛇だ。有名なところで言うと、こんな感じか？

「お前も覚えておいて損はない。蝦蟇よ、その坊主に巻物を渡してやれ。」

自来也にそう言われた蝦蟇は、口に咥えていた大きな巻物を舌を伸ばして俺に渡してくる。それを地面に置いてから開く。

「それはわしが代々引き継ぐ、口寄せの蝦蟇達との契約書だ。」

巻物の中には多数の名前が書かれていて、そこには父さんと自来也の名前もある。

「自分の血で名前を書き、その下に片手の指全ての指紋を押せ！」

右手の親指の腹を噛み切って、全部の指に血を付ける。親指の傷は九尾の力で直ぐに治ってしまうから、直ぐに名前を書いて指を押し付けた。勿論、名前は『波風ナルト』って書いた。

「あとは呼び出したい場所に、チャクラを練り契約した方の手を置

く。印は『亥・戌・酉・申・未』だ。」

自来也の言う通りにチャクラを練り上げて印を組んでいく。

亥・威・酉・申・未……そして、右手を地面に押し当てた。

### 忍法・口寄せの術

ボンツという音と一緒に立ち込める白煙。その範囲は自来也のやった時と違って小さなモノだ。だが、小さいと言っても俺と同じ大きさの白煙と陰……さて、どんな奴が出てくるか……

『……お呼びにより、参上しました。』

「ほう……いきなり成功させるとはな。」

自来也の言う通り、俺は一発で成功させた。そして出てきた蝦蟇は、原作でも見た事のない奴だった。

色は橙、模様は斑、そして体中に傷を付けている。更には、騎士のソレのように片膝を着いた構えを取る蝦蟇。こんなカッコいい蝦蟇いたんだ……

『自来也様、あつしは今回何をすれば……』

「いやいや、お前を呼んだのはその坊主で、わしではない。」

自来也にそう言われた蝦蟇は俺の方に向き直ると、片膝の姿勢を解いた。

「えっと、俺がお前を口寄せした波風ナルトだ。よろしくな！」

『……こんなガキがあつしを呼んだと言うのですか？……信じられませんねえ。』

こゝこの蝦蟇野郎……自来也と俺の態度が違い過ぎはしねえか？おい。

「まあ、そう言つなガマ虎。本当にこいつがお前を呼んだんだ。それにこいつの名前を聞いて、何も気付かんか？」

自来也はいつの間に降りていたのか、口寄せした蝦蟇を還して俺の近くに寄って来る。

『……!!……成る程、四代目様の息子殿でしたか……これはとんだ御無礼を……あっしの名はガマ虎。ガマブン太様の舎弟をしている者です。』

そう言つて頭を下げるガマ虎だが、自来也にしていたような礼ではなく、仕方なくしているといったそれだ。そして、頭を上げたガマ虎は俺にキツと鋭くした目を向けて来たかと思うと……

『四代目様の息子殿、あっしは自分のこの目で見たモノしか信じれない夕チなもんで……ひとつ、お手合わせ願えますか?』

……決めた。こいつ、俺の舎弟にする。絶対決めた。

「ガハハハ!!これは良い!ナルト、こいつは蝦蟇の中でも特に『義』を重んじる奴でな、こいつに認められたら他の蝦蟇にも認められたと思えばいい。まあ、一匹五月蠅いのがいるが、それはまた後で呼んでから認めさせればいい。」

大笑いしながら大きな掌で俺の背中を叩いて来る自来也。その自来也の掌から逃れて、ガマ虎と対峙する俺。

「……手加減してやるってばよ。」



『……四代目様の息子殿ですし、怪我が目立たないように攻撃  
しますよ。』

「……………」

『……………』

俺とガマ虎の間でバチバチと火花が散っているのを感じる。自来也  
はその様子を見て、笑みを浮かべている。

（しかし、ナルトを見ておるとお前を思い出すのう……………なあ四代目  
よ。）

ナルトが口寄せしたガマ虎と対峙している時……場所は打つて変わって中忍試験の予選をやった中央の塔の中……

動物を模した面を付けた暗部達が、次々と一つの人影に生命を絶たれて行く。その人影は特に焦った様子も見せずに歩を進める。そして、ある部屋のドアを軽く叩き、一呼吸を置いて静かに開けた。

「……失礼するよ。」

「だ、誰だ？」

部屋にいたのはうちはサスケ。サスケがなぜこの部屋に一人にいるかと言うと、試験の予選が終わった時にカカシにここで待っているように言われたためだ。ちなみに、カカシはいつもの遅刻癖を發揮して、ナルトとの話を終えてから慰霊碑の前に行っていたりする。

「僕だよ。『薬師カブト』……優秀過ぎるってのも考え物だね。僕らは目立ちすぎたんだ……」

人影の正体はカブトだった。カブトは大蛇丸の命令に従い、サスケを攫いに来たのだ。スタスタとサスケの傍まで歩いて行くカブト。サスケは直ぐにポーチからクナイを取り出して構えた。

「大蛇丸様の眼に留まったのはお互い不幸だったかな、サスケ君？」

「お前何を言っただやがる！それ以上近づいたら……」

サスケのその脅しにも臆さずに、カブトはサスケの2m程のところまで来てやっとその歩を止めた。

「僕としてはナルト君の方が数段実用的だと思うんだけど、大蛇丸様がどうしても君を攫って来いって言っただよ。」

当初の大蛇丸の目的は『うちは』の血。だが、今となっては『うずまきナルト』が目的となった。だが、大蛇丸はこの少年をも欲しいと言っ。

（欲深いと言うのだろうか、あの人こそ……）

「うちの血？ナルトが目的？」

サスケが疑問に思うのも仕方ない。自分が知らない所で何かが起きている・・・そう思えば人間誰しも混乱してくるものだ。

捕らえるのが困難なナルトより、抵抗しても然程問題がないサスケを先に・・・カブトはその大蛇丸の命令通り、サスケを気絶させて連れて行こうとメスを取りだした。

だがその時、カブトは背後から気配を感じて、口元を歪めて己の脇の下からメスを投擲するが、その気配の持ち主はいとも簡単にメスを掴み取った。

「流石カカシさんだ・・・僕の死角からの攻撃を止めるなんて。」

木ノ葉で火影の次に強いと言われている『はたけカカシ』。カカシは絶妙のタイミングでこの部屋に現れた。

「お前・・・ただの下忍じゃないでしょ？」

サスケが俺の登場に驚きの顔を浮かべるが、それも次の瞬間には安心したそれに変わる。こいつがあんな顔をするなんてな・・・薬師カブト・・・何者だ？

「俺の気配に気付いて、すぐに武器を構えるなんてね。・・・大した奴だ。」

「いえ、それ程でも。」

「サスケに何の用だ？事と次第によっちゃあ、お前を捕まえて尋問する。」

「出来ませうかねえ……」

ゆっくりと俺の方に振り返るカブト。口元を楽しそうに歪ませて俺を見てくる。こいつ……

「あなた如きに……」

「……その『如き』と試して見るか？」

部屋の中に殺気が充満していく。サスケに俺が動いた後部屋を出るように合図を送る。それに頷いて応えるサスケ。フフ……こいつも素直になつたなあ。

奴はメスを、俺はクナイを手に持つ。そして……先に動いたのは奴だった。手に持ったメスを俺の頸動脈目掛けて滑らす。サスケは俺の合図の通り、俺とカブトの脇を走り抜けて部屋を出て行く。

「くッ!！」

それを辛うじてクナイで受け止める。こいつ、上忍並みの強さか！！

「カカシさん、僕の事・・・侮っていたでしょう？」

奴の眼鏡が光で反射して表情が見えない。だが、口元が笑っていることから笑みを浮かべている事は分かる。

「余り図に乗らない方が良いですよ？・・・あなた『如き』の実力者ならそこら辺に居るんですから・・・」

嘲笑を含んだ物言い。それを完全に無視し、繰り出してくる斬撃を捌いていく。チッ！下忍と言う話だったが・・・確実に俺と同じくらいに強さだぞ、こいつ！

内心で舌打ちをして、次々と襲い来るメスの嵐を全てクナイで捌く。そして、メスを捌くと同時に後方に跳んで間合いを取る。

「お前・・・確か木ノ葉の忍医の息子だったな・・・うだつの上がないダメ忍者だった筈だが・・・」

「今度からは暗部の数を倍以上にした方が良いでしょう。」

「黙って質問にだけ答える。」

「『嫌だ』と言ったら?」

楽しそうに嘲笑うカブト。それに少しだけ怒りを覚えるが、冷静さを欠くなど俺はしない。

「質問をしてんのはこっちだ。……大人しく答える。お前は……『大蛇丸』と繋がっているのか?」

「別にあなたに答える義理はないと思いますが……そんなに知りたいのなら力尽くで吐かせたらどうです?」

……いい度胸だ……

「なら……そうさせて貰おうかッ!」

クナイを逆手に構え、自分の出せる最も早いスピードで突っ込んだ。狙いは奴の首筋。だが、それも寸前の所でメスによって遮られる。金属同士がぶつかって甲高い悲鳴を上げた。



「フフ・・・幾ら木ノ葉一の業師のあなたでも、こんな狭い場所では扱える術が限られてくる・・・」

ギリギリと互いの刃物を押し合う。奴の顔を見ると先程と変わらぬい笑みが浮かんでいる。・・・俺をここまで馬鹿にしてくる奴は久しぶりだな・・・

奴は空いている方の腕で手刀を繰り出して来る。狙いは俺の首筋だ。それを頭をずらして紙一重で避けるが、次の瞬間、俺の首筋から真っ赤な鮮血が噴き出した。

「なッ!？」

紙一重とは言え、確実に避けた筈だ!

「カカシさん、あなたは本当に僕を侮っていますよ。いや、医療忍術をと言った方が正しいですかね？」

カブトは手刀を眼前に構えて俺に見えるようにしてくる。それを注意して見てみると指先から光状の刃物が見えた。

「チャクラの解剖刀・・・聞いた事ありますよね？」

首筋から溢れる血を空いている手で押さえて、必死に止血を試みる。だが、そんな事で止まる訳もなく俺の首からは血が流れていく。

「医術は時に殺人術にも成り得る・・・だってそうでしょう？人体の構造を知らないと言療は出来ないんですから。そして、その逆も然り・・・」

今頃になってやっと分かった。眼前にいるこいつは間違はなく自分と同等、もしくはそれ以上だと。最初から全力を出さなかった甘さを呪うと同時に、血を流す首に押し当てている手に力を込める。

「今日はサスケ君を攫って行く予定でしたが・・・止めて置きます。これなら、いつ何時でも奪えますから。」

押し当てていたメスを引いて、後方に跳ぶカブト。そして、下がって来た眼鏡を中指で押し上げた。

「それに『窮鼠猫を噛む』と言いますし・・・あなたに捨て身で来られたら溜まった物じゃありませんしね。」

そのまま、カブトは部屋の窓に近づくと、手刀を振り上げて無造作に窓を切り裂いた。

「それでは僕はこれで・・・あ、そうそう。ナルト君に『よろしく』  
言っておいて下さい。」

「・・・どう言う意味だ？」

「大蛇丸様のお言葉なんです。」

「お前、やはり大蛇丸の・・・」

「ナルト君程の人材が木ノ葉に居る事は『宝の持ち腐れ』だそうですよ。まあ、僕もそう思いますけどね。」

そんな事を言いながらカブトは窓枠に足を掛けた。

「最後に・・・次に会う時はもっと僕を楽しませて下さいね、カカシさん？」

窓から飛び降りたカブトの身体は重力に従って下に落ちて行った。  
途中、生い茂った木に降り立つと奴の気配は完全に消えた。

「まさか、これ程の奴が大蛇丸の元に居るとは・・・」

完全なる敗北感が俺を包む。写輪眼を出す暇もなく、ここまで良いようにされるとは……

「……俺も、もう1度鍛え直す必要がありそうだな。」

拳を握り、力を込めて行く。爪が掌に食い込んで血が出ているのも関係なく、俺はカブトが飛び降りた窓から外を見ていた。

次回

『若、あつしは何をすればいいでしょうか？』

・・・なんで、こうなっちゃったんだ・・・

それではまた次回・・・

口寄せだつてばよっ！（後書き）

34話でした。

約2週間放置してすみませんでした。活動報告で書いたと思います  
が、今現在引越しの準備中のためにssを書いていない暇がないんで  
す。時間を見つけては書いていたんですが、こんなに掛ってしま  
いました。

待っていてくださった読者様方には申し訳ない気持ちでいっぱい  
です。これからも、更新が遅れることがあるかもしれませんが、決  
して投げ出さずに完結まで行こうと思っっているので、これからも「  
たわれな燕」をよろしくお願いします。

いちごの方はもう少しかかりますが、いちごの方もあと数日で更  
新しますので、そちらもどうぞ読んでみてください。

舎弟？ネタ忍具？どうなってるんだってばよっ！

『この不肖ガマ虎。この命尽きるまで、若のために使う事を誓う所存です。』

俺の目の前で、騎士がするように片膝を付いた姿勢でいる一匹の蝦蟇。そう、こいつは俺が口寄せで呼んだ蝦蟇で、名前は『ガマ虎』。こいつがなぜ俺に対してこんな態度を取っているかと言うと、まあ簡単な話俺がこいつとの組み手に勝ったからだ。舎弟にするという目的は達成した訳なんだけど……

『それにしても本当に若は、四代目様に似ておられます。少し前までのあつしをブツ飛ばしてやりたい。なぜ、一目で若の偉大さを把

握出来なかつたのか、このガマ虎一生の不覚でございます！』

ああ、五月蠅い五月蠅い。さつきからこの調子で、俺の目の前で姿勢を崩さずに次から次へと俺に対する美辞麗句を言ってくる。そのガマ虎を見て完全に大笑いしているのは、自来也。ガハハハと笑いまくっている自来也に止めろという意味を込めた視線をやるが、それを無視？しているのか分からないが、笑うのを止めない。

「……はあ……ガマ虎。」

『はい！何でしょうか、若。このガマ虎、若のためなら何でもやっ  
てのけますぜ！』

「……はあ……その無駄に五月蠅い口を閉じる。んで、今は  
何もすることないから妙木山に還ってる。」

『そ、そんな若、あつしは……ボンツ……！』

ガマ虎が何か言っていたが、それを無視してガマ虎を還す。何が、  
蝦蟇の中で特に『義』を重んじる奴だ、よ。全く、只五月蠅いだけ  
じゃねえか。まあ確かに、実力はそれなりにあつたけどよ……  
それにしても、ウザい。



「なんだ小僧、ガマ虎を還したのか。ククク、だが久しぶりに大笑いさせて貰ったわい。」

「……………別にいいですけど、笑い過ぎですよ自来也さん。はあ……………」

本当だつての全く。この人、ガマ虎がああなつてからずっと笑つてばつかったんだぞ。正直、かなりムカついた。溜め息を出すのと同じ時にそういつたいろいろな意味を込めた視線を自来也にやるが、俺のその視線を無視してクククつと笑い続けている。

「すまんすまん。だが、これで口寄せは出来るようになっただろう。これで、いついかなる時でも蝦蟇を呼び出して戦わせたり、援護してもらつたり出来る。戦術の幅が広がればそれだけでお前の力は何倍にもなるんだからのう。」

確かに、自来也の言う通りだ。口寄せが出来る、それだけで『戦略』が増える。戦術なんて腐る程あるんだ。俺は『戦略』を増やすために口寄せを覚えたんだ。まあ、いざとなつたら九尾を出して殲滅して貰うけど……………それは、本当に最後の手段にしたい。だから、自来也には感謝したいんだけど……………はあ……………仕方ないよな。自来也つてこつという性格だし。

「そう……………ですね。戦術の幅が広がれば、俺も動きやすくなりますし。ありがとつございました、自来也さん。」

ぺこつと頭を少しだけ下げて、礼をする。これを受けて自来也が、気にするなとか、弟子の為だとか、いろいろ言ってきたくれる。少しだけ照れてるのか？まあ男の、それもこんなおっさんの照れてる顔なんて見ても嬉しくないから、どうでもいいか。そう考えていた時、自来也が口を開いた。

「それにな。お前がこうも簡単に、口寄せの術を成功させるとは思ってもみなかつたんで、少し驚いている。1ヶ月あるとは言ったが、まさか初日でとな。まあ、そのお陰で他にもいろいろと教える事が出来るのだから。」

（まさか、四代目よりも才能のある者がいるとはのう……ミナト、クシナ、お主らの息子は本当に、不思議な奴だのう……）  
成る程。原作のナルトが馬鹿みたいに時間をかけたから、口寄せしか教えられなかったのか。でも、俺って大抵の術は父さんや母さんから教わってるんだけどな……。まあ、自来也しか使っていない術とかには興味あるし、覚えて損はないだろう。でも、それは明日以降にしてみらいたいのが正直な思い。ヒナタのお見舞いもそうだけど、俺の『目的上』他の奴らにも会っておきたいんでね。それに、時間的にもギリギリだしな……

「だがまあ、今日はいいだろう。明日から本格的な修行に入る事にして、今日は家に帰って準備をしてこい。わしはここで待ってるから。」

（わしは、これから猿飛先生の所に行かねばならないからのう。）

お、まさか自来也から今日は終わりって言って来るとは思わなかった。自来也の優しさなのか、それは分からない。だけど、ここはラッキーと思って一度帰る事にするか。父さんと母さんにも、自来也の事教えたいし。二人とも何て言うかな？父さんは、会いたいつて言うと思うけど、母さんは・・・自来也を殴るかもな。変態ジジイとか言ってる・・・ま、まあ、言ってみないと分かんねえし、先ずは帰りますか。

「分かりました。修行に必要な物を持って、明日の朝にここに戻ってきます。自来也さん、本当にありがとうございます。それでは・

」

そう言つて、俺は瞬身の術で移動した。さて、俺の目的である大蛇丸の邪魔をする為に俺の方でも動き始めようかね。俺の持っている忍具で、ネタ用でありつつ、それでも最強??に近い力を持っている忍具を、『あいつら』に渡しに。

んで、やって来ました木ノ葉病院。時間的には午後4時くらい。いの達はもう帰ってんだろうか……。てか、ハナビ曰く、面会謝絶って事だったが……。とと、ここか、ヒナタの病室は。トントンとドアをノックしてから、「ヒナタいるか？」と声を掛ける。

すると、「な、ナルト君!？」といった慌てたような声がしたと思っいたら、ガシャンとかワキヤアア!とか物を落とす音や悲鳴?が部屋から聞こえてきた。何やってんだ、ヒナタの奴?ま、それも入れば分かるって事で……

「入るぞ〜って……。本当、何やってんだ？」

「あ、あははは……」 / / /

ドアを開けて俺の目に飛び込んできた光景は、ベットから落ちたと  
思われるヒナタが頬を染めながら笑みを向けている光景だった。周  
囲に目をやれば、何やら皿のような物が逆さになって転がってるの  
を発見した。これが、多分ガシャンって音の正体だと思う。それか  
ら、ワキヤアアって悲鳴はヒナタがベットから落ちた時の悲鳴か  
ね。ま、兎に角……

「ベットに戻してやるから、じっとしてろよ。」

「え？ちよ、ナルト君！？」 / / / / /

ヒナタの膝裏と肩に手をやって抱きあげてベットに戻してやると、  
ヒナタはあうあうと顔だけじゃなく首と耳まで真っ赤に染めながら、  
目を回すといった芸当を見せてくれた。どこまで、照れ屋なんだよ。  
……あ、勿論。下に転がっている皿を台の上に戻すのも忘れな  
ったぞ。

「ヒナタは照れ屋だもんな。よしよし。」

「あううう……」 / / /

そうやってヒナタの頭を一通り撫でてやってから、当初の目的通り、お見舞いに来た事を告げた。

「あ、ありがとうナルト君。皆はナルト君が来るちよつと前に帰ったよ。あ、いのちゃんが『ヒナタのお見舞いより大事な用って何よ！』って怒ってたから、会った時に謝っておいた方がいいかも。」

いのが怒るのも仕方ないよな。友達が大事って言ってる奴が、友達より用事を優先させんだもんな……。いのに謝るのもそうだけど、ヒナタにも謝らないとな。

「いのに謝るのもそうだけど、ヒナタもごめんな。直ぐに来れなくて……。でも、お前が大事な友達ってのは変わらないから。それだけは分かって欲しい……」

「大事……。あ、う、ううん！気にしてないから大丈夫だよ！ナルト君が友達を大事に、大切に思ってるのは皆知ってるし、いのちゃんもナルト君に会えなかったから怒ってただけだと思うし、それからそれから……」

必死になって俺に話すヒナタを見ているのも楽しいけど、そろそろ止めてやるか。話が進まないしな。ちよつと勿体無いと思ってしまう俺は間違っていないと思う。

「ごめんごめん。ちゃんと伝わってるから、もういいぞヒナタ。」

「えと、あと、それから・・・あ・・・うん・・・」／／

ホント、なんでこんなに可愛いかねえ〜こいつは。原作のナルトがなぜヒナタに惚れないのか、全くもって理解出来ん。と、徐々に原作ナルトに愚痴ったな。

「でも、ヒナタが元気そうで本当に良かった。2週間くらい入院って事だけど、中忍試験本戦は見に来れるのか？」

「うん。本戦は絶対に観に行くよ。予選でナルト君の戦う姿観れなかったし、今度はちゃんと応援したいから。」

そう言っただけで俺に満面の笑みを向けてくるヒナタ。俺もその笑みに応えるように、ヒナタに笑みを向けてから親指を立てて、おう！と返した。それから、面会時間ギリギリまで俺達は話をしてた。その時に、あのネタのようであんなに忍具をヒナタに渡した。その時の情景はこんな感じだ。

「あ、話は変わるんだけどよ、ヒナタに俺から渡したいモノがあんだよ。」

「渡したいモノ？」

コテッと首を傾げるヒナタに笑みを向けつつ、腰のポーチから一つの短い巻物を取り出すと同時にヒナタの前で開いて、口寄せの術を行使した。ポフンツと白い煙が目の前で上がったからか、ヒナタはビクツと身体を震わせた。

「っと、『コレ』をお前に渡したいと思っただよ。」

「これって……」

ベットの自分の足のう、そして巻物の上に現れたその忍具にヒナタの目は釘付けになる。それを確認して俺は口を開いた。

「そいつは、『魔甲拳』。俺が作った忍具だ。」

「まこつ……けん……」

両手で魔甲拳を持つヒナタに、説明を続ける。ちゃんと聞いているか微妙だが、それについては気にせず説明していく。

「そつだ。利き手とは違う腕に装着して、アムドって合言葉を言う  
と鎧に変化する。んで、こいつの特徴は性質変化の忍術、まあ火遁



とか風遁とかだな。そんな忍術を無効化してくれるつつ俺達忍者にとつて少しだけ厄介な代物だ。ヒナタは柔拳使うだろ？だから、それは敵の術を気にせず体術に持ちこめるようにして事で作った。」

「忍術を無効化！？それって……」

「まあ、ある程度のこと言葉が付くが、本当に大半の忍術は効かないぞ。まあ、幻術は別だがな。あれは聴覚、嗅覚、視覚っていうものに働きかけるから、それらを無効化は出来ない。ま、鎧って言うからには体術で攻撃されても防御力は上がる。ま、こんくらいだ。あ、手甲に変える時はもう一度アムドって言えばいいからな。」

そうやって締め括り、俺はヒナタの反応を窺う。ヒナタは、両手に持つ忍具がそんな凄い力を秘めている事に対する驚きと、なぜそんなモノを私に？という疑問でいっぱい顔を俺に向けてきた。

「その忍具がお前の事を守ってくれると思ったからだな。俺が助けに行ければ良いんだけど、それも難しいって予選でお前がやられた時に思ったんだ。だから、少しでもお前の命を助けるために、コレを渡すんだ。」

大蛇丸の企む、木ノ葉崩し云々をヒナタに教える事も考えたが、それは皆揃った時に言おうと思う。皆には我愛羅達砂の忍びを相手にするんじゃないくて、大蛇丸が口寄せした蛇の相手をしてもらおうっ

て考えてる。ま、原作同様にカンクロウの相手をシノがやってもいいし、テマリの相手をシカマルといの、チヨウジの『いの・しか・ちよう』トリオがやってもいい。

お守りとして。戦力のアップとして。それが今回、皆に忍具を渡そうと考えた理由だ。思い通りに使えるようになるには、一ヶ月という時間は絶対に足りない。でも、皆の力を少しでも上げる事にはつながる筈だ。

「……うん。私もただナルト君に助けてもらおうじゃなくて、自分で戦えるようになりたい。だから、ありがとう、ナルト君！」

そう言うヒナタの目は、班決めの時や予選でカブトと戦う時に見せた、力強い目をしていた。

ナルトがヒナタの病室を訪れた日の翌日。時刻は正午を回り、日が一番高い時……火影邸にて現在木ノ葉にいる上忍、特別上忍、つまりは木ノ葉の誇る精鋭達が集まっていた。

「既に聞いておる者もおろうが、今朝方、桔梗城の傍らで月光ハヤテがボロボロの状態で発見された。」

三代目火影の言葉通り、ナルトが修行の準備を自宅でミナトとクシナと話しながら行っている時に、起こった事件である。原作知識を持つナルトだが、いつハヤテがカブトの後を付けるのか、それを知らなかつた。だから、影分身を一体、虫に変化させてから我愛羅の側にいる時に我愛羅の服に張り付かせておいた……結果として、影分身はハヤテを守ったが、ハヤテは手傷を負わされてしまったのだ。ナルトがそれを知ったのは、こうして三代目火影の言葉を聞いている者達より早い時間、それも夜中の事であった。だが、今ここでそれを述べる時ではないので、置いておく事にして、三代目火影達の話に耳を傾ける事にする。

「なっ……ハヤテが!？」

三代目火影の言葉に最初に反応したのは、アスマだった。すし詰め状態の火影邸であつてもタバコ……ではなく、タバコに良く似たシユガレットを啜えているアスマ。それに、微妙な視線を送る忍びがいたとか、いなかつたとか……

「そんな……」

「馬鹿な!」

「相手は……大蛇丸ですか？」

「いや、そう簡単に決め付けられないだろう。ハヤテが付いていたのはおそらく、カブトとかいう音のスパイだ。ま、大蛇丸が何かしようとしているのは、確かだが……」

(狙いは……サスケとナルト。片や写輪眼を持つ最後の一人、片や四代目火影の忘れ形見であり、九尾の人柱力。それに、あのカブトとかいう音のスパイ……問題は山積みか。)

紅がアスマの後に続き、それからイビキ、アニコ、カカシという順で口を開いた。紅とイビキは、アスマ同様なぜ?といった疑問を、アニコはそれをやったのが大蛇丸なのかという疑問、そして、カカシは自分と同等の実力だったカブトがやったという確信をそれぞれ

口にしたのだ。

「じゃあ、中忍試験を中止して・・・大蛇丸を！！」

「いや、あ奴はアンコに正体を明かし、中止するなと脅しを掛けてきておる。この同盟国の忍びが一堂に会する、この中忍試験をな。」

「それに、カブトって音のスパイは医療忍術を扱うんだが、実力は俺よりも上かもしれない。」

カカシは首に巻いてある包帯に手を添えて、苦い顔をして言葉を紡ぐ。その刹那、この場に緊張が走る事になった。今の木ノ葉で火影の次に強いと称されるカカシよりも実力が上・・・その言葉を聞いた者全てが思った。『そんな馬鹿な』と・・・それは、中忍試験を中止して大蛇丸を倒すと言った、忍びも同様であった。

「カカシの言葉も気に掛るが、ヒルゼンよ、それはどう言う事だ？」

三代目火影の補佐兼ご意見番の水戸門ホムラが聞き返す。ご意見番というからには、火影の次に偉い人なのだろう。カカシの言葉で静まっていた場を、元に戻すというのも変な表現だが、いくらかの緊張感が場に戻ったという事だ。

「大蛇丸は一人で小国を落とす程の力の持ち主。おそらく、この里を抜けてからどの国も眼を付けておった忍びじゃ。その上、都合よく木ノ葉に恨みを持つとる。どの国も欲しがらさ。」

「では、まさか・・・同盟各国が大蛇丸と組んで、木ノ葉を裏切るとても!?」

その忍びの言葉に目を細くするだけで三代目火影は無言を通した。それは暗に、そうだと言っているようなもの。そして、アノコは三代目火影のその目を見て、悔しげに臍を噛んだ。だが、そんな三代目火影の代わりにカカシが口を開いた。

「ま、同盟条約なんてのは口約束と同じレベルだよ。かつての忍界大戦がそうだったように・・・。」

片膝を立てて、その膝の上に左腕を乗せながら話すカカシ。その口調には、重いモノが含まれているのを誰もが悟った。

「兎に角、今は情報が少なすぎる。余計な勘繰りはやめじゃ・・・。」

カカシの言葉を止めるように、三代目火影は言葉を被せる。それは、空気が重くなるのを防ぐためだったのかもしれないし、カカシを思ってたったのかもしれない。そして、そこにもう一人の補佐兼ご意見番のうたたねコハルが口を開いた。

「既に各国へ情報収集に暗部を走らせてある。迂闊に動く危険じや。そこに敵の狙いがあるやもしれん・・・」

「それに・・・」

コハルの言葉に続くように、三代目火影は口を開き、一端そこで止めると目の前に座する忍び達に目を走らせ、表情を緩めた。

「わしは貴様らを信頼しておる。」

三代目火影のその一言で、この場にいる木ノ葉の精鋭達全ての忍びの表情が引き締まったのだった。

「いざの際には、木ノ葉の力を総結集して戦うのみよ。」

最後に三代目火影がそう口にして、この度の集会はお開きと相成った。

影分身からの情報共有？のお陰でハヤテが負傷した事を知った俺だったが、苦々しく感じるより、保険を掛けておいて良かったといった感情しか生まれなかった。いや、ハヤテには死んで欲しくないなあ〜とは思っていたから、我愛羅と並んで予選を見ていた時にスツと影分身虫変化を我愛羅の服に紛れ込ませていたわけだ。

ま、怪我はしたようだけど、助かって良かったじゃん？的な感じな訳だ。勿論、ハヤテを攻撃したバキについては早々に退場してもらいはしたが、一ヶ月もあれば治る怪我だと思っし、木ノ葉崩しには参加してくるのは確実だ。あ、勿論『俺』だって分からないように



影分身には虫の変化を解いた後、モブっぽい忍びに変化してもらった。

だから、あんまり心配はしてないんだよね、俺ってば。さらに言う  
と俺は、俺の大事とか大切とか思っていない奴がどうなるうが知った  
事じゃない。だから、まあハヤテについてはこんな感じな訳。てか、  
自来也の所に行くのといの達に忍具渡すのどっち先にすっかなあ・・・  
どっちも俺にとって重要な事だからなあ・・・  
・・・良し、自来也のそこには影分身に行って貰って、いの達のと  
こには本体の俺が行く事にする。影分身が修行すれば本体の俺にフ  
イドバックされるのは今更だし、自来也もそこんとこ分かってく  
れるだろ。

「さて、皆の所に行きますか！まずは・・・いのだな。」

そして俺は、いのがいるであろう山中花店フラワーショップに向かって、瞬身の術を  
したのであった。

次回

「シノとチヨウジには……コレだ！」

「「おおー!」」

「シカマルとキバには……コレだ!」

「「おおおおー!」」

「そんでもって、白には……コレだ!」

「うわぁ……ありがとうございますナルト君!」

「ねえナルト、私には?」

「いにもあるっての。ヒナタと対称になるように作ったコレだ!」

「ふ、ふん!あ、ありがとう……」//

それでは、次回もお楽しみに。。。。。

舎弟？ネタ忍具？どうなってるんだってばよっ！（後書き）

さてさて、35話でした。活動報告やいちごの世界への方を見てくれている人は知っていると思いますが、うたわれな燕生きていますよ。

そして、11日という東北大震災から殆んど3週間ですね。お待ちせしました？ナルト最新話です。まあ、私としてはもう少し書いてから更新したいと思っただんですが、この駄文ssを待つてくれている人が一人でもいるならと思い、更新した次第です。中身はいつもと同じように微妙く駄文く誤字多数くって感じですが、楽しんでもらえれば幸いです。

あ、最後に俊さん。今まで頂いていた忍具をこころでパーっと出しますので、ちよっと違うなあって思ったら、指摘してもらってかまいませんからね。

それから、他にも提供していただいた皆さんの術や道具など、これからバンバン使っていいこうと思ってます。なんせ、自来也に修行つけてもらうってこういうイベントがありますからwww

それでは、長々と失礼しました。それでは次回の更新まで……

それぞれの修行へだつてばよっ！

時刻は正午過ぎ・・・ちょうど火影邸にて木ノ葉の精鋭を集めて行われている集会と同じ時間。山中いのは、木ノ葉の里で4つある花屋の内の1つである自分の家がやっている『フラワーショップ山中花店』で店番をしていた。

店の中には、女性客が二人と店番をしているいのの三人だけ。母親は商品である花の買い受けに、父親は分析や解析などを行う部署の偉い人なので、そこで部下とともに仕事をしているのだが、いのは奈良家、秋道家の当主二人とお酒でも飲んでいと確信していたりする。

「ナルトの奴、なんでヒナタのお見舞いに来ないのよ・・・せつかく手作りのお菓子作ったのに・・・」

いのが言うように、昨日ヒナタのお見舞いに持参したのは、手作りのお菓子であった。ヒナタのために作ったと本人は言っているが、ヒナタ達にはナルトのために作ってきたという事はバレバレであった。だが、ご存じの通りナルトがヒナタの病室に訪れた時には、いのを含む全員は帰っていた。当然、いのが作ったお菓子はシカマルをはじめ、チヨウジやキバ、シノ、ハナビ、ヒナタといった者達に

食べられてしまったのは言うまでもないだろう。勿論その中でもチヨウジが多く食べたのも言うまでもない事であるのだが……

それも相まって、いのは昨日ヒナタに愚痴っていたのだ。他の面々、シカマルは触らぬ神に祟りなしといった具合にいのと絡もうとはせず、チヨウジは病室にいる間ずっと皆が持参したお見舞いの品を食べ続け、キバはいのに負けじとヒナタに話し掛けるが悉くいのに邪魔され、シノは病室の壁に背を預けて口を閉ざし、ハナビは姉といの、キバの三人の会話？が面白いのか終始笑っていたりと、なんとも言えないカオスっぷりをここでも繰り広げていた。

だが、それも昨日の話。いのは今、お客である二人の女性を何ともなしに見ながら、ナルトに対する愚痴を言い続けている。また、ナルトがいの達が帰った後にヒナタの病室に訪れた事を知らないでいたりするのだ。

「それに、用事って何よ。ハナビが言ってたけど、変なおじさんと一緒に行く用事って何なのよ。ヒナタのお見舞いよりも大事なの？……はぁ……大事だからそっちに行ったのよね……」

いのも分かってはいる。ナルトが自分達よりも優先させる事なのだから、至極重要な用事である事だと。だが、頭では理解していても心の方で納得出来ないというモノがあるというのも事実。だからいのは、こうして愚痴を口に出すだけに留めているのだ。……いるのだが、いの場合それがたまに『行き過ぎて』しまう。

「あ、あのう……」

「……大事な用事かぁ……まさか、また違う女と何かしてるとかじゃないわよね……変なおじさんっていうのも何かおかしい……これ以上ライバルは増えて欲しくないのに……」

「あ、あの……お花欲しいんですけど……」

店番をしているいのの前で申し訳なさそうに声を掛けているのは、この店の中にいた二人のお客。しかし、如何せん今のいのには二人の声は聞こえていない。頼杖をついた状態で、ブツブツとつぶやくように愚痴をこぼすのは、誰がどう見ても怖い人と化している。だが、この二人のお客もどうしてもその手に持つ花が欲しいのか、再度いのに声を掛ける。

「すみません！お花欲しいんですけど！」

「ふぁ！？……あ、す、すみません！！お花ですね。直ぐにお包みますので、お待ちください。」

それは、果たして通じた。今まで遠慮してセーブしていた声量を、ぐっと上げたお客の声はいのの耳に届いた。その声にびっくりして、いのは変な声を出すと同時に座っていた椅子から立ち上がり、今更

ながらの接客スマイルを浮かべて、急いで花を綺麗に包んで渡し、代金を貰うのだった。そしていのは帰る間際お客二人に、「考え事も良いけど、お仕事もちゃんとしなくちゃね。」と言われ顔を真っ赤にする事になった。

お客二人が店から出て行ってから数秒、やっと落ち着きを取り戻し椅子に座りなおすと、頬に両手を当てて後悔する事になったのだが、そこに狙ったようなタイミングで新たなお客の来店を告げる音がいのの耳に届き、さっきまでの感情を頭を振って霧散させて顔をお客の方に向けて、接客スマイルを浮かべた。

「い、いらっしやいま・・せ・・・」

だが、その接客スマイルも来店してきたお客が誰か分かると、崩れてしまった。それはなぜか。そもそも、いのがこんな事になった原因である人物の顔がそこに有ったからに他ならない。

「つよ。昨日はごめんな、いの。」

「あ、あああ・・・」

「あ?」

「あんたのせいよおおおおー!!--!」

この山中花店周辺にうる若き乙女の怒号が響き渡る事になった。

「機嫌直せつていの。悪かったつて。な?この通り!」

ツーン……

いのの家というか、店の中に入って直ぐに怒鳴られるとは思ってなかったなあ。いや、怒られるだろうとは思ってたけど、入って直ぐ



って……それに怒号って……耳はキーンだし、周辺の人達に頭下げなくちゃならねえし、俺としてはこれで許して貰いたいところ腕を組んで俺と目を合わせようとしなのに、手を合わせて頭を下げるという俺の中では一番誠意が籠っている謝罪をし続ける。そして、はぁ……と溜め息を出して「分かったわよ……」とやつと俺と目を合わせてくれるいの。レジを挟んで俺といのは話している。

ふう……いのを怒らせると毎回大変だな。ま、いのは最後には許してくれるんだけどな。所謂……ツンデレ？……何か、ちよつと違う気がする。

「っで、昨日の用事って何だったの？」

「ん？あぁ、俺さ。自来也さんに修行つけて貰う事になったんだわ。」

「へえ〜自来也さんにねえ……って、自来也さんって『あの伝説の三忍の自来也さん！？なんで？どうしてそうなったのよ！』」

あれ？これって内緒にしておいた方が良かったのか？……ま、いいか。隠せとかって言われてねえし、他にも大蛇丸の事とかいつらに言う心算でいたし、どうってことないな。

「そうそう、その自来也さん。いやさ、昨日一楽でラーメン食べてたら、自来也さんが木の葉丸達と一緒に歩いて来てよ。そこで、修行つけてくれて言ったなら、いいよ〜って。んで、ヒナタには悪いけど遅れてお見舞いに行ったってわけだ。」

「……………そ、そうなんだ……………ん？ナルト、あんたさっきヒナタのお見舞いに行ったって言わなかった？」

「ん？言っただぞ。まあ、その時はお前達が帰った後で、二人だったな。」

俺のその言葉を聞くと、再びいのの顔に怒気が籠っていく。いや、ねらったわけじゃねえし、不可抗力だろ！あ、ヤバい……………何か言わないとさっきと同じ目に遭っちゃう！！

「い、いの。俺はお前達と一緒にきたかったんだぞ。ホントだぞ！それに、お前の作ったっていうお菓子も食いたかったし。」

「そ、そう……………なら、あとで作ってあげるわよ。」／／／

「お、おう。楽しみにしてる。」

そこでやっと、いのから怒気がなくなつて緩んだ笑みを浮かべてくれる。はあ……まだ、12、3のガキの癖に妙に色気出すんだよなあ……この世界の女子つて。ヒナタもたまに、いのみたいになるし……って、俺ここに来た目的と全く違う事してるし！

「な、なあ、いの。これから、暇か？」

「……え？暇っていうか、店番しなくちゃならないから……」

店番かあ。確かに、それはどうしようもないな。だけど、一人一人に渡したり、説明すんのめんどくせえしなあ……

「そこをどうにか出来ないか？」

「うーん……ママが帰って来たら大丈夫だと思うけど、何かあるの？」

「大事な事だ。」

そう、大蛇丸の目的を話したり、ネタであり強力な忍具を渡すっていう大事な事が。

「大事な事……分かったわ。ママが帰って来たら直ぐに行くから、それまでどこかで待ってて！」

（もしかしてもしかしてもしかして！こゝ、ここここ告白！？やっ  
と……やっと私の想いがナルトに届いたんだ！！）

「お、おう。なら、昨日の待ち合わせ場所で待ってるからよ。」

「うん！ちゃんと待ってなさいよ！」

どうしたんだ？いのの奴。ま、別にいいか。ちゃんと来てくれるみたいだし、なら今度は白の家に行くか。シカマルとか男連中のところには影分身向かわせて、時間短縮するかな。

俺はそう考えた後、いのの家兼店から出て一路白の家に向かう事にした。桃地がいたらどうすっかなあ……。ま、白を借りるぞ〜っ  
て言えばいいか。てか、桃地にも何か渡すか？うん……。首切り包丁があるしなあ……。いらないうって言いそうだな。うん。そ  
うだな。あいつには首切り包丁が合ってるし。

そして、白の家に行つてから白と一緒に昨日の待ち合わせ場所に向かうと、既にいの以外の全員が揃っているのが見えた。

シカマルはヤンキー座りをして。チョウジは片方の手でタイ焼きの入った袋を持ち、片方の手でタイ焼きを食べながら。キバはいつものジャンパーを頭まで被つてポケットに手をつ込んで。赤丸はそんなキバの頭の上で舌をヒラヒラさせながら。シノは……木陰の更に陰になるように。俺と白が来るのを待っている。

「あいつらって、はたから見たらおもしろ集団だな。」

「ナルト君。そんな事言つたら皆さん可哀想ですよ。いのさんが見えませんが、まだ来てないみたいですね。」

白と話しながら、あいつらのいる所に近づいていく。てか、キバあゝこんな熱い時にそんな服着るなよ。見てるこっちまで熱くなるっ  
ての。

「うす。お前の影分身に言われてきたけどよ、何すんだ？めんどくせえけど、親父から修行つけさせられてんだよ。」

「悪い悪い。いのが来るまでもう少しだけ待っててくれればよ。シノも修行だったりしたんだろ？ごめんな。」

「気にするな。友達に大事な用と言われたら、行くのが友達というモノだ。」

「ま、友達云々は知らねえけどよ。大事な用つてのが気になる。いのが来る前に概要くらい話してもいいんじゃないか？」

「それも良いんだけどよ。俺が話すの二度手間になっちゃうだろう？だから、もう少しだけ待ってくれよ。それに、キバ。お前は本戦出ねえんだから、暇だろ？」

「ナルト君、そんな事言っちゃ駄目ですよ。キバさんが可哀想です。」

「何気に白が一番酷い事言ってるよね。」モグモグ……

シカマルが修行か……影系の術でなんかよさげなの教えようかな。勿論ネタ技だけど……てか、遅いなあ。いのの奴。何してんだ？

6人で駄弁りながら待っていると、いののチャクラの気配が近づいてきているのに気付いた。シカマルはシノと互いがどういう修行をしているか、キバはチョウジからタイ焼きを貰おうと四苦八苦していて、白は終始ニコニコとそんな4人を見ながら、俺の隣にいる。

「ごめん!!準備にたま……ど……って……」

「おう!よし、いのも来たみたいだし、皆集まってくれ。」

なぜか、めかし込んで来たいのに「準備って何だ?」と聞く度胸は俺にはない。だから、極力無視して皆に話を振る。一人だけ、項垂れ「はは……ええ、そうだろうとは思ってましたよ。」とボソボソ言いながら俺の話を聞く事になったが、それも大蛇丸の事を話す内に緊張を孕んだ顔になって聞いてくれた。

「その、大蛇丸だっけか?そいつの目的が木ノ葉崩しって事は分かった。だが、なんでお前はこんな事を知ってた?俺達は下忍だ。」

本来、こういう話は上忍や暗部、まあ中忍までか？そんなくらいまでに話される類たぐいのモノだ。それを・・・」

「シカマルの言ってる事に同意する。なぜ、お前がこんな話を知っているのか、そしてどうして俺達にこんな話をするのか、それを教える。」

「まあ、2人の疑問も尤もだ。俺がこの話をしっている理由、それは俺が大蛇丸と接触したからだな。」

俺のその言葉で今までよりも濃度の高い緊張が場を支配する事になった。あのチヨウジですら、食べかけのタイ焼きを袋に戻すくらいだからな。俺は話を続ける。

「一回目の接触は、二次試験の時。森の中で大蛇丸に俺達は襲われたんだ。」

「！！あんたそんな事一言も・・・」

「あんな他の奴らがいるところで、んな事言えるわけねえだろ、いのみ、この通り俺達七班は全員無事だったからそれは良いんだ。ま、そんなときにいろいろ話を聞かせてもらったってわけだ。」



「……………また、聞いてえ事が増えたような気がするが、お前がどうしてこんな事知ってるのかは分かった。だけどよ、なんで俺らに話すんだ？それこそ、シカマルが言ったように、上忍でも暗部でも火影様でも上の人達に言えればいいじゃねえか。」

「キバ君の言う通りですね。僕達ではどうする事も出来ないと思います。」

「お前達に話したのは、理由がある。それは、お前達に死んで欲しくないからだ。」

『……………』

俺の言葉で無言になる6人。まあ、いきなり死んで欲しくないなんて言われても困るか。頭を一回ガシガシと搔いてから、ポーチから6つの短い巻物を取り出す。

「死んで欲しくないってのは俺の我儘で、これからお前達に渡すのも俺の我儘だ。受け取らなくてもいい。だけど、お前達を守るためにも受け取って欲しいかな。」

「……………なんとなく、分かった。お前は俺達にこの1ヶ月間でもっと強くなれって言いたいんだろ？しゃあねえ、貰ってやるよ。」

シカマルがめんどくせえと言いながらも、巻物の一つを手に取り。  
お前は、他にも陰の術一つ教えてやるから。

「当然、本戦のために修行して強くなる。だが、お前の気持ちも分かる。俺は受け取ろう。」

シノも片手をポケットに突っこんだまま、違う方の手で巻物を手に取ってくれる。シノってこんなに友達想いだったんだな。嬉しいぜ俺。

「お前に何か貰うつてのは糞だが、仕方ねえ。俺はまだお前に勝つのを諦めたわけじゃねえ・・・ぜってえ強くなってやる！」

俺を睨みながらも、巻物を分捕るようにして手に取るキバ。お前のそういう所嫌いじゃねえよ俺は。

「・・・怖いけど、みんなが頑張るなら僕も頑張る。」

タイ焼きの袋を持っていない方の手で巻物を手に取るチョウジ。頬っぺに餡子付いてるぞ。

「僕は、ナルト君と一緒にいられるならどんな事でもします。だから

ら、受け取りますね。」

綺麗な笑みを浮かべて、大事そうにしながら手に取った巻物を胸のところを持って行く白。

「……………」

「いの……………」

俯いたまま無言でいるいのに、声を掛けようとしたが、それも無駄に終わった。頭を上げたいのの顔は真剣なそれだったから。

「ヒナタにはもうあげたの？」

「ああ。昨日見舞いに行った時にな。だけど、まだ大蛇丸の事は言っていない。ただ、その巻物をやっただけだ。」

「……………なら、私も貰うわよ。私だって、強くなりたいもんね！」

最後の巻物を手に取って、ウィンクをしてくるいの。それに頷いて返し、皆に巻物を開くように言う。皆が巻物を開いたのを確認してから、俺は右手親指の腹を噛み千切り、巻物全てに滑らせた。

ボンボンボンッ……と音が鳴り、巻物から白煙が上がる。皆はそれにビクッと身体を緊張させるが、白煙が消えた場所に現れた『ソレ』を見てびっくりしたものに変わる。

「シノとチヨウジの目の前にあるのは『風焔の斧』。シカマルとキバの目の前にあるのは『黒杖』。白の目の前にあるのは魔槍。いの目の前にあるのは、魔甲拳。それぞれ、俺が作った忍具だ。」

シノとチヨウジが斧を軽々と持ち上げ、キバとシカマルは杖を胡散臭げに見て、白はしげしげと見ながら変な槍だなぁと呟き、いのは何これ？と素直に俺に聞いてきた。皆のその様子に笑みが浮かんで来てしまうが、それを我慢して説明に入る。

「『風焔の斧』これは火遁・風遁の2つの性質変化の力を持った斧だ。それぞれの性質変化の術を出す時には、火遁！とか風かせ！とか言っつて振りおろせばいいから。ちよっとやってみ。」

チヨウジは慌てながら、「か、火遁！」と叫び斧を上から下に振りおろす。すると、豪火球の術なみの炎が飛んで行った。それを見て、それまでチヨウジの慌てぶりを笑っていたキバは啞然とし、他の4人も顔を引き攣らせた。

おそらくは、ただの忍具としてしか見ていなかったようで、俺の説

明にあった2つの性質変化の件は、疑っていたらしい。まあ、チヨウジのお陰でそれもどこかに吹っ飛んだようだけど。

チヨウジは自分が火遁を使った事に、びっくりして固まっていたが、次の瞬間俺に走り寄って来て「凄い、凄いよナルト！」と興奮していた。他の奴らも俺の近くに寄って来たが、まずは説明を続ける事にして、離れてもらった。

「シノも後で自分でやってみな。それはもうお前達のだからさ。」

「感謝するぞナルト。」

「おう。んでだ、次にシカマルとキバの持つ黒杖だが、これは伸縮自在の杖で、使用者のチャクラを吸収して打撃力に変えるんだ。伸ばすだけでなく使用者の意思と言葉で、先端だけ二股の槍にしたり、まあある程度応用が効く忍具だな。キバ試してみな。」

「言われなくても！」と叫び、キバは自分のチャクラを杖に込め、次の瞬間上に2、3m伸ばした。それを見て、「ひゃっほう!!！」と振りおろした。振りおろした先では、地面が陥没している。まあ、キバの場合赤丸との体術しかないし、これを有効活用してもらおう。シカマルは、頭いいからいろいろ使い道探さるうし。現に、キバの方を見ずに杖をいろいろな形にしていたからな。

キバは楽しくなってきたらしく、それから伸ばしたり縮めたり忙しかったが、いのが邪魔！と言って殴り沈黙させたので、今は静かになりいのと白の忍具について説明することにした。

「白の持つその魔槍は、アムドって言うって身体を覆う鎧に変化する。槍はキバ達の杖みたいに伸縮させることが出来るから、縮めた状態で左手の盾に装着して持ち歩く事が出来るぞ。全身様々な所に忍具が仕込んであって、あらゆる体勢からでも攻撃できるようにした。最後に、これがこの忍具の凄ところだ。こいつの特徴は性質変化の忍術、まあ火遁とか風遁とかだな。そんな忍術を無効化してくれるっつう俺達忍者にとって少しだけ厄介な代物なんだ。」

「え・・・ナルト君、もう一度だけ言ってもらっていいですか？」

白のびっくりした顔なんて久々だな。他の奴らも俺のこの言葉にはびっくりしてるみたいだし、これは結構面白いな。

「まあ、まずは鎧に変化させてみ。」

「わ、分かりました。あむどー！」

発音は変だったけど、まあ変化したな。一瞬光ったと思ったら、白の身体を鎧が覆った。左手には盾が装備され、右手には槍があった。おおー！という声を出すのはチョウジにキバ、シカマル、いのだ。

シノは声は出さなかったが、斧を取り落としたことでびっくりしていることが分かる。

それから、シノに白を狙って性質変化の術をしてもらい、本当に無効化するところを見せてから、鎧を槍に戻してもらった。白から、「ありがとうございます！」と笑顔で言われたので、まじで嬉しかったと言っておこう。

最後にいのだが、ヒナタにした説明とほとんど同じなので割愛させてもらう。「ヒナタとお揃いかあ」と鎧に変化させて嬉しそうにしていたとだけ、言っておく。

こいつらには1ヶ月この忍具の使い方なり、自分達の修行なりをしてもらって強くなってもらう。ヒナタも直ぐに退院するだろうし、ヒナタにはまたあとで伝えに行くことにする。あ、シカマルに術教えたいからあとでシカマルの家にも行こうっと。

俺は最後に目の前で新しい玩具を買って貰ったかのようににはしゃぐ6人を見て、こいつらを絶対に死なせないと改めて考えたところで、解散することにした。

自来也のところに向かわせた影分身が心配だな。

時を同じくして、一人の遅刻魔が一人のツンデレ少年と会っていた。

「よう。」

「……あなた、この前の事があったのに懲りてねえな。」



遅刻魔というのははたけカカシ。ツンデレ少年というのはうちはサスケ。二人は、この間出来なかった話をするためにサスケの部屋にいた。

中忍試験本選まで1ヶ月。カカシはサスケの修行を見てやろうと考えていた。同じ『写輪眼』を使う者同士という事もあるが、本選での1回戦の相手はガイの教え子ロック・リー。彼の体術は今のサスケよりも格段に上。写輪眼を使つたとしても、ガイの事だ。写輪眼対策はしてくるだろう。なら、こちらも体術の修行をつけさせるといった具合に考えているはたけカカシ。

「大丈夫だ。奴は本戦に出るからな。これ以上、何かしてくる事はない。だから、お前は強くなる事だけを考えればいいんだ。」

「……強くなる事だけとは、どういうことだ？俺に修行をつけさせるとでも言う気か？」

「その通り。写輪眼を使えるのは俺とお前だけだしな。それに、ナルトに勝ちたいだろ？」

カカシのその挑発とも取れる言葉に一瞬眉がピクツと動くサスケ。そして、次の瞬間には口角を上げて不敵な笑みを浮かべてカカシに顔を向ける。

「上等だ。カカシ、生半可な修行はするなよ。」

「・・・お前がそう言うんなら別に構わんが、俺の修行はちょっと・・・辛いかもよ?」

「フンツ・・・望むところだ!」

ナルトから今まで修行をつけてもらっていたサスケだが、心ではいつもナルトに勝ちたいと思っていた。そこに、願ってもない誘いが来た。サスケは、不敵に笑いながらナルトに勝つために強くなる事を決めた。

「ま、用件はそれだけだ。明日の午前6時に第23演習場に来い。そこで待ってる。」

それだけ言い残して、カカシはサスケの部屋の窓から飛び降りた。サスケは、自分の部屋の窓枠に付いている泥を拭き取るため、雑巾を濡らしに行くのだった。

それぞれの修行へだつてはよっ！（後書き）

36話でした。

今更ですが、二つのssを書くのって大変ですね。どっちも頑張ろうとは思っていますが、一つ書きあげるとしばらくは書きたくないと思ってしまう。3つとか4つ書いている人尊敬します。

というか、更新速度が速い人を一番尊敬します！いつ書く暇があるんでしょう？時間の使い方が上手いんでしょうが、私にも教えて欲しいですよ。ほんとに・・・

さて、話は変わりますが、このssの総合評価が10000を超えました！いやあ、凄いですね。びつくりです。こんな駄文がなぜに！？と思わなくもないですが、これも読者様方のお陰です。深く、深く感謝を。

ちなみに、PVは540万、ユニークは59万人を越えました！いつのまに！！

と一人唾然としてしましたよwww

これからも、頑張っていこうと思いますので、応援よろしくです。

赤面？ツンデレ？影分身？だってばよっ！

ナルトが仲間達に忍具を渡し、カカシとサスケが部屋で話している頃、木ノ葉病院のある病室……

その病室はプライバシーが守られる『個室』。そして、その個室に  
いるのは、艶のある黒髪に透き通るような白い肌を持ち、控えめな  
性格で思いやりの心を持つ、可愛らしい一人の女の子だ。「旧家」  
や「名門」と謳われる日向の当主の娘で、名前を日向ヒナタという。  
そのヒナタであるが、体をベットから起こして昨日想い人から貰っ  
たソレを手に持って、優しく撫でていた。

「ナルト……君……」／／／

誰を思っているかは、その顔から窺い知る事が出来る。幸せそうな笑みを浮かべ、頬に朱を散らし、小さな口から零れるのは想い人の名前。そして、思い出されるのは昨日言われた言葉。『ヒナタは大事』『お前を守るために』一部省略されているものの、恋する乙女と化している今のヒナタには些細な事でしかない。だが、そんな時間も不意にドアをノックされた事により終わりを迎える。

「ひゃ、ひゃい！」

「お食事の時間です。」

「……ど、どうぞ……」

それじゃ〜失礼しま〜すと言って入ってくるのは、トレイを乗せた配膳車を押す白衣を着た看護婦。年齢は30手ま・・・ゴホンツ、20前半、容姿は良いのだが酒癖が悪いため恋人は無し。素面の性格も良い言い方をすれば大らかだが、悪い言い方をすればだらしがない。そんな看護婦がヒナタの病室の担当であった。

「いつも、ありがとうございます。」

「ん〜？良いの良いの気にしないで〜 ヒナタちゃんとお話するのが楽しいし、何より絶好のサボる口実になるから」

その看護婦の言葉にアハハと乾いた笑みをしてしまうヒナタ。ヒナタが体を起こしていたので、看護婦がベットの上に簡易机をセットして、その上にトレイに乗った食事を置く。ヒナタは撫でていたソレを傍らに置いてから、「いただきます。」と手を合わせて目の前の食事に手を伸ばした。

「今日のメニューは美味しそうだねえ」

「は、はい。美味しいです。」

ゆっくりと食べていくヒナタをニコニコ笑顔で見る看護婦。ここに入院してからヒナタはずっとこのようにして食べなくてはならなかった。勿論はじめは人に見られながら食べる事に慣れずにいたが、今では少しだけ慣れて気にせず食べる事が出来ていた。

「はあゝ……………いつ見てもヒナタちゃんの食べる姿って可愛いわあ……………」

「……………」

だが、看護婦のこの言葉にだけはまだ慣れていなかった。先ほど散らしていた朱よりも更に頬を赤く染め上げる事になる。そして、そ

んなヒナタを見て「ああ、可愛い」と言って笑う看護婦。ヒナタはこの苦行に耐えながら食事を終わらせなければならなかった。

それから十数分後、やっとの思いで食事を食べきり行儀よく手を合わせて、「ごちそうさまをするヒナタ。そんなヒナタにお粗末様あ」と言いながら食器を片づけていく看護婦。そして、片付け終わると恒例の看護婦によるヒナタ弄りの時間が始まる。

「ふふ　ねえ、ヒナタちゃん？」

「は、はい……」

やっぱり今日もなんだ……と内心で嘆息して、次に発せられる言葉に身構えるヒナタ。心の準備が出来ていないと、直ぐに思考力が低下してしまう質問がこの看護婦の口から飛び出てくるからだ。

「この前言ってた好きな子の事なんだけど」

「っ！そ、そんな人はいないって、この前も言いましたよ？」

この看護婦はこういう話が大好きなのか、いつも似たような質問をしてくる。ヒナタは冷静を装って返すが、看護婦の目はヒナタの内心の焦りを感じ取ったのか、キラッと一瞬光る。

「そうだったけえく？でも、ヒナタちゃんがそう言うなら、そうなのかなあ。」

「そ、そうですよ。アハハ・・・」

「ふうん・・・あ！そうそう。昨日ヒナタちゃんのお見舞いに友達来てわよね？」

「あ、はい。みんな私のために来てくれたので、嬉しかったです。

あ・・・もしかして五月蠅かったですか？」

看護婦の質問に嬉しそうな顔を浮かべるヒナタだが、それも直ぐに心配するソレに変わる。この狭い部屋に自分も入れて7人もの人がいたのだから、五月蠅くならない訳がない。

「ううん、そんな事ないわ。隣の部屋の人とか私の同僚が楽しそうだったって言ってただけよ。良いお友達ね。」

「あう・・・ありがとうございます。」 / / /

良いお友達。その言葉に照れてしまうヒナタ。



「ふふ あ、でも・・・」

次の看護婦の言葉に？を頭に浮かべたヒナタは首をコテツと傾ける。  
でも・・・何なのだろう、と。

「そんなお友達より遅く来た男の子がいたけど・・・その子はただのお友達なのかな？」

「ッ！！」 / / / /

その言葉はまさに不意打ちだった。もう警戒しなくても大丈夫だと思っていたヒナタは、直ぐに顔に出してしまう。頬に朱を散らせて・・・

その思惑通りの反応に、看護婦は笑みを深くする。本当に素直で可愛い子ね、と。

「その反応からすると、やっぱりただのお友達じゃないのね？ねね、どんな子なの？」

「あの、その、えっと・・・あううう・・・」 / / /

「遠くから見た限りだと、髪は金色で・・・背はちょっと小さかったかな？それから・・・ちよつと馬鹿っぽい？」

「ううう・・・ち、小さくないです。私より大きいし、それに・・・カッコいいもん・・・」／／／

内心でほくそ笑みながら、目の前の少女から情報を聞き出していく看護婦。この看護婦、自分の仕事をサボるばかりか、ヒナタを誘導尋問しているのである。・・・ヒナタはそれに気付いていない。

「あらあら カッコいいんだ。名前はなんて言うの？」

「・・・ナルト君。」

「へえ！ナルト君って言うんだ。って言うか、ヒナタちゃんその子の事好きでしょ？」

「うううう・・・」／／／／

さらに顔を赤くするヒナタ。そんなヒナタを見ている看護婦はニヤニヤという笑みを浮かべる。この看護婦、性格が悪すぎる・・・恋

人が出来ないのも頷ける。

「やっぱりね。なら、どんなところが好きなの？」

「あううう・・・。」／／／／

それから、ヒナタはこの看護婦が満足するまで質問攻めに遭う事になった。時々「あうう・・・。」や「あうあう・・・。」「ううう・・・。」といった困った時に出る声を出す事になったが、それがまた可愛いと後日その看護婦が同僚に言っていたとかいかなかったとか。

場面は変わり、自来也の下へと向かったナルトは影分身を向かわせた事を詫びてから、修行を改めて開始した。

「お前も良く考えたもんだのう。影分身と己で修行をする事で修行の効率を上げるとはのう。だがまあ、修行一日目にして本体がサボるとは思わなかったがな。」

「ハハハ……ごめんだってばよ。でも、俺にもいろいろ用事があって……。そ、それで、今日はどんな事するんですか？」

自来也の所に向かった俺は直ぐに影分身と入れ替わったんだけど、やっぱり三忍と言われるだけはあるなあ。自来也ってば直ぐに気付いて、10分くらい説教してくれんだもんなあ……

んで、今は影分身を使った効率の良い修行方法に自来也が感心しているってわけだ。まあ、この修行方法ってチャクラが多い奴専用みたいなところあるし、他の奴には無理だと思う。それに何より、影分身自体が禁術指定されてるんだから、こんな修行方法を考える事自体無理だな。

「まあ、良からう。わしもそこそこチャクラが多い。これからは、影分身を使つて修行する事にしよう。忍術は影分身が、体術は本体が、それぞれやるうかのう。まあ、体術云々はわしとの組み手だ。」

「分かつたつてばよっ！影分身は何体くらい出した方がいいですか？」

「うゝむ。本戦まで1ヶ月あるしのう・・・それに、この修行方法は中々ズルい。他の本戦に出る者達にこの修行が出来るとも思えん。そういう事も含めると、最高でも3体だろつもの。」

確かに、その考えもあるな。3体でも他の奴らから比べたら3倍の効率だしな。ま、そのお陰でこの年でこのくらい強くなる事が出来ただけだ・・・

「そうですね。なら、忍術に2体。そして、残りの1体で里の状況だったり、ご飯の準備だつたりの雑用ですかね。」

「それでいいだろう。お前がここに来るまで影分身に教えていた術だが、それもあと少しで習得出来るだろう。ならわしは2体の影分身を出すからお前は3体の影分身を出せ。そして、修行再開だ。」

自来也は直ぐに影分身を2体出した。俺も直ぐに3体出して、1体を里の方に向かわせる。今俺が考えているところまでの考えはある

わけだから、こいつは自分がやるべき仕事は分かっている筈。なら、何も言わずに俺は本体の自来也の後を付いて行けばいいだけだ。後ろにいる残る2体の影分身も自来也の影分身にそれぞれ付いて行つたみたいだし、俺は俺で頑張りますか。

忍術の方に向かった影分身『その1』の場合……

本体の考えを引き継いだ俺は、自来也の影分身から術を教えて貰っている最中だ。教えてもらっているのは、風遁・爆嵐列風つて術だ。

何でも、口から斬撃効果のある竜巻状の風を吐き出す術らしい。ダソウの使う真空波とテマリの使うカマイタチを合わせた術かな？ まあそんな感じの術だ。流石に自来也つて事かな。術の開発とか若い時にしてそうだし。

真空波もカマイタチも出来るから、簡単に出来ると思ってたけど、中々どうして難しい。それに……向こうにいるもう一人の俺が、何を教えてもらっているのかが気になつてもいるんだよなあ……つて、集中しないと出来るもんも出来ねえな。真面目にやるつと。

忍術を教わっている影分身『その2』の場合……

「お前は自分自身の風と九尾の火、2つの性質を使えるんだっただな？」

「そうだってばよ。それを聞くなって事は、俺には火遁を教えるって事ですか？」

「そつだ。おそらく向こうにいるわしはお前に風遁の術を教えているだろう。だから、わしはお前に火遁を教えようと思う。」

そう言つて、火遁の術を一度見せてくれる自来也。ふむふむ、両足に火遁を纏わせてそれを放出しても良し、そのまま蹴りに使つてもいいのか。うん、結構使えるな。術名は、紅蓮火脚。……力ツコいいじゃねえか！！

直ぐに、火遁のチャクラを脚に纏わせてみる。……何となくこれで完成な気がする。ま、まあ、名前カツコいいし、込めるチャクラ量を調節すれば威力も上がるし、いいとしよう。

雑用に駆り出された影分身『その3』の場合……

今日の夕飯のために、早速山の食材を取りに向かった。食材といっても直ぐ傍には魚が泳ぐ川があるので、取って来るのはキノコや山菜といった物だけだ。夕飯分に必要なだけを取って来て、後はメインとなる魚を1人2匹食べると予想し、4匹捕まえる事にした。

そして、クナイを投擲して川の中を泳いでいる魚を刺して取って行く。水中にいる魚が飛び跳ねるのなんて待つてられねえし、そこそこ力を入れれば水中でも関係なく底まで刺さるから時間短縮にも一躍担うんだなこれが。で、捕まえた魚4匹を岸の所に石を並べて作った魚置き場（名前が分かりません）に入れてから、里に戻る事にした。

やる事は、シカマルには鬪魔傀儡掌を影真似の術で代用可能だと思っうから、俺の知っているその術についての情報の提供。シノ、キバ、チヨウジは……今は何にも思いつかねえからおいおいって事で。白には槍殺法を教えに行くかな。まあ、俺も少ししか出来ねえけど……修行すればきつと様になるくらいにはなるだろ。いのは……武神流？修行内容とか知らないからどんな技かだけでも教える価値はあるか？……まあ、はじめはシカマルの所に行くかな。確かあいつ、奈良のおじさんと修行してるって言うてたけど……シカマルの家に行ってから考えるか。



本戦に出場する12人の下忍達は、それぞれ修行に励む事になった。まずは、木ノ葉の下忍達を見て見る。

シカマルは父親から影首縛りの術を、ナルトからは闘魔傀儡掌の影に変換させた術を教えられ、1ヶ月という時間を全て修行に費やす事になった。めんどくせえが口癖のシカマルも1ヶ月後の本戦当日に木ノ葉が襲われるとなれば、一度も出す事はなかった。偶に、修行から抜けだしそうになるが、いのに連れ戻されたりしたとか、しなかったとか。

シノは父親の寄壊蟲を数匹貰い自分の持つ寄壊蟲と配合させる事で、更に強い蟲を作り出そうとしていた。蟲は火や風に弱いという概念を吹き飛ばすために。何より、ナルトから貰った忍具を自分の忍術と合わせるために。そして、何よりもナルトに勝つために。

テンテンは予選での他の本戦出場者達の戦いを見て、今の自分ではキツイモノになると確信していた。だが、それも『今』の自分ならであり、この1ヶ月で更に様々な忍具を使いこなせるようになるうとしていた。例を上げるなら、棍を使った棒術を母と組み手をしながら覚え、腰に巻いている布を使った布槍術を母と一緒に父を相手にしながら覚えていった。

ネジは日向本家の道場ではなく、里の演習場や分家の者達との組み手をしながらの修行を行っていた。担当のガイはリーを贖肩しているのは今に始まった事ではないし、ガイの体術と自分の体術は根本的に違うため、修行をするにも分家の者達の方が効率が良いのも事実。そのため、ネジは自分だけで日向の瞳術である白眼と柔拳を駆使し、本家にしか伝えられない体術を自分だけで開発する事になった。

リーは忍術の類が一切出来ないため、この1ヶ月を体術だけに費やすことになった。それも、自分ルールという独自の考えを持つガイが修行を見てくれるのだから、その修行は想像を絶するものになったのだが……この師弟の無駄に熱い心は、そんな修行を物ともせずに1ヶ月やり通し、更に二人の絆が強くなった事は言うまでもないだろう。

サスケはカカシから修行を付けてもらう事になり、はじめにカカシが言った事は写輪眼を常に発動させた状態でいる、だった。カカシはうちではないので、写輪眼を発動すると体に掛る負荷が半端ではないのだが、うちはあるサスケは写輪眼を発動してもそこまで負荷が掛ることはない。そのため、カカシはまずサスケに常に写輪

眼を発動させてる事にしたのだ。サスケも最初は発動出来る時間は短かったが、徐々に長くなっていき、写輪眼を常にはないが、瞬時に発動させ尚且つ半日は発動出来るくらいにはなった。術を覚えなかったサスケだが、この写輪眼をここまで使いこなせるようになったので、これはこれで良しとする事にしたのか、最後に素直ではない感謝をカカシに言う事になり、それがまさにツンデレであったとはその後カカシが語る事である。

ナルトはご存じのように、自来也に修行を付けて貰いながら、大事な友達に術を逆に教えていた。影の術を、武術を、槍術を教えに。そして、時間が空いたら本体がヒナタのお見舞いに行ったりと、一人だけ楽しく修行をしていたのは内緒である。

残りの5人は全員が木ノ葉の者達ではない。カブトとミスミ、そしてドスは音。我愛羅とカンクロウは砂。カブトとミスミは大蛇丸の使いとして動き、ドスはただただサスケを殺す事だけを考え、カンクロウは人形を弄り、我愛羅が城の屋根の上で腕を組みながら、本戦の日を待っていた。

そして、遂に本戦当日。ナルトは一日早く自来也との修行を切り上げ、昨日は久々に自分の部屋でゆっくりとしていた。

『ナルトく！朝ご飯出来たわよ。』

「はあい！今行くつてばよ！」

母さんに返事を返して、パジャマから今日着ていく服に着替える。姿見に映る自分の姿を見てから一度頷き、ドアを開けてリビングに向かう。

『おはようナルト。今日は本戦だけど緊張はしてないか？』

「おはよう父さん。ぜんっぜん！俺すっごく楽しみなんだ！」

リビングで新聞を読んでいた寝癖のある父さんに笑みを向けながら、自分の椅子に座る。それにしても、朝の父さんってだらしのないよな。まあ、母さんはそこが良いとか言いそうだけど……

『あんまり羽目を外し過ぎるなよ？大蛇丸の事もあるんだから。』

「分かってるよ、父さん。それに、今日は二人が俺の試合見に来てくれるんだから、いつもより頑張らないと。」

父さんと母さんをこの日にお披露目というか、木ノ葉の閃光と木ノ葉の赤い悪魔は健在だ、ってやっておけば、戦争しかけてくる奴らとか滅りそうだし。まあ、マダラとか暁が五月蠅いけど、13年前とは違うんだ。絶対にもう二人を殺させはしない。

『ナルト。何か今変な事考えなかった？』

「ッ！べ、別に変な事なんて考えてないってだよ！？」

真面目な事考えてたつもりで、母さんの事あk・・・ブンブン！母さん目がマジだ。これ以上考えないようにしよう・・・

『全く、誰に似たのかしら・・・あ、ご飯出来たから持って行くからね。』

俺と父さんは母さんの呟きに苦笑を浮かべてから、俺はテーブルの上を布巾で拭き、父さんは読んでいた新聞を畳んでテーブルの隅っこに置いた。

さて、母さん特製のご飯を食べて、本戦で勝って、大蛇丸をブツ飛ばして、原作で悲しい日になった今日を、最高に良い日にするんだ。

## 次回

一回戦のカードは、サスケとリーか・・・

原作では遅刻してきた筈。なら、もしかすると・・・・・・・・

「うちはサスケが遅刻のため、試合を一個ずつ繰り上げて、行う事になった。と言う事で、砂のカンクウとミスミは残れ。直ぐに試合だ。」

って、やっぱりかよ!!!

次回もお楽しみに。。。。

赤面？ツンデレ？影分身？だつてばよっ！（後書き）

37話でした。

しばらくの人はしばらくぶりです。はじめましての人ははじめまして。うたわれな燕です。

長野に引越し、更に研修で愛知に5日いたので、全然書けませんでした。半月も放置してしまったので、おそらくはこの作品から離れてしまった方もいるかもしれませんが、こうやって今回どうにか更新することが出来ました。

これからも、仕事が忙しく書いている時間があまりとれなくなるかとは思いますが、少しずつ更新していこうかと思えます。

それでは、皆さまゴールデンウィークを楽しんでください。

いよいよ本戦のはじまりだってばよっ！

今日のこの日、木ノ葉隠れの里は盛大に賑わっていた。大通りでは人が群れをなして同じ方向へと歩いて行き、里の者しか知らぬ小道もこの日ばかりはたくさんの人でごった返していた。なぜなら今日は、1年に1度のイベントで多くの下忍達がこの日を待ち望んでやまない、『中忍選抜試験本戦』の日なのだから。

試験会場に着いたはいいいけど・・・やっぱり、サスケの奴は遅刻か。右から左へ目を走らせサスケ以外の下忍達が揃っている事を確認。そして最後に顔を上げて会場全体を取り囲む『人』を見る。



漫画とかアニメで知ってたけどさ・・・人多くね？いや、サスケを  
観に来ているんだろうけど、この数はアホだろ。気分は動物園のラ  
イオンとかパンダみたいな感じだ。チャクラの気配から、父さんと  
母さんが一般の人に紛れて俺に手を振っているのに気付いた。頑張  
るってばよ！父さん！母さん！

と、手を振り返して応えていると、シカマルとシノが誰に手を振っ  
てるんだ？っていう目を俺に向けているのに気付く。でも、それは  
仕方のない事だ。なぜなら、いの、ヒナタ、白、キバ、チョウジの  
5人は俺達の後ろの方にいるからで、手を振るならそいつらに振る  
だろうって事なのだから。まあ、シカマルとシノは手を振るキャラ  
ではないから振らないだけで、俺はさっきちゃんと手を振っておい  
ただけだな。

「なあ、ナルト。さっきは誰に手振ってたんだ？」

隣にいたシカマルが素直に聞いてくる。それには、知り合いがいた  
から、とだけ返して目の前にいる千本を唾えた人に顔を向ける。一  
応今は、試験の説明の最中だったりするからな。

「ああ、お前ら、もう少しちゃんと俺の話し聞いとけよ。じゃねえ  
と、問答無用で失格にするからな」

確か名前はゲンマとかいった特別上忍が、千本を啜えたまま饒舌に話す。あの人、器用だな。・・・と、アホな事考えてても仕方ねえな。

「うおおおおお！！サスケ君！早く来てください！僕はこの日のために、たくさん修行してきたんですから！！」

「リー、あんた五月蠅い。それより、金髪く〜ん！1ヶ月あたしと会えなくて寂しかった？」

ハハハ・・・原作では我愛羅にやられていて静かだったリーも、本戦出場という事でかなりテンションが上がっているようだ。それを平然と五月蠅いの一言で切り捨てるテンテンもテンテンだけどな・・・それに、別に寂しくはなかったかな〜修行で大変だったし。

サスケを抜いた11人で一列に並んでいるわけだけど、これがなんとも適当に並んでいたりするから面倒だったりする。普通なら、塔の中で箱から引いた番号順に並んだ方が良いに決まっているのによ。

左からドス、ミスミ、カブト、ネジ、リー、テンテン、シカマル、俺、シノ、カンクロウ、我愛羅って感じに並んでいる。カブトが薄気味悪い笑みを覗かせているし、我愛羅に至っては俺が姿を現してからはずっと俺の方に熱い視線を送り続けてくれていたりする。

「あ、あははは・・・先輩が元気そうで良かったです。」

テンテンには無難にそう応えておき、俺は我愛羅とカブトを無視して、火影のじいさんがいるところに目を向ける。二つある椅子の内、一つは火影のじいさんが既に座っているが、もう一つは未だ空席のままだ。あそこに大蛇丸が風影の姿で現れるというのが原作での流れ。なら、この世界ではどうだ？原作と一緒になのか？それとも・・・

「なあ、金髪のがき。うちのがきはまだ来ないのか？」

「すみません。俺はサスケと一緒に修行をしていたわけじゃないんで、知らないんですよ。」

「フンツ、使えないがきじゃん。」

カククロウにガキ扱いされるとか・・・まじありえねえ。ま、カククロウの言う通りサスケが来ないのがそもそも悪いんだけどよ。

テマリが原作と違っていないわけだが、テマリはバキと一緒にいる事がチャクラの気配で分かる。てか、原作通りサスケの奴は遅れて来るんだろっし、早くはじめてくれねえかな。

わしは最上階の席で、中央の試験会場と周りの観客達を見て頷く。

「ふむ、今年は例年に比べて人の入りが多いのう……おお、風影殿。良くぞいらっしやった。」

2人の護衛と共に砂隠れの里の風影殿が姿を現した。壮健そうでありじゃ。わしに一礼して風影殿はわしの隣の席に腰掛けた。

「道中お疲れじゃろう?。」

「いえいえ、今年は木ノ葉で本戦が行えて良かった。我が里までの

道のりは火影様にはお辛いでしょう?」

「アツハツハ。そう年寄り扱いはせんでくれ。これでも、まだ若いつもりなんじゃから。」

「これはすみません。ですが、早く五代目を選んでおいた方が・・・」

わしと風影殿が会話をしているところに、木ノ葉の一人の上忍が姿を現した。何か起こったのか? もしや・・・大蛇丸!!

「私の事はお気に為さらず。」

「済まない、風影殿。・・・して、用件は何じゃ?」

わしの耳に口を寄せ、小声で話し始める。大蛇丸の事ばかり危惧していたが・・・カカシ、よもやお前がしでかしてくれるとは思ってはおらなかったぞ。わしは、はあ・・・と溜め息を吐く。

「どうかなされましたか、火影様?」

「それがのう、本戦で出場する事になっている『うちはサスケ』が

まだ到着してないらしく・・・本戦が始められないのじゃよ。」

「うちはサスケの試合は1試合目。確かにそれは大変ですね。しかし、火影様もお分かりでしょう？この中忍試験を観に来た者達の多さに。そして、その誰もある一人の下忍を観に来ているという事も。」

むう・・・確かにそれはそうじゃ。『うちは』の生き残り、つまりはサスケを観に来ているのじゃからな。だがしかし・・・

「・・・じゃが、サスケ一人のためにこうも時間を引き延ばす事は出らん。」

「それなら、うちはサスケの試合を最後にしてはどうですか？失格にする事は簡単に出来ますが、皆が誰を観に来ているか・・・それをお忘れなきように。」

「・・・仕方ないか。サスケの試合を最後に回し、第2試合から始めるようにゲンマに伝えよ。」

「・・・御意。」

上忍の姿が消えると、風影殿が礼をしてきたのに気付く。それに、

首を振って応えてから顔を中央の試験会場に向ける。そこで一番目を引くのはやはり、鮮やかな金色の髪。ナルト・・・大蛇丸はわしに任せて、お前は試験に集中するんじゃ。

(ナルト君もサスケ君も私のモノ・・・フッフ)

「む？何か言いましたかな、風影殿？」

「フフ・・・いえ、それでは火影様。楽しむと致しましょう。」

口元を覆い隠している布の下で、風影殿が微笑むがそれがわしには異様に見えてしまった。

さっきまで火影のじいさんのところに居た上忍がゲンマの隣、つまりは俺達の目の前に瞬身の術で現れた。そして直ぐにゲンマの耳に口を寄せて、小声で何かを伝える。まあ十中八九、試験を開始するって事とサスケの試合を後に回すって事だろうけど。

「・・・分かった。取り合えず始めればいいんだな？」

ゲンマの言葉に上忍は頷き、瞬身の術で俺達の前から移動する。無駄に木の葉を舞わせるとか・・・カッコつけてんのかな？

「おい、お前ら。今から本戦を始めるわけだが、お前らも分かっている通りうちのはガキがまだ来ていない。そこで、うちはサスケとロック・リーの第1試合は最後に回し、次の第2試合目から始める事になった。」

ゲンマのその言葉に「僕の試合があああ！！」と絶叫する全身タイプの変態が一人いたが、他の下忍達は概ね了の意を示す。そして、サスケがいない状態で本戦は始まった。って事は、俺と我愛羅の試合が実質最初って事か？まあ原作みたいにカンクロウの奴が棄権したらだけど・・・

「ってことだから、第2試合目に出るカンクロウと剣ミスミだけを残り、他の奴らは上に行ってる。」



そして、ゲンマにそう言われた俺達は移動しようとするが・・・

「ちょっと、待ってくれじゃん。俺は・・・棄権する。」

カンクロウ・・・やっぱりお前つてば棄権すんのな。つて事は・・・  
・やっぱり俺と我愛羅かよ。てか、事実上の決勝戦が第1試合目つて・・・  
・本当によく出来てるよ。

「・・・分かった。砂のカンクロウが棄権したため、勝者は剣ミスミ。つたく、第3試合目が第1試合目になるなんて前代未聞だぞ・・・  
・それじゃあ、砂の我愛羅とつずまきナルトを残して、他の奴らは今度こそ上に行ってる。」

どんまいゲンマ。てか、自由な奴らですまん。こいつらの代わりに謝っておくよ・・・心の中で。

俺がそんな感じでゲンマに謝っていると、シカマルとシノが「頑張れよ。」「・・・無理はするな。」とそれぞれ一言だけ激励してくれた。それに「おう！」とだけ返して、我愛羅に顔を向ける。すると、それまで我慢していたんだと思われる濃密な殺気とチャクラが我愛羅から溢れだし、無表情だった顔に『笑み』を浮かべて俺を見ているのに気付いた。

あらあらぁ・・・これはこれは、いつの間にこんなに好かれたんでしようか俺ってば。

「やっと・・・やっと・・・お前と殺し合いが出来る。俺は、この時をずっと・・・ずっと待っていたぞ、うずまきナルト。」

「はぁ・・・殺し合いは兎も角、俺もお前とは戦いたかったぞ。」

これは本当の事。『蛇の変態』とか『仮面の変態』とかっていう変態としかガチで戦った事なかったし、我愛羅とならそこそこガチで戦えると思うんだよ。同年代の奴とこうしてガチで戦う・・・良い。凄く、良い！これでこそ少年漫画って感じだな！！

「え！？サスケ君がいないのに始まるの!？」

観戦している多くの人達の中で、一際目立つピンクという髪を持つ少女が手摺に手を掛けた状態で、驚愕といった表情で中央にいる下忍達を観る。

「ん？サクラくあんたそんなところで何やってんの？」

「モグモグ……」

そして、そんなサクラに声を掛けるのは山中いの。その隣では秋道チョウジがどら焼きの入った大きな袋を持ち、どら焼きを食べている。

「どうしたのよ、そんな顔して。」

「仕方ないじゃない！サスケ君がまだ来てないのに始まるって言うんだから！」

いののそんな態度に、サクラはイラツとしてしまい声を荒げてしま  
う。そんなサクラを無視して隣のチョウジはどら焼きを食べ続けて  
いる。ちなみに、何個目を食べているかは誰も知らない。

「だ、大丈夫だよ。うちは君はきつと来る・・・と思うよ？」

「そうだぜ！あのうちはが来ないわけねえだろ。な、赤丸！」

ワンワンッ！！

いのの隣、つまりはチョウジの反対側にいるのは日向ヒナタ。そし  
て、チョウジの隣は犬塚キバだ。ヒナタはサクラの声が怒気を含ん  
でいる事に怯えてしまい言葉が尻すばみになってしまいが、キバは  
そんなもの関係ないとばかりに自分の頭に乗せている赤丸に話を振  
って元気に応える。

「ヒナタとキバの言う通り。それに、なんだか次の試合も棄権する  
人がいるらしくて、今からの試合・・・ナルトが出るんだから、あ  
んたも応援しなさい！」

「・・・・・・・・分かったわよ・・・」

いの中からそう言われ、中央の試験会場に顔を向けるといのの言ったように、自分にいつも文句ばかり言ういじわるで、でも本当は優しい金髪の少年、うずまきナルトへと視線を向ける。サクラの視線の先では、ナルトが屈伸をしている様子が映っていた。

「ナルト君……」

「大丈夫だヒナタ。確かにあの砂の奴はヤバいが、ナルトならあいつに絶対に勝てる。だから、な！」

私がナルト君の名前を呟くと、それに反応してくれたのはキバ君だった。キバ君と私、それからシノ君の3人はあの砂の男の子が凄く

怖い人だっという事を知っている。だから、いのちゃんよりも先に私の今の気持ちがあったんだと思う。

「何何？あの砂の子ってそんなにヤバいの？」

「ああ・・・俺なら予選時の抽選の時点で棄権してる。たぶん、それはシノの奴も同じだ。」

キバ君の言う事は大袈裟でもなんでもなくて本当の事。あんな戦いつて言っていていいのか分からない『モノ』を見たら、誰でもそう感じると思う。

「そ、そんなに？でも、いくらなんでもシノに限って棄権は・・・」

「ううん。シノ君はあんまり感情を表に出さない人だけど、あの砂の男の子と試合ってなったら棄権すると思う。」

「ヒナタまで・・・それなら、ナルトは「それでも・・・」」

いのちゃんの言葉を遮って、今度は私がキバ君に言われた言葉をいのちゃんに言う。

「ナルト君は勝つよ。」

いのちゃんに向けていた顔をナルト君のいる試験会場に向ける。準備運動をしているナルト君は、いつもと同じ雰囲気のまま。

「・・・そうよね。ナルトは勝つわ絶対に。シカマルとシノには悪いけど、優勝はナルトで間違いないわ!!」

「ちょっと！サスケ君がいるのを忘れないでよね!!」

春野さん、ごめんなさい。私も、ナルト君が絶対優勝すると思う。だって、あんなに強くて、優しい男の子を私は他に知らないから。

「はじまるみたいだよ・・・モグモグ・・・」

「やっちまえええ!!ナルト!!」

試験会場の中央には審判員のゲンマを抜かせば俺と我愛羅の2人だけ。そんな俺達2人には観客達の大声はもはや聞こえてはいなかった。互いが互いの事を見て微笑む。我愛羅はこの時をどれほど待った事かという笑み。俺は徐々にガチで戦える事に対する笑み。

「……………」

「……………」

もう俺達には会話は必要ない。ゲンマの開始の合図を今か今かと待つのみ。

「はぁ…………お前らもう少し殺気抑えろっての…………まあいい。  
第2試合『砂の我愛羅』VS『うずまきナルト』…………始めツ!!!」



ゲンマが腕を振り下ろしたのを合図に、まずは小手調べとばかりに俺は我愛羅に向かつて起爆札付きのクナイ4本を投擲する。勿論、投擲した後直ぐに瞬身の術で移動する。我愛羅と対峙していた距離は約5m。そして、今俺がいるここは我愛羅から約50m。さて、砂の防御はどんな感じだ？

「これで終わりではないだろう？」

起爆札の爆風が晴れると、砂の盾を形成している我愛羅が相も変わらず腕を組んだ状態で、笑みだけを俺に向けている。そうそう。それでこそ、『我愛羅』だよ！！瞬時に印を組み、術を発動させる。

水遁 激流弾！！

桃地との戦闘時に使った術を我愛羅に向かつて放つ。周りに川などはないが、チャクラを変換させて激流を生み出す。それを弾のようにして放ったわけだが、我愛羅の砂の盾は一尾のチャクラを基にしているため、簡単には吹き飛ばない。

だが、それでいい。その弾を防ぐために砂の盾は我愛羅の視界を塞ぐ。そこが、俺の狙いだ！！自分が放った術を追いこすんじゃないかという速さで50mを走り、我愛羅が砂の盾で俺の術を防いだ瞬間に後ろに回り込んで、背中を思いつき蹴り飛ばす。

我愛羅の体は面白いように、自分を守る砂の盾の内側にぶつかつた。それも、ドカツという嫌な音を立てて。水分を含んだ砂つて凄く固くなるんだよなあ。

砂の盾が我愛羅を守るべく俺と我愛羅の間に入って来るが、それを無視して今度は掌底を叩きこむ。この掌底はただの徒手空拳ではなく、風遁に性質変化させたチャクラを渦のように回転させて掌で固定させたモノ。まあ、ダイ大のクロ　ダインの技の激烈掌を掌で留めたモノであり、決して螺旋丸ではないのであしからず。

砂の盾を無視したその掌底は果たして我愛羅を吹き飛ばす事に成功した。一尾のチャクラが基になっているせいで、他の下忍には対処のしようがないけど、俺には我愛羅と同じように『尾』の付く相棒がいる。でもまあ、まだ九尾のチャクラは借りてないけどな。

『おいナルト。一尾の奴が出てきたら、我も出るぞ。』

ん、俺としてはそれに賛成してやりたいのは山々なんだけど、ここじゃまずいからもう少しだけ我慢してくれねえか？

『・・・フン、ならその時までには私のチャクラを存分に使え。一尾の奴に負けるなど、私の一生の恥になるからな。』

我愛羅とはお前無しでやりたかったけど、しょうがねえ。なら、使わせてもらっからな九尾！！

九尾との会話もそこに、丹田に力を入れて九尾のチャクラを体全体に行き渡らせる。原作の本戦でナルトがやったモノより濃密で、しかし穢れのない緋色のチャクラ。

「我愛羅！準備運動は終わりだ。本気でいくつてばよ！！」

第1試合のサスケの試合が最後に回った事、そして、第2試合も力

ンクロウの棄権という不戦敗によって無くなり、はじめは落胆の色を浮かべていた観客達だったが、今では狂ったように騒いでいる。

なぜなら、誰もを魅了させる程にナルトと我愛羅の試合は、下忍とは思えない高度な戦いであること、そして、何より金色のナルトの髪が日の光に照らされて、移動するたびにキラキラと輝いて見えているからに他ならない。

そして、魅了されたのは・・・サクラも例外ではなかった。

「す、凄い・・・」

「こんなに強かったんだ・・・ナルトって・・・」

呆けたように呟くサクラ。そして、ナルトの事を強いと思っていたのもサクラと同様に驚きを隠せなかった。実力を、強さを隠しているナルトが言っていたが、実際にこんな戦いを目の当たりにすればいのようになってしまうのは仕方ないだろう。

「アハハハハハ！何だよ！あいつあんなに強かったのかよ！」

「・・・」

キバは自分が勝ちたいと思っていた相手が、こんなに強かった事に対する驚きと悔しさ、そしてそれ以上に嬉しさが溢れていた。恋のライバルであり、幼馴染でもあるナルトの強さに嫉妬よりも、嬉しさが勝る。これは、キバがナルトの事を本当の意味で『仲間』と思っっているからに他ならない。

チヨウジに至っては、それまで食べていたどら焼きを口から袋に戻すくらいの驚きでいっぱいだった。そして、『僕にも・・・こんな僕でも、ナルトみたいに強くなりたい』という想いが、チヨウジの心の中で生まれた瞬間でもあった。

「ナルト君・・・頑張つて。」

小さく呟かれる言葉。だが、それに込められたモノは大きい。ヒナタは、両手を合わせてナルトに声援を送る。

そして他の場所でも・・・

『あまり羽目を外さないようにって言ったんだけどなあ・・・はあ・・・』

『フフでも、本当に楽しそうだってばね、あの子。』

ナルトの両親である、ミナトとクシナが変化の術で観客達の中でそんな事を話していたり・・・

「いやぁ・・・彼は想像以上ですよ、大蛇丸様。」

眼鏡をキラッと光らせながら、邪悪な笑みを浮かべてそう洩らすのはカブト。

（フッフ　ナルト君、君を絶対に手に入れてみせるわ。そう・・・絶対にねえ）

気持ちの悪い事考えながら、ナルトを観る変態。

本戦第3試合という名の事実上の第1試合目は、こうして始まったのだった。



いよいよ本戦のはじまりだつてばよっ！（後書き）

38話でした。

といたしますか、お久しぶりです。うたわれな燕です。何とか、こちらの方も更新する事が出来ました。

待っていてくださった人が何人いるか分かりませんが、このssを読んで楽しいひと時を過ごして下さいましたら私としては嬉しいです。

そして、本戦がはじまったというのに、良いところでぶつたぎる・・・  
・一度やってつみたかったんですよww

なので、次回の更新を楽しみにしてくださいませれば幸いですww

それでは、うたわれな燕でした。



変身だつてばよっ！

片や、アカデミー時代を万年ドベとして過ごすだけでなく、幼少時から現在進行形で里の者達に忌み嫌われている『うずまきナルト』。

片や、アカデミーに通うことなくエリートの下忍となりはしたが、ナルトと同じように里の者達に嫌われるだけでなく、実の父親である風影に殺されそうになった過去を持つ『我愛羅』。

全く同じ境遇なようで、全く違う境遇。

自分を『見てくれる友達』と『理解者』を、自分を『裏切った友達』と『拒絶者』を、二人は得たのだ。

得たものは全く違うモノであり、それは全く同じ境遇の二人を、全く違う道に進ませた。

ナルトは『友達』を守るために力を求め、我愛羅は『自分』以外の他人を殺すために力を求めた。

そして今、そんな二人が対峙しているのは運命なのか、はたまた違う何かなのかそれは分からない。

観客達は自分達が持っている受験生達のリストに目を落とす。アカデミー時のデータが簡単に書かれているそれには、木ノ葉の受験生だけでなく、砂と音の受験生達のデータも簡単に書かれていた。そしてその中に書かれている一文にはこうある。

『アカデミー始まって以来の落ちこぼれ「うずまきナルト」』と。

「おいおいおい・・・あの金髪の子ビって落ちこぼれじゃねえのか  
よ・・・」

「ああ・・・あれで落ちこぼれなら、俺達は中忍になれるわけねえ  
よ。」

「いいぞチビッ！！そのままいつちまえ！！！！」

「砂のガキも頑張れよっ！！」

観客達は一斉に騒ぎ始める。下忍達はナルトの実力と自分の力を比較し、一般の者達は単純に面白い試合に興奮し、全ての視線が会場の中央へと向けられた。

吹き飛ばされた我愛羅を待たずに、ホルスターから手裏剣を一枚取り出すと同時に、砂煙で見えない我愛羅がいるだろう場所に向かって投擲する。他の奴が相手だったら、ここまでしねえけどお前なら大丈夫だろう？なあ、我愛羅！！

手裏剣を投擲した右手に左手を添えて、印を組んで行く。

手裏剣影分身の術ッ！！

それはただの影分身の術じゃない。たった一枚の『手裏剣』という物質を千枚を軽く超す数に増やす影分身の術の応用術。まあ、こん

な術で我愛羅を倒せるなんて思ってたねえけどな。この術は砂の盾がオートで動く事を利用して、動きを封じるのが目的だ。てか、さっきから動きを封じた攻撃しかしてないような・・・ま、まあ、我愛羅も何とかするだろ。

我愛羅がいるだろう所に、無数の手裏剣が殺到する。そして、それは俺の思惑通りに我愛羅の砂がオートで動いて、我愛羅に傷を負わす事はない。

「うずまき・・・ナルトおおおお!!!!」

腕を組んだ状態が我愛羅のデフオだけど、今の我愛羅は砂の盾の向こうで片膝を着いた状態で血走らせた目を俺に向けてくる。おお、さっきの掌底ってば思ったより効いたみたいだな。でもまあ、俺のターンはまだまだ続くけどなッ!!

「こんなもんじゃないだろ？なあ・・・我愛羅。」

そんな軽口を我愛羅に向けて言い放つと同時に、それまで左手の人差し指に作っていた風遁・螺旋丸指バースションを某海賊漫画に出てくる主人公の兄貴みたいに手を銃に見立てて、我愛羅に狙いを付けて解き放つ。

「風銃ふうがんってかつ!!」

原作のナルトは螺旋手裏剣って名付けたけど、俺のこの螺旋丸って手裏剣みたいな形になってないんだよなあ。螺旋丸を風遁のチャクラが覆ってる感じで形としては、ただの螺旋丸と同じ形。まあ、違うのは色かな。風遁なら緑、火遁なら赤みたいな？まあ、水遁螺旋丸は更に青くなる程度で大した色の違いはないけど。まあ、閑話休題ってことで。

無数の手裏剣が砂に刺さっている場所に向けて放ったそれは、我愛羅の無敵の砂の盾を見事に貫通してくださったようで、砂の盾の向こう側にいた我愛羅にダメージを負わせる事に成功した。

これで、砂の守鶴も出てきやすくなるだろ。そうなれば、大蛇丸も砂も、音も動くしなくなるし。まあ、原作と違って本戦の試合が俺と我愛羅のこの試合だけになっちゃうけど、まあそれはしょうがないって事で。

本戦出場選手の控室とは名ばかりの火影と風影の席の真下に本戦に出場する下忍達はいた。その中には、カブトやミスミ、ドスの姿もある。三人の内、ミスミだけは後ろの壁に背中を預けて、大蛇丸の命令がくるのを待っているが、カブトとドスに至っては他の下忍達同様に手摺に手を置いて、試合会場にいるナルトと我愛羅の試合を観戦している。

そして、本来なら第1試合目に出る筈だった『うちはサスケ』の姿もそこにはあった。それは、ホンの少し前……

自分の試合が1試合目である事を知っていたサスケは、遅刻魔の力カシをどうにか連れてちよつとだけ遅れてこの試合会場に辿りついたが、やはりちよつとでも遅刻は遅刻。受付の場にいた中忍に、試合がもう始まっていると聞かされた時は、本気で力カシを恨んだサスケだったが、中忍の話を聞くとそれもなくなつた。

『ハハハ、大丈夫だよ。君の試合は最後に回して行う事になったから、失格にはなっていない。それに、今やってる試合も本当なら3試合目だったやつで……』

中忍の話をそこまで聞いて、サスケは力カシとその中忍を置いて瞬

身の術を使つて選手控室に向かった。カカシが何かを言っていたがそれもこの時のサスケには聞こえていなかった。なぜなら3試合目は、ナルトの試合だったから。

そして、今に至る。眼下で繰り広げられる下忍同士の戦いとは思えない戦いをサスケは半分は信じられない気持で、もう半分はああやっぱりなところか納得の気持ちで観ていた。

一ヶ月という短い時間で少しはナルトとの距離を縮められたと思っていたが、それは甘い考えであつたとサスケに悟らせるには十分であつた。

「はは・・・なんだよ・・・お前が強いつてのは、分かっていた心算だったのに、全然分かつてなかつたなんて・・・」

自嘲気味に呟くサスケの口元は笑みを形作っている。言葉とは裏腹に、サスケは『喜び』を感じていたのだ。奇しくも、こことは違う場所にいるキバと同じ事を感じていたとは知りもしないサスケであつた。



観客席に座っている上忍四人は驚いていた。目の前で行われる、下忍二人の戦いに。ちなみに、カカシは遅れてやってきたが、三人とも既に慣れていたので特に何も言わなかった。

「カカシ・・・お前、あの術を使えるか？」

「・・・出来なくはないが、俺がやってもあの数の手裏剣は出せないだろうな。」

「いや、カカシじゃなくてもあの数の手裏剣を出すのは無理だ。それにあの術は、三代目だけが使える術だった筈。それに、最後の術は・・・」

「見た事も聞いた事もない術・・・そう言いたいんですよ、アスマ。」

ガイ、カカシ、アスマ、紅の四人は集まって観戦していた。自分達

が担当する下忍達の試合を観るために。そして、大蛇丸が何か少しでも動きを見せたら動けるように。

「ああ。あんな術は俺は知らないし見た事もない。カカシ、お前は  
どうだ？」

「……」

「カカシ？」

アスマの問いには応えずに、試合会場の中央を見続けるカカシ。そんなカカシを見て変に思ったガイがカカシの名を呼んで、反応を窺う。

「……昔、見たことがあるような気がする。だが、ナルトが使った術はあの時俺が見たことのある術とは違う……」

「ようするに、カカシも知らないって事ね。だとしたらあの子、自分で新しい術を編み出したって事？」

紅のその問いに、カカシは肯定も否定もしない。それは先ほどナルトが使った術が、昔自分が見た事のある術に本当に似ていたからであり、使う術や姿は違ってもあの『金色の髪』を見ると『あの人』

を思い出すからだ。

「だが……」

アスマは新たに取り出したタバコを口に咥えると、それに火を点けて煙を肺に取り入れる。そして、ゆっくりと煙を吐き出して続ける。

「ナルトはこの試合で一気に不利になった。」

「どうして？今だって、ナルトの方が押してるのに。」

「アスマの言う通りだ。ナルトは里の者達。特に13年前の事件で親類を亡くした者達に憎まれている。それはもう……殺したい程にな。」

「今までは下忍で『落ちこぼれ』だったからこそ、殴ったり馬鹿にするだけで済んでいた。だが、それもこの試合を観た奴達には分かってしまった。『あの九尾のガキは爪を磨いでいたのだ。自分たちに復讐するために』ってな。」

アスマの言葉でようやく紅は気付いた。自分達の目の前で、下忍とは思えない戦いをするナルトに紅は目を戻す。

(そうだった。あの子は里の人達に恨まれているんだ・・・あの子は悪くないのに・・・)

「人を殺める事の出来る術をあんなに持っているんだ。そう思うのは当然だろうな。特に、ナルトをいじめていた奴らは、な。」

「させないさ。今度こそ、あいつは俺が守ってやる。」

それまであまり言葉を発しなかったカカシが、ガイのその言葉を実現させないと決意を宣言する。

アスマとガイが辺りの観客を見渡し、その中に数人表情を強張らせている者を見つけた。念の為に、全員の特徴を覚えようとする二人だが、数が多過ぎて全員は把握しきれない。

「カカシ、お前だけが気張らなくて良い。ナルトに何かあったら、いのが何をしてかすか分からないからな。」

「そうだぞ、カカシ。この俺もいるんだ。どーんと安心しておけ！ガッハッハッハ！！」

「ガイは無視しておくとして、私もヒナタを泣かせたくないし、手

を貸すわ。それに、あんな良い子をこれ以上不幸にさせたくないしね。」

「・・・ありがとな。」

カカシが三人にそう礼を述べているその時、試合会場の中央では動きがあった。

俺の風銃を喰らって、砂の盾の向こうで苦しげに呻く我愛羅。最近じゃその無敵の盾が自分の身を守っていたせいで、怪我っていう怪

我を負うのも久々だろうから、余りの痛さにびっくりしてんだなきつと。

と、そんな事を考えていると、我愛羅が砂の盾を自分を中心にして球の形にしていき『独り言』を呟き始める。原作でお馴染みのあの『独り言』を。

「・・・痛い・・・痛いよ・・・母さん。血が・・・俺の血が・・・うん・・・うん・・・大丈夫。今度は俺が『アイツ』の血を母さんにあげるから・・・」

うわあ・・・チャクラの反応で分かるけど、一尾の気配がもの凄く濃くなったなあ・・・砂の盾の向こうで我愛羅ではない、別のモノ・・・一尾のモノだろう奇妙な腕が二本生えてくる。

俺以外の奴であの腕を見てもびっくりしないのって、変態蛇野郎くらいなんだろうなあ・・・と、そんな考えが一瞬浮かんで嫌な気分になっているところに、鋭利で巨大な爪を持つ腕を振り下ろしてくる我愛羅。

それを直撃寸前で後ろに跳んで回避して、我愛羅に目を向ける。我愛羅は振り降ろさなかった方の腕を振り回して、自分を中心に展開した砂の球を吹き飛ばした・・・邪魔だったんならもつと違う方法で一尾出せばいいのに。

「ガアアアアアアアッ！！！」

背負っていた瓢箪を通して、一尾のチャクラを自分自身に取り入れている我愛羅。いや、あれは一尾の奴に吞まれかけてるんだな。理性っていう人間に備わっている有り難いモノが吹き飛んでるみたいだし。

上半身を化け物に変化させて、咆哮？を上げる我愛羅。てか、今思っただけけど今の俺って九尾のチャクラを纏ってるんだよな？それって……『アレ』と同じようなモン？？

『阿呆が！！あれと一緒にするでない！！我はあくまでもお前に力を分け与えているだけで、一尾の奴とは違う！！』

わ、悪かったって九尾。だから、そんなに怒るなって。

『ふん……分かればいい。それより、いいのか？一尾の奴をこんな場所で顕現させて？お前の考えていたモノとは違う事になるが……』

うんそうなんだけどさあ……ま、何とかなんじゃね。いざとなったら父さんと母さんもいるわけだし、火影のじいさんも大蛇丸が何かしてくるって事を事前に知っているから、原作と違って対処

が早いと思うし。

『・・・お前がいいなら、我はもう何も言わん。だが、一尾の奴が完全に出てきたら、我を出せ。久しく見ていなかったが、やはりあいつの顔は好かん!』

了解だつてばよ!! 九尾にそう応えてから、我愛羅の方に意識を向ける。

顔の原型がもはや元のそれでない我愛羅は、口から涎を垂れ流して笑みを浮かべ、殺意と狂楽をこめた瞳は星のような形になっている。

我愛羅は、にやあくとした笑みをしたまま腹を膨らませて、一気に俺に向けて息?を吐き出した。

風砂塵・大突破!!

息だと思ったら立派な術だったみたいだ。砂と塵を乗せた『風』が俺に向かってくる。風遁のお返しってことか?それはそれは、ありがたいこつて!!

土遁・土流壁!!



瞬時に印を組み、地面に掌を当てて土の壁を作り出して、風を防・  
・って防げてないな。土の壁はギシギシと嫌な音を鳴らし、と次の  
瞬間には土の壁を吹き飛ばして『風』は俺に襲いかかって来た。

瞬身の術で『風』を回避し、我愛羅の後ろに移動する。ツ！あつ  
ぶねえ・・・嗅覚も鋭くなってるみたいだな。俺が移動したところ  
に、棘付きの太い『尻尾』を振り降ろしてきた。

「もっと・・・もっとだ！俺を楽しませろ！うずまきナルト！！」

「あはは・・・テンション高くなったな我愛羅・・・」

俺のその言葉を特に気にした風もなく、耳まで割けた大きな口を歪  
ませて、太い砂の尻尾を地面に叩きつける。うわ・・・地面割れた  
し・・・

大蛇丸の奴もそろそろ動き出すだろうし、我愛羅には悪いが一気に  
行くか！

我愛羅は腕を交差してその表面に突起物を無数に作り出し、それを  
交差していた腕を開くと同時に解き放った。砂の手裏剣群を避けな  
がら、我愛羅に向かって疾駆する。掌に螺旋丸を携えて。

（成る程ね。『アレ』が彼の中に巢食っている一尾・・・でも、ナルト君の九尾と比べたら雲泥の差だ。だけど、腐っても同じ尾獣を持つ人柱力なんだから、ナルト君を少しでも弱らせて欲しいものだね。）

選手控室となっているそこで、カブトが口角を上げて試合会場の中  
央。つまりは、ナルトと我愛羅を見て邪悪な笑みを浮かべる。

（サスケ君は・・・まあ、連れて行った後にも調整は効くし、今はナルト君の実力が見れただけで良しとしておこう。）

自分の主人である大蛇丸の魂を受け入れる器である、うちはサスケ。

下忍でありながら自分は勿論の事、大蛇丸をも退ける事が出来る『戦闘力』を有している、うずまきナルト。

そんな二人の観察もカブトの仕事に組み込まれていたが、サスケの観察は遅刻という予測不能な事態によって出来ずにいた。

（僕の幻術が計画発動の合図。タイミング的には、砂の彼がナルト君に目で分かるくらいのダメージを与えてからがいいんだけど、見る限りあまり期待しない方がいいみたいだな。それにしても・・・）

視線を会場にいる暗部や上忍、特別上忍達に向けるカブト。

（木ノ葉の暗部が二十人、そして上忍、特別上忍がざっと見る限り四十人強・・・これは、計画が洩れている可能性がある・・・）

眼鏡をクイツと中指で押し上げて、隣にいるミスミにも分からない声を漏らす。

「だけど、そんなものは関係ない。木ノ葉崩し・・・必ず成功させてみせる。」

そう呟き、カブトは印を組みチャクラを練り始めた。

（フフ。手始めに、サスケ君を攫おうか。）

（ああ・・・なんて美しいのかしら。ナルト君、早く君を私のモノに・・・フフフ）

大蛇丸はナルトの姿を目で追いながら、ナルトに自分の『想い』を伝えんとばかりに布の下で笑みを深くしてナルトを見ている。

(風影殿・・・前に会った時と雰囲気が違う気がするが・・・大蛇丸の事もある。注意しておくとしようかの・・・)

火影は、そんな風影に変装した大蛇丸を見て警戒を更に強め、眼下の試合よりも隣の人物に対して注意を固めた。

(我愛羅・・・まだ『狸寝入りの術』は発動してないけど、もうあんなに変身が・・・でも、そんな我愛羅を相手にしても一歩も退いていない・・・うずまきナルト、お前は一体・・・)

自分の弟である我愛羅となぜか気になるナルトの間を何度もテマリ  
の目は移動する。まだ計画の時ではないという不安と変身事態に対  
する純粋な恐怖が胸中で渦巻きながらも、ナルトの事が気になって  
気になって、テマリは自分がおかしくなるんじゃないかと思いが  
ら、二人に目を向け続ける。

(大蛇丸からの合図がない今、我愛羅の変身がこれ以上進んでは計

画が・・・已むを得まい。我愛羅が変身しきる前に動くか・・・)

自分の隣でテマリが普段の状態でない事に気づけない程に、バキの心中は穏やかではなかった。ただ、いつでも飛び出せるように体から無駄な力を抜いていたりするところは、さすがは上忍であった。

「おいおい、砂の奴もそうだけだよ、ナルトの奴もおかしいっての。これって事実上の決勝戦だろ・・・」

手摺に手を置いて呆れた声を出しながらも顔にはいつもの笑みが浮かんでいるシカマル。

「・・・だが、例え負けるとしても、俺はナルトと戦ってみたい。」

いつもはポケットに手を入れているシノであるが、この時はシカマル同様に手摺に手を置いて眼下の試合に集中していた。

「うおおおおお!!! 凄いです凄いです凄いです!!! ナルト君に我愛羅君も! 僕も強く... もっと強くなりたいです!!! ガイ先生ッ!!!」

掴んでいる手摺が形を変える程に、強く握りながら眼下の試合を見ているリー。目には更なる決意を、胸には更なる熱い想いを宿しながら大声を上げる。

「リー五月蠅いって!...でも、本当に凄い...金髪君、君は...」

リーの横で、普段の衣装とは違う長い腰布と深いスリットが入った服を着たテンテンがいつもとは違う困ったような表情をしてナルトに目を向ける。

「うずまき...ナルト...砂の我愛羅...クソッ...」

自分の強さを軽く越えた存在である眼下にいる二人を見て、悔しげな顔を浮かべるネジ。

『あらら・・・九尾以外にも尾獣がいる事は知ってたけど、あんな変なのなんだ・・・九尾で良かったって初めて思ったってばね。』

他の者達と感じているところが違うのは、ナルトの母親であるクシナだ。クシナは、肘を膝に乗せて掌に顎を乗せた姿勢でナルトが戦っている我愛羅に目を向ける。

『あとで九尾に言っただけの方がいいよ。でも、砂の彼はナルトみたいに尾獣と和解してはいないみたいだね。最初の頃より、尾獣の気配が強くなってきている・・・それに大蛇丸の事も気になる。僕達も動けるようにしておこう。』

クシナの隣で腕を組みながら観戦していたミナト。そして、ミナト



その言葉にクシナは姿勢を正して首を縦に振って返事を返す。二人が里の者達に姿を見せることになるのは近い。

変身だつてばよっ！（後書き）

第39話でした。

さてさて、まずはまたも更新が遅れてしまい申し訳ありません。なにぶん仕事が・・・

はぁ・・・正直つらいです。ssに逃げてしまおうとも思いますが、現実問題そんなことは出来ませんし、頑張るしかないですよね。

それでは、また次回の更新で。

あ、遅ればせながら・・・

マシンナーズギアさん。クロコインの激烈掌使わせていただきました。

多摩さん。紅蓮火脚というオリジナル術使わせていただきました。神無鴉人さん。人傀儡の術、名前だけ先に使わせていただきました。全貌は、これからの展開にてご期待ください。

それでは。。。。

作戦開始！？いや、絶対阻止！！だってばよっ！

「なあ〜イルカ先生、どうしても駄目かコレ？」

「どうしても駄目だ、木ノ葉丸。それに何回も言うようだが、我慢しているのはお前だけじゃないんだぞ？」

俺のその言葉を聞いても「でも、ナルト兄ちゃんの試合が始まっちゃうんだなコレ！」と言って俺を見上げてくる木ノ葉丸。俺だって叶うなら、ナルトの戦う姿をこの目で観たい。だが、俺はアカデミーの教師だ。ナルト達を教えたように、こいつらが下忍になるその日まで教え導くのが、俺の仕事なんだ。それに・・・

「ナルトってあのアカデミー始まって以来の落ちこぼれの事だよな

「？」

「そうそう。火影の孫の木ノ葉丸がなんで落ちこぼれの奴にここまで執心するのか分からねえよな。」

俺が物思いに耽ったその短い間に、そんな話が生徒達の中から聞こえた。それを聞いて大人気なくも憤りを感じてしまっていた過去もあつたが、今ではそれも無い。なぜなら決まってこれに反論してくれる奴がいて、それを聞くと笑ってしまう俺がいるから。

「おいッそのお前ら！ナルト兄ちゃんの悪口はこの俺が許さないんだなコレ！それに、ナルト兄ちゃんは落ちこぼれなんかじゃない！！ナルト兄ちゃんは将来、火影の名を継ぐくらい立派な忍者なんだぞコレ！！！」

木ノ葉丸。三代目様のお孫にも関わらず、やんちゃが過ぎる奴でナルト達の時と同じくらい俺を困らせてくれる奴。そして、こうやってナルトの事を慕ってくれる奴でもある。木ノ葉丸のその言葉に、「じゃあそれを照明してみせるよ！」「そうだそうだ！」との声がかかるのもいつもの事。

そして、木ノ葉丸がそこで口を噤んでしまい、俺が「はい、そこまです。」とフォローを入れるのもいつもの事だ。木ノ葉丸に目を向ければ、俯いて何かを呟いている。何を呟いているのか俺には聞こえないが、何を呟いているかはなんとなく分かる。

大丈夫だ木ノ葉丸。そうやって我慢し続けるのも今日で終わる。だって今日はアイツの晴れ舞台なんだからな。そうだろ、ナルト？窓の向こうに目をやっても見えはしない試験会場にそんな思いを馳せながら、「それじゃあ気を取り直して、チャクラの勉強を続けるぞ。」と、俺自身も気持ちを切り替えていく。

ただの螺旋丸を右の掌に留め、砂手裏剣の群を回避しながら我愛羅に向かって駆けていくと、視界の端で鳥の羽のようなものが映った。あれは確か……ッ！！カブトか！

それを悟ると同時に螺旋丸をただのチャクラへと霧散させ、大きく我愛羅から距離を取る。このタイミングで仕掛けてくるなんて、カ

ブトの奴本当にいい性格してるよ全く。

念のために幻術返ししておくか。瞬時に胸の前で印を組むと、視界に入ってきていた無数の鳥の羽が消える。そして、観客席に視線を向けてみると既に観客の多くが頂垂れて、深い眠りへ誘われているのが目に入ってくる。同時に、所々では上忍や特別上忍といった奴らが、きちんと幻術返しをして警戒態勢に入っているのも目に入ってくる。

原作と違って暗部の奴らも結構いるみたいだし、何とかなるだろ。んでもって、目下俺がしなくちゃいけないのは……

「我愛羅、変身はまだだ！」

「五月蠅い！！俺は今この戦いを愉しんでいるんだ！邪魔をするな！！！！」

幻術が掛かると同時に我愛羅の近く、といっても多少離れた場所に現れて我愛羅を説得？しようとしているのは我愛羅達の担当上忍であるバキだ。テマリやカンクロウがこの場にはいないという事は、どこか違う場所に行くように言われたかしたのだろう。っと、今はそんな事どうでもいいな。

「ああ……そのおじさん。この状況で、我愛羅に何を言っても

無駄だと思っんであんたも自分の仕事した方がいいんじゃないっすか？まあ、そんな事この里の忍びが許すはずないですけど。」

「その通りだ、うずまきナルト。砂隠れの里がまさか木ノ葉を裏切つて大蛇丸に付くとは思わなかったが、そんなもんもはや関係ない。木ノ葉を裏切つたんだ、それ相応の対応は取らせてもらう。」

口に千本を咥えながら、器用に話すゲンマ。俺と我愛羅の試合が始まってから端っこの方にいたのに、今は俺のすぐ隣にいたりするからこの審判役つても大変だな。そこまで考えたあたりで、俺は我愛羅に視線を向ける。『きちつと勝負つけようぜ』っていう言葉を込めて。

と、その前に影分身を三体くらい残していくか。大蛇丸とか、カブトとか、他にもいろいろあるし、本体の俺はこのまま我愛羅との試合を続行するかな・・・って事で父さん母さん、大蛇丸の方には影分身送るからそいつと協力してくれってばよ。

『全く、しょうがない奴だな。分かった、こっちは俺とクシナに任せとお前は砂の彼を頼んだぞ。』

『行ってきなさい、ナルト。負けたりしたら、今日の晩御飯抜きだつてばね。』

それは絶対負けられないってばよ！！それじゃあ、二人とも後は頼んだから。

と、そんなじゃまあ我愛羅と里の外れの森まで競争と行きますか。

九尾と話すように、父さんと母さんの二人とは離れていてもこんな感じで会話ができる。閑話休題。

その頃観客席にいるサクラ達も会場全体を覆い包む無数の鳥の羽、つまりは幻術に気付いていた。忍び以外の一般の観客達の頭が揺れたかと思ったら、次の瞬間には意識を失ったように頭を垂れてしまう。そして、忍びは忍びでもまだ下忍になりたての忍び達は一般人



のように頭を垂れてしまっていた。

それはいのやチヨウジ、ヒナタとキバの四人も例外ではない。だが、サクラだけは違った。サクラは下忍になりたてだが、幻術返しを行うことが出来たのだ。

(これって幻術！？いったい何がどうなってるのよッ！？)

幻術返しを行い、意識を覚醒させたサクラはイスの陰に隠れながら辺りを探る。因みに幻術返しは高度の忍術であり、並の下忍では到底無理な芸当である。幻術の才能に長けていたサクラだからこそ、下忍と言えど扱えたのだ。と言っても、ナルトによって連日の任務開けでは脚を引っ張った『罰』として、サスケの修行を見学している際には『暇』だからという理由で、デコピンをはじめ、様々な扱き(しごき)を受けており、その際に幻術も掛けられたりといった過去もあったので、幻術返しを覚えざるを得なかったという事実があったりなかったりするのである。

そして、そんなサクラの背後で一般の観客達になりすましていた音隠れの忍びが、音を立てずに立ち上がり、サクラに向けてクナイを振りかざした。

「カカシ、これはッ!?!」

「間違いない、幻術だッ!?!」

「大蛇丸か!」

「解!?!」

現在の木ノ葉で火影の次に強いと言われているカカシとそのカカシの自称ライバルであるガイ、三代目火影の息子であり、かつては火の国の大名を守護するために組織された守護忍十二士の一人であるアスマ、そして木ノ葉一の幻術使いと三代目火影に言わしめる紅の四人が、サクラと同様に印を組んで幻術を打ち消した。

そして、四人が辺りに目を走らせると会場の屋根や観客席から無数の忍びが次々と姿を現すのに気付く。額当てには砂隠れのモノや音

隠れのモノが刻まれている。

「音と砂か・・・音は何となくクサイと思っていたが、まさか同盟国の砂もとはな・・・」

カカシはそう呟き、目の前に現れた音と砂の上忍だと思われる忍び十数人に対して構えを取る。他三人も例に洩れずにすぐに構えを取った。

「俺はカブトを探す。サスケが心配だからな。お前達は・・・」

「分かっている。俺は、ひとまずこいつらをぶちのめしてから行く。アスマと紅は担当する下忍達のところへ向かって幻術返しをしてこい。」

「シカマルはともかく、他二人は間違いなく幻術に掛ってるからな。悪いガイ、ここはまかせた。」

「私もシノは大丈夫だろうけど、ヒナタとキバが心配だね。」

「よし、それじゃあ・・・散ッ!」

カカシのその号令で、カカシはカブトを探しに選手控室へ、アスマと紅はそれぞれ自分達の担当する下忍達のところへ、ガイは目の前にいた十数名の忍び達に向かって突撃した。

「不用心ですよ、サクラさん。」

音隠れの忍びがクナイを手にサクラに襲いかかろうとしたが、それはからくも一人の少女の手によって防がれる事になった。

「え……白……ちゃん？」

サクラが振り返ってみると、そこにいたのは漆黒の髪を腰まで流し

た白だった。アイス屋での装いとは違い、この日の白は動きやすいような服を着ていた。

「再不斬さんのせいで遅れてしまいましたか……どうやら本当に遅れてしまったようですね。ナルト君の試合も終わってしまったようですし……残念です。今日は再不斬さんの夕飯は無いですね。」

最後の方は呟くような小声になりはしたが、白の顔に浮かんでいる笑みはその時ばかりはどこか怖く感じた、後日サクラが語る事である。閑話休題。

「え？あのう……白ちゃん？そこにいるのって……」

「？ああ、何やらサクラさんを襲おうとしていたので、後ろから首にこづして上げただけですよ。」

サクラが白の足元でピクピクと痙攣しながら倒れている音の忍びに指を向けると、白がそれに対して何も特別なことはしていないとばかりに手刀を落とす真似をする。

「それよりも、ヒナタさん達を起こすのを手伝ってくれませんか？僕一人でやるよりも早いですし。」

「あははは・・・白ちゃんって本当に不思議よね・・・」

ヒナタに幻術返しをしている白を見ながらサクラはそう呟き、自分の近くで倒れているチョウジに幻術返しをするのだった。

会場全体が慌ただしくなる中、三代目火影と風影に変化している大蛇丸は変わらずにイスに腰掛けていた。

「何やら会場の方が騒がしいようですね？」

「そのよじじやのじ。」

「宜しいんですか？木ノ葉の長がそのようにのんびりと構えていて。」

「アツハツハ、構わんよ。何故なら……」

「何故なら？」

火影と大蛇丸、二人の間に言葉では言い表せない程の緊迫感が走る。そして、その緊迫感を先に脱したのは……

「お主の相手がこのわしだからじゃ！大蛇丸ツ！！」

三代目火影はクナイを抜くと同時に大蛇丸に切り掛る。だが、それも大蛇丸の後ろに控えていた護衛の一人がクナイでその斬撃を防ぐ。

「フフ いつ気付いたんですか？」

椅子に座った状態を維持し、あろう事か肘掛けに肘を置き、更にその置いた手の甲の上に顎を乗せる大蛇丸。三代目火影の繰り出した

一撃を防いだ護衛もさることながら、大蛇丸は風影の変化を解く事もせず口を隠している布の下で笑みを覗かせる余裕がある。

「なあに、ナルトの試合を観ている途中から、見知った気配が横からしてきたのじゃから気付かずにおるわけがなかるう。しかもそれを隠そうともしなかったからのう、お前は。」

「フフフ それは仕方ないでしょう？あんなにも素晴らしい戦いを私に魅せてくれるのだから、ねえ。」

三代目火影と大蛇丸がそう話している中で、大蛇丸の残る一人の護衛と三代目火影の護衛が姿を消してどこか違う場所で戦いを開始する。二人はそれに目を向けずに互いの目だけを見続ける。一方は苦々しく、一方は笑みで以って・・・

「フンツ・・・場所を変えるぞ、大蛇丸。」

「フフ 分かりましたよ、『先生』」

大蛇丸の口から昔、そう遠い昔に言われていた自分の呼称が出ると、三代目火影は一瞬目をピクッと動かしてしまう。だが、それでも三代目火影は顔を引き締め、纏っていた衣類を脱ぎ捨てる。それは大蛇丸も同じ。二人は瞬身の術で試験会場の屋根の上に降り立つ。三代目火影の衣装は現役の際に使っていた忍装束、大蛇丸の衣装は



腰に綱のようなものを付けた動きやすいモノ。

「……こうしてあなたと向き合つのは何年ぶりでしょう？、まるで昨日の事のように思いますよ。」

「……お前の口からそんな言葉が出て来るとはな。年は取るもんじゃのう……」

「心外ですねえ。これでもまだ若いと自分では思っているんですから。」

「よう言う。……大蛇丸、お前は悪に、闇に染まり過ぎた。かつてお前の師であつたわしがお前に引導を渡してやる。」

「あなたに出来ますかねえ……『猿飛先生』」

爬虫類を思い出させる縦に割れた瞳で、三代目を獲物を見定める蛇のように大蛇丸は見る。そんな大蛇丸の背後には、先ほど三代目のクナイを防いだ護衛が一人。そして、その忍びもここに向かって来る木ノ葉の暗部を向かい打つために大蛇丸の背後を離れる。

一見護衛の役目を放棄したように見えるが、大蛇丸と三代目、二人の雰囲気有助太刀を許すようなモノではなく、大蛇丸からも邪魔は

するなという意思が込められた目で見られたためである。

邪悪な笑みを浮かべ、舌舐めずりしながら目の前にいる三代目を見る大蛇丸。

そんな大蛇丸を見る三代目の顔には、苦いモノとどこか楽しそうなそんなものが浮かんでいたがそれに気付く者は誰もいない。

そしてそんな時、二人を中心にして屋根の四隅に四人の人影が現れる。それらは見るからに体格が小柄であり、三代目の見間違いということもなくその四人は少年少女であった。

腕が六本あるどこか普通の人間ではない少年。

長い前髪のせいでその顔は窺えないが、頭が二つ生えているというこれまた普通の人間ではない少年。

巨漢で力があるだろうと想像出来る少年。

そして最後に、唯一の女でありながらどこか冷たい雰囲気を持つ長い髪の少女。

「そろそろ始まるみたいぜよ、左近。」

「分かってる。お前ら、外の結界張り終わったたら内側にもちゃんと張っとけよ。」

「おう。」

「……うっせえよ、ハゲ。」

それぞれが互いに声を掛け合い、同時に印を組み始める。そして発動される術は結界忍術。

忍法 四紫炎陣ッ！！

術発動と同時に紫炎が立ち昇ると、それが立方体の形になり三代目と大蛇丸を中心に閉じ込める。三代目は視線を大蛇丸から自分達を閉じ込めた結界に移すと、『これ』から出るには中の術者を倒すしかない事を瞬時に悟る。

「そう簡単には出られそうにないのう。」

「フフ……心にもない事を。あなたにとっては、足手まといに入っ

て来られる方がやりにくいでしょうに・・・」

屋根の上で交わされる言葉と言葉。そして、その度に二人を起点にして風が吹き荒れる。もはや、二人の耳には下からの喧騒は入っていない。互いに相手を殺す事、それだけを考えていた。

片や影の名を冠する五影の一人にして、木ノ葉を統べる火影。

片や伝説の三忍と謳い称された大蛇丸。

双方の視線が互いを射抜き、二人の間ではチャクラとチャクラがぶつかり合い、中心ともいえる屋根瓦にビシツという音とともに罅が入る。それをきっかけにして、二人は同時に仕掛ける。三代目は、先ほどナルトが試合で見せた術の印を組み、本来なら自分オリジナルの術を使用した。

忍法 手裏剣影分身の術ッ！！

ナルトが行使したモノより数が少ないように見えるが、それでも一枚の手裏剣が無数の刃となり、四方八方から大蛇丸を襲う。

しかし、大蛇丸はその顔に笑みを浮かべたまま印を組み始める。

忍法 口寄せ・穢土転生ッ！！

術が発動し、屋根瓦を突き破って出てきたのは『初』と刻まれた棺と、『二』と刻まれた棺。その二つの棺を盾代わりとし、大蛇丸は無数の刃から身を守る。

(まさか、口寄せを盾に使うとは・・・)

だが、そんな事よりも三代目が感じた事は別にあり、棺に入っているだろう死人が問題だった。

(よりもよって、あの二人を呼ぶとはのう・・・じゃが、どうしてあ奴を出して来ない?)

口寄せされた二つの棺に厳しい目を向けるとともに、三代目の頬を一筋の汗が落ちる。無数の手裏剣が突き刺さった二つの棺の蓋が、ギィッという音を立てると前のめりに倒れる。

その中から現れたのは、一昔前に忍びの間で使われていた鎧を身に着けた黒髪と白髪の男であった。棺から現れるのだから勿論普通の人間ではない。だが、三代目の目に飛び込んでくる二人のその姿は間違いない、三代目が昔とてもお世話になった人達であった。

『久しぶりよのお・・・サル。』

『ほう・・・お前か。歳を取ったな、猿飛よ。』

死人特有の意思の宿っていない瞳が三代目をその視界に収めると、それぞれ口を開いた。三代目は、口から搾り出すように言葉を返す。

「・・・まさか、このような事で御兄弟お二人に再びお会いしようとは・・・残念です。しかし、覚悟してくださいませよ、初代様、二代目様!!」

『穢土転生か・・・禁術でわしらを呼んだのは、この若僧のようだな・・・大した物だ。』

『だとすると猿飛よ・・・わしらは貴様と戦わねばならぬ・・・と言う事か。』

黒髪と白髪の二人の男は戦乱の世を治め、今の木ノ葉を築いた創始者であり、共に最高の忍びと謳われた三代目が尊敬してやまない偉大な師達である。

「年寄りの寄り合い話はその位にして・・・そろそろ始めませんか

「？」

両手に札を括り付けたクナイを持ち、大蛇丸が口を挟む。

『いつの世も戦いか・・・』

黒髪の男、初代火影が呟く言葉は、戦乱を生き抜いて来た者だからこそその重みがある。

「ククク・・・好きでしょう？」

だが、大蛇丸は初代火影の言葉を一笑に伏す。三代目の双眸が険しさを増して、かつての教え子を睨み付ける。

「死者を愚弄しおって・・・時を弄ぶと碌な事にならんぞ、大蛇丸  
！！」

三代目はこれから自分の師であった二人と、かつて教え子だった伝説の忍びの三人を相手にしなくてはならない。だが、この時三代目の胸中には焦りなどといったものは不思議となかった。それがなぜなのか・・・それは、直ぐに分かる事になる。

『あゝ僕達もまぜてもらっていいですか？』

『何言ってるのよ、ミナト。混ぜるに決まってるでしょう。』

そんな軽口と言っている言葉が緊迫したこの場に流れる。これには三代目や大蛇丸、初代に二代目も例外なく言葉が聞こえた方に顔を向ける。そして、そこにいたのは長い黒髪の麗人と、茶髪的美丈夫であった。

そして、そんな二人はその場の雰囲気など無視して、三代目の方に向かって歩いてくる。大蛇丸は、結界を張っている四人の少年少女に視線を走らせるが四人には何の支障もなく、勿論張られている結界にも少しの綻びもない。それなのに、この二人は結界の中に入ってきた。大蛇丸の顔にそれまで浮かんでいた余裕の笑みはなく、警戒する者特有の顔がそこにはあった。

『お久しぶりです、猿飛先生。お元気そうでなによりです。』

「お、お主らどうやって……それに、わしの事をその呼称で呼ぶが、わしはお主らの事など……」

三代目の顔には、警戒と緊張が合わさったようなものが浮かんでいた。大蛇丸の仲間である事も、この場の状況では否定出来ないからだ。



『フフ 猿飛先生。この結界なんて、私の結界忍術に比べたら幼稚も同じだってばね。』

女が笑いながらそう話すが、この結界は決して幼稚などといったものではない。現に、先ほどから木ノ葉の暗部が入ろうとしても入っていないのだから。それを、幼稚と切つて捨てる事が出来る。そんな忍びを三代目は今も昔も一人しか知らない。だが、そんな事は決してあり得ないのだ。そう、世の摂理として絶対に……だが、そう思つていても、期待してしまうのもまた事実。

『先生。先生があの人と戦いたいののは知っていますけど、ここは僕達も一緒に戦わせてもらいますよ。あつちには初代様と二代目様もいるみたいですしね。』

茶髪の男はそう言うと、大蛇丸達と対峙するように体を三代目から大蛇丸達に向けて構える。それは、黒髪の女の方も同様であった。

「……本当に……本当にお前達なのか……だが、どうして……」

『フフ 先生泣くのはまだ早いですよ。泣くのは、あそこにいる『恩知らず』を倒してからだつてばね。』

『そうですね、先生。僕達は夢でも幻でもありません。この戦いが終わったら、『全て』お話するつもりです。だから今はこの戦いに集中しましょう。ね?』

男と女が三代目の少し前に立ち、後ろに顔を向けて話す。その二人の顔には今から戦いを始めようとしている者が浮かべるとは思えない『優しい』笑みがあつた。

「・・・お話し中ごめんなさい。でも、私を無視しないでくれませんかねえ?それに、あなた達二人は何者なのかしら?これの中に入る程優秀な忍びが、今この里にいるとは思わなかつたので・・・教えてもらえませんか?」

『おっと、これはすみません。しかし、決してあなたを無視していたわけではありませんよ、大蛇丸さん。』

『そうそう。それに、ナルトにきつく言われてて変化の術を解いてなかつただけだってばね。』

それだけを言うと二人を一瞬白煙が包んだ。おそらくだが、変化の術を解いたのだろう。そして、三代目はやはりといった思いで、大蛇丸は信じられないといった思いで、それぞれ変化を解いた二人を見る。

『元四代目火影、波風ミナト。この戦、助太刀させてもらいます。』

『うずまきクシナ改め、波風クシナ。同じくこの戦、助太刀させてもらうつてばね。』

そこには13年前の九尾事件の時と変わらない姿をした、二人の姿があった。

千本を啜えたゲンマが辺りを見回しているのを横目で確認してから、我愛羅に向かって口を開く。こればかりは、こいつに邪魔された

くねえし。

「おい我愛羅。試合の続きあつちの方でやらないか？ここにいたら、邪魔されそうだしよ。」

ゲンマが俺に振り向き、何か話そうとするがそれはあつちの上忍に遮られる。そんな千本なんか啜えてるから咄嗟に口が開かないんじゃないの？

「我愛羅、こいつの言葉を真に受けるな。お前達は『木ノ葉崩し』を執行しろ、いいな。」

「俺に指図するんじゃない。お前から先に殺すぞバキ！」

「風影様の命令に逆らうのかッ！早く行けッ！！」

「五月蠅い！！あんな奴の命令など知った事かッ！俺は、俺のしたいようにする！」

何か、我愛羅が反抗期起こした中学生に見えるんだが・・・気のせいかな？まあ、こっちとしてはありがたい状況だから、別にいいけど。

「って事なんで、あとは大人同士で好きにやっってください。俺と我愛羅はあっちの方で試合の続きしてますんで。行くぞ我愛羅！俺について来れるか？」

「馬鹿にするな。だが、ついて行ってやる。そこで、お前を殺してやる……」

それだけを言い残して、俺は会場の高い壁に向かって駆けだすと我愛羅も後を追って駆けて来る。よしよし、一尾をこんなところで完全にしたら流石の俺でもめんどくさ過ぎるしな。後は父さんと母さん、それから影分身達に任せよつと。我愛羅と闘ってる方が、大蛇丸相手にしてるより楽しいし〜。

「待て、ナルトツ!!」

それを見たゲンマが慌てて俺を呼び止めるが、バキが行く手を遮ったようだ。

「お互いガキの扱いには苦勞するようだが、余所見する暇なんてないだろう?」

「クツ……この騒ぎの主催者は大蛇丸か?」

「さあな。取り合えず・・・盛り上がって行こうぜ。」

こうして、ゲンマとバキの二人も戦いの中に身を落とす事になった。これは原作通りだな・・・ん？おお～流石に早いな。父さんと母さんが大蛇丸の所に着いたみたいだ。これでじいさんの死が限りなく0になったわけで、俺も我愛羅との戦いに集中出来るわけだ。

そんじゃまあ、もう少しスピード上げますか！ついて来いよ、我愛羅ッ！！

作戦開始！？いや、絶対阻止！！だってばよっ！（後書き）

第40話でした。

といますか、何と本日でちょうど掲載して一年です。これも、たくさんの読者様の支えがあったからこそであり、本当にありがとうございます。ございます。

さて、一年という長いような短いような期間ではありましたが、ようやくここまで書けました。正直、一年かけてここまでしか書けていない自分に呆れています。

本来の予定では、綱手姫を迎いに行くのは当然として、他にも他の人柱力に会いに行ったり、ハーレム要員と絡ませたりといろいろやりたいことがあったのですが、未だに中忍試験とか・・・www

と、こんな感じではありまして、私としましては一周年記念として外伝みたいなものを書きたいと思っっているのですが、如何せん現在とてもいい場面なものもあり、外伝を挟むのは読者様方にも、おい！ここでかよ！！と思われてしまうと感じますので、外伝につきましては中忍試験編が終わったらにしようかと、思います。

そして、それにつきまして読者様方に考えてもらいたいのは、

『誰』の『誰』による『誰』のための外伝にするのか。

たくさんの方に考えて貰いたいです。そしてその中で私が「あ、これいいかも・・・」と思ったモノを書きたいと思しますので、どうぞ皆様よろしく願います。

それではまた次回の更新で。



サスケは残念な子???だってばよっ!

「・・・ククク・・・アツハツハツハッ!面白い・・・面白いわ!  
波風ミナトとつずまきクシナがまさか・・・生きていたなんてねえ  
!!!」

愉しそうに。こんなに愉快な事はないと言わんばかりに、右手を顔  
に、左手を腹に当てて狂ったように嗤う大蛇丸。それは今まで見せ  
て来た嫌らしい笑みではない。新しい玩具を与えられた子どものよ  
うな笑み。

四代目はそんな大蛇丸を見ても表情を変えずに構えを取る。だが、  
クシナは違った。露骨に嫌な顔を大蛇丸に向けつつ小声で、しかし

大蛇丸に『聞こえるように』呟いた。

『うげえ〜やっぱりあの人って気持ち悪いってば……』

・・・と、その場に変な空気が流れるが、それをクシナは意図してやったわけではない。クシナという女性は良くも悪くも、『うずまきナルト』の母親だという事である。

「……で、では、始めますか。」

仕切り直しとばかりに大蛇丸は嫌らしい笑みを浮かべ、何かの術式の描かれた札が括り付けられたクナイを取り出すと、そのクナイを初代と二代目の後頭部に突き刺した。だが、それだけは終わらない。突き刺したクナイはズズズ・・・と二人の後頭部へと埋まって行き、遂には大蛇丸の手首まで完全に埋まってしまふ。そして、大蛇丸が手を後頭部から引き抜く際には、手に持っていたクナイは消えていた。

「その前にお二人には本来の姿に戻って貰いましょう。」

胸の前で印を結び、自身を守る様に前にいる初代と二代目にチャクラを送り込む大蛇丸。すると二人の全身から白煙が立ち昇りはじめ、ところどころ腐ったような色だった肌が綺麗になる。それと同時に二人の瞳にはつきりとした殺意が宿る。

共に木ノ葉の里を築いた最高の忍び。更に言うなら今の二人の体は全盛期のモノになっている。二人から放たれる殺意やチャクラ、二人から発せられる全てが三代目には懐かしく、そして悲しかった。

「……ますます昔のままのお姿よ……」

もう会えないとばかり思っていた、かつての師達を目の前にした三代目の心境は複雑であるものの、やはり死人の魂を弄ぶなど許せない断じて許すわけにはいかない。

『穢土転生……死者を再びこの世に蘇らせる禁術の口寄せでしたね……おそらく、僕の事も呼びだそうとしたんでしょうけど、僕はこの通り魂を死神に殆んど持つていかれましたから、駄目だったみたいですね。いやあ、良かった良かった。自分と戦わなくちゃならなくなるかと思って少しだけ焦りました。』

『そう言う割には、残念そうな顔してるわよミナト？』

……再び、この場になんとも言えない空気が流れるが、今回は誰も警戒を緩めたりはしない。既に双方闘う準備は出来ているのだから。

大蛇丸は愉しそうに長い舌で舌舐めずりをする。それを見て、クシナが嫌な顔をするがそれを誰も気にする事はない。

「クツクク・・・知っていますか？かつて師と呼んだ者を傷付ける達成感と喜びをッ！」

「・・・間に落ちた者にもはや何を言っても手遅れ・・・ミナトにクシナよ、聞きたい事は山ほどあるが、今この時ばかりはお前達のを貸してくれ。あ奴とわしが一対一で戦えるように・・・」

「ええ。先生がそれを望まれるのでしたら。」

「先生あんな人ブツ飛ばしちゃえってばッ!!」

二人のその言葉に笑みを一瞬見せた三代目。そして、次の瞬間には全員が動き出していた。三代目は大蛇丸に向かって走り、四代目は初代へと、クシナは二代目へとそれぞれ間合いを詰めるべく走り出す。そして、対称的に大蛇丸、初代火影、二代目の三人は待ち構えるべく、姿勢を少し前かがみにする。先に仕掛けたのは・・・三代目だった。

火遁・火龍炎弾ッ!!

体内で練り上げたチャクラを火へと変換し、口から炎の龍を吐き出す。それは、本来うちはの得意とする火遁術であるのだが、木ノ葉の里でプロフェッサーと言われた三代目だからこそ使えるのであった。放たれた燃え盛る炎の龍は、眼前の敵を焼き尽くす為に牙を向く。だが、それは大蛇丸の手によって意思のない『人形』と化した二代目の術によって阻まれてしまう。

水遁・水陣壁ッ！！

三代目とは異なり、二代目の口からは大量の水が吐き出された。その吐き出された水が大蛇丸を含む三人の周囲を壁のように取り囲むことで、炎の龍を近寄せはしない。火と水がぶつかり合う事で辺り一面に水蒸気が立ち昇ることになった。それは、奇しくもそれぞれの目からそれぞれを消す事になり、自分達が戦う事になる相手と一対一になるという構図を作る事になった。

それは、三代目と大蛇丸、ミナトと初代、クシナと二代目という三代目達の思惑通りとなったのだ。

しかし、この場所は一対一を三組するにはあまりにも狭く、所々でやはり二対一になったり、三対二になったりするだろう。

そしてそれは、二代目により引き起こされ、初代がそれに合わせる形で実現する。

水遁・水龍弾！！

先程防御に使用した水に再度チャクラを送り込み、水の龍を作り出す。それをお返しと言わんばかりに対峙するクシナに放った。

『二代目様の術は水遁系が多いって聞いてたけど、本当に多いわね。でも、私の結界術も甘くないです、よッ！！』

そう言うときクシナは右手を上へ、左手を下へ、更にそれを円を描くように上下を変えるように動かし、それが円を描くと同時に前に両手を突き出した。すると、クシナの前方に円の形をしたモノが現れ、二代目の水龍を・・・受け止めた。

クシナのその術に阻まれる水龍であったが、その水は辺りに飛び散っている。そしてこの時、初代はそれを見逃さなかった。

ミナトも初めて見るその印は、元来ある火、水、土、雷、風のどれでもない。そこで、いち早くそれに気付いたのはやはり三代目であった。

(あれは初代様だけの秘術・・・不味いッ！！)

木遁秘術・樹界降誕ッ！！

屋根瓦の一部が盛り上がったかと思うと、次の瞬間には小さな植物の芽が顔を出し、一瞬で結界の中全てを木で覆われてしまう。それは、術名である通りまさに『樹界』であった。原作では、三代目の土遁と二代目の水遁によって出来たが、この時土遁の代わりにしたのは・・・屋根瓦である。瓦も元を正せば、土であるから出来たのだらう。

初代が編み出したと言われるこの木遁は、所謂血継限界いわゆるであり、初代の血が流れる者、そして初代のDNAをその身に宿した者だけが使えない術である。

そして、この術は広範囲の術であり絶大な威力を誇る攻防一体の術であった。三代目、四代目、クシナの三人はそれぞれでこの術に対抗するべく術を行使する。

三代目は右の親指の腹を噛み切り印を組み、自身のチャクラと血を使って契約した生き物呼び出す口寄せの術を。

四代目は自身が開発はしたものの未完成で終わったが、それでも会得難易度Aの術、螺旋丸を。

クシナは自らを中心にし球状の、全ての理を拒絶する自身最高の結

界術を。

四代目とクシナは、それぞれの術で回避する事ができたが、三代目は肩にその大木の先端を喰らってしまい、一瞬怯んでしまう。その一瞬の隙を突いて無数の大木が三代目に向かって蠢く。

襲い来る大木をチャクラを纏わせたクナイで斬り裂いて防ぐが、如何せん多勢に無勢。足元を絡め取られてしまう。そして、身動きの取れなくなった三代目の全身を大木が絡め取って行く。

「フフ 捕まっちゃいましたね、先生？」

そう口にする大蛇丸だが、まだ一步もはじめの場所から動いておらず、変わらないあの嫌な笑みを浮かべている。

対する三代目は苦しげにしながらも、眼前にある大木に向けて血の付いた掌をかざす。

忍法 口寄せ・猿魔ッ！！

白煙が晴れるとそこに現れたのは年老いたように見える人の大きさはあるうかと言うほどの猿であった。だが、そうは言っても身に纏う気は本物であった。



(ふん・・・猿猴王猿魔ですか・・・)

三代目が口寄せしたあの猿を入れると、四対三。数的にはこちらが不利だが、それでも二人の火影を口寄せした大蛇丸の顔には未だ余裕の色が見える。

そしてそんな大蛇丸を無視して、三代目に口寄せされた猿魔は左右を見渡し、状況を・・・理解出来なかった。

『なあ、猿飛。これは俺の目がおかしくなったのか？ミナトとクシナいるし、初代に二代目もいるなんてなあ・・・。まあ、大蛇丸がここにおいてお前のその姿を見れば何が起こっているかは分かるが・・・それにしても、これは・・・』

原作ではどちらかと言うと、厳格な性格をしていた猿魔であったが、この世界においては若干違うようだ。

「まあ、お前の気持ちも分からなくもないが、今はこれをどうにかするのが先決じゃ。」

『ま、確かにな。そんじゃまあ、久々に暴れるかッ!!』

「猿魔、金剛如意じゃ!!」

『おっツ!!』

ボンツとその大きな体軀を白煙が包み、白煙が晴れると猿の形は大木の太さはあるつかと言うほどの棍になった。

空中で静止していた棍は回転を始め、三代目を捕らえていた大木を断ち切ってみせる。自由を取り戻した三代目は棍・・・如意棒を手にとると、凄まじい速度で回転させ、辺りの大木を纏めて薙ぎ払い、切り払う。

(フフ・・・ようやく楽しくなってきたわねえ。)

『先生ツ!!』

「ミナト、わしは大丈夫じゃから、初代様を頼む。クシナは二代目様を。」

『『はいッ!!』』

二人は短く返事を返し、それぞれの相手へと向かって行く。大蛇丸は愉しそうに笑みを浮かべ、顔を上げると口から一匹の蛇がズリユ・・と出てくる。更にその蛇の口から一振りの刀の柄が飛び出し、それを大蛇丸は掴むと同時に引き抜いた。

(草薙の剣の一振りか・・じゃが！)

「行くぞ、猿魔ッ！！」

『幾ら金剛の身体でも草薙の剣は痛エゼ！！』

三代目は如意棒を手に、大蛇丸の頭上へと如意棒を振り降ろした。だが当然の如く、それは大蛇丸に防がれる。一瞬の鏝迫り合いの後、如意棒の先端から猿魔が顔と片腕だけを顕現し、大蛇丸に襲いかかる。

『カアッ！！』

「甘い！」

猿魔のその攻撃は大蛇丸の袖から這い出てきた蛇数匹によって防がれる。猿と蛇の力比べなど、自然界においては実現しないだろう。だが、この時の猿と蛇の力比べは引き分けに終わった。

「つく!!」

「フフ・・愉しいですね先生。既にただの老いぼれと  
思っていました。フフ まだまだ現役でいられますよ？」

大蛇丸と一対一の状況を作ったというのに・・そんな感情が三代目の胸中に渦巻く。それを見て大蛇丸は更に嫌な笑みを濃くするのだった。

木ノ葉の里全体が戦場になっている中、選手控室となっているこの場所でも緊迫した空気が流れていた。その原因となっている三人・いや、二人を中心にして遠巻きに他の下忍達は身構えている。

「やれやれ・・・だから言ったじゃないですか。彼はあなたよりも強いですから気をつけた方がいい、と。」

そうは言うものの、口を開いたその男の顔には楽しそうな笑みがあり、その笑みが向けられる先には木ノ葉の額当てをした忍びの胸を左腕で貫いている、これまた木ノ葉の額当てをした一人の少年であった。

「でも、ミスミさん。あなたのおかげで彼があの時よりも強くなっている事が分かりましたよ。だから、安心して死んでください。って、もう聞いてませんね。フフ」

笑っている男の名は薬師カブト。そして、少年の名前はうちはサスケ。片や楽しそうに、片や憎々しく二人は対峙する。そして、そんな二人を遠巻きに見守るような形になっているのは、木ノ葉の下忍達と砂、音の数名の下忍達であった。そしてこの時、今の状況が『何なのか』を理解していたのは、シカマルとシノ、そしてカンクウの三人であった。

（おいおい、これがナルトの言ってた木ノ葉崩しだったのか？はっ

きり言つて予想以上にやべえ．．．いの達の事も心配だが、今は目の前のこいつをどうにかしねえと駄目か。はあ．．．めんどくせえ．．．)

(．．．．．奴の狙いはうちはか？だが、うちの奴もそれを分かっているような雰囲気．．．いや、奴がどう動こうとも関係ない。奴は仲間であるヒナタを瀕死に追いやった。その相手が敵と分かれば、手加減はしない。シカマルも同じ考えの筈．．．ならば、俺はシカマルに合わせるだけだ。)

(ツチ！！我愛羅の奴が変身したと思つたら、いきなり作戦開始かよ！しかも、我愛羅の奴は金髪のカキ追いつけて行くし．．．まずは、テマリと合流して、それから考えるじゃん．．．)

「．．．一ヶ月前は世話になつたな。来いよ。今度はカカシじゃなく、俺が相手になつてやる。」

サスケは三人の胸中など関係ないとばかりに、ミスミの胸を貫通させていた左腕を振るう事でその邪魔な死体をどかし、自分の約10m先にいるカプトに意識を集中させる。体勢を低くし、相手が動いたら直ぐにでも動く。そんな気迫が、対峙しているカプトだけでなく他の下忍達にも伝わって来る。そんな中、未だ頭の中が混乱している者達はというと．．．

(どづいう事でしょうか．．．サスケ君と対峙しているあの人は僕



ナルトの強さを目の当たりにして、胸中で複雑な思いをしている所にこれである。テンテンの頭と胸中は、既にいっぱいいっぱいであった。

（まただ・・・また僕達が知らない事が起こっている。あの森の中でのも・・・今のこの状況だつて僕には何が起こっているのか分からない。大蛇丸様は何を・・・）

一人他の下忍達より遠くにいたドスの顔は、知らされていた事ではない事が起こったせいだ。木ノ葉の下忍達以上に混乱していた。そして、駒であるドスが思っただけにはいけない事を思った瞬間・・・

「えっと・・・君の名前は確か・・・ドス君でしたか？大蛇丸様からの命令で『彼を殺せ』ってあつたと思えますが、今ここでそれをしてみますか？君がそれをする間、僕は君の邪魔をしようとする『人達』を絶対に近づけませんから。」

それを聞いて、ビクッと体を震わせたのはドスだけではなかった。サスケとカンクロウ以外の木ノ葉の下忍達全員がカブトのその言葉に反応してしまったのだ。サスケは既に臨戦態勢を取っており、何より一ヶ月ほど前に実際に襲われた経験があつたからその心の余裕である。そして、カンクロウは今回の木ノ葉崩しにおける味方からの言葉であり、我愛羅を追いかけるのに木ノ葉の下忍達が邪魔だと思っていた彼にとってみれば、有り難い言葉であつたからだ。



「・・・あなたが大蛇丸様とどういう関係なのか知りませんが、こつちも命令されている身でしてね・・・その言葉を全部とはいいませんが、信じましょう。」

そう言うと右腕を水平にし、チャクラをその腕に纏わせる。それはドスが大蛇丸に文字通り『与えられた』攻撃の術。腕を切り開かれ、太い螺子で固定をされた時はあまりの痛さで死んでしまったかったが、今ではこれがなければ今の自分はいないとドスは思っている。それくらいこの攻撃には自信を持っていたし、何よりデータ上で見た時に自分よりサスケが強いと思わなかったのだ。それが例え、一ヶ月前のモノだとしても・・・

サスケに向かって駆けだし、ドスはその腕を突き出した。例え防いでも、空気の振動はそのまま向こうに届く。そして、腕が狙う場所は人体の中でも弱点としてあげられる耳、その中の鼓膜である。避けられても空気の振動はその腕の周り全てに起こる。だが念には念を入れて、ドスは懐からクナイを取り出し、それをサスケに向かって投擲する。また、ドスが駆けだすのと同時に、カンクローは選手控室から外に向かって飛び降りた。

「ツチ・・・」

サスケはカンクローが消えるのを視界に捉えたが、今は自分に向かって来るクナイをどうにかする方が先決と判断。サスケは自分のク

ナイを一閃させてそれを防ぐ。と、サスケの目の前にドスが腕を後ろに、その走るスピードの威力も加算したその腕を横殴りにして放ってくる。クナイを防いだせいで回避もままならないと判断したサスケは、ドスの思惑通り腕を盾にして横殴りを防いだ。この間、カブトの言葉通りドスの邪魔をする者は皆無だった。そして、ドスは自分の勝ちを確信する。今の一撃は鼓膜だけでなくその奥、つまりは脳へもダメージを与えるのを目的とした、チャクラを込めに込めた一撃であったからだ。

原作でカブトやリーに放った一撃など遊びであったと言わんばかりの一撃だ。現に、空気を振動する波が遠く離れて見守っていたシカマル達の目にも見える程だ。ドスの顔には、いつもの無表情ではなく笑みがあった。だが、それも次の瞬間驚きに変わる。

「成る程。ナルトの言ってた通りその腕に何かあったのは確かみたいだな。けど、ネタの割れた攻撃程つまらねえモンはねえな。」

ドスの腕を防いだまま、平然とした顔で告げるサスケ。と、告げた瞬間には前蹴りをドスに向けて放ち、距離を取った。

「ば、馬鹿な。今の一撃を喰らって立っているわけが……」

尻餅を着いた状態で、信じられないといった表情をしているドスに、サスケは口角をあげたあの特徴的ともいえるニヒルな笑みをドスに向ける。

「フンツ・・・そんな事今から死ぬお前には関係ねえ。」

「ツケ！」

ドスが苦虫を噛む表情で立ちあがり、頭の中でどうするべきか考えた所で自分の見ている世界がだんだん下がっていることに気付く。

（な、何が起きて・・・）

ドスが考えていられたのはそこまでだった。

「いやあくまさがチャクラの膜を張って防ぐとはねえ。僕もやろうと思えば出来ますけど、その前に僕だったらあの腕を壊してしまえますから、その防ぎ方はしないかな。」

パチパチと手を叩きながら、笑みをみせるカブト。その足元には、さっきまでドスだった『モノ』が頭と体に分かれて倒れていた。

「邪魔はしないんじゃないのか？」

「?ああ・・・僕は他の『方々』からの邪魔はさせないと言っただけですよ。僕自身が邪魔はしないといった覚えはありませんよ。」

言葉遊びだ。その考えを持ったのはサスケだけではなかった。例え邪魔されようとも助けに行くと考えていたリーだけでなく、この場にいる全員がそう感じていた。

「さて、余興も思ったより楽しめましたし・・・??」

と、それまで余裕そうにしていたカブトの顔に不思議そうな表情が浮かぶ。それまで何を考えるでもなく動いていた自分の体が動かなくなっただけであり、それは本当にいきなりの事だったからだ。

「ふう・・・やっと影真似の術成功だ。」

そこで口を開いたのは、遠巻きでこの戦況を見守っていた筈の木ノ葉の下忍、奈良シカマルだった。見てみると、シカマルの影とカブトの影が繋がっており、それは奈良家秘伝の術が成功した事を意味していた。

「これはこれは・・・決して油断はしていなかったと思うんですけどね。」

「っへ。さつきまでのあんたなら確かに、避けられるだろうとは思ったさ。だが、一瞬だけあんたは気を抜いちゃった。それを見逃す程俺は馬鹿じゃねえ。」

額から頬に掛けて汗が一滴零れる。口ではそんな事を言いつつも、術を維持するためにいつも以上にシカマルはチャクラを捻りだしているのだ。

「・・・ナイスだシカマル。」

短く口を開くと、数万匹という蟲をカブトに向けて放つシノ。シノはいつでも蟲を出す用意をしていたのだ。班を別にはしたが、シカマルとシノは昔から付き合いのある仲間である。シノは、シカマルの頭が自分などよりも数段上であることよく知っていたし、そのシカマルが今の状況を打破する策を思い付いていないわけがないと信じていたのだ。

数万匹の蟲がシノの体を離れ、カブトに群がる。それを黙って見ていた他の下忍達も次第に何が起こっているのかを悟ると、動き始めた。

「テンテン、俺達はこの砂の奴を追うぞ。リー、お前はここに残ってその二人と協力してあのメガネを倒せ。」

「了解ですッ！！」

「分かったわ。シカマル君、シノ君。二人とも無茶だけはしないでね。」

「へいへい、先輩方も頑張ってください、よ！」

話している最中にもカブトから発せられるチャクラを押し返すべく、シカマルは丹田に力を入れて影真似の術を維持する。それを確認してから、ネジとテンテンはカンクロウを追うために選手控室から飛び降りる。

この場に残されたのは、脂汗を掻きながら術を行使し続けるシカマル、両腕をカブトの方に向けてそこから蟲を送り出しているシノ、なぜか元気いっぱいなのリー、蟲に覆われた形でいるカブト、そして・

(……………取られた。)

獲物を横取りされた形になり手持ち無沙汰になったサスケの五人。戦況は目まぐるしく変わって行くのであった。



サスケは残念な子??? だってばよっ! (後書き)

さてさて、41話でした。一ヶ月・・・早いですね!! 大学を卒業してから、一日一日一瞬で過ぎて行くような錯覚を覚える今日のごろ・・・

ナルトのssといちごのss、二つの作品を執筆中の私ですが、最近様々な方のssやオリジナル作品を読ませていただいております、性懲りもなくまた違う作品を書きたいという欲がでてきまして・・・はあ・・・今の自分にそんな余裕はないと分かっているのに・・・

ヒナタのあわあわ言っているところが書きたい・・・  
いののツンデレツぷりを書きたい・・・

白のデレているところや、テンテンのお姉さんぶっているところを書きたい・・・戦闘もいいですけど、日常パートも欲しいですよ  
・・・

と、いいますかどなたからんま1/2のss書いてくださいませんか???

シャンプーとかうっちゃん、その他にもたくさんの魅力いっぱいキャラがいて、それにオリ主が巻き込まれる的な・・・勿論ハーレムでww

はあ・・・探しても乱xあのモノからんx良といったものばかり・・・ハーレム系のモノってないんですよ・・・非常に残念です。



どなたも書かれないのでしたら、自分が！！と思うのですが・・・  
いや、頑張ってみようかな？？

ま、いろいろありましたが、次回の更新をお楽しみに！！！！

父親達の本気？だってばよっ！

牙通牙ッ！！

「ッチイ！！」

音の忍び四名は思わぬ苦戦に舌を巻いていた。自分達の上司である大蛇丸並びにカブトより、木ノ葉の血継限界である白眼、つまりは日向の幼子、それも宗家の者を攫って来るように言われていたのだが・・・彼らは未だにそれをなし得てはいなかった。

また、何より既に彼らの方が二人も倒されているという事実があった。彼らの目の前にいる下忍だと思われる少年少女の数は六人。そ

して、その中に彼らの目標である日向宗家の少女がいる。だが、その目標である少女に近づくためには……『鏡』の壁を越えていかなければならなかった。

「こんな術知らないぞ！」

「まさか血継限界かつ！？」

音忍達の口を開いて出たのはそんな言葉。だが、それは正しかった。基本五行の火、水、風、土、雷の中では水に近いが、彼らの前にあるのは液体ではなく固体。水ではなく氷。それは、水遁では決して作れないモノなのだ。

「他所見してんなよな、おっさん達よお！！」

牙転牙ツ！！

キバとキバに変化した赤丸の攻撃は、再び音忍達に避けられてしまふ。だが、その回避した音忍達に追撃が掛かる。

肉弾針戦車！！

一人の音忍がそれをまともに喰らってしまい、体に多数の刺し傷が出来る。チヨウジの肉弾戦車を止めるには、壁にめり込ませるか、肉弾戦車をものともしない打撃が必要。

勿論音忍達も最初氷の壁を使って回避しようとしたが、それはクナイをスパイクとして使い、肉弾戦車を改良した肉弾針戦車となったチヨウジが壁を登る様に走った事で弱点を解決し、更に勢いを付けることになったのだ。

音忍の残りはこれで三人。キバと赤丸、チヨウジによって数を半分にしてしまった音忍達は、退く事を考えるが自分達の上司である二人がそれを許す筈がないと瞬時に悟り、この状況を打破する術を考える。しかし、それは杞憂に終わる。

「今だ、白！」

キバが壁に向かってそう叫ぶと壁が上空へとスライドし、向こうにいた四人の内二人の少女が跳び出した。跳び出さなかった二人の内一人は、キバに名を呼ばれた白であった。白は、眼を閉じ胸の前で片手で印を組む。白にとっては忌むべき術であり、祝うべき術である。今更語ることもないが、この術があったからこそ今の白があるのだ。

「すみません・・・僕の大切な友達を狙った貴方達を、僕は許すことが出来ません。だから・・・死んでください。」

閉じていた眼を開き、口を開く白。そして、術は発動する。

### 氷遁・蒼氷牢の術

音忍の内真ん中にいた一人がその術に掛る。氷の中に閉じ込められ、完全な氷像となったのだ。浮かんでいる表情、動こうとしていた体、それらが完全に時が止まったかのようにそのままの状態で、氷の中に存在している。仲間のそんな状態を間近で見っていた音忍の二人だが、跳び出してくると同時に自分達に肉薄してくる二人の少女がいたために、思考を中断しなければならなかった。

その二人の少女はというと、左右対称という言葉が相応しい防具で体をまとめていた。だが、その体術に至っては完全に違っていた。金髪の少女、つまりいのは完全な剛拳で相手と肉薄し、黒髪の少女、つまりは音忍達の対象目標であるヒナタは柔拳で相手を絡め取っている。更に、相手が白の術を目の当たりにして焦りの出ている今が好奇と見た二人は自身が今出す事が出来る最高の技を繰り出した。

「練習中の技で悪いけど、喰らいなさいッ!!」

狼牙風塵拳ッ!!

手刀、肘打ち、掌底、拳打、それらを次々と相手に打ち込み、留めに踵落としを相手の脳天に振り降ろした。いのが独自に開発したこの技は力よりも速さを生かしたモノ。男よりも力の弱い女のいのが、この技に辿りついたのは極最近の事であるが、それについては後日語ろうと思う。

「ごめんなさいッ」

柔拳法・八卦三十二掌ツ！！

相手の32ある点穴を突くこの技は、ヒナタが父であるヒアシより一ヶ月間の修練で教えられたモノである。文字通り血反吐を吐きながら覚えた技である、相手を行動不能にするのに時間は掛らなかった。

音忍を倒す事に成功した三人は、互いに見やっつて笑みを浮かべる。それに加わる様にキバとチョウジが近寄って行くが、一人だけ取り残されるようにポツンとその場にただ立っている事だけしか出来ていなかった一人の少女はポツリと呟いた。

「あんだ達いつの間にかこんなに強く・・・」

ピンク髪という奇抜な髪を持つ春野サクラは信じられないモノを目の当たりにした者特有の顔を浮かべるのだった。

「イビキさん、これ以上は足止めできませんッ!!」

「怯むなッ!!何とか増援部隊が到着するまで耐えろッ!!」

木ノ葉に侵入したのは敵国の忍びだけではなかった。イビキの目に嫌がおうにも入るそれは人間など一呑みに出来る程の巨大な蛇。忍界大戦時にも必ずと言っていい程双方共に投入していたそれ・・・  
□寄せ動物。

如何に優秀な忍びを持つ隠れ里でも、その忍びだけでは完全に落とすことは不可能に近い。その為に、忍び達は巨大な口寄せ動物を召喚することを覚えたのだ。また、その口寄せ動物達にもランクが存在するのだが、現在イビキが対峙している巨大な蛇は伝説の三忍とも言われた、大蛇丸が愛用していた動物だった。

「第三、第六小隊から伝達ッ！！住宅区に巨大蛇が多数出現、援護は難しいとの事ですッ！！」

「第四小隊は砂忍との戦闘により戦闘不能ッ！！第五小隊は・・・全滅との事ですッ！！」

「イビキ隊長ッこのままでは里がッ！！」

巨大蛇がその太く長い尾を振り降ろし、家屋を、人を、全てを薙ぎ払っていく。この場にいる第一、第二小隊の木ノ葉の忍び達は黙って見ている事しか出来ない。なぜ見ている事しか出来ないのか・・・それは、この二つの小隊に口寄せを出来る者がいなかったからだ。口寄せ動物を口寄せするには、その動物と契約する事が必要になってくる。だが、契約といっても簡単ではない。動物の種類によって契約の仕方も千差万別。例として、イビキが対峙しているこの巨大蛇との契約内容は、口寄せする度に贅として生娘千人を蛇の頭であるマンダに捧げなければならないのだ。



この契約内容を守っている人間は過去も今も大蛇丸唯一人。よって、蛇を口寄せするためには大蛇丸の持つ巻物に血で名前を書かなければならなかった。みたらしアッコもその一人。かつて、大蛇丸の部下だったからこそ彼女は蛇を口寄せ出来るのだ。閑話休題。

部下からの報告は次々とイビキの下に届いて来る。部下達が優秀なのは良い事だが、如何せん一つも良い知らせでないことがイビキの顔に苦い表情を作らせる事になっている。

「アッコの奴にカツコつけたのが裏目に出たってか？ククク・・・  
本当に笑えてくる。」

苦笑を浮かべるイビキの口から出るのは、空元気といえるもの。里の被害を抑えるために、部下達が蛇を牽制するが巨大な体躯に意味はない。イビキの口から出たアッコであるが、この時中忍試験会場にて砂忍、音忍と戦闘を繰り広げていた。

「旦那ッもう一匹現れましたッ!!」

「チッ!!忙しいなあ本当によッ!!」

部下の報告を聞くやいなや一匹の巨大蛇の頭の上に跳び移り、印を組むと同時に自らの親指の腹を噛み千切る。そして、それを掌に擦

り付け蛇の頭に手を振り降ろした。

「寄せ・アイアンメイデン鋼鉄処女ッ！！

イビキのその言葉に合わせるように、白煙と共に少女の顔が書かれた大きな鐘が出現した。それは巨大蛇と比べても遜色ない大きさで、現れて数秒と待たずにギイイと音を立てて中心から左右に開き、次の瞬間巨大蛇をその身に取りこんだ。

「拷問器具は伊達じゃねえんだよ、蛇野郎。」

鐘型に書かれている少女の目や口、耳から蛇の物だろう血が流れて行く。それはまさしくアイアンメイデン鋼鉄処女という拷問器具であった。

と、鋼鉄処女の上で片膝を付いていたイビキは油断していたのだろう。後ろでイビキを狙い大きな口を開けている蛇がいた事に気づいていなかった。

「隊長ッ後ろです！！」

「ッ！？・・・」

部下の声に慌てて後ろを見てみるが既に何をしても遅かった。イビキの目と鼻の先に巨大蛇が迫っていたのだ。イビキは瞬時に自分はまだ駄目だという事を悟り、苦笑を浮かべる。だが、イビキが覚悟してから数秒経ってもその時はいつまで経ってもこなかった。なぜなら、その目の前の蛇が口を大きく開けた状態で止まっていたからだ。

「おおーい、イビキの坊主。大丈夫かあ？」

なぜ？とイビキが頭に疑問符を張り付かせていると、聞き覚えのある声が耳に届いた。自分を坊主と呼ぶ人は限られる。そして、この声で自分を坊主と呼ぶのは一人しかいない。と、イビキは声が出た方に振り返る。

「シカク様ツ！？何故、このような場所にツ！？」

「ようやく一般人達の避難が終わってな。それにお前えの命は、ここで散らすには若過ぎる。」

「フフ、シカクの言うとおり。死ぬにはまだまだ早いよ、イビキ君。」

「いのいち様ツ！？」

奈良家当主であり、シカマルの父である奈良シカク。山中家当主であり、いのの父である山中いのいち。木ノ葉の名家当主が二人もこの場にいる。二人という数で増援となるのかという疑問はこの場では捨てざるを得ない。それ程、名家当主という存在は他の一般の忍びと比べるまでもなく『強い』のである。

戦力は既に互角・・・いやそれ以上。イビキが改めて名家の実力を体感した瞬間、巨大蛇の身体が大きく吹き飛ばされた。部下達が何をしても牽制にもならなかった巨躯が吹き飛ばす。それは、イビキ自身信じられない光景であった。

「・・・ッ!？」

「あの野郎、いつも遅えんだよ・・・」

片手で印を組んだ状態で、シカクはもう片方の手を家屋の壁に当て体を支えている。緊急時にも関わらず、それはもうこれでもかと言わんばかりのリラックス状態であった。

「遅かったな、チヨウザ。実戦から離れて勘でも鈍ったか？」

「アツハツハツハ！悪い悪い！蛇退治に少々手間取ったのもあるが、母ちゃん特製の昼飯を食べていたら遅れたわい！」

巨大蛇、イビキの口寄せした鋼鉄処女アイアンメイデンと変わらぬ大きさの人が一步  
一步こちらに近づいて来る。勿論イビキはその人を知っている。奈  
良家と山中家の二家同様に木ノ葉の名家である秋道家、その当主秋  
道チヨウザ。木ノ葉の中で唯一倍化の術という秘伝術を受け継ぐ一  
族である。

「あんな馬鹿デカい蛇を素手で殴り倒すなんて芸当が出来るのは、  
お前えぐらいなもんだつての。それよか、お前の母ちゃんの飯美味  
えもんな・・・そういやあしばらく食いに行つてなかったなあ。い  
のいち、コレ片付けたらチヨウザの家行くぞ。」

そんな軽口を叩きながらも巨大蛇の動きは一時も戻ることはない。  
影縛りの術とシカクが言うこの術は奈良家秘伝の術である。

「ああ、ならパパツと片付けるに限るな。酒は俺とシカクが準備す  
るから、チヨウザは飯を頼むぞ。」

印を組み向こうにいる巨大蛇に狙いを定め術を放つたいのいちは、  
術を喰らっただろう蛇から目を離しシカクとチヨウザ二人の会話に  
加わる。いのいちに術を掛けられた巨大蛇に至っては、体を痙攣さ  
せ口から泡を出しながらも懸命にその場に経ち続けているが、いの  
いちの印を組む手に更なるチャクラが宿るとその場で白目を向き倒  
れてしまう。心乱心という山名家に伝わる秘伝の術は何人たりとも  
防ぐ手立てはない。

「おお！任せておけ！」

シカクの影縛りの術によつて動きを止めていた巨大蛇に向かってチヨウザは己の拳を叩き付ける。グシャ・・・という効果音を立てて潰れた巨大蛇を尻目に、チヨウザ他二人は笑みながら口を開く。

「それじゃあ・・・行くぜ。」

「いのに俺のカッコいい所を見せたいが、それもやむを得まい・・・山中いのいち、推して参る！！！」

「蛇の相手は俺がする。腕力で俺に勝てる奴は綱手の姫さんだけだからなッ！！！」

三人がそれぞれ、砂忍、音忍、巨大蛇に向かって飛び出して行くのを、イビキとその部下たちは呆気に取られながら見ていた。そして、苦いものしか浮かんでいなかったイビキの顔に、本来の余裕のある笑みが戻って来る。

「この戦・・・勝てるぞ。第一、第二小隊全員に告げるッ！これより奈良シカク様、山中いのいち様、秋道チヨウザ様、御三方を援護しろ。この戦、絶対に勝つぞッ！！！」

「了解ッ！！」

部下達の先程とは違う威勢の良い返答に、調子の良い奴らだと胸中で愚痴るが、イビキ自身も三人が来た事によって先程とは違って余裕が出て来たのも事実。ならば、アンコに言ったようにこの場を守るのは自分だと、イビキは目の前にいる巨大蛇に向かって印を組んだ。

「・・・貴様ら、唯で済むとは思わぬ事だ・・・」

「父上ッ！もう動いてはッ！」

「ククク・・・娘を人質に取られたら、日向当主も方無しだな。おい、今度は足の甲に刺してやれ。」

「グ・・・」

現在、中忍試験会場の外にて日向宗家、日向ヒアシが十数人の音忍によるリンチを受けていた。体は既に血で染まっていないところを探す方が難しい程、ボロボロの状態。本来の日向ヒアシならば、音忍十数人など赤子の手を捻るより簡単に倒してみせるのだが、今のヒアシには手を出せない理由があった。

（無念・・・ハナビさえ奴らの手に無かったら・・・いや、それは違うな。私はアイツの試合に目を奪われ、一時ではあったが娘のハナビの事を忘れていた。それが、今の状況を作り出したのだから、私もまだまだ修行が足らんな。）

足の甲に刺さったクナイを抜き、ハナビを掴んでいる音忍に白い瞳を向けるヒアシ。日向家の者は例外なく白眼を受け継いだ影響か、瞳の色が白になる。その白い瞳にはまだ強い光があり、音忍に苛立ちと焦りを生ませる。息は絶え絶え。体はボロボロ。そんな状態に



あるにも関わらず、日向ヒアシの目は死んでいなかった。

「いい加減死ねよ！おら！！」

「ガツ・・・」

ハナビを掴んでいた音忍は仲間の一人にハナビを放り、這い蹲っているヒアシの顔に蹴りを入れる。血を吐きながら顔が上がったところへ、今度は踵落として顔を地面に叩き付ける。地面はヒアシの顔が叩き付けられた瞬間、若干陥没し多少の地割れが起きる。

「父上ッ！！貴様あ！これ以上父上に何かしてみろ！私が、この手でお前を殺してやるッ！！！」

「五月蠅い！！」

「あぐッ・・・」

怒りで白眼を開眼させて音忍を睨むハナビだが、両腕を掴まれ動きが封じられている今、それは何の意味をなさない。ヒアシを蹴り上げた音忍に頬を殴られ、口の中を切ってしまう。小さな口からは血が一筋流れ、殴られた頬は赤黒く腫れる。白くきめ細かい肌だから、余計に赤黒く見える。

「ハナビツ！！貴様・・・許さん・・・許さんぞツ・・・」

「黙れ。お前は敗者、俺達は勝者。勝者は何をしても許されるんだよ、馬鹿が。おい・・・」

音忍が顎をクイツと動かすと、ヒアシの後ろにいた二人の忍びがヒアシの腕を押さえ体を起こす。そして、音忍はヒアシの下に近付くとポーチからクナイを取り出し、ヒアシの右肩に突き刺した。

「ぬうツ！！」

鮮血が右肩から噴き出し、ヒアシの右腕に力が入らなくなる。チャクラを右腕に送ろうとしても途中でそれも途絶えてしまう。完全にヒアシの右腕は機能を失っていた。

「これで、その厄介な柔拳も使えないだろ。木ノ葉最強という体術が見られなかったのは残念だが、お前を自由にすると言われていくからな。トドメだ。」

音忍はヒアシの横に移動し、クナイをヒアシの首に振り降ろした。両腕を抑えられ、体はボロボロ、そんな状態のヒアシにそのクナイを止める術はなかった。

「止めてええええッ!!!!」

(無念・・・)

喉が壊れるかという叫びをハナビが上げ、胸中で一言そう呟き自分の最後を覚悟するヒアシ。音忍は殺ったと思った。タイミングと状況的に、回避も防御も間に合わない攻撃だった。だが・・・

(何だ？手応えが違う・・・)

音忍は違和感を覚えた。クナイを通じて感じた手応えは、肉を切り裂くアレではない。と、音忍が思考に落ちた時、白煙が舞いあがった。白煙に包まれる音忍とヒアシ、それからヒアシの腕を抑えていた二人の音忍。白煙が一陣の風によって晴れると四人だった筈の人数は、一人増え五人となっていた。

「何やってんだよ、おっさん。」

少年と言えるくらいの声が、ヒアシの頭の上から振って来る。聞いた事のあるその声は、自分の愛娘を誑かす(たぶらかす)者の声。そして、先程ヒアシが目を奪われた試合をしていた少年の声だった。少年が音忍のクナイをその手に持つクナイで受け止めていた。

「なぜお前が、ここにいる……」

「いつものおっさんなら、こんな奴ら敵じゃないだろうに。」

決してこの場に相応しくない陽気でどこか人を馬鹿にしたようなその声の主は、鮮やかな金髪に空を思わせる蒼い瞳、試合の時に着用していた山吹色の服の前を全開にした『うずまきナルト』その人であった。

「……お前には関係ない。」

「はぁ……全く、その性格変わらないってばよ。昔ヒナタの病室から追い出された時にも思ったけど、おっさんってば俺の事嫌いだろ?」

「……」

「無言って事は肯定で良いって事?ま、俺もおっさんの事嫌いだから、お互い様だけ。てかさ、ハナビを人質に取られるとか、本当何やってんの?あんた仮にも日向宗家の当主っしょ?」

ヒアシに顔を向けずに、音忍を睨みながら口を動かし続けるナルト。音忍はクナイを持つ手に力を込めても一向に動く気配がしないのを悟り、仲間二人と人質を抑えている者の所へ下がった。

「チツ・・・ガキが何のようだ？」

「お前には関係がないと言っている・・・」

「いやいや、おっさん。あんたこの状況でそんな事言える立場か？ あんたつてば『嫌い』な俺に『助け』られてんの。分かる？ それにな。ハナビはヒナタの妹で、俺にとっても大事な妹分。関係ないわけないだろうが、馬鹿。」

音忍の言葉を無視して、ヒアシとナルトは話を続ける。味方同士とは思えない言葉の応酬に音忍達は口を閉ざすしかなかった。

「誰がお前の助けなど借りるかッ！それに、言うに事欠いてこの私に馬鹿だとッ！？そこになおれ小童ッ！」

「はッ！今のあんたなんかこの指一本で倒せるつての。良いから、あんたはそこで見てろつて。あんな奴ら俺が即効でブツ倒してやるからよ。」

ナルトの口から出てくる言葉一つ一つがヒアシの琴線に触れる。ロボロの体を引きずるようにして立ち上がり、ナルトの横に並ぶと動かない右腕をダラリと垂らし、左手だけで構えを取る。

「おいおい・・・傷口が広がるぞ。」

「黙れ。こんな怪我など唾でも付けておけば治る。それにお前なんぞにヒナタもハナビも『絶対』にやらん！」

呆れた表情を見せながらクナイを持たない片手で頭を掻き、ヒアシから顔を逸らしハナビを抑えている音忍に鋭い目を向ける。ヒアシも白眼を発動させ、その眼をこの場にいる全ての音忍に向ける。

「・・・父上とナルトさんって、本当に仲悪いよね・・・」

ハナビのそんな呟きがこの場に流れる。と、次の瞬間にはハナビを抑えていた音忍の両の手首から先が切り落とされた。

「先手必勝だつてばよッ！」

その声が音忍達の耳に届く頃には、既にナルトの手によってハナビは回収されており、手首を切り落とされた音忍の首が飛んでいた。

「なッ!?!」

音忍の一人がそんな言葉にならない驚きを乗せた声を発するが、既にその声を発した音忍も手首を切り落とされた音忍同様に首が飛んでいた。

「散れ!固まっつていては、ただの的になるぞ!」

直ぐに音忍達の隊長だろう一人がそう指示し、音忍達が四方八方に跳び移る。その跳び移った一部の音忍達のところには、その場から動いていないヒアシがいる。ポロポロの日向宗家の白眼を手に入れようという気だろうが、そんな考えも大事な愛娘に危害を加えようとした親の怒りの前では塵にも等しいモノだった。

「貴様ら全員、生きては返さんッ!!!」

柔拳・八卦空壁掌ッ!!

ヒアシの掌底からチャクラの真空の衝撃波が飛び、音忍数人を吹き飛ばす。更に追撃として、動かす事が出来る左腕に先程よりも多くのチャクラを込めると、吹き飛ばされた一人の音忍に向かって疾駆し、掌底を水月の部分に叩き付けた。

柔拳・破山撃ッ！！

本来なら両手で繰り出すこの技だが、片手の威力だけでも相手を死に至らしめる事は可能。よって、ヒアシの足元に音忍が一人崩れ落ちる。

次の敵を探すでもなく、ヒアシの白眼に死角は存在しない。敵の位置が手に取るように分かるヒアシは自然な動作で、直ぐ近くにいる敵数人に向かって構えをとった。

己を中心に八卦を描き、その中にいる全ての敵の人体にある「八門」を破壊するこの奥義。「八門」の内、一つでも破壊されれば人間は生命活動を停止してしまう。だが、この「八門」を見る事が出来るのは『白眼』を持つ日向家のみ。よって、この技は日向にのみ許された技なのだ。

「開門ッ」

「休門ッ」

「生門ッ」



「傷門ッ」

「杜門ッ」

「景門ッ」

「驚門ッ」

「死門ッ」

柔拳・八門崩撃ッ！！！！

八人の音忍達それぞれの体の一部が凹み、口からは血が止めどなく流れる。

「日向は木ノ葉最強なり……よく……覚えて……おけ……」

ヒアシは残身を解きそう口にすると糸が切れた操り人形の如く、意識を失くしたのか崩れ落ち……なかった。ヒアシの体が地面に着く前にナルトがその体を支えたからだ。

「こんなボロボロの体で良くやるよ、全く。流石は、木ノ葉最強だな、おっさん。」

「ナルトさんッ父上は・・・父上は大丈夫ですか？」

「ああ。血を流し過ぎて気を失っただけだ。増血丸でも口に放り込んでおけば大丈夫だろ。それよか、早くこっから離れるぞ。」

「はいッ！」

ナルトとハナビの後ろには、ヒアシの倒した音忍と同じくらいの数々が地に倒れていた。いずれも、体のどこかが切り裂かれており、五体満足で死んでいる者は一人もない。そして、ナルトはヒアシを肩に担ぎ、ハナビを小脇に抱えて飛雷神の術でこの場を後にした。

また、これは飛雷神の術で移動したその後の、ナルトとハナビの会話である。

「そう言えば、ナルトさん。あの砂の人とどこかに行ったんじゃない・・・」

「ああ、本体の俺はな。俺は影分身の一体。他にも二体の影分身が

いると思っけど、まあそれは別にいいだろ。まずは、おっさんを医  
者に見せないとな。」

「はっ」

父親達の本気？だってばよっ！（後書き）

第42話でした。今回の更新は割と早く出来ました。いやぁ・・・いろいろな場所で戦闘が起きているというのを出そうと思って、寄り道していると火影と大蛇丸、それからナルトと我愛羅の戦いから離れて行きますね。これっばかりは、仕方ないのかもしれませんが、早く木の葉崩し終わらせたいです。

まあ、次で火影と大蛇丸の戦いを終わらせて、その次でナルトと我愛羅の戦いつて感じになると思うので、ナルトと我愛羅の戦いを待っている方がいましたら、もう少しだけお待ちいただきますよう、お願いします。

また、私の頭の中では既に木の葉崩しが終わり、仲間の弔いなどをした後のことがあったりするんですが、これは賛否両論に分かれるかと思います。簡単に言ってしまうと、ヒナタやら、いのやら、テンテンやらのCV担当の声優さんの力を借りて、ライブなんてものをさせようかなあと・・・どうでしょう？まあ、やるかやらないかは、読者様達の反応を見てからになるかと思いますが、私としてはやりたいんですよね。

らんま1/2の女キャラで作ったグループがあるのをご存じでしょうか？DOCOOっていうんですが、そのDOCOOの歌を聞いていて、やっぱり声優さんって凄い！！って思ってしまったんですよwwwwその影響で、上でのライブなんて事を考えてしまっている訳ですが・

・  
・  
ww

とまあ、いろいろ書いてしまいましたが、一人でも多くの方に面白いと思っていただけるように、これからも頑張ります。それでは次回のご更新まで。。。。

## 忍具と風の狂奏曲だってばよっ！

試験会場から出て直ぐの森を俺と我愛羅は駆けている。地を、幹を、枝を使い、我愛羅の攻撃を避けながらの追い駆けっこはまだ終わらせるわけにはいかない。十二分に里から引き離してからじゃないと、俺も我愛羅も思いつきり戦えないからな。

と、俺がその心算でもあつちの方は我慢の限界っぽいな……。ちらつと後ろを見てみると半分変化した状態の我愛羅の顔に、いい加減にしろ！って言葉が見えなくも……

「いい加減にしろっつうずまきナルト！あそこで戦わずにお前に着いてきたのは、他の奴らが邪魔だったからだ！それなのに、いつまでこんな茶番を続ける気だ！！それとも……。お前も臆病風に吹かれて逃げるのかっ!？」

ありゃ、顔じゃなくて口から出ただけか。うん……。ま、こんなくらい離れりゃもういいかな？俺らの後を付けて来てんのは音の奴らだけみたいだし、巻き込んで殺してしまっても問題ないな。目の前に迫った枝に手を当ててクルッと回転。走っていた勢いを殺して枝に足を掛けて、ぶら下がる様にして我愛羅と対峙した。

「分かったつての。ったく、我慢出来ない奴だよな。お前つてばま、そんな状態で我慢も何もないだろうけどよ。」

後ろを走っていた我愛羅は、棘付きの腕を幹とか枝に引っ掛けて足を止めたみたいだ。あの棘って相手を殺傷するだけじゃなくてあんな使い方もあったのな。と、そんな事を考えている暇もないか。我愛羅の奴、あの腕から無数の砂手裏剣を繰り出して来やがった。俺に届くまでに地面を抉って、幹を、枝を、木っ端微塵に吹き飛ばしながら向かって来る。

九尾のチャクラを纏った今の状態の俺に、どこまでダメージを与えるか興味はあるけど・・・ま、素直に喰らってやる程、俺は優しくない。

### 火遁・火狐かこ

波の国で使った時とは違い、色は赤ではなく青。白の『千殺水翔』を相殺させるために使った時よりも、威力はこっちの方が上。炎の色によって温度に差が出るなんて事を、この世界の奴らがそれを知ってるか知らねえが関係ねえ。無数の砂手裏剣を相殺させるために作り出した数匹の蒼い炎の狐は、砂手裏剣に当たると森の中で小さくない爆発を引き起こした。

爆炎のせいで視界が塞がり、我愛羅の姿が見えなくなる。でもよ・  
・そんな馬鹿デカいチャクラを垂れ流してたら、ここにいますよー  
って言ってるモンだぞ、我愛羅？あ、わりい。現に言ってるなお前  
は。

「ガアアアアツツ！！！」

獣のような、そうでないような雄叫びを上げて、我愛羅は刺付きの  
腕を左右に振って爆炎を消し飛ばし、口元を伝う涎を長い舌で舐め  
取る。うええ・・お前までそんな気持ちワルいことすんじゃねえ  
よお。

「アハハハハハハハハハハハハハハハ！！コレだツ！こんな殺し合い  
を俺はしたかったツ！！うずまきナルト、俺は今、最高に良いキモ  
チだ。生まれて初めて俺は満たされている・・・『戦い』という喜  
びにツ！！！」

・・・いやさあ、俺も結構全力全開で戦えるから楽しいっちゃ楽し  
いけどよ・・・そんな俺の思いとは裏腹に、楽しそうに嗤いながら  
周囲の砂を操り出す我愛羅。

「これまでいろいろな奴を殺してきたが・・・お前が初めてだ。こ  
んなにも俺を満足させてくれる！」



無数の砂が我愛羅を中心にして集まっていくと、上半身だけだった変化は全身へと至り、化け物という名に恥じない姿に形成された。九尾い・・・俺達絶対、あんな姿にはならないよな！？

『五月蠅いぞナルト！ならんと言つておろうがつ！他の尾獣と人柱力の事は知らんが、我のチャクラを纏ったお前はあんな姿にはならん！それに、あの醜い姿だが・・・一尾の阿保だけでなくあの童わっばにも原因があるとわしは思う。』

と、言うつと？

『一尾の奴は『卑しい狸』だからな。あの姿になつても不思議はない。しかし、お前と我のように協力関係を築けていれば、決してあのような姿にはなつてはおらんと思う。それに・・・あの童わっばの心が泣いているように我は感じる。それも酷く暗い悲しみによつて・・・』

九尾の言葉を聞いて、俺は内心吃驚している。確かに原作の事は多少九尾や父さん、母さんには喋ったけど、我愛羅の過去とかキャラ達それぞれの思いとかは一切説明していない。それなのに、我愛羅のそれに気付くなんて・・・九尾つてば、読んで字の如く人の気持ち分かる奴？

『・・・お前、我を馬鹿にしてないか？』

いやいやいや、馬鹿にはしてねえって本当に。何か、吃驚して意味不明な事口走ったわ。だから、あんま気にしないでくれると助かるってばよ。ま、我愛羅の悲しみ云々については俺に任せて、お前は一尾に負けられないように頑張ってくれ。

『誰に言っている？我は『九尾』だ。『一尾』の阿保狸になど負けるわけがない！』

はいはい、頑張ってくれよ。っと、そろそろ我愛羅の奴も動くみたいだな。我愛羅は枝と幹に腕を突き刺した反動で、こっちに向かってくる。俺達の距離が瞬く間に縮まり接触まであと少して時に、俺は更に一步我愛羅より先に踏み込むと同時に掌底を我愛羅の腹部に突き刺し……って、流星にそこまで甘くないか。

「……二度も同じモノは喰らわん。」

俺の掌底を止めたのは刺付きの腕。砂の強度も、試験会場の時とは違って更に強固になっている。やっぱり、同じ人柱力同士こうでなくっちゃ面白くねえ！！

「そう……かい！！」

我愛羅にそう返して掌底を引き、後ろへと跳ぶ。その際に、起爆札を我愛羅の腕に貼り付けておくのは忘れない。後ろには枝も幹もな

いので、そのまま俺は下の地面へと降りていき、地面に足が着いたところで俺が元いた場所で爆発が起きるのを確認する。さつきから、爆発系の攻撃ばっかだなあ・・・次は斬撃系で行くか？

連弾・砂時雨ッ！

と、我愛羅も攻撃方法を変えてきたな。砂の飛礫ヒズが真上から俺に向かって雨のように降り注いでくる。おそらく、砂縛枢からの砂漠送葬へと繋げる前段階。要は、当たらなければいいって事！雷遁を体に纏わせ、その場から一気に離脱する。

性質変化には、それぞれ特徴がある。って言ってもこれは、修業中に俺がチャクラを変化させるときに注意していた事なただけ。風遁ならより鋭く、火遁ならより熱く、土遁ならより硬く、水遁ならより冷たく、雷遁ならより速く、といった感じだ。

そして、今の俺はチャクラを雷へと変化させそれを纏うことで、さつきまでよりも夙く（はやく）なっている。っていうことで、俺はもうそこにはいないよ、我愛羅。

「俺はここだぞ我愛羅！」

「ッグ・・・」

雷遁を纏った右脚で我愛羅の横つ面を蹴ると、我愛羅は吹き飛ばされていく。・・・ん？脚が重いような・・・って、脚に砂付いてるし。あの一瞬で、砂を操るか・・・流石、未来の風影。やっぱり、こうでなくっちゃな！！

脚に付いた砂は、体を覆う雷遁を活性化させることで弾き飛ばす。追撃はかける。今度は反応出来ないくらい夙く、重い一撃を喰らわせてやるよ。

森の方で爆発が起こった事に気づいた者は意外と少なかった。殆んどの者達が、自分と対峙する忍びに集中していたからだ。そして、森の爆発に気付いた少ない者の中には、一人の少女がいた。

（我愛羅とあいつの向かった先で爆発・・・あいつらは戦いを再開させたのか？）

その少女とは我愛羅の姉であり、予選でナルトと戦ったテマリであった。テマリは、計画が始まる合図をバキの隣で見っていたが、いざ動くといった時にテマリの体は金縛りが起きたようにその場から動けなかった。

それがなぜなのか。それは、テマリ本人にも分からない事だったが、今テマリの中にあるのは我愛羅とナルト、二人の下に行かなければならないのでは？といった思い。実の弟であるが、我愛羅との距離を埋められない自分。だが、そんな自分やカンクローと違いナルトは我愛羅との距離を躊躇いもなく縮めていた。

最初に思ったのは、気に入らないガキがいる、というモノ。だが、それが徐々に『可笑しな奴』に変わり、『気になる奴』に変わった。

なぜ、我愛羅を怖がらずに真っ直ぐでいられるのか。

なぜ、あいつはあんなにも強いのか。

なぜ、敵である自分にあんな笑みを浮かべるのか。

なぜ、なぜ、なぜ……

テマリの中でナルトが大きくなっていくのにそう時間は掛らなかつ

た。風影の娘であり、砂の忍びのテマリ。だが、今ここに至っては、気になる異性を想う一人の少女に過ぎない。

「ここにいたのかテマリ。早く我愛羅を追っじゃん。木ノ葉のあのガキ・・・我愛羅と同じ感じがした。あいつと我愛羅を一緒にさせたら駄目だ。って、聞いてんのかテマリ？」

と、テマリの近くに黒ずくめの少年が現れる。少年の名前はカンクロウ。つい先ほどまで選手控室にいたが、一瞬の隙をついて離脱して来たのだ。カンクロウは、テマリに近寄りながら口を開くが、テマリは心ここにあらずといった状態であったので、カンクロウの話は右から左であった。

「おい！聞いてるのか？急いで我愛羅を追っじゃん！」

テマリのその態度に業を煮やしたカンクロウが、テマリの肩に手を掛け軽く揺さぶると、それまで某つとしていたテマリはやっとそこにカンクロウがいる事に気づく。

「っ！？カンクロウ？」

そのテマリの態度にまた腹を立てるカンクロウだが、今はそんな事で口論している場合じゃないと頭を冷やす。おそらく、自分を追って木ノ葉の誰かが直ぐ近くまで来ている筈だからだ。

「話は行きながらでも出来る。早く行くじゃん！」

「あ、ああ・・・」

カンクロウに急かされて、テマリも今自分が何をしなくてはいけないかを思い出す。テマリとカンクロウに言い渡された任務は我愛羅の援護、もしくは、我愛羅に近付く者達の排除であった。しかし、今二人は我愛羅から離れた場所にいる。よって、一秒でも早く我愛羅の下に行かなければならないのだ。

テマリは自分が背負う巨大な扇、その修復されて今はないが一ヶ月前には確かにあった罫が入った個所に目をやる。テマリが何を想いながら扇を見たのか、それはテマリ本人にしか分からない事である。

と、二人が移動しようとした矢先、一本のクナイが二人の足を止める事になった。

「お前達、どこに行こうとしている？」

「ツチ・・・どこだっていいじゃん。てか、どけよ。」

二人の前に現れたのは、カンクロウを追って来た日向の紋の入った白を基調とした衣服を纏う日向ネジとスリットの入った水色の中華服に黄色い腰布を巻いたテンテンだった。既にネジは白眼を発動させており、テンテンは棍を構えている。

舌打ちを一つして、苦々しくネジを見るカンクロウ。テマリは、ネジの横にいるテンテンと目が合い、こちらも先の二人と同じように互いを睨みあっていた。

「やあ、一次試験の時ぶりかな、砂の扇子女さん？」

「ああ、間違っていないよ木ノ葉の忍具女。」

片や棍を構え、片や扇を構える。テマリとカンクロウの二人は我愛羅を追うためには、ネジとテンテンを倒さなければならぬ事を悟る。だが、それは容易い事ではない事も同時に悟り、ならば……と、

「テマリ、ここは俺が抑える。だから、お前は我愛羅を追っじゃん。」

「……カンクロウ、二人の内一人は白眼だ。無理はするな……」



そう言うとテマリは扇を開き自分の足元に振り降ろして、風を巻き起こす。そしてその風に乗るよう上空へと跳び上がり、開いた扇を足の下に敷くと風に乗ったハングライダーのように、森に向かって滑空していく。

「テンテン、お前は奴を追え。俺はこいつを倒してから後を追う。」

「OK！」

ネジの言葉に一言返しテマリの後を追おうとするテンテンだったが、直ぐに自分の体が動かない事に気づく。

(嘘・・・体が動かない!?これって、シカマル君家の秘伝忍術! ?なんで砂の忍びがそんなの使えるのよ!?)

「行かせるわけじゃないじゃん。お前らは俺が倒すっての。」

カンクロウによりテンテンは動けない。影真似の術ならば、テンテンとカンクロウの影は繋がっている筈。だが、見てみると二人の間には影はなく、カンクロウの手を見ても印を組んでいる様子はないならば、どういうカラクリで自分は動けないのか。テンテンは頭を働かせるが、それは無駄に終わる。

「いや、お前とは俺がやる。」

ネジがテンテンとカंकクロウの間に手刀を落とす。すると、ピンツという小さな音がなったかと思うと、テンテンの体は自由を取り戻した。それを不思議に思うテンテンだが、自分の班のリーダーの目が早く行けと言っている事に気づき、テマリが向かった方に駆ける事にした。

カंकクロウは、自分の姉を追い駆けて行くテンテンを横目で見ながら、目の前にいるネジに対して警戒を解く事はしなかった。確実に目の前にいるこの忍びは自分が今まで戦った者の中で一番強いと自分の勘が告げていたからだ。

「……どうして分かったじゃん。」

「俺の眼は、特別でな。普通の奴らには見えないモノが見える。そう、お前のそのチャクラ系のよゆうなモノがな。」

(これが白眼……情報よりめんどくさい相手じゃん。)

カンクロウとネジが対峙している頃、テマリは森の爆心地と思われる場所に向かつて、枝や幹を蹴りながら移動していた。初めこそ扇に乗っていたが、いつまでも乗って移動することなど今のテマリには出来ない。よって、あの場から離れたところで扇を背に戻し、自分の足で移動していたのだ。

（白眼が相手となると、カンクロウには厳しい・・・か。）

胸中でそんな考えが浮かぶが、それを振り払うようにして前に進む。今は、カンクロウのことを信じるしかない。それに・・・と、後ろに気を配ると数百m後ろから自分を追ってくる者がいることに気づく。十中八九、あの木ノ葉の忍具女だろう。カンクロウの奴・・・と毒づくが、相手が白眼ならそれも仕方ないか、と考え直す。

そして、テマリの足が地に着いた時、そこに巨大手裏剣が飛来した。テマリは宙で前転し、背負っていた扇でその手裏剣を弾き飛ばして直撃を防ぐと、そのままザッツと後ろからの追っ手と対峙するように体の向きを変えた。

「ウチの里では、しつこい女は嫌われるんだけどねえ。」

「ご愁傷様。木ノ葉の女は、粘り強いんだよ。だから、諦めてくれるとあたしは嬉しいかな。」

そう言つて、テマリから少し離れた先で足を止めたのは、テマリ予想通り先程別れたばかりのテンテンであった。テンテンは片手に持っていた棍を両手で持つと中腰に構える。対するテマリも扇の下を地に付け、上に片手を置いた状態で臨戦体勢を整える。

ナルト達より一年早く下忍になったテンテンだが、今回のような戦いは初めてだった。他里の忍びとの戦闘など片手の指で数える程くらいしか経験はないが、今回のように自分の年とそう変わらない同性との戦いは経験がなかった。中忍試験の予選の時にいのと戦ったが、あれはテンテンの中で戦いに入らない。よって、今から始まる戦いはテンテンの初めてとなる同性同士の『戦い』であった。

だが、テンテンは冷静だった。今、自分がしなければならぬ事は、目の前の忍びを倒して、この先に何かあるのかを確かめる事。合図なんてものを待つでもなく、体勢を低く落とすと一瞬でテマリと肉薄し、棍を次々とフェイントを交えながら突き出していく。

（ツチイ！中忍試験の予選では忍具を投げて攻撃していたが、成程・  
・体術も強いじゃないか。でも・・・『あいつ』よりは遅い！）

扇を器用に持ち直しながら、テマリはテンテンの攻撃を防いでいく。そして、突き出してきた棍を真上に弾くと閉じていた扇をバツと開き、テンテンが棍を戻すより早く扇を振り下ろした。

風遁・風砂塵ッ！

目の前で急に巻き起こった砂塵により、テンテンは棍を盾にして目を閉じてしまう。そこに、テマリの前蹴りがテンテンの腹部へと吸い込まれるように当たると、テンテンの体は後ろへと吹き飛ばされってしまう。

(・・・手応えが違った。あの女・・・)

前蹴りを放ったテマリだったが、その顔に浮かぶのは苦虫を噛み潰した者特有の顔。

一方、テンテンの方はと言うと、心境穏やかでなかった。それは、相手が遠距離の術の使い手であるから、近接戦闘、つまりは体術は苦手と判断していたため、思いの外蹴りの強さが強かった事と、自分の攻撃を防いで見せたあの防御の硬さ、この二つに尽きた。

(どうしよう・・・あの女、予選の時に見た時より体術強いし。うん、金髪君の攻撃喰らってたから体術は苦手だと思ったんだけど・・・ちよっと、ヤバいかも。)

テンテンの術は、巻物に仕舞ってある数多ある忍具を投擲する事による重圧殺と、今手に持っている棍のように忍具を用いて戦う体術の二つである。遁術のような性質変化を用いる術は苦手としているために、得意な忍具を用いる体術をメインにしてきたのだが、やはり遁術を使う忍びが相手となると、今ひとつ攻撃力が足りない。

でも・・・と、テンテンは考える。今のような時に使えと、父と母から渡されたモノを思い出す。だが、それを使うときは・・・今じゃない。テンテンは、反動を付けて起き上がると同時に、ポーチから札が巻かれたクナイを取り出して、起き上がる勢いも合わせてテマリに向かって投擲する。

テマリは向かってくるクナイが普通のモノとは違うことに気づくと、扇を一振りして向かってくるクナイを違う方へと吹き飛ばす。すると、木の幹に刺さったクナイを起点にして爆発が起きる。

（起爆札かッ！）

爆発から自分を守るために扇を盾にして、爆発を防ぐ。その間に、テンテンは大木の影に隠れる。テマリが得意とする攻防一体の風遁忍術は、見えない空気の刃となり辺り一面を切り刻んで薙ぎ払うモノ。それを知りながらも、今は隠れる事をテンテンは選んだ。

（距離をとつても、あの扇子女に意味はないけど、仕切り直すなら隠れて相手の隙を窺うしかないもんね。）

相手は巨大な扇を用いる事で、中・遠は勿論の事、近距離での体術も申し分ない。つまり、テマリはどの間合いでも適応できる万能型の忍びなのだ。

（分身の術からの身代わりの術、そしてトドメにアレを叩き込む。これしか、あたしがあの女ひとに勝つ方法はない、かな。・・・でもまずは、忍具を馬鹿にした罰を与えないとあたしの気がすまない！！）

今ある忍具は、三本の巻物に入っている計180個。それらを、使い潰すつもりでテンテンは一本目の巻物を手にし、大木の影から影へ移動しながらテマリに向かって次々と忍具を投擲していく。

大手裏剣、鎖鎌、千本にクナイ、小太刀に野太刀。兎に角、仕舞つてある様々な忍具がテマリへと迫る。

「ツチイ！面倒な！！」

本当に面倒だと言わんばかりに、テマリは自分に迫る数多の忍具を巨大な扇を大振りに横に薙ぐと、風が忍具を叩き落とし、吹き飛ばす。

「全力全開だぁぁぁぁッ!!」

一本目を使い潰したテンテンは、二本目を取り出して直ぐに忍具を呼び出して投擲していく。だが、またしても風の壁によってテンテンの忍具はテマリに届くことはない。しかし、数多ある忍具の中を通って一本のクナイがテマリの足元に刺さると、爆発を引き起こした。しかし、爆発はテマリの風によって小さなモノになってしまう。

「二度も同じ手は喰わんッ!!」

「それは・・・どうかなッ」

立て続けに、小さな爆発がテマリの足元で起きる。すると、その爆発の中から細く、そして小さなモノが飛び出してテマリを襲う。それは、テマリの風の壁を通り過ぎた所からの攻撃だったので、テマリはそれを防ぐ事は出来なかった。

「なッ!?!」

テンテンがその言葉を言うのと、テマリの体が切り裂かれるのは同時だった。何が起きたと、自分の体を切り裂いただろうソレを見るテマリ。目に入ったのは、煙玉より少し小さな黒い玉。しかし、その表面には小さな穴が無数に空いている。そして、自分が少しでも



動く走る小さいが、あちこちに走る事で無視できない痛みを訴える自分の体に光るモノが刺さっている事に気づく。

「これは・・・針か？」

「そう。それはあたしが『独自』に奇襲用に開発した、その名も・・・『針爆弾』と言うのだ！！」

テマリの呟きに、得意満面といった様子で律儀に返すテンテン。それまでの、忍具による攻撃の嵐もこの時ばかりは止んでいた。

・・・と、なんとも言えない空気がこの場を包むが、それもテマリの扇のひと振りで終わる。攻撃を止めていたテンテンは足も止めていたので、テマリは声の聞こえた方向に向かって扇を振るっただ。

（あ、ちよっ、いきなりは卑怯じゃん！？）

場違いな事を考えるテンテンだったが、頭は冷静で風の刃を躲すことに集中する。だが、やはり足を止めていた所に風の攻撃はテンテンの体に少なくない傷をつける。一方のテマリだが、こちらも顔に先程と違って苦渋に満ちた表情を浮かべていた。

(クツ・・・あの女。針に毒を仕込んでやがる。それも、体を麻痺させる麻痺毒とはな。足りないような顔をしている癖に、どうして・・・忍びじゃないか。)

先のテマリが受けた針による攻撃は、テマリの動きを鈍くする事を目的としていた。そしてそれは成功し、テマリの体には無視できない痺れが走っている。

だが、テマリも然る者。麻痺している体を動かし、扇を振るうのを止めない。すると、次第にテンテンの隠れる大木はその数を減らし、とうとう二人のいるこの場所は森の中でポツンと開けた場所へと変わっていた。

「あははは・・・流石にここまでやるとは思わなかったかな・・・」

「フンツ・・・あたしを甘く見るな。あたしは、砂隠れ一の風使い。忍具に頼るしか能の無いお前に負けるわけないだろ。」

「・・・忍具を馬鹿にしないでくれる？年増さん？」

「・・・あたしが年増なら、お前はまだ乳臭いガキだな。くそガキ。」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

子どものような口喧嘩にまで発展した二人は、互いを睨みながら次の攻撃が最後の攻撃だと悟る。テマリに至っては、体に走る痺れも合るが一番はやはり数多の忍具を防ぐために大量のチャクラを使ってしまった事が大きい。残るチャクラ残量は中級の術二、三発程度を残すのみ。テンテンも、残る忍具は手に持つ棍と、奥の手のアレのみ。

テマリは扇にチャクラを込め、一気にテンテンへと向かって放つ。それは、先程まで使っていた自分を守るための風の壁ではなく、敵を切り裂く風の刃。

風遁・カマイタチの術！！

テンテンは、自分に迫る風の刃を瞬身の術を何度も行使する事で回避しテマリの後ろへと回ると、棍を突き出した。しかし、それは空を切り、テマリに躲されてしまう。棍を突き出した状態のテンテンはまさに死に体。しゃがんで回避したテマリは扇を閉じて、側面の鉄骨をテンテンの顎に向かって放つ。

しかし、これまたテマリの攻撃は当たるはずだったテンテンの顎を

通り過ぎ、手応えを感じる事なく真上へと突き上げてしまう。テマリの攻撃したテンテンは分身の術で作られた偽物。そして、本体はテマリの真上で棍を振り上げていた。逆に死に体となったテマリの脳天へと向かって棍を振り下ろしたテンテンだったが、それはテマリが動かした扇子の骨を滑って、あらぬ方に降りおろされてしまう。

地に足を付けたのはテンテンが先。次の攻撃はテンテンがテマリよりも数瞬早い。後ろに体を向ける力を乗せて、棍を横殴りに放つ。それは、テマリの体を吹き飛ばす事に成功するが、ダメージは扇によって阻まれてしまったため、期待できない。

「やあああああ！！！」

追撃として、地を蹴りテマリへと棍を突き出す。回転を加えた棍の突きはテマリの頬を浅く切り裂き、一瞬血を吹き出させる。しかし、それだけ。テマリは自分の体に走る痛みを今だけは無視して、体を動かす。真上に蹴り上げられた右足は、テンテンの手から棍を弾き飛ばした。

(これでッ！！)

忍具が切れたからこそその接近戦。今のこいつはその唯一の忍具も手放した。なら、今が。今こそが、この女を仕留めるチャンス。テマリの思考がそこまでいった時、腹部に鈍く、しかし重い痛みが走った。それを何だ？と見てみると、黄色い何かが自分の腹部に突きた

っているのをテマリは見た。よく見れば、それはテンテンの腰に巻かれていた黄色い布であった。

「布槍術・・・これがあたしの奥の手だよ。」

「クツクツ・・・布まで忍具とするか。・・・今日は負けたが、次は負けな・・・い・・・」

地面に前のめりに倒れるテマリを支える事なくテンテンも両膝を地に付ける。

「はは・・・勝った・・・」

テマリVSテンテン。原作では、テマリの圧勝で終わったこの戦いは、この世界ではテンテンの勝利で幕を閉じたのだった。

## 忍具と風の狂奏曲だってばよっ！（後書き）

ええ・・・先に言っておきます。スランプです。書いては消して、書いては消してを繰り返す日々がここ一ヶ月続いています。

・・・こっちのssでそうなのですから、いちごのssなんてもつと悲惨で・・・アイデアが全然浮かんでこないんです！！オリジナリティ感はどうしてもだしたいんですが、如何せん指が動いてくれず・・・ノツてくると、勝手に指が動いてくれるのですが、最近はてんでダメです。

小説を書いている方には分かりますが今自分『半端ない』くらい文才が欲しいです！！そして、アイデアがツ！！

と、何をあとがきで何を書いているんだと思われかねないので、ここから今話について書こうと思います。前回のあとがきにて、次回は火影と大蛇丸を戦わせて、その次はナルトと我愛羅を戦わせるなんてことを言いましたが・・・無理でしたww

いや、いろいろ伏線を貼りすぎたせいか、にっちもさっちもいかなくなりしました。カンクロウを追っていった二人の事は書かないと無理があり、そしてナルトの他の影分身などと二体もいるし、何より力カシたち上忍を一度出してから全く出していない。これは・・・正直ヤバイですww

私としては、丁寧にいろんな場所にスポットを当てたいと思いがながら書いてきたわけですが、今思うのは年内に中忍試験終わらないんじゃないかね??といった考えのみですww

そこで、読者の皆様に相談なんですけど・・・  
ぶっちゃけナルト以外の奴らの戦闘なんて必要なくね？  
ナルトと火影の戦闘を書けば中忍試験終わりじゃん？

的な考えを持った方が多いのであれば、私としては否はありません。  
勿論、所々に他のキャラ達の描写はいれますよ。ただ、丁寧にはならないかと思えますけど・・・

上の考えとは違い、他のキャラ達の活躍が見たい！！と思う方もいると思いますの考えながら書きますが、読者様達の生の声が聞きたいと思つていきますので、どうぞ一言お願いします。

それでは、次回の更新にて。。。。

それから最後に・・・なんと、ユニーク数がミリオンを突破しました！これは、書いている方しかわからないかと思いますが、大変凄いことなんです！！・・・正直100万もの人が一度は私のssを読んでいるなんて、信じられませんが、数字は嘘を吐きませんwwしかも、総合評価もあと少しで1万5千とか・・・皆さんどうしたんですか?!なぜか、一ヶ月ぶりに見てみたら1000くらい上がっていたような気が・・・あまりの事で30秒ほど眉間を揉んでましたwww

何はともあれ、これからも一人でも多くの方に読んで貰えるように頑張りますので、応援よろしくお願いします。

師弟、同志、決着の巻だっばよっ！

試験会場から離れた森。そこでナルトと我愛羅が戦いを再開させた一方で、歴代の火影全員が揃っているここ屋根瓦の上では、熾烈を極める戦いが今尚続いていた。

「どうしたんですか先生？動きが鈍くなってきましたよ？」

フェイントを織り交せて三代目は如意棒を繰り出すが、大蛇丸は嘲笑を多分に含めて嗤い、草薙の剣で次々と三代目の攻撃を捌いて行く。

「ツク・・・少しはその口を閉じておれんのかッ!？」



突き出した如意棒を足元へと引き、渾身の力を込めて振り上げる三代目。狙うはその耳に五月蠅い口の下、つまりは顎先。しかし、またもや草薙の剣によってその攻撃は阻まれてしまう。

「まさか、これで終わりじゃないですよね・・・先生？」

「それこそ・・・まさかじゃ！」

大蛇丸に止められていた如意棒がその長さを・・・変える。三代目のその言葉を起点に、如意棒が真上へと伸びたのだ。下から突き上げられる勢いそのままに、大蛇丸は宙へ体を運ばれる。それは大蛇丸にとって完全に虚を付かれた攻撃だった。初代火影と二代目二人を、ミナトとクシナがそれぞれ抑えている事を確認した三代目は、今が好機と見て如意棒へと変化している猿魔に向けて声を張り上げる。

「そ奴を離すなよ猿魔あツ！！」

『分かってらあツ！！』

猿魔は変化を一度解き、両手両足を使って大蛇丸の動きを封じる。猿魔を引き離そうと体に入力を入れる大蛇丸だが、そこはやはり動物と人の身。力の差は歴然としたものであった。これが彼の綱手姫な

らば、あるいは良い勝負になったのかもしれない。しかし、今ここに綱手姫はいない。

と、そこに身動きの取れなくなった大蛇丸の腹部に向けて、三代目が強烈な膝蹴りを放つ。猿魔も三代目のその攻撃に合わせて両足を腰部から離すと、背の中頃なかごろへと離れた両足を下ろす。

反射作用によって大蛇丸の体がくの字に曲がり、普段は肺の中に有るはずの空気がその衝撃によって吐き出され、カハツという音が蛇丸の口から出る。それを露ほども気にせず、一人と一体は動き続ける。猿魔が大蛇丸の後頭部を前へと押し出し、それに合わせて三代目は二撃目となる膝蹴りを大蛇丸の顔へと放ち、吸い込まれるようにして顔へと膝は到達する。

グシャ・・・と嫌な音が鳴るが、それも今この時、三代目の耳には入っていない。全神経を攻撃へと集中させているからに他ならない。今も尚、重力に引かれて屋根瓦へと落下している途中。そんな中三代目は印を組み、口から土を吐き出した。

土遁・土流壁！

本来ならば防御に使うこの術だが、この時この術はそれとは違う一面を見せた。表面に突起物を不規則に散りばめた土壁は、屋根瓦と水平となるように置かれ、三代目と猿魔、そして大蛇丸が落ちてくるのを待ち侘びる。三代目と猿魔が真下のそれを確認し、目を合わ

せ一つ頷くと、大蛇丸の背を足場にして更に高く宙へと跳び上がる。

「猿魔あッ！！」

「これでくたばりやがれえええッ！！」

再度如意棒へと変化する猿魔。だが、その如意棒の大きさは先程までのものとは一線を画し、秋道チョウザが倍加の術により巨大化した時に用いるだろう大きさへと変化したのだ。三代目はその如意棒の側面に片手を添え、五指の指全てに力を込める。そして、一気に真下にいる大蛇丸に向けて突き下ろした。

超重量と化した金剛の柱が、大蛇丸の体を突起物の付いた土壁に文字通り「減り込ませた」。屋根瓦を突き破る勢いで突き下ろした三代目だったが、まるで図つたかのように先程自分が行使した土流壁を粉碎するだけに終わった。如意棒の威力と土流壁の強度、どちらも三代目が今出来る最高のモノであった。

ボンツとそんな音と白煙を出して、巨大な如意棒だった猿魔が元の姿へと戻り、自分と契約している「相棒」の隣に腰を下ろす。

「今ので死んでねえなら、あいつは本当に化け物だぞ猿飛。」

「・・・・・・・・」

如意棒となった猿魔を通して、自分の腕に伝わったあの感覚。確かに・・手応えはあったと三代目は思う。しかし、自分の体は未だ臨戦態勢を維持している事に気付いている三代目は大蛇丸のいるだろ  
う所から目を逸らさない。

フフ・・フフフフ・・そんな不気味な嗤い声が、崩壊した土壁の中から聞こえてくる。やはり！と三代目は腰を低くして、すぐにも動けるように構える。猿魔は、信じられないという表情と呆れたという表情を混ぜたようなモノを浮かべて、下ろしていた腰を上げてこちらにも再度構えを取る。

「良い・・凄く良いですよ、先生」

「お前は本当にしぶとい奴だのう・・」

「フフ 分かりませんか？嬉しい事は、直ぐに終わらせたらもった  
いないんですよ、先生。」

瓦礫を除けて仰け反りながら立ち上がり、徐々に体を起こす大蛇丸。体は綺麗な場所を探すのが困難な程に肉が潰れ、夥しい（おびただしい）血を流していた。だが、その双眸は死んではない。爬虫類を思わせる瞳孔が縦に割れた眼をカッと開き、狂喜の孕んだ嗤いを、

笑みを、浮かべる。それを見て、三代目と猿魔の背筋を酷く冷たいモノが流れる。

三代目と猿魔は瞬時に後方へと跳び、間合いを取る。あの距離にては駄目だ、と頭と体が判断したのだ。

と、そこに三代目と猿魔、大蛇丸の左方向で爆発が起きる。横目で見れば、初代火影と二代目の体それぞれ左右の半身が崩れている。塵のようなモノで構成された体なのだろう。断面からは血も何も出ていない。しかし、失った半身は逆再生するかのように修復していき、ダメージを負う前の完全な状態へと戻る。

(やはり、普通の攻撃方法では穢土転生で口寄せしたお二人を倒す事は出来ないか・・・術者を倒せば解けるという術でもない・・・ほんに死人を愚弄するふざけた術じゃ。)

「余所見とは余裕ですなえ先生。・・・でも、さすがは猿飛先生。老いぼれたとは言え、本当にお強い。」

口を開きながら長い黒髪を掻きあげる大蛇丸。と、その時、大蛇丸の口角の右あたりの皮膚に破れている箇所があるのを三代目は見つけた。いや、見つけたのはそれだけではなかった。破れている部分の直ぐ下、そこに・・・新しい皮膚が存在していたのだ。長い髪が邪魔で見えなかったが、掻きあげられた事によって見つけたのだ。

「貴様・・・その顔は・・・その顔はどういう事じゃッ!？」

「あらあら・・・破れてしまいましたか。でもまあ、良いでしょう。ここまで私に愉しい時を与えた事への褒美として、『今』の私の本当の顔を見せて上げますよ。」

そう言うと大蛇丸は己の耳の下辺りを掴み、顔の皮を徐々に剥いでいく。それも自分の顔の皮を。ありえない・・・三代目と猿魔の頭の中で、その言葉が大半を占めた。しかし、剥ぎ終わった大蛇丸の顔を目の当たりにした三代目は声を荒らげる。

「貴様何者だッ!!大蛇丸ではなかったのかッ!」

「フッフ 嫌ですねえ先生。嘗ての自分の教え子が分からないんですか?・・・大蛇丸ですよ、先生。」

剥がした顔の皮の下から現れたのは・・・三代目の知らない十代後半だと思われる青年の顔。つい先程まで対峙していた『大蛇丸』とは違う血色の良い肌。だが、その特徴的とも言える双眸だけは変わらずそこにあった。

「この里を出てからどのくらい経ったのでしょうか・・・今の私は貴方と違って若い体のまま。そして、貴方はあの頃よりも老い、体の

動きだけでなく術のキレまでも衰えてしまった。本当に……老いとは、虚しいですね。」

「……あの術を完成させたのか……。げに恐ろしきは人外の者よ……貴様、その身体……何人目じゃ。」

「フフ、もうかれこれ数十年経ってますからねえ……。何人目だか忘れしましたよ。」

『腐ってやがる……。猿飛、やっぱりあいつはあの時に殺って置くべきだったな。お前があの時躊躇ったせいで、何人あいつの犠牲になったか分からねえ……。』

猿魔の口から放たれる言葉一つ一つが正しく、三代目の顔に無念さや悔しさ、怒気などといった負の感情を絢交ぜにしたモノが浮かぶ。それを見て更に大蛇丸は嗤う。三代目のその顔が大蛇丸にとっては、甘味にも等しいモノなのだ。

一方その頃ミナトとクシナは二対二となって、初代火影と二代目二人と対峙していた。クシナの結界術で二人の動きを封じ、ミナトの忍術によって引き起こされた爆発だったが、三代目が見たように二人の体にダメージを残す事は出来なかった。しかし、確実に戦闘は佳境へと差し掛かっている。

『いろいろ試してみて、改めて分かったけど・・・あの術に掛かっている以上はどんな術で攻撃しても意味ないね。』

『そうみたいね。私の封印術も、二代目様の時空間忍術で直ぐに破られるし・・・お二人を倒すには、どうにかして縛られている魂を封じるしかないんだけど・・・』

二人の目の前には、対峙したまま動きを止めた初代火影と二代目がいる。目に意思は宿っていないが、殺気を二人に向けて放ち、よく見ればチャクラをそれぞれ木遁、水遁へと性質変化させていた。



『……屍鬼封尽なら倒せるかもしれない。』

『ッ！？』

『大丈夫、13年前とは違うんだ。影分身での屍鬼封尽だし、絶対僕自身は使わない。だから……ね？』

『……絶対よ。あの時みたいな事になりそうなら、直ぐにやめること。約束しないと後で酷いんだから。』

『ああ約束する。でも、今回はクシナも万全の状態だし、何とかやるよ。……お二人の足止めは頼んだ。』

『了解だつてばねっ！』

二人は改めて初代火影、二代目の二人と対峙した。ミナトの目に火の意志が宿る。火影の名を継ぐ者たち全員が宿したと言われる火の意志。それは、『護る者』としての決意だったのかもしれない。クシナはそんなミナトの横顔をちらっと見てから、笑みを一瞬浮かべて直ぐに引き締める。

先に動いたのは……初代火影。屋根瓦に両手を付き、そこから木

の根を二人に向けて走らせる。二人はそれぞれで回避し、ミナトは両手を付けた状態の初代火影へと向かって屋根瓦を蹴り、駆けながら左の掌に螺旋丸を、右の掌にカカシオリジナルの術『千鳥』をそれぞれ作る。そして、それを・・・胸の前で融合させる。

螺旋丸に性質変化を組み込み、会得難易度Sとなったミナトの開発した忍術。ナルトとの修行の際にミナト自身もそれを会得する事に成功した。だが、ミナトはそれを更に昇華させた。螺旋丸と千鳥を融合させるといふ誰も思いつかない所業によつて。そしてその術は・・・ナルトの螺旋丸とは違い、黄金色に輝いていた。

『まだ術名のない術ですが、今の僕に出来る最高の術ですッ！』

両手を付いていた初代火影へとミナトは左手に持ったそれを叩きつける。かつて忍び界で最速と言われたミナトのスピード。それを防ぐ手立ては初代火影にはなかった。背から腹までをぶち抜かれた初代火影だったが、それを少しも意に返さず自らの体から細いが強度の高い『木』を生み出して、ミナトを逆に封じ込めようとする。

『させないってばねッ！』

後方で印を組んでいたクシナが術を行使して、ミナトを初代火影の木遁から護る。行使した術は、結界防壁の術。クシナの旧姓、うずまき一族の得意とした封印・結界術。そして、それは忍び界で忌み嫌われる血継限界でもあった。その名も、『空遁』。

基本的な性質変化の様に、元となる属性を有さない無属性忍術。またその実態は、空間を媒介にし結界を自在に構築、また、空間内の法則を自在に操る封印・結界忍術。これに様々な形態変化を加える事で、結界忍術を様々な状況に応じて活用する事が出来る。

結界防壁の術とは、自身や対象の周囲に結界を展開し、外界からの攻撃から身を守る術。展開される防壁は空間を完全に隔絶する性質を持つため、物理攻撃によって破壊する事は不可能。まさに、我愛羅の絶対防壁よりも完全なる絶対防壁。

影分身の術ッ！！

クシナが必ず援護してくれると信じていたミナトは、よどみなく印を瞬時に組み、影分身を顕現させる。そして、影分身に自分の術によって腹部が殆ど消失している初代火影の背後を取らせ、動きを封じさせる。

ミナトが初代火影から二代目へと眼を走らせると、既にクシナの術によってうつ伏せに封じられていることを確認した。二代目は、四肢を何かに縫いつけられており、更に何かによって上から圧力を掛けられていた。

影分身を更に三体出し、二体を二代目の方に、一体を初代火影の方

に向かわせるミナト。そして自らではなく、動きを封じてさせていない影分身たちに合図を送り、例の術を行使させる。

封印術・屍鬼封尽ッ！！

そこから始まったのは、儀式のようなモノ。ミナトの影分身を通して、二体の『死神』が現れる。それは、術者と術を掛けられている者にしか見えない『死神』。周りを呪いの言霊が乱舞し、『死神』は右手の出刃包丁を舌で舐め上げながら、言霊の乱舞の終りを待つ。

そして、長いような短いような時間が経ち、やっと言霊の乱舞が終わる。『死神』はニヤつと嗤い、左手をミナトの影分身に突き刺した。ツグ・と呻き声を発する影分身達だが、本体のミナトの頷きを見て、術成功までその手を離すことはない。

影分身の胸から『死神』の手が突き出ると、初代火影、二代目の胸へと伸ばし、深々と突き刺した。二人の胸を掻き混ぜるように腕を動かし、次の瞬間二人の胸から何かを引き摺り出した。それは……二人の魂だった。

『その髪……波風の者だな。良い忍びを育てたものよ。』

『ありがとうございます。初代様にそう言って頂けると、父と母も喜びましょう。』

『その娘も中々よ。わしの水遁を悉く防ぎおったしな。』

『いえいえ、二代目様の水遁と時空間忍術には苦戦したつてばね。』

『うむ・・・良い教え子に巡り合ったのだな猿飛は。・・・波風の者よ、猿飛に伝えてくれ。わし等一人死しはしたが、お前に一目会えた事嬉しかったと。そして木ノ葉を頼むと、な。』

『はい、必ずお伝えします。』

『わしからも一言。サルよ、もしあの世で会ったなら、一緒に飲もう。それまで、達者でやれ、と。頼むぞ、娘。』

『はい・・・必ず、必ずお伝えします。二代目様も・・・ご達者で。』

初代火影と二代目は互いを見やり、生前でも滅多に見せなかった安らかな笑みを最後に浮かべて、塵となり崩れ落ちる。また、それと同時に二人の魂は影分身の中へと引き摺り込まれ、『死神』の腹へと収まった。

二人の体が崩れ落ち、その塵の中から音隠れの里の額当てをした忍びが姿を現すが、既にその忍び達は死んでいる。穢土転生の術のために生贄とされた忍び二人に目を一度だけ伏せ、ミナト達二人は三代目と大蛇丸のいる方へと駆けて行くのであった。

時を少しだけ巻き戻し、三代目と大蛇丸の嘗て師弟であった二人の戦い。互いに相手を殺すために凡ゆる『術』を駆使し、攻撃していく。そんな中、三代目と大蛇丸が互いの得物で互いの得物を弾き、距離を取ったところで大蛇丸が口を開く。

「そろそろ、死んでくれませんかねえ先生。貴方と戦うのは愉しいのですが、私にも用事というモノがあるんですよ。」

草薙の剣を持った右手をダラリと垂らし、そう言葉を発する大蛇丸だが、その顔にはあの嫌な笑みがあった。それに対し三代目の顔には、疲労の色が色濃く出ていた。

「・・・安心せい。この老いばれ一人未だ殺せぬ間は、その用事というものに行かせはせん。」

「フン・・・年寄りになると頑固でいけませんね。しかし・・・先生のその老いた体では、もうそう長くは戦えないでしょう？ 四代目とうずまきクシナは、初代と二代目が抑えていますし、私もやつと本来の目的へと移れます。」

大蛇丸のその言葉通り、年老いた三代目の体には無視できない疲労が溜まり、チャクラ残量も残り極僅かとなっていた。若い頃には片手で振り回す事が出来ていた如意棒は、今の三代目の細腕には酷く重く感じる。必ずや己の手で引導をツ！と意気込んでいた三代目だったが、状況的にそれは厳しいモノとなっていた。

大蛇丸の体が本来あるべき、あ奴の体であつたならば・・・そのような事を一瞬でも考えてしまう自分の体に苛立ちも覚える。

(ミナト達はどうなったのか・・・先程の爆発から、また何度か激しい音がしておったが・・・いや、あの二人ならば心配はいらん。今は目の前にいるこ奴を如何にして倒すかを考えなくては・・・)

三代目がそう考えている時、ミナト達は丁度最後の攻撃に打って出ているところだった。それを知る由もない三代目は、今の自分に出来る攻撃の術をその長く生きた頭で思考していく。

『さっきからどうした？お前らしくもねえ・・・』

「・・・すまぬ猿魔。じゃが、もう少しだけ頑張ってくれ・・・」

「何を話しているか分かりませんが、もう何も意味はないですよ。・・・そうですねえ・・・先生に御自分の生涯を悔い、運命を呪って逝ってもらうには、やはりこっちの顔の方がいいですかねえ。」

大蛇丸は自分の顔に手をやり、さっきまでの三代目が見慣れた『顔』へと変える。その行為に、苛立つ三代目だが何も出来ない。

（悪意と野望を秘めた瞳・・・そういう素養があつたのには気付いておつた。気付いていて、知らぬふりをしておつた。まだ、戦乱の時代に・・・強く才能に満ち溢れた天才。まさしく、数十年に一人の逸材だったから・・・自分の意志と力を受け継いでくれる存在。そう思ったかった・・・）

三代目の脳裏に過ぎるのは、幼少の頃より自分を慕い、自来也や綱



手という仲間とともに切磋琢磨して強くなっていた大蛇丸の姿。自分が正しい道へと導くことが出来ていたら、四代目となりこの里を他の者達と一緒に守って行ったであろう。だが・・・今、その逸材はこうして三代目と対峙している。

（そして、そのわしの甘さが・・・あの時・・・そして、現在の状況を作った。あの時は、その甘さゆえに奴を殺せなかった・・・じやから！）

「貴様を葬り、嘗ての過ちを今正そうッ！！！！」

如意棒を傍らに立て、片手で印を組む三代目。

「もう何をやっても遅い・・・私の勝ちです。木ノ葉は滅びるのよ！」

「木ノ葉の里はわしの住む家じゃ！火影とは、その家の大黒柱として家を守り、立ち続ける存在！それは木ノ葉の火の意志を受け継ぎ、託す者。簡単にはゆかぬぞ、大蛇丸ッ！！」

草薙の剣を片手に、大蛇丸は一気に三代目との間合いを詰める。剣を横に、縦にと薙ぎ払い、三代目に向けて斬り掛かる。三代目は残り僅かなチャクラを雷遁へと性質変化させて如意棒へと通し、それを手にして大蛇丸の剣を捌くが、体に掛かる負荷は如何ともしがた

い。

「くだらぬ戯れ言だ。貴方は、木ノ葉という組織の歴史の中の一時の頭に過ぎない。残された顔岩とて、やがて風化し朽ちていく。それにもはや貴方の体は、戦える体ではないッ！」

捌ききれない斬撃が、三代目の体に深くない傷を徐々に刻んでいき、三代目の顔が苦渋に歪む。だが、三代目の目に諦めの色はない。

「ふん……木ノ葉の里は、わしにとってただの組織ではない。」

幼少の頃、初代火影や二代目に可愛がられた思い出を始めとして、三代目の脳裏を次々と大事な思い出が過ぎっていく。

初めて担当となり自らの初弟子となった下忍が大蛇丸に自来也、綱手といった後に伝説の三忍と謳われる事になる悪ガキだった事。

二代目から火影を継ぎ、自来也や大蛇丸、綱手の三人が、ミナトやアノコ等といった次の世代の担当となった事。

そして、その他の多くの者達が世代を変え、ミナトがカカシ等の担当となり、わしが再び火影へと戻り、ナルト達今の世代が生まれた事。

そんな、大切な思い出が次々と三代目の脳裏を過ぎっていく。

「この木ノ葉の里には、毎年多くの忍びが生まれ育ち、生き、戦い、里を守るため、そして大切な者を守るため死んでいく。そんな里の者達は、たとえ血の繋がりはなくとも、わしにとって大切な……大切な……家族じゃッ！」

それまで防ぐだけだった三代目が如意棒を大きく、強く、斜めに薙ぎ、大蛇丸を後方に弾き飛ばす。後方に吹き飛ばされる形になりましたが、余裕を持って姿勢を正し、剣に付着した三代目の血をその長い舌で舐め取り、大蛇丸は愉悦の表情を浮かべる。

「ククク……ならばその柱たる貴方を叩き折り、木ノ葉の家を崩してさしあげますよ。」

「フンツたとえ、わしを殺したとしてもその柱は絶対に折れはせぬ！ わしは初代様、二代目様の……木ノ葉の、火の意志を受け継いだ男、三代目火影じゃッ！！ 貴様がこの里をいくら狙おうと、わしの意志を受け継ぐ、新たな火影が柱となりて、木ノ葉の家を守るッ！！！！」

(ミナトがかつてその命を掛けて守ったように……わしもこの命掛けてくれよう……！)

如意棒をその場で回転させて、腰だめに構える三代目。体には草薙の剣の斬撃を何度も受けたための傷と、体・・・特に如意棒を持つ腕の疲労が限界に近く、立っているだけでもつらい状態だった。しかし、その意志で以ってそれら全てを無視し大蛇丸と対峙する。

【木ノ葉の同胞は、俺の体の一部だ。里の者は俺を信じ、俺は皆を信じる。それが・・・火影だ！】

【サルよ・・・里を慕い、貴様を信じる者達を守れ。そして育てるのだ。次の時代を託す事のできる者を・・・明日からは貴様が・・・火影だッ！！】

【先生。僕は木ノ葉の里が好きです。時に泣き、時に笑い、時に喧嘩し、また笑う。そんなこの里を僕は守りたい。初代様や二代目様、そして、先生が守ってきたこの里を。】

頭に残るそれぞれの言葉が三代目の頭に蘇る。両目から涙が溢れ、頬を流れる。如意棒を握る手に力を込め、屋根瓦を蹴って大蛇丸へと間を詰める。

突き、薙ぎ、掬い上げ、その他三代目が繰り出せる全ての棍術が大蛇丸を襲い、大蛇丸も冷静にその全てを防いでいく。そして、片や熱く、片や冷静に切り結んでいると、キンツと片方の得物がその手

から離れてしまう。その得物を離した方は……

「これで終わりですね……先生え。」

「はあ……はあ……はあ……よもや、これまでか……」

最後の力を使い果たした三代目の体に、草薙の剣が真上から降り下ろされる。その降り下ろされる瞬間、三代目はその双眸をギュツと閉じる。死への恐怖などもはやない。今感じる事は……後悔や無念、すまない、といった感情であった。

そして、三代目が自分の死を覚悟した瞬間、キンツと先程如意棒を弾かれた時と似たような音が鳴り、それと時を同じくして、一つ声が三代目の耳に届く。

「悪いのう、大蛇丸。三代目をお前なんぞに殺されるわけにはいかないんで。この勝負、邪魔させてもらっツ！」

三代目が目を開くと、両手でクナイを逆手に持ち、それを交差させて草薙の剣を受け止めている馬鹿弟子の後ろ姿があった。

「自来也……才能のないお前が、この私にそんな口利くなんてねえ……」

「おーおー相変わらず目付きワリィーのうお前は。それにお前なんぞ、もう追い越してるってえの。猿魔、じじいを連れて後ろに下がって休んでろ。ミナトとクシナがそろそろ来るだろうからな。」

まるで、今までの出来事を見ていたかのような言葉。だが、三代目は今はそんな事を気にしている時ではないと判断し、如意棒の変化を解いた猿魔と共に後方へと飛び退いた。

「馬鹿弟子が・・・後は任せたぞ。」

三代目の小さい呟きは、自来也の耳に確かに届いた。自来也の顔に笑みが浮かび、一方大蛇丸の顔には笑みはなかった。図らずも教え子同士、嘗ての同志の戦いへと状況は動いた。

「・・・私を越した？フフ・・・昔からギャグセンスはないと思っ  
ていたけど、さっきのは面白かったわ。でも、どうやってこの結界  
の中に入って来たのかしら？クシナならいざ知らず、才能のないあ  
んたが入ってこれるようなモノじゃないんだけれど・・・それに、  
初代と二代目を倒せるわけじゃないじゃない。あれはもう人間ではない、  
ただの人形なのだから。」

「ギャグかそうじゃないかは、今に分かる。今のわたしにはこんな結  
界、赤子の手を捻るよりも簡単だってえの。って言うより、術を掛

けているお前の方がわしよりも分かるだろうに。初代と二代目、二人の気配が消えかかっている事にのう。」

「・・・随分と粹がるじゃない・・・いいわ。そんなに言うのなら、私直々に殺してあげる。四代目も、クシナも、そして、あのじいもねッ!!」

未だに罅迫り合いとなっている二人。だが、自来也の持つ両手のクナイから嫌な音が鳴り出すと、二人は動いた。大蛇丸は草薙の剣を持つ手に更に力を込め、自来也は腕の力を一気に抜かし、後ろへ跳んで下がる。均衡を保っていた力の一方が力を増加させ、一方が減少させる。それは、大蛇丸の剣が屋根瓦に降り下ろされる形になるには当然の結果であった。

「その剣とやり合うには、只のクナイじゃやはり無理か・・・」

「当たり前よ。」

屋根瓦の間から剣を引き抜き、自来也へとその爬虫類のような目を向ける大蛇丸は、切っ先を自来也へと向けて嗤う。一方で、自来也も笑みを浮かべる。長年に渡る悔恨の全てを、ここで終わらせるために。左手を顔に近づけ、親指に歯を立てる自来也。それは、口寄せをするための動作。大蛇丸は、面白いやってみるといふ態度でそれを止める事はしない。

口寄せの術ッ！

白煙と共に現れるのは、自来也程の大きさの一匹の蝦蟇。自来也がその蝦蟇に目配せをすると、再度白煙を上げてその形を鏝のない刀へと変える。柄の部分が木で出来ているソレは普通の刀と違い、刀身が一回り大きく、また太い。斬るために作られた刀と違い、叩き斬る事を念頭にいったような太刀であった。

「草薙の剣程切れ味は良くねえが、それでもその剣と結び合う事は出来る。」

「蝦蟇の変化した刀なんて、直ぐに折ってあげるわ。」

自来也は切っ先を下に向け、大蛇丸は自来也へと切っ先を向けたまま対峙する。そして、動いたのは同時。自来也は炎を口からだし、大蛇丸は脱皮をしてその炎を躲す。そして、屋根瓦を縫うように伝い、自来也へと牙を立てるべく口を開いて襲いかかる。

「まったく、気持ち悪い攻撃は健在だのう！」

太刀を向かってくる大蛇丸に向けて振り下ろすが、それは草薙の剣によって阻まれる。大蛇丸は、剣を持っていない方の腕から蛇を数匹出し、それを自来也の足元へと放つ。蛇は自来也の両足に巻き付



き、動きを封じようとするが、自来也も然る者。自分の髪を無数の針に変えそれを纏う事で回避する。針に刺さって息絶える蛇を振り払い、手に持つ太刀を下から逆袈裟に斬り上げる。

大蛇丸はそれをバク転で回避すると、着地と同時に剣を横に薙ぐ。自来也の太刀は振り上げられており、その薙ぎを防ぐ手立てはない。と、大蛇丸はそう思ったが、自来也は跳んでその薙ぎを回避する。跳んだ状態から下駄を履いたその足で大蛇丸の顔に蹴りを放ち横に吹き飛ばすと、片手で印を組み黄泉沼を大蛇丸の下に出現させる。相手の動きを封じる術だが、大蛇丸の脱皮によってそれは無駄に終わる。それから、数合剣と太刀が切り結び、自来也と大蛇丸の体に徐々に傷を刻んでいく。正に、互角。そんな激突も双方の強い一撃を堺に、距離を取ることになった。

「やるじゃない・・・」

「っは！まだまだ、こんなもんじゃないってえの！！」

クナイと手裏剣を挟んで投擲し、蝦蟇に変化を解くよう促す。そして、大蛇丸がクナイと手裏剣を剣で弾き終わる頃には、先程の炎よりも密度を増した炎が大蛇丸に迫る。

『蝦蟇油炎弾』 蝦蟇の油と自来也の火遁を合わせた、広範囲を焼く炎である。大蛇丸が脱皮で回避したとしても、広範囲に渡るこの術ならばダメージを少しは与える事が出来る筈。

「ツチイ！」

「貴様はここで終わらせる！！」

大玉螺旋丸ッ！！

掌に螺旋丸を二回り以上大きくした螺旋丸を宿し、大蛇丸に向けてそれをぶち当てる。大蛇丸はそれを回避しようとするが、自来也の口寄せした蝦蟇の舌がいつの間にか自分の脚に絡まっているため、回避することが出来ない。また、この時大蛇丸は気付いていなかった。先程までの三代目との戦闘で、自分が思うよりも体にダメージが蓄積していた事を。更に、初代火影と二代目を操るために大量のチャクラを送り込んでいた弊害がここに来て大蛇丸を襲った。それは、ミナトによって穢土転生の術を解かれたからに他ならない。

そして・・・自来也の大玉螺旋丸を喰らって、大蛇丸は屋根瓦を削りながら内に張られた結界へとぶち当たった。威力が凄まじかったのか、ぐったりとして動く気配がない大蛇丸。今まで結界を維持する事に集中していた音隠れ四人衆は、それを見て声を荒らげる。

「大蛇丸様！！」

「ツチ！結界を解くぞ！次郎坊、お前は太蛇丸様を頼む。俺と鬼童丸でのおっさんを抑える。多由也、お前は幻術で次郎坊を援護しながら退け！」

「了解せよ！」

「分かった。」

「分かってるよ、黙れカス！」

四人が結界を解きそれぞれ動こうとしたが、それを許さない二人がいた。一人は、金髪の男。一人は、赤髪の女。金髪の男は、左近と鬼童丸の前に。赤髪の女は、次郎坊と多由也の前に。それぞれ立ちはだかった。

「そうは行かないよ。」

「あなた達はあの変態の部下みたいだし、捕まえないとね。」

全身がボロボロの状態、それは螺旋丸の直撃を喰らった者特有の惨状。そんな太蛇丸を一度見て、二人は少年達と対峙した。ミナトは幻術を、クシナは結界術で四人を捕まえる。抵抗を試みる四人だったが、如何せん相手は四代目火影並びに、赤い血潮の八バネ口と称

された二人が相手だ。抵抗は無駄に終わる。

「ミナトにクシナか。ナルトから話は聞いていたが・・・見れば見るほど、13年前と同じ姿よ。」

そこに大技ばかり使ったせいか、少しの疲れを見せる自来也が二人の元へと近づいてくる。

「ナルトに中忍試験までは駄目って言われていましたからね・・・お久しぶりです、先生。」

「お久しぶりです、自来也様。でも、ナルトの事を悪く思わないでください。あの子は、私達の事を思って行動してくれたのですから。」

「分かっておる。と、わしら三人だけで話していると、じじいの奴に怒られかねん。お前達はそのガキ共を連れてじじいの所に行つて。わしも後で向かう。」

『はい。』

二人が両脇に四人を抱えて三代目のいる所へと歩いていく中、自来也はその場でグツタリと倒れている嘗ての友に視線を移す。

「大蛇丸よ、せめてもの情けだ。最後に言い残して置くことはあるか？」

「……ククク……わ、私を倒すなんて、お前も成長したわね。でも……油断しちゃダメじゃない！」

屋根瓦を突き破って、草薙の剣を口から出した蛇が自来也に飛び掛かるが、自来也はそれを冷静に掴んで止めると握り潰した。

「それが最後の言葉か……さらば大蛇丸！」

自来也は手に持っていた太刀を大蛇丸の首に向けて振り下ろす。鮮血を撒き散らせながら大蛇丸の頭と体は離れ、頭は自来也の足元に転がり、体は後ろに倒れた。

「大蛇丸よ……わしはお前と……」

天を仰ぐ自来也の目からは、一筋の光るモノが流れ落ちる。だが、それを見る者は誰もいない。大蛇丸……木ノ葉の里に生まれ、乱世を生き抜き、伝説の三忍と謳われた忍びは、この日、この場所ですべてその命を散らせた。

袖口で目を一度拭ってから自来也は三代目にミナト、クシナや猿魔がいる場所へと歩を進める。大蛇丸の亡骸を背に、自来也は一つ自分の中で大きな存在だったものが消えた悲しみを感じながらも、その顔には笑みを浮かべて……。

と、自来也が去ったその少し後、大蛇丸の頭、その両の目から二匹の蛇が這い出でてくると、屋根瓦の間を縫うようにしてその場から消えた。これが、何を意味しているのかを知るのは、また少し先の未来である。

## 師弟、同志、決着の巻だつてばよっ！（後書き）

さて、久しぶりの一ヶ月以内更新でしたが、どうでしたでしょうか？一気に詰め込んだ感じが無きにしても非ずな微妙な展開で、読者様方には『???』と感じられたかと思います。

ただ、大蛇丸との戦闘は今回の話で一旦終了です。まあ、後で手直しなりなんなりしますが、一旦大蛇丸はここで舞台から降りてもらい、次回はナルトと我愛羅の戦闘へと移りたいと思います。

前回のあとがきで他キャラ達の描写について、読者様方に聞きましたが・・・更新速度を少しでも早くし、尚且つ文字数を上げる。そんでもって、描写はこのまま継続というなんとも、難しい答えを出すことにしました。大蛇丸と三代目の戦闘を終わらせたのも、引っぱりすぎてもなんだな。と思ったためですね。

次回はナルトと我愛羅の戦闘になりますが、ところどころで他キャラ達の描写も入れたいと思いますので、次回の更新もお楽しみ。

今回出たクシナの忍術ですが、鈴神様からのいただきモノです。これからも、読者様からいただいたモノはできる限り出していきたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

と、話は変わりますが・・・最近コンビニにてけいおんのくじが出始めました！！映画ということでのモノなんですけど・・・りつちゃんのみニフィギアが激カワなんですよね

もう、頑張つて頑張つて6000円使つてようやくゲットしました！いやあ、いい買い物したと思つてますよww

皆様は、何か最近コレだ！っていう買い物しましたでしょうか？ま  
あ私の最近の買い物はくじという小さいモノなんですけどねwwww  
www

それでは、また次回。

ちなみに、いちごのssは年内に更新出来ないかと思っておりますので、  
ご了承の程よろしくお願い致します。



愛情と友情・・・そして、木ノ葉崩し終結だってばよっ！

何故だ・・・何故あいつはあんなにも強い・・・憎しみの力は殺意の力・・・殺意の力は復讐の力・・・この『力』があれば殺せない奴はいなかった・・・だが、あいつには・・・あいつにはそれだけじゃ足りない・・・

吹き飛ばされながら目を少し開けてみれば、追撃を掛けるべく吹き飛ばされる俺を追ってくるあいつが見える。顔には笑みでもなく、憎悪でもない、俺の知らないモノが浮かんでいる。

一ヶ月前、俺とあいつは出会った。今まで俺の近く、それも1m以上近くに寄る者がいなかったにも関わらず、あいつは何の躊躇いもなく俺の『領域』に踏み込んだ。不快だった。俺に近寄る全てが不快だった。だから、直ぐに殺気を放って追い払おうとした。だが、

あいつは俺の殺気を無視して更に近寄ってきた……。

殺そう。計画まで何もするなとバキが言っていたが、関係なかった。俺を苛つかせる奴は全員殺す。だから、こいつも殺す。砂を奴の周りに展開させて潰そうとした時、あいつの顔に浮かんだのは恐怖や憎悪といった今まで見てきた奴らのどれでもない、愉しんでいる笑みだった。

『殺すつてのは穏やかじゃないな……それに、俺だけ名前言うつてのものなぁ……』

変な奴だ……だが、面白い。気付けば、俺は自分の名を告げていた。そして、それは正しかった。テマリとカンクロウに向けて放った殺気は先程の俺よりも濃いモノ。喜びに震えた。俺を満足させてくれる奴が現れたと。そして……今。俺はあいつ、『うずまきナルト』と戦っている。殺す、殺す、殺す、何度思ってもあいつを殺すには俺の力は足りない。

自分の為だけに戦い、自分だけを愛して生きる。殺すべき他者が存在し続ける限り、俺の存在は消えない。そう、思っていた……。だが、どうだ？今俺はあいつに負けそうになっている。何故だ？あいつに……。他人の為に戦っているようなあいつに……。俺は負けるのか……

『キャハハハハ……。負けるのが怖いか？』

誰だ？

『俺か？俺は・・・お前だよ。』

俺？

『クツカツカ・・・そう、お前だ。俺はお前。お前は俺。俺達は二人で一つ。まあ、そんな事はどうでもいい。』

・・・

『負けるのが怖いんだろう、お前は。負けたら、今までのお前がなくなるような気がして怖いんだろう。』

黙れッ！俺は負けない！あんな奴に・・・他者の為に戦っているよ  
うな奴に、俺は負けるわけにはいかない！！

『キャハハハハッ！！・・・なら、俺を呼びやがれ。俺ならあんな  
奴直ぐに倒してやるよ。俺はお前。お前は俺。呼べ！俺を！』

閉じていた目をカツと開き、体から沸き上がる膨大なチャクラに身を任せる。呼んでやる。勝てるなら、あいつに勝てるなら、俺はなにもいらない！

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！！！！」

（うわぁ・・・我愛羅の奴、とうとう完全体になりやがったか。）

幹に足を付けながら巨大な砂の化け物を見上げる。身に纏っていた雷遁を消して、九尾のチャクラを纏った状態へと戻す。周りを見れば我愛羅の変身に伴い、薙ぎ倒された木々があった。自然を壊しちや駄目だろうに・・・って、俺が言っても説得力ないか。

とと、我愛羅が右手？右脚？まあどつちでもいいか。それを俺に向けると、周囲に砂が集まり浮遊し始める。そして、その手をグツと握り締めた瞬間、周囲に浮遊していた砂が一斉に襲い掛かってきた。おっと、流石に完全体になっただけあるな。砂を吹き飛ばそうとしても、さっきまでとは密度が違う。それなら、こつちだつて！

砂瀑柩・・・砂瀑送葬！！

口寄せの術ッ！！

我愛羅の砂を中から吹き飛ばし、俺はガマブン太を口寄せする。我愛羅のあの姿と戦うなら、やっぱりこいつしかいないっしょ！！白煙の中から低くドスの利いた声が聞こえ、次いで口に啜えたキセルからは腐った沼の臭いがした。

「ん？久々の娑婆の空気じゃーに、なんじゃああこかあ！？知らねえガキが頭の上におるし、どういっつもりじゃ自来也の奴あ  
『！

・・・初めて呼び出したけど、ガマブン太ってうるせえのな。違う奴呼べば良かったかなあ・・・でも、原作でのこいつと一尾の戦いってカツコ良かったし・・・うん、我慢だ、我慢。九尾ももう少  
しだけ我慢してくれ。

『おいコラガキイ阿保面してねえで答えろ！自来也の奴あどこだ！  
？こがあな、めんどくせえとこに呼び出しくさりやがって・・・お  
前えもワシの頭から早く退けえ！そこにお前が乗るんは、百年早い  
けんのう！』』

・・・我慢・・・我慢・・・

『つたく、あのエロオヤジ。久々に呼び出した思ったら、ガキは頭  
の上に乗せる、化け狸相手にさせる、散々だつてえの！ガキイ、聞  
いとんのか！早うワシの頭から降りて自来也呼んでこい！その間く  
らいは、この狸の相手くらいしちやるけんのう！』

・・・我慢するにも限界がある。この蝦蟇野郎・・・主従をきちん  
と分らせてやらねえと駄目みたいだな・・・。

「黙れつての糞ガエル。お前を呼び出したのは俺だよ。自来也のお  
っさんじゃねえ。それよか、お前の頭に乗るのに百年もいらねえつ  
ての。いいから、俺の言うこと聞け。じゃねえとあの化け狸より先  
にぶっ飛ばすぞ？」

ガマブン太の眉間に九尾のチャクラを纏わせた拳を当てて脅す。九  
尾のチャクラはガマブン太の眉間に火傷を負わせていく。

『・・・お前えただのガキじゃねえな・・・』

「そんなのどうでもいいんだよ。言うこと聴くのか、聴かねえのか、どっちだ？」

「……ガハハハハハ！ワシ相手にそこまで啖呵切った奴あ初めてじゃ。良いじやろう、聞いてやる。ワシを使い切って見せろやガキイ！！！！」

「……生意気だがまあ良い。てか、我愛羅の奴俺とこいつが話している間に攻撃すればいいものを……あれか？自分以外の大きい生物見たことなくて吃驚してるとか？……いや、我愛羅の奴に限ってそんな事ねえな。」

背の高い木々を超える巨躯を持つ両者。自来也からミナト、そして今ナルトによって口寄せされた蝦蟇の親分こと、ガマブン太。

砂隠れの里に代々伝わり、四代目風影によって我愛羅の中に封印された一尾の狸。別名守鶴。両者は溢れ出る殺気または闘気を隠さずに、互いを睨みつける。

そして、その両者の頭の上に立つ二人の少年。ナルトと我愛羅。最後の戦いが今始まった。

ガマブン太が一足跳びで守鶴との間合いを詰め、腰に指していたドスを居合で以って繰り出した。それを守鶴は片腕を犠牲にすることで防ぎ、残った片腕でガマブン太の横っ面を殴り付けた。

『ツク何て野郎じゃ。重とーてドスを振り抜くのがやっとなじゃ・・・』

「得物落とすなよ馬鹿ガエル！それでも、組の頭かっつての！！」

『黙れやガキが！ツチ、跳ぶぞ！！』

持っていたドスがあらぬ方へと飛んで行く中、左頬に痣を作りなが



らも姿勢を正し、ガマブン太はナルトへの罵声もそこそこに真横へと跳んだ。

すると、ガマブン太がそこまでいた場所に着弾するモノがあった。見てみれば、守鶴の口が開いている事からあいつが何かを放ったのだとナルトは悟る。

そして、それまで我愛羅の意思で動いていたと思われる守鶴の口から、我愛羅のモノとは違った声が出る。

『キヤハハハハ！今のを躲すかよ！流石は飛ぶ事しか能のねえ臆病な蛙だな！』

軽薄そうな、狂気じみた声。そんな声が守鶴の口から出てくる。成程、あれが我愛羅の中にいる一尾の狸、守鶴か。とナルトは胸中で呟き、次いでガマブン太へと指示を出す。

「アレの上に跳んでくれ。それから、俺とお前の術であいつを攻撃する。」

『ッハ！コラボ忍術やるつってか！良いぞ、ワシに合わせられるなら合わせてみるや！！』

ナルトの指示に従って、ガマブン太は守鶴の真上に来るように跳ぶ。両の頬を膨らませ印を組み、口から吐き出すのは二つの水塊。ナルトはそれに合わせて印を組み、自らも水遁の術を行使する。

水遁・鉄砲玉！！

水遁・激流弾！！

水の水塊二つと、激流の弾が守鶴に向かって飛んでいく。それを守鶴は、顔を真上に上げて迎え撃った。

『シャハハハハ！！そんなモン俺様に喰らうかよ！！』

風遁・練空弾！！

残った片腕を大きく振り上げ、膨大な量の空気を取り込んだ腹部に叩き付けた。大きく開けた口から極限まで圧縮された空気の塊が放たれる。その数は6つ。それは真上から迫る二つの水塊、激流の弾と激突し相殺する。だが空気の塊は二つ程数を残しており、ガマブン太並びにナルトに迫る。果たしてそれは、一匹と一人に当たり、空間と共に爆ぜた。

物凄い爆音とともに着地し、爆煙をその身から出しながらガマブン



った瞬間、先程の爆発よりも巨大な爆発が辺り一帯を吹き飛ばす。木々は燃え、辺りは焦土と化す。その中心で狸と蛙は対峙した。

『……地形が変わってしもうたわい。』

「俺と我愛羅を追っていた音の奴らは今ので死んだな。けど、これ以上は流石に駄目だ。ガマブン太、俺が九尾を口寄せする間、あの狸任せていいか？それ終わったら帰っていいからよ。」

『……九尾……成る程のう。お前が誰かようやつと分かったわい。それにしても、蝦蟇使いの荒い糞ガキじゃ。だけんど、久々に愉快かったわい。また、呼べや四代目の小倅ッ！！そんなときは、契の盃交わしてやるけんのうッ！』

ガマブン太の頭から飛び降り、口寄せの姿勢に入ったナルトの顔に笑みが浮かぶ。「機会があったらな。」と呟きながら。

ガマブン太は自らの得物であるドスを回収して、守鶴へと跳ぶ。抜き身のドスを両手に構え、地面を削りながら凄まじい速度で跳んでいく様は、巨大な砲弾の如くだった。

蝦蟇ドス斬ッ！！

ドスの刀身にガムブン太の顔と守鶴の顔が映り、更に鈍く光を反射させながら守鶴の下っ腹に刃先を突き刺し、そこから斜めに振り上げていく。重い・・・とガムブン太は感じるが、それを一時無視してそのままドスを振り切った。

ドバツと砂が吹き出してくるのを横目に、ガムブン太は口角を上げ次の瞬間白煙とともにその場から消えた。

砂が吹き出している腹部に片腕を当て、ガムブン太がいた場所に憎悪の感情を込めた目を向ける守鶴。そして、天に向かって吠えた。耳を劈く雄叫びを耳にしながら、ナルトは通常の口寄せよりも複雑な印を組み、腕に付いていた傷から血を拭い、それを元に自らの相棒を呼び出す。

「待たせたつてばよ、相棒！」

『遅いわ戯け！』

守鶴の後ろ、そこに赤毛の狐が姿を現す。尾の数は九つ。嘗て、木ノ葉の里を壊滅に追い込んだ、九尾の狐が再び木ノ葉の里にその姿を現した。だが、嘗てその目に宿していた狂気はない。

「さあ・・・第3ラウンドの始まりだつてばよー!!」

木ノ葉の里の中では、様々な所で戦闘が繰り広げられていた。アンコや暗部の者達が火の大名他、他国の大名等を守る為に奮戦し、ガイ達上忍が迎撃へと走り回り、中忍という小隊リーダーとなれる者達は、下忍達を率いて一般人の救助、もしくは三人一殺で無理せず敵を倒していた。

そんな中、中忍試験会場の廊下を一人の面を付けた忍びが歩いていた。その忍びの背にあるのは、ひと振りの太刀。だが、その大きさは普通の刀よりも二周り以上大きく、柄に近い刀身は半円にくり抜かれていた。

「・・・・・・・・」

口を開くことはなく、ただ黙々と廊下を進んでいく。その身に纏う

忍び装束の至る箇所には赤黒い液体を付けていることから、多くの戦闘を終わらせ、尚且つその全てに勝ってきたのだらう事は容易に分かる。

と、そんな忍びの進行方向に一つの影が立ちはだかった。暗がりの中に出来る影のせいで、顔は分からないが忍びの歩みを止めるには十分だった。そして、忍びの歩みを止めたその者が口を開く。

「桃地・・・再不斬さん、ですよ？元忍刀七人衆の。なぜ、そんな貴方が木ノ葉に付くのか・・・教えてくれませんか？」

「・・・・・・・・・・」

「・・・無視、ですか。はあ・・・それじゃ僕の方で話しますので何か反応をお願いします。単刀直入に言います・・・僕達に付きませんか？貴方の力はこんな里で終わるモノじゃない。どうです？僕達に付いたら、他の忍刀六本全てを取ってきてあげてもいい。」

影に隠れた者が反応を窺うが、面を付けた忍びは何の反応も示さない。沈黙がこの場を支配し、それに耐え切れなかった影に隠れた者は再度口を開いた。

「今ので駄目なら、水影の首なんてどうです？貴方を追放した奴の「黙れよカスが。」・・・」

面を付けているせいで若干くぐもった声だが、きちんと影に隠れた者の耳に届いた。自分の言葉を遮る罵声が……。

「俺は誰の指図も受けねえ。俺に命令出来るのは……俺だけだ。退け……退かねえなら、お前を斬る。」

「……木ノ葉は鬼を手に入れたというのは、本当でしたか。……残念です。」

影に隠れた者が何かを投擲してくるが、忍びはそれを手の甲に付けた鉄板で防ぎ、面の内に潜めている目に怒りの炎を宿すが、影に隠れていた者は既にその場から消えていた。

「ツチ……あれが薬師カブトか。胸糞悪い……今度会ったらぶつ殺す。」

止めていた足を再び動かし、歩を進める忍び改め、桃地再不斬。この後、彼に会う敵全てが無残に切り裂かれて行くことなど、今この時誰も知らない。



（大蛇丸様がまさかやられるなんてね・・・でも、大蛇丸様の核となる双蛇は回収出来たし、今は撤退しよう。覚えていてくださいね、木ノ葉の皆さん。次は失敗しません。必ず、この里を落としてみせますから・・・）

両腕に蛇を絡ませたカブトが廊下を笑みを浮かべながら進み、暗闇の中へとその姿を消していく。

その頃、サスケ、シカマル、シノ、リーのいる選手控え室はというと、何とも言えない空気が流れていた。

「おいお前・・・ちゃんと拘束してたんじゃねえのかよ。」

サスケが口を開き、横で後頭部を搔いているめんどくさがり忍者に視線を送る。その顔には、やり切れない怒りのようなものが浮かんでいた。

「ん〜こりゃ、俺ら全員はじめっから騙されてたな。」

「シカマルばかり責めても仕方ない。俺の虫達、そしてお前のその目でも分からなかった・・・そうだろう、うちはサスケ。」

ポケットに両手をつ込んだ状態で、口を開くシノ。カブトに向かわせていた虫を全て回収し、尚且つチャクラを喰らわせている最中のためか、少しばかり顔色が悪い。

「でも、本当にいつから変わっていたのでしょうか・・・サスケ君がスパイの人を倒した時から変わっていたのだとしたら・・・」

腕を組みながら口を開くのは、ロック・リー。両の腕に巻かれてい

た包帯は解かれており、少なくとも攻防があつた事を物語っていた。

四人の前にあるのは、カブトだと思っていた違う顔の忍びの死体。シカマルの影真似の術からのシノの虫によるチャクラ吸収、そしてサスケとリーによる体術の応酬。それらを全て喰らい、最後にリーの影舞踊からの表蓮華をモロに喰らって倒れたのだ。

三人はそれを見届けてから頭からコンクリートにめり込んだカブトに近付いたのだが、そこでサスケがいち早く気付いたのだ。こいつは、あの眼鏡じゃないと。コンクリートから、カブトだと思っていた奴を引き抜き、顔を見てみると耳の裏に荒い縫い目が有ることに三人は気付いた。

そこに、表蓮華を繰り出したせいで体の節々に痛みが走るリーが合流し、初めの冒頭へと戻る。荒い縫い目をシカマルがクナイで解き、顔の皮を剥いでいくと・・・そこにあつたのは全く違う者の顔。そして、四人の目の前にある死体は、先程までの自分たちの攻撃で死んだわけではない事も同時に悟る。

「まあ、つまりはだ。あいつは、死体を操るような術を持つてる最悪な奴だつて事だ。そして、奴はここには既にいない。」

シカマルの言葉で、三人の顔に険しい表情が浮かぶ。自分達が相手をしてきた奴が、そんな危険な奴だと分かったためなのか、はたまた、まだ生きている事に対する恐怖なのか、それは四人自身それぞれ





裂けた腹部をチャクラを多量に含んだ砂を使って修復し、腹がはち切ればかりに空気を吸い込み、腕を大きく振り上げて自身の腹に叩き付けた。蝦蟇油炎弾を吹き飛ばした空気の砲弾。それが、九尾の放った炎塊とぶつかり、衝撃波となって両者を襲う。

だが、守鶴はそれを意に返さず、連続して空気の塊を放ち続ける。威力は互角。ならば、速度と数で勝負。守鶴はガマブン太に放った練空弾よりも速い空気の塊を立て続けに放ち続ける。

着弾する度にその場で爆発が起こり、更地へと変えていく。数十発を放ち終わった所で攻撃の手を止め、九尾の様子を窺う守鶴。もうもうと立ち上る砂塵。それを見れば、誰もがやられたと思うだろう。しかし、その砂塵が風によって運ばれ見えるようになると、九つの尾を盾にして自身とナルトを守る九尾の姿がそこにはあった。

『ッチ！無傷かよ！』

『阿保が・・・こんなもの我にしてみればそよ風と一緒にじゃ。』

九尾の声にはダメージを負った気配はない。そして、九つの尾が展開していき、爛々と燃える瞳をした九尾がその全貌を露にする。頭の上には腕を組んだナルトの姿があり、顔には人を食ったような笑みが浮かんでいた。

『それに・・・先の攻撃は小手調べ。・・・阿保狸よ私の尾の数を忘れたわけではあるまい？』

『ッ！？』

『ナルトよ、今少しだけ私の本気を見せよう。これが、尾獣の中で九つの尾を持つ我、九尾の力よッ！！』

九尾が声を荒らげ、天に向かって吠える。すると、黒い雷雲が空を覆い、ここら一带に影を落とす。

雷遁・滝天千雷葬ッ！！！！  
そつてんせんらいそう

九つの尾が扇状に広がり、その一つ一つが天を衝く。そして、尾先に作られた九つのチャクラ球が雷雲に向けて放たれる。

雷雲に飲み込まれたチャクラ球が雷と融合し、蒼い雷となって落ちてくる。その速さは最早人の目では捉えられない。そして、それは守鶴の周囲一帯に落ち続ける。

広範囲殲滅忍術・・・そんな単語がナルトの脳裏に過ぎる。それほどに圧倒的な光景だった。

雷の一つが守鶴の腕を貫き、脇腹を、尾を、右足を、当たる箇所全てを消滅させる。膨大なチャクラを元に砂を圧縮して形成された守鶴の身体が・・・崩壊していく。同じ尾獣にも関わらず、その強さは雲泥の差。それを見せつけられた戦いだっただ。

『巫山戯るな・・・やっと娑婆に出られたんだッ！認めねエ・・・認めてたまるかッ！！風遁・・・』

身体が崩壊していくさなか、守鶴は再度腹部を膨らませ攻撃に転じようとするが、それは九尾の一本の尾によって阻まれる。先端を鋭くさせたその尾は、守鶴の腹を貫通させ今度こそ止めをさす。そして、その耳に口を寄せ、最後の言葉を呟く。

『今も昔も阿保な奴よ。・・・お前ともう会う事がないことを祈る。』

『ッハ・・・言ってる、馬鹿狐・・・』

最後の足掻きとばかりにそう呟き返し、身体を形成していた砂が飛散し、守鶴は完全に崩壊した。

『フン・・・ナルトよ、我も戻る。その触媒は任せたぞ。』



「おう。サンキューな九尾。」

九尾の身体を白煙が覆い、その場から消える。ナルトの中へと戻ったのだろう。また、九尾が消えるのに伴い、足場を無くしたナルトの体が地面に向けて落下し始める。

落下中に姿勢を正し危なげなく地面へと着地して、ひと足早く地面に着地していた我愛羅と再度対峙した。

「何故だ・・・何故、お前はそこまで他者の為に戦える・・・」

狸寝入りの術後、そしてチャクラを限界まで使った為か、我愛羅の姿は今までに無い程に弱々しい。左眉の上にある『愛』という文字の上を頭からの血が流れ落ち、左手で頭を押さえながら苦痛に耐えていた。

「俺の存在は消えない・・・消えて・・・たまるかッ!!」

癪癪を起こした子どものように、自分は消えないと叫び続ける我愛羅。それをナルトは困った顔を浮かべて、攻撃をするでもなく見ているだけ。声が叫びとなり、それが徐々に大きくなる。そして我愛羅は、憎悪の視線をナルトに向けた。

「・・・お前の気持ちは痛いほど分かる・・・俺もお前と同じだからな。」

「・・・・・・・・・・」

我愛羅の憎悪を宿した目から自身の目を逸らさずに、ナルトは一步步我愛羅の下へと近付いていく。一步近付く度に、ナルトの体に向けて砂の飛礫を放つ我愛羅だが、ナルトは歩を止めることはなかった。痛みには顔を顰める事も、反撃に出る事もなくただ歩を進めるのみ。

「く・・・来るなッ！」

自分に近づいてくるナルトに何かを感じたのか、我愛羅は後退りながら更に砂の飛礫を増やし、ナルトへと放っていく。飛礫の一つがナルトの額当てに当たり、頭を仰げ反らせる。歩を一瞬止める事になったが、ナルトは何事もなかったかのように歩を再開させる。

「誰にも必要とされていない・・・辛いよな・・・悔しいよな・・・  
何で俺がこんな目に合わなくちゃって、何度思ったかしれねえよな。  
・・・・・・・・でもな。」

歩けば直ぐにたどり着けるそんな距離を、ナルトはゆっくりと長い

時間を掛けて足を進める。人見知りの子どもを怖がらせないようにする、そんな光景にも似ていた。腕を伸ばせば直ぐに触れる事が出来る距離になった所で、ナルトは足を止める。そして、顔に照れたような笑みを浮かべて口を開いた。

「そんな俺でも、大切な奴らが出来たんだ。めんどくせえが口癖の奴、お菓子ばかり食ってる奴、無口な奴、五月蠅い奴、オドオドしてるけど本当は芯の強い奴、口煩いけど人一倍心配症の奴、俺とお前と同じ境遇でも笑いを絶やさない奴・・・俺っていう存在を認めてくれた大切な奴らが。」

我愛羅の脳裏に過去に一人だけ自分に笑みを浮かべて接してくれた人の顔が過ぎる。そして、その人が言っていた言葉も・・・。

『自分の身近にいる大切な人に尽くしてあげたいと慈しみ・・・見守る心・・・』

「・・・愛情・・・」

「そんな大層なモンじゃねえけどな。・・・なあ我愛羅。俺と友達になるうってばよ！」

右手を我愛羅へと差し出し、照れくさそうに笑うナルト。我愛羅はと言えば、何を言われたのか分からないと某々と自分の前にあるそ

の手を見続ける。

「……………」

「……………」

ナルトはそれ以上口を開く事はせず、ただ黙って我愛羅の反応を窺っている。何秒・何分経ったのだろう。二人の間の時は止まったかのように、未だ動きはない。だが、その時間は唐突に終わりを迎えた。

「…………俺は、生きていてもいいのか……………」

「良いに決まってる。」

「…………存在してもいいのか……………」

「俺が認めてやる。」

「……………そうか……………」

砂が我愛羅の手の周りを漂い、優しい風がナルトの手を撫でる。そして、二人の手は繋がった。一人は笑い、一人は涙し、堅く繋がった二人の手の周りを砂と風が舞っていた。

『・・・夜叉丸、ごめん・・・傷って・・・痛い？』

『ああ、これですか。まあ、少しだけ・・・でも、ただの掠り傷です。直ぐに治ります。』

『ねえ、夜叉丸・・・』

『・・・何です？』

『痛いって、何なの？　．．．僕．．．一度も傷できた事ないから、  
どんな感じなのかなって．．．』

『うっっん、どう言ったら良いのかなあ．．．苦しいって言うの  
かなあ、辛いって言うのかなあ．．．つまり打たれたり、切られた  
り．．．我慢できない状態で、普通でいられない感覚って言うたら  
いのかな？』

『．．．』

『上手く言えないですが．．．あまり良い状態じゃないって事  
ですね。』

『夜叉丸．．．じゃあ．．．夜叉丸は、僕の事嫌い？』

『．．．人は傷付けたり、傷付けられたりして生きていくものです。  
でも、人は人をそう簡単には、嫌いになれないものですよ。』

『．．．．．．ありがと夜叉丸。痛いって言うのが、何となく分か  
った気がする。』

『そうですか、良かったです。』

『……じゃあ、僕も怪我してるのかな？皆と同じで……』

『!?!?』

『いつも痛いんだ……血は出ないけど……ここんところが凄く痛いんだ……』

『……体の傷は確かに血が流れて、痛そうに見えるかも知れませんが、でも、時間が経てば痛みは消え、薬を使えば更に治りは早い。』

『!?!?』

『しかし厄介なのは『心の傷』です……。治りにくい事この上無い。』

『……』心の傷『?』

『体の傷と心の傷は少し違います。体の傷と違って塗り薬も無ければ、一生治らない事だってあります。』

『……………』

『ただ…一つだけ。『心の傷』を治せるモノがあります。』

『……………？』

『フフ。ただ、これは厄介な薬で、他人からしか貰う事が出来ませ  
ん。』

『……………何？』

『それは……………愛情です。』

夜叉丸の笑顔を見ながら最後にした会話が我愛羅の頭に蘇る。幼少  
の頃、唯一人自分に笑顔を見せてくれた、大切だった人。



『愛情は自分の身近に居る大切な人に尽くして上げたいと慈しみ、見守る心。姉さんは我愛羅様を凄く愛していたんだと思います。』

『砂の守鶴は本来、攻撃の為の生霊です。砂が自動的に我愛羅様を守ろうとするのは母親としての愛情・・・あの砂の中には母親の意志が込められているんだと思います。』

『フフ、どういたしまして。我愛羅様は私の身近にいる大切な人ですからね!』

今まで思い出そうともしなかった夜叉丸の言葉一つ一つが、今の我愛羅にはとても大切なモノに感じる。ナルトと繋いでいる手がとても温かく、我愛羅はそれを手放したくないと思うのだった。

愛情と友情・・・そして、木ノ葉崩し終結だってばよっ！（後書き）

長かった・・・やっと終わりました！中忍試験篇！まあ、実際には終わっていないんですけど、戦闘はこれで終わりです。

次回は、ライブ的なモノをやりたいと思いつつ、しばらくは何も書きたくないかもですww

一日更新や週一更新している方がいますが、私には真似出来ませんね。尊敬します。

さてさて、今回の話はナルトと我愛羅の戦闘がメインでしたが・・・ぶっちゃけどうでしたでしょうか！？

上手く、怪獣大決戦再現出来ていたでしょうか？人同士の戦いと違って、生物同士の戦いって難しいですね。今回の更新でそれがわかりました。ww

桃地をちらつと出し、カブトとサスケ達の戦闘はフラつと逃げ、ネジとカンクロウの戦闘描写は一度もないという・・・まあ、ほとんどやつつけ仕事みたいな感じですが、終わりは終わりです。

そこが見たかったのに・・・という方がいましたら、読者様方一人一人の妄想でどうか補充してください。

正直、サスケ達とカブトの戦闘は書きたかったのですが、文字数と私の時間の関係で断念するしかなかったです。

桃地君は、最近影薄い存在となっていたので、思い出してくれる事を期待して、ちらつと挟んでみました。

ネジとカンクrow戦は・・・ぶつちやけ、書く気なかつたです。気付いたら、テンテンとテマリが戦闘をはじめ、ネジとカンクrow放置なノリになってしまったので、そのまま流れ的に・・・

と、まあ賛否それぞれあるかと思いますが、これにて中忍試験篇は終了とさせていただきます。話の中で云えば、僅か一日の間起こった事を、約半年かけて書き上げる・・・気が遠くなりそうでした

W  
W  
W

作中に出てきた、九尾の雷遁ですが、soliaさんからのいただきものです。soliaさん、ナルトへのいただきものでしたが、九尾の術として使わせてもらいました。術の規模で云えば、九尾の方がナルトよりも広範囲に攻撃出来ると思っただので・・・

ではでは、長々と書いてしまいましたが、次回の更新でまた会いましょう。

一人でも多くの方に読んでもらえるように・・・これからも頑張ります!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0370n/>

---

ナルトの世界へ

2011年12月7日12時44分発行